

行動派七曜録【完結】

小鈴ともえ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

転生したと思ったらパチュリーになっちゃってました。とりあえず病弱にならないように若いころから活発に！長い時間は旅に充てよう。基本ほのぼのまったり生活。折角の東方の世界なんだから死なない程度に楽しみたい。

シリアス少な目故シリアス好きな方はブラウザバック推奨

追記 誤字報告本当にありがとうございます。この場を借りてお礼申し上げます

目次

本編

プロローグの第一話	1
初会話の第二話	5
味方の第三話	10
上陸の第四話	15
超美的第五話	20
都暮らしの第六話	25
密会の第七話	31
回想の第八話	36
永久の第九話	43
魔改造の第十話	49
渾名の第十一話	55
師弟の第十二話	61
成果の第十三話	67
失望の第十四話	74
寵姫の第十五話	80
正体不明の第十六話	87
自害の第十七話	93
無双の第十八話	102
オマケ；月面戦争	112
小悪魔の第十九話	117
紅魔の第二十話	128
日常の第二十一話	138
魔境の第二十二話	149

奇跡的第四十六話	431
約束的第四十五話	422
神樣的第四十四話	413
外界的第四十三話	404
オマケ；幻想鄉緣起	397
花咲的第四十二話	386
記憶的第四十一話	377
狂氣的第四十話	367
永夜的第三十九話	358
恩惠的第三十八話	346
矜持的第三十七話	337
菓子的第三十六話	324
酒宴的第三十五話	314
春頭的第三十四話	299
冥土的第三十三話	287
局地的第三十二話	275
紅霧的第三十一話	263
阿札的第三十話	249
法案的第二十九話	235
幻的第二十八話	221
滿月的第二十七話	209
魔女的第二十六話	197
惡戲的第二十五話	186
作家的第二十四話	173
高僧的第二十三話	161

歸館的第四十七話	441
披露的第四十八話	450
圧倒的第四十九話	460
強制的第五十話	471
激怒的第五十一話	483
姉貴分的第五十二話	493
屈辱的第五十三話	503
不摂生的第五十四話	513
監禁的第五十五話	523
宝探しの第五十六話	535
成長的第五十七話	545
懐古的第五十八話	555
エピソード的第五十九話	564
番外編	
半年越しのリベンジ	568
夏祭りと言えばかき氷と花火	575
神への畏れ	584
運命の見える吸血鬼に見えなかった運命	592
月まで届け、富士の煙	599
強くなる事の弊害	609
パンドラの箱（過去）	614
ハッピー？ ハロウィン	621
相互依存	635
終端	642

本編

プロローグ的第一話

どうもこんにちは、私はパチュリー・ノーレッジと名乗っている者。「名乗っている」と言っても成りすましていくとかそういう類ではない。生まれも育ちも真正銘ノーレッジ家である。ならなぜかという、『私』という存在がここにある限り、私自身は本来のパチュリーではないから。しかしながら本来の原作に出てくるパチュリーがどこかにいる、という訳ではないと思う。

原作なんて私が生まれた時期からして狂ってしまっているから。今は4世紀中頃。うん、何があっただんでしようね。原作開始どころか、レミリアが生まれるまでも1000年以上もあるっていうね。

魔法使いに生まれたからなのかこの家の方針なのかは知らないが15歳頃には独り立ちしなきゃならない。家を出たらなるべく魔法使いだとばれないようにしたいから、ちよつとした変装でもしながら日本にでも行こうと思っている。

魔法という概念が殆んどない場所だから、陰陽師の真似事でもしていれば多分怪しまれることもないでしょう。前世が日本人だったおかげで日本語も問題ない。

そういえば前世が日本人だったせいで小さい頃は大変だったね。「私」という自我が前世で形成されていたおかげで脳の成長が遅かったのはいただけないけれど、脳ができたちよつと後だと思われる時期から自分を認識できていたのは流石に魔法使い故だろうね。

でもまさか生れ落ちるのが日本ではないとは。親が何を言ってるのか全くもって分からなかったのはちよつと悔しかったかな。折角神童として有名になれるかもしれないと赤精神年齢20代子なりに思っていたのに。

まあそもそも人間じゃなかったんだけど。でも魔法使いの脳だから言語学習は前世よりは楽に出来たのはかなりありがたかった。こ

の脳でそれなのはちよつと悲しくなつたけども！

まあそんなこんなでもうすぐ15歳になるから旅の準備を始めているのだけれど、何を持っていったらいいのかがさっぱりわからないから、とりあえず喘息の薬だけでも持っていきましようか。

原作崩壊している世界だからちよつと期待していたけど、残念ながら持病は変えられなかった。だからこそ、その他病弱設定を乗り越えるべく、欧州から歩いたり飛んだりして旅をし、体づくりを行おう、というのが日本に行こうとしている理由のうちの1割、つまりは建前。残りは原作キャラに会いたい、というのが7割、日本の食べものが食べたい、が2割。

ちなみに原作まで1500年もあれば忘れてしまうこと必至なので、生まれた時代に気づいた直後に本を漁って、原作の記憶は残るようになしておいた。知らず鬼にケンカを売るとか馬鹿なことはしたくなかった。流石にこれくらいのハンデはあつてもいいよね。なしとか言われたらキツイよね。

旅に出るまでの残り数か月で、何とか妖怪どもと戦えるだけの魔法を探さないと。魔力量は種族「魔法使い」の中でもかなり上位と呼べる(聞いたときは「まあパチュリーだし当たり前だよねえ」と思った)ところらしいからあとは使い道を探すだけなのよね。

精霊魔法は極めるとしてあとはやっぱり七曜関係か。木火土金水の五行を自在に操れたらかなり強くなれるんじゃないかな？そうと決まれば早速練習ね。

先ずはそれら関係の本を探して理論を理解しないといけないわね。攻撃の方は原作のカードを強化して使えばいいけど、防御の方は無詠唱で何枚か結界を張ればいいかな。そちらを先に仕上げてしまった方がよさそうね。

能力の恩恵を受ければ相手と相性のいい結界が張れるね。普通に入ってこられそうな紫や鬼とは本当に戦いたくない。

そんなこと言っていないでさっさと始めようか。時間が惜しいし、何より原作開始前に死んじゃうのはシャレにならない。そうならないためにも練習と実践あるのみ。実践はちよつと怖いけど。

少女修行中

そんなこんなで明日家を出ることになりました。実践の途中で喘息の発作が出たときは、流石に死を覚悟する余裕はなかったけど死ぬかもしれないと思った。

なんとか空に飛んで逃れられたけど、妖怪なんて大体空を飛べるから相手が飛べなかったのはただの幸運にすぎない。

この世は弱肉強食、強くならなきゃ即刻この世からの退場だからね。特にこの世界はシビアすぎる。でも幸運に頼ってばかりではこの先生生きていけなくなるから旅路でも練習は怠らないようにしないと。

今日でこの家も最後だし、もう帰ってくることも無いでしょう。そもそも個人の研究を盗られないようにすべきだから、魔法使いが固まって生活すること自体本来ならばあり得ないこと。

私も本来ならば何処かに籠って黙々と魔法の研究をすべきなのだけど、どうやら先達の魔法使いによると、魔法でよく使う水銀やら砒素やらのせいで魔法使いは体が弱い者が多いらしい。そんなことになるのは御免蒙る。

聖ほどではないにしろ動き回れる程度には丈夫でいたいものだ。

日本に行くまでには沢山の敵がいるかもしれないが、少しは味方になりうる存在もあるかもしれない。すべては天運に任せよう。

方角はきちんと見ていかないと、この時代には地図もなければろくな道もない。海はどうやって渡ろうか。飛んだら流石に目立つかもしれない。

妖怪なんかより自然の方が逃げることができない分厄介そうね。でも旅をするのに人外というのはかなり大きなハンデとしてはたら

きそうね。種族「魔法使い」だから食料がいらないのもとてもありがたい。

食料だけで数キロ超えたら人間に近い私には日本に行こうという意志さえ生まれなかっただろうからね。この時代人間の移動が少ないのもそれが理由にあるのかもしれない。

睡眠も特に必要ないけど一応出発前夜だから寝ておきましょう。

〈翌朝〉

楽しみて眠れないか懸念していたけど杞憂で良かったわ。

さて、いよいよ出発ね。ここから私の人生が始まるといっても過言ではない程だわ。一先ず東に向かっていけるところまでは歩いていきたいものね。

でも砂漠越えはかなり辛くなりそうだから、水は生み出す分の他にも入れ物に入れておいた方がいいかな？でも水筒とも呼べない入れ物に入れても仕方ないね。砂漠越えの時の私が水を出せる状態にあることをねがいますよね。

喘息の薬たくさん持ったし、両親にも別れは告げたとし、いざ出発！さらば私の実家。

初会話的第二話

そんなこんなで旅が始まったのだけれど、今冷静に考えたら
陰陽師なんてまだ日本にいないよね。

陰陽師が日本に伝わるのは500年代だったかな？あちやく、完全に失念していたよ。それに今の日本は^倭大和王権の古墳時代にあたるはずだから、行くとしたら認識阻害はかなり慎重にかけておかないといけないのか。

面倒だねえ。

それにこの時代って既に建御名方神は洩矢神と戦っていたっけ？鉄の輪を作る技術は流石に製鉄が盛んになる5世紀くらいにならないとなさそうか。この世界は元の世界とは違うから神の力によってもう既にあってもおかしくはないけど。

となると、今の倭国に行ってもあまり目的は達成できそうじゃないね。念には念を入れて7世紀中ごろまでは中国の山の方で仙人のよくな生活をおきましょう。不老でも全く不思議に思われたいし、この髪色にどうこう言われることもないだろうからね。

因みに山の方に行く理由はこの時代の中国は戦争が非常に盛んだから。多分今は三国時代、そのあとすぐに晋に変わったような気がするから下の方にいると巻き込まれる可能性が非常に高い。流石に人間同士の戦いに後れを取るほどではないと思っているけど、避けられるリスクはできる限り避けたい。戦闘狂じゃないんで。それに人間じゃない分悪目立ちしそうで怖い。

それにしても流石は幻想が生きている世界とこの時代だね。妖怪はかなり出る。西洋の方では魔物っていうのかな？よくわからないから妖怪と呼んでいるけど。あ、また出たね。人間に化けているようにだけど、下手だから下級ってところかしらね。

「こんばんは、お嬢さん。どうですか？一緒にですか夜の散歩でも」
こんなに怪しい奴についていく馬鹿なんているのだろうか。

「遠慮するわ。私はこの先を急いでいるから」

「この先は砂漠しかありませんよ。そんなところに行くくらいなら私と散歩をした方がよっぽど安全ではないですかね」

「私がそこに行きたいのよ。それに散歩をしようだなんてなんて微塵も思っていないくせに」

「な、何を言っているのかよくわかりませんね。私がもともと散歩をする気がない、ですって?」

「ええ、まず自分の姿を見てみたらどうかしら?あなた人間に化けるのが下手すぎるでしょう。(ついでに口も下手)」

「ついていった私を人目につかない所で喰うつもりなんでしょう?.....妖怪さん」

「ちっ、ばれてしまったんじゃあしょうがない。今ここで喰ってやるよ」

「あら、それがあなたの本性なのね。紳士的じゃなくなった分とても戦いやすくなったわ。

「あなたは生まれたばかりでわからないんでしょうがケンカを売る相手はしっかり見極めた方がよかったわね」

アグニシャイン

「なんだもツツツ!!」

これで良し、断末魔も無しに焼死したのはかわいそうな気がしなくもないが。下級妖怪は大体相性に合わせて原作のスペルを戦闘用に改良したら対処できそうね。

さて早速砂漠に乗り込もうかな。体調は万全魔力も殆んど減って

ない。砂漠を越えたらいいよ中国に入るからね。検問とかありそうだけど最悪飛び越えればいいよね。

夜の砂漠は非常に寒いらしいからしっかり防寒魔法をかけてつと。いぎ参る。

流星は砂漠だね。妖怪がほとんどいない。来る人間が少ないからっていうのもあるかもしれないけど、そもそも住みにくいんだろうね。砂漠はこの気候を何とかしのげられればかなり安全ね。

「よかったよかった」

「何に安心しているのかは知らんがな、小娘よ、愚かなお前さんには俺様が特別に教えてやろう。ここにはここなりに進化した生物が多くてねえ、なめてここを通っているとひどい目にあうぜ。あんたみたいになあ！」

うつわ、なんか気持ちの悪い緑色のトゲトゲの妖怪が出てきた。まあ普通に考えてサボテンなんでしょうね。ホントただのサボテンが粹がんなよ。

相手はおそらく「木」でしょうからこちらが出すべきは「金」か。こういう時に冷静に分析できるのはかなりありがたい。ってことで、

メタルファティীগ

ギイヤアアアアアア

妖怪の断末魔も聞き飽きた。それにあまり思うところがなくなっている自分が怖い。人は慣れる生き物だというけれど、こんなものに慣れたくはなかったかな。

一日歩いて身体はつかれたけど、今のところ喘息が出る兆しもない。下手に妖怪を呼びそうだから出していなかったけど明かりを確保して休憩しましょうかね。

休憩といえば読書。もちろん私も魔法使いだから本をたくさん読むわけなのだけれど、やっぱり旅に出るにあたってたくさん持ち歩くのは絶対にあり得ない。重すぎるから。でもどうしても読みたかつ

たから次元干渉できないかと色々探し回ってようやく現実的な魔法を見つけた。紫のスキマほど万能ではない。生物つまり今生きているものが生成された謎な空間に入るとは不可能だったり、中の時間が進んでいたりする。でもどうせ本しか保管しないし、紙魚しみとかが入り込めない分保存状態は抜群に良い。本が日光にさらされる心配もない。中の本を取り出すには無生物の棒状のもので引つ張り出す必要がある。(最悪壊死した腕とかでもいい。キョンシーとか霊の類はよくわからないのだけれど)これはかなり面倒だしコツがいる分、他人には盗られにくい。(そもそも他人の前で開けなければ良いのだが紫には開けられるかもしれない。大妖怪怖い)

とまあこんな感じに旅先でも本を読んで知識も深めるのが大事なのだ。私は動ける大図書館を目指すからね。

早く夜が明けないかしらね。襲撃されないように認識障害をかけているけど、これも万能じゃないから本だけに集中できないのは辛いようやく朝になったわね。ちよつと面倒だから飛んで砂漠を越えてしまおうかしら。同じ景色ばかりで楽しめないし。そうと決まれば早速行ってみよう。

この砂漠広すぎやしませんかね？飛んでも今日のうちに通過できるかわからないね。方角は東にあわせてあわせて、とにかく行ってみましょう。

暇、暑い、眩しい、景色もごくまれに見つかるオアシスくらいしか楽しめない。辛いね。行商人なんかは地上を歩いて行かないといけないうえに、食料、水、睡眠は必須だし妖怪におびえて進まなければならぬ。私がそんなことをすれば、ストレスで胃に穴が開きかねないね。行商人つとても偉大だったんだなあと思う。これは香辛料なんかの値段がかなり高いことにも領ける。

なんだか身体がしんどくなってきたし心なしか咳も出始めたような？なんだかんだ言ってこんなに連続して飛行したことなかったの

がここにきて響くか。くそう、「喘息が出る兆しもない」とか言ってたやつ誰だよ。

だめだ、思考が正常じゃない。いったん地上に降りて身体を休めないと。なんだか意識が遠くなりだしたぞ。もうすぐ砂漠を越えられたつてのに……。

せめて落下死は避けないと、やばいなあ。

ああ、もう自由落下しても死にはしない……かな。

???
side

おや、砂漠にだれか倒れているみたいですね。

着ている物や髪の色から彼女がこの辺りに住んでいないのは明白なのですが、いったいどうしてこんなところにいるの？

まあ髪色は私も他人のことを言えないのですがね。なんにせよまづは保護しておきましょうか。人間は私たち妖怪とは違って脆いですからね。

でも何か人間とは異なる気を感じるような。

気のせいですかね、気だけに！……いや、本当に、申し訳ございません。

とにかくこの方が起きられれば何かしらわかるでしょう。

味方的第三話

パチユリー side

私はどうやら誰かに助けられたらしい。

呼吸も落ち着いているし、身体のたるさも殆んどなくなっている。ここまで自然回復させるのはなかなか難しいうえに、小屋のような物の中に寝かされていることを考えると、誰かが見知らぬ私に情けをかけて助けた、と考えるのが妥当だろうね。

見るからにここら一带の住民ではないにも関わらず、私の命を救ってくれるような心優しい存在は果たして人間なのだろうか。

見知らぬもの、よくわからないものに恐れ、近づこうとはしないのが人間の本質。

ならば私を助けた者が人間ならその者は常人では考えられないほどの優しさを持った者か、言い方は悪いがよほどの奇人だろう。

でも私を助けた存在が人外であった場合にはもっと疑問が残る。当たり前だが妖怪は人を喰うもので、私自身人間と大差ない。

故に私には答えを導き出すことはできない。でもまああの状態の私を助けた、ということとは取って食われるという心配はほとんどないと考えていいでしょう。

それにしてもさっきから数部屋向こうで料理をする音がするね。ほとんどの妖怪は料理なんてせずに生のまま獲物を喰うはずなのに、もしかして私も今から料理をするために身綺麗にされたのだろうか。

これはやばい、詰んでるね。とりあえず家主が妖怪だったらこの部屋に来てすぐ土下座敢行だね。それで許される気はしないし、この地の人に意味が通るのかもわからないけれど。

ああ辛いよ

あ、音が止んだね。やっぱりこっちに来たよ。もう部屋の前に来たね。瀕死の私を家に連れ帰るようなもの好きはいつたいどんなひとなんでしょうね

ガララッ

「どうやら目が覚m・・・」

女性か、しかも私をここまで運ぶとなれば妖怪なのは確実ね。ならば敢行！

「どうか私を喰うのは勘弁してください。私にできることは何でもしますので！」

「はい？えーと何か勘違いをしているようですが私はあなたを喰うつもりはありませんよ？」

あれ？そうだったのか。じゃあ顔を上げて相手が妖怪か人間か見てみようか、つてあれ、えらく美鈴さんそっくりだね。まさか美鈴そのひと？
妖怪

いやいや流石にそんな都合よく話が進むかよ。一応名前聞いておこう

「私を助けてくれてありがとう。私はパチュリー・ノーレッジ。呼びにくければ好きなように呼んでちょうだい。

それで、あなたは？」

「申し遅れました私は紅美鈴と申します。

ところで、あなたはどうしてあんなところで倒れていたのですか？」

やはり美鈴だったのか。超運がいいね（強運だけでは生きていけないけれど）。おそらく彼女の能力で私の気を安定させてくれたのでしょうね

「そうねえ、初めからと途中からどっちがいいかしら？」

「差し支えなければ初めからお願いします」

よしよし初めからということは私の種族からあそこに行き倒れていた理由までだね。

私が偶然助けた女性、パチュリーさんというらしい。

名前自体を聞き取れはする、発音はできない。練習しようかな。流石にずっと名前を呼ばないのも失礼だし。

どうやらというかやはり彼女は人間ではなかった。魔法使いという種族らしい。

彼女はこの国に長期間在するつもりで来たようだ。本来は山に登って仙人のようなことをしに来たんだとか。

最近はこの周辺も戦が頻繁に起こるようになってきたため私も山の上での修行に切り替えようと思っていたところだ。

私も彼女について行っても良いだろうか。彼女はまだこの地域にはないような不思議な技（魔法というらしい）を使う。私がそれを習得できる気はしないが、何かしらの発想の手助けにはなるかもしれない。

彼女に聞いてみると案外簡単に了承を得られた。なんでも彼女には持病があるらしく、私の能力がかなりありがたいらしい。

治療したことで能力が概ね割れてしまったのだろうか。あの程度で割り出されたのはかなり驚くが。

さらに彼女は非常に学がありこちらの言葉で話しているのに普通に受け答えをしている。話を聞く限りここに来てまだ気絶して起きただけというから驚きだ。

少しの能力の痕跡から私の能力にあたりをつけてくる実力、素晴らしいき頭脳、彼女は本当に尊敬に値する。だから彼女についていくことができるのはかなり嬉しいし、楽しみでもある。

どうやら彼女によると、2000〜3000年ほど山籠もりをしたらそのあとは倭国で700年ほどゆっくり過ごす予定らしい。ちなみに私も倭国には大変興味があるので、山籠もりの間に彼女にあちらの言語を教えてもらおうと思っている。

どうやら彼女は食事がいららない体質の様子。仙人でさえ霞を食べているといわれているのに、最早仙人より上位の存在なんじゃないだろうか。そんなことを彼女に言ってみると彼女は

「一概にどちらが優れているとは言えないわ。生きている中で何か追い求めたいものがあつて人間を超越する、というのならばどちらも同じようなものじゃないかしらね。まあ本人たちには相応の矜持があるだろうからあまり言うものではないわよ。私？私は元々が魔法使いだから人間を超越したい、という感情は特にもっていないのよね。」

でも魔法使いと違って仙人は己の寿命を延ばすために定期的に来る死神を追い返さなければならぬ。それゆえ今生きている仙人はみな相応に強いんでしょう。対して人間上がりの魔法使いは人間から不老になった時点で満足して腐っていつてしまう者もいるのかもしれないわ。だから魔法使いは一概に強いとは言えないわね。

どちらにも良い点悪い点があるわ。だから互いに優れていてかつ劣っている、そういうものよ」

と言っていた。なんだかはぐらかされた気がしなくもないがよくわからない。そもそも永く生きてきたけど仙人の本来の姿など知らなかった。山の上でひたすら座っていたりするおじいさんかと思っていたのに、彼女によると年若く見える女性の仙人なんかもいるらしい。

やっぱり山の麓だけじゃなく上の方にも行ってみるべきだったか？ まあ今から行くから別にいいか。

パチュリースイデ

なんと美鈴も山の上と一緒についてきてくれることになった。とても心強いね。その時うつかり「美鈴の能力が」と言ってしまったけど何とかなかった。

今になって分かったのだけれど、どうやら言語学習が前世よりちよつと上だと思っていたの複数の言語を並行して覚えようとしていたからのようね。

頭は普通に良かったみたいだね。阿呆だっただけで。まあそのおかげで美鈴との会話も非常にスムーズに進めることができた。あと覚えておくべきはルーマニア語なのだけれどおそらく今勉強しても無駄でしかないだろう。

そんなこんなで山につきました。検問？そんなもの律義に通る必要もないと思うし、ずっと空を飛んでいたからあったかどうかも定かではないのよね。

この山でなら高山トレーニングもできるね。どこのアスリートがこんな環境で200年以上も過ごすのよ。美鈴もこの環境で毎日修行すれば人間の技を使った身一つの戦闘でも大妖怪と戦えるようになるかもしれない。

やばい気がする。このまま行っちゃったら吸血鬼異変で幻想郷が陥落する未来が起こりうる。

これはまずい、およそ1500年後のことを今のうちから考えておかないと。辛いわ。

最悪その時の紅魔館の当主様に物申せるレベルの力はないとね。おそらくレミリアだろうけど。

さっさと修行始めましょうか。仙術も相性は悪くないはずだから少し齧っておこうかな。

上陸的第四話

パチユリー side

なんだかんだでもうここに来て350年も経とうとしているのは驚きだ。仙術の方は大分うまく使えるようになったけど、仙人になつてしまうのが怖いので普段は使わないようにしている。どうしたら仙人になつてしまうのかはわからないからほどほどのところで止めておかないといけない。

あと体の方はかなり丈夫になったと思う。普段は非力な人間程度の力しか持たない魔法使いにとつては異端ではあるだろうが、2000m級の山を歩いて登る分には息切れも起こさない。

因みに美鈴はそんな山を4つか5つは軽く走って登れるらしい。これが種族間ギャップか。私も300年以上頑張ったはずなんだけど。

種族間ギャップといえば、美鈴の「もう少し」は50年ほどだという驚くべき事実があった。彼女が永い時を生きてきたからなのかもしれないけど。

あと個人的なロマンとしてお願いしたら、美鈴に某漫画のあの技を習得してもらうことができた。やっぱり彼女の能力としてできることが分かっていいるなら実際に見てみたかった。

もうすぐ日本は平城京に遷都されて奈良時代が始まる頃だろうか。だとしたらここでゆっくり過ごすのももうおしまいね。

確か藤原不比等が亡くなるのは720年あたりのはず。となればかぐや姫はそれまでに月から流されているはず。かぐや姫の存在を知っているものとしては一度は見ておきたい。

だって美人が多いこの世界においても絶世の美女と呼ばれるほどの美貌、見なけりや損だよな。

7世紀途中までの予定が8世紀初めごろまで伸びるとは思わなかった。妖怪の時間感覚なめていたよ。残念ながら神子たちには会えなかったけど。青娥にも会えなかったのは結構残念。山が遠かつ

たのかしらね。

流石にそろそろ出発しないといけないから美鈴を呼びましようか。彼女も一緒に来るためにあちらの言葉を覚えたかったみたいだし。

美鈴 side

いつもの修行をしているとパチュリーが呼びに来た。彼女の名前は流石に言えるようになったし、さん付けもいらないと言われた。

最近は勉強の一環として日本（倭国ではなく日本になったらしい）の言葉で生活している。あちらの言語は思いのほか難しかった。でもこれからもどんどん言語は変化していくらしい。

パチュリーは例えば「うつくし」が「カワイラシイ」とかに変化するんでしようね、というけれど彼女の中でどういった変換があったのかはよくわからない。言語ってそこまで変わるものだったけな。

とにかく、いよいよあこがれの地に行くことができるようだ。

彼女が言うには私がもう少し修行をしたいといったからこの時期まで延びたらしいけど。たった50年くらいじゃなかったけな。

まあいい、新しい技も習得できたしもとの技術も向上したし、いい気分で新天地に向かうことができる。

海を渡るのには人間に紛れ込んで船を使って行くらしい。目立たないようにして速やかに入国するためだとか。そのあたりの難しい人間事情はパチュリーがやってくれるから私はすることがないのだ。

そんなこんなでいざ出発

パチュリー side

船に乗り込めたのは良かったけれど、揺れがすごい。前世の乗り物がいかに素晴らしかったかがよくわかる。日本のどこに着くのかはわからないけれど、着いたら取り合えず着るものをどうにかしないとイケない。髪色はごまかせるけれど。

2日目にして非常にまずい事態が起こってしまった。

「これは大きな嵐ね。巻き込まれる前に雲の上まで逃げてしまいましょうか」

「人間たちはどうするのです?」

「彼らにはほとんど自力で頑張ってもらうほかないと思うわ、薄情に思っているかもしれないけどこれが自然の摂理なのよ」

「……そうですか、なら仕方ありません。私たちはここを早く抜けましよう。ですがなぜ雲の上なんですか?」

「雲の上はね、地上でどれほどの豪雨が降っていようが常に晴れているのよ(髪には悪いけど)」

「そうだったんですね」

「では行きましようか。この船にも最低限の守護はかけておくわ」

自然に抗える存在など鬼くらいしかないでしょうから気休めにはかならないけど。

あと美鈴にも認識障害はかけておきましようか。

雲の上は好きじゃない。雲の形が様々なぶん暇にはなりにくいけれど、どこを飛んでいるのかわからなくなるし何より暑い。

日焼け止めも持つてくるべきね。そんなものこの時代にないだろうけど。

さてさてかなり長時間東に飛んでもう夜になってしまった。もちろんこの約350年の間に丈夫になったのである時のように無様に気を失うことも無い。

少し降りて下を観察してみましようか。

「美鈴、少し下の様子を見てみるわよ」

「わかりました」

真つ暗で何も見えない

「美鈴は何か見えるかしら?」

「うーん? あつ! およそ8里ほど南に陸らしきものがありますね」

8里か。かなり近いわね。それにしても月もないこの暗闇で見えるのか。妖怪ってかなり凄いわね。

「では、行きましようか。もう雨も降っていないようだし雲の上に行く必要もないわね」

かくして日ノ本に到着ね。あの船は助からなかったかもしれないけど。

先ずは服を買うためのお金が必要か。手取り早く妖怪退治でもしようかな。退治しながら奈良を目指しましょう。

そういえば私の本名で名乗っても聞き取れないと思うし活動にも支障をきたしそうね。やはり偽名か。うーむ、シンプルなものでもいいよね。

パチュリーといえば大図書館かな。うんうん、これを少しいじって名前つぽくしよう。館の部分は樺菜で「かな」と呼ぶことにしよう。

大図書館は大都庶で「おおとしよ」と呼ぶことにしようかな。これで随分日本人っぽくなったでしょうね。

「美鈴、私はこれから日本では基本『大都庶 樺菜』と名乗るから、美鈴も樺菜って呼んでね」

「と、唐突ですね。それにしてもパチュリーの面影が全くないような気がするのですが…。」

まあ慣れないうちは間違えるかもしれませんが慣れてみせますよ」「頑張ってね。」

そうそう、これから陰陽師として妖怪退治を生業にするつもりなのだけれど、あなたは嫌かしら?」

「無差別的に退治するのなら流石に黙っていませんけど、どうせ退治するのは悪さをした妖怪だけなのでしょう？なら反対することはありませんよ」

「あら、あなたにはお見通しってわけね。でも流石にこの服じゃ目立って仕方がないから新しくこの国の着物を買に行きましょう。途中で路銀でも稼いでね」

どうやらここは筑前辺りらしい。まだまだ旅は続きそうだね。

妖怪やらなんやらが結構出るせいでお金もかなり手に入ったし目的の着物も買えた。袴も。ちゃんと戦闘で使ってもいいように洗いやすく、動きやすい。さらに見た目もいい。

パーフェクトだよ。

さてさて今はどうやら遷都した翌年らしい。不比等の死が月の民からの攻撃によるものだと推測すれば、まだかぐや姫は来てないみたいだね。噂にもなっていないし。でもまあ早くに都に行つて信頼を得ておくのも大切だろうから、さつさと都を目指すわけなんだけど。

超美的第五話

天の声 s i d e

長かった旅路もようやく終わりを迎えるようだ。パチユリーも美鈴も数々の下級妖怪どもと戯れるのには少々飽きているのかもしれない。

かなりの数の妖怪を相手の実力問わずに退治してきたおかげで彼女らの評判は都にも届いているとか。

その一方で悪いことをしていない妖怪には手を出さないあり方は妖怪の撲滅が目的の人間たちには受け入れられにくいようでもある。それ故妖怪の中には彼女らに恐れて悪事を最低限にしか働かなくなったもの、安心している者、興味を示すものも勿論いるわけである。

「(美鈴と樺菜、か。美鈴の方は大陸出身かしら、樺菜の方も何やら違和感があるのよね。何が変なのかしら。いえ、確かに両者ともかなりの力を持った陰陽師なのに誰彼構わず妖怪を滅することをしないのは少し変なのだけだ。」

でももしかしたら私の夢に協力してくれる心強い味方になってくれるかもしれないわ。もう少し観察してみましようか」
彼女らにとってこの者の存在が吉なのか凶なのかは今は誰にもわからない。

パチユリー s i d e

なーんか最近妙にみられているのよね。私たちがどこにいても視線が外れない。でも周りを見渡しても誰もいないのよね。

コレはおそらく千里眼かスキマのどちらかだろう。で、夜なんかはたまに視線が外れることがあるから多分スキマ。寝ているのでしようね。

ゆかりんだろうなく。超期待しているんだけど早く出てこないか

なく。

あと2刻ほどで平城京に着いちやうけど。

「ねえ樺菜、なんだか最近ずっと見られてますよね」

まあ美鈴は流石に気づいていたね

「ええそうね。でもそんなに気にすることでもないと思うわよ？」

私たちを害する気はないみたいだしね。

それに……」

「それに？」

「私たちのことをバレバレで観察しているくらいならいつまでも自分が姿を現さないのはあり得ない、と思わないかしら？」

「確かにそうですね。でも私たちをずっと観察して何か面白いことでもあるのでしょうかね」

「さてね、私たちが陰陽師としてはかなり異端な行動をしているからその理由や目的を知って、その妖怪さん自身の目的に巻き込まれているのかもしれないわね」

人間と妖怪の楽園をつくるとかね。

???
side

あら、私が観察していたことはわかっていたのね。普通の人間には感知できないはずなのだけれど。

やはり彼女らは相当な強者。ぜひともこちら側に引き込みたいところだけど、妖怪の言うことなど真面目に聞いてくれるはずがない。

さらに私は彼女らを観察していたのがばれてしまった身。1対1ならば勝てると思う、だが2対1であれば勝つ見込みは非常に薄くなってしまおうでしょう。何せ今まで彼女らの妖怪退治を間近で見てきた私だ。

彼女らの連携は大妖怪をも圧倒する。

そんな彼女らの前に姿を現すのはいくら私でも危険だと思う。で

も樺菜という方がこのままスキマに籠りにくい雰囲気を作り出してしまった。

さらに私の目的のために観察しているのも筒抜けの様子。ここは一か八か外に出てみましょう。

「こんにちは。お初にお目にかかります。私は八雲紫と申します。」

此度は一方的に観察するようなことを致しまして申し訳ございません。」

「別に気にしていないからいいわよ。わたしは大都庶樺菜。

訳もなく陰陽師をしているわ。」

「私は紅美鈴と申します。」

私が陰陽師をやっているのは樺菜について行っているからですが」

近づいて話してみようやく彼女にあった違和感の正体がわかったわね。

とりあえず確認してみましよう。

「貴方たちはまさか妖こちら側の存在怪だったのかしら?」

「あら? どうしてそう思ったのか説明してもらっても?」

これは黒ね

「貴方の話す言語自体に違和感はない、しかしこの国のものとは明らかに異なる顔。これから察するに貴方はおそらく大陸の西の端が出身でしょう。」

しかしながらあそこの人間ではまだこの島にはやってくる事ができない。さらに人間にはありえないような髪色、なれば貴方は妖怪の類でしょう?」

「ご名答。確かに私は大陸の西の端出身で妖怪でもあるわ。」

でもこの髪色や顔は私よりもかなり強い力を持った妖怪でないと看破できないわ。看破されたのは実は初めてだからあなたがかなり強いのはわかる。」

「あ、因みに私の名前はパチュリー・ノーレッジ。これが本名よ、呼びにくければお好きなように。それでそんなに強い妖怪が私に何か用かい？」

唐突にそういうのはやめてよね…。

「そうそう、貴方たちに協力してもらいたいことがあってね。私には夢があるの。妖怪と人間が共存する世界、今のような殺伐とした関係ではなくて理性のある妖怪ならば人間社会に潜んでいても黙認されるような世界を創りたいの。」

今はまだいいわ。でもこれから先私たちのような存在はどんどん消滅していってしまう。殺されるのではなく畏れられないほどに人間の価値観で説明され、忘れ去られることによって。

だからそうなる前に私は妖怪と人間の両方の未来を考えて提案しているの。どうか協力してくれないかしら？」

「彼女の言っていることは本当なのでしようか。こんなにも猛威を振るう妖怪が忘れ去られるなんてにわかには信じがたいのですが」

「ええ、彼女の言っていることは本当よ。妖怪とは人間の畏れによって具現する存在。そして人間たちはこれからあり得ない速度で進歩していくでしょう。」

そうなったときに妖怪が生きていけないのは当然のことなのよ。

妖怪は確かに強い、人間の何倍も。でもいつか人間が進歩した先で、起こった自然現象が完全に彼らの言葉で理屈立てて説明されたときには、今の人間たちが恐れている妖怪や、崇め奉っているような力の強い神でさえ信仰を失い消滅してしまう。それほどに私たちのような存在は人間に依存していることを忘れてはいけないのよ」

彼女はまるで確信しているように話す。私でさえそうだった時のためにこの計画は立てておいたくらいなのに。

「それで協力だったわね、もちろん私は良いわよ。」

でも陰陽師として働きながらになると思うけれど」
それはありがたい。

「それで十分よ。ではこれからよろしくお願いしますわ」

「ええよろしく」

「私もよろしくお願いしますね」

「また伝えたいことがあつたら出てきますわ」

それにしても面白い、まさか妖怪が陰陽師をやっていたとは思わなかったわ。

でもだからこそ無用な殺生をしないのでしょよね。

パチユリーside

いやー、やっぱり紫さん美しかったね。

観察されていると分かった時は実力がおおまかにわかっているせいで、あちらに悪意がなくてもかなり怖かったけど。

強さは正直会うまでなめていた、と認めざるを得ない。あれは術が違ったね。この変装(?)は私を2人倒すくらいの実力がないと見破れないはず。つまり並みの大妖怪でも看破はできない。私も実力にはそこそこ自信あつたのにな。井の中の蛙だったってことなのね。

さてさて旅もここまで、私の予想では717年前後でかぐや姫が流刑にされるからそれまでに都で仕事に従事しましょうか。

ていうか紫も西洋顔に近いと思うんだけどねえ。どうして自分のことを棚に上げていたのかな。よくわからないね。

流石に都まで来ると活気が桁違いだね。私は無いからいいとしても美鈴は妖力が都を覆う結界に反応してしまうだろうね。

どうやら都の外で暮らさないといけないらしい。まあどうせ戸籍がないから中には住めないのだけれど。

人々からの信用を築き上げるのはそこまで難しくはないだろうが、如何せんここは都。妖怪を撲滅したい人間たちの巣窟だ。

これからは気を付けて行動しないといけないね。下手をすれば築き上げた信用が一晩で地に落ちるなんて普通にあることだから。

都暮らし的第六話

美鈴 side

どうやらまずパチュリーは住む場所を確保しようとしているらしい。小屋を建てる段階になるまで私はすることがない。

ところで、当たり前の話だが私は食事もするし睡眠もとる。

かなり高位の妖怪にもなれば食事も嗜好品になるらしいが、私はどちらなのだろうか。私自身自分が高位の妖怪だと思ったことはないが、最近1回に食べる量が減ってきているような気がしなくもない。

先ほどの妖怪、八雲紫。あれは完全に高位の妖怪だ。あれほどの密度の妖気は生まれてこの方見たことがないかもしれない。数千年は生きてきたが、殺気がないのにあれほど相手を威圧できる存在を目の当たりにしたのは片手でも数えられるほどだ。

対峙しただけで逃げ出したくなるのに、そんな存在からお願いをされて断る勇気のある者は如何程だろうか。

パチュリーは気の乱れがなかったことを考えると純粋に協力しようだ。恐るべき胆力だと思う。

どうやら小屋を建てる場所が決まったようだ。早速作業に取り掛かろうか。

パチュリー side

小屋も建てられたし一先ず都にいつて何か仕事がないか見てこようかな。

「美鈴ー、ちよつと都に仕事がないか見てくるから留守よろしく」

「わかりました、くれぐれも気を付けてくださいね」

そんなこんなで初めての都。やっぱり他の国とはかなり物の集まり方が違うね。物が豊富だわ。何か美鈴にお土産でも買って行ってあげよう。

お金はほとんど使ってこなかったから結構残っているしね。

うん、この髪留めなんかいいんじゃないかな。赤い髪にも映えそうだし。

「むっ、もしやあなたはここのごとく様々な国で名を上げておられる大陰陽師の大都庶様ではありませぬか？」

大陰陽師ってなんだ。私は普通の陰陽師なのだけれど。勝手に噂が広まってくれるのはありがたいけど、変に凄そうな呼び名つけられても期待が大きくなるだけだよ

辛い世の中だよ。

「はあ、私はただの陰陽師の大都庶ですが何か御用がおありで？」

「実は私は隣の国より村の代表としてやってきた農民なのですが、村で私共には手に負えない事態が起こったのです。

都に行けば何とか出来る者がいるかもしれないと思ってきてみたのですが、誰にも良い返事は聞けなかったのです。しかし貴方様は大陸の不思議な『仙術』なるものが使えるとお聞きしております。どうか私ら農民をこの作物の危機から救ってはくださらぬか」

どうやら都に来ての初仕事は都ではなく妖怪退治でもないようです。

「いいですよ。では私には連れもいますので明日卯の刻辺りに門の近くで待ち合わせをいたしましょう」

「ただいま」

「お帰りなさい。仕事ありました？」

「明日卯の刻に門の前よ。ちなみに都での仕事ではないわ」

お土産も買えなかったしね

村の方は乱れていた地脈を安定させればすぐに解決した。

お礼にその土地のお酒をもらった。お酒なんて飲むのは何年振りかもわからない。

因みに日本酒は記憶にある限り初。

家に帰って美鈴と飲んでみたけどかなり美味しい。たまにはこういう依頼も悪くないと思う。

あの依頼以降、仙術も体術も見ただこともない呪術もできる陰陽師とか何とか言われてかなり最近は忙しくなったような気がする。

見たこともない呪術と言われているのはこの国にはないただの魔法だし、体術の方は美鈴がしてくれているのだけけど。

ここ最近3か月くらいの間で急に大層な美人の噂が立ったね。これは確実に輝夜だろう。

ちよつと見に行ってみましょうか。

屋敷の場所は知らなかったから町人たちがひそひそ話している情報から割り出した。

流星は姫の住む屋敷だね。普通に入るのではだめそう。

仕方ないけど夜にまたお邪魔しましょう。

「夏は夜 月のころは更なり、つてね」

「確かにいいわよねって貴方はどちら様？この屋敷はそんなに簡単に入れないように門番がいたはずなんだけど」

敢えて「月」と言ってみたのに反応はしないか。

「私は大都庶樺菜と名乗っている者よ。門なんて飛び越えればないと同じよね」

滅茶苦茶簡単に輝夜に見つかった。そりゃあ縁側にいたらすぐ見つかるか。

「というか美しすぎないかい？この美しさは筆舌に尽くしがたい。これは貴族たちが挙って嫁にとりたがるのも頷けるね。」

「へえ、貴方がそうなのね。私はなよ竹のかぐや姫。貴方のことは貴族たちからうわさで聞いているわよ。なんでも、見たことも無い術を使うとかなんとか。」

「本当なの？」

「ただの魔法よ。特筆すべきものでもないんじゃないかしら」

「となると貴方は魔法使い？人間じゃないじゃない。」

「いったいここに何をしに来たのかしら？返答次第では大声で叫んでやるわよ」

「あら、あなたなら私を消すことくらいできるのではなくて？」

「なっ」

「ちよつとふざけすぎたか。」

「あと私がここに来たのは単なる興味。絶世の美女と呼ばれる貴方を1目見てみたいと思うのは普通じゃないかしらね」

「貴方は私に害を与える存在ではない、と言いたいのかしら？」

「めっちゃ疑われてるね。誤解は解いておかないとね。」

「その通り。ところであなたはいったい何者なのかしら？」

「ごく短い間での成長、この国にはないはずの魔法の知識。あなたはこの国の人間ではない、でもあなたの顔は大和撫子も真つ青なほどの大和の美。」

「あなたの故郷はどこなのかしら？」

「人間が3か月で成長するなどあり得ることではない。そのあとは自白してもらってこちらからの爆弾発言を防止する。これで完璧ね。さて輝夜はどう出る？」

「……そうね、私の故郷は地上ではない。でもその考えが出たところで普通聞いてくるかしらね。普通は真つ先にその可能性を捨てるも

の。

月に人が住んでいるなんて考える人は常人はしないのよ」

「太古の昔に地上から穢れなき月に人が移り住んだ、というのを私は聞いたことがあった。そこからの推測よ。」

「それであなたは月では竹から生まれたのではないでしょう？本名を教えてくださいかしら」

「反則級の伝聞だけどね。」

「教えてもいいけど貴方も教えてね。私の本名は蓬莱山輝夜。気軽に輝夜って呼んで頂戴。」

「貴方は地上で唯一秘密を共有できる者だからね」

「偽名なのは流石にばれてるね。まあ魔法使いって言っちゃったからね。」

「私はパチュリー・ノーレッジよ。あなたも気軽にパチュリーって呼んでくれるとうれしいわね」

「丸く収まってよかったわ。輝夜は実際かなり強いし、永琳が敵とか想像したくもない。」

「そういうえばいつか月に帰るのかしら？」

「そうなるでしょうね。でも帰っても良いことなんてないわ。どうせ私の体質をいいことにモルモットにされることまちがいなしだわ。」

「あゝ帰りたくない」 「あなたの体質？」

「ええ、私は私の能力を使って家庭教師役だった人に不老不死になれる蓬莱の薬を作らせてそれを飲んだのよ。」

「それが穢れの嫌いな月の連中には大罪だったってわけ。まあ私自身地上に興味があったから、あいつらにとっては最悪な刑罰でも私にとってはそうではないのよね」

「その薬作った人って凄いのね。そんなに凄い人に勉強を教われるなんてあなたはいい家に生まれたのね」

「まあね、でも不自由がなかったせいであつたよ」
セレブって大変なんだね。

さて、今日はそろそろ美鈴も心配しているかもしれないから帰ろうかな。

「じゃあ私は今日のところは帰ろうと思うわ。またね」

「ええ、また明日の夜にでもいらっしやい。この屋敷で私だけは貴方を歓迎するわ」

ありがたいお言葉だね

密会的第七話

輝夜 side

不思議な娘だった

今までいくらかの地上の民と話してきたけれど、あの娘は何か違った。

初めから私のことを疑ってかかってくる者などいなかった。皆目的は私の容姿のみで、私の事など知らうともしない者ばかりだったのに。

確かに3か月で人間は成長し得ないし、地上から月に行った時に存在した神も最高神ばかりではあるが現存する。『聞いたことがある』程度なのなら恐らくは、伝えられているうちの末端の方に彼女はいるのでしよう。

ああ面白い。億を超えるほど長く生きてきたけど、やはり地上は素晴らしいところだと思う。

確かに穢れは多い。その結晶である妖怪も。でもそんなものが気にならないほどに月とは違った非日常が日常茶飯事になっている。なんだか矛盾しているようだけど。

月の連中の考えることなんてまるわかりだ。私だけを地上送りにして薬を作った本人である永琳は月の頭脳だからとか言ってお咎めなしだなんて虫が良すぎる。月に帰ったら私は閉じ込められて、死なないのをいいことに散々な実験に付き合わされるのでしよう。帰りたくはないが、月の科学力を前に地上側にできることはない。残念だけど。

さて今日も今日とて貴族の何の面白みもない話を延々と聞き続けなければならぬ。早く夜になってくれないかしら。

「へえ、だから貴方は仙術が使えるのね」

「ええ、これがあるおかげで他の陰陽師たちと差別化できているのよ。」

それにそもそも私たちは人間じゃないから妖怪相手に不利になりにくいっていうのもあるのだけれど」

「まあそうよね。」

ところで貴方、月からの迎えの連中と戦ってみたくはないかしら。私は月に帰りたくない。でも地上の人間たちでは到底彼らに太刀打ちできないのよ。もちろん私も抵抗はするでしょうけど、貴方のような人外の存在も逃げるのには必要になってくるの」

簡単に受けてくれるとは思わない。月人が太古の昔から地上に大都市を作るほどの技術をもっていることを多少なりとも知っている彼女なら尚更：

「いいわよ。「へっ?」だからわたしは別に構わないわよ。圧倒的な武力を誇る月側は恐らくそんなに地上を警戒してこないわ。」

それにあなたは姫である身、故に月の使者にはあなたの世話役が必ずついてくるでしょう。だとすればその人をうまくこちら側に引き込めればかなり有利になれるわ。」

話を聞く限りあなたの世話役は蓬莱の薬を完成させてしまうほどの頭脳を持つのでしょうか?」

「そうね。彼女なら必ず私の味方になってくれるわ。」

この提案を貴方が受けてくれたのなら話は早いわ。貴方、私の護衛になってくれないかしら。報酬は勿論出すわ。どう?」

パチユリー side

輝夜の護衛になるかどうかと聞かれたら答えなど決まっていようもの。

「勿論、受けさせてもらうわ。でも屋敷の方にはあなたから話を通しておいてね」

「ええ、明日の午の刻辺りにお連れさんといらっしゃいな。その時ま

では話を通しておくわ」

うーん…美鈴は紫に境界いじってもらうまではお留守番なのよね。

「もう1人は純粹な妖怪だからそもそも都に入れないのよ、残念だけど。」

だからしばらくは私1人かしらね」

「そうなの…残念ね。まあこの話はこれくらいにして今日は私の味方になってくれる世話役の話でもしましょうか」

おっ永琳さんですねわかります。

「彼女の名前は八意???っていうんだけど……」

「え…何て

？」

冗談ではなく地上人には発音するどころか聞き取れもしないらしい。真似すれば言えるようになるかもしれないと思っていたがまさかこれほどまでとは。

最早『難しい』ですら生ぬるい。この世界に来てから新発見ばかりね。

「やっぱり地上人には聞き取れないのね。まあ彼女を呼ぶときには『永琳』と呼べばいいわ。実際私もそう呼んでいるし」

揶揄われただけだったか。彼女の方が1枚上手ね。まあ生きてきた年月は桁違いだし仕方ないね。

・
・
・

「それで、永琳の『あらゆる薬を作る程度の能力』と私の『永遠と須臾を操る程度の能力』で蓬萊の薬を完成させたってわけよ。永琳は作り方と材料さえあればどんな薬も作ることができるのよ。

それに戦闘向けの能力を持っていないにも関わらず月でもかなりの実力者なのよ」

永琳さんチートすぎやしないかね。ついでだから私の能力も教えておいてしましましょう。

「凄いのね…ちよつと引くくらいに。そうそう、私の能力は一応『火＋水＋木＋金＋土＋日＋月＋星』を操る程度の能力』よ」

「変わった能力名ね。どういった意味合いなのかしら？」

「五行思想はご存じでしょうか？それに加えて能動と攻撃の”日”、受動と防御の”月”を様々に操ることができるのよ、一応。

まあ大本は精霊魔法や属性魔法を使う程度の能力なのだけれど」

さらに他属性でも同時に扱えるのはかなり強いと思う。でもこの世界はチートキャラが多すぎるからねえ。

「今日は楽しめたわ。ではまた明日来るわ」
本当に楽しかったわ。

天の声 s i d e

どうやらパチュリーは輝夜と親しくなるという目的を達成し、さらに護衛にもなれたようだ。

輝夜の迎えが月からやってくるまで残りおよそ3年。昼間に山のように来ていた貴公子たちも残りは5人になってしまった。

そこで輝夜は残った5人にそれぞれ難題を課すようだ。

それぞれが探し出して持ってきたものを輝夜自身が確認し本物ならば結婚するという。果たして本物を持ってきて結婚できる男はこの中にいるのだろうか。

そんな輝夜とは対照的に彼女を我が子のように育てた翁と媪は心配もしていた。“もしかするとかぐやが手癖の悪い貴族にさらわれてしまうかもしれない”と。

しかしそんな心配も杞憂だったようで、輝夜が護衛を雇うと話した時には内心大喜びだった。それも護衛に着くのは巷でも人気のある便r：陰陽師の大都庶樺菜だということだ。

そんなことがあつてからもう3年近く、今は5月になったばかりである。今日もパチュリーは輝夜の屋敷に向かう。

パチュリーside

もうすぐ月の迎えが来る頃なのだろう。物語中では確か8月の満月の日。あと3月ほどしかない。

あれからかなりいろいろなことがあつた。そう、あれは確か輝夜の護衛が決まった2月後の事だったわね。

「あつ、ねえ樺菜…」

「ああつ、もう。今昔のことを思い出していたのに」

たかが3年前のことだけど。

「欲しいものがあつたら帰りにでも買えばいいんじゃないの?」

「むー、売り切れていたら樺菜のせいだからね」

「はいはい。もういい歳になるんでしょうに」

回想的第八話

パチユリーside

仕切り直して、と。

そう、確かあれは輝夜の護衛が決まった2月後の事だったわね。

〈回想〉

「姫の護衛は順調なんですか？」

「まあね。護衛とはいっても都に妖怪は入れないから話し相手になったり、話し相手になったりしてしているだけなのだけけれど。」

さて、隠れていないで出てきたらどうかしら……紫？」

「あらわかっていたのね。というか貴方話し相手になるだけでそんなに報酬を貰っているの？」「まあね」ってそんなことはどうでもよくてね、今日は私の理想郷を創る場所が大まかに決定したから伝えに来たの。だからずっと隠れているつもりなんてなかったわよ」

隠れていたという自覚はあったのね。

「で、ここから近いのかしら？」 「そうねえ、ここ

からはかなり……」

「かなり？」 近そうね

「遠いわ。ここよりはるか東の方よ」

そっちかい。となるとどのあたりなのだろうか。まあ紫も詳しくはわかっていなさそうだけど。

さて、ごく自然に紫の能力を聞き出して美鈴も都に入ることができるようにならないといけないね。

「そ、そうなのね。ところであなたっていつも不思議な空間から出てくるけどそれはあなたの能力か何かなのかしら？」

「ええそうよ。私の能力は『境界を操る程度の能力』。この能力の前に

はどんな境目があるかと無意味よ。物理的にも概念的にも、ね」

「おお、凄まじい能力ですね。……あれ？それを使えば私もパチクリーの手伝いを随分としやすくなるのではないですか？」

美鈴が自分で気づいてくれた分私に変に疑われることはなさそうですね。でかしたわ美鈴！

「例えば？」 「そうですね、人間と妖怪の境界を弄れば私は都に入れるのでは？」

「確かにその通りよ。でもね、存在そのものの境界を弄るのは非常に危ないのよ。上手くいっても戻れなくなるか、最悪存在そのものが消滅してしまうかもしれない。

霊力と妖力を弄るだけなら恐らく都の結界程度ならごまかせるでしょうけれど。」

紫にとってはこの結界は大したものではないのか。恐ろしいわあ。この世界楽しいけど辛いわあ。

「ならそれで行きましょう！」 「わかったわ……はい、もういいわよ」

「あまり変わった気はしませんね」

「それはそうよ。あくまで結界をだますために弄っただけなんですから。」

「ところで貴方たちはいつまで都にいるかしら？」

「そうね、あと数年つてところよ。それ以上いると人間ではないとばれてしまいかねないから」

「そう、分かったわ。また用事があつたら来るわね」 「ええ、またね」

〜回想終了〜

ということがあって美鈴も都での仕事をこなせるようになったのよね。

あとは今買い物ねだつてきたこの子の事か。美鈴ではないよ。あれは確か2年前の頃

〜再び回想〜

「暇だわ〜。そうだわ！買い物に行きましょうよ、パチュリー」

「仕事中は樺菜呼んでいつも言っているでしょう？それで買い物だけ、私はいいわよ。私はね」

「ぐっ、いいわ！お爺さまに許可をもらつてくるわよ」

・
・
・

「行ってもいいって！いつも堅苦しいお勉強ばかりしているから、たまには息抜きにでも、だつて」

「では行きましょうか。あなたとはばれないように魔法でもかけておいてあげましょうか？」

「ええ、そうね。そうした方がいいと思うわ」

「うわー、やつぱり外は最高ね！見たことも無い物だらけだわ」

「ちよつと、そういう発言していると疑われるわよ。いくら外が珍しいといつても……あら？あれは迷子かしらね」

「そうみたいね。………貴方こんなとろで何をしているの？」

「ふえ？ああ、お父様がどこかへ行ってしまったの。だから探しているんだけど……」

「貴方名前は？」

「私の名前は藤原妹紅」

まさかの妹紅だった。髪黒いとわからないものだね。

「藤原？もしかして藤原不比等の孫か何かなのかしら？」孫て……まあわからなくはないけれど。

「娘よ……あつ……言っちゃいけないんだったしつ？」

「どう

「ほら、私こんな姿をしているでしょう？普通の人とは違うから皆私を忌み子扱いするの。一族の間ではないように扱われることもあるくらい。

だからお父様の顔に泥を塗らないように娘だとは言わないようにしてるの」

「なんてかわいいそうな子ツ……。貴方さえよければ今から家に来ないかしら？」

あつれえ？輝夜のキャラがおかしいぞ？なんでこんなに母性全開になっているのだろうか。

これなら『妹紅が死なないように』とか言って薬飲ませそうな勢いだ。

それは何か嫌ね。

「あなたはいつたい……」
「あなたも呼ばれているけど」

「私は輝夜、蓬萊山輝夜よ。かぐや

「かぐや姫……？だからお父様の事も知っていたの？」
「かぐや姫……？」

「ええ

「あなたのせいかな最近お父様の元気がないわ。あなたと結婚できなかった辺りから」

「あら、貴方は父君の浮気を望んでいたのかしら?」

「違う。私はただお父様の幸せを望んでいたのよ。私を取り巻く家庭事情を何とも思わず私を気に掛けてくれたのはお父様だけだったから。」

でも最近はそのなお父様でさえ私に構ってくれなくなって私を放って何処かに行ってしまうまでになった。これはあなたのせいではないの?」

「そうね、そうなった原因の一つに私がいる可能性はあるわ。「ならっ…」まあ待ちなさいって。彼が貴方に構わなくなったのではなく、構えなくなったのではないかと私は思うのだけれど」

「つまりどういう事?」

「彼は病気でもう長くない、という事よ。人間とは死を恐れるもの。自分の死の際を貴方に見せて言いようのない死への恐怖を貴方に植え付けられないようにしているのかもしれないわね」

「あなたは死が怖くないの?」 「私は永遠に死ぬことは無いもの。そんな薬を飲んだの」

「それをお父様にも飲ませれば……!」 「駄目よ」 …… どうしてさっ! 死にたい人間なんてこの世にはいないんだっ! ……!」

「1つ、教えてあげるわ。貴方は生き物が存在しない世界を考えたことがあるかしら?」

永遠に生きる者にはそういう世界になって尚生き続けなければならない未来が確約されているの。

この残酷な蓬莱人の結末を知って尚父君にそんな薬を飲ませたい、と思うかしら」

「…思わない。でも、それでも私は死が怖い」

く回想終了く

結局あの後妹紅と一緒に都を回って、妹紅も輝夜の屋敷に来るようになったんだよね。

美鈴は妹紅のいい遊び相手になってくれるし。不比等さんには何故か申し訳ない顔されたけど。

で、今日も妹紅を屋敷に迎えに行ったあとで輝夜の屋敷に向かっているわけ。思っだしている間にもうすぐ着くだけけれど。

因みに輝夜が月からの迎えの情報を世に出すのは来る1月前らしい。つまりはあと2月。

今日も輝夜は帝からの手紙に律義に返事を書いているようね。ここ数年だと思うのだけれど、よく帝も諦めないよね。

輝夜は身分の違いからいやいや書いているみたいだけれど。

私は妹紅と遊んでいようかな、後で手紙を書き終わった輝夜も来るだろうけれど。

「あつ！あれ朝言ってたやつだよ！」

うん？あれは原作の妹紅が付けているリボンにそっくりだね。これは買ってあげるしかないね。

「約束だったし買ってあげるわ」

「ありがとう、樺菜！それにしても今日も楽しかったね」

「それは良かったわ。でも妹紅、そろそろあなたの御父上を私の術で延命するのにも限界が訪れそうだから、今のうちに彼に無理がないようにお話でもしてあげてね」

もってあと1月。何故9月までもたなかったのか。それは恐らくこの世界だからでしょうね。でもそのおかげで彼は輝夜が月に帰ることを知らずに済む。

救いのない延命よりもせめて救いある死を

知らぬが仏とはよく言ったものね。知ってしまったえば瞬時にこの世界は残酷なものに変わってしまうのだから

永久的第九話

妹紅 side

樺菜によるとお父様が生きていられるのはせいぜいあと1月らしい。

2年前のあの日に輝夜から指摘を受けてお父様に聞いてみたら、どうやら彼女の言う通りだったらしい。都の名医にかかっても1年もつかというほどの病だったけど、樺菜は大陸由来の不思議な術でここまで延命してくれた。お父様も彼女には感謝しているみたいだ。

あれから私は輝夜の屋敷に毎日のように遊びに行き彼女らと遊んで日が暮れてきたところに自分の屋敷に帰ってお父様にその日の出来事を語る、という生活をしている。

心なしか最近死期が近づいているというのに、以前より明るくなられた気がする。

今日は樺菜に新しい髪留めを買ってもらった。朝から夕方まで買手がつかなかったのが不思議なくらいに素敵な髪留めだ。本当はお父様にも何か贈り物をしたんだけど、お父様は特別に欲しいものがないということだし、輝夜も樺菜も「特別に物は送る必要はない」という。お父様がそれでいいのなら別にいいんだけど。

あれから半月近くたって、最近お父様の調子が急に悪くなったと聞きつけて藤原の一族が大勢屋敷に来るようになった。私もお父様の傍にいたいけど、そうなってしまえば必然的に外に出かけなければならなくなる。

だから最近前よりも長い時間輝夜の屋敷にいるようになった。屋敷のお爺様もお婆様も私にはよくしてくれるし、一番一緒に遊んでくれる美鈴は本当にいい人だと思う。変わった名前なのは大陸出身だからだそうで、実は樺菜にも美鈴よりもっと変わっていて言いにく

い実名があるらしい。いつか聞いてみたいものだけど樺菜たちはもうすぐ都を出て行ってしまおうらしい。

屋敷に帰るとなんだかいつもと違った雰囲気か漂っていた。周りで話している人たちの声がよく聞こえる

「嘘だ……。そんなことが……。……」お父様が死んでしまったなんて、信じたくない。

いや、それより娘である私のところに全く知らせが来なかったことにかかなりの衝撃を受ける。私はお父様に別れを告げる資格すらなかったのか。それほどまでに私の存在は無い物として扱われていたのか。

失望した、この親族たちに。絶望した、こんな容姿に生まれてしまった自分に。私もこの都から去ろう。彼女らが出て行ってしまいう前に。

パチユリー side

いよいよ明日、月の民が輝夜を迎えに来る。幾多の戦闘を陰陽師として経験してきたが、これ程までに緊張するのは初めてだね。人間も帝に大勢集められてこの屋敷を警護しているが、輝夜に言わせてみれば全くの無意味のよう。私もそう思う。さて、ここで気にかかるのが妹紅の事なのよね。不比等が亡くなったという報せがあった翌日から今日までばったり来なくなってしまった。都中を探してみたけど手掛かりすら見つからない。

彼女のことは非常に心配だけど、私たちもそこまで悠長なことは言っていられない。ここで息絶える可能性もかなりあるほどの強敵になるはずだから。

「いよいよね、パチユリー。私楽しみだわ」

「貴方は死なないからいいけど私たちはへたすれば死ぬのよ？そんな

に暢気なこと言っていられないわ」

「貴方の実力ならまず死ぬことはないわ。防御に徹すれば、けどね」
「はあ、おっと来たわね。えらく派手な乗り物で来たのね。それで永琳はどこなのかしら？」

「1番前にいる変わった服を着た女性よ。さて永琳から帝への贈り物を受け取ったらいいよ開戦かしらね。」

見たところ戦闘要員は30もいないわよ。永琳1人では少しきついくらかしらね」

・
・
・

「姫様、これを本当に帝への贈り物としていいのでしょうか。誰か他の者が服用してしまうかもしれないよ」

「いいのよ。私たちの仲間が増えるだけじゃない」
「姫

様……」

うわ、めっちゃジト目だ。

「じ、冗談よ永琳。そんな顔しないで。じゃあ私はこれに手紙を添えてここに置いておくから、ここを壊さないように始めましょうか」

「月に帰る気はないのですね？」「ええ」わかりました」

「パチュリー、やっちゃって。広域無力化魔法」

そう、私がこの時のために身につけた新魔法、広域無力化魔法は仕組みは簡単。ただ滅茶苦茶明るい光を範囲を絞って出すだけだ。

「もし残ったら永琳さん、あなたが処理してくれると助かるわ。では目をつぶっていてね」

眩しっ！あ、でもこれで大体は無力化で来たね。あとは目を抑えているところでやっちゃえばいいというわけ。今日もこの屋敷に美鈴を連れてきているし、永琳もいるから楽勝ね。

なんだかとてもあっけなく終わってしまった。

「あっけなかったわね」

「ええ、最初の不意打ちでほぼ決まってしまうなんて。月は軍の訓練を見直した方がよさそうね。さて、人間たちも目が眩んでいる隙に私たちは早く撤退しましょうか」

「さて、貴方達はいったいどちら様なのかしら？ 姫様が大層信頼を置かれているようですが」

「私は紅美鈴、妖怪退治を生業にしているしがない妖怪です」

「私はパチュリー・ノーレッジ、種族は魔法使い。都では陰陽師兼姫の護衛をしていたわ。それで、あなたたちはこれからどうするつもりなの？」

「うーん、取り合えず山奥でひっそり暮らしておこうと思うわ。互いに永い時を持つ者。きつとまたどこかで会えるでしょう、ではまたね」

「ええ、きつとまた会いましょう」幻想郷でね。

妹紅side

この間はとても驚いた。真夜中だというのに急に昼間さえしのごほどの途轍もない光が辺りを照らしたから。何があったのかはわからないけど、樺菜や美鈴、輝夜は大丈夫だったのだろうか。

まあ彼女らなら心配する必要もない気がするけど。

おっと、誰か来たようだね。こんな登るだけで修行になりそうな山にこんな大人数で来るなんて何か訳ありっぽいからついて行ってみよう。

何かを燃やそうとしたみたいだけどさっきまでいなかった人に断られているね。「……おや？君はこんなところで何をしているんだい？」うわっ驚いたなあ。

「大勢の人が山を登って行ったからついてきただけよ。あなたは？それに手に持っているのは何なの？」

「私は岩笠という。今持っているこれなのだが、これはかの有名なかぐや姫が月に帰るときに置いて行った薬でな、飲むと不老不死になれるらしいのだが帝はかぐや姫のいない世界に永遠にいる気はないのことで処分することになったのだ」

輝夜が月に帰った？本当かしら。

「その薬、代わりに私が処分しておいてあげるよ。つい先ほど断られたところなんでしょう？」

「私ならいい場所を知っているからそこに捨てておいてあげる……岩笠っ！」妖怪だ。

「なっ……ぐっ……君だけでも……逃げなさいっ！」

今こそ薬を飲んで妖怪に殺されないようにして戦わないと、岩笠が喰われてしまう。

「待って、今助けるから。んぐっ。あ”あ”あ”あ” ああああ！げほっげほっ、おえ」まさかこんなに不味いとは。

って、いは……か……さ？なんと愚かだったんだろうか！私が苦しんでいなければ助けられたかもしれないのにつ。くそったれが！

はあ、でもこれで私は死なくなってしまった。死を恐れたばかりに。

『貴方は生き物が存在しない世界を考えたことがあるかしら？

永遠に生きる者にはそういう世界になって尚生き続けなければならぬ未来が確約されているの』

ああ私もこの身になってまだ短いから実感できていないけどいつか分かるのでしょね。

髪色もこうも変わってしまったって私はもう人間たちの中では生きていけない。ならばまずは独りで生きていけるように強くなることから始めよう。

もう2度と私の目の前で人が殺されることなんてなくなるように。

魔改造的第十話

パチユリー side

さて、竹取物語も終わって恐らく次に起こる東方関係のイベントは996年か995年のどちらかに行われる酒？童子討伐なのかな？あと300年弱あるね。どうしようかな。

あ、そうだ。ぜひ一度行ってみたいところがあつたんだった。

「ねえ美鈴、魔界って興味ない？」

「魔界…ですか。私は特に興味はありませんが、パチユリーが行くというのなら当然私もついていきますよ」

「魔界は恐ろしく危険。魔界人の実力も当然だけど、瘴気も地上でたまっている場所の比ではないわよ。それでもついてきてくれるのかしら？」

「ええ、もちろんです」

では向かいましょう、と言いたいところだけれどどこから行けるかわからないのよね。博麗神社裏ってどこよ……あ！そうだわ、彼女なら界の境目も自由に操れるね。

でも流石に正規ルートでなければ有無を言わさず排除されそうね。はあ、魔界は今諦めましょう。

「と思っていたけどよく考えたら行き方が不法侵入しかなかったから今はやめておくわ。変なこと言っでごめんなさいね」

「あら、それなら仕方がないですね。ではこれからどうします？」

あとこの時代にいそうなのは幽香か守矢かだね。と、取り合えずしばらくは諏訪で過ごそうかな。うん。

「またもう少し東に旅を続けてみましょうか。それでどこか良い場所が見つかったらしばらくそこで暮らしましょう」

なんかもう都では仙人みたいな扱いになってるから不老も疑われなくなっているだろうけれど。

そんなこんなで旅を始めて3日ほど経ったのだけれど、どうやら避けたはずのルートに入ってしまったっていらしいね。

「美鈴、あまり花を踏まない方がいいわよ」

「そうなんですか？まあ私も草花は好きですし、極力踏まないようには気を付けていますけど」

「いい心がけね。その心、その辺の有象無象にもあつたらよいのだけれど」

「っ誰!?今私が全く気配を察知できなかつたなんて」

「へえ、いい反応ね。私は風見幽香。貴方が気配を察知できなかつたのは私が花から現れたからじゃないかしら？」

「……花から？」

「ええ、だって私は花妖怪。花があれば何処へでも行くことができるわ。ところで貴方たちそんなちんけな変装で人間の村でも襲うつもりなのかしら？」

「やっぱり普通にばれるわな。幻想郷に住むことになるような妖怪どもは皆強すぎはしないかなあ。」

「別にそういうつもりではないのよ。むしろ逆、私たちは陰陽師じみたことをやっているのよ」

「へえ、陰陽師ねえ。なら私が貴方の実力を測ってあげるわ。」

大丈夫よ、折角花を大事にしてくれる人なんですもの。殺しはしないわ。ただちよつと痛いだけ」

殺害予告でしょそれ……。

今生1番に辛すぎる

なかなか面白い。何の種族かは知らないが、今まで返り討ちにしてきた陰陽師たちや有象無象の妖怪どもとは一線を画す程の実力がある。確かにこれなら大概の妖怪は退治できるだろう。

私にはまだまだ届かないけれどね！

「ツなっ！」まさか私が一本取られるなんてね。

でも今の力は何かしら。妖力ではない霊力でも神力でもない力、彼女は普通の妖怪ではなかったのか。

これはこれは、また面白くなってきたわね。

彼女は今私の家に寝かせている。結果は勿論私の勝利で終わった。かなり実力もあつたみたいだけどその昔私を下した胡散臭いあの妖怪ほどではない。まあ彼女は文字通り格が違った。

どうやら彼女が起きたらしい。もう1人の方の妖怪(紅美鈴というらしい)が伝えに来た。

「どうやら私は完敗だったようね。その割に身体の疲れとか痛みとかが全くないのはかなりの時間寝ていたからかしら？」

「貴方が寝ていたのはせいぜい半日ほどよ。気分が悪くないのは私の薬草と、彼女の能力のおかげだと思おうわよ」

「そうだったのね。ありがとう」 「ところで貴方」

お礼を言われるのなんて私らしくもないし、ここで話を変えましようか。

「いったい何の妖怪なのかしら？ 戦闘中に見慣れない力を使っていたけど」

「私はパチュリー・ノーレッジ、魔法使いよ。見慣れなかったのは魔力

じやないかしらね。この国にはまだ少なそうだし、持っけていても自覚していない者も多いわ。

あなたみたいに」

「……………え？」

私にもあの力が存在していたというの？

「魔力に適性のある者はたまにいるわ。その代表格が悪魔や魔法使いというわけ。

あなたも極めてみたいかしら？」

まだ私にも強くなる余地があつたのね。フフフ♪

「ええ、もちろんよ」

パチユリー side

戦闘中の幽香はとても素敵な笑顔でえげつないことを平然とやってきた。ありやトラウマになりかねないね。魔法使い相手に肉弾戦とか効率よすぎかよ。

その途中に私の撃った魔砲で魔力の存在を仮定したのか、私が目を覚ますとそれについて色々聞かれた。

ゆうかりんも魔力もってんだぜ。つて言った時の幽香の顔は是非脳内保存しておきたい。美人が呆けるとあんなに絵になるのね。これは良いことを知ったわ。

そんなわけで幽香に魔力を自覚してもらうところから始めたけど、流石の戦闘経験値だわ。教えたことをすぐにやってのけるし応用だつて自身でやってのけてしまう。

私だつて魔法使いだ。たくさんの本を旅の途中でも読んできたおかげで属性魔法以外も使えることは使える。結局幽香には花妖怪ということメインでは木「属性」を教えたけど。日常に便利な魔法も一応教えておいた。水を出すとか。幽香なら自分で応用して戦闘にも使いそうなのが恐ろしいところである。

因みに美鈴は生命力豊かなこの地で気を練る修行をしているみた

いだ。

本当に紫の将来が心配でならないね。こんな曲者たちを自分の箱庭に住まわせるなんて。

そういえば幽香に少し聞きたいことがあったんだった。

「幽香ってさ、かなり強いけど生まれてこの方敗北を味わったことってあるの?」

「……ええ、その昔に1度だけあるわ。そうね。たまには私の話をしてみるのも悪くないかもしれないわね」

幽香 side

〈回想〉

あれは私が負け知らずでかなり自分に酔っていた時の事だった。自分の拠点から径十数里は私の領地も同然だった。その中の妖怪どもは私に攻撃を当てることすらできない程だったから私は勝手に自分が最強になったつもりでいた。

そんな時だ。あの妖怪が現れたのは。その妖怪も私同様女だったがまとっている雰囲気は胡散臭いことこの上なかった。

「あら、貴方はこんなところに1人で何をしに来たのかしら。ここが誰の領土か分かってはいつているわけ?」

「こんばんは。なるほどなるほど、貴方が件の妖怪ね。この辺りを制したからと言って自惚れるのは良くありませんことよ」

この言い方には流石に私の自尊心が傷ついた。

「誰だかは知らないけど、人様の領地に勝手に無事に済むとは思わないことね!」

この時は正直に言って負ける気などしていなかった。

彼女から暴力的な量の殺気と妖気があてられるまでは。

勝負は2刻ほどで着いた。彼女の不思議な能力を前に私は攻撃を殆んどあてられなかった。

彼女が来た理由は単純明快、私の領地にあった人里からの依頼だったそうだ。

私には群の頂点にいるほどの器はなかったようだ。

く回想終了く

「その時から私は動物たちの上に居座ることはやめた。そう言うわけで私はここで花たちと生活しているのよ」

彼女とは今一度全力で戦ってみたいものね。

渾名的第十一話

天の声 s i d e

ほんの二月ほどで幽香は教えた魔法を自在に使えるようになったので、パチュリールと美鈴は中断していた旅を再開することにしたようである。

目指すは信州諏訪。まだ人々に認知され、強大な力を行使できる二柱は人間ではない彼女らにどのような対応をするのだろうか。

「あー、美鈴？今どのあたりかわかるかしら」

美鈴が日本の地理を知るはずはないだろうに。

「わかりませんよ。ただでさえ山ばかりでどちらに進んでいるのかもわからなくなりそうなんですから」

実際はもうあと四十キロもないほどには近づいていたりするが。というか飛ばばすぐわかるはずなのにあくまでも歩いて目指すのは何かの意地なのだろうか。

ここに来るまでに立ち寄った村は二十ほど。依頼を受けてはこなしてさつさと旅を再開するせいで金だけは困らない程にあるようで、とても持ちきれないため今はパチュリールの謎空間にしまわれているとか。

金を使うことがほとんどなくなったのには美鈴の食事の減少も関わっていたりする。彼女も食事は嗜好品に近くなってきたのだ。今まで過ごしてきた数千という時間を礎にして、ここ数百年の密度の高い修行の末ついに彼女も高位の存在に足を踏み入れたのだ。

四時間後

パチュリール s i d e

「途中走ったりもしたけどどうやら一里ほど先に見えている国が諏訪ね。この延々と続いた山登りもようやく終了ね」

「まあ私としては修行にもなりますし、あちらに住むことになって毎日課として毎日五つほどは山に登るかもしれないね」

まじか美鈴、流石は妖怪ね。しかも最近は一日一食でも全く問題なさそうだし。いよいよ美鈴も上級妖怪の仲間入りか。

ここが諏訪の国か、思っていたより大きいわね。流石は二柱もいる国だ。

「ちよいと待ちな、お二人さん。流石にこの国の代表としては妖怪の侵入を許すわけにはいかないね。」

おとなしく崇られるか、抵抗してから崇られるか、あんたたちの好きな方を選びな」

「あなたは……神？」 まあ答えは知っているのだけれど。

「ああそうさ。私はミシヤグジを束ねるこの地の土着神、洩矢諏訪子」

「私はパチュリー・ノーレッジ。都では大都庶樺菜と名乗っている魔法使い兼陰陽師よ」

「へえ、この山奥にまで名前が轟く大陰陽師は人間ではなかったのかい。」

大陰陽師の正体見たり魔法使い、ってかい」

語呂悪すぎでしょ。

「うーん、そんな陰陽師を崇ったとなれば民からの信仰が無くなってしまいかもね？」

「冗談を。土着神への信仰がそんなに簡単になくなる様ならその土地はもう駄目ね。」

民に強く信仰されているからそこまでの力があるのでしょように」

「あれ、分かっちゃったか。ま、これは単なる言い訳なのさ。あんたたちがこの国に入るのを見逃すためのね」

「あら、入ってもいいのね。それは私たちが人間を傷つけるようなこととは方が一にもないことが分かったからかしら？」

「ああ、その通りさ。恐らくあんたたちの変装を見破れるのもこの国にはもう一人だけだからね。」

おっと、もう一柱、だったね」

「二つの神社に神が二柱もいるなんて大変なのね」

「今となつてはそうでもないさ。昔はそれはそれは大変だったんだけどね。」

さて、ならもう一人のあんたは美鈴なのかい？」

「はい、私は紅美鈴。見ての通り妖怪ですが、私も都では陰陽師をしていました」

「どっちともここらでは聞かない名前だね。特に聞くことがないばかりよりの方は不審に思われないように偽名なんて作ったんだろうけど」 ぱちよりいって何よ。

「私の名前はパチュリーよ。……パ」「ぱ」「チュ」「ちゆ」「リー」「いい」

「パチュリー」「ぱちえりい」……うん、もう諦めようか。

「もう何でも好きに呼んで頂戴」 「うーん………うん。じゃあ『ぱっちゃん』で」

おお、意外と普通に呼んでくれるんだね。

「じゃあ自己紹介も終わったし、私たちの神社にでも行くこうか」「そうね。」

それにしてもこの国は広いのね、都ほどではないけど」

「当たり前だよ。私を誰だと思ってるんだい」「神」「その通り」

「なんだか嬉しそうね。まあ自分の土地を褒められて嫌な人なんていないか。」

「なんだか楽しそうね？ 諏訪子」

「この国を褒められたんだから当り前さね、神奈子」

「そちらのお二人さんはどうやら人間ではないみたいだけど？」

「ふふん、聞いて驚け神奈子よ。実はこの二人が世間に名を轟かせている樺菜と美鈴なのだ！」

「ほお。妖怪が陰陽師とはまたよくわからない事をしていたのね。」

「そうそう、自己紹介がまだだったわね。私は八坂神奈子。表向きに神社に祭られているのは私よ」

「なるほど、だから二柱も同じ神社にいるのね」 「どういう事ですか？」

「つまり、表向きには神奈子を信仰しているように扱う、しかし実際には裏で諏訪子も信仰を得ているのよ。だから祭神は神奈子なのだけれど諏訪子も消えることが無い、というわけ」

「そんなこともあるんですね」 「いえ、これは異例中の異例ではないかしらね」

「あんた存外頭が切れるんだね。見直したよ」 「そりやどうも」

「ま、頭の回転は紫の方がかなり速いのだけれど。」

「ま、取り合えず神社まで行こうか。うちの巫女も待っているだろう」

し」

「あら、いい子なのね」

「勿論だよ。なんたつて私の子孫なんだからね」

「なんだか嬉しそうね。まあ自分の子孫を褒められて（以下略

「何て名前なの？」 「稔^{みのり}里だよ。東風谷稔里」

「あなたならもつとおかしな名前を付けるかと思っていたのに、普通の名前なのね」

「当たり前でしょう？名前というのはそれだけで存在を固定してしまう。だからあんたも樺菜であるあんたとばっちゃんであるあんたでは他人^{ひと}から見れば全くの別人なのよ」

「ところでばっちゃんって何なの？」 「この子の渾名みたいなものさ。言いにくいからね」

「へえ、なんていうの？」 「パチュリー・ノーレッジよ」

「ば、ばちえりい？確かに言いにくいわね。「言えてないけどね」私もばっちゃんですりゃ妥協するしかないのね。」

「くっ、神ともあろうものが妥協をしてしまうなんて」「何でも早くいから神社行きましょうよ」

「いつまで国に入って少しのところでお話してるのよ。」

・
・
・

「あれが私たちの神社さ。立派なものだろう？」

「ええ、参拝客もかなりの数来ているみたいね。もうすぐ夕刻だというのよ」

「この国の神社はあそこだけだし、ここの民は皆私を強く信仰してく

れているからね。当然の事さ」

本当に住民と神のつながりが強い国だ。残り1200年余りで存在が危ぶまれるまでになるとは思わないくらいに。

「あつ、稔里だ。おーい、今帰ったよ」

「あら、諏訪子様に神奈子様もお帰りになられたのですね。して、こちらのお二方はいったい?」

「大都庶樺菜と紅美鈴だよ。今日からしばらくはこの神社に住んでもらうから仲良くしてあげてね」

「しばらくというと…?」 「二百年くらいかな?」

「なるほど二百年ですか…って二百年!?お二人は人間ではなかったのですか?」

「ええ、私も美鈴も妖怪兼陰陽師よ」 「よ、妖怪が陰陽師ですか。凄い時代になりましたね」

「あはは、やっているのは私たちくらいのもですよ。まあそういうわけでこれからよろしくお願いしますね、稔里さん」

「わたしもよろしくね、稔里」

「はいっ!こちらこそよろしくお願いします。美鈴さん、ぱっちゃん」
……え?

師弟的第十二話

パチユリー side

「どうやら稔里は『ぱっちゃん』が私の名前だと本気で思っていたらしい。」

「いやさ、流石はこの世界だよ。常識に囚われてはいけないのですね！」

「ねえ稔里？私の名前はぱっちゃんではなくパチユリーなのよ」

「言いにくいからぱっちゃんでもいいです」即答!?!少しは考える仕草が欲しかったよ。

「そ、そう。まああなたが言いやすいのならそれでいいわ」

「はいっ。では夕餉にしましょうか。準備してくるので皆さん待っていてくださいね」

「私も手伝いましょうか？材料さえあれば大陸の料理を振る舞うこともできるのだけれど」

「今日はもう出来ているのでできないのですが、明日作っていただければ、お二柱にも喜んでいただけると思いますよ」

「そう。でもまあ運ぶ手伝いくらいはさせて頂戴。私はただの居候だから何かしら貢献したいわ」

「いえいえ、私からしてみればお二柱の立派なお客様ですよ。」

「でもあなたがそうおっしゃるのならお言葉に甘えさせていただきます」

「諏訪子と神奈子では食事が全然違うらしい。まああの体型差だから仕方ないよね。」

「そんなこんなで出てきた本日の夕飯はお手本のような和食。未来

では豪華料亭でもこれほどのものは食べられるかわからない。(白玉楼に行けばいつでも食べられそうだけど)

神に食事を出すくらいだから美味しいのだろうとは思っていたけれど、これ程までとは思わなかった。ご両神も美味しそうに食べている。

……………私これ明日のご飯大丈夫だろうか。明日生きているだろうか。自信なくなってきたね。

「それで二人はどうして諏訪に来たんだい？やっぱり私たちが同じ神社にいるのが珍しかったからかい？」

実際は何も考えることなく諏訪に来ただけけれど。「まあそんなところね」

「でも来てみて良かっただろう？空気もいいし民もいい。都にさえ負けているとは思っていないよ」

「ええ、本当に来てみて良かったわ。料理もとても美味しいしね」

「そうですか？それは良かったです。ところでお二方はこの国で何をなさるのですか？」

「私は依頼があればあなたと一緒に妖怪退治にでも行きましようかね。いっそのこと、この神社の巫女見習いにでもなってしまうおうかしら」

「私は基本的には山の方にいると思いますね。この島に来る前に修行をしていた山と同じくらいの高さがありますし、新しい格闘技術も日本に来てから人間に教わりましたからそれも試してみたいですからね」

「まあそういう感じよ。巫女の方は冗談だけね」

「巫女してみたらいいんじゃない？妖怪巫女、うんなんか悪くない響きだね」

なるほど、無用な殺生もする人間巫女がいるのなら無用な殺生をしない妖怪巫女がいてもいいってわけね。

「そんなことをここの民が許すかしら?」

「仕える神がいいって言ってるんだからいいのさ。それにあんたは仮にも大陰陽師だからね、私たちもかなり安心できるし、ここの民も樺菜と美鈴の名前は皆知っているからむしろ盛り上がるかもね?」

「本当のところは明かさないようにするのね。でも流石に二十年も経ったら人間じゃないと思われるのではないのかしら?」

「大丈夫さ。ここの民はあんたを仙人だと思っているからね。安心しなよ」

そういえば仙人なんて噂も都では経ってたね。まあ不比等を延命するためにあれだけ仙術を派手に使えばそうなくてもおかしくはないよねえ。

「なら私は明日からこの神社の巫女見習いね。よろしくね、稔里」

「厳しく育ててやりなよ。なに、妖怪は簡単にはへばらないからね」

魔法使いの身体は普通非力な人間程度だし、私自身も登山家くらいの身体でしかないから恐らく稔里よりへばりやすいよ? 勘弁してくれよ、まったく。

稔里 side

ぱっちゃんはどうやらかの有名な大都庶樺菜本人らしい。彼女については妖怪退治は教えることが無い、というか教えられることが多い。

最近是我的通常攻撃の火力不足を補うべく一緒に必殺技になるも

のを考えてくれた。それが「幻想封印」。ぱっちゃん曰く技名は変えることをお勧めするらしいが、私は別にこれでいいと思っっているから今のところ変えるつもりはない。

そんな感じで戦闘の方は申し分ないのだが、生活関係においては最低限しかしていなかったようで、洗濯と炊事以外は結構ひどかった。

何故洗濯と炊事だけは上手いのか聞いてみたところ

「着物は戦えばすぐ汚れるし、丁寧に洗わなければならなかったから。炊事の方は本をたくさん読んだから」

だそうだ。読むだけで美味しい食事が作れるのなら器量はかなりよさそうだから、生活技術もつけようと思えばすぐにつきそうなものなのにどうして掃除もまともにできないのか、と聞いてみると

「いつもは魔法で塵を飛ばして満足してしまっていたから」

だとか。魔法って便利なんだなあ。

でもそんな便利なことも巫女になったからには自らの手でやってもらわなければならぬ。彼女ならすぐにでもできるようになりそうですけど。

そんなことがあってからもう十五年。私の娘も立派な巫女になることができました。唐突ですけど。ぱっちゃんは見違えるように家事ができるようになった。

育てがいのある弟子だった………。まあ彼女の方がはるかに年上ですがね。

最近はお女に師匠になってもらって仙術を学んでいる。これがなかなか便利で面白く、夏場に娘の修行を手伝うときには冷たい水を出してやったり、寒い日には火を出してやったりしている。

ぱっちゃんによるとどうやら私は仙人に近づいて行ってしまったているようだけど、仕方のないことだと思っって仙術の修行は続けている。娘が先に逝っってしまうのは胸が張り裂けそうなほど辛いことだけだ。

あれからもう五十年経った。私は今山に籠っって修行を続けている。

娘はつい二月ほど前に亡くなってしまった。もう私が神社にいる必要はないので、諏訪子様と神奈子様に無理を言って山に籠らせていただいている。

東風谷の系譜はいつまでも続く。そこに何代も前の巫女である私が居ればきつと皆混乱してしまう。だから神社には極たまに、巫女一代につき一度ほど通おうと思っっている。

ぱっちゃんが言うには仙人になってしまったのなら定期的に来る死神を追い返さなくてはならなくなるらしい。それも修行の一環だと思っって受け入れるしかない。

仙人とは天人に至るまでの準備段階であるという。私もいつか天人になって、ぱっちゃんに恩返しをしたいと思っっている。

ぱっちゃん達はもうこの国を出て行ってしまっうらしい。もうそんなに時間が過ぎていたのか。修行中は時間を忘れてしまっう。

まだ私が現役の巫女だったその昔ぱっちゃんと考えた必殺技は今なお進化させて使用している。私はもう守矢の巫女ではない。今こそあの時のぱっちゃんの勧め通りに名前を変えよう。

新しい技名は………そうね、「稔庶封陣しんじよふうじん」とでもしておきまっしよ。これでぱっちゃんと一緒に考えたことがすぐにわかるようになっった。

「久しぶりね。三十年ぶりくらいかしら？」

「ええ、久しぶり。きつとそのくらいじゃないかな。それで今日はこの国を出る前の別れの挨拶に来たの？」

「耳が早いのね。ええそうよ。あなたも天人になれるように頑張っってね。きつとまたいつか会いまっしよ」

「そうね。ぱっちゃんも元気だね」

次に会うのはいつになるのだろう。十年後かもしれないし千年以上後かもしれない。

でもきつとぱっちゃんなら約束を違えるようなことは事はしないから安心して修行に励むことができる。

成果的第十三話

パチユリー side

稔里とも別れの挨拶をしたし、諏訪子と神奈子にも出ていく旨は伝え終わった。あとは美鈴を探して二百年以上ぶりの旅を再開するわけだ。向かう先は平安京。

それにしても美鈴はどこにいるのかね。大体はこの山の頂上で変わった動きの練習をしていたりするのだけれど……「あっ、パチユリー？どうしたんですか？」いた。

「諏訪を離れて旅を再開するわよ。目指すは平安京。今の日本の首都、なのかしらね？」

「わかりました。私はいつでも大丈夫ですよ」

それでは行きましょう。陰陽師を再開しにね。

??? side

山の上で酒を呑んでいたら部下の天狗が人間が山に入ってきたと伝えてきた。

「今まで人間の入山を私に伝えてきたことなんてあつたかねえ？」

「それが私たち大天狗でさえ相手を足止めさせるには至らんです。ですから鬼の方を何人か派遣していただきたいと思ひまして……」

「いや、それには至らないよ。特別に私が直々に相手をしてあげるからね」「……………えっ」

さて、そんじゃあその人間の顔を拝みにでも行こうかね。

「なんだいなんだい、いつから私の部下どもは嘘を吐くようになったんだい。相手はまるつきり人間じゃあないじゃないか」

「貴方がこの山の長？天狗たちがわらわら寄ってきて鬱陶しいことこの上ないのだけれど、来ないように言ってくれないかしら？」

「この山の頂点は私含めて四人だよ。ああ、天狗どもこれ以上寄ってくるんじゃないよ。」

「……………でない私の攻撃の余波に当たっちゃうよ」

「ひ、ひえく。伊吹様が直々に相手をなさるのか」「巻き込まれたら死ぬぞっ！」

うるさい天狗どもだ。

「それで、あんたらかい？この山に無断で入った挙句に天狗たちをどんどん倒していったのは」

「私たちは京に向かって旅をしていただけよ。天狗たちが勝手に攻撃してきたから反撃しただけ」

「それで私とやるのはどちらかな？別に私は二人同時でも構わないがね」

「貴様っ！私たちを愚弄しやがって。今に吠え面をかかせてやる！」

「まあまあ落ち着きな。私は何もあんたらを侮つちやいない。現にこの山の最終兵器の一人である私が出てきているんだからね。」

さてさて、あんたらがこの私の肌を傷につけられたら私は負けを認めよう。受けるかい？」

「そうね。「パチュリー?!あんなに調子に乗っている奴なんて私一人でも、っ！」いいから聞きなさい。あなたは知らないのでしょうかが彼女の種族は鬼。」

半端な攻撃では肌に傷をつけるどころかこちらに衝撃が来るほど

に硬いのよ。傷をつけることすら難しい鬼の肌を相手にあなた一人で挑むのは流石に無理がある。

だから少しでも勝てそうな方を、と思ったのだけれどそれを聞いてもあなたは一人で彼女に挑みたいかしら？」

ほう、鬼の事をよくわかっているね。まあ私はそんな鬼より更に硬いけどね。

「……………ええ、私一人で戦います。修行の成果も試したいところでしたし」

「…本気なのね」

「はい、私は自分に正直が取り柄ですから」

「そりや素晴らしい。正直なのは好きだが手加減は無しだよ」 「勿論です」

「大江山の四天王が一人、伊吹萃香」「宣言するほどの役も無き妖怪、紅美鈴」

さあ、始めようか！楽しい勝負^{ケンカ}をね！

パチユリーside

美鈴が萃香とタイマンで勝負することになった。まさか大江山に入っているとは思わなかった。

萃香が出てきた時も滅茶苦茶驚いたし。というか大天狗まではこの変装通用したんだよね。天狗社会大丈夫かな。

「貴方が萃香と戦っている子の連れ？」

「っ！え、ええそうよ」

完璧に気配を殺して来たよ。美鈴並みじゃないかな。

「私は大都庶樺菜。あなたは？」

「私？名乗ってもいいけど……………」 戦えとか言うなよ？

「まず貴方の本名を教えてください」

「……どうして偽名だと分かったのかしら？」

「鬼を相手に嘘を吐けるとは思わない事ね」………何その鬼の特殊能力。

「パチュリー・ノーレッジよ」 「パチュリーね。私は……」

私の名前を初めから言えたのこの鬼だけじゃないだろうか。華扇だけど。

「私は茨木華扇。山の四天王の一人よ。ところで貴方はあの勝負どちらに転ぶと予想するかしら？」

「今の美鈴の打撃では萃香に傷をつけるには至らない。だから萃香かしらね」

「私は赤髪の方だと思っわね。あ、ほら、今まさに決着が着くわ」

まさかあれはまだ中国にいたときに教えた○○○○波（の溜がないバージョン）!?

「これはまた素晴らしい威力ね。流石の萃香でも体に風穴が空いたでしょうね」

「いやあく負けた負けた。まさか傷つけるだけじゃなく穴をあけられるとはね。」

強いねえあんた。気に入ったよ！」

「そんなに元気に言われましてもねえ。あまり勝った気にはなれないのですが」

「まあまあ気にするな。私が負けたといったんだからあんたの勝ちは揺るがないのさ。」

それよりいい気分だねえ。宴会でも開きたい気分だよ」

「貴方たちは常日頃から宴会を開いているじゃないの」

「あれ？華扇じゃないの。どうしてここに来たんだい？

ま・さ・か、戦いたかったのかい？」

「そんなわけないでしょう？私を貴方たちと一緒にしないで頂戴」

「なーんだ、つまんないの。まあとりあえず宴会するから皆を萃めようか。華扇は酒虫酒しゅちゅうざけでいいから持ってきてね」

「まったく、鬼使いが荒いわね。いつものことながら」

「良かったわね、美鈴。ところで最後の技は昔私が教えた技なのかしら？」

「ええ、吠え面はかせませんでしたけど。そうですね、最後の技は教えてもらった技の溜の時間を戦闘中の気の練りに変えた私独自の技です。幽香さんのところで身に着けました。必要になる集中力は馬鹿にならないのですけど」

確かにあの時気を練る修行をしていたっけ。美鈴もかなり強くなったものだ。

「ふくん、貴方たちは妖怪なのにも関わらず陰陽師なんてしているのね」

「人間の陰陽師どももあんたらくらい強かったらいいんだけどねえ。」

最近の人間はどうも好かん。私らをただ殺しに来ている姑息な連中が増えてきやがった。正々堂々と勝負して退治されたうえで殺されるのなら、それは私たちにとっても嬉しいことだ。私たちを負かす人間が存在するというところに他ならないからね。だがどうだ、最近の人間どもは私らの寝首を搔こうとしてきやがる。もう私は人間を信じることができなくなりそうだよ。鬼が人間を見限っちまったらどうなってしまうんだろうね。せいぜいそうならないことを祈るしかないけどね」

「山に来る人間には十分に注意した方がいいわよ。どんな理由があるかはわからないけれどね」

「わかつてはいるんだけどね、鬼はまだ人間を信じたいのさ。」

パチユリーはこれからどうするんだい？」

「そういえば萃香も普通に名前呼んでるのよね。鬼って肉体関係のスペックがおかしいのかも。」

「初めにあった時にも言ったでしょう？ 私たちは京を目指しているの。そこでまた陰陽師として生活するのよ」

「ああ、そういえば言ってたね。紫から聞いたよ、あんた三百年くらい前にも都で陰陽師してたんだってね。名前が特殊なせいですぐにピョンと来たよ」

「紫と知り合いだったのね。で、まあそういう事よ。遷都された先でもまたやろうってわけ。」

都を出たころには仙人として扱われていたし、これまでもちよくちよく活動していたから私の陰陽師としての名前はまだ生きているのよ」

「間違ってもこの山には攻めてこないでくれよ。私ら鬼はいいが今日の様子じゃあ天狗は一部を除いて滅ぼされそうだからね」

「私たちは悪行を働いた妖怪しか相手にしていませんわ。山にいるだけの天狗が退治対象になることはまずないでしょうね」

「それもそうだ、さあこの酒はどうだい？酒虫酒に勇儀の星熊盃を利用して作った酒だ。超一級品だよ」

「いたたくわ。それにしても鬼でもこんなに薄い（度数が低い）酒を呑むものなのね。意外だわ」

「まあね、私らはうまい酒が好きだからね。だからこの伊吹瓢から出る酒虫酒を星熊盃に入れてすぐの酒なんて最高さ。もともとうまい酒の格を上げることになるんだからね。」

でもまあ濃い酒も当然好きだよ。呑んでる感じがするからね」

「また気が向いたらこの山にも来るわ、またね」

「今日は宴会楽しかったです。また会いましょうね」

「ええ、また会いましょう」

∴因みに見送りが華扇一人なのは彼女以外の鬼は皆酔って寝てしまっているからだ。

さて、京はもうすぐそこよー！

失望的第十四話

パチユリ側

京の町に張られていた結界はどうやら鬼除けの結界だったみたいで、美鈴も普通に入ることができた。紫の結界騙しも流石に数百年も経てば効果が切れていたもので、これはかなりありがたい一方で常に警戒しなければならぬという難点もあった。こんなに緩いから鶴が出たり玉藻前が居たりするんじゃないのかなあ。でもまあ鬼は単騎で一国を滅ぼせるから警戒するのわかる。

おかしなことに私たちは戸籍もないのに名前だけで家を一軒貰えた。セキユリティガバガバすぎないか。

仕事をしているとたまに鬼の噂を聞いたりする。討伐に向かつて帰って来たものは未だにいない。そこでついに源頼光らに酒？童子討伐の命が下されたみたいだ。しかしこの世界は似ているようでも前の世界とは大幅に異なる。まず一つ目が鬼の構成だ。前の世界では、酒？童子に茨木童子、その下に鬼の四天王が来ていたが、この世界では山の四天王としてトップが四人いる状態になっている。この違いが今後の展開にどうつながるのかが心配ではある。更には正史とは異なりこの世界には私の存在がある。決して楽観はできない状況だ。

因みに討伐には誘われないうようにわざと頼光たちを避けていたのは当然のことである。

萃香 side

なんと山伏たちがこの山に一泊させてほしいと頼みに来たらしい。部下の鬼たちの話によるとなんと素晴らしいお酒を持ってきているのだとか。そんなうまい話があるだろうか。前にも忠告は受けていたし、私は仮にも山の頂点に存在している者なのだ。部下たちを人間の策謀によって無駄死にさせる気はない。とりあえず殆んど力を

込めていない分身で様子を見ておこうか。分身でも酒は呑めるし。

分身)「あんたたちが件の山伏たちかい？極上の酒があるんだってね」

「ええ、これは神からいただいたありがたいお酒でありまして、飲んだ者の力を底上げすると言われています」

神の酒か。これはかなり怪しいな。そもそも神は人間の味方のことが多い。霊力ほどではないが神力も妖怪にはかなり効く。分身には適当に話をさせておいてこつちで華扇らと少々話をしようか。

「ねえ華扇、あんたはあの人間たちの事をどう思う？」

「かなり怪しいと思うわ。神の酒に加えてあいつらの持ち物からは嫌な感じがするわ。私も分身が居れば直接あそこに行かなくても済んだのにね」

「まあいざとなったら本体の私が助けてあげるよ」「ええ、よろしくね」

宴会が始まって一刻ほど経った。あいつらはまだ怪しい動きを見せてはいないが……………私(本体)も行きたいなあ。

「さあ、これが今回のとっておきの酒だ。酒？童子殿にはもう説明しておりましたが、これは飲んだ者の力を底上げするという神から授かった酒なのです。今夜の出会いに感謝いたしまして皆さんで乾杯しましょう」

「」「」「乾杯！」「」「」「」

「あゝ？なんだか急に眠たくなってきた……………ぐう」「俺もだ……………もう寝ちまおう…」

なんだなんだ？急に皆寝始めたぞ。それに対して人間の方はびんぴんしているな。間違いない、やはり本体は宴会に入らないようにしたのは正解だったか。

「馬鹿どもめが。人間が鬼なんぞに土産など持ってくるものか。何も抵抗できなくなつた鬼は実に無様だな！」

あれは渡辺とか言つたか、あつ！華扇！ああ何とか左腕で防いだみたいだ。その後右手を斬り落とされたみたいだけど。

ありや、私の分身も首が落とされたね。分身の首を飛ばして驚かせておいて、その間にできる限りの鬼は隠そうか。数瞬もあれば恐らく大丈夫。……………はい、完了つと。死んだ者がいなかったのは本当に運がよかった。

「はははつ、我が妖刀の前には流石の酒？童子もあつけなく……………え？お…にが……………消え…た？どうなっているんだ？！首魁が死んだから手下たちも皆滅んだというわけか？」

「そんなわけがないだろう？」「っ！その声は酒？童子？！まさか！？」

「そのまさかさ。さて、あんたは鬼に横道がないことを知っているかい？特別に教えてあげるよ。鬼はね、騙し討ちや卑怯な手段が大っ嫌いなんだよ。今お前たちがしたようなね。お前たちはここで私が全員摺りつぶしてやるよっ！」

「お前たちつ、退け！退かないとやられるぞ！」鬼たちを隠してなきや追いたかつただけだ

はあ、気分が悪い。もう人間との絆の修復は不可能かもしれない。それほどまでに胸糞の悪い連中だった。結局華扇の腕も持ってい

れたか。腕を大事に持っていくとはなかなか鬼の事をわかって
らしい。

あー、もうこの山も天狗に譲って私たち鬼は別の場所に移ろう。も
う当分は人間に関わりたくもない。

「あーあ、こういう時に紫が居ればいいところ知っていそうなんだけ
ど」

「呼んだかしら？あー？どうしてこの広い部屋にあなたしかいないの
かしら？」

うわあ、驚いたなあ。こいつはいつでも急に出てくるから。

「ああそれはね……つてことがあつたからさ。そんなわけでき
紫、人間が来ないような場所つてどこかない？わたしもう千年くらい
は人間に関わりたくはないんだよね」

「一応あるにはあるのよ。環境はかなり悪いけど」「どこなんだい、
そこは」

「……地獄よ」「は？」「だから、じ・ご・くよ。今も使われているから
人間は来ないわ」

「じゃあいったんそこに行くかねえ。どうしても嫌なら別のところを
探すことにするよ。」

それで、どうやったらいけるの？」

「行きたいときに呼んでくれたらそこまでスキマでつないであげる
わ」「ん、わかったよ」

「では、また」「うん、そんな時はよろしく頼むよ」

華扇は恐らく腕を取り返しに行くだろうし、ここに残りたい奴らも

いるかもしれないけどその時はその時だ。

「全員起きたかい？それでは重大発表をするよ。……………昨日の事で私は完全に人間への信頼が無くなってしまった。だから私は人間を見限って当分の間地上を去ることにした。次の私の行先は……………地獄だよ」

「じつ、地獄?!それは本気ですか？」 「勿論。私はいつでも本気さ」

「悪いけど私は地上に残るわ。昨日の事は本当に感謝しているし、貴方が居なければここには一人の鬼すら残らなかつたかもしれない。でも私は切られた腕を取り戻すまでは鬼として生きられない。角もこんなに縮んでしまったのだし。だからごめんなさいね」

あんたならそう思うだろうと思っていた。まさか腕を切られるとあんなに角が小さくなるだなんて。

いや、切られたのが妖刀だったからか。普通の刀なら腕は再生してしまうからね。

「ああ、わかつたよ。それ以外で誰かこの地上に残りたい奴はいないのかい？地獄あっちには人間は来ないけど本当に良いんだね？」

これが最終確認だ。……………よさそうだね。ここまで皆人間に執着が無くなつてしまっていたのか。

「紫」「はいはい、あの鬼以外を連れて行けばいいのね？」「そうだよ、よろしく」

おお、ここが地獄と呼ばれる場所なのかい。私たちにとつてはこの暑さも十分に耐えることができる。なかなか悪くない場所だね。

「ここは灼熱地獄。鬼なら心配ないだろうけれど焼けないように気を付けてね」

さてさて、次に地上の空気を吸うのはいったいいつになるのやら。まあそれまではこの地獄でもなかなか楽しめそうだ。

パチユリー side

あら？ 鬼退治はどうやら成功したのかな？ 何か尖っている包みとお札をたくさん張った細長い箱を持っているようだ。箱の方は恐らく華扇の腕。

じゃあ包みは……まさか萃香の頭?! やはり私がこの世界にいたのが悪かったのだろうか？ ああ、私は何という罪深いことをしてしまったのか。悔もうにも、何に悔めばいいのかわからない。

ああ、神よ。何故私を転生させてしまったのか。この世界のモブキヤラAとして生まれていたのならこんなことにはならなかったはずなのに。

この世界を知ってしまったが故、世界は私に牙をむいているのかもしれない。

知った瞬間に残酷になる世界を生まれた少し後から知ってしまった私は、この世界がどれほどまでに残酷なのかをまだ知らないだけなのかもしれない。

寵姫的第十五話

パチユリー side

あれからもう百年ほど。私たちは相も変わらず仙人の陰陽師として活動している。一度大江山にも行ってみたことがあったが、既に天狗の山と化しており鬼は一人たりとも見つからなかった。

私のせいなのかもしれない。辛い世界だよ。

最近は何とある噂が立っている。どうやら最近床に臥しがちになっている鳥羽上皇には誰をも魅了するほどの美貌を持つ寵姫ちようきがいるという事らしい。そんな者の顔も一目見てみたい気もするが、側近は安倍泰成。清明直系の子孫だけあってかなり優秀な陰陽師だ。
ん？そういえば鳥羽上皇の寵姫って確か……………

「追えっ！逃がすなよ！くそっ、妖のくせにのうのうと過ごしておったのか！」

「そんなつもりは一切ありませんでしたのにつ！くっ、私もここまでな……………の？え？」

「あ奴どこに消えやがった…。出てこい！……………くそっ！跡形もなくっ！」

仕方ない。明朝から搜索を再開するぞ！有力な陰陽師たちにも協力してもらうから適当な陰陽師に声をかけて回れ」

搜索は面倒だけれど上皇の寵姫の顔を拝むチャンスだと思って声がかかったら参加しよう。

「もし、そこにいるのは大都庶殿とお見受けする。今の騒ぎを聞いていたのなら貴方もあの妖狐の搜索に協力してはくれまいか？」

「分かったわ。明朝からだったわね」「うむ、それではよろしく頼むぞ」

では、美鈴と一緒に搜索を始めようかな。

「手始めに他の陰陽師たちが手を付けていない森から行きましようか」

「はい、それはいいのですがパチュリーが搜索に協力するなんて珍しいですね」

「それは顔も見てみたいし、ちよつと確かめたいことがあったからよ」
あの妖怪が逃げているときにどこかに行つた絡繰り、あれは彼女自身が発動したものではない。彼女もかなり驚いていたから。

となるとあんなことができる奴は私の知る限り一人しかいない。

「紫。：あなたなんででしょう?」

「いきなり呼ばれて唐突に『あなたなんででしょう?』はちよつと意味が分からないわね」

「昨晚上皇の寵姫を逃がした、というかスキマに落としたのはあなたなんででしょう?」

「ああ、それね。そうよ私よ。彼女は今まで眠っているからここには来られないけど。どうして助けたのか知りたいかしら?」「ええ」それはね、彼女があまりにも可哀そうだったからよ。

それに彼女は人間に近づきたがった妖怪。私の夢には非常に相性がいいと思わないかしら?」

「ふーん、なるほどね。よく分かつたわ。それで?その子をあなたの式にでもするつもりなのかしら?」

「よく分かつたわね。ええ、彼女がそれでいいと言えばそうするつもりよ」

「昨晚ちらつと見たただけだけれど彼女、九尾でしょう?妖獣の最高峰の存在を式にできる実力が羨ましいわね」

あの九尾でさえ私なら苦戦は免れないし、負けることもあり得る。

マジ紫チートじゃん。

「そうそう、貴方の忠告のおかげで鬼たちを全く殺されることが無かったと言って萃香が貴方にお礼を言っていたわよ」

「……………え？萃香生きていたの？
じゃあ人間たちが持ち帰ってきたあの鬼の首は別の鬼ものだったってこと？」

「誰も殺されなかったと言ったでしょう？貴方が見た首は萃香の分身のものよ。恐らくは翌日くらいには消えていたでしょうね」

ほんっとうに良かった。これで百年以上もあつた心のしこりが取れたようだよ。

「前に山に行った時にはいなかったのだけれど、彼女らは今どこにいるのかしら？」

「彼女らの希望で人間のいない地獄に私が送ったわ」

文字通り地獄送りにしたのね。

「それは良かったです。彼女たちが生きていて安心しました」

そういえば美鈴はかなり鬼の皆と打ち解けていたみたいだったしね。かなり不安だったのだろう。

「それは良かったのだけれど、今人間たちはあなたが連れ去った九尾を探しているわよ。まあ連れ去らわれたと思っっている人間は皆無なのだけれど」

「それなら大丈夫よ。だっていま彼女が寝ているのは私のスキマ空間の中。見つかることはまずあり得ないわね」

スキマの中だど？あの目がぎよろぎよろしているところで目覚めたら悪夢でも見ている気になるのではないのかな。

「スキマ空間に家を建てているのよ。だから目覚めても悪夢を見てい

る気にはならないわ」

「そ、そうだったのね。というか勝手に心を読むのはやめて頂戴」

「さっきの貴方が分かりやすすぎただけよ。顔が青くなっていたし」

「なーんだ、そうだったのね。てつきり紫が新しい能力に目覚めたのかと思っちゃったじゃないか。」

「まあ町の力ある陰陽師たちが挙って捜索しているから彼女を外に出すのは五十年以上経ってからの方がいいかもしれないわね」

「まあ彼女も退治されるほど弱くはないけれどねえ。精神が弱っている今付け込まれるのは確かに嫌ね。気を付けておくわ。」

「それで貴方は九尾を見つけたと報告するのかしら？」

「するわけないじゃないの。別に悪行を働いたわけでもなし、私が参加したのは本当にあなたが連れ去ったのかを確かめたかっただけよ。思わぬ収穫もあったけれどね」

「うふふ、そうね。ではまた何かあったら何時でもよんでね」「ええ」

「そつちは何か手掛かりを見つけたか？」

「いいえ、私の仙術ではただの狐でも感知してしまうから。あちこち行ったけれどすべてただの狐だったわ。だから私はもうあまり役立てそうにない。狐なんてそこらにいますぎて」

「む、なるほど。仙術には意外な欠点があったんだな。では貴方は通常の陰陽師業を再開してもらっても良いぞ。腕の立つ陰陽師も一人は京に常駐していた方が良いからな」

「よしよし、怪しまれることなく脱退できたね。仙術なんて実は一回も使っていないけど。では普通に陰陽師を続けましょうか。」

結局手掛かりはないまま捜索は打ち切りになった。紫が絡んでい

るのだから当たり前だけだね。

そんな感じで京の町は本日も平和である。そういえば今日は午前
は仕事をして午後からは紫に呼ばれていたんだっけな。紫から呼び
出すとは珍しい。どんな用事だろうね。

実は午前の仕事とは病にかかっている町民の診察だったのだ。最
近はこういう依頼も増えてきて、基本妖怪退治は美鈴、こういうのは
私がやっている。このような依頼がない時は私も妖怪退治をしたり
しているけれど。

話は変わるが、実は陰陽師の本来の仕事は陰陽五行思想を使ったも
のなので、私とはべらぼうに相性が良かったりする。これが私の実力
が陰陽師として頭一つ分抜けたところにある理由の一つなのだ。あ
とは勿論単純に人間よりも強いから、仙術を使えるからなどである。
仙術は基本使わず、魔法で似たようなことをしているだけなんだけ
れど。

紫との待ち合わせ場所に美鈴と来たけど早すぎたかな？

「少し早かったかしらね？」

「そうですね、いつも紫さんは時間ちょうどくらいに来ますからねえ」

「あら、そうでもないわよ？」「紫？」「ごきげんよう」「寿命が五年は
縮まったわ」

「じゃあ驚いていないのと同じね。ってやめてよその顔。私が悪かつ
たわよ」

「わかればよろしい。それで今日はどんな用事なのかしら？」

「今日は私の新しい式を紹介しようと思ってね」「あ、了承されたのね」

「ええ。本当はすぐにでも貴方たちに紹介したかったのだけれど、急に私から送られた力になれなかったようでね。こんなに時間がたってしまったのよ」

「あなたはもう少し自身の妖力量を自覚した方がいいわね。そんな言い方をすればその子が悪いみたいだけれど、悪いのは十中八九紫よ」

「あらあら、悲しいですわ。およよ」

「喋り方まで変えちゃって。わかりやすい嘘泣きね」「てへっ」

「てへっ、じゃないわよ。まったく、早く紹介なさいよ」

「それもそうね。今から呼ぶわ……………ほいっと」

「うわっ、ちよ、紫さま……………どうも初めまして。紫様の式をしております、八雲藍です」

「あ、はい。パチュリー・ノーレッジです。貴方が聞いたことのある名で言うなら大都庶権菜です」

「紅美鈴です。パチュリーと一緒に活動しています」

「貴方たちどうしてそんなに堅苦しいのかしら？」

「二「あなたのせい（です）よ!!」三」

「そ、そうなのね。まあとりあえずこの子は藍。貴方たちも仲良くしてあげてね」

「ちよ、紫様、このお二人は有名な陰陽師の方なんですよね?!どうしてそんなに仲がよろしいのですか?」

「あらあら、藍にはわからないのねえ。この二人は人間ではないわよ」

「え」：そうだったんですか。初めて知りました」

「馬鹿ねえ、自分たちは妖怪ですって言いながら陰陽師する奴なんているわけないでしょうっ。」

「まあそれもそうですか。ではパチュリー様、美鈴様、これからよろしくお願いしますね、紫様を」

「ええ、任せておきなさい。というかあなたよく私の名前言えたわね」

「お二人の名前は既に紫様からお聞きしていたので、お恥ずかしながら練習をしていたのです。紫様の式に適應しているときにですが」

「貴方、まさかそのせいで適應するのが遅れたのかしら?」「うぐっ」

「まあいいじゃない。あれこれ詮索してもどうしようもないわよ」

それに私としてはすごくうれしいし。

「はあ、パチュリーがそういうのならもうこれ以上の詮索はやめておこうかしらね」

「助かりました、パチュリー様」「：何のことかわからないわね」「あらあら、うふふ」

「ここは白を切るしかないね。まあ二人の仲も良さそうで安心したよ。」

正体不明的第十六話

天の声 s i d e

最近京には不穏な空気が毎晩漂っている。二条天皇もこれに恐怖し、ついに寝込むまでになってしまった。天皇がそんな様子なので相手がどのような姿なのかを判明させた者には褒美をとらせる、とお触れを出すまでになった。

というのも、その妖怪はまさに正体不明といった感じなのである。

ある者は顔は猿、胴は狸、手足は虎で尻尾は蛇だったという。

またある者は背が虎、足は狸で尻尾は狐だったと言い、またある者は頭は猫、胴は鶏で尻尾は蛇だったと言う。

誰が見てもその妖怪の真の姿がどれなのかよくわからず、討伐しに行こうにも人々の言う姿が全く違うせいで対象を絞りにくいのである。

ここで白羽の矢が立ったのが長き時を生きた仙人と呼ばれる大陰陽師、大都庶樺菜と紅美鈴なのである。彼女らの智慧と力があれば退治できない妖怪はほとんどいないと噂されているため、京の人々はどう安泰だと考えたようである。

パチユリ s i d e

京の町で正体の分からない妖怪が毎晩出没するせいで、天皇が病になってしまったらしい。

そこで私たち二人にその妖怪の退治要請が来た。時は平安、妖怪は正体不明。この世界を知っている私が相手の正体をわからないはずがない。

妖怪の正体は鶴、名前は封獣ぬえ。姿かたちは恐らくどの人間が語っていたものでもない。正体不明がウリの妖怪の正体を知ってしまったているとはこれ如何に。

「美鈴、もうすぐ夜になるから出かける準備はしておきなさいよ」

「例の妖怪退治の件ですね。それでどのあたりに向かうつもりなのですか?」

「私の予想が正しければ清涼殿の鬼門、つまり丑寅（北東）あたりに出没するはずよ」

昔から人間が恐れるのは悪霊が来るとされる丑寅。人間の恐怖によって生まれた最強の種族である鬼があのような姿をしていることから容易に察することができる。

ぬえは人間を恐怖に陥れることを楽しむ妖怪。ならば京の人間が最も恐怖に感じるであろう場所、つまり天皇の御殿である清涼殿の丑寅にいるのは確実だろう。

「相手はきつと大妖怪。滅することは難しそうだから今回は封印させてもらおうわ」

「何か黒い霧がかかっていますね」

「間違いなく、これは京の町を恐怖に陥れた妖怪の仕業ね」

「その通り。この場所がよく分かったわね。たいていの人間はただり着けないと思っていたんだけど。」

「それで? 貴方たちは私を殺しに来た、ということでもいいのかしら?」

「私たちはあなたを封印しに来たのよ。殺しに来たのではないわ。私たち以外の陰陽師であればあなたを殺しに来ていたかもしれないけど。」

「ところであなた、人間たちの間では様々な姿で語られているけど実際どんな姿をしているの?」

「人間たちはどう言っているのかしら?」

「そうねえ。例えば、頭は猫、体は鶏、しっぽは蛇、とか、そんな感じ」

よ」

「何それ、気持ち悪いわね。流石にそんな化け物じみた姿じゃあないわよ」

「でもだからこそ想像だけで正体がわからないから恐れられているのではないのかしら」

「まあその通りなんだけどね。でも私は一度も人間の前に姿を現したことなくなんてないわよ。人々が勝手に想像して私の正体不明さをさらに高めてしまっているだけ。まったく愚かな奴らだよ。」

でもここまで来られた貴方たちには特別に私の姿を見せてあげる」
それは光栄ね。」

「私は封獣ぬえ、幾多の人々を恐怖に陥れる正体不明の妖怪よ！」

「自分で正体を明かしては駄目じゃない……………。私は大都庶樺菜、京の陰陽師としてあなたを封印させてもらうわ。意外に明るいかもしれない地の底にね！」

「貴方を葬って私の正体不明を取り戻すから別に構わないのよ。」

さあ、私の正体を知ってしまった者よ！正体不明の飛行物体だんまくに怯えて死ね!!」

弾幕戦になるのなら美鈴では分が悪い。

「美鈴、私が勝負をするからこそぞというときにこの札を彼女に投げなさい。それで封印ができるはずよ」 「ええ、負けないでくださいよ」

「行くよっー！」 『平安京の悪夢』

そういえばぬえってE x ボスだったね。ま、私もE x 中ボスなんだけどね。

かなりパターン化できる弾幕ではあるけど、完全耐久が来たか。平安京のきれいな区画を見立てているのかな？

考え事をしていたら遅れそうになるけど回避は一応間に合っている。運動していなかったらここで人生終わっていたね。

今は喘息は出る気配も全くない。これならこちらも存分に弾幕を張るのに集中できそうだ。

「こちらから行くわよ」

ごっこ用に調整していない私の最高傑作。長い修行と実験の果てにようやつと完成にまでこぎ着けた、五行のすべてを詰め込んだ大技をその身に受けてみよ！

『賢者の石』

美鈴 side

今回は珍しくパチュリーが戦うようだ。彼女の判断は正しい。私は格闘の方は得意だが、弾幕はかなり苦手で練習してもなかなか上手くならなかったからだ。

相手のぬえという子が放つ弾幕は密度が高いのに加えてかなりの美しさがある。でも相手の姿が見えないのはなぜだろうか。

実践経験の多いパチュリーでも避けるのは大変そうだし、当たったらパチュリーの身体ではその部位が吹き飛びかねない。見ているこつちが緊張してしまう。

彼女の言っていた好機はいつ訪れるだろうか。彼女がすべての弾幕を避けきった今か？

「こちらから行くわよ」

まだっばいね。彼女は一体どんな弾幕で応戦するのだろうか。

『賢者の石』

あれはっ！パチュリーの最高傑作として作られたもの?!まさか賢者の石を弾幕に適用してくるとは。あの弾幕にぬえが当たった時、その時にこれを投げようか。

「げっ、これは避けづらいわね。どうしましょうか?!って痛っ痛っ
いッ」

今だ！

ヒュンツ　ペタリ

「ごっ、これは?!力が入らない?」

「よくやったわ、美鈴。それは封印の札よ、地獄直行のね。安心してもいいわよ、恐らく九百年ももたないわ。ではまたいつか会いましょうね」

「まさかつ、貴方はただの人間ではなかったの?!そんなことg
.....!」

「.....行っちゃいましたねえ。行先は本当に地獄なんですか?」

「ええ、地獄なら悪いことをしようとしても鬼がいるから大丈夫だと思おうし、地上に封印してしまうと人間たちに解かれる恐れもあるから」

「結構色々なことを考えていたんですね」

「勿論よ。先の事を考えて行動するのが人の行動原理だから」

覚えておこう。

天の声 side

このようにしてパチュリーと美鈴は正体不明だった妖怪を無事に退治し、天皇の体調もみるみるうちに良くなっていったようである。

これまでに成してきたことに加え、天皇の不調を救ったこの功績により、彼女らの名前は陰陽師の間でも代々語り継がれ、多くの歴史書や物語の登場人物としても広く登場することになるのだが、それはまだ誰も知らない事である。

特に大都庶樺菜に関しては彼女が天皇の生命力を仙術により強化していたために天皇が重症になる前に回復できた、という話もよく町人の噂（真実）として流れていた。

とにかく鶴退治を成し遂げた二人にはかなりの額の金が与えられた。それは今はパチユリーの例の空間に突っ込んでいるらしい。それに加えて彼女らには京一の職人に作らせた、彼女らの名前入りの上質な着物が贈られた。彼女らがいかに京に貢献したかがよくわかる事例である。

そんなことがあつてから少しした頃、とある有名な歌人が亡くなつたというわさが流れ始めた。

『願わくば花の下にて春死なむその如月の望月の頃』

彼が作つたこの歌の通りに亡くなつたらしい。彼が亡くなつた後何故かその春、屋敷の桜の木の下で自害するものが後を絶たなくなつたそうだ。

自害的第十七話

パチユリー side

ぬえを封印してからしばらくたつと今度は西行法師が亡くなったという噂が京に流れ始めた。

彼が残した歌の通りに亡くなった後、この春は彼の屋敷では自殺志願者が後を絶たなかつたらしい。

早くいかないと桜が手に負えない程の力をつけてしまう、と思いつながら仕事も忙しくもう冬になり始めてしまった。もう既に桜の木は十分な力を蓄えてしまい消滅させることは不可能だろう。ならば封印するしかないのだが、正直に言うとうつろ子を媒体にしたくはない。それ以外の方法を何とかして見つけたいものではあるが、私の手に余ることであるため何もすることができない。

もし彼女を封印に使うのなら桜が満開になっていなければならぬはず。でも今のままならうつろ子が気に病んで満開にならないうちに亡くなってしまふかもしれない。

それだけは何としても避けなければならぬ。今は紫が何とかしているかもしれないけれど、紫も桜を封印するための術式を考える時間には欲しいはず。

だから私たちが彼女の話相手となることで彼女の心のある程度安定させ、何とか自殺を食い止めておかなければならぬ。

陰陽師は誰かのお抱えでやっていたというものでもないから京を出ていくのは簡単だと思う。家に置手紙さえ置いておけば。

「美鈴、京を出るわよ。明朝早くに」 「急ですが何か用事があるのですか?」

「西行の屋敷に行こうと思ってね」 「……………まさか自害するのですか?」

「そんなわけないじゃない。もう花も咲いていないから今行く人はいないと思うわよ。」

それに私が行く理由は恐らくそこに紫の友人がいるからよ。

そしてここを出たらもう陰陽師としての活動も終わりかもしれないわね」

「それには何かわけがあるのでしょいか」

「昔に紫と初めて会った時があつたでしょう？その時にした話を覚えていけば自ずと答えはわかるはずよ。たまには自分で考えることも生きる上では必要よ」

美鈴 side

紫さんに初めて会ったときは確か彼女の夢についてまず語られたはず。そのあとは確か

『でもこれから先私たちのような存在はどんどん消滅していつてしまふ。殺されるのではなく畏れられないほどに人間の価値観で説明され、忘れ去られることによつて』

『妖怪とは人間の畏れによつて具現する存在。そして人間たちはこれからあり得ない速度で進歩していくでしょう。』

そうなつたときに妖怪が生きていけないのは当然のことなのよ』
と言つていたつけ。私にとつては凄く衝撃的なことだつたからよく覚えている。そしてここから導き出せる答えは一つしかない。私たちの陰陽師としての活動がもう終わりかもしれない、というのは人間が強くなつていくのではなく私たちが弱くなつていつてしまふからだろう。

夜の町が明かりに彩られ美しいと感じていたがまさかあれが私たちの消滅の原因だとは思つていなかった。

確かに妖怪といえ夜闇の闇を恐れた人間の心が生み出したものが多い。それに恐れを感じなくなつてしまつた人間が増えれば増えるほど妖怪の数はどんどん減つていくことになつてしまふ、という事だつたのか。

それなら確かに私たちの陰陽師業はお終いだらう。パチュリーは

この家に文を置いて京を出ていくらしい。ちなみに内容を簡単に言う」と、

『私たちは途中で中断していた旅を今一度再開することにした。この家にはもう帰ってくることはないだろうから他の誰かが住んでもらっても、取り壊してもらってもどちらでも構わない。勝手に出て行ってしまい申し訳ない気持ちはあるが、私たちは大陸にいた時分から旅人であったのでどうか許していただきたい。この町のさらなる発展を願う』

というものだった。夜は陰陽師たちが警戒を強めているので朝早くに出ていくらしい。ここではかなりの好待遇を受けたので、それを手放すのは惜しい気もしたがずっとこれが続くわけもない。

それにパチュリーの話によると今はまだ仙人仙人ともてはやされていても、少しすると仙人さえも生きていくのは不可能な世の中になるらしいので、この辺りが潮時なのだろう。

パチュリーside

美鈴も了承してくれたので朝一でこの町を出る予定は変えずに行けそう。残す手紙はかなり雑なものだけれどこのくらいの方が後腐れもなく済むだろう。

西行の屋敷までどのくらいかかるかはわからないけれど着かないことはないだろうからのんびり行きましようかね。

旅を始めて二日、特に面白いことも無く襲ってくる木っ端妖怪を退治しながら歩き続けていると何か見られている感じがする。

「紫、いるんでしょう？頼みたいことがあるのだけれど」

「……やっぱり気づいていたのね。それで頼みたいことって何かしら？」

「西行の屋敷まで送ってくれないかしら。あなたならすぐでしょう」

「？」

「あら、幽々子に会いに行ってくれるのね。送るのは構わないけれど彼女に何かしないですよ。」

「とりあえず門の前にも送るわ」

え……………？門って確か……………「おい、貴様ら」

やっぱりね。この方がいらっしやいますよね。

「この屋敷に入れることはできぬ。桜が散つてようやく人間どもが来なくなつたと思つていたのに」

「あら、私たちは紫の友人としてここのお嬢様に会いに来ただけなのだけれど」

「ほう？紫殿のご友人方とな？ならばそれが真実か私が証明してやろう。」

「真実は眼では見えない、耳では聞こえない、真実は斬つて知るものである」

「戦闘狂多いね。知つてたけどさ。辛いけどやるしかないのかなあ。」

「私がお相手いたしましたしょう。剣には拳を、いざっ！」

美鈴が行つちやつたよ。まあ彼女なら斬られても死ぬことは無いだろうからね。

でも相手は雨も空気も時をも斬ることのできる剣士。油断していると致命傷を食らうかもしれない。

「なかなかやるな。ではこちらから仕掛けよう」『現世斬』

「危なっ！こちらもうかうかしていられませんね」『波山砲』

おお、まさに剣には拳を、って感じだね。美鈴かっこいいね。

「甘いな！これで決めるぞ」 『待宵反射衛星斬』

あつちやあ、決まったか。幸い彼女はどうかやら致命傷というわけではないようだ。治癒魔法かけておこう。ま、そんなものがなくても彼女自身の気の循環を使えば治りはかなり早くなるけど。

「うむ、斬って判った。幽々子様に合わせてやろう」

本当に斬って判るものなんだね。にしても妖忌強いわ。妖夢のラストワードを二枚目に切ってくるなんてね。剣筋も私の動体視力で見ることがかなわなかった。美鈴は見えていたようだけれど。

・
・
・

「あ、美鈴起きた？私が誰だかわかるかしら？」

「パチュリーでしょ。わかりますよそのくらい。それで私はどのくらい寝ていたのでしょうか？」

「およそ半日ってところかしらね。傷の調子はどうかしら？きちんと治っているかしら？」

「ええ。それでここはどこなのでしょう？見たことが無いのですが」

「ここは西行の屋敷よ」
「……………えつと貴方は？」

「私は西行寺幽々子、この屋敷の今の主ってところね。まあ屋敷といても使用人はあの妖忌しかいないのだけれど」

「それ以外はどうかされたのですか？まさか全員自害してしまったとか？」

「……………その通りよ。この屋敷にはもともとはたくさん使用人たちがいたの。でもみんな死んでしまったわ……………私のせいだね。」

私にはある能力があるの。『死に誘う程度の能力』。私にはこんな力は必要なかった。たくさんの人々がこの屋敷の桜の木の根元で死んでゆく様を見るのは決して気分のいいものではないから。

だから私も死んでしまおうかと考えて実行しようとしたのに紫はさせてはくれなかったわ。私のたった一人の友人である彼女にこんな顔をさせてしまうのは嫌だったからあれ以来してないけれどね。でも最近あの桜が強力な力を持ち始めているらしいの。理由はあまりにもたくさんの人間の魂を吸収してしまっただったかしら。あの桜が強くなるのもすべて元をたどれば私が原因にある。それが私には耐えられないわ」

「ねえ幽々子、これから毎日私たちがここに来てあなたの話し相手になってあげるわ。私たちがこれまでにしてきた事を話してあげる。だから簡単に死のうだなんて思わないようにしてくれないかしら？」

「……………そうね、もう少し生きてみることにするわ。だから毎日来てね。来ないと死んでしまうかも」

「フッフ。あらあら、それは大変ね。毎日忘れずに来ることにするわ」

天の声 side

パチュリーたちが幽々子のところへ通うようになって早半年。既に如月の上旬に入っている。もう桜が咲いてきた、という時期になって再び自殺志願者が屋敷に訪れるようになってきた。何故か、それは桜が力を持ったことで遂に桜が妖怪化し、自ら人を引き寄せるまでになつてしまったからだ。ここのところ幽々子の体調は優れない。パチュリーも何とか治療を試みようとしたが、特に病気というものでもなかったのでもできなかった。

そしてそんな日から数日、今夜は満月である。彼女は気づいていた。彼女を使えば桜の封印が可能なことを、それ以外の方法をまだ紫

が見つけれられていないことを。

『私には桜の花をたてまつれ わが後の世を人とぶらはば』

そんなことを書いた紙を机に残し

「皆ありがとうございます、さようなら」

彼女は逝ってしまった。皮肉にも美しく満開になった桜と大きな満月の下で。

「幽々子様っ!? ああ、これから私はどうすればいいのか………」

「妖忌、私たちもとても悲しいけれど落ち込んでいる暇はないわ。今すぐにこの桜、西行妖を幽々子の肉体を使って封印するわ。それしか方法はない、私たちの為にも、人々の為にも。」

西行妖は恐らく相当暴れるでしょう。死の力をばらまくかもしれないけれど何とか三人で私が封印しきるまでは耐えて頂戴」

「分かったわ。幽々子の魂まで桜に吸われないうちに早くして頂戴ね」

この後紫の封印が西行妖に施されるまで木の暴力に耐え続けるといふ苦行をパチュリーたちは三人で何とか成し遂げた。彼女らほどの力をもってしても苦行と感じるほどに西行妖は成長してしまっていたのである。

西行妖を封印した途端桜の花びらはすべて散り、幽々子の骸が埋められた場所の上には相当量の桜の花が舞った。これらもすべて紫たちの幽々子への弔いの結果だったのだろうか。

西行は作った歌のうち一首の通りに亡くなった。その娘である幽々子はその一首にさらにもう一首加えた亡くなり方をしたのだ。どこまでも悲劇な少女として彼女は生を終えてしまった。

彼女の犠牲とっていいのかわからないが、そのおかげで西行妖は猛威を振るうことはできなくなり、自殺志願者がこの屋敷に来るこ

とはすつかりなくなつた。今現在この屋敷にいるのは幽々子に仕えていた妖忌、彼女の友人の紫、パチュリー、美鈴の計四人である。彼女らは何かを待っている風にそわそわしている。閻魔からの情報が正しければ(というか閻魔が嘘を吐くはずが無いが)、今日彼女らが待ちわびていることが起こるはずなのだ。

そしてその時は訪れた。

「こんにちは皆さん。紫さんはご存じだと思いますが私は四季映姫、閻魔です」

「あら？ここは何処なのかしら。それに貴方たちはどなた？」

「私は魂魄妖忌、貴方様に仕える者でございます」という風に四人がそれぞれ自己紹介をした。

「私は西行寺幽々子、亡霊よ。これからよろしくね」

「それでは早速ですが西行寺幽々子、貴方には冥界の管理人になってもらいます。今の貴方なら靈魂を思うがままに操ることができません。それを使って転生待ちの霊たちの監視などを行ってもらいます。もともとそれが亡霊になる条件でしたから」

「別に構わないわよ、退屈しなさそうだし。でもその前に何か食べましょうよ。お腹が空いたわ」

彼女は亡霊となって復活した。能力は生前から少し変化した『死を操る程度の能力』となつた。彼女が復活した背景には紫が自身の苦手とする閻魔に直談判をする、ということもあつたのである。

彼女は生前を全く覚えてはいない。だから庭に生えている桜が毎年春になつても花が咲かないことに疑問を感じるようになるだろう。自分が封印の媒体になつたことを覚えてはいないのだから。

一応誰が埋められているのかをばかした上で封印した時の記録と

しては残してある。それ故に彼女は桜の木の根元に誰が埋まっていたのかは知る由もないのである。もし知ってしまったとき、彼女の存在は消えてしまうだろう。死ではなく、消滅によって。

無双的第十八話

パチユリー side

幽々子も無事(?)に亡霊となることができ、私の気持ちは大分スッキリした。後の異変につながるであろう記録は紫が次以降の参考にするからと残されてしまったが、これもこの世界の力が働いたとして仕方がないと思うべきなのだろう。あれからは京に戻ることも無く再び美鈴と旅を続けている。この旅を通じて私たちの名前は案外何処へ行っても通用することが分かった。寄る村寄る村であそこまで歓待されれば嫌でも理解できるってものだ。私たちはもう陰陽師ではなくなつたのに。

そんなことがあつてから早数百年、珍しく紫が私たちが気づくより前に出てきたからどんな緊急事態だと思つたらただ四日後に幽々子のところに来てほしい、というだけだったから拍子抜けしてしまつた。

でも四日あつても私たちだけでは冥界に行くことすらできないんだけど、と言つたら迎えに来てくれることになった。彼女は氣心の知れている相手には案外優しい。

幽香などからも散々胡散臭いと言われているがそれは仕方のないことだと思う。彼女は幽香をも負かしてしまうほどの強大な力を持つているが、彼女自身好戦的では無いので相手にはなめられないように立ち回る必要があるのだろう。まあその結果が「胡散臭すぎる」「信用できない」などの妖怪たちの評価に繋がってしまったのだけれど。

で、紫が迎えに来るまでに何の用事かを考えていたわけなのだけけれど、原作通りに行くのならそろそろあれを行う時期なのだろう。原作の数百年前、幽々子の屋敷に集合、これだけで何が行われるかは予想できる。私としては紫にそんなことはしてほしくないし、もし可能なのならば私は参加したくはない。痛いのは嫌なのでね。まあ無理な

んでしようけど。」

「ここに来てくれたこと感謝するわ。それでは私がここに集まってもらった理由をお話しします。その理由は必ずばり……………月の技術を盗みに行きたいからです」

「月の技術……………ですか。それはまたどうしてですか？」

「月には優れた技術がたくさんあります。それを地上に持ち帰りわがものとしてみたいです」

「私は反対ね。あなたは月の技術を甘く見すぎている。月は穢れを最も嫌うところ、そんなところの都に穢れの結晶が入り込む余地なんて無いわ。一寸もね」

「けれど私はもう既に大勢の妖怪にこの話はして了解を得ていますし、今更取り下げることなどできません。それに私自身興味があるのです」

「恐らく月に攻め入った段階で声をかけた妖怪の大半は死んでしまうでしょう。あなたにそうはなってほしくはない。仕方がないけれど私も一緒に行くわ」

月人は一度見ているしね。あの時はこちらのホームだったし相手にもかなりの油断があった。だけれど今回は違う。相手のホームでかつ相手は前回の兵士たちの比ではない。今回私たちが相手取らなければならぬのは八百万たぐさんではなく文字通りの八百万の神々である。月のリーダーの一員になってから四百年以上は経っているだろう。妖怪たちは穢れを嫌う月人たちにとって最も忌避すべき存在。さらにあの技術だ。紫だから安心というわけにはいかない。むしろ首謀者であるから余計に危ない。

「そんなに危ないのかしら。いくら技術が優れていようと人間であることには変わらないのではないの?」

「それが甘く見ているという事よ。あなたは普段は非常に深慮、でもごくたまに抜けていることがある。それはあなたのこれから非常にまずい事態を引き起こしかねない。あなたのその癖が治れば素晴らしい管理者になれるでしょうね。」

言っておくけれど月人は生命力も強い。そこらの人間たちとは比べ物にならない程に」

「忠告感謝するわ。そのうえで幽々子と美鈴はどうするのかしら?」

「私は行くわよ。死なないし」「私もパチュリーが行くのなら行きますよ」

「分かったわ。決行は次の十五夜。顕界に出てすぐにある湖から月に攻め入ることにしているわ」

「ここにお集まりいただきました妖怪の皆さま、本日は存分に暴れていただいても結構です。貴方たちの持っている力をえらそうな月の民に見せつけてやりましょう。では間もなく月への道が開けます。我こそはという方々から順にお通りください」

紫はああ言っているが入ったものから順にやられていくのは眼に見えている。気分は全然よくない。何せ今から妖怪の大量殺戮を見せつけられるのが分かっているからだ。こんなに楽しみでない月旅行はないだろうね。それにしても紫は一体いくらの妖怪を集めたんだい。ざっと見渡しただけでも千を超えている。

そんなことを考えていたらもう残っているのは私たち四人だけ。

もう行くしかないね。

「はあ、今から憂鬱だけれど行くしかないわね」

「うふふ、私は楽しみねえ。月の料理がどれほどのものなのか」

そつちかい幽々子さんよ。まあ早く月に飛び込もうか。

紫side

月への道を抜けた先はまさに地獄絵図だった。辺りには腕が取れたりして散らばった月人たちの死骸とそれをはるかに上回る数の妖怪の死骸。力の差は歴然だったのだろう。つ、誰か来たわ、隠れないと。

「ここに三人ほどいた形跡があるのですけどどこに隠れたのでしょうか」

三人？まさか幽々子は数に入れられていないのか？確かに彼女は浄土の存在。ならばこの地でも証拠を残さずに行動することができる……………？

「その岩の裏側にいますね？早く出てきた方がいいですよ」

「よく分かったわね。流石は月の頭脳の教え子、といったところかしらね」

「!?な、何故それを貴方が知っている?!」

「さて、何故かしらね。ここで私の提案する決闘にあなたが勝てたら教えてあげるわ。あなたたちもこの地で無用な殺生は避けたいでしょう?」

「構いませんが私があなたの提案する決闘を受け入れるのはいささか

不利ではないでしょうか？」

「あなたがすることは至極簡単だから安心なさい。相手を殺すことが無いように調整した弾幕をあなたに向かつて撃つからあなたはそれを全て避けきるか能力を使って回避する。私がある方から着想を得た命名決闘法よ。これならやったことのないあなたでも簡単にできるでしょう？本来なら両者が撃ち合うのがいいのだけれど長引くかもしれないからあなたは回避することだけに専念して頂戴」

「なるほど、確かにそれなら無駄な血を流さずに済みますし、対等に近い勝負ができて良さそうですね」

パチュリーが彼女の考えたであろう決闘の仕方でも相手の月人と勝負することになった。相手の強さは私でも測ることができない。まるで幾多もの神を相手にしているような気さえする。

これならパチュリーの忠告も納得できる。今回は無策で挑んだ私たちの負けだろうが、また必ずここに挑戦しましょう。

「では行くわよ」火符『アグニシャイン上級』

「ふむ、なかなかきれいなものですね。ここは神の力を見せてあげましょう。『火雷神』よ、七柱の兄弟を従えこの者に神の猛威を今再び見せつけよ！」

なるほどね、火雷神は一応火の神としても祭られているものね。

「流星は神の火ね。でも火雷神って本来は雷神ではなかったかしら？ああ、なるほど。雷を呼ぶ雨で私の弾幕を弱めたくえで火で押し切ったのね。

まあこの辺りにしておこうかしら。私がなぜあなたの事を知っていたのか教えてあげるわ」

「もういいのですか？まだ一つ目ですが」

「いいのよ。あなたの実力はかなり高そうだしそんなに長引かせる意味も無いもの。

続けるわよ。

まずあなたたち姉妹は月の頭脳、八意永琳の教え子。永琳は数百年前に輝夜を迎えに地上に下りたきり帰ってきておらず今現在彼女らがどこにいるのかはあなたたちはわからない。でも私は輝夜の迎えを撃退するのに一役買った後彼女らと交流をしているの。まあ再会できたのは二百年前くらいなのだけれど。それで彼女らから色々話は聞いていたわけなのよ」

「なるほど、そうだったのですね。それで八意様は今どこにいらっしやるのでしょうか」

「教えるわけがないわ。彼女が捕まるとは思えないけれどももう月に帰る気はさらさらなさそうだったしね。あなたが彼女に会いたいというのならば量子論を誰よりも早く理解したというあなたのお姉様に頼みなさい。

彼女なら月と地球を一瞬で行き来するなどたやすいでしょう？まああなたが地上に降りるといふ屈辱を受け入れるのならば、だけれどね」

「私にはまだその覚悟はありませんね。八意様が来てくださればいいのですが。」

ところで、ほかの方々はいつまで隠れていらっしやるおつもりですか？降伏してくれるのなら無用な争いは避けられますが」

出るしかないわよね。

「はいはい、ここよ。今回は私たちの負けよ。都に近づけもしなかったのだし。二人ももう出てきなさい」

「貴方が八雲紫ですね。倒した妖怪たちに特徴は聞いておきました。それにあと二人?!計三人ではなかったのですか？おかしい、なぜそのようなことが……………」

「わかったわ〜」 「わかりました」

「貴方はまさか幽霊?!……………だから穢れを感じなかったのでしょうか」

「あら失礼ね。私は亡霊、幽霊なんかと一緒にしないでほしいわね」
やはり幽々子はそこにいたという証拠を残さずに行動できる。これはなかなか使えそうね。

「そ、そうですか。ところでそろそろ帰っていただきたいのですが」

「駄目よ、私はごこの料理を楽しみにしてきたのにそれが食べられないとなったら来た意味がなくなるじゃない。せめて何か欲しいわ、お腹が空いたから」

「それなら月に生っているこの桃なんてどうかしら？美味しいわよ」

「え……………？お姉様？どうしてここに？ていうか何個持ってきたのですか……………」

「来ちゃいけなかったのかしら？なんだか楽しそうだったからつい見に来ちゃったわ。」

はい、桃」

「あら、美味しいわね。腹の足しにはならないけれど今回はこれで満足したことにおくわ」

箱詰めの桃って、幽々子……………。変わらないわね。はあ。

「それでは残った妖怪たちは地上に帰して私たちも撤収して構わない

かしら」

「構わないけれどさつき依姫と戦っていた子は残していつてくれないかしら。あと貴女も少しお話がしたいわね。」

貴方の方は割とすぐ終わると思うのだけれど、彼女には色々聞きたいことがあるから。ああ、心配しなくてもきちんと地上には送り届けるわよ。」

そうねえ、五日後くらいにその赤髪の子のところへ送るわ」

「……………きちんと彼女を送り届けてくださるのなら構いません。それでは美鈴と幽々子、あと少数の妖怪たちは先に帰しておくわ」

美鈴の様子が心配だけれど仕方ない。

パチユリーside

私一人月に残らされたんですが。ちなみに紫の用事は本当にすぐ終わった。十五分くらい別室に行った後で疲れ切った顔になりながら帰っていった。

私の事は月人たちに秘密にしてを綿月家に置いておくらしい。まあそうしないとうるさそうだしね。

彼女らによると秘密で家に誰かを匿うとか置いておくというのは数百年ぶりの事らしい。しかも前回は人工冬眠コールドスリープさせて三百年後の世界に送り返したとか。急に不安になってきた。

「それで、八意様は今も元気になさっているのかしら?」

「元気よ。まあ彼女なら不調になっても自分で薬を作るでしょうけれど」

「それもそうね。あゝ、私も八意様に会いたいわ〜」

「あなたの役職ならいつでも会いに行けるのではないの？」

「そうもいかないのよ。地上は穢れた地だから簡単に降りることはできないのよ。特に私たちのような立場になってしまっただけはね」

「依姫は覚悟ができていないと言っていたけれど……………」

「覚悟はできても月の連中がそれを許さないと思うわよ」

豊姫とはグダグダ話をすることが多い。依姫には軍についてのアドバイスをしておいた。月の民が自らの手を汚すのを嫌がるのなら、奴隷階級同然の玉兔たちに戦わせればいい、とか。

「お姉様、そろそろパチュリーさんを地上に送り返さなければなりません」

「あら、もうそんなに経っていたのね。もつとお話したかったわ」
「私と話をしたければ地上にいらっしやい。恐らくあなたたちが地上に来る頃には永琳たちも隠れ住むのはやめているでしょうが」

「私たちが八意様に会いに行ける日は来るのかしら」

「ええ、きつとね。じゃあ送ってもらっていいかしら」

「分かったわ。もし地上に行けたらまた会いましょうね」

じゃあね。存外楽しめたよ。

・
・
・

「おっとと、お帰りなさいですねパチュリー。そろそろだと思っていましたよ」

「ええ、ただいま。一人にして申し訳なかったわね。」

それで、紫たちはどうしているのかしら?」

「幽々子さんは月の桃を一日十個ほど大事に食べているようです」

「……………それ大事に食べていると言えるのだろうか。まあ幽々子にしてはって感じね。というか多すぎでしょ。確かに箱詰めされていたけども。」

「紫さんは彼女の夢の完成に向けて最後の詰めをしているようです
ね」

もうそんな時期なのか。幻想郷自体の完成は1500年前後だったっけ。結界張るのはまだ先だろうけれど。私が欧州に帰る日もそんなに遠くはないね。

「というか大量に持ってきた喘息の薬がもう底を突きかけているから調達しないといけないのだけれど原料はあちらにあるからね、戻らざるを得ない。」

「ねえ美鈴、私そろそろ日本を出て大陸の西の方に戻ってみようかと考えているのだけれど。あなたも一緒に来るかしら?」

「愚問ですね、パチュリー。そうと決まれば早速勉強です! いやく久しぶりですね、言語の勉強も」

「そうね。では美鈴があちらの言語を完璧に使えるようになったらあちらに旅をしましょうか」

それに今回はあの退屈な砂漠越えもする必要がない。直接あつちに向かってくれる船が最近よく出入りしているらしいからそれに潜り込んでしまえばいいだけ。なんて楽な時代になったんでしよう。

「まずは美鈴に言語を教えなければならぬ。そんな今時分風な欧州の本があつたかな、と思っっていたけれど、何故か私の謎空間は本が増えていくんだよね。紅魔の大図書館だよ。」

まあそれのおかげで旅の途中も全く本に困らなかつただけけれど。美鈴に教えるのは今のルーマニア語。行く場所は決めているからね。

オマケ；月面戦争

天の声 s i d e

紫の発言により自分の力に自信を持っている者たちが一斉に湖の月に飛び込んでいった。

今夜は満月であるため妖怪の力はより一層強くなっている。故に普段は腕に自慢があるわけでもない妖怪も我先にと飛び込んでいった。向かう先は己にとっての地獄ともいえる場所になるとも知らずに。

ある妖怪 s i d e

俺は普段は特に腕に自信があるわけではない。たまに通りすがる人間を喰っていればそれで満足だと思っていた。

ある日俺たちの住む場所の頭領ともいえる妖怪のもとにある話が入った。なんでも妖怪で徒党を組んで月を侵略するつもりらしい。月に侵略ってなんだ。月に人でも住んでいるのか？

頭領といえる妖怪はこの地の妖怪たちを捨て駒として扱うのではなくきちんと個人(個妖)として扱ってくれる。そうでなければこの地を出ていく者も少なからずいたに違いない。

とにかくそんな頭領は俺たちにも選択をさせてくれた。すなわち月に攻め入るか、ここに残るか、だ。ちなみに頭領は攻め入るらしい。最近腕がなまりそうだからとか何とか。

俺は初めは行くつもりなんて全くなかったし、攻め入るのなら死の覚悟もしなければならぬ。そんなものとは無縁な生活で満足していたのだからたとえば行かないのが自分だけでも、俺はここに残るだろうと考えていた。

それから二日後くらいだったか、俺は生まれて初めて運命の分岐というものを幻視したような気がする。近隣の妖怪たちは当然のごとく参加するらしい。その中でも俺と比較的仲の良かった奴から『お前

も勿論参加するよな』と言われて『しない』ときっぱり言える勇気が俺には無かった。

そこから運命の歯車は勝手に加速しながら回りだしてしまったかのようにだった。俺にこうなる運命が見えていたのならもつと別の方向に転んでいたのかもしれない。だが俺は運命を見るところか能力すら持っていない。こうなることは決まっていたのだろう、悲しいことに。

結局この地の妖怪は全員参加ということになった。俺たちだけで数百はいるだろう。あんな小さな月に本当に人など住んでいるのだろうか、精々虫程度の大きさの生き物しか住めそうにないのに。

決行は月の綺麗な夜で妖怪たちが最も力をつける夜だった。普段は大人しい俺でさえできないことはないような気さえした。それも含めてあの首謀者の妖怪の思惑通りなのだとしたらどれほどまでに恐ろしい妖怪だろうか。

もう既に俺の仲間たちのうち大半は月に行ってしまった。あとその場に残っていたのは首謀者妖怪を含んでも数十だった。俺はついに行く決心と生まれて初めて逝く覚悟をした。

何とも不思議な空間を通り抜けた先はちつぽけな球体ではなかった。確かに向こうの方は丸くなっているが景色は地上と大差ないように見えた。生えている木が桃の木ばかりであることを除けば、海があることさえ変わりはない。

戦闘をしているのか少しうるさいと思っただけに行ってみるとそこは血の海だった。人間の血ではない。もちろん人間の血もあるにはあるが、血の海を作っているのは同族たち、つまりはこの地に攻め込んできた妖怪たちの血だった。

妖怪は死んでしばらくすると跡形もなく消滅するという。見たことが無いので本当かどうかは知らないが。つまりここに血の海ができていてという事は死んでからまだそんなに時間が経過していないという事でもある。

つい先ほどまで生きていた存在、俺は今まで人間を喰うにあたってこのような感情を抱いたことはなかったがその時初めて“死”というものを実感した。そして同時に俺の覚悟はまだまだだと思わざるを得ない。

こんなに多くの妖怪が攻めるのに負けるはずはない、と心の奥底で考えていた自分がいた。頭領がいるなら俺たちの出番はないだろう、と思っっている自分がいた。

それがこの状況だ。俺は本当に救えない奴だったのかと自嘲したくなるほどに覚悟が絶対的に足りていなかったのだ。

運命は俺を捕らえた。

俺が生き残る未来は無い、という事がはつきりと理解できた。

もう行くしかなかった。俺にはもう未来がないのだから。

月の人間と思われる奴らは不思議な武器を使っていた。今まで見たことも無いような形、聞いたことも無い爆音。それにあの人間たちの武器からは嫌な感じがした。まるで俺たちの真逆であるような、そんな感じが。

また断末魔が響く。もはや妖怪のものなのか人間のものなのか區別がつかなくなってしまうた。

月の人間たちは妖怪相手にも全く怖気づかない。ただ排除するためだけに戦っているような気がした。あまりに人間的では無いので俺はむしろ彼らに恐怖した。

そして今、俺はついに戦場に入った。ここは戦場、一瞬の油断が命取りだ。特にあの武器からの攻撃を食らうのは拙い、と考えていた。それが油断になっていた。

敵の刀が俺を切ろうとしてきた。俺はとつさに身体を捻る。「ほう、今のを避けますか」とか感心している敵に俺は蹴りを仕掛ける。こんな俺でも妖怪の端くれだ、当たれば致命傷にはなるだろう。

しかし相手の人間は女だというのに俺の蹴りを手で止めてきやがった。

「さて、貴方たちを月に送り込んだ愚か者はいったい誰なんですか？」
余裕そうな顔で話してきやがった。妖怪としてこれ程までの屈辱は無いだろう。

「確か八雲紫とかいう妖怪だ。胡散くせえやつだよ」

「答えていただいてありがとうございます。」

それで貴方をここで滅すか、無用な殺生は嫌いですので見逃すこともやぶさかではありませんが」

ここで見逃すという選択肢もあるわけなのか。ふむ、では答えはこうしようか

「ならお言葉に甘えて……………」

あんたの本気の方で俺を滅していただこうか。

どうせ見逃されてもそこらの兵にやられるのは眼に見えている。どうせ死ぬのなら強者にやられた方が俺としてもスッキリするんでね」

「……………仕方ありません。では神の方で貴方を黄泉に送って差し上げましょう。」

『伊豆能売』よ、穢れを祓え！」

あれが神の姿なのか。巫女っぽいがやけに眩しいものだ。しかし有象無象ではなくこのような存在に殺されるのならこの地に来た甲斐もあつたのかもしれないな。

月面戦争は最終的に紫の降参という事で幕が下りたが、それに至るまでに集めた妖怪のほとんどが犠牲になったことは妖怪にとっては大きな痛手になるのかもしれない。

この事態を引き起こした紫は不本意なことだが月では知らない者がいなくなるほどに名が広まり、地上でも帰ることができた少数の妖怪たちによりかなり有名になってしまった。

月面戦争が終わり、ようやく彼女の夢『幻想郷』が形になりつつある頃、彼女のもとにパチュリーが訪れて美鈴が言語を覚えたら欧州に帰るということを伝えた。紫にとってパチュリーと美鈴は完成したはず見せたい知り合いのうちの二人だったが、仕方のないことだと諦めたらしい。

「またいつか見に来て頂戴よ」

「私たちがこの世界に住めなくなった時には行くわよ」

なおいつ頃になるかはパチュリーしか知らない事であるが。

小悪魔的第十九話

パチユリィside

美鈴の言語の勉強は非常に順調に進んでいる。まだ二年くらいしかたっていないのにルーマニア語は完璧に近い。

で、思い出したのだけれど、そういえばレミアアって英語で手紙書いてなかったっけ？

そんなわけで今は英語も教えている。呑み込みが早いから教え甲斐があるってもんよね。早ければあと二年もすれば旅立てるだろう。日本での生活はとても楽しかったから出ていくのは辛いけど、どうせまた戻ってくることになるのだから別れを惜しむ必要もあまりない。妖怪の世界では数百年会わないなんてざらだから。

美鈴が英語もかなり流暢に話すことができるようになった。最近は昔のように英語だけで一日生活したり、ルーマニア語だけで生活したりしている。

たまに混ざっているときもあるけれど許容範囲内だろうと思う。

「そろそろ美鈴も大丈夫そうね。三日後に欧州に向かうことにしましょうか」

「ようやく許容範囲に入ったんですね。ここまで長かったです」

「あんた数千年生きてきたんでしようよ。ここまではたったの四年じゃない。大げさねえ」

「楽しみのない数千年と楽しみなことのある四年だったらどちらが長く感じるのか、ですよ」

そういうものなのかなあ。かれこれ千年ほどは生きてきたけれどまだわからない感情かな。

「さあ、いよいよ出発ですね！今回はどういう風にして大陸に渡るのですか？」

「前と同じく船よ。それに直接欧州に着くやつ。」

「……安心していいわよ。今の船はかなり丈夫になって嵐なんかでは滅多に沈むことはないから」

「それなら良かったです。もう前のようなことは嫌ですからね」

「先ず目指すは長崎かな。あそこなら外来船もたくさん泊まっているでしょうから変装を解いても大丈夫そうだし。」

「髪色はごまかすよ？流石にこれでは疑われるからね。服はどうしようかなあ、結構二条天皇から贈られたこの着物気に入っているんだけど、欧州では浮くこと間違いなしだからねえ。」

「やっぱり全部ごまかしておくか。面倒だし。」

「さて、先ずは肥前を目指すわよ。外国の船がたくさん泊まっているから」

「わかりました。また道中で村などに寄って行くんですか？」

「よほど困っていきそうなら寄っていくわ。それ以外は基本的に寄るつもりはないわね」

「そうですね、まあいちいち歓待されても旅が長引くだけですもんね」
「その通りだよ美鈴。よくわかってるじゃないのよ。」

「ようやく港に着いた。困っている村を助けながら来たなら二週間くらいかかった。」

「でもお目当ての船はすぐに見つかった。まあポルトガルからルーミアもかなり遠いんだけど。」

「美鈴、認識障害をかけて忍び込むからちよつとこつちに来て頂戴」

「今回もかけるんですね。まあそれが一番楽ですからね」

「どうやらこの船はもうすぐ出港するようだ。この船旅も地味に長いだけだ。」

日本を出発してから数か月、ようやくルーマニア、現ワラキア公国にたどり着いた。本当に長かったし、妖怪たちも鬱陶しかった。

美鈴は見慣れない建物や服装に興味津々であるようだ。ちなみに道中あまりにも退屈だったから喘息用の薬草はもう採取してある。材料さえあれば昔一度作ったきりの薬だって調合は可能だ。

「どうやらちよつと前にヴラド三世が亡くなったらしい。レミリアが生まれるのももうすぐだろう。」

この辺りの妖怪たちは皆周辺を支配している吸血鬼の庇護のもと生活しているらしい。その代わりにこの地に来た人間を渡しているのだとか。

御恩と奉公みたいな関係がこんなところにもあったとは驚きだね。とりあえずその吸血鬼の館とやらに行ってみましようか。

……………紅い。

「紅いですね。目に優しくなさそうです」

「そうですね、とりあえずお邪魔してみましようか」

門に誰もいないので勝手に入らせていただくことにしようか。

「お邪魔します。……………誰かいのかしらね」

「……………いや、誰か近づいてきていますね。気配の消し方が雑ですがかなり速いですね」

気配の消し方を美鈴と比べたらいかんでしようよ。相手が可哀そう。

「貴様ら何者だ？襲撃者にしては数が少なすぎるし、ただの人間ならこの館の門は重すぎて簡単に入れないはずだが」

あつれえ？もしかして私たちの変装に気づいていないのかしら。

「私たちは人間ではないもの。私は魔法使いのパチュリー・ノーレッジ」

この自己紹介久しぶりだわ。

「私は訳あつて種族は明かせませんがとある妖怪の紅美鈴です」

美鈴の種族に関しては未だにわからない。いつ聞いてもはぐらかされるから恐らく永遠に教えてはくれないでしょうね。

「…嘘は吐いていないようだな。しかし魔法使いのノーレッジといえばつい百年ほど前に実験に失敗したとかで二人が亡くなっていたぞ。その娘か何かかな？」

「……………ええ、おそらくその二人の娘です。しかし魔法使いは親元を完全に離れて俗世に興味を持たずに生きていく存在です。故に今初めて聞いたのにもかかわらず私の中では二人の死は仕方のないことだと割り切られてしまっているのです」

「お前は強い娘なのだな」「両親の死にそこまでの悲しみを覚えない点は薄情とも言えますがね」

これが魔法使いと人間の違いなのか。私に人間の心が残っているからこそわずかでも悲しみの感情が芽生えているのかもしれないけれど。

「……存じの通り私はこの館、紅魔館の現当主の吸血鬼だ。スカーレット卿と呼ばれている。」

実はな、そろそろ私たちにも子供ができる予定なのだ。お前は魔法使いだから知識量は並ではないだろう？そこでだ、この館に住まわせてやるから教育係になつてはくれんだろうか」

「私は構いませんが私の連れはどうなさるおつもりで？」

この吸血鬼、スカーレット卿は実年齢こそ大して変わらないだろうが一応雇用主だ。失礼なことはいない方がいいだろう。ということ敬語っぽいものは使っておこう。

「ふむ、見たところかなり強そうだからな。……………この館の門番にでもなるか？」

そうすれば我が子も安心してすごせるだろうしな」

結構親バカな吸血鬼なのね。でも感情表現がストレートな人は嫌いじゃない。別に好きになることもないけれど。

「わかりました、それでいつ門番をすればいいのでしょうか？」

「私たちが休む昼間にしてもらえば良い。では明日から頼む。

それで魔法使いの方だがこの館の地下に近い一室をお前の部屋として提供しよう。どのように使ってもらっても構わない」

この館の内部がまだ見た目通りの大ききでこれなのならばわざわざ空間拡張する必要もないんじゃないだろうか。

「わかりました。それではお子さんを私につけなくなった時に声をかけてください」

「ああ、それでは君たち二人の部屋に案内しよう。執事長！来なさい」

「ここに。……………お二人の部屋へのご案内でよろしいのでしょうか？」

ほう、何も聞かずに雰囲気から呼ばれた理由を察することができるのか。かなり訓練されていそうだね。何の妖怪なのかはわからないけれど。

「その通りだ。ではよろしくな、私は眠いのでね」

そういえば今は昼間だったね。だから襲撃者と間違われたのかも

ね。

「こちらの部屋でございます。二人用という事でかなりの大きさの部屋となっておりますがどうぞご自由にお使いください」

「これで二人用はないでしょう。十人以上は暮らせそうなのだけれど」

「どうかかなりの数の本棚が置いてあるし元々は図書館のようなものだったのだろう。」

「ですがご主人様から仰せつかったのはこの部屋です。では美鈴様は明日から、パチュリー様はお嬢様がお生まれになったらよろしくお願いいたしますね」

「私も美鈴もこの館に雇われている身、つまり貴方と立場は変わらないのだからもう少し堅苦しさを抜けないかしら？」

「できる限り努力はしますが慣れるまではご勘弁ください」

「わかったわ、ではこれからよろしくね」

「さて、先ずは私の空間に入れていた本を選別しながら出しましょうか。幸い置いてある本棚のどれにも埃はついていないようだしそこに入れていきましょう」

「パチュリーの本ってかなりの数ありませんでしたっけ。今日中に終わるんですか？」

「終わらなければ明日以降も私は時間があるから一人でやっておくれ。さ、始めるわよ」

今まで勝手に増えてきた本のうち気づいたものには既に防火、防水 e t c : : をかけているから手間はそこまでかからない。

空間から本を出すのもそれだけの目的で作った魔法を使えば問題なくスムーズに進められる。

モデルは世界中で大ヒットした某魔法界のお話の呼び寄せ呪文だけれど、この世界とは完全に別に存在する上に私は杖を使わないからただの似た魔法になってしまった。

そんなこんなで美鈴と二人がかりで整理した一日目はおよそ半分の本を棚に移動できた。全体の六分の一の本は貴重な資料だったりかなり高位の魔法使いの書いた魔導書の原本だったりするので空間に残しておくことにしている。

あと移す本は三分の一、夜通しやれば遅くとも明日には終わりそうかな。

既に本棚はかなり本で埋まってきた。こうなったら本の管理が大変だ。司書雇おうかな。

ちようど夜になったし雇ってもいいかスカーレット卿に聞いてみようか。

「おはようございますスカーレット卿。少しお聞きしたいことがあるのですがよろしいですか？」

「ああおはよう。それで聞きたいこととは何だね？」

「実は本の管理をする司書として低級の悪魔を召喚しようと思っっているのですが」

「そんなことなら構わんよ。悪魔の館に悪魔が一人増えても大して変わらないだろうからな」

「ありがとうございます、では「ああ、ちよつと待ちたまえ」なんでしようっ。」

「ついでだから私の妻にも会っておきなさい。これから色々関わることになるだろうからな」

「わかりました。どこにいらつしやるのです？」

「この館の療養室だよ。もうすぐ子が生まれると言っていたら？」

もうすぐってマジのもうすぐだったのね。妖怪単位だとあと五年くらいあると思っていた。

「ああ、なるほど。そういう事ですね」

「入るぞ」 「どうぞ」

「お邪魔します。おはようございます夫人。あなた方のお子さんの教育係として昨日この館に雇われました、パチュリー・ノーレッジです。以後お見知りおきを」

「おはよう。貴方が子供の教育をしてくれるのね。ノーレッジ家の者なら安心かしらね」

ノーレッジ家ってそんなに有名なの？全然知らなかったのだけだ。

「もうすぐ生まれるわよ。少なくとも一週間以内には。いつ生まれるのか魔法使いの貴方ならわかるのかしら？」

「ええ、もちろんです」ただし魔法ではなく仙術を使わせてもらうけど。

「……………なるほどわかりました。二日後の夜ですね。性別も一応わかりましたがお伝えしておきましょうか？」

「お願いするわ。名前を考える時間が欲しいもの」

「女の子ですね。健康状態は非常に良好、翼も問題なさそうですね」

「あら、そんなことまでわかるのね。流石はノーレッジってところなのかしら」

「協力感謝するぞ。では私たちは名前でも考えているから君は司書を雇うなりなんなりしてくれたまえ。」

まだ慣れていないだろうから館内を自由に散策してもらっても構わんぞ」

「はい、ではまた二日後にお会いしましょう」

この館広いから道を覚えていても戻ってくるまでに多分な時間がかかる。

それじゃあ先ずは本を移し終わることが第一目標ね。その次が悪魔召喚。できれば明日の昼間には召喚したいからちよつと本気を出しますかね。

本気を出せば百冊強は同時に操って本棚にしまうことができる。でもこれ溜まる疲労が桁違いなうえに喘息の危険はいつもよりかなり高くなる。身体に負担をかけるから。

美鈴を起こさないように静かにやっていたけれど、美鈴が起きるころにはもう残り十分の一くらいにはなっていた。

美鈴が初仕事に行った。残りはついに百冊くらいになった。悪魔召喚の本は手元に置いておくとして、あと一回で終わらせられるね。

終わったけれど悪魔召喚をするには体力が足りない。少し美鈴のところに行つて休憩しつつ気を練ってもらおうかな。

「あれ、どうしたのですか？パチュリー」「ちよつと疲れたからね、休憩」

????????????????????

「はっ、寝てしまっていたわ。今何時ごろ？」

「そうですねえ、正午過ぎくらいですかね」

何か寝たら体調がかなり良くなっているのだけれど。あれ？確か前にもこんなことが……………」

「すこぶる体調がよくなったのだけれどあなたのおかげかしら？」

「私も少しは気を練りましたがほとんどは自己回復だと思えますよ」

普段寝ないからたまに寝ると調子が良くなるのかな？

まあ体調も良くなったし悪魔召喚やってみようか。

「それでは私は戻るわ。寝ちゃ駄目よ」

「寝るわけじゃないですよ。常に身体を動かしていますし」

美鈴が居眠り門番じゃない、だと？まあ知っていたけど。

悪魔は通常術者のレベルに合わせたものが出てくる。しかしあえて自分より弱い悪魔を召還することで対価はかなり少なくてできる。

悪魔の対価といえは魂だろうか？そんなもの払えないし、低級悪魔の方が反逆されても対処しやすいからね。

ってことでやってしましましょうか。魔法陣はかなり複雑だが間違えなければ大丈夫だ。

「#&\$&#(%)&||)*<?&#!#"\$%&~%##」

もはや何語なんだ。発音できる自分が怖いわ、とか思っていたら何か魔法陣が光り出した。どうやらちゃんと成功していたみたいだ。

「はっ、初めまして。私を召喚したのは貴方様ですか？」

「ええ、そうよ。初めまして、私はパチュリー・ノーレッジよ。あなたはっ。」

「私はかなり下級の存在ですので名前などありません。小悪魔、とても呼んでいただければ」

ていうかこの時代に小悪魔っていたんだね。何も考えずに召喚したけれど原作通りの小悪魔が出てきてくれて良かったわ。

「小悪魔、ね。じゃあ『こあ』でいいわね。そっちの方が可愛らしいし。それで対価は何を望むの?」

「そういえば悪魔召喚には対価があるのでしたっけ。対価によっては力が変わることもあるかもしれませんが、私は下級の者ですので貴方様のいいと思うもので結構ですよ」

「そうねえ、……………ねえこあ、あなた強くなりたくはないかしら?」

「それはなれるものならなってみたいですがってまさか?!」

「ふっふっふ。貴方にはこれを対価として与えましょう」

「凄い魔力を感じるのですがこれは何なのですか?」

「それはね、私が一番初めに完成させた賢者の石。普段はそれを複製したものを使っているけれど魔力の質は桁違いよ。それをあげるから頑張つて強くなりなさいな」

物の性能や質は何でもオリジナルが最も良い。賢者の石のオリジナルは複製とは圧倒的な差がある。私はもうオリジナルを使うことは無いでしょうから対価としてこあにあげたというわけだ。

「そんなものを……………。ありがとうございます。この私精一杯努力いたします」

「あ、でも普段の仕事はこの大図書館の司書ね。私が外に出かけるときには護衛としてついてきてもらうつもりだけれど」

あ、こあがずっこけた。

紅魔的第二十話

小悪魔 side

私はパチユリー様に召喚されるまではあまりに弱い力のせいで良い暮らしはできていなかった。悪魔としてこれではだめだと思っていた時期もあったけれど、結局大して変わらなかった。

たいていの場合悪魔は自分の護衛や戦力として召喚されるので、私のような力のない悪魔は基本的に召喚されない。召喚されたとしても対価が小さいからだとかそんな理由なので扱いはひどいものが多い。

私は召喚された時に何よりもそれを恐れた。召喚されたことへの喜びすら感じ得なかった。何故ならパチユリー様はひどいことをしなすような見た目ではあったものの、魔法使いとしての力は数いる魔法に長けた魔界人の中でもかなり上位に入るだろう、というほどだったからだ。

力の強い存在に召喚されて良いことはない、というのを契約が切れて戻ってきた仲間がこぼしていたから私は不運だと思わざるを得なかった。

でも主人になるパチユリー様は私に優しく接してくれた上に彼女が初めに完成させたという賢者の石を対価としてくださった。どうやら私に強くなってもらいたいらしい。低級の悪魔にとっては規格外の対価、私の身体がもつのか心配だ。

それで強くなって私にしてほしいことはこの図書館の司書らしい。あとたまに護衛。流石に予想外だった。もつと何かしら強くないとできない事かと思っていた、というパチユリー様に

「もしそうなのならば初めからもっと上級の悪魔を召喚しているわ」と言われた。まあそれもそうなのか。

今は図書館を利用する人もいないし、昨日本棚に本を入れたばかりらしいので掃除なんかもする必要がない。何もすることが無いのでパチユリー様に勧められた美鈴さんと武道の練習をすることにした。

美鈴さんは元々長生きなせいでかなり強いのにそれに武道を組み合わせているから勝てる気がしない。彼女によると前に住んでいた場所では負けることも多かったが、ここで負けていないのはこちらの妖怪が皆腑抜けてしまっているからだとか。あつちにはあつただけで戦意を喪失したほどの強者もいたらしい。

パチュリー様は、美鈴さんが負けていたのは単純に相手が規格外ばかりだったからだという。どちらが正しいのかはわからないけど、あの美鈴さんを見てみるとパチュリー様が正しい気がしてならない。でも見ただけで戦意を喪失するような化け物が存在することは確からしい。

きつと人間の二倍以上の身長で毛むくじやらかな恐ろしい化け物なんだろう。会いたくないなあ。

今夜はパチュリー様は当主の妻の出産に立ち会うらしい。なんでも感覚を麻痺させる魔法を使って出産時の痛みを和らげる役なんだとか。私にはよくわからない感覚ではあるけれど出産に伴う痛みって相当なものらしい。

だからパチュリー様は大役を担っているというわけらしい。この館に来てからまだ三日目くらいと聞いたのに随分と腕を信用されているみたいだ。やはりパチュリー様は凄い。

パチュリーside

赤ん坊の出産に立ち会うのは実は何回目かわからないくらいだ。日本にいたときも仙術魔法を頼ってやってきた人たちの出産に立ち会った。

だから人間相手ならかなりうまくやる自信がある。でも今回は妖怪。しかも魔力が多い吸血鬼だ。下手をすれば相手の魔力と私の魔力が拒絶反応を起こして痛みを和らげるところの話ではなくなってしまう。

故に今回ばかりは魔法仙術を使って和らげることにしよう。仙術はか

なり万能。覚えていて良かったと思う瞬間はかなり多い。使いすぎないようには気を付けているけれど。

「では今から術をかけます。奇妙な感覚があると思いますが我慢してくださいね」

吸血鬼に陣痛があるのかはわからない、でも念のため強めにかけておくべきだろう。

「!!うっ、生まれそうだわ!」

遂に来たか、やはり仙術で調べたとおりに今夜来てくれた。ちなみに今この部屋にいるのは夫人と私だけ。スカーレット卿は扉の前で待機してもらっている。

「辛いとは思いますが耐えてくださいね。……………逆子でもないし大丈夫そうですね」

おお、泣いてる泣いてる。これで肺を膨らませているんだっけ。覚えていないけれど。

「元気な子ですね。抱いてやってください。

スカーレット卿ももう入っていただいて結構ですよ「わ、我が子はその子か」……………」

速いねえ、吸血鬼は。

「ええ、とても可愛らしいわ。千年もしたら必ず絶世の美女になれるわ」

五百年後はまだ小さな女の子だけだね。

「うむうむ、男の子ではなかったのが少しばかり残念ではあるが我が子には変わりはない。

お前の名前はレミリアだ。私と妻とで二日間考えた名だぞ」

「いい名前だと思いますよ」

ちゃんとレミリアで良かったわ。とりあえず一安心かな。あとは

五年後、彼女が生まれるときにどうなるか、だね。

彼女を護るために家族が結束するのか、隔離するために崩壊するのか。今は何とも言えない。

レミリア side

私はもう五歳になったというところだ。スカーレット家では英才教育と名付けて二歳頃から教育を始める。人間ならば英才教育といっても精々三歳くらいから始めるものだ、とは私の教育係を務めるパチュリーの言い分だ。ただでさえ知識の吸収が早いらしいこの時期にもう三年以上も勉強しているのだ。更に教育係がパチュリーだから私の知能はほかの同い年の吸血鬼とは比べるまでもないらしい。

パチュリーは最初はかしこまって私に接していたけどやめてくれと言ったら気安く接してくれるようになった。私としてはそちらの方がありがたい。

勉強は好きではないけどパチュリーはわかりやすく教えてくれるし、どんな疑問にも答えてくれる。パチュリーは本当に何でも知っているのね、という彼女は

「私の知り合いには私なんかとは比べ物にならない程の知識人が一人と私よりはるかに優れた頭脳を持つのが一人いるわよ」

と言う。パチュリーが比べ物にならないとは驚きだ。世界は広い物なんだと理解させられた。その二人は教えるのが上手いの？と聞くと彼女はおかしそうに

「知識人の方はとても上手よ。ある姫君の教育係をしていたくらいだから。でももう一人の方は駄目ね。彼女は人にもものを教える気が無いもの」

と言った。彼女がそんなに楽しそうに語る人に私もあつてみたいが、どうやら住んでいるのはかなり東の方で会いに行くのにも海を渡らなければならぬらしい。私は海を渡ることができないので会いに行くことはできないというわけだ。

パチュリーの他に紅魔館の門番である美鈴も彼女らとは知り合いであるらしい。この館に来るまではそちらに住んでいたみたいだ。聞くところによると空気がとても澄んでいて、早朝に山の上から見る日の出は絶景らしい。私は日の出も見れないけど。

小悪魔はこの館に来てから召喚されたらしいのでその人たちの事は聞いたことしかないらしい。

今日の夜食はステーキらしい。パチュリーは人肉の原型が無ければ料理はギリギリできるけれど食べるのは無理、というのでテーブルにはついていない。壁の方で美鈴と談笑している。

美鈴も食事に人肉はちよつと、という事で食べていない。彼女らは何も食べなくても生きていくことができるらしい。私のように小食というわけではなく完全に食を絶てるのだとか。

因みに小悪魔は普通に食べている。魂の方が良いとか物騒なことを言っているが。

そんな夜食の途中でお母様から重大発表があつた。なんと私に弟か妹かができるらしい。性別はパチュリーに任せればすぐにわかるし、私の時はしてもらつたらしいけど今回は生まれるまでのお楽しみという事になっているらしい。

パチュリーは子供ができたと聞いたとたんに関心考へ始めた。気づいているのもどうやら私だけだしそんなに重要なことではないのかもしれない。聞いたところではぐらかされるのがいいところだろうし。

あれから数か月ほど経つた時期に急にお母様の体調が悪くなり始めた。パチュリーも最近はその日分の勉強が終わつたらすぐにお母様のもとに行くようになってしまった。だから最近図書館で本を読むか、美鈴とお話をしている。美鈴もパチュリーほどではないが寝る時間が少ないからだ。

「お母様の体調が悪いのも最近パチュリーが遊んでくれないのもみんなお腹の子のせいなんだわ。いなくなっちゃえばいいのに」

「本当にそうでしょうか？仮にお嬢様が第二子だったら同じことを思われていたかもしれませんよ。生まれる前から恨まれる、そんな理不尽は流石に可哀そうだと思いますか？

たとえ生まれてくる子がどんな子でも貴方の弟や妹であることは変わらないのです。ですから恨むことはどうかやめてもらいたいですね。そんなお嬢様は嫌ですからね」

「そうか、確かに美鈴のいう事は正しい。私が生まれてくる子を恨んだところで現状は打開されないし、むしろ雰囲気は暗くなるだけだものね。」

「……………そうね、分かったわ美鈴。私これから今まで通りに明るく過ごすようにするわ」

「それでこそお嬢様です。では今日の運動を始めましょうか！」

美鈴とは雨でなければ毎晩一緒に運動している。彼女の身体能力は非常に高く、吸血鬼である私でも彼女の動きについてはいけない彼女が言うには私がまだ幼いからだそうだが、本当に美鈴についていくことができる日は来るのだろうか。

あれからさらに数週間、私はできる限り元気に明るく過ごすように努めている。お母様の部屋に行ってみただけどパチュリーがいる気配がなかったから今は彼女を探している。

ん？何か聞こえるわね。こういう時に吸血鬼の耳は便利だ、部屋の外からでも何を話しているのかは聞こえてくる。

「……………あと僅かですね。非常に拙い状況です」

「……………子と妻のどちらを優先するか、か。断腸の思いだが私としては子を優先すべきだと思う」

え……………?どうしてそんな話になっているの?」

「…それはどうしてです?」

「妻はたとえ助かったとしても今まで通りの生活は望めないだろう。」

それに妻はああ見えて私よりも長く生きている。対して子はまだ生まれてもいない。世界の広さを見る前に殺してしまうのはあまりに酷というものだ」

「……………あなたがそれでいいというのなら私は子の出産を優先させましょう。夫人もそれを望んでいらつしやってみたいですし。」

レミリア、こつそり話を聞いていたからわかったでしょう?時間があれば夫人に無理のない程度にお話しておきなさい」

パチュリーにはわかつていたのか、私がかここにいたことが。」

「…分かったわ。それではまたね」

私が知らないうちにそんなことになっていたなんて。お母様が死んでしまうのはとても悲しい。私の知る言葉では言い表せない程に。」

私の妹、フランドールが生まれた。それと引き換えにお母様は死んでしまった。

フランドールはお母様の生き写しのような。不思議な翼を除けば。フランドールの翼はきれいだけれど私たちとは違いすぎている。彼女が気に病まなければいいけど。

あと何故かフランドールは右手を包帯で固定されているようだ。

この世に生まれてまだ五年しかたっていないのに親を亡くしてしまふことになるなんて。」

……ああ、そうか。人間たちもこういう気持ちなのかもしれない。自分の親や兄弟、子を私たちのような存在に殺されるというのはいくら程までに辛いことだったのか。いやむしろあちらの場合は骸が無いから墓に埋めることもできないのか。

私たちは人間を喰らう。でもこんな感情を知ってしまったえば私の小食にさらに磨きがかかってしまう。この世界は複雑で残酷なものなのね。

パチユリー side

フランドールももうすぐ五歳を迎える。フランドールが五歳になつたらスカーレット卿はこの館を出るらしい。どこに行くのか決めているのか、と聞いてみると案の定決めていなかったなので私が提案してそこに行つてもらうことになった。

それからスカーレット卿はレミリアに当主のイロハを教え込んでいる。レミリアも長女という事で次期当主は確実なのでなんの疑問も持たずに熱心に勉強している。

フランドールは勿論私が教育係として二歳から勉強を教えている。フランドールはかなり聡い子だ。レミリアにも匹敵するかもしれない。

彼女の持つている能力に気づき、彼女自身も抑えられるように努力をしている。しかし如何せんまだ五歳なのだ。狂気に吞まれてしまう事もある。そんなときには美鈴に頼んで気を落ち着かせてもらっている。

フランドールは自分の能力故に地下に住みたがっているがレミリアがそれを許可していない。地下に閉じこもることの孤独感で、より一層狂気がひどくなるのを抑えるためだそうだ。

レミリアもまだ十とは思えない程に色々考えている。夫人の埋葬を行ったときに『この世界は残酷なのね』と言われた時は驚いた。世界を知ればこの世界は残酷なのだと思づくことができる。よもや五つの少女がそんなことを言うとは思わなかった。まあただ単純に母

が亡くなったことが残酷だ、と言いたかっただけなのかもしれないが。

フランドールの右手に巻いていた包帯も彼女自身が能力を自覚し
てからは外している。彼女は器用なので左右どちらかの手でも生活
はできたが、やはり両手を使えた方がかなり楽に生活できるらしい。
まあ当たり前か。

フランドールの五歳の誕生日、スカーレット卿からの重大発表によ
り姉妹に彼の隠居が伝えられた。

「え？私何か悪いことでもしちゃったの？」

彼女らは相当なショックを受けているようだったが流石は長女、す
ぐに彼による当主の勉強はこの為の準備だったのだと気づいたよう
である。

しかしフランドールの方は心配だ。何せ生まれた日に母が亡くな
り、五歳の誕生日に今度は父がいなくなるのだ。彼女が何か悪いこと
をしたのか、と思ってしまうのも仕方のないことだ。

「フランドール、お前は何も悪いことはしていない。これは私がずつ
と前に考えていたことだからね。私はちゃんとお前たちの事は愛し
ているから安心しなさい。」

それに私が居なくなってもこの館には私より強い門番がいるし、私
よりはるかに賢い教育係がいるんだから何も問題はないだろう？」

「それじゃあお父様、館に仕えている他の執事たちはどうしたらいい
のですか？」

「それはお前に任せよう。解雇してもよし、そのまま雇っていても構
わない。ここは明日からお前の館だからな」

私としては調理場担当は残しておいてほしい。人肉調理は正直気
分がとても悪くなるからね。咲夜とか自分も人間なのによく調理で

きるね。まあ人を殺すのに大した躊躇いも無いのかもしれないけれど。

「ところでお父様は何処に隠居なさるのですか？」

「それは秘密だ。お前たちが会いに来るようになってしまえば困るだろう？」

もうじき迎えが来るから私は先に用を足しておこうかな。まあきつとまた会えるさ」

用を足すというのはレミアアたちが彼についていけないようにするための言い訳だ。実際には迎えに来たものに会ってもう移動している頃だろう。

さらばスカーレット卿、またいつか会おう。

日常的第二十一話

フランドールside

私にはある能力がある。物理的な物ならば何でも破壊できる『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』。

私の教育係でもあるパチュリーに言わせるとこの能力を使えば、殺し合いにおいては負けることはないらしい。パチュリーはそう言っているが私の能力にも欠点がある。

先ず破壊対象の「目」を私が認知できなければならぬ。そして認知した「目」を右手に移して握りつぶすのも一瞬で、というわけにはいかない。更には実力が私よりもはるかに高い者には恐らく行えない。握りつぶすことができないからだ。試したことはないけれど、パチュリーや美鈴、それに小悪魔には効かないだろう。

小悪魔は召喚時にはその名の通りの実力しかなかったらしいのだが、ここ百年ほどの修行の末にかなりの強さになってしまっている。修行以外にも理由はあるらしいのだが。

私ももう百歳を超えたのだから強くはなっている。でもこの館の他の住人が強すぎるだけなのだ。

ちなみにこの館はお父様が出て行ってから随分と寂しくなった。もともといた執事たちは皆お父様の黄金期に仕えるようになった者たちばかりだったのでお父様がいなければこの館にいる意味はなくなつたらしい。

お姉様はそれをわかっていたのかお父様が何処かへ行った次の夜には皆解雇されていた。あとこの館にいるのは私を含めて五人というわけだ。

この広い館に五人しかいないうえにパチュリーと美鈴の部屋は相変わらず図書館になっているところで、小悪魔も同じところで寝ていたりするから館の部屋はほとんど空になっている。

そんな部屋のすべてをきれいに保つために毎日昼間はパチュリーが掃除しているらしい。あとパチュリーがしているのは洗濯。調理

はとても嫌がつっていたパチュリーに代わって小悪魔が担当している。美鈴は勿論門番。

パチュリーは実は家事全般をかなり高いレベルでこなす。何故そんなにできるのか聞いてみるとどうやら昔友人に叩き込まれたらしい。厳しい人だったのかな？

たまに人肉じゃない時があるとパチュリーが料理をすることもある。そんなときは彼女らが長年住んでいた土地の料理が出てくることがある。こちらの料理と比べて味は薄い気はするけど、彩はいいし美味しいから私は結構気に入っている。

お姉様はそんなときに一度出てきた納豆というものをいたく気に入ったらしい。お姉様は肉が出てきてもそんなに食べないのにコメと納豆が出てきたらよく食べる。私的にはあんなねばねばしたものよりも肉の方が美味しいと思うんだけど、お姉様は

「私も昔色々あったのよ。だから肉はあまり食べないの」

らしい。何があつたのかはすごく気になるが何故か悲しそうな表情になっていたから聞くのはやめておいた。お姉様の傷をえぐるような事は極力したくないから。

最近毎晩パチュリーに手伝ってもらいながら能力制御の練習をしている。将来的に必ずかなりの実力を持つようになる、とパチュリーに言われた。もしそうなってしまうえば、私に壊せないものはなくなってしまうかもしれない。

そうなってしまうっても世界を破壊しつくさないようにするためにこの制御は絶対身に付けておかなければならない。だから勉強が終わったら毎回必ずこれをしているのだ。

だけどこの制御も完璧とは言えないのでたまに私の意識がなくなつて狂氣的になつてしまうらしい。そんなときには美鈴が裏人格狂気を落ち着けてくれているらしい。

今はまだいい、私は美鈴には到底敵わないから。

フランドールは普段は大人しいし、頭の切れる子だ。しかし狂気に染まってしまったときには美鈴が居なければどうにもならないくらいには危険な子になる。フランドールは理性的に行動する子であるが狂気は本能的に行動するのだ。吸血鬼の身体能力を使って飛び回られると厄介なことこの上ない。私にそんな身体能力は無いから。

今は昼間だ。美鈴は門番をしている。吸血鬼は寝ている時間のはずだ。

そうそのはずなのだ。

「また出てきたのね、狂気さん」

今は美鈴を呼べない、ならば私に残された選択肢はこれしかないでしょう。

「来なさい……………こあ」

「はいは〜い、どんなご用件でs……………あらあ、なるほどわかりましたよ」

流石はこあね。強くなってくれて良かったわ。たった百年でここまで強くなれるってことはかなり伸びしろがあったのだろう。

「アハハハハ！今日モイツパイ遊ビマシヨ？」

「…こあ、ちよつと聞きたいことがあるからこの子の動きを止めてくれないかしら」

「お安い御用ですよ。さあさあ遊びましょうか、狂気ちゃん」

こあと狂気のアソビが始まった。本能全開の吸血鬼とはいえまだ百歳くらい、妖怪としては幼子のようなものだからかわいいものだ。

特に何の問題もなく五分ほどで拘束出来た。

「さて、あなたに聞きたいのだけれど、あなたとフランドールの魂は完

全に同一のものなの？」

「そうヨ。ワタシはフランノ無意識二近い存在ナノ。ダカラワタシとフランハ切つてモ切り離セナイ関係ニアルノよ」

「フランドールの無意識、か。それなら確かに切り離すことはできないわね。魂が同一のものならば魂を分けることでもしなければ切り離すことはできない」

動きが止まっていれば、魔法は簡単にかけられる。狂気には眠ってもらおう。お休み。」

「魂は分割できないんですか？」

「できるにはできるわ。そういう魔法も存在する。」

でもね、それは禁忌の魔法。やり方を知っている魔法使いは少ないし本もかなり少ない。まあ私は知っているけれど」

「それではなぜしないのですか？すれば妹様が救われるかもしれないのに」

「先ほども言ったようにこれは禁忌の魔法なの。何故禁忌かという魂を分ける前の本体にも後遺症が残るし、何よりもその魔法は人を殺すことで成立する魔法だから。」

分かるかしら？それでもフランドールは救われると思うかしら？」

「なるほど、そうだったんですね。ならばどうすればいいのでしょうか」

「この狂気の人格はフランドールの無意識部分、故にフランドールには永遠に狂気を知覚することができない。またこの狂気もフランドールを知ってはいるけれどフランドールの意識状態では休止状態になる。」

だからフランドールがなるべく意識状態でいられるようにすればこの人格は出てこれなくなるわ。でもそれは難しい。定期的に相手をするために私たちもまだまだ強くならなければならないわね」

こあや私や美鈴はまだ強くなれるのだろうか。あと伸びしろがたっぷりなのはレミイか、頑張ってもらおう。うん。

レミリアside

何か最近では美鈴との鍛錬とパチエからの勉強が厳しくなった気がする。気のせいだと思っていたけど気のせいではないと確認させられた。

この前までは夕食の後三時間ほどの鍛錬だったのに最近では夜食直前までするようになっていて。パチエの勉強も四時間くらいになっている。これは流石におかしい。

「いきなりどうしたの？こんなに厳しくなってる」

「あと大きな伸びしろがあつて狂気を抑えられる不死性を持つのはあなただけだから」

なるほど、つまりフランを助けるための最後の槍としての役割を私が担うことになるわけか。確かに強くなったフランはまさにあらゆるものを破壊できるようになってしまっただろう。

そうなった時にパチエや美鈴、小悪魔では身体を破壊された時点で死んでしまう。いくら実力はフランより上でも、フランが成長すれば破壊できる範囲に入ってしまうだろう。

けれど私なら吸血鬼特有の死にくさがあるし、霧散して躲すことも可能、という事なのね。

「なるほどね、如何に私たちより力を持っていようともそうならしまえば確かに貴方たちじゃ無理なのね」

「そういうことよ。強くなつて私たちを助けてね？当主さん」

「フフツ、任せておきなさい。それが上に立つ者の義務だからな」

この館の住人はフランを除いて皆私より歳が上だし、私たち姉妹の

方が後にこの館の仲間入りをしたんだけどね。

「そういえば鍛錬ばかりしても実戦を一度もしたことないんだけど」
「ああ、それね。それは美鈴が強すぎて襲撃者がこの館の敷地に入れないからね。」

実戦をしたかったら美鈴を一時的に門番から外してみなさい」
そんなことがあったのか。

「そういえば最近吸血鬼の館を攻めるのなら昼じゃなくて夜、という話も出ているようよ」

「何それ……。人間になめられまくりじゃないのよ。まあ美鈴にはちよつと休んでもらうことにするわ。それに夜に来てくれるのならこちら都合がいいというもの」

あまり殺す気はないけれど実戦は経験しておきたい。

「……………と、いうわけで美鈴はしばらくの間門番しないでね。鍛錬の一環だと思つてさ」

「はあ、分かりましたけど来る人間なんてそんな強いのは基本いないですよ」

「まあそれでもいいわ。でも実戦は大事でしょう?」

天の声 side

レミリアが一時的に門番をいなくしたことが功を奏したのか人間はよく攻めてくるようになった。しかしそれと同時に昼間も門番がないという噂が町に広がってしまい、昼間にも敵襲があるようになってしまった。

これによって寝られなくなったことにはさすがのレミリアも参ったようで僅か一週間で美鈴は門番に戻らされた。世の中上手くいくことばかりではなく、完璧だと思っていた計画にも僅かな綻びは存在するものである。

何はともあれレミリアも一応実戦を経験できた。物足りなさが凄そうだが、美鈴が大方の人間はそんなものですよ、と諭すことで何とか納得できたようだ。

「そもそもあんなのが実戦なのなら美鈴と鍛錬していた方が圧倒的に強くなれる気がするわ」

「それは当たり前ですよお嬢様。私は妖怪で彼らは人間なのですから自力どころか生きてきた年月も桁違いですよ。まあお嬢様たちのように幼くして強者と渡り合えるような存在もいることにはいるんですがね」

「私ももう百歳超えてるのよ？いつまでも子ども扱いしないでよ」

「申し訳ありませんねえ。でも妖怪における百歳はとても幼いのですよ。それはまだまだ伸びしろがあるという事に他なりませんし、その歳でそこまでの強さがあることには驚いているのですよ？私が百のときなんかもう思い出せませんがそこらの下級妖怪くらいだったかもしれないですねえ」

美鈴も機嫌の悪くなったレミリアを慰めるのに必死になっている。「レミィもまだまだ幼いわね、美鈴の誉め言葉に気づかないなんて」

「あー？私いつ美鈴に褒められてた？」

「『お嬢様たちのように幼くして強者と渡り合えるような存在もいることにはいるんですがね』って言っていたじゃないの」

幼くして強者と渡り合えるというのは立派な誉め言葉よ。でもそれに気づかなかったレミィにはもつと勉強してもらいましょうか？」

「?!いい、嫌だ〜!美鈴!私を助けて!」

「仕方ありませんねお嬢様、きっちり自分の事は自分で護れるようにお嬢様にはもつと鍛錬してもらおうことにしましょうか」

「み、味方がいない?!ひどいわ美鈴もパチエも……………」

レミリアは自分の味方がここにいないと知っていじけて部屋に籠ってしまつたらしい。

「少しいじりすぎたのかしら。まあ事実なのだけれど」

「まあまだ子どもなのは事実ですけど、次からはほどほどにしておきましょうね」

勿論美鈴もパチュリーもレミリアがいじけるのを目的としてやったわけではないのだが、お嬢様の心は傷つきやすいらしい。

美鈴 side

お嬢様が急に実戦をしたいから門番やめろと言ってきたときは本当に驚いた。何か言い方は違った気もしなくはないが、解雇されたのかと本気で思った。

でもお嬢様の実戦は寝る時間が無くなるという事で結局すぐ終わった。私も仕事が無ければ暇だったし、お嬢様に加勢することは禁じられていたから裏庭で鍛錬をするかパチュリーやこあちゃんとお話するくらいしかできなくて辛かった。

門番に戻って五日ほどするとあまり人間たちが来なくなつてしまった。どうやら私がまた門番に復帰したという話が町に流れたらしい。私は自分の事を弱いとは思っていないがそんなに強いとも思っていない。

日本を出る少し前に紫さんに出会つた時でも最初にあつた時と同

じような感じがした、絶対に敵わないという。この館の前当主も私を強いと言ってくれたしパチュリーに言わせても私はかなりの実力者になったらしい。

そもそも魔法使いのように捨食の魔法を使わず、仙人にもなっていないのに食を娯楽として考えるようになっただけで強者としての資格は十分らしい。そんなものなのかなあ。

最近になってお嬢様と妹様が自分たちの妖力を使って武器を創つたらしい。妹様の方は変な形の棒から剣を創るらしい。名前はレーヴァテイン。確か北欧神話の神器の一つだったような気がする。図書館で一度読んだ。

お嬢様の方はグングニル。こちらも北欧神話に出てきていた。確か投げれば必中の槍だったか。二人ともとんでもないものを創ったものだ。

そのお二方がどうやら私に剣術と槍術を教わりたいらしい。でも剣の方はともかく槍の方は投げる用のものじゃないんですか？と聞くこと

「ただ投げるだけなら赤子でもできるだろう？だから基本の槍術は習っておいて損はない。

しかも投げたら戻ってくるまでは待たないといけないだろう？それならできるだけ持って戦った方が時間を無駄にしないし美しくもあるだろう？」

なるほど一撃必中とはいってもそれで相手が倒れてくれるとは限らないし、むしろ妖怪相手なら倒れてくれる方が少ないからか。

「確かにそうですね。しかし私が教えられる槍術と言えば三国時代のものでし、剣術に至っては極東の刀のようなものでしかやったことが無いのですが」

刀と剣では勝手が違いすぎるような気がするが。

「私たちはそれでいいわよ。そのカタナっていうのも剣みたいなものなんでしょ?」

「形状はかなり違いますし、振り方も全然違いますがまあ吸血鬼の力があればおおよそ似たような動きはできるかもしれないですね」

実際どんな違いが生まれるのかはわからないけれど。

「じゃあそういうわけでこれからよろしくね。今夜は私、明日はフランって感じで続けていくから」

良かった、流石に二人同時には教えられないと思っていたところだ。

「では始めましょうか、お嬢様。まずはですね……………」

小悪魔 side

私はこの百年で昔とは見違えるほどに強くなった。そんな強くなった私にパチュリー様が頼みたいことがあるらしい

どうせいつも通り本棚の整理を手伝ってほしいとかそんなところだろうけど。本棚の整理もかなり得意になったし、ここの司書らしく膨大な本の中から求める一冊を探してくることだってお手の物だ。

さてきてどんな用事なのか。

「あ、来てくれたのね、こあ。ちょっとあなたに聞きたいことがあってね」

「一体何なのでしょう?」

「あなたたち悪魔は魔界に通じているわよね?そこでお願いのだけれど、魔界への入り口がこの辺りのどこにあるのか教えてくれないかしら?」

「この辺り、ですか。そもそも魔界自体下界にオープンな感じではないですからねえ」

「それじゃあやっぱり非正規ルートで入るしかないのかしら。非正規ルートで入ったら拙いことになるのかしら……………」

「別にどのルートから入っても問題はないと思いますよ。ようこそ、って感じではないですけどパチュリー様ほどの力があれば魔界で騒がれることはあまりないと思いますし、魔法使いを拒むような場所ではないと思いますよ」

魔力量が高くて騒がれることはあるかもしれないけど……………」

「そうだったのね。昔一度行くこうとしたけれどそんなこと知らなかったから行かなかったのよね。」

「そうと決まれば早速準備をしましょうか、こあ」

「……………え？私もついて行っているのでしょうか？」

「あなたは私の護衛でしょう？そのために強くなってもらったのに」

「そういえばそうだった。だからパチュリー様はわざわざ強くなつた私を今日呼んだのか。」

「でもどうやって行くんですか？入り口が無いのに」

「なければ無理矢理作ってやればいいだけよ」

「界の狭間にどうやって入り口なんて作るんだろうか。いくらパチュリー様でもそんなことができるのだろうか。」

「もしかして召喚の応用であちらに送るのかな？」

魔境的第二十二話

パチユリ side

こあによると、私が非正規ルートで魔界に入っても全く問題は起らないらしい。ならば魔法使いとしては行くしかない。

あれから早速準備をして今日行くわけだ。ちなみに準備期間は三日。その間にレミイたちにはしばらく留守にすると言ったり色々なことをしていた。

こあにどうやって魔界に行くつもりなのかを聞かれた。勿論方法は決めているし都合もつけたが、初見の方が良い反応をしてくれそうなので適当にごまかしている。

まあ知っている者からすれば答えを出すのは簡単なことである。

「こあはどうやって魔界に行くのか気になっていたわね。勿論私の開発した魔法なんて使わないし、そもそもそれだけのための魔法なんて今まで組む必要もなかったのだから無いわよ」

「ではどうやって行くのでしょうか？私には見当がつかないのですが」「ふふっ、こうするのよ。」

……………紫」

私の謎空間は無生物は入ることができない。それを生かして声のみを紫のスキマ空間に直接送ることができる仕組みになっているのだ。紫にはこの間話をつけておいたから間違いなく来てくれる。

……………「はあい。久しぶりね、パチユリー」

「ついこの間要件を伝えたじゃない」

「あの時は声だけだったでしょう？だから会うのは久しぶりじゃないの。ざっと百年ぶりくらいかしらね？」

「そうね、あなたと会うのはあの時以来ね。それで今日は前にも言っ

ていた通り魔界に連れて行ってほしいのだけど」

「勿論構わないわよ。旧友の頼みだし、そんな簡単なことならいつでもできるわ」

「それはありがたいわね。ところであなたの夢は完成したのかしら？」

「ええ、今は『幻想郷』と名がつけられているわ。来たかったらいつでも声をかけて頂戴ね」

「まあ将来的には行くことになるでしょうね。その時のために幻想郷の座標を控えておきたいのだけど」

「構わないわよ。貴方なら悪用することはあり得ないでしょうから。

それにしても残念ねえ。貴方がまだ日本こっちにいたら幻想郷の賢者として動いてもらおうと思っていたのに」

「そんなのはお断りよ。賢者なんてやっていいことはないもの。私はそんな器じゃないわ」

「案外そうでもないと思うわよ。貴方が賢者なら私の心労も少しはましだったかもしれないわ」

「お大事にね？あなたがそんなだったら藍も心配するわよ？」

「まあ気を付けておくわ。それでは魔界に行きましょうか。すぐ着くけれど」

小悪魔 side

どうやって行くのかと置いていたら突然パチュリー様が彼女の謎空間に呼びかけて、美人な女性が出てきた。どうやって出てきたのか

は全然わからない。気づいたらそこにいた、という感じだった。

彼女が話している言葉からして恐らく極東の妖怪なんだろう。ちなみに何故私が彼女らの会話を聞き取ることができているのかというと、魔界の言語もそうだからだ。まあ私たち悪魔はいつ、どここの魔法使いなどに召喚されても対応できるようにたいていの言語には対応しているのだが。

話は変わってしまったがあの妖怪、強さをまるで測れない。美鈴さんが言っていたのはこの妖怪の事なのだろうか。それなら確かに理解できる。

この妖怪は圧倒的強者である。美鈴さんが自分を強者と認めようとしなくてもよくわかる。それほどまでにまとっている雰囲気、格が違いすぎる。

そんな妖怪と仲良さげに話しているパチュリー様は一体何者なのだろうか。

と思っているとパチュリー様に呼ばれた。どうやら今からあの妖怪の能力で魔界に行くらしい。桁違いの妖力を持つあの妖怪の能力は境界を操るといってもないものだった。せめて妖力が能力のどちらかだけだったら対処できるものもいるだろうがどちらも持っているとは。

でもそんな彼女も敗北の味を知っているらしい。もう数百年前になるらしいがパチュリー様や美鈴さんと一緒に出向いた先で完全敗北を味わったらしい。その三人だけでも国を亡ぼせそうなのにそんな三人に勝ってしまう猛者もこの世界には存在するらしい。私が見えている世界は思いのほか狭かったらしい。今日一気に広がりすぎたともいう。

何はともあれ全くの無問題で魔界に入ることができた。ここは一応私の故郷にもあたるところだ。嫌な思い出が数多くあるところでもある。

「ありがとうね、紫。また帰りに呼ぶかもしれないわ」

「お安い御用よ。それではね、パチュリーと小さな悪魔さん」

「さてまずは何処に行きましようか？私は魔界をよく知らないからこ
あが案内してくれると助かるのだけれど」

「そうは言われましても私はかなりの低級層ですから私も魔界の事に
は詳しくないですよ。知っていることと言えば精々この魔界のす
べては魔界神が創造したとか、無限の広さを持つとかそんなことしか
ありません」

「困ったわね。では先ずはその魔界神とやらのところに挨拶にでも行
きましようか」

「魔界神は確かパンデモニウムという場所のあたりにいたような気が
しますね。私は何処か知りませんが、有名な場所ですので道端の人
に聞いて行けば着くと思いますよ」

魔界に住んでいた者としては恥ずかしい限りだが低級層には本当
に情報が回らないからパチュリー様には申し訳ない。

「では聞きながらのんびり向かいましようか。レミイたちにはいつ帰
るとは明言していないから長いこといることもできるし。」

それに私としてはここで少し修行出来たらもうちよつと強くなれ
る気がするしね」

それからパチュリー様は「ちよつとそこの方………」とか言いな
がらようやく場所を聞き出せたらしい。何か道を尋ねるのにえらく
慣れているようだったけど、今までもそんなことをよくしていたのか
な。

悪魔である私が一緒にいるせいかもしれないが、やはり大して目
立っていない。久しぶりの魔界、ここにいる魔物たちはやはり外界に
いるほとんどの妖怪たちよりは強い。

原因はこの瘴気だと思う。これは普通の人間なら間違いなく重症になる。そんな中でずっと生活しているのだから強くなるのも当たり前か。

「さて、道もわかったから早速行くわよ。ぼさつとしてないで」

歩いているとたまに昔見た顔の悪魔がいることがある。あちらは私だと気づかないようだけど。あの時の力しか知らないなら仕方のないことだと思う。

パチュリールside

ここがパンデモニウムか。恐らく魔界の最奥に近い場所、魔界神がいるのは少し先かな？

それにしても魔界まがいの文明はかなりのものだ。高層ビル群がこんな時代にあるとかちよっとおかしい。月？比べる対象にはいけない。

そもそも月は科学力で、ここは魔力で発展してきたのだろうから大した違いも無いのかもしれないけれど。

「貴方たちはいったいどうしてこんな場所まで来たのです？」

「誰?!」「私はここの主のメイド、ですかね」

「なるほど、私は新参者だから一応この魔界の主にご挨拶にでも、と思つて来たのよ」

「神綺様に……………?そんなことで挨拶に来る人なんて今までいなかったし、神綺様が貴方たちにお会いになるとは思わないけれど」

「あら、そうなの?なら挨拶せずに魔界で過ごしはいかがでしょうか」

「貴方たちは外界の者にしては力が強そうだし、きちんと門から入ってきていないからここに残るなら挨拶はして頂戴ね。」

「その夢子ちゃんに負けたら問答無用で外に帰ってもらうけど」

「神綺様!?!お会いになるのですか?」

「それは夢子ちゃん次第ね。」

言っておくけど夢子ちゃんは結構強いわよ。精々頑張つてね♥」

夢子は確か神綺が創った者の中では最強クラス、つまりは魔界人最強クラスだったはずだ。先ずはこあで様子を見ましようか。

「こあ、あなたから行きなさい。今までの成果もわかるし、良い実戦経験を積むことにもなるわ」

「わかりました。では先ずは私から行きましよう」

「貴方は魔界にいた存在ですか。それもかなり上級の悪魔だったのでししようか?」

「もともとの私は小悪魔、つまりは力のない存在でしたよ」

かなり上級の悪魔レベルにはなっていたんだね。知らなかったよ。

それにしても夢子の能力かは知らないが特性はかなり厄介そうだ。

こあも全然攻撃を与えられていない。物理攻撃は基本通らないと思っておいた方がいいね。

ならば弾幕でもあまり意味はないかもしれない。姑息だがあれを使うか。

「お疲れ、こあ」「うゝ、彼女全然攻撃が通りませんでした。悔しいです」

「こあ、目をしっかり閉じていなさいね。」

さて、次は私ね。少しは楽しめるかしらね」

「貴方は魔法使いですか…。そんなものは魔界には腐るほどいるのですよ。ただの魔法使いでは私には勝てませんよ!」

「では行きましようか」 無詠唱広域無力化魔法をさらに強化した無詠

唱小範囲完全無力化魔法未完成バージョン。目を閉じていたらギリギリ耐えられはする。開けていたら多分一時間くらいは気絶するんじゃないかなあ。

「うっ!?」 あっ気絶しちゃった。こあは……………え?なんでこあも気絶してるの?

目を閉じていなさいって言っていたのに。

「今の魔法は確かに物理攻撃の効きにくい夢子ちゃんには効果的だったけど、もし目を閉じられていたらどうしたの?」

「そんなことは簡単よ。負けなければいいのならば彼女の武器を無力化するまでよ。」

陰陽五行思想、知っているでしょう?私はそれを私の実力の届く範囲までなら自在に操ることができるのよ」

「ふーん、なるほどねえ。まあ貴方は夢子ちゃんを倒したのだし、しばらくは魔界にいても構わないわよ。でも外から人が来るのは久しぶりね。六百年前くらいに、人間によって封印された魔法使いが来て以来かしら」

ん?それって

「その人がどこにいるか知らないかしら?」

「彼女は魔界の一角、法界に封印されているわ。会いに行きたいの?」

「まあそうね。できれば会ってみたいわ」

「でもあそこは完全に封印によって遮られているから普通の人は入れないわよ」

「でもあなたなら入ることができるとはどう?」

「当たり前じゃないの。この世界はすべて私が創ったんだから。」

もしかして私に案内しろと言っているの?」

「ご名答。よく分かったわね。でもあなたにも魔界神という立場があるから難しいか……………」

「別に構わないわよ。神って言っても暇なことの方が多いし」

あ……………そうなんですか。確かに諏訪子も神奈子も結構毎日暇そうだったね。

「じゃあこの子たちが目覚めたら行きましようか」

・
・
・

「貴方はいったいどうしてそこまでの魔法使いになれたの？魔界にも貴方のような実力者は一握りしかないし、魔法使いとしては破格の運動能力がある。

ぶっちゃけ魔法使いとしてならば魔界でもトップの強さを持つでしょう。それほどの実力で身体的弱さが無い、というのは異常だと思うんだけど」

「私は既に1300年ほどは生きているわ。実力が高いのはそのせいでもあるでしょう。本もかなり読んだしね。

で、肝心の体力の事だけど、これは私が一緒に行動していた妖怪にかなり鍛えられた上に昔住んでいた場所ではかなり動き回る仕事をしてきたからなのよ」

「魔法使いが仕事ねえ、似合わないわね。何か魔法使いらしいことはしていないの？」

「勿論研究や実験も仕事や修行の合間に行っていたわよ。その完成形が一応賢者の石なのよ」

「賢者の石ねえ、作ることでできる魔法使いは他にもいるわよ？」

「私は五行を操る、そこらの賢者の石とはわけが違うわよ。魔力、質ともね」

「それは是非とも見てみたいわね。今ないの？」

「今はそこに寝ている子に召喚の対価としてあげたから無いわよ。数段劣る複製ならいつでも取り出せるけれど」

「それでいいわ。魔法に精通していれば複製をみればオリジナルがどんなものなのかは大体予測できるもの」

確かにそうだ。ならば複製でも問題はないね。いつ必要になってもいいように普段から私の空間にいくつか入れている。

「はい、これよ。もしかしてこの場所で作ればもつといいものができるのかしら」

「へえ、これが。でも残念ながらこれのオリジナル以上のものはこちらでも作れそうにないわね。」

貴方の持つ十分な魔力に木火土金水の絶妙なバランス、残念ながらこれが最上級よ」

残念だけどなんか嬉しいね。こあへの対価はそんなに価値のある物だったのか。錬金術においては最高の素材である物のさらに最上級品だったとは。

「あら、そうなのね。まあ複製でも今は困ることは無いからいいわ。ところで魔界の魔導書の原本ってどこかにあったりするのかしら？」

「魔界の魔導書ってだけで付加価値が凄いいし、さらにその原本となればかなり吹っ掛けられると思うけど、一応あるにはあるわよ。また案内してあげるわ」

「あら、親切なのね」 「言ったでしょう？暇なのよ」

「それにしても起きないわね、この子たち」 「かなり眩しかったしねえ」

「あれでもまだ未完成の魔法なのよ。もともと作っていた広域無力化をさらに強化して一点集中型の魔法にしたのだけれど、まだまだだね」

それが完成すれば私や周りにいる者も目をいちいち閉じなくて済む。目を閉じるのは隙になってしまいうからなるべく避けたいんだよね。

「あれ以上眩しくすると相手が失明してしまうかもしれないわよ」

「命の危機に陥った時には有効でしょう？」

「貴方が命の危機に陥るって相当の事だと思うけど………」

そんなことはない。幽香と戦った時は命の危機に陥ったし、紫に初めて会った時も、依姫と対峙した時も命の危険を感じた。それに依姫なんて光を斬ってくるような子だからそんな魔法も使えないし。そりゃあ依姫無双と言われても仕方ないよね。強すぎる。

「それがそうでもないのよね。命の危機には何度か陥っているもの」

「外界も強い人が多いのねえ」

今のほほんとしているけれど神綺だって圧倒的強者だ。本気ならば三つの界を統べるヘカーティアの次くらいには強いだろう。つまりは私が出会ってきた中では恐らく一番強い。

そんな絶対的強者に命の危険を感じないのは彼女の持っている雰囲気のおかげなのだろう。原作では少々子どもっぽいところがあつたが、今は全然ない。これからそうなるのかな？

「この創造神であるあなたが言ってもねえ」

「ふふっ。そういえば貴方は自分で魔導書を書かないのかしら？貴方の実力ならほとんどの者が読むことのできない程の魔導書も書けるんじゃないの？」

「んー、まあ書くことはできるのだけれど。手元においておきたいものでもない気がするのよね」

「それならここに置いて行けばいいんじゃないの？何冊でも書いてくれたらここに置いておくけど。まあ価値はとんでもないことになり

「そうだけど売ることには無いわよ」

「そう？なら書いてもいいかもしれないわね。魔界に来た記念として三冊くらいは書こうかしら。本気の二冊にお遊び用の一冊。いつまでも子ども心は大切よね。」

「お遊び用のやつは写本して売り物にでもしましょうか。原本はここにおいておけばいいけれど」

「お遊びの一冊とは言っているが使えない魔法なんてものは書かない。魔法を組むうえでいわゆる失敗作と言えるものを書くだけだ。レポートしたら石の中に行けるとか。」

「内容は失敗だが楽しめるものも多いので誰でも読めて使えるものを書くつもりだ。むろん普段は魔法を使えない妖怪たちでも。どうせならたくさんの人に楽しんでもらいたい。」

「どうせ出回ったとしても原本ではないのだが。」

「それにしても私が書く魔導書ってそんなに高値が付くかしら？」

「付く付く、絶対に高いわよ。原本でなくても十分な価値はあるでしょうから」

「でも私自身魔導書なんて一冊も書いたことはないのに」

「魔導書なんてものは書かれた内容で価値が決まるんだから経験なんて関係ないのよ」

「確かにいまいちな魔導書もたくさんあるものね。でもそれだったら私の本でもお遊びのやつは価値が全くなくなるけれど。」

「魔界の魔導書はハズレが少なそうだから見るのが楽しみだ。最低でも十冊以上は持って帰りたい。」

「お金は常に空間に入れているから問題ない。西洋の金も日本の金もあるが、額は圧倒的に日本の金が多い。それに今神綺と話しているときも日本語だから恐らく日本の金は使える。このかなりあるお金でどれくらいの魔導書を手に入れられるかはわからないが、日本の金はせめて三割ほどは残しておきたいものだ。」

「でも魔界の魔導書ってそもそも外のものとは質が違うじゃない」

「その中でも一級品になると思うわよ。まあ読める者が極端に少ないでしょうからそこはどうかかわからないけど。」

まあ売らないけどね、そんなに価値のある物」

「そうしてくれた方がありがたいわ。下手な金持ちが買って無理に読もうとして重傷を負うなんてこちらとしても気分が良くないから。そんなことならあなたのところにあった方が安心だわ」

「どんな題名にするのか決めているの？」

「そうねえ、まあ真面目な二冊は『The Grimoir of P
atchouli』と

『The Grimoir of Knowledge』でいいと思うわ。あとの一冊はそうね、『誰でも使える失敗作』とかでいいんじゃないかしら」

「三つ目考える気なかつたでしょ。面白そうな魔導書なのにそんな題名ならだれも買わないかもしれないわよ」

なぜばれた。確かに考えるのもめんどくさいとは思って適当に付けたけども。

「いいのよ、数冊でも売れば儲けものって感じの稚拙な内容だし。金なんてあとこの魔導書を手に入れるくらいしか使い道がないしね」

外の魔導書は写本でよければ勝手に図書館が増えていくからね。

「貴方がそれでいいのなら構わないけど………お？やっと思きたのね。夢子ちゃんたち」

本当だ。まさかほぼ同時に目覚めるとは。運命なんじゃない？夢こあ、うん、響きも悪くないし何か新しい道を切り開いていけそうなかップリングだね。まあやらないけれど。

高僧的第二十三話

パチユリー side

ようやつとこあと夢子が起きたので、彼女らに事情を説明して法界に向かうことになった。

夢子は神綺が案内役なことに少し不満そうではあるが、主が許可を出しているのだから仕方なさそうに文句も言わずについてきている。不満そうな顔さえしていなければ、従者としては満点の行動なんじやなからうか。

神綺自身はそんなことを全く気にしていないようで、普段の暇さから解放されて嬉しそうだ。

まあ魔界の最奥にずっといるってのもなかなか辛いことなのだろう。

そんなこんなで法界に到着。封印されるというのは思いのほか辛そうだ。ぬえには申し訳ないことをしたかもしれない。まあ地獄には村紗たちもいるはずだから孤独ではないだろうが。

「こんにちは、お久しぶりね」

「ええ、確にお久しぶりですが本日は一体何の御用でいらつしやつたのでしようか」

「凄いな、声が全然響かない。声が聞き取りづらいような気がする。」

「今日は貴方に会ってみたいという子がいてね、連れてきたのよ」

「私に？単身で魔界に来られるような知り合いはいないはずなのですか」

「この子よ。まあこの子も誰かに連れてきてもらっていたみたいだけ

ど。

「私たちはしばらく席を外しておくからお二人でゆっくりお話をし
ていなさいな。ほら、行くわよ。夢子ちゃん、こあちゃん」

「こあも連れて行くのね。まあ相手が聖なら攻撃されるようなこと
も無いし、魔法使いとしての腕ならば私は負けていないはずだから大
丈夫だろうけれど。」

「……………さて、貴方は一体どうして私を訪ねてきたのです？私は貴
方の事を知らないのですが」

「私はあなたの事を知っているわよ。哀れな境遇の妖怪たちを匿うよ
うになって人間に封印されてしまった人間上がりの魔法使い、聖白蓮
でしょう？」

「貴方は日本に住んでいたことがあるのですか？私の他に魔法使いの
噂はほとんど聞きませんでした。いったいどこにいたのでしょうか？」

「貴方が魔法使いになる少し前くらいから諏訪でゆったりしていたの
よ。あなたも妖怪との関りがあったのなら聞いたことがあるかもしれ
ないわね。かつて都で名を馳せた陰陽師、大都庶樺菜」

「確かに何度も噂を聞きましたし、知っていますけどまさかそれが貴
方だったのですか？でも噂では仙人の陰陽師だったとか」

「それは私が何百年経つても全く歳をとらなかつたからよ。あの頃の
日本にはまだ魔法という概念は存在していなかつたから仙人という
事で通していた、というわけ」

「無用の妖怪退治の依頼は避けていると妖怪の間で噂になっていまし
たが」

「その通りよ。たとえば人間に変装して人間の間で生活していたとして
も、私は生粋の魔法使いだから妖怪側の種族だしね。それに私の相
方、聞いたことがあるでしょうけど美鈴も長い時を生きてきた生粋の

妖怪。

流石に悪さをした妖怪を野放しにしているのは無理なことなのだけれど、私たちから見れば一応同族。何もしていないのに退治したくはないでしょう?」

「なるほど。確かにその通りではありますが、それでは人間たちからいささか不満も多かったのではないのでしょうか?」

「私は他の陰陽師にはできない地脈の安定とかも仙術や魔法を使えばできたから、人間からの不満はあまりなかったわね。それに私は基本誰の依頼でも、わずかな報酬でも受けていたしね。まあ仙術と言っても仙人になってしまふのは困るからほどほどにしか使っていないなかったけれど」

「仙術が使えるとなると仙人である、という噂もあながち間違いではなかったのですね」

「まあそうですね。」

さて、次はあなたの話を聞きましょうか。ちなみにまだ言っていないかったけれど私は大都庶樺菜改め、パチュリー・ノーレッジよ」

「私はご存じの通り聖白蓮です。まずは私が魔法使いになったきっかけからお話いたしましょう。」

私には命蓮という弟がいました。彼は法力という特殊な力を使えまして、私も彼に習って法力を学んでいたのです。

ところが彼は姉である私を置いて先に亡くなってしまいました。それから私は死というものを極端に恐れるようになってしまいました。

そこで手を付けたのが人間の道を外れるきつかけとなる魔法だったというわけです。私は先ず若返りの魔法を習得して捨食、捨虫の魔法を覚えるための時間を作りました。

そして習得した結果魔法使いになれたのです。そこから初めのうちは私自身の力をつけるために妖怪を庇護したりしていました。し

かしそうしているうちに、なんだか人間に虐げられている妖怪たちが可哀そうに思えてきましてね。

妖怪だって生きています。そのような存在を虐げられて当然、と振る舞う人間たちの如何に愚かで自分勝手なものか。

妖怪たちを匿うために命蓮寺という寺を建てました。そこでは私や命蓮が信仰していた毘沙門天様の代理として遣わされた妖怪を祀っていたのです。

しかしどこからか噂が流れてしまったようで、私が妖怪を匿っていることが人間たちに気づかれてしまったのです。そうなってしまうえば私が妖怪を匿っていたのは事実ですから逃れようもありません。

流石に神の代理として遣わされていた私の弟子とその監視役は人間側に付かせました。私は封印されても仕方がないと思っていたので寺にいた他の妖怪たちには人間に見つからないように逃げるように言っていました。

ところが数名残ってしまいましたね。それほど慕われていたのは嬉しいことなのですが、彼女らには逃げてもらいたかったですね。どうやら彼女らも私とは完全に別の場所に封印されてしまったようです。

そして私もここに封印されてしまいました。ここは魔界神ほどの存在ではなければ封印の中に入ることはできませんから、私はいつも魔界の素材を使った新しい魔道具を作ったりして過ごしているわけなのです」

「……なるほどね。辛い話もさせてしまって申し訳なかったわね。配慮が足りなかったかしら」

「そんなことはありませんよ。私はこれもまた一つと思って妖怪をかばっていたわけですし、封印されているだけなのならばきつとまた会えますからね」

聖はポジティブだね。私ならこんな誰も来ないようなところに六百年以上もいたら気がおかしくなってしまうだろう。聖が大丈夫なのはやはり八苦を滅したからなのだろうか。心が強いよね。

「あなたは強いよね。こんなに長いことここに閉じ込められているのに心が全くぶれていない、本当に凄いことだと思うわ」

「私は僧ですからね。あらゆる苦しみは意味を成しませんよ」

「そういえばあなたは僧なのに尼削ぎでもないのね。何か理由があるのかしら？」

「確かに人間にはありえないような髪色ですし、このような色ですから妖怪と間違われることもありました。でもこの長さである理由を強いていうならば妖怪を匿うに当たっては良い目印にもなりますし、私自身気に入っているからですかね。それに尼削ぎにしてしまうとほとんど一色に近くなってしまうでしょう？」

「なるほど、確かにその長さが一番色調の均衡が保てているかもしれないわね」

「そうでしょう？ところで貴方は日本にいたときは大陰陽師として活動していたのでしたね。

貴方が陰陽師として対峙した妖怪で最も手ごわかったのはどんな妖怪だったのでしょうか」

「私が対峙したので一番手ごわかった妖怪ねえ………ああ、あなたが封印されて百年近くは経っていたかもしれないけれど、鶴かしらね」

「鶴、ですか。聞いたことはありませんね。人に危害を加えるとなると鬼なんかも退治の対象になったのではないのですか？まさか鬼より強いとか？」

「鬼とは討伐隊が組まれる前に美鈴が戦って、そのあとに宴会をした仲なのよ。それに運よく私たちのところには依頼が来なかったから仕事で鬼にあったことは無いわね」

「美鈴さんは鬼とやりあったのですか？随分と凄い方だったのです

ね。いくら妖怪でも鬼はきついと聞きますが」

「その通りよ。あの時も美鈴の改良した必殺技（鬼以外が相手なら）があったから何とか勝負に勝てたもの。私が相手なら相性が悪すぎて勝負にもならなかったでしょうね」

「貴方はどのような魔法を使うのでしょうか？」

「私の専門は属性魔法よ。木火土金水の五つに日と月を加えた七つね」

「木火土金水と言えば大陸の方から伝わったと言われる五行思想ですか。それを自在に操れるとかなり強いのではないですか？」

「確かに弱くはないと思うわ。でもこれは私の実力の及ぶところまでしか発揮できない。」

簡単に言うとな神の火は私の水では消せないし、神の水は私の土では止められない、といった風にね」

「それでも十分な気がしますが、何故鬼とそんなに相性が良くないのですか？」

「鬼は私の魔法をくらっても平気で動き回れるでしょう。鬼の肉体はそれほどの強度がある」

私だって弱くはないはずなのだ。鬼がどれだけ理不尽かわかる。

「貴方のような魔法使いにそこまで言わせるほど強いのですね。私は聞いたことしかなかったのですが、一度手合わせ願いたいものですね」

「……………正気かしら？」

「勿論です。言っていないませんでしたね、私は身体能力を強化させる魔法が得意なのです。ですから私の封印が解けたら是非会ってみたいものです」

本気で言ってるね。確かに聖の身体強化は並ではない、だが鬼が相

手となるとどうかなあ。

それに聖が魔界から出たときに地上にいる鬼つて萃香か華扇しかない。華扇は腕を探して忙いというか鬼とばれないように生活しているだろうから、消去法で萃香しかない。

萃香と言えば美鈴のあの時の渾身の攻撃を受けても体に穴が開いただけで動く分には全く問題なさそうだった。そんな化け物と戦うのは私なら勘弁したい。緋想天？天子で終わっておけば大丈夫だよ。萃夢想も私が動く必要はないし、旧知の仲だからどちらかという

と紫に近いポジションになりそう。やる気はないけれど。

「まあおすすめはしないけれど、やるときは頑張つてね」

「すごく他人事です。まあ実際そうなんです。そうす！もしよろしければ魔法使いとして私に修行をつけていただけませんか？」

「……………それは私があなたの師になるという事かしら？」

師の経験はある、まああの時は師であり弟子であったのだけれど。

「ええ、その通りです。魔法使いとしての格は貴方と私では全然違いますので、私を強くしていただけないかと思ひまして」

「私が魔法において誰かに教えたことがあるのは一回きりだし、あなたとは系統が違うから分かりにくいかもしれないけれど、それでもいいの？」

「ええ、勿論ですし、教えられる方なのに文句なんて言いませんよ」

聖……………いい人だなあ。

「分かったわ。では始めるわよ、白蓮」

白蓮つて呼ぶ人全然ないから私がこれから呼んでみよう。何か師匠してる感出るし。

「!?はいっ、わかりました師匠！」

ノリいいね。好きだよそういう人。

「いい？まず魔法とは……………」

小悪魔 side

パチュリー様と封印されていた魔法使いが二人で話すために私と魔界神様と夢子さんの三人で魔界の中核ともいえる場所に来た。ここの魔界神様がいてもあまり目立たずに行動できるのだそうだ。

変装するのならどこに行っても変わらないような気がするが黙っておこう。

私はこんな場所には来たことが無かったので非常に目移りしてしまふ。一応パチュリー様にお金はいくらか貰っているが、このお金は西洋では得ることができないので無駄遣いは絶対にできない。

「貴方本当に魔界にいたの？ここにも来たことが無いなんて」

「魔界にはいましたよ。悪魔の最下層なんてものはこんなものですよ」

「悪魔も色々いるのねえ。そんな最下層だった貴方はどうしてそこまで強くなったの？」

「それは召喚の対価のおかげですよ。あとは地道な努力ですかね」

「ああ、パチュリーが言っていたやつね。確か賢者の石のオリジナルだったけ？」

「私たちが気絶している間に聞いていたのか。」

「ええ、そうですよ。魔界神様と言っても流石にお渡ししませんけど」

「ふふっ渡されたら困っちゃうわ。それはどの異界にも存在し得ない

程の賢者の石だもの。恐らくパチュリーでも同じものはもう二度と作れないわね。大切にしなさいよ?」

これってそんなに凄い代物だったのか。道理でここまで強くなれたわけだ。もし私が初めからもう少し力を持っていて中級くらいの悪魔だったとすれば悪魔の中でも最上の存在になれたかもしれない。逆に元から上級の悪魔だったらここまでの効果は出なかっただろう。実力と対価の価値が違うほど効果は表れるだろうから。

「それを聞いてしまったらむしろ私が持っていていいものなのか不安になってきましたけど、勿論大切にはしますよ」

「あら、この店にも売っているわよ、賢者の石。これはまあまあ良い質ね」

これでまあまあ良い質なのか。じゃあパチュリー様のとてどういう評価が下るんだ?

「これでまあまあならパチュリー様の奴にはどんな評価をなさるのでしょうか」

「パチュリーのは私には評価できないかしらね。複製しか見せてもらっていないけど、それでもかなり良い質だったもの。かなり良いの数段上なら何になるのかしら」

なるほど。パチュリー様の魔力に、賢者の石を作り出すのには最適な能力。この二つを合わせればそれほどのものができるのか。

今度は魔導書を取り扱っている場所に来た。魔界の魔導書は凄いな。魔界の物ばかりだ。魔導書を見慣れている私でもこの雰囲気はなかなか味わうことができない。今存分に味わっておきたい。

魔界神様によるとどうやらパチュリー様が魔導書を書くらしい。真面目な二冊に失敗作の一冊…。

私が幾度となく実験に付き合ってきた魔法たちだろうか。あの魔法は確かに面白いし簡単そうだったが、危険もありそうだ。いきなり石の中にあるとか勘弁してほしかった。

真面目な二冊の方はかなり気になる。あのパチユリー様が書く真面目な魔導書がいったいいくらになるのか。売らなくてもいいから値段は聞いてみたい。

ここに置いてある原本に付けられている値はかなりのものだ。いつも勝手に増えていくので私は魔導書の相場を知らないが、恐らく高いんじゃないだろうか。

「ここにある魔導書ってやはり外のものに比べて高いのでしょうか？」

「恐らく倍近くはするんじゃないの？魔界のものっていうのはそれだけで価値が高いから」

「じゃあ魔界って貧乏な人も多そうですね」

「貴方は本当に何も知らなかったのですね。魔界は物価が高いですが、入ってくるお金も結構あるのです。ですからむしろ貧乏な人は外より少ないと思いますよ？」

「じゃあ私たちも働けば魔導書をたくさん買うに足るお金を得られるという事ですね。早速明日から働きましょうかね」

「そんなことしなくても大丈夫だと思うわよ。貴方にお小遣いとしてそれほどの金額を渡すことができるくらいには多く持っているようだし、失敗作の魔導書の方は複写して市場に回す予定らしいから」

「真面目な方は市場に回さないのですね、高値が付きそうなのに」

「読める人が少ないんだから回しても意味がないでしょう？それなら誰でも使えるという方を回す方が効率も良いし、子どもでも使えるようなものだから悪用もされにくい」

そういう事か。確かに読める人のほとんどいない魔導書がたくさんあっても店からしたら売れないし邪魔なだけだもんね。

「そういう事だったのですね。よくわかりました」

「そろそろ法界に戻りましょうか。そういえば貴方たちは何処で泊まるか決めているの？」

「パチュリー様は食事も睡眠も必要としませんし、私もそこまで困ることも無いのでどこにも泊まる予定はないですが」

「ならうちにくる？」「ち、ちよ！神綺様」何よ夢子ちゃん。何か問題でもあるの？」

「私の仕事が増えるじゃないですか」「そうですよ、私も畏れ多いですし」

「あらあら、残念ねえ。折角だから他の子たちにも会わせてあげようと思ったのに」

「会わせない方がいい、とだけお伝えしておきましょう」

「夢子さんも大変なんですね。心中お察しします」

「小悪魔も一応従者じゃないですか。パチュリーはどうなんです？」

「パチュリー様は優しいですし、彼女も掃除や洗濯、料理をやっているので従者の大変さはわかっているんじゃないでしょうか」

「神綺様も大変さが分かってくれればいいのに……そう思いませんか？
神綺様」

「え？何かしら。全然聞いていなかったわ。もう一度言ってくれない
かしら？」

「いや、もういいです。諦めましたから」

「え？ちよ……夢子ちゃん！大丈夫？」

仲がよさそうな主従だ。魔界神様も優しいところもあるし実は夢
子さんもそんなに苦労はしていないのかもしれない。

………いや、それは無いか。

作家的第二十四話

パチユリー side

白蓮は僧だった頃に慣れていたのか修行はとても楽しそうにやっていた。この瘴気に満ちた魔界での修行、私自身もかなり良い修行になったと思う。

あの日からは毎日神綺に連れて行ってもらい、魔法を教えながら、私も修行に励んでいる。そうでもしないと魔界から出てきた白蓮に追い抜かれてしまうかもしれないからだ。

魔法使いとしては白蓮の二倍ほどの時間を過ごしているが、人間としての白蓮は私の前世の三倍以上は生きているだろう。その“人間”としての経験が他の魔法使いたちより多いであろう白蓮は自身の成長を感じることに長けているだろう。

長い時を生きる上では自身の成長はなかなか実感できない。しかし人間のような百年も生きられるかわからない程の短命な存在においては、自身の成長を強く実感できる。生まれたときから長命な私たちには決してできない程の急激な成長を人間が見込めるのはこの為だ。

僅か十数年しか生きていない人間が百年以上生きた妖怪を退治できるのもそのせいなのだ。

妖怪は成長が遅く、人間は異常なほどに早い。白蓮がああから魔法を身に付けられたのは彼女の才能もあつたのだろうが、人間特有の成長速度をその歳になって尚持っていたからなのだろう。

だから私も修行に手は抜けない。私は負けず嫌い、というわけではないが、それなりにプライドはある。それに師が弟子に負けるというのも格好がつかない。

白蓮は魔法使いになったことで多少成長速度は落ちているようだが、油断はしてられない。

あれから五年経った。私が彼女に教えられることはもうあまりな

いだろう。

それにそろそろ魔導書を書かないといけない。前までは三冊しか書かないと言っていたが、神綺と話し合っただけで変更した。

言っていた三冊に加え、そこそこのレベルの者なら読めるようなものも一冊書くことにした。だってねえ、失敗作の魔法だけ市場に流すと私への評価がただの雑魚魔法使いになってしまうだろう。それは流石に気分が悪くなる。

だからもう一冊、本気とはいかないけれどそこそこの魔導書を書くことにしたのだ。原本もまあ市場に流してもいいんじゃない？そこは神綺次第。

うーん、魔導書を書くと言ってもなあ。私は今まで書いてこなかったからなあ。

「どう書けばいいのかわからないわ」

「貴方が今まで読んできたものを模倣すればいいんじゃないの？」

「模倣ねえ、まあそれでいいか」

先ず書いていくのはそこそこの魔導書。いきなり失敗作のものを書くのは流石に嫌だったし、本気のものになるべくゆっくり書きたいからだ。

さて、どんな魔法を書こうかな。うん、生活に便利な魔法でも書こうか。魔導書というよりもそこそこ力のある庶民向けの本、といった感じだけけど。

力のない者はあとで書く失敗作の本の後ろの方にオマケとして簡単な便利魔法をつけておけばいいだろう。性能はかなり違うけれど。

「まずは一冊目が完成ね。早速だけれど複写してもらえるかしら」

「お金はいただくけどね。それで、どんなものにしたのかしら？」

「魔導書というよりも読み物に近いわね。内容は基本の生活魔法をさらに掘り下げたようなものよ。かなりきれいに掃除ができたりとかそんなもの。」

「ああ、言っておくけれどかなりきれいと言っても所詮は中級者向けのものだから、夢子とかと比べては駄目よ」

「夢子ちゃんは優秀だからねえ。まあ早速複写してしましましょうか、原本は置いておくけど」

「原本置いておくんだね。私としてはどちらでも良かったけれど。」

「じゃあ私は早速二冊目を書くわ。今度のは簡単だから今回よりかなり早く書き終わると思う」

「あら、一冊目も十分早かったわよ？まあ無理はしないでね」

「それはわかっている。でもこんなお遊び十下級魔法なんてすぐに書き終わるでしょう。」

小悪魔 side

今パチュリー様は本を書いているようだ。もう既に一冊書き終えて今は二冊目らしい。魔界神様は本の複写をしているらしいが、今はただ一冊目の本を読んでいるようにしか見えない。

「魔界神様、複写はもう終わったのですか？」

「勿論よ。私って大概何でもできるから、ほら」

急に複写された本が五冊ほど出てきた。流石は魔界神様だ。私たちにできないことを平然とやってのける。まあ世界一つを創り上げるような人にできないことはそんなにないから仕方ない。

五冊しか写本を作らないのは価値の下落を防ぐためらしい。

「流石は魔界神様ですね。でもそんなことができるのならわざわざ複

写料を取る意味もないような気がするのですが」

「まあそうなんだけどね。売り上げの一部を貰うだけだからいいかな」と思ってるね」

パチユリー様がそれでいいというのなら私が口出しすることでもない。神を使うこと自体にお金を払っていると思えばいいのかな。そうすればたったあれだけのお金で創造神が使えるなんて安いものだ、という考えに至ることができる。

あれだけの仕事にそんなお金を払うと考えてはいけないのかもしれない。

そんな話をしているともう二冊目が書けたらしい。いくらパチユリー様にとっては取るに足りないような内容の魔導書でももう少しかかると思うんだけど。

今日はその二冊を店に持っていったら終わりらしい。明日から時間をかけて残りの二冊を書けらしい。私は邪魔にならないように街にでも行っていいようかな。

・
・
・

今日は夢子さんが街に買い物に行くらしい。私は特にすることも無かったので彼女について行くことにした。もともと今日は街に行く予定だったし。

夢子さんは従者として普段魔界神様の前では言えないような彼女の愚痴を言ってくる。主が自由奔放ならそれは大変だろう。

特に彼女の主は魔界の頂点という立場もある。うかつに外を出歩かせるわけにはいかないのだろう。

でも愚痴を言っている夢子さんはどこか楽しそうだ。やはり主従仲はかなりよろしいらしい。まあ見ていればわかる。魔界神様を説得するときでもなるべく主の意を酌んであげようとしているのはわかるし、魔界神様も夢子さんが本当に困るような事はあまり言わない

から。

私自身は主であるパチユリー様に感謝こそすれど、文句はあまりない。私を強くしてくれたうえに、彼女自身も私のすべき仕事を手伝ってくれるからだ。

「私はパチユリー様に言いたいことはほとんどありませんね」

「ほとんど、という事は少しはあるのでしょうか？」

「まあそうですね。パチユリー様が私の手伝いをしてくださるのはとてもありがたいんですよ。でも、私は百年以上頑張っているのにパチユリー様の方が圧倒的に手際が良くてですね、私のする仕事までパチユリー様がやってしまわれるんですよ。

だから私がパチユリー様に一言申し上げたいのは、もう少し私に仕事を回してくれ、という事ですね。従者のような立場の私の方が主より仕事をできていない現実に私自身とても衝撃を受けているのですよ」

「主がしっかりとっているというのも困りものなんですね。私はそういう事を経験したことが無いし、聞いたことも無かったので新鮮に感じますね。

今は仕事がしんどいと思うときもありますが、もしそういう立場になつたら私もそう思うのでしょうか。どちらの方が従者にとってはいいのでしょうか」

「それはわかりませんね。ただ私は今の生活もなかなか気に入っているのですがね」

「まあ私も今の生活には満足しているからこれでいいのでしょうか」

結局は個人の感じ方次第なのだ。どちらの方がいいかは明確に決められるものではなく、個人のいいと思う方がその人にとっての正解

なのだろう。

「さて、着きましたよ。先ずはここに来た用事を早めに済ませてしま
う事にしましょうか」

「そうですね、それにしてもあのあたりに住んでいるのは魔界神様と
夢子さんしか見たことが無いのですが、他にもいるんですよね」

「はい、ですが皆結構色々な役目がありますのであそこで会うことは
ないと思いますよ」

どうせ皆私よりはるかに強いんだろう。正直に言えばあまり会い
たくは無いからそれはありがたい。口には出さないが。

「食材を買い終えたので今日はもう帰るだけです。小悪魔さんはど
うなさいますか？」

「私はもう少し街にいますよ。帰ってもパチュリー様の邪魔になるだ
けでしょうから」

「そうですか、では私はお先に帰らせていただきますね」

夢子さんを見送った後はあまりすることが無い。どうしたらいい
のかよくわからない。

あ、あれは昨日パチュリー様が書いていた本だ。やはり内容はそこ
まで高度ではないので値段も魔導書にしては安めなようだ。パチュ
リー様に秘密で二冊とも買ってしまおう。

残念ながら原本は魔界神様のところに置いておくらしいので、手に
入れられるものはこれしかない。

因みにお遊び用の魔導書(?)は価値がそれほど重要では無いので
かなりの数の写本があるようだ。

「すみません、これとこれをください」

「はいよ、宋銭なら五十つてところだね」

「どうやら今のお金は文とか両とかが一般的になっているらしい。私はそんなこと一切知らなかったけど。」

「毎度あり。また来てくださいね」

もう来ることはできないかもしれないが、いい店ではあった。写本の方が多そうだったが、品ぞろえは良かった。

さてさて、パチュリー様が書いた本（写本だけど）でも読んでいようか。

おお、これは転移魔法を完成させる途中でできた失敗作の魔法だ。昔散々実験に付き合っつて壁に何度も埋められたのは良い（？）思い出だ。この魔法を完成形に持って行ったものは今パチュリー様が書いている本に載るものとほとんど同じくらいのレベルの魔法、つまりはかなり高度な魔法だ。

一度に転移させられる物は軽く家一軒丸ごとを超える程重くて大きなものでも可能なのだ。そんな魔法を作る過程に私は転移させられていたのだ。家一軒よりはるかに軽い私では指定された場所に転移することはできなかつた。最も近くの石の中に転移できる魔法は対象が家くらいならば正常に働いた。

こんなことを踏まえて完成された魔法ならば私くらいの軽さでも指定場所に送ることができるようになったわけだ。

流石にこの本に載っているのは石の中に転移させるだけで、家なんかは動かせないようになってる。もし出来たら危なすぎるからこんな庶民用に売らないだろう。

この本の巻末辺りには低級の生活魔法が書かれている。このレベルの魔法ならば普通に掃除洗濯をした方がかなり質が良いと思う。相当なものぐさでもなければこんな魔法に頼らずに自分ですると思う。

二冊目の方は一冊目とは比べ物にならない質にはなっているが、それでも雇われている者ほどではない。しかしこっちは全員が使えるわけではない分、そこそこの力を持っていて片付けや洗濯、料理が苦手な人には最適だろう。

魔法陣を書くのもそこまで複雑ではないし、詠唱も簡単な方だ。

読んでみて初めて分かった、パチュリー様が何故失敗作の方をあそこまで早く書き上げられたのか。失敗作の方には魔法陣が一切ないどころか詠唱すらいらぬ魔法ばかりだ。これなら本の題名通り“誰でもできる”だろう。

「ちよつといいですか？」何か声をかけられた。

「はい、何か御用でしょうか？」

「今あなたが読んでいるのは昨日ある店で入荷されたという本ですよね？実は私も一冊欲しいのですがどこに売っているのかわからなくて」

「それならこの道をまっすぐ行って二つ目の十字路を右に曲がったところにある店ですよ」

「ご親切にありがとうございます」

パチュリー様の本が売れるのなら私だって全力で協力する。

主の役に立つこと、それが従者の務めだから。

パチュリーside

書き始めてから体感時間で一週間、ようやく二冊を書き終えることができた。こういう時に眠らなくていいのは本当に便利だ。もし睡眠をとっていたら三週間はかかったかもしれない。

この二冊は書く魔法陣もとても複雑で詠唱も長いものばかりだ。複写は必要ないから神綺に渡せばそれで私は外に帰ろうと思ってる。

レミイたちにはいつまでいるか言っていないなかったとはいえ、流石に何も言わずに五年はすぎたかもしれない。紫にも伝えておこうかな。

「……………紫」空間連絡って楽だね。携帯より楽。

「急にどうしたのよ、帰りたくなつたの?」

「そういうことよ。そうねえ、三日後に迎えに来てくれないかしら?」

「構わないわよ。ではまたその時にね」

「迎えの目処も立つたし、明日神綺たちにも伝えておこう。」

「……………というわけで二日後に帰ることにしたわ。流石にいつまでいるか言わずに来てたわけだから。」

「あ、これ言っていた魔導書ね。絶対に無知な人に見せては駄目よ……………」

「勿論わかってるわ。でも私はまた暇になっちゃうわねえ」

「白蓮と毎日話をしていればいいんじゃないの?それか新しい子を創るか」

「それもいいわね。いつになるかはわからないけど次に創る子は人間にしましょう」

「まああなたは自由だからね、いつになるんだか。」

「白蓮にも別れを告げるから一緒に来てくれないかしら?」

「私と一緒に行かなければならない、でしょ。いいわよ」

「おはよう白蓮」

「おはようございます師匠、神綺様」

「実は私は二日後に外に帰ることになったのよ。だから今日が最後の修行よ。明日は忙しいだろうからね」

「そうだったのですか。でもまた会えるでしょうからその時にはゆっくりとお話しましょう。」

さて、今日が最後なのですね？何をなさるのです？」

「それは勿論最後と言ったら弟子の修行の成果を見るしかないわ。」

さあ、始めるわよ。あなたは自身の最も得意な方法で私と勝負する。私に一撃を入れられたらその場で免許皆伝よ」

「条件は一撃入れるだけなのですか？」

「ええ、それでも私の張る結界や障壁を崩さなければならぬわよ。それに勿論私からも攻撃はするから」

「わかりました、では始めましょう。私から行きますよっ！」

はっやいねえ。私では目で追いきれない。でも目で追いきれなかったことは今までも何度もあった。だからこそ私も色々対策は作っているのだ。

その一つは身体強化。苦手だができないことはない。身体全体に回すのではなく、目に一点集中させれば効率はかなり良くなる。目で見切った後は高速詠唱するために喉と口に集中させる。そうすれば他人からは全くもって聞き取れない程の高速詠唱が可能だ。

しかしこれはあくまでも理想の形。聖は集中しても見切れない。ならばどうするか、攻撃を受けないように360°。完全な障壁を十枚

程度張っていけばいい。いくら白蓮が超人でも金属の壁を十枚も破ることはできないだろう。それに今回は二枚ほどヒイロカネを混ぜている。正直これだけでも大抵は大丈夫だが、まあ念のため。

ヒイロカネは入手が非常に難しい。私の錬金術でも生み出すことはできないから、旅の途中も地道に探しては保管しておいたのだ。

ようやく白蓮の攻撃がいったん終了したようだ。次は私も攻めようか。白蓮は魔法使いである前に僧だ。勝手な偏見だが火と水には強そうだ。マーキユリポイズンでいいか。

水銀は人体には有毒、水銀の液状で白蓮の動きを制限し、毒で負担をかける。勿論殺すつもりはないからかなり弱めの毒になるように調合している。

「こつ、これは…水銀……………ですか」

「ええ、でもまだ終わらないでしょう？」

「勿論です。私は何としてでも貴方に一撃を入れなければならぬ」

良い表情だ。だがまだまだ攻めさせてもらおう。次はシルバードラゴンかな。

実はこれは私がかかりアレンジして実際にドラゴンが動いているように見せるために水銀で身体を形作ってみたのだ。さあ行け、ドラゴンよ。

液体は白蓮の物理攻撃をもともしない。形はすぐに戻る。さあ次だ。シルファイホルン。

空気の精霊も彼女の攻撃は受け付けない。スペルは重ね掛けしてはいけないがこの場においてはそんなルールは無い。

次の攻撃はエメラルドメガリス、巨石をもって白蓮を押しつぶせ。

「私は人を超えた存在、超人ですよ！」

ほーう、あの攻撃をしのぎ切ったか。あれが超人「聖白蓮」の原型

にあたるのかな。

「面白い、それでこそ勝負をする意味があるってものよ」 エメラルドメガロポリス

さっきの技をより格闘向けにしたものだ。魔界の高層ビル群に似ているような気がする。

「なんの、この程度の攻撃なんて」

白蓮はかなりタフだね。次はアグニシャイン

「私は火には強いですよ」

「では次、神の火ならどうかしら」 アキバサマー

「これはっ!?!」 「それは火之迦具土神の火を目標に作った技よ」

「参りました。流石の私でもあの火は対処のしようがしないですよ。

勝てる気がしません」

「そうかしら? あなたは初めに比べて随分と魔力の運用が上手くなっているわ。先ほどのものは神の火に近いものだったから畏怖しただけじゃないかしらね?」

でもあなたは師匠である私から見れば十分に免許皆伝には相応しいと思う。ただ肉体にすべてを任すことをせずにきちんと考えて技を繰り出せるようになっていたわ」

「…え? 師匠に一撃も入れられなかったのにですか?」

「私は一撃入れられなかったら免許皆伝とはならない、とは一言も言っていないわよ。」

この勝負を通じてあなたが確実に私の教えを理解し、吸収していたのならばつもりだったのよ。

強くなったわね、白蓮。前までのあなたなら途中の連撃で終わっていたかもしれないわ」

「そうだったのですね。」

それでは今までありがとうございます、師匠！」

「ふふっ、私もあなたと修行していて楽しかったわよ。」

「こちらこそありがとう、また会いましょうね」

「はい。次は私の封印が解けた後に、ですね」

「ではまたね、白蓮。修行は怠っては駄目よ」

「勿論ですよ。私は僧なんですから」

・
・
・

「さて、忘れ物はないかしら？」

「ええ、大丈夫よ。それでは帰りもお願いするわ。」

神綺、夢子も今までありがとうね」

「私も楽しかったからいいのよ。ではね」

「さようなら。また機会があれば会いましょうね、小悪魔さんも」

「はい、また会えるといいですね。さようなら」

まさか夢こあがしつかり成立してしまったとは。人生分らないものだ。

じゃあね、魔界。またいつか来られたら嬉しいわね。

私の書いた本は売れると分かったことだし。

悪戯的二十五話

パチユリー side

紫に送ってもらい、久しぶりに外の世界の空気を吸うとあまりの瘴気の薄さに少し驚いた。たった五年しかあつちにいなかったのに、すっかり馴染んでしまっていたようだ。

でも五年しかいなくても修行による自身の強化度で言ったら外の三百年分ほどにも相当したかもしれない。私自身はもう増えないかもしれないと思っていたが、意外に魔力の量も少し多くなった。

これは嬉しいことだ。まだ私にも伸びしろがある、それだけでモチベーションが上がるというものだからね。

「はい、ここでもいいのかしら?」

「ええ、十分よ。行きも帰りもありがとうね」

「まあこれくらいはね。ではまた呼んでくれたら応えるわ。寝ていなければ」

「藍に迷惑をかけては駄目よ」「大丈夫よ、仕事はしているから」

「そう、なら問題ないかもね。ではまた会いましょう。次は恐らく幻想郷でしようけれど」

「あら?もうすぐ来るのかしら?」

「この調子だと行くのは多分四百年弱あとだと思うわよ。それまで会わないのは多分もうここにいて困ることはないから」

「そうだったのね。まあでも困ったことがあれば言いなさいよ」

「わかっているわ。ではね」「ええ、さようなら」

「さて、紫も帰ったし私たちも帰りましょうか」

「そうですね。帰ったら掃除が大変かもしれませんね」

確かに本棚の掃除はしないといけないし、館の掃除も美鈴一人では少々無理があるかもしれない。館の中身が広くなっていないとはいえない。え門番兼メイドの真似事は一人で出来るものではないだろう。

「美鈴を労ってあげないといけないかもしれないわね」

「ええ、他に使用人が増えていなければですけどね」

使用人と言ってもこの時代じゃあまだ咲夜はいないからねえ。

「あら、もう見えてきたわね。結構近かったのかしら」

「恐らく話しながら歩いてきたからではないでしょうか」

「どちらなんでしょうね。でもそういえばさつき紫に送ってもらった森は少し館から遠い場所にあった気もしなくもない」

「という事はやはり話していたからですね」

「そうですね」……………あ、美鈴が見えた。今日もしつかり門番をしているようだ。

「こあ、少し待ちなさい。いい?……………」

美鈴 side

ここ五年ほどパチュリーがやっていた仕事も一部を除いて私の仕事になっていった。そのせいで私でもかなりキツイ。

日中は門番をし、夜はお嬢様と妹様の鍛錬に付き合ひ、それが終わったら掃除洗濯。流石に働きすぎではないだろうか。料理をお嬢様がしてくれている。なんでもパチュリーがいない間にも和食を食べられるように料理の勉強したらしい。

好きこそもの上手なれ、とはパチュリーに教えてもらった言葉

だったか。お嬢様はまさにそれだ。料理の腕はかなりのものになっている。

話がそれてしまったがいくら休養が少なくてもいい私でもこの量の仕事はしんどい。そうお嬢様に言うともメイドとして妖精を雇ってくれた。しかしむしろ仕事が増えた気がするのはお嬢様には黙っている。

最近はお嬢様も妹様もとても武器の扱いが上手くなり、一筋縄では勝てないようにもなってきた。私としてはとても嬉しいことだ。お嬢様と妹様には是非私より強くなってもらいたい。

そんなことを考えていたら顔をフードですっぽり覆い隠した怪しい二人組がやってきた。この者たちは何者だ、私が気を読めない相手などいままでほとんどいなかった。

「貴方たちが何者かは存じ上げませんが正当な理由でもない限りこの門を通すわけにはいきません。何か理由でもおありで？」

二人が何かこそこそ話しだした。何を相談しているのかはわからないが声からして男のようだ。

「この館に来た理由だと？笑わせるなよ。人がこの館に来るときの用など決まっているだろうに」

「つまりは襲撃ですか？しかし二人でいったい何ができましようか。

この館は吸血鬼の館、門番だけがすべてではありませんよ。まあ私に勝てるのなら、ですがね」

「ふんっ、面白い。私たちとやりあおうってのかい？二対一でか？

言っておくが私たちはもう準備運動としてこちらの妖怪どもは狩ってきたから助けは来ねーぜ」

「問題ありません。二人がかりでも私には届きませんよ」

相手にしたらなめられていると思うかもしれないが私はこの館の門番になつてからは一度として攻撃すらくらったことはない。

こちらの妖怪を狩ってきたくらいで弊がつているのなら問題はな

いだろう。

「ほうほう、そっちがその気なら私には好都合だ。親分、やっちまいましよう」

「そうだな。精々二対一にしたことを地獄の底で悔むがいい！」
……………来るっ！

子分の方は近距離を得意としているのか。で、親分は後方支援ね。これはかなり厄介だ。その上どちらもかなりの技術を持っている。

「……………なかなかやるじゃないか、ただの門番にしてはだがな」
くそ、もう既に何発か貰ってしまった。私が今まで作ってきた記録があっさりと散ってしまった。

「私も貴方たちへの認識を改めましょう。認めますよ、貴方たちはお嬢様の危険分子になり得る。」

だから私も全力でお相手しますよ」
「ほう、今までののが前座だったと認めたか。まあ認めたところで結果は変わらないがな！」

好き勝手に言いやがって。でもまさか私が本気を出さないとけない相手は攻めてくるなんてね。久々に腕が鳴る。こここのところ退屈続きだったから。

それにしても後方支援が厄介すぎる。接近戦の方は私が上回っているが後ろからの追撃は躲さないといけない。姿勢が崩れれば子分の方が仕掛けてくる。まずは後ろを何とかしないと前に集中できない。

私の持つ遠距離攻撃はまだ一つ。だが威力は鬼をも貫くほどに十分だ。一瞬だけ接近戦から引けば撃てるはずだ。

前をだまして一瞬で離れる！そしてすかさず撃つ！溜の代わりの集中など今までの実戦で散々磨いてきた。これで決める、絶対に外さない!!

「はっ！「む、危ない技だな」……………は？」

あの技が障壁に阻まれた、だと？彼は一体何者だ？!

「今のが貴様のもつ遠距離攻撃か？接近戦の得意そうな割には威力が高かったがそれだけだ。

それならもう少し種類を増やしておいた方が良かったな。ま、後悔しても遅いんだがな。

私が本当の遠距離攻撃というものを見せてやろう。くらえ『ラーヴアクロムレク』!」

「ぐつ、があ」 そんな……………この地に私に勝てる者たちがいいたなんて…。

「ふつ、もう終わりにしようか……………」

ああ、これで私も終わりか。門を護れない門番なんて…。

「そうですね、これ以上続けても意味がないですし。起きてくださいますよ美鈴さん」

…は？何故この男が私の名を知っている？私は名乗った覚えはない。

「早く起きなさい美鈴。何ぼんやりしてるのよ。」

それとも私がもう一発ぶち込んであげましょうか？」

「貴方たちは一体？」

「何言っているのよ美鈴。私たちが分からないの？」

「変装して声まで変えていたら誰もわからないですよ」

「そういえばそうだったわね。…ほいっと」

「まさかパチユリー?!帰って来たのですか？」

「どうか何故あんなことをしたんですか？」

「まあ話せば短くなるのだけれど、」長くならんのかい。

「五年もここを空けていたし、美鈴も最近鈍っていたでしょう？だから美鈴を驚かせるついでに私とこあの成果も試そうかな〜と思って

ね。まあただのいたずらよ」

「いたずらにしてはものすごい手の込みようだったんですけど」

「まあ普通に帰ってきてても面白くないからねえ。それなら少しでも美鈴で遊んでみようと思ったのよ。まあ今言うのもおかしいけれど一応ただいま」

「ああ、ええ、おかえりなさい。しかしこあちゃんもノリノリだとは思いませんでした」

「私は小悪魔なのでそういうのは別に嫌いではないのです」

喋り方まで完全に悪者っぽいから全く分からなかった。

「それにしてもお二人は戦闘前に何を相談し合っていたんです?」

「こそこそ話をしていたあれかしら?」

あれは私たちの気の隠蔽が有効だったことを確認しあっていただけよ」

「すっかり騙されてしまいました。次からはやめてくださいね、ただでさえ疲れが溜まっているのですから」

「やっぱりそうだったのね。五年もここを空けてごめんなさいね。館の仕事と門番の兼任は大変だったでしょう? お疲れ様」

まさかパチユリーから労いがあるとは。

「……………何か失礼なことを考えなかったかしら?」

「とんでもない。パチユリーが他人を労うのが珍しいと思っただけですよ」

「それは一般的には失礼なことに相当するわよ。はあ、まあ実際そうなのだけれど」

「でも料理はお嬢様がやってくれていたので結構助かっていました

よ」

「レミイが料理を…ねえ。彼女も不器用ねえ」

どういう意図があるのかさっぱりわからない。彼女の頭の中が知りたい。

「でもそれ以外はあなたがやっていたんでしょ？寝る暇はあったのかしら？」

「二応一日に一刻ほどは」

「レミイに言っておいてあげるから今日はもう疲れが取れるまで寝ていなさい」

「門はどうするのですか？」

「今日は鍵をかけておくわ。魔法でかけるから心配しなくてもいいわよ。」

じゃ、お休み」

「はい、おやすみなさい」

仕方がないが今日はもう寝させてもらおう。疲れがすっかり取れるまで。

パチュリースイデ

無事に帰ってこられた。勿論ここの妖怪を狩ってきた、というのは真っ赤なウソ。そんなことをしても私たちには何のメリットもない。デメリットがあるか？と聞かれても迷うのだけれど。

美鈴にはもう寝てもらった。日中はずっと門の前だし、夜は私が魔界に行く少し前からしていたレミイたちの鍛錬と館の仕事をしていたのだろう。この紅魔館ブラックすぎるのではなからうか。

メイド妖精はいたが全くやる気がなさそうだった。

ご飯だけはレミイが作っているらしい。これは恐らく私が居なく

なったら和食が食べられない、という建前のもと美鈴を気遣ってやっていたのだろう。直接言えばいいのに。

そろそろ吸血鬼はお目覚めの時間だ。彼女たちの顔を見るのも五年ぶり。大して変わっていないだろうけど。

レミリア side

今日も良い目覚めだ。私は毎日フランよりも早く起きて料理をしている。

私は和食が好きだが毎日それを出してもフランは喜ばない。だから私は様々な国の料理を作るように図書館の料理本を読み漁り、かなりの種類の料理を作れるようになった。

美鈴は顔には出さないが毎日しんどそうだ。一度言ってきたから妖精を雇ってみたがこれは完全に逆効果だった。美鈴の仕事が増えたような気がする。

もともと美鈴に少しでも楽になってもらいたいと思って始めた料理だがこれがとても面白い。つつい毎日やってしまつて今となつては趣味になつてしまった。

何故か今日は私がキッチンに行く前からテーブルに食事が用意されていた。まだ出来立てのようなそれは私の好きな白米と納豆、それに味噌汁が付いた素晴らしいものだ。

妖精メイドに和食を作る者はいない。それにここまでの味を出すにはかなりの経験が必要で私でさえまだ到達できていない。ならば誰が作ったのかはすぐにわかるというものだ。

「パチエ、帰って来たのかしら？」

「あら、よくわかったわね。まあ料理が置いてあったら流石に気づく

か」

近くにいた妖精メイドが変装を解いてパチエになった。

「それにこの味を出せるのはこの館ではパチエくらいよ。誰でもわかることね。」

「おかえり、パチエ。久しぶりね」

「ええ、ただいま。まだたった五年だけれどね」

「それでも私にとっては久しぶりなのさ」「レミイはまだ子供だものね」

「もうあの時の私とは別物よ。あれから美鈴のおかげでかなり強くなったんだから」

「ああ、そのことなのだけれど今日は鍛錬休みね」

「えっ、どうしてかしら？今日は私の番なのに」

「あなたから見て私がここを出てからの美鈴はどう？」

「そりやあかなりの仕事量があるし大変そうよ」

「そう、彼女は少し働きすぎているの。いくら彼女が強い精神と肉体を持っていようと疲れは溜まる。今日戦って分かったわ。今の彼女は本来の実力の五割も発揮できていないの。」

「まだこの館が無事なのは偏に攻めてくる敵が弱いからよ。紅魔館最強の盾は常に十全でなければならぬ。わかるでしょう？」

「ええ、確かにその通りだわ。私は使用人の事も考えられない無能な当主なのね」

「美鈴のために料理をしている時点で使用人の事も考えられているとは思わよ。ただ同じ目線に立てていないだけ。」

「私が帰ってきたから今日からは私が館の仕事を、美鈴が門番と鍛錬を、レミイが料理をすればいいわね。あなたの料理は食べたことが無

いから楽しみね」

「ふふん、頬が落ちるほどの料理を食べさせてあげるわ」

実際はそこまでいくほどではないと思うけど。

「というか貴方、私が美鈴のために料理を担当していることに気づいていたのね」

「少し考えればわかることだもの。当人でなければね」

美鈴は気づいていないものね。気づかれても困るんだけど。

「そうそう、私は美鈴のおかげで強くなっているけれどフランも同じように強くなっているわよ？大丈夫なのかしら？」

「勿論フランドールにも強くなってもらわなければならぬけれどあなたは勝てない、と思っっているのかしら？」

「負ける気は無いわね。フランの方が私より力は強いけど彼女は少し力任せ感があるから、技術で上を行っていけば負けることは無いわ」
「問題は本能的な狂気状態、か。彼女が狂気状態になる仕組みはわかっているからいつかは対策できるでしょうが今はどうしようも無いわね。」

でも大丈夫だと思わよ。確か前に聞いた情報からは狂気とフランドールは完全に意識を共有していないはず。だから狂気はフランドールの持つ武術を持っていない」

「そうだったのね。通りで最近狂気あまり怖さを感じないと思っただわ」

「それはあなたが随分と強くなったからでしょう。でもだからと言って全員が狂気を怖がらない、という事は無いわ。不用意にフランドールに人間を近づけないようにね」

「ええ、分かったわ。そういえばフランの狂気で思い出したんだけど

私最近よくわからないものが見えるようになったのよ」

「それは他に誰かに言ったのかしら？」

「いいえ、まだ誰にも言っていないわ」「そうなのね。まあいいわ、続けて」

「たまになんだけども、これから起こるかもしれないことがいくつもの分岐になって見えるのよ。」

それで実際起こることはそのいくつもの分岐のうちのたった一つなわけ。それに私にもある程度の選択ができるようなのよ。起こってほしくない未来は確実に起こることではない限りは消すこともできたりするの。これって私の能力なのかしら？」

「ええ、それがあなたの能力ね。見えている分岐はこれから起こるかもしれない未来、運命よ。あなたはそれを自由に、とまではいかないまでも操ったりできるわけ。でも恐らく自分の運命を変えるのと他人の運命を変えるのでは勝手が違うと思うわよ。」

あなたがそれを完全に制御する、つまり好きな時に見て好きなように操ることが可能になればあなたはもはや妖怪の域を超えてしまうかもしれない。

他人の運命に干渉するのは危険なこともあるから気を付けて能力の練習はしなさいね」

なるほど。何事も不完全が一番良いという事ね。確かに完全な制御ができてしまったら人生（妖生）は非常につまらなくなってしまうだろう。

全てが自分の掌の上なのが楽しいのは恐らく初めだけ。そのあとは予想だにしていなかったことは全くもって起きなくなっただけ抜殻のようになってしまうかもしれない。

そんなことにはなりたくはないし、私は刺激のある日々が良いから能力は不完全で止めておきたい。でもまずは制御の練習をしなければならぬ。まったく使えないのは吸血鬼としての誇りが許さないから。

魔女的第二十六話

パチユリー side

レミイが彼女の能力に気づいてからもう既に百年ほどが経過した。あれからレミイは毎日能力を使う練習と制御する練習を交互に行っていたようで、今ではすっかり自在に使ったり使わなかったりができるようになった。

そのおかげで今となっては敵襲のなさそうな日には美鈴が門にいないようになり、館の仕事を手伝ってくれるようになった。これは実際かなり助かっている。

理由は勿論無能妖精たちだ。彼女らは掃除を頼んでいた箇所が余計汚くなるほどの見事な掃除散らかしをしてくれる。そのせいで昔私とこあだけでやっていた時よりも仕事に時間がかかるようになっていた。ただでさえこの館は広いのに仕事が増えるなんて辛すぎる。

今日は珍しく美鈴が門番をしている。レミイが毎朝寝る前に運命を見て美鈴が門番をするのかどうかを決めているのだがどうやら今日はそういう日らしい。まあこの館が陥落する運命は全くなかったらしいが、襲撃してこない運命もまたなかったらしい。

つまりは美鈴だけで事足りるくらいの実力の者たちしか来ないという事だろう。仮に美鈴が突破されるなんてことがあってもこの館が陥落するには私とこあ、レミイにフランドールまで揃っている。陥落はしないが私とこあくらいまでは来る可能性がある。億に一つくらいだけだ。

そういうわけで今日は美鈴がいないからなるべく仕事は少なくしておきたい。妖精たちには少し悪いけれど今日は少し催眠術で大人しく働いてもらおう。

これをすれば確かに私たちの仕事は少なくなるけれど私の倫理観がそれを許さないのよね。服従させているわけではない分マシなだけで。

「パチュリー様、人間が攻めて来ましたが。私たちは美鈴さんの手伝いに行かなくても大丈夫なのでしょうかね？」

「大丈夫でしょう。彼女も戦うのが好きらしいし、変に助太刀をするつもりで行っても美鈴の邪魔になつてそれで終わりよ。それに私は戦うのは好きではないし」

「そうですか。でも流石に美鈴さんが突破されたら戦うのでしょうか？」

「それは当り前よ。でもあの美鈴相手に突破できるような奴はもはや人間の域を出かけているでしょうね。そういう者は街に戻つてもむしろ遠巻きにされるのよ」

「それで、結局は何が言いたいのですか？」

「あなたも少しは頭を使わないといけないわね。」

「いいかしら？人間というのは自分たちと異なるものを排除したがる気がある。そこに美鈴をも突破してしまうほどの実力者は果たしていられるかしら？」

「なるほど、つまり攻めてくる者たちには平均かそれ以下くらいの実力しかないという事ですね」

「基本的にはね。少なくとも街には強すぎる人間はいないと思つていいわ」

「どうやら今回は本当に弱い人たちしか来ていなかったようですね。もう退いて行つてますよ」

「それは拙いかもしれない。こあはここに残つていなさい。私は美鈴のところに行くてくるわ」

いくら何でも退くのが早すぎる。これは流石に囿でしかかないことがバレバレだ。それに最近街では魔女狩りとか言つて無実な人々が次々殺されているらしい。

となると襲撃者の目的はこの館ではなく私。だから館が陥落する

運命は見えなかったのだろう。こうなってしまうえば私が出るしか道はない。この館と無実な人々を助けるために何かできるのは現状私だけ。美鈴は止めるだろう、だけどこれは私の中では決定事項だ。

「おや、パチユリーじゃないですか。どうしたんです？襲撃者なら追いかけておきましたか」

「彼らの目的は紅魔館ではない、私一人でしょう。恐らくすぐに第二群が来るわ。私を、『魔女』を街に連行するためにね。だからあなたは館に戻っていなさい。私は彼らと街に行くから」

「確かに最近は魔女狩りが横行しているらしいですが貴方なら退けることも容易いでしょう？何故わざわざ自ら処刑されに行くのです？私としてはやめてほしいのですが」

「美鈴は魔女狩りの実態を知っているかしら？」 「いえ、あまり詳しくは……」

「魔女狩りは無差別的では無く差別的に行われているの。ある特定の動物を飼っていたり、社会的に弱い立場にある者だったり、が身に覚えのない魔女というレッテルを貼られて次々に処刑されているのよ。私なら彼らが受けている拷問も拷問に感じないし、処刑なんて生温いものでしかない。」

「本物の魔女というものを知れば彼らが如何に無実な人間をたくさん殺して来たかがよくわかるでしょう。だから私は行くのよ」

「しかしそれでは拷問や処刑が余計厳しくなってしまうのではないですか？」

「安心しなさい。そうならないように本物の魔女の見分け方を教えてくるから無実な人が処刑されることはほとんどなくなるはずよ。」

「だからあなたは安心して館で待っていなさい。レミイたちに詳細を教えるは駄目よ。彼女らが街を襲ってしまえば跡形もなくなってしまうから」

「貴方が必ず帰ってくるというのなら約束しましょう。私は館に戻ります。必ず無事で」

「当たり前よ。皆には少し出かけているとでも伝えておいて頂戴」

・
・
・

「やつと来たか。遅かったわね」「貴様がこの館に住むという魔女か？」

「その通りよ。今回の目的は魔女である私一人でしょう？私は本物だから仕方がないけれどあなたたちが今まで処刑してきた者たちは全員ただの人間よ。見分け方もろくに知らないでよく大勢処刑してきたものね」

「ふんっ、今からその仲間入りをする貴様にはわかるというのか？」

「当たり前じゃない、私は本物だから。街に行くまでの間に見分け方を教えてあげるわ。無実な者たちをこれ以上殺させないようにね。」

先ず魔法使いは魔力を豊富に持つ、故にほとんどの魔法使いは空を飛ぶことができる」

「でもそれだと意図的に空を飛ばなければいいだけではないか。なんの役にも立たないぞ」

「そこでとっておきの見分け方があるのよ。何か入れ物があるかしら？コップみたいなもの」

「これで良ければあるぞ」 「これで十分ね。これに水が入っていたとする」

ここで私の水の魔法を披露することで私が本物だと印象付ける。

「魔女が本物ならコップを持つと水の色が変わる。こんな風にね」

これは大嘘。実際にはわざわざ魔法を使わなければ水の色は変わ

らない。これで可哀そうな本物の魔法使いも処刑されない、というわけだ。

「なるほど、これからはこの方法で確実に魔女が見分けられるな。さて、街に着いたぞ。いつもなら裁判をするところであるが貴様はそれをする前に本物だと自白したからな、すぐさま処刑だ」

どこか楽しそうだね。こういう奴がいるから嫌なんだよね、人間社会は。

はい、そんなこんなで今焼かれている。火あぶりなんて私にとっては相性が良すぎる。殺す気がないのではないだろうか。まあ普通の人間だったら焼死してしまうのでしようけれど。

というかこんなに公開で処刑されるのね。見ている人間たちは何を思っているのだろうか。自分たちの敵が死んでいく様は愉快なのだろうか。

というか魔法使いってほとんどが人間上がりだから人間に敵対する者はあまりいないんだよね。人間たちは知らないからこんなことをしているんでしょうけど。

「な、何故貴様は炎の中にいて死なないのだ」

「今更かしら？ 私は本物の魔女なのよ。魔女にとっては処刑なんてただ温かい風呂に浸かっているような気にしかならないわね。さて、ここに集まった住人たちに問いたいのだけれど。

あなたたちはこれまで処刑してきた者たちが本当に魔女だと思っただのかしら？ ただ精神が不安定になっていた狂人が言い出したでたらめではないのかしら？ もう一度よく考えなおすことをお勧めするわ。これ以上付き合う義理もないし私は帰らせてもらおうわよ」

「あら？ 早かったですね。まだお嬢様たちは目覚めていませんがもう用事は終わったのですか？」

「まあね、見たくないものを見てしまったわ」？…見たくないものは？」

「人間の汚さよ。街の人間たちは人が処刑されているところを嬉々と見ていた。それが嫌になったから処刑の途中で帰ってきたわ」

「まあそれは仕方のないことですよ。人間は何かを抛り所にしなければ生きていけないのですから。自分さえよければ、というのも持っていて当たり前感情ではありませんし」

「まあねえ、そうではあるのだけれど。見たいものではないでしょう？」

「しばらくはここに人間が来ることもあるでしょうがあなたも我慢して追いついて頂戴ね」

「勿論ですよ。骨のない人間たちばかりだったら嫌ですが。」

…おっと、そろそろお嬢様が夕食を作る時間ですね。起こしに行かないと」

スカレット卿が当主だった時は食の好みが合わなさ過ぎたので食べていなかったが、レミイが作るものは人間の料理本を手本にしたものばかりなので今は皆で食卓を囲んで食べている。

その食卓も広いので個人の間隔は各二メートルくらいあるのだけれど。

「おはよう、パチエ」「おはよう、レミイ。今日は何を作るのかしら？」

「ふふん、今日は私の考えた料理よ。楽しみにしていなさい」

最近のレミイは本のレシピを真似るだけに飽き足らず自分で料理を考えて作ってしまうまでになった。料理の腕は流石に抜かされた。本当に彼女は吸収が早い。

「今日はどんな料理が出てくるんですかね。ほら、妹様、食堂に着きましたよ」

「うくん？ああ、おはようパチユリー」「ええ、おはようフランドール」

「パチユリーっていつも私の事フランドールって呼ぶよね」

「何かしら？妹様って呼んでほしいの？」

「違うわよ。ただ長くて言いにくいのかなくと思っただけ」

「確かに初めはそう思っていたけれど慣れればそうでもないのよ。さて、もうすぐご飯ができるから準備しておきなさい」

「パチユリーは今日の夕食はご飯だと思う？パンだと思う？」

「ご飯かしらね」

レミイが新しく料理を作るときはたいてい和食に近いものが出てくる。だから恐らくご飯。

「私もそう思うわ。まあお姉様の料理は美味しいから別にどっちでも構わないんだけどね」

初めの方はレミイの料理より人肉派だったフランドールもすっかり好みが変わってしまった。まあ百年以上も食べ続けていれば変わるのも当たり前なのかもしれない。

「はい、できたわよ。美鈴持ってきて頂戴」

「はい、分かりました。皆さん席について待っていてくださいね」

「お姉様、これは？」

「前にパチエがカレーを作ってくれたことがあったでしょう？それを私なりに工夫して色々と変えてみたのよ。ご飯と一緒に食べてね」

これはハヤシライスにそっくりだ。でもこの時代にハヤシライスなんてものは存在していないはず。レミイの趣味の度合いが分から

なくなってきた。

「そうそう、最近私が作り出した料理も多くなってきたじゃない？だからこれを機に私の料理本を出そうかな〜と思っっているんだけど」

レミイが書いたら必然的に妖魔本になってしまう。そんなおぞましいものを世に出すわけにはいかない。原本は絶対に世に出せないとして、問題は印刷だ。

確か人間が複写しても妖魔本になったはず。なら機械で印刷すればどうだろうか。多分これなら妖魔本にはならないだろう。なってしまうたら妖魔本の価値が激減してしまう。

「いいと思うわよ。でもその場合には人間の機械に製本は頼まないといけないわね。あと著者名もレミリア・スカーレットでは駄目よ。あなたは名を知られているから誰も買ってくれなくなってしまおうわ」

「有名人も大変ね。私の偽名は書くときに考えるとして、製本は人間の所かあ。パチエしか頼みに行ける人がいないわね。それでいいかしら？」

「私は特に問題は無いわね」「じゃあ早速取り掛かりましょうか」「まずはご飯を食べ終えなさいよ。まったくあなたは」

「ふふっ、そうね。話はそのあとね」

結局レミイが書いた本は珍しい極東の料理だという事でかなり売れた。原本はレミイがくれると言ったので謎空間に大切にしまわれている。

なかなかのお金が入ってきたおかげで生活に困ることは今のところなさそうだ。最悪私と美鈴は何も食べなくても大丈夫だしね。

「かなり売れたみたいで良かったわね」

「当たり前じゃない。この私の本なんだから売る前にこうなることは決まっていたようなものよ」

あらかじめ運命を見て決めていたのか、抜かりないね。

「それにしても最近襲撃がめつきり減っちゃったわねえ。折角美鈴に槍術を教えてもらったのに使ったのこの百年間でまだ三度くらいなんだけど」

「仕方ないのかもしれないわね。最近の人間は私たちを忘れようとしているのかもしれない。あと三百年もしないうちに私たちは存在を保てなくなるほどに弱ってしまうかもしれないわね」

「暢気ねえ。いつそのこと街でも襲ってみる？人間たちが忘れないように」

「そんなことをすれば血の供給源が無くなってしまいうわよ。あなたはあまり飲まないからいいと思っっているかもしれないけれど、吸血鬼という種族は人の血を吸わなければならないのよ」

「じゃあどうすればいいのかしら。領地を広げてみるとか？」

「それだと配下の妖怪が増えるだけで人間にとってはどうでもいいことなんじゃないのかしら」

「難しいわねえ。またすぐ血を採りに行かないといけないのに」

「そんなに少なくなっていたかしら？あと五十年分以上は私の空間の中で保存されているけれど」

「そんなにあつたの？いつそんなにとつてきていたのかしら」

「単純にあなたの飲む量が少ないだけよ。フランドールみたいな普通の吸血鬼なら五年分無いと思うわ。まあフランドールの分はもうすぐ採りに行かないといけないわね」

何せレミイは夜食に少し飲むだけなのに対してフランドールみたいな標準的な吸血鬼は毎食飲む上に量も全然違う。結果的に十倍以

上も違う事になってしまふのだ。

「フランは街には連れていけないからどうせ私が採りに行くことになるんだけどね」

採りに行くといっても献血まがいの事をして血を集めているだけだ。スカーレット家の領地内にある数々の街で行えばかなり簡単に必要分は集まってくれる。

「ただ日陰にずっと座っているだけじゃないの。暇な時間に本でも読んでいなさいよ」

「それはいいわね。実は次は美鈴の故郷の料理を作りたいと思っただのよね。そんな本あるかしら？」

「勝手に増える本の中に数冊あったはずよ。でも中華は美鈴の得意分野でもあるわ。彼女に直接教えてもらうのも悪くないのではない？」

「そういえば美鈴はパチエと会う前は自分で料理していたのよね。数千年も」

懐かしいものだ。彼女が料理をしている音がひどく恐ろしく聞こえたのももう千三百年ほど前のこと。私を助けてくれたのが美鈴で本当に良かった。

「ええ、何度も彼女の料理を食べさせてもらったけれどどれも本当に美味しかったわ」

「でも美鈴の負担を軽減するために私が作っているのにその美鈴に教えてもらったら何だか申し訳ないわ。だから私は自分で本を読んで勉強することにするわ。それに教えてもらったら味付けとかが被ってしまうし」

レミイも料理にはかなりのこだわりがあるみたいだ。でもそのこだわりのおかげで毎日美味しいものが食べられているから感謝しているけれど。

「じゃあ採血の日に持っていけるように何冊か探してみましようか。」

「こゝろ、中華料理の本を何冊か持ってきてもらえるかしら？」

「お安い御用ですよ。確か二日前に入ってきた本も入れて七冊ほどあつたはずですが四冊ほどでいいでしょうか？」

よくそんなにきっちり管理できているものだ。流石は司書、というべきか。

「そうね。そんなもので十分よ。またいるのなら取りに行けばいいのだし」

「こちらになります。言語は流石にあちらのもので、わからないければ私かパチュリー様にでもお聞きくださいね」

「ありがとう、小悪魔。またその時になったら呼ぶかもしれないわ」

「何でもお申し付けくださいね。それでは」

「ねえパチエ、これはどういう意味なのかしら？」

レミイは料理本を読むためだけに毎回言語の勉強をしている。私たちがいなくなったときは独学だったらしいが今は主に私が先生をしている。

和食を作れることからわかるようにレミイは日本語も読み書きはできる。喋ることはまだできないようだが。

採血は二月後。それまで必死で勉強すれば彼女の頭の出来なら料理本くらいは軽く読めるようになるだろう。

「これは炒める、という意味よ。他にもこれは蒸す、こっちは焼くね」

「流石はパチエね。本当に貴方より賢い人なんているのかしら」

「ええ、あなたもこれから知ることになるけれど世界は広いものなの

よ。

私より賢い人もいる、美鈴を数分で地に付けてしまうような人もいるのだから」

「あまり会いたくないわね。でも貴方が楽しそうに語るのならその人たちも悪い人たちではないのでしょうか？」

「勿論いい人たちよ。でも初対面だと対応はかなり違うから気を付けた方がいいかもしれないわ」

特に永琳はやばい。私の初対面時は輝夜がいたから何とかなつたけれど、レミイが初対面になるのは恐らく永夜。絶対に怖い雰囲気だろう。

紫もやばいかもしれない。恐らくこちらが幻想入りするときの異変が初対面になる。まあその時はこの館に私もいるしひどいことにはならないと思うのだけれど。

「私も相手も永い生を持つ者。いつかは会う事になるのでしょうねえ。果たして私の力は通用するのかしら」

「それはどうかしらね。どちらも私の知る限りでは地上で一、二を争う実力者であることは間違いないもの」

その時にレミイがどれほど強くなっているのか、いまの私では想像もできそうにないね。

まあどれだけ強くなっても月に行けばコテンパンだけれど。

満月の第二十七話

レミリア side

稀に来る襲撃者どもを時に美鈴に任せ、時に私が自ら戦うという事をずっと続けているが普段は暇で仕方がない。

私がこの世に生を享けてからかれこれ五百年に近くなっている。能力は勿論、料理の腕前だつてとつくにパチエや美鈴を抜かしたし、戦闘においても紅魔館内を除けば私に敵う者は西洋にはいない程強くなった。

しかし百年少し前くらいからだろうか、人間が突然力を持ち出して妖怪を滅ぼしにかかってくるのだ。

私たちは人間たちの持つ銃の弾速に対応できるほどのスピードを持つている上に、館自体はパチエの魔法障壁で覆われているから被害が無く済んでいる。だが私たちの領土内の妖怪たちはそうもいかなので次々に人間にやられてきているのだ。

館に来た妖怪たちはできる限り匿うようにしているがここに来るまでにやられる妖怪たちも多い。

妖怪は肉体よりも精神に重きを置く。しかし動物から妖怪になっている者は肉体の方が重要になる。ここらの妖怪たちはそういう者が多かったので次々やられてしまっているのだろう。

最近の人間は私たちの存在を否定すれば私たちが一気に弱体化することを知ってしまったようだ。

『あと二百年もしないうちに私たちは存在を保てなくなるほどに弱つてしまうかもしれないわね』

これをパチエが言ったのは三百年弱前だ。彼女にとってはこのことも想定内だったのだろう。私はあの時そんな馬鹿な、としか考えていなかった。私たちのような強い存在は簡単に忘れられることはないだろうと思っていた。

ある者はそんな私に対して『運命を見れば分かったのではないのか』と言うかもしれない。しかしながら運命というのは思っている以

上に複雑に絡み合ったものなのだ。何処か一つ間違えてしまえば直ちに未来は変わってしまう。

そんな不確実な物を頼ってこの館に誰が避難してこようか。もともと我の強い妖怪たちの事だ、呼びかけても誰も応じないだろう。

ましてや『人間に滅ぼされるかもしれないから紅魔館に避難しろ』なんて言っても聞く耳も持たないはずだ。

だからこの結末もある意味では仕方のないことなのだ。可哀そうではあるがこれが彼らの運命だったのだ。私が干渉しない、本当の意味での彼らの。

最近は何となく退屈続きだったが今日はどうやら楽しくなりそうだ。

「美鈴、今日来る吸血鬼ハンターは私が相手をするわ。なかなか面白いことになりそうだからね」

「あら、そうなんですか。ということはお嬢様が起きている時間帯に来るのですか？」

「律義に今夜来るみたいね。夕食後みたいだから食事は大丈夫ね。」

あと今日は日中の門番はしなくてもいいわ。それじゃ、おやすみ」

「あ、はい。おやすみなさい」

楽しみはあとに残してこそ。来たら存分にかわいがってあげましょう。

パチユリーside

今日の朝食時の会話から察するに今夜はレミイが戦いたいと思うほどのハンターが来るらしい。正直に言って不安しかない。私の所まで被害が来なければいいのだけれど。

「パチユリーはどう思います？今夜来るハンターについて」
「そうね、先ずレミイが出たがるくらいだから強い人間がいるのは間違いないと思うわ。それが能力者ね。どちらにしろ厄介であることには変わりない。レミイが負けることは無いでしょうが油断はできないわね」

「まあお嬢様が万一危機に陥った場合にはしつかり戦いますよ。」

それにしても今日は妖精たちが静かですね。どうしたのでしょうか」

「妖精たちなら外で遊んでもらっているわ。こゝかに頼んで。結果があるから館の敷地からは出られないし、隠れても位置探知はすぐできるように仕込みをしているから安心していいわ」

「それって雇っている意味あるのでしょうかね」

「別に給金も出ていないしレミイが自由を保障しているのだからいいのよ。」

さて、私は洗い物をしておくから美鈴は洗濯を頼むわ」

「はい、分かりました。そういえば図書館の掃除はどうするんです？」
「普通にするわよ。しなかったら年中咳が出てやってられないもの。ただでさえもう薬の在庫が切れそうなのに。ん？そうだ。美鈴って植物の世話が得意だったわよね」

「そりゃ勿論。心も癒されますし」

「私の喘息用の薬草も一緒に育ててくれないかしら？種は私が用意するから」

「いいですよ。いちいち採りに行くのも面倒ですもんね」

流石美鈴、優しいねえ。

「ありがとう、では仕事を始めましょうか」

「切り替え速いですね。まあ早く終わらせるに越したことはありませんからね」

さて、もうレミイも起きてきたし襲撃者はいつでも来てくれて構わないのだけれど。

「ねえレミイ、いつ来るのかしら？」

「もう来るわ。だから貴方たちはその辺に隠れていなさいな」

：おっと、誰かが結界を通過したようだ。「来たみたいよ」

「相変わらずパチエの障壁は便利ねえ」

私の張った結界は外から来るもののみを通過させる結界だ。私の意思で出口を空けなければ、入ってきた者が外に帰ることは不可能になっている。勿論私を殺しても外に出ることは可能だが。

つまりこの館の敷地に入った時点で十中八九人生は終わる。逃げられたらフランドールが食べる用の肉が無くなってしまうし。

フランドールもたまには人肉を食べたくなるらしい。レミイは全然そんなことないのにねえ。レミイの場合は人間と戦ってそれで終わりだ。殺しても食べることはない。

「どうやら来たのは十五人ってところね。あなた一人で大丈夫なのかしら？」

「大丈夫よ。私だってそこの有象無象に負けていられないわよ」

そうか、なら私たちは隠れてみることにしよう。

「貴様がこの館の当主か？随分と幼いものだ。他の奴らはこんなチビにやられたつてのか。なっさけねえなあ」

滅茶苦茶煽るね……………と思つたら首飛んでたわ。周りにいた他の者たちもようやく戦闘態勢に入ったようだ。遅すぎるけれど…。

何か瞬間移動みたいにして攻撃を避けている子供がいる。やっぱり能力者がいたから戦いたかつたっぽいね。他の人間たちは弱いし……………といつか普通にスルーしていたけれど、あれって咲夜になる子じゃないの？

レミイの言っていた面白いことってそれだったかあ。まあ変化の好きなレミイにとつては面白いのかもしれないわね。

???
side

私には両親の記憶がない。いつ、どこで生まれたかも定かではない。物心がついたころから何故か魔物をハントする団体に属していた。

私には誰も知らない、否、誰にも理解できない秘密がある。私は時間を止めることができる。気づいたのは数年前の事だ。私が魔物に返り討ちにあいかけたときに急に世界が凍った。

私は何も理解ができなかったけど持っていた投げナイフを魔物に投げつけた。ナイフは不思議と空間に止まり刺さることはなかった。

でも私が止まった時の中で途方に暮れていると今度は急に時間が進みだした。時間が進めばナイフは動く。ナイフは魔物に刺さり、私は命を散らさずに済んだ。

この時の私はこの力が誰でも使えると思っていたから、ようやく使えるようになったと誰かに報告したかった。その時の私は有頂天だった。

しかしそうではなかったのだ。何人の大人に聞いても私の力は眉唾物だと言われ続けた。愚かだった私はその時にようやく気付いた。この力は私だけが使うことができるのだと、他の人間たちにとっては気持ちの悪い力なのだ。

私は悔しかった。私は世界でたった一人の特別な人間なのにそれ

を認めてもらえないことが。

それから私は多くの魔物をこの力をもって倒してきた。私は自分の実力に絶対の自信を持っていた。負けたことなどなかったから。

それからしばらくして団体の中で吸血鬼を狩るという話が出た。私もそのメンバーに選ばれた。

吸血鬼と言えば恐怖の象徴。この地域では圧倒的な力を持っている。やっと私の実力が認めてもらえたのかと思った。

そして昨晚だったか、私の行く理由を盗み聞きしてしまった。今となってはその理由も仕方のないことだと思う。

『吸血鬼を殺してもあの銀髪の娘だけは連れ帰ってくるなよ。正直なところ気味が悪いと思ったらありやしない。他の奴らには吸血鬼に殺されたとしても言っておけばいいからよ』

『勿論わかっている。そのために今回連れて行くんだからな』

聞かなかったことにはできなかった。昨晚はよく眠れなかったし、今日の日中も声をかけてくるリーダーの裏の顔を知る私には地獄のようだった。

そして今、私と共に来た人間たちは初めにやられたリーダーを含めて全員殺された。私は自分の力によって吸血鬼からの攻撃を避け、今生きていると思っていた。

しかし違ったようだ。私への攻撃が圧倒的に少ない上に緩い。一度だけものすごい量の弾幕が来たが私の能力をもってすれば抜け出すことは容易い。

「何故私を殺そうとしないのよ。あんたなら他の奴らみたいに一瞬で私の事を殺せるはずでしょう」

「勿論可能よ。でも私は貴方を殺すのは勿体ない気がしてね」

「何を根拠にそんなことを言っているわけ?! 私は街に帰っても居場所がないのよ」

「運命がそう告げるのよ。あら、貴方には理解できないわね、私の能力は」

っ、それって!?

「大方貴方の居場所がないのも貴方自身の持つ能力のせいでしょう? 見たところ時間を操っているようね。……………あら、何故分かったのか気になるかしら?」

貴方は初め瞬間移動じみたことをしていたわよね。その時は私も瞬間移動系の能力かと思っていたわ。だから確認のために殺す気がないのに攻撃をしていたの。

貴方の能力が瞬間移動ならば大量の弾幕を抜け出すにあたって貴方の服に傷は付かない。傷が付くという事は弾の間を進んで抜け出した、という事に他ならないのよ」

なるほど、だから私の持つ力を言い当てることができたのか。

「それで? 私を生かしてどうするつもりなの?」

「貴方にはこの館のメイドをやってもらおうかと思ってね。何、難しく考えなくてもいい。館の雑事の全てをやってもらおうというわけではないし、食事もある。給金は無いがな」

街に帰っても私には居場所がないがこの館にいても居場所はなさそうなんだけど。

「ちなみに断つても無理矢理やらせるがな」

選択の余地なしか。まあいいんだけど。

「分かったわ。この館で働いてあげる」

「ならまずは喋り方を矯正しようか。それと貴方には名前があるの？」

「ないわ y……………ないです」

「じゃあ私がつけてあげるわ。そうねえ、貴方の名前はこれよ」

何か紙に書き始めた。『十六夜咲夜』

私はこの国の文字も読めないのにどこの文字かもわからないものを読めるはずが無い。

「なんと読むの…ですか？」

「読み方は知らないのよね。意味は分かるんだけど。つてことでパチエ、教えて」

パチエと呼ばれた人が壁から急に現れた。見たところ吸血鬼ではない。

「これの読み方は『いぎよいさくや』姓が十六夜、名が咲夜よ」

「意味は日本でいう十五夜、つまりは満月よ。私の従者にはぴつたりの名前ね」

「ええ、レミイにしては随分と良い名前を考えたものね」

「それはどういう意味よ」「そのままの意味だけど」

このパチエさんとレミイさんは大変仲が良いみたいだ。と思っただら今度は長身の女性と変わった羽の生えた子ども、悪魔らしき少女が出てきた。

「あら、全員揃ったみたいね。どうせなら今自己紹介をしておきましょう。」

私がこの紅魔館の現当主にして誇り高き吸血鬼、レミリア・スカレットよ」

「私はその妹、フランドール・スカーレット」

「今この館の仕事の大半をしているわ。パチュリー・ノーレッジよ。種族は魔法使い」

「私は普段は門番をしています、紅美鈴です」

「私はパチュリー様の従者的立ち位置にいます。小悪魔と呼ばれています」

「私は今日からこの館で働くことになりました、サクイヤ・イズアヨイです」

「言いくいなあ。」

パチュリーside

咲夜滅茶苦茶言いくそうにしているね。

「自分の名前くらいは流暢に言えるようにした方がいいわね。ついでだしレミイもどう？日本語の勉強」

「全員がそろった今こそ重大発表をするべきね。この度

.....引越すことにしました」

もうちよつと言いつ考えた方が良かったのではないだろうか。あまりにもシンプルすぎる。

「お、お嬢様？いったいどういう事なのでしょうか？」

「だから引越すのよ。日本にあるという幻想郷にね！だから日本語の勉強は近いうちにするつもりだったのよ」

幻想郷、と聞いて何か言いたげにしている美鈴には目配せして黙つてもらおう。レミイがそれを知るのはあちらに到着して落ち着いてからの方が良い。

「なら話は早いわね。咲夜とレミイ、フランドールも今日から勉強ね。私とこあと美鈴が先生役をするわ。マンツーマンの方が頭に入りやすいでしょうし」

さて、誰が誰を担当するべきか。

「誰に教えてもらいたいかの希望はあるかしら？ああ、レミイはこあね。あと話すだけなのだし」

「私はどっちでもいいよ。でも咲夜にはパチュリーが付いた方がいいんじゃない？私たちの時みたい小さい子にはパチュリーの方がいいと思う」

「私もそう思いますね。何事も小さいうちが肝心ですから」

「では咲夜もそういう事で構わないかしら？」 「はい、よろしくお願ひします」

喋り方ももう慣れてきているみたいだし頭の出来はかなりよさそうだ。私が教える子ってどうして皆頭のいい子ばかりなのだろうか。教え甲斐があつてこつちも楽しくなるからいいのだけれど。

まさかたった一年で皆喋れるようになるとは思わなかった。レミイは別として。

最近は何美鈴とやっていたみたいに日本語だけで生活している。咲夜も仕事に慣れてきたようで、最近はかなり明るくなったようだ。

「パチエ、転移の準備はできたかしら？」

「転移魔法なんて昔作った失敗作の中の奴で十分でしょうから準備も

何も無いわよ。

レミイの方こそ本当に幻想郷に宣戦布告するの？私は参加しないわよ」

「そのためにかろうじてここにたどり着いた妖怪たちを保護していたんじゃないの。でも貴方が参加してくれないとなるとあとこの館からは美鈴だけねえ」

「彼女も参加しないと思うわよ。挑まれる決闘には参加しても挑む決闘はしないと思うわ」

「そうだったらフランに参加させるわけにはいかないから、あちらで戦力補充かしらね」

「まあ精々頑張りなさいな。それで、出発はいつにするのかしら？」

「なるべく夜に着きたいし、戦力を集めたうえで満月の日に戦いたいから三日後の昼間かしらね」

「そう、分かったわ。館の他の皆にもきちんと伝えておきなさいよ」

「わかってるわ。それにしても引越した事なんてしたことなかったから楽しみだわ」

「私も引越したというのは初めてだから少し楽しみかもしれないわ」

まあ私は基本定住せずに過ごしてきたからなあ。同じところに五百年住んでいるのは最長だ。その次に長いのが恐らく諏訪か中国。それでもここの方が二倍近く長い。

関係ないけれど日本に行ってひと段落着いたら昔の着物で過ごすかな。もともと日本人だから着物への憧れはやっぱりあるし、七百年ほど着物で生活していたからそつちの方が落ち着く。

勿論帝から頂いたものは着ずに空間にしまつてある。絶対に虫に食われたりしたくないからね。

「さあ、今から起動するわよ。結構な衝撃が来るでしょうから何かにつかまっていなさいよ」

失敗作からさらに少し修正した。あのままだと建物とその中身だけが転移してしまって門や庭がここに残ってしまう事に気づいたからだ。なんとか間に合って良かった。

皆ちゃんとか何かにつかまっているね。さて、久しぶりの日本だ。転移先は紫に教えて貰った座標に設定。さあ、行こうか。

幻的二十八話

パチユリー side

かなりの衝撃が来てふらついてしまったがどうやら無事に幻想郷に着いたようだ。自然豊かな匂いがする。

「ねえパチエ、ここは幻想郷であってるの？」

「確認したいのなら外を見てきてみなさい」 「わかったわ」

ここは間違いない幻想郷だがレミイも一度この空気を吸っておいた方がいいだろう。今は夜だから出歩いても全く問題がないし、湖の霧も晴れているはずだ。

「美鈴も外の空気を吸ってきてもいいのよ？この空気は懐かしさを感じられると思うわよ」

「そうですね。でもそういうならパチユリーもですよ。どうせなら皆で出て行ってみますか？」

「そうですね。そうしましょうか」

紫が夢をきつちり実現させて創った理想郷。私が日本にいた頃はまだ彼女に同調する者は私と美鈴とあと少しくらいしかいなかったはずだ。よくもまあ創り上げたものだ。幻想郷の賢者たちも変わった人たちが多いだろうに。

彼女の苦労もわかつてはいるが次に起こる吸血鬼異変は私には止めることができない。これは幻想郷にとっても非常に重要なことになるはずだから。

レミイが欧州で最後にかき集めた妖怪の数も大したものだ。数百はいるかもしれない。かなりの人数をもって絶対に勝てないと分かっている敵地に攻め込む、か。まるで月面戦争の時のようだ。

今のレミイはあの時の紫と同じだ。あの時の彼女は負けるとは思っていなかったし、今のレミイも思っていないはずだ。レミイの場合は見ようと思えば運命を見てわかるのだろうか？そうしようとは

しない。

それは戦う前から結果が分かると面白くないからだろう。結果の分からないレミィと紫、分かり切っている私。構図は完全に一致する。

流石に古い友人の世界を敵に回して戦うのは避けたかったし、戦っても私程度ではどうにもならない。まあ私ではどうにもならないというのは月に行った時もだったのだけれど。

「ここは空気が美味しいわね。前に住んでいた場所とは大違いだわ。ねえ、パチエもそう思うでしょう?」

「ええ、あちらがどれだけ空気の悪いところだったのか身に染みて感じるわ。それで?あなたはいつから仲間集めを始めるのかしら?」

「勿論、今からに決まっているじゃないの。そのために夜に来たんだから」

「妖怪は夜の方が活発だものね。でも気をつけなさいよ。幻想郷の妖怪は日本語だけれど、あなたが連れてきた妖怪たちはあちらの言葉なのだからケンカを起こさないようにね」

「それは確かに心配ではあるわね。そんなことより昼間はこの館が見つからないように結界でも張っておくのかしら?」

「そんなことをする意味は無いわね。結界の管理人はこの地を覆う大結界を何者がが通過した時点で感知するはずだもの。私たちの侵入はもうばれているというわけよ」

「なんだ、そうだったのね。まあ昼間は門番だけ置いて、私は大人しくして目を付けられにくくしておきましょう」

美鈴がいる時点で紫には私も居ることはばれるだろうけれど。

この幻想郷に大結界が張られてからはそれ以前よりもさらに流入する妖怪が増えた。その背景にはやはり人間による妖怪の淘汰があるのだろう。

ほんの二、三百年前くらいの間は妖怪に怯えながら生活することを仕方のないことだと考えて生活していた。しかしその生活を終わらせるものが大陸の西の方から伝えられてしまった。

人間は夜の闇を電気で克服し、妖怪や神の仕業だと考えられていた現象を明確に説明しだしたのだ。彼らは自分たちを脅かす妖怪を滅ぼしにかけ、知らぬ間に神まで滅ぼしていたのだ。

やはり私は間違っていたいなかった。今この幻想郷が無ければ恐らく妖怪の数は今生きている数の四分の一もいなかっただろう。いくら力が強くとも存在が保てなければ意味がない。

そして昨夜、今まで外の世界にいた妖怪がまたこの幻想郷にやってきたらしい。最近は結界を通る者が増えてきたせいで確認するのも煩わしいので、来た者たちの確認及び監視はすべて藍にやらせてもらっている。

大結界と言えば張ると決まった時にはとても大変だった。何故か管理される側の人間たちには絶賛されたが、妖怪たちを納得させるのは大変だった。幸い力の強い鬼たちは既に地底にいたから酷い事態にはならなくて済んだのだけれど。

結界を通ってくるときには大体が一個体ずつ来る。妖怪は天狗や河童、鬼などを除いて基本的に群れないからだ。

しかし今回の者たちは建物ごと何百体も来たらしい。建物ごと来る時点で相当な実力を持っているのは確かだろう。それに加えて建物は相当な大きさの洋館らしい。

仮にかなり遠くから何百もの妖怪を転移させるのをたった一人でしたのなら恐ろしいほどの実力だ。負けることは無いだろうがなるべく戦闘は避けたいところである。特に今は幻想郷の妖怪たちが弱ってしまっている状況だ。これも何とかしなければならぬ問題の一つだ。

藍からの情報では夜の間は活弁に外を出歩き、幻想郷にいた妖怪た

ちと接触したうえでそのほとんどを館に連れ帰っていたらしい。これはあちらに侵略の意図があるとみていいだろう。

わざわざ仲間を集っているところからして今すぐに戦闘、とはならないだろうが準備はしておくに限る。一応私の方でも相手の様子を窺っておこう。

あれは………あの門に立っているのは………もう五百年前に別れたきりの懐かしい友人だ。藍は接点が殆んどなかったから気づけなかったのだろう。

という事はあの館にはパチュリーとそのお供の悪魔がいるとみていいだろう。そして館を転送してきたのはパチュリー一人、か。

はつきり言って幻想郷側が勝てる気がしなくなってきた。美鈴だけでも十分に厄介なのにそれに加えてパチュリーとあの悪魔がいる。それにこの館の当主の実力はわからないがああ美鈴を門番として使えるほどの実力はあるのだろう。

パチュリーに昔聞いたことがある。私は吸血鬼の館にいる、と。ならばあの館の主は十中八九吸血鬼だろう。あの時は吸血鬼が何なのかさがさっぱりわからなかったから調べてみたところ、どうやらかなり歴史の浅い種族であるようだ。

しかし膂力は鬼にも劣らず、速さは天狗と同等、そして一番の特徴はその回復力だ。頭以外が吹き飛んでも一晩で完治するらしい。

これはかなり厄介だ。私以外が相手なら数多くある弱点を突いてもそれを上回る驚異の回復力で千日手になるのがオチだろう。満月の下ではさらに強力になるみたいだ。

妖怪は皆満月から力を得るが、吸血鬼の場合のそれはほぼ不死身になると考えていい。あの館の登場で幻想郷のパワーバランスが大きく変化してしまった。

もうすぐ阿礼の九代目が生まれるが、その子にはかなり驚かれるかもしれない。幻想郷のパワーバランスが変化すること自体があまりないことだからだ。

直近でも風見幽香がやってきた時なんじゃないだろうか。間違いなく今回の方が変化が大きいのが本当に嫌になる。

「藍、此度の戦はかなり危ういものとなるでしょう。くれぐれも油断はしないように」

「紫様がそこまで言うほどの者たちなのでしょいか？彼女らが集めている妖怪の数は確かにかなり多いですが実力は大したことはないと感じましたが」

「能ある鷹は爪を隠すのよ。覚えておきなさい」

決戦は満月の晩になるだろう。それまでにこちらも入念に準備を整えておかなければ。幻想郷があこの館の天下になるのだけは阻止しなければならぬ。

パチュリールside

いよいよ満月がもうすぐ昇る、という時刻になった。私は全く関係がないのだけれど。

レミイが集めた妖怪たちは連れてきた者とここにいた者を合わせて七百近くになったのではないだろうか。私は図書館に籠っていたから興味はなかったが、咲夜によるとかなり鬱陶しいらしい。

それはそうだろう。何せ七百近くがこの館内部にいるのだから。咲夜がいなければこの館には入りきらなかっただろう。

因みに咲夜の能力に幅を与えたのは私。彼女は時間を止めるだけの能力だと思っていたらしい。そこで私が時間と空間の密接な繋がりや、時間の加速などを教えてあげたわけだ。

そんなことがあったからか、ただ単純に仕事や勉強で私と一番関わっていたからかは知らないが、咲夜は私に一番懐いているようだ。私的にはレミイにも懐いてもらいたいのだけれど。今は身長も同じ

くらいなのだし。

彼女は今日は戦わないので、ここで本を読むことにしたらしい。というか上には妖怪が非常に多いので最近の咲夜は大体この図書館にいて、仕事は美鈴が行っている。

咲夜と美鈴、それにフランドールが来て少ししたら不意に外が騒がしくなり始めた。スペルカードを用いない最後の戦争が始まったのだ。

と思っていたのに図書館に誰かが来た。まさか紫が館内にスキマを開いて刺客を送ってきたか。

「こんばんは。あなたは一体何をしに来たのかしら?」

今この場には送られてきたであろう刺客のアリスと私しかいない。変に拗れることはないはずだ。

「何をしに来たって…貴方は何か知っているのではないのかしら?」

「知らないわね。それに私は戦争に参加していないのにどうして紫が刺客を送ってきたのかさっぱりわからないわ」

「あら、紫と知り合いだったのね。まあこの際どうでもいいわ。私が送られたのは紫の考えよ。私にもさっぱりわからないけれど」

「ああ、なるほど。そういう事だったのね」 「そういう事ってどういう事よ」

「貴方が今手に持っている魔導書、きちんと読めるのかしら?」

「これ? 『Gurimoir of Alice』はまあ大体読めるわ。でも 『The Grimoir of Patchouli』はあまり読めないわね」

「へえ、『The Grimoir of Patchouli』も少しは読めるのね。かなり若い魔法使いみたいだけどなかなかやるじゃない」

「貴方に何がわかるのよ。この本はこの世界には無かった本なのよ。それも原本のみで置いてある場所も誰も入れないようなところだったのに」

「自己紹介がまだだったわね。私の名前はパチュリー・ノーレッジ、その本の著者よ」

「……………えッ?!パチュリーさんだったんですか?」

急に敬語になった。何故かはわからない。

「パチュリーでいいし、敬語もいらさないわ。私がパチュリーなのは本当よ。神綺に勧められて書いた私の本気の二冊のうちの一冊。まさか彼女の部屋からくすねてきたのかしら?」

「……………人間きの悪いことを言わないでよ。この本は貰ったのよ。いつか読めるようになりなさいってね。もう一冊は貰えなかったけど。」

ああ、そうそう。私の名前はアリス・マーガトロイド、元魔界人よ。よろしく、パチュリー」

「ええよろしくね、アリス。話が脱線してしまっていたけれど紫があなたをここに送り込んだ理由を私の予測で良ければ教えてあげるわ。」

紫と私はかなり昔からの友人なのよ。ああ、私は昔は日本に住んでいたのよ。五百年前くらいまで。まあそんな友人だったから魔界に行く時にも彼女に送ってもらったの。その時の帰りに紫と神綺が知り合っただったわね。」

だから紫は私が魔界で本を書いたのを知っているのよ。それでその手に持っている本を見た時に私の所に送ろうと思ったのじゃないか」

「私が招集されたのは優秀な魔法使いも戦争に出てくるだろうからってという理由だったけど……………」

「あの紫でも予想外だったのかしら。私が紫の創り上げた幻想郷に敵対するなんてことは未来永劫あり得ない事なのよ」

「そうなの？何故そう言い切れるのかしら？」

「それは勿論私もこの幻想郷の創立に大きく関っているからよ。紫の意見に初めに賛同したのは私。そのあとも結構な手伝いをしたわ。残念ながら完成前に私は欧州に帰ってしまっただけだ」

「そうだったのね。争う気がないのならこのまま話をしないかしら？私は魔界を出てからは貴方に憧れていたのよ。貴方が書いたというこの本の魔法を私も見てみたいわ」

「おお、私が憧れとか恥ずかしいね。だから敬語になっていたのか。「まあ見せるくらいなら大丈夫かしらね。どの魔法が良いのかしら？」」

「私はほとんど読めないから貴方が決めてくれて構わないわ」

「そういえばそうだった。私はあの時いったいどんな魔法を書いていたんだっけな。」

アリス side

私が紫のスキマで送られた先にいた魔法使いは私が来ても驚くことなく本を読んでいた。紫もこの魔法使いは私では荷が重いだろうとは言っていたが、ここまで脅威に思われていないと思うと少し悔しかった。

でも彼女の名前を聞けばそれも仕方がなかったことだと理解できた。なんと彼女は魔界では知る人ぞ知る魔法使いだったのだ。

魔界でしか売られていない上に写本のみが売られているという事で、原本が見つかれば通常の魔導書の三倍以上の額がオークションで付けられるだろうと噂されているほどの幻の本だ。内容は中級レベルのはずなのだが。実は家にあつたことを知った時はかなり驚いた。

他にも魔界でかなり流行った遊びにも彼女のもう一冊の魔導書が

出てくる。かなりの額の売り上げ収入は本人がもう魔界にいないという事で様々な寄付に回されている。まあ魔界に寄付が必要な所はあまりないけど。

魔界の住人の殆んどはパチュリー・ノーレッジの魔導書をその二冊しか知らない。というのも彼女が書いたもう二冊はあまりにも高度すぎて読める者自体が少ないし、危険だから市場に回すことを彼女自身が禁止したそうなのである。

私も魔界を出るときに渡されなかったらこの本の存在は知り得なかっただろう。Grimoire of Aliceでもかなり苦労したものだ。The Grimoire of Patchouliになるともうお手上げ状態だった。

初めの私はその本を開くことすらできなかったのだ。読むためには先ず開かなければならない。かなりの勉強と鍛錬の末ようやく開くことができたが、解読することもできないような恐ろしい魔導書だった。

私が読めたのはごく一部のみだ。さつきパチュリーに『あまり読めない』と言ったのは単なる強がりだった。実際には『九割八分読めない』。

今パチュリーに頼んでその本の魔法を使ってもらっているが実際に見てもよくわからない。

情けないことだが、彼女は魔法陣を使う事を好むようだ、くらいしかわからない。しかしその魔法陣の構成すらも美しい。

私は今かなり興奮している。かなり強くなったと思っていた私を叩き直してくれた魔導書の著者、魔界でも幻と言われるほどの実力者が目の前にいるのだ。

会ってみたいとは思っていたが、まさか本当に会えるとは思ってもしなかった。紫には感謝しておくべきなのかもしれない。

「どうだったかしら？このレベルの魔法を使うのはかなり久しぶりだったから心配だったのだけれど失敗しなくてよかったわ」

「とても素晴らしかったわ。あの魔法陣の美しさの原因はいったい何

なの？」

「ああ、あれね。あれは人が最も美しいと感じるといわれる黄金比を取り入れてみたのよ。そのせいでかなり複雑な形になってしまったけれど、美しいと感じてくれたのね。とても嬉しいわ」

「多分見た人は皆思うわよ」

「あなたも勉強を続ければこれよりも尚美しい陣が描けるはずよ。あなたにはその資質がある」

まさかパチュリーからそんな言葉を頂けるとは夢にも思っていなかった。彼女の期待を裏切らないようにさらに努力をしよう。

「ありがとう。貴方にそう言ってもらえて嬉しいわ。」

勉強はこれからたくさんするけど貴方が私の師になってくれない？」

「弟子を取ってもその子の得意とする魔法を私が伸ばすのは難しいのよね。特にあなたのように基礎をかなりしっかりと修めている子なんかは。」

でもそうねえ、どうしてもというのならば私があるあなたの實力よりももう少しだけ上の魔導書を書いてあげるわ。上から目線のように申し訳ないのだけれど。」

それと何か聞きたいことがあったらこの図書館にいつでも来るといいわ。当主には私から話をつけておいてあげるから」

えっ？それってかなり凄いいことじゃないの？パチュリー直筆の魔導書を貰えてしかもこの図書館を使わせてもらえるなんて。」

「本当に良いの？自ら進んで魔導書を書かない魔法使いだと聞いていたんだけど。それに私からすれば損することが無いのだけ」

「私も別に損をしないからいいのよ。それに私が書かないのは自分の手元に置いておく気が無いからよ。だから書いたすべてを魔界に置いてきたの。まあこあが買っていたみたいだけれど。」

さて、どうやら外の戦争は終わったみたいね。魔導書を書く時間が

必要だからまた少ししてからいらっしやいね。図書館を使うだけなら別に明日から来てもらっても構わないけれど」

じゃあありがたく明日から活用させていたただこう。

「今日は楽しかったわ。またね、アリス」「こちらこそ。また会いましょう、パチユリー」

少し前の紫side

「さて、準備はよろしいですか？皆さん。いよいよ開戦です。相手はかなりの大人数ですから気を引き締めてかかってください」

美鈴が門からいなくなっているし、パチユリーの魔力の高まりも感じない。彼女らは幻想郷に敵対する意思はないとみて良さそうだ。

これは本当にありがたい誤算だ。彼女らが敵対すればその時点で戦力が倍以上に跳ね上がるだろう。ここは呼んだのが無駄になってしまったアリスへのちよつとしたサプライズでもしてあげよう。少し心に余裕ができたらかなり楽になった。

相手は総勢七百というところか。ただの弱い妖怪が七百も集まったところで何ができようか。特にこちらのメンバーはかなりのものを揃えてきた。私は当主の吸血鬼に集中できそうだ。

「貴方がここの主なのかしら？」

「ええそうよ。私こそが誇り高き吸血鬼にしてこの紅魔館現当主、レミリア・スカーレット」

「……っ?!スカーレット?!」む、どうした?「ああいや、何でもありません。私はこの幻想郷の管理人八雲紫。それで今回はどういったご

用件で？」

「わかっているだろう？引越すついでにこの地を私の物にしてやろうと思った次第だ。手始めにこの館周辺から始めたが存外楽そうだ。皆ホイホイついてくるからな」

「わかりました。私が勝てば貴方には少しの間大人しくしていただきますよ」

「私が首謀者なのに殺しはしないのかい？」

「本来ならそうするべきですわ。しかしこちらにも事情がありますので」

流石にパチュリーと美鈴の同居人を殺すわけにはいかない。見たところ本来の同居人らしき者はこのレミリアだけだ。

「では始めるとしようか。果たして貴様に満月の下の吸血鬼を打ち負かすことができるかな？」

「赤子の手をひねるよりも簡単なことですわ」

そういえばレミリアは非常に流暢な日本語を話しているがこれもパチュリーと美鈴の教育なのだろうか。まあそんなことは後回しだ。吸血鬼は非常に弱点が多い。

私にしかできない弱点の突き方もある。例えばこれか、“気体と液体の境界”

「んなっ！急に雨が?!それに私の所だけ?くそっ」

あら、霧になって逃れられたか。私の友人のようだ。ならば戻すのは簡単ね。

「あれ?!戻ってる?!ど、どうして?っていたたたたた、痛いっ!」

あら、効果が切れちゃった。

「どうかしら私の「つ目の技は」

「ちっ、よくもやってくれたわね。次はこっちから行くわよ、グングニル」

へえ、北欧神話の。となると投げられれば必中か。私には当たらないけれど。

「ふんっ！」おっと、危ないわね」

まさか投げずに槍術を使ってくるなんて。これはかなり予想外だ。ならばこちらからは押しつぶす攻撃をしましょうかね。

『ぶらり廃駅下車の旅』

外の世界で使われている車両で押しつぶす。

「こんなもの！ふっ!!」……………そういえば膂力は鬼にも劣らないのだった。

「あらあら、これも防ぎますか。では最後にとっておきの技を披露いたしましょう。これを使うのは恐らく今回が初めて最後でしょう」

まるでものすごい大技をするときのような言い方しているが実際は今後使い道がないだけだ。

『昼と夜の境界』

「くっ、がああああ!!」

吸血鬼にしか効かないからね。昼と夜などと大層な名前を付けてはいるが今回はただ月光を弄っただけだ。月光も元をたどれば日光になる、それだけだ。

あら、気絶して灰になりかけてしまっている。早く戻してあげないといけない。

他の皆も終わったようだし今回は幻想郷側の完全勝利だ。パチユ

リーと美鈴の二人がいなくて本当に助かった。

あ、美鈴とアリスが屋敷から出てきた。どうやらアリスも楽しんでくれたようだ。

「お久しぶりです、紫さん。五百年ぶりでしょうか？」

「ええ、その通りよ。久しぶりね美鈴。早速で悪いのだけれど明日私
が今後の処遇についての話をしに来ます。当主に言っておいて頂戴
ね」

「わかりました。しっかりと伝えておきますよ。ですがしっかりと門を
通ってご来館くださいね。」

それでついなのですが、このアリスさんがパチュリーに教えを請
うために毎日図書館に来るようですので送ってあげるか道を教えて
あげるかしてください」

「分かったわ。ではまた明日会いましょう。アリス、帰るわよ」

「また明日ね美鈴」

さてさてこれから先も考えなければならぬことが多くある。幸
いにもパチュリーがいてくれるから相談は楽になりそうだ。

法案的第二十九話

パチユリー side

美鈴によると今日紫がこの館の今後についての話をしに来るらしい。ちなみにレミイが集めた妖怪のほとんどは昨夜の戦争によってお亡くなりになったみたいだ。

もう既に日は昇り切っているがまだ来る気配はない。夜の王である吸血鬼への配慮なのだろうか。ちなみにアリスはもう来ている。今はこあと魔界の事について話をしているようだ。

こあの魔界についての知識は私と同レベルなのに大丈夫なのだろうか。アリスはかなり気配りのできる子だから大丈夫だろうとは思うけれど。

昨日レミイが目覚めた後に彼女から直接聞いた話だが、紫はとんでもない技を使うやばい奴に認定されたらしい。まあ当たり前だと思う。急に自分のところだけ雨が降ったり、夜なのに日光を浴びたような状態になったりしたら誰でもそう認定するだろう。

私でも一個人にだけ雨を降らすなんて芸当はできない。一番狭い範囲でも館の門から入り口の扉付近までだろう。あまり実用的では無い。

それにしても紫か、会うのは実に三百八十年以上ぶりだ。まあ美鈴と紫は五百年近く会っていなかったけれど。

そろそろ夏に近づいてきた。夏は嫌いではない。蚊なんてものは私の虫よけで何とかなるし、今年からは館の隣が霧の湖だからかなり快適に過ごせそうだ。

今朝から紅魔館は平常運転に戻っている。美鈴の仕事はどうやら門番のみになったらしい。花壇の手入れや適度な運動ができるから彼女にとってはそっちの方が良いのかもしれない。

館の仕事は基本は咲夜がやっているが、たまに危なっかしいところがあるので私も手伝ったりしている。といつても掃除のときに壺に気を付けることができればパーフェクトなのだけけれど。

夕食、夜食、朝食はレミイが、昼食はこあが作っている。ちなみに夜食を食べるのは姉妹二人だけで、昼食は基本はその二人以外だ。私や美鈴は食べないこともある。

妖精メイドは全然だめだ。最近は何で遊ばせることの方が多くなっていった。この幻想郷は妖精が多いのでその子たちと遊ばせればいいだろう。

館の特殊結界は引越しに邪魔だったので取り除いているが、襲撃者はもう来ないし妖精はやめなくなったらやめてもいいので除いたままにしている。

おや、どうやらアリスはもう帰るらしい。彼女は魔法使いになったのに睡眠もしっかりとっているようだ。私は以前寝たのはいつだったのだろうか、というくらい寝ていないのだけけれど。

「じゃあ私はもう帰ることにするわ。もうすぐ紫が来ると思うけどどうなるのかしらね」

「わからないわね。一応幻想郷も危ないところまで行ったかもしれないから厳しい処罰が下されるかもしれないわ。でも昨日この主人を殺さなかったところを見るとただ大人しくしておきなさい、くらいで済みそうではあるわね」

「悪いようにならないことを祈るわ。ではまた明日」 「ええ、さようなら」

そろそろレミイを起こす時間だ。夕食と言っても食べるのは大体二十時くらいだから。

紫 side

吸血鬼の館に行くのには先ず夜まで待たないといけない。私も夜型なのであまり困らないが。

アリスには昨日道を教えておいたから館には着けただろう。今の

時間から考えてもう帰っているかもしれない。私が行くのもちよ
うど良い時間だろう。

スキマで一気に館の中まで行きかけたが今回は自重する。美鈴
にも釘を刺されていたし。

今日は昼間も寝ずにこの幻想郷の未来をより良いものにするため
の考えを巡らせていた。そのせいで藍に逆に心配されたのは納得が
いかない。

では行きましょう。あちらさんを待たせるのも悪いし。

「おや、しっかりと門から入ってきてくれるんですね。嬉しい限りで
す」

「失礼ね、私だって少しくらいマナーを守るわ」

美鈴の『少しなんですネ……………』などという呆れた声は聞かな
かったことにしておきましょう。

「今から案内しますからきちんとしてきてくださいね。はぐれたら
迷いますので」

「大丈夫よ。最悪迷ってもね」 「変わりませんねえ……………で
は行きますよ」

妖怪なんてあまり変わらないものだ。仕方がないだろう。

中はとんでもなく広い。空間に干渉できる者までこの館にはいた
のか……………。厄介すぎる。

「こんばんは、レミリア・スカーレット。今日は今後の方針について話
に参りました」

「ええ、こんばんは八雲紫。

はあ、あの戦争もパチエと美鈴がいれば勝てたと思うのに。残念だ

わ

流石にそうなら幻想郷は壊滅寸前まで行ったかもしれない。確実に負けることは無いが。

「それは無いわね、レミィ。私たちが参加していても決して勝てる戦ではなかったわよ。相手のレベルが高すぎるもの。紫だけでも私と美鈴はやられていたでしょうね」

「そんなに強いのか?!その胡散臭い妖怪は」

「胡散臭いとか言つては駄目よ。まあ彼女が強いのは間違いないわ。私は長く生きてきたけれど、未だに紫以上の実力を持つ妖怪は見たことが無いもの」

「じゃあその妖怪が昔パチエと美鈴が言っていた妖怪なの? 対峙するだけで戦意を喪失するという」

「そうよ。昨晚あなたがそうならなかったのは満月の下で強くなることで精神的に負けていなかったからでしょうね」

そこらの妖怪が何百相手でも負ける気はしないけれど、まさかパチュリーの見てきた中でも私は最強の妖怪だったのね。少し意外だ。月では全く歯が立たなかったし、神綺と初めて会った時にも潜在的な畏れを感じるほどの実力の開きがあった。

妖怪以外の奴らに強いのが多いのかしらね。不思議なことだけだ。ど。

「まあその話はそのくらいにして本題に入りましょう。では今後のこの館の処置をお話します。

この館には特殊な結界を張らせていただきます。悪魔を通さない、この館の事を知らない人間には認識できなくする、というものですから美鈴やパチュリー、それにそのメイドは自由に出入りができますわ。

人間は入ってくることはできません。妖怪は入ることができますが。」

「むう、それは残念だがそれはいつまで張られる予定なのだ？」

「簡単に言うとな次に貴方方が異変を起こす直前までです。意味が分からないでしょうから今から説明いたします」

パチユリside

紫はこの館に結界を張るといふ。まあ想定の内だし、私は外に出ようと思えば出られるのはありがたい。次は異変についての説明か。

「ここに私が今日の日中に考えました今後の幻想郷のあり方を大きく変える決闘ルールを発表いたします。それがこちらの紙に書いてあります」

命名決闘法案

妖怪同士の決闘は小さな幻想郷の崩壊の恐れがある。

だが、決闘の無い生活は妖怪の力を失ってしまう。

そこで次の契約で決闘を許可したい。

理念

- 一つ、妖怪が異変を起こし易くする。
- 一つ、人間が異変を解決し易くする。
- 一つ、完全な実力主義を否定する。
- 一つ、美しさと思念に勝る物は無し。

法案

- ・ 決闘の美しさに名前と意味を持たせる。
- ・ 開始前に命名決闘の回数を提示する。体力に任せて攻撃を繰り返してはいけない。

- ・意味の無い攻撃はしてはいけない。意味がそのまま力となる。
 - ・命名決闘で敗れた場合は、余力があっても負けを認める。勝つても人間を殺さない。
 - ・決闘の命名を契約書と同じ形式で紙に記す。それにより
- 上記規則は絶対となる。この紙をスペルカードと呼ぶ。
- 具体的な決闘方法は後日、巫女と話し合う。

まさか本物を拝めるとは。で、ここに書いてある巫女が霊夢なわけか。

「この規則に則って起こした異変時に結界が解かれるのだな？ 一体いつ起こせばいいのだ？」

「今代の博麗の巫女はまだまだ幼い。それこそ貴方のところのメイドよりも。だから恐らく十年近くはあとになると思いますわ」

「命名決闘法といえば昔私が依姫とやったようなもののかしら？」

「ええ、今回はそれをモデルに作るつもりよ。それで、質問はそれだけでいいでしょうか？ まだまだ何かあればお答えしますが」

「結界を張ってもパチエたちは外に出られるのだろうか？ 何故だ？」

「それは勿論買物などに行くときには人里に行かなければならないからですわ」

「ふむそうか、では次の質問だが人肉の供給についてはどうするつもりだ？ ここでは里の人間を襲ってはならないのだろうか？ 私はそこまですべて必要ではないがフランは週に一人以上は必要なのだが」

「里の人間を襲ってはならないのではなく、里の中で人間を襲っては

ならないのです。ですが人肉の件は私が用意いたしました。外の世界の自殺志願者でも持つてきますわ。どのくらい必要でしょうか？」

「そうだな……月に五人で十分だろう。血は咲夜のものがあるしな。私からはこのくらいか」

悪魔の契約は絶対だ。これでもうレミイは逆らう事が許されなくなった。まあ負けたからそのつもりはなかっただろうけれど。

「では次は私から。もうすぐ阿礼の何代目かが生まれるでしょうか？ 御阿礼の誕生祝賀会、私も参加したいのだけれど場所は神社でしょうか？ 参加しても良いのかしら？」

「流石は樺菜ね。別に貴方の変装は誰にもばれないでしょうから変装さえしてくれば参加してもいいわよ。ついでに言うとな次は九代目ね」

「分かったわ。では明日から気が向いたら里に足を運んでみようかしら」

「貴方が里に行くのなら人間は安泰かしらね。まあそれも良いんじゃないかしら」

「じゃあ私は明日からたまに館を空けるからよろしくね、咲夜、こあ」

「私一人で館の仕事を回せるでしょうか。心配です」

「あなたには多くの時間があるのだから落ち着いて掃除ができればもう何も言う事は無いわ。それに買い物は私がついでにできてあげる」

たった一年でよくまあこれだけの仕事ができるようになったものだ。若いっていいねえ。

昼は里で散策か、この幻想郷の人里がどんなものなのか楽しみだ。

天狗の新聞って発行回数少ないから阿求がいつ生まれるのかよくわからないのも大問題だ。

翌日、早速人里に来てみた。人里はどうやら私が日本にいた時にた
まに立ち寄った村よりも少し大きいくらいの規模だ。

私は都にばかり住んでいたせいなのかそのあたりの感覚が少々鈍
いようだが、人里といえば大体こんなものなんだろう。

自警団はあつても陰陽師のように不思議な術を使える者はいない。
また幻想郷の人里には指導者である長という存在が無いためか護衛
役の特別な人間も特にはいない。

小規模ながらも里は活気に満ちていて人々も楽しそうに生活して
いる。里の中では妖怪に怯えることなく生活できるのも幻想郷の特
徴だろう。

ただ、ちらほら妖怪らしき者もいるみたいだ。そんな妖怪たちは昼
間から酒を結構飲んでいるからすぐにわかる。

今日の目的は今さつき終わった人里の地形把握と、今からする寺子
屋の見学の他は別に今日でなくても良い用事ばかりだ。

裏路地がかなりあるので地形の把握に時間を取られてしまった
が、まだ昼下がりのなので大丈夫だろう。

次は寺子屋だ。一体どのような授業をしているのかが非常に興味
深い。

.....寺子屋なかったよ。

そういえば慧音が寺子屋を始めるのもまだ先か、残念だ。ならば次
は稗田の屋敷にでも行ってみるか。まだ阿求はいないが、私が居な
かったこの五百年の歴史は知っておくべきだろう。

???
side

この里の人間たちは妖怪の脅威から護られて久しい。この里の正

しい歴史を知っている者はいないといっても良い。

唯一正しい歴史を取り扱っている場所は稗田の屋敷のみだ。稗田は百数十年に一度転生して、その短い生涯で妖怪への対処法などを書いた書物を書くという。

私が幻想郷に来た時には既に前の代である稗田阿弥は亡くなってしまっていた。だから私はまだ一度も会ったことが無いが、もうすぐ次代が生まれるころだろう。

その前に稗田が編纂してきた千年以上もの歴史をしつかりと読み込んでおきたいものだ。いつかこの里にも外の世界にあるような学び舎を建て、皆が正しく歴史を理解したうえで妖怪に対処するようになってもらいたい。

そのためには私がここに来てから創ってきた歴史だけでなく、私の力が及ばない部分まで知っておく必要がある。

「ごめんください。ここに歴史がまとめてある書物があると聞いたのですが」

「ええ、ございますよ。本日は珍しく来客がありましたのにまさかもう一人いらつしやるとは思ってもみませんでした。今代はまだですが先代までの幻想郷縁起ならあちらにございますからご案内いたします。」

もうお一方いらつしやいますがそれでもよろしいですか？」

「ええ、勿論構いません。私同様に歴史に興味がある方ともお話をしてみたいですし」

もしかしたら私が寺子屋を建てるときの協力者になってくれるかもしれない。私の種族を知ったら嫌がられるかもしれないがそれでも仕方ない。

「ではこちらになります。本を汚さないようにしていただければごゆっくりどうぞ」

「ありがとうございます」

それではあの使用人らしき人が言っていたもう一人の方を探してみることでしょう。

結構簡単に見つけることができた。彼女がいたのは六代目の歴史書のところだった。もう既に五代目までは読み終えているのだろうか。

「……………そこでじっとしているけれど私に何か用かしら？」

「いえ、ただ私以外にも歴史に興味がある方がいたんだな、と思いましたが……………」

思わず言葉が続けられなくなってしまった。彼女の着物はどこか見たことがある。何冊かの書物にすべて同じ着物で登場していたのは誰だったか。

確かとある高名な陰陽師の本に……………！彼女なら今生きていても辻褄が合う。まさか彼女は……………。

「…間違っていたら申し訳ないのですが貴方は大都庶樺菜様ではありませんか？」

「……………ええ、私は大都庶樺菜本人よ。どうしてわかったのか聞いても？」

「貴方がお召しになっているその着物はかなり特徴的で、様々な書物で取り上げられております」

「え、私って複数の書物に載るような人物だったの？初耳だわ」

「美鈴様ですが。とはいえこの時代ですから着物で気づく方は恐らくいらつしやらないと思いますよ。私は少し長く生きているので知っていただけですから」

「そう、ならよかつたわ。着物を新しく調達しないといけないかと思っちゃったわ。ちなみに大都庶樺葉は私の偽名。本名はパチュリー・ノーレツジ、種族も仙人ではなく魔法使いよ。一応仙術も使えるのだけれど」

「まさか西洋の方だったのですか。ああ、私は上白沢慧音といいます。種族は元は人間、今はワーハクタクです」

半獣にならなければここまで歴史に興味は湧かなかつただろう。

「貴方様と美鈴様の噂は五百年ほど前にバツタリ途切れていますがどうしてなんでしょうか」

「それは私が欧州に帰っていたからかしらね。ちなみに美鈴の出身は中国の方よ。名前からしてそんな感じだけれどね」

「ではお二人はどうしてともに行動していたのですか？それもこんな島国で」

「私の旅の途中で美鈴に会って一緒に行動することになったのよ。日本にきた理由は何だったのかしらね。料理が美味しそうだからだったかしら」

「随分と適当な理由だったのですね。それにしてもまさかこんな場所で会う事ができるとは思ってもみませんでした。実際に交流のあった友人から話を聞いたり書物では何度もみましたが」

「恥ずかしいわね。でも様付けだけはやめてくれないかしら。私の本来の姿は外道な魔法使いなんだから。それにほら、変装を解くと人間っぽくもなくなるでしょう？」

見た目を変えてまで人間に味方をしたかったのか。やはり素晴らしいお方だ。

「では貴方の事はこれから樺菜さんと呼びます。パチユリーさんと呼ぶよりもしっくりきますので」

「それならまあいいんじゃないかしら。何か困ったことがあれば何でも相談して頂戴。たまに人里に遊びに来るでしょうから」

「里に住んでいるわけではないのですね。相談はしたいことがあればどんどんしていきたいと思います。そこで早速相談なのですが」

「急ね。まあいつでもいいけれどね。それで？」

「実は里の人間にも歴史を教えたいと思っております、学び舎を作るのを手伝っては頂けないでしょうか？」

「つまり寺子屋のような物を作りたいのね。でもそれなら歴史以外にも読み書きや計算は教えておいた方がいいのではないかしら？この里全体の識字率はそこまで高くなさそうだし」

「確かにそうですね。どうせなら様々なことを知ってもらった方がいいですね。という事は手伝ってくださいるのですか？」

「いいわよ。ただし私が次に来るのは今やっていることが終わってからになるから二週間後くらいかしらね」

「それでも手伝っていただけありがたいですよ」

「そう、なら私は今日はもう帰るから次はそうねえ、丁度二週間後に里の門の前に集合しましょうか。ではね」

「はい、ありがとうございます。ではまた会いましょう」

今日は思いのほか有意義になった。協力者を得られたおかげで学び舎の計画がかなり早く進められたのはこの里にとっても良いこととなるだろう。

完成する日が今から楽しみで仕方ない。

その前にまずはこの資料を読み込むところからだ。

「ええ?!樺菜にあったあ?!それは本当なの?慧音」

今は私の友人の一人である妹紅が訪ねてきたので話をしている。

「ええ、勿論です。彼女は実は仙術も使える魔法使いだったようです。本名はパチュリー・ノーレッジというそうですよ」

「あーあ、私も久しぶりに会いたかったなあ。でも多分樺菜は私が死んだと思っっているだろうから迂闊に会いに行けないんだよね」

「そういえば貴方は不老不死になる前に彼女と接触していたのでしたね。残念なことです」

「それにたとえ会ったとしても髪の色も長さも大幅に変わってしまったから多分わからないと思う」

「でもそれは貴方の方も同じではないのですか?彼女も普段は魔法使いとしての格好で生活しているようですから髪色も顔も違います。貴方も彼女を見てもわからないかもしれませんね」

「確かにそうかもしれないね。でも広い外とは違ってこの狭い幻想郷内ならいつか会うだろうからその時の事はその時に考えることにするよ」

「そういえば貴方は彼女の事は樺菜と呼び続けるのですね。私もそうですが」

「まあね、そっちの方が呼び慣れているししつくりくるのよ。」

まあこの話はここまでにしようか。最近気になることがあってね」

「気になることですか？」

「最近妖怪の山から煙が上がっているでしょう？」

つまりは妖怪の山の真実の姿を話せばいいのか。今宵は永くなり
そうだ。

阿礼的第三十話

パチユリーside

人里に行き始めてからもう二年ほどが経過した。慧音の寺子屋もかなり順調なようだ。

もともと勉強に励むことができなかつたこの里では寺子屋は大受けだったらしい。慧音が趣味でやっているので授業料を取っていないのも人気である理由の一つだろう。

最近館に籠りがちになっていたが久しぶりに里に行ってみようと思う。

最近アリスの魔法の腕がかなり上達してきたのが館に籠り気味になつてきた理由の全てである。この二年で私の魔導書の読める部分が1%ほど増えたらしい。

驚異的だ。このままいけば二百年もしないうちに当時の私に追いついてしまう計算になる。私があれば書いたときに私はもう千を超えていたというのに。

これもやはり元が人間であるからなのか？アドバンテージが大きすぎやしないか。

人里に着いた。不定期でも二年通つていれば門番に顔は覚えられている。ありがたいことだ。

今日は一段と里が騒がしい。いったいどうしてだろうか、と思つてみると小さな子供が手を引かれながら歩いてくるのが見えた。

間違いない、あれは阿求だ。髪色からして普通の人間ではないし。となるとこの騒ぎが御阿礼神事なわけだ。

写真を撮つてブン屋にでもくれてやろう。この時のためにカメラは持っているのだ。まだ私たちが外にいた時の最新型だ。

まあ最新型とはいえデジカメの画質とは比べ物にならない性能ではあるが仕方がないだろう。

さて、阿求が生まれたとなるとそろそろ準備をしなければならぬだろう。折角の行事だ。一番良い着物で行ってあげないといけない。来たばかりだがいったん帰ることにしようか。

「あやや？パチュリー様ではありませんか。実は困ったことがあるんですが」

「ああ、文ね。一体どうしたのかしら？」

文は何回言っても様付けをやめてくれない。多分昔大江山で天狗を無力化し続けたからだろうなあ。文もあの中に入っていたから仕方ないのかもしれないけれど。

「実は風の噂で九代目稗田が誕生したと聞きましてね。記事にしようと思ったのに何故か今日は人里に入れてくれないんですよ」

「それは御阿礼は里にとっては最も重要な人間なんだからまあ仕方ないんじゃないかしら。でも記事に使えるかもしれない写真なら撮ってきてあげたわよ」

「本当ですか?! 一体いくらで売ってくれますか?」

「こんなものに金なんか取らないわよ。無料でいいわ。ただし写真提供者は伏せておいて頂戴ね」

「わかりました、ありがとうございます。早速記事を書いて本日中には発行しますので美鈴様にも伝えておいてください」

「丁度会ったのだし今日のお金は払っておくわ。ついでに買ってきた茶菓子も一つあげるわ」

「今日の分は号外ですから無料でお配りしますよ。毎回ありがとうございます。というかこれって有名店の菓子ですよね、本当にありがとうございます」

「別に構わないわよ。あの店は安くて美味しいのがウリなんだから」
流石に文でも美鈴の構える門の中には入ることができないようだ。

だから文はいつも門にいる美鈴に新聞を渡している。

購読料は遠慮されたけれどきちんと払っている。月に数回しか発行されないから大して懐も痛まないし。

さあ帰ろう。まだまだ早い時間だけれど。

「あれ、今日は随分と早かったですね。珍しい」

「まあね、理由は今日中にはわかるわよ。楽しみにしていなさい」

「楽しみなことがあると今日のモチベーションに繋がりますね。今日は張り切って門番ができそうです。ああ、そういえば葉草の方はもうそろそろ採取出来ますよ」

美鈴は基本は門番であるが作物なども育てている。育てている植物は私用の薬草からワイン用のブドウまで様々だ。ブドウやトマトなどを育てている場所は私も魔法で適温、適湿になるように調整してある。

そうしないと気候的に育てられないからだ。ちなみにレミイの好みで大豆もかなり多く育てられている。私は納豆菌の培養に付き合わされた。買うよりも自分で作った特製の納豆菌によるものが美味しいらしい。

初めは失敗も多かったが今ではレミイの満足する菌ができた。発酵は咲夜の得意分野だし。

この館の結界が解除され、紅魔館の存在が明るみに出たら人里にもワインとともに売り込むつもりらしい。確かに味はかなり良いし、健康にも抜群に良い。

その時が来たら楽しみではある。

「それは良かったわ。それで、アリスはもう来ているのかしら？」

「はい、パチュリーが出て行った少し後にいらっしやいましたよ。今はお嬢様とお茶でもしているかもしれません」

「あの子も勉強に来ているのでしょように。そういえば最近疑問に思っ

ていたのだけれど、レミイが夜寝るようになったのはどうしてだったかしら?」

「えーっと、確かこの幻想郷には昼型の妖怪が多かったからでしたっけ。私たちを含めて昼に活動する妖怪も多いので、お嬢様も結界が解かれた時の事を考えたのではないですか?」

「なるほど、それで朝起きの生活に変わっていったのね。ありがとう、疑問が解消したわ」

「いえいえ、別にこれくらいなら」

美鈴は話していて楽しい妖怪だ。文も必要以上に恐れなくてもいいと思うのだが、潜在的な恐怖は拭い去れないらしい。

私は図書館にでもいようかな。お茶会が終わったらアリスも来るだろうし。それにしてもレミイとアリスねえ、一体どんな話で盛り上がるのだろうか。流星に詮索はしないが。

「おや、パチュリー様お帰りなさい。今日は早かったのですね」

「ええ、少し事情があつてね。それより冷たい緑茶でも入れてくれなにかしら?こあの分も茶請けを買ってきたから」

「私の分もですか?嬉しいですが毎回毎回部下を甘やかしていて良いのでしょうか」

何かこあがブツブツ独り言を言っているが何を言っているのだろうか。生憎私の耳は地獄耳ではないのでさっぱりわからない。

「何を言っているのかは知らないけれど早くしないと茶請けあげないわよ」

「いえ、何でもありません。今すぐ準備いたしますよ」

今日買ってきたのはいつもは行列ができていて買う気になれない有名店の茶菓子だ。こあは館の外の事情は知らないのだろうか。

今日は人々の注目が違うところに集まっていたので並ばずに買う

事が出来たというわけだ。あとで美鈴にも一つ持って行ってあげようかな。

「はい、お待たせしました。では早速頂きましょう」「ええ、でも全部食べては駄目よ」

安いのをいいことに結構な数買ってきたからなくなりはないだろうが。

文 side

最近の記事のネタになりそうな事柄がとてもしなかつたので九代目稗田の誕生はかなり嬉しいことである。

文字通り風の噂をもとに人里に行ってみたが今日は何故か入れてくれない。いつもは入るくらいなら許可してくれるのに。

そんなことを考えているとパチクリ様が里から出てきた。彼女によると稗田の誕生は真実であつたらしい。となると祝賀会についての記事は書かなくてはならないだろう。

号外として里にばらまくつもりではあるが、写真の無い記事は誰にも読んでもらえないかもしれない。そこで私が継つた最後の希望がパチクリ様だった。

彼女はついこの間まで外で暮らしていたらしく、彼女の持つ写真機はその時の最新機種らしい。今私が使っている河童の物よりは僅かに性能が良い。

こうなることを見越していたのか彼女は写真を撮ってきてくれた。それを無料でもらえた上に、いつも並んでいる菓子屋の茶菓子までもらってしまった。

彼女、それに美鈴様の恐ろしさはよくわかっている。私がまだ鴉天狗になったばかりの頃に、大江山で大量の天狗たちをもともせず無力化し続けていた彼女たちには今でも勝てる気がしない。

私は途中でやられたから知らなかったが、かかっていた天狗の中には大天狗も何人かいたらしい。その天狗たちに後遺症を全く与え

ることなく気絶させるのみに抑えるその余裕。

私が本気を出さずに余裕を残して戦うようになったのは彼女たちが原因なのかもしれない。

美鈴様に至っては後から来た当時の山の四天王の一人である伊吹様まで倒してしまったというから本当に恐ろしい。

しかしそんな実力を持っていなながらもいつも格下であるはずの私に対して優しく接してくれる。

パチュリー様は今日のようにしてくれるし、美鈴様も新聞を持って行った時には世間話に付き合ってくれる。何故かはわからないが私としてはありがたいことだ。

今は貰った茶菓子でお茶を飲みつつ記事を書いている。内容は勿論、御阿礼の誕生とそれに付随する神社での祝賀会についてだ。

前回行われたのはまだ幻想郷に大結界が張られる前だ。久しぶりの御阿礼神事だったが、今回も大騒ぎだったようだ。

なんにせよ人間でこの御阿礼神事を見られるのは運のいい者だけだ。

人間の寿命を考えれば二生費やしてようやく見られるか、というほどだ。故に神事の後の祝賀会にもぜひとも多くの人間に参加してもらいたい。

だから私は号外を配ることにしたのだ。会には私も変装をして行くつもりである。ここ二代くらいは参加している。

書き終えて印刷も十分な量ができた。先ずは人里の上空からばらまいておこうかな。入れてはくれないし。

次はパチュリー様や美鈴様が住む紅魔館だ。私の速さをもってすればすぐに到着できる。

「あら、久しぶりですね、文さん。今日はパチュリーからお金を受け取っていませんが」

「お久しぶりです、美鈴様。今日は号外ですのでお金は取っていない

のです。パチユリー様から話は聞いていないのですか？」

「パチユリーからは楽しみにしておきなさいとしか言われていないのですよね。どうやら貴方の持ってきた号外がその楽しみのようなですね」

「楽しみ、ですか。ありがたいことです。これがその号外ですよ」

私の新聞は私の趣味で書いていることが多いので楽しみにされることは少ないし、購読料を払ってもらえること自体が少ない。悲しいことではあるが。

「へえ、ついに九代目が誕生しましたか。行事への参加は随分と久しぶりになりますね」

「参加されたことがあったのですか？」

「はい、二代目から五代目までですかね。いやー懐かしいですね」

私の初参加の二つ前までか。道理で彼女たちを見たことが無かったわけだ。

「美鈴様はパチユリー様と一緒に参加されるんですよ。また人間に変装をして行かれるのですか？」

「勿論ですよ。流石にこんな目立つ髪色では行けませんし。文さんも参加するんですよ。是非私たちを探してみてくださいくださいね」

「わかりました。ではまた神社でお会いしましょう」

数日後

今日はいよいよ誕生祝賀会の日だ。予想通り食べ物はかなり用意

されている。

人間も大勢来ているところから私の号外もかなり役に立ったのかもしれない。パチュリー様と美鈴様はもう来ているのだろうか。

変装したお二人を見つける自信はないのだが。

おや、不意に人間たちがざわつき始めた。今日の主役の登場だろうか。

「おい、あの二人組の着物は質が良いなんて物じゃないぞ」「気合入れて来たのかねえ」

どうやらそうではないみたいだ。しかし一体どんな人間なんだろうか。この祝賀会にそんなに気合を入れて臨むような者たちは。

うーん、人が多くてあまり見えない。飛べば見えるけどそんなことはこの場でできるわけがない。しかも見失ってしまった。

でもちらりと見えたその着物は確かに上質な物のようだったし、かなり古い製法の物だったのではないだろうか。今では滅多に見る事などできまい。

是非とも取材して、その着物の起源を知りたいものだ。私は話術に長けていると自負している。大抵はさしあたりのない会話から始めれば心を開いてくれるものなのだ。

祝賀会が始まってから既に一刻が経過しているがあの二人を見失ってからまだ見つけられていない。

「あら、文じゃないの。どうやら変装は下手みたいね」

この声は……………!

「ば、パチュリー様?!……………って誰?!」

「わからないのかしら。私はパチュリーよ。こっちも美鈴だし」

どうやら着物が騒がれていた二人はパチュリー様と美鈴様だったみたいだ。道理で私でも変装は見破れないわけだ。もはや声でしかわからない。

「貴方人間たちの間では結構浮いているわよ。それ、天狗装束でしょ

う?」

変装には自信があつただけどなあ。

「そんなに浮いてましたか?それを言うならお二人も相当騒がれていましたか?……」

「文はこの着物を知らないのね。これは千年も昔に帝から頂戴した物なのよ。当時の京で一番の着物職人が作った超一級品なわけ。名前まで刺繍されているわ。」

「そ、そんなにいい物を?!ただの祝賀会ですのに」

「私たちは昔からそうしてきたのだから。それに稗田とは縁も深いからね、私も美鈴も」

「そうだったのですね。まさか騒がれているのがお二人だとは思ってもしませんでした。さあ、疑問も解消しましたので早速料理を頂きましょう!」

「ああ、文。そのことなのだけれど……もう料理もなくなつたし会はお開きになるそうよ」

「私も食べられていないのに……。残念です」

「そう落ち込まないでもいいわ。今から私が里で何か御馳走してあげるから」

「いえ、そんな。パチュリー様に払わせるだなんて」

「お金なんてあつても基本は使わないもの、別に構わないわ。さて行きましようか?」

「はい。美鈴様もいらつしやるのですか?」

「いえ、私は門番をしないといけないので。今日もお嬢様に無理を言つて来ていますからね」

「そうですか、頑張ってくださいね。そんな敵が現れたら、ですが」

「あはは、私はまだまだ未熟ですから案外頑張らないといけないかもですね」

いつも新聞を配りに行くと鍛錬をしているがどこまで自分を鍛えるつもりなのだろうか。聞いたところによると拳だけでなく剣も達人以上には扱えるらしい。

白狼天狗も毎日修行を欠かさず行っているが、美鈴様と比べると鬼気迫るものがなく、どこか和やかだ。

そんなので山は大丈夫なのだろうか。昔たった二人にやられたというのに、そのことを知らない白狼天狗たちは暢気なものだ。一度痛い目に合えばわかると思うのだが。

「ここどうかしら、文。今日はまだ空いているはずよ」

「里では有名な料理店ですけど本当に良いんですか？結構高いですよ、ハンク」

「勿論知っているわ。でも私もお金には困っていないもの。三十両までなら平気よ」

「流石にそんなに食べられませんよ………。ですがありがとうございます」

パチュリー様はどんどん料理を頼んでいく。私の好物が多いのは彼女が気を使ってくれているからだろう。別に気にしないのに。

「パチュリー様はどうしていつも私なんかを気にかけてくださるんですか？」

「どうしてでしょうねえ。やはり若い妖怪の成長を実感できたからかしら」

「私たちが大江山に行った時にあなたも気絶させたでしょう？大天狗たちが来る少し前だったかしらね。あなたとこの幻想郷で再会した

時には驚いたわ。昔の面影が良く残っていたから。

私があなただを覚えていたのは必然だったのでしょう。あの戦にあそこまで若い鴉天狗が出てくるとは思ってもみなかったからね」

「そうだったのですか。何か恥ずかしいですが嬉しいですね」

「はいはい、この話はもうおしまい。料理が来ているわよ。あなたの好物から何品か勝手に選ばせてもらったわ」

「そんな所まで気を遣っていたただかなくても結構ですのに」

神社では食べ損ねたがここでパチュリー様と食事できるのなら悪くなかったのかもしれない。

パチュリーside

阿求が誕生してからもう随分と時間が経った。人里に通っていると偶に重要な情報が入ってくる。つい数年前には霧雨さんのところの娘が勘当されたらしい。

何故今里の話をしているのかというときまさに今里に来たところだからだ。今日は買い物と包丁の切れ味が悪くなったから鍛えなおす事(両方レミイから頼まれた)、後はついでに私と美鈴の刀も鍛えなおしてもらうつもりである。

私と美鈴が刀を持っているのは昔都で支給されたからである。私も美鈴も普段は使わないのだが、都の陰陽師は持つておくべきだったらしい。

美鈴は妖忌との鍛錬で使っていた。私は流石に真剣では鍛錬できないので木刀を使っていたが。だから私も一応剣術はある程度できる。魂魄流だけけれど。

人里には鍛冶屋は表通りにも何件かあるが私が向かう先はそこではない。

「ごめんください。鍛えなおしてもらいたいものがあるのだけれど」

「いらつしやい。客が来ることなんて殆んどないんだけど腕には自信がありますよ。どんな物でも直して見せましょう」

「ではこの包丁と刀を二本よろしくお願いするわ。包丁を優先してくれると助かるわ」

「わかりました。お客さんなんて名前なんです？わた…わちきはここ
の店主、多々良小傘。唐傘の付喪神なんですよ」

「無理しなくてもいいのに。私はパチュリー・ノーレッジ、魔法使
よ。包丁だけなら今日中にできそうかしら？」

「勿論ですよ。ちなみにこれはかなり古い妖刀ですよね？どうして
持っているんです？」

「昔々に貰った物なのよ。あまり使ってはいなかったけれどまあ包丁
のついでね」

「ほへー、まあこれくらいなら打ち直しもすぐに終わるでしょう。包
丁の方も手入れは良さそうですし全部夕刻までには完成させておき
ますよ」

「ありがとうございます、では夕刻受け取りに来るわ」

さてと、あとは買い物か。月に数回しか来ないから買うものが多く
て困る。野菜類は庭で育てているため、買うものが主に魚や肉なのは
助かるが。野菜は枯れてはいないので謎空間に入れることができな
いのだ。

でも少しは野菜も買わないといけないし、買うのは帰る直前にした
方が良いに決まっている。魚や肉は持ち運ばなくていいし数量が限
られているから早めに買うけれど。

美鈴のために珍しい花でも買って行ってあげようかな。花ならば
たいした荷物にもならないだろうし。

「あら、誰かと思つたらパチュリーじゃないの。随分と久しぶりね」
「久しぶりね、幽香。美鈴のために珍しい花でも買いに来たのだけれど、どれがいいのか私にはわからないわ」

「ならこのカスミソウなんてどうかしら。花言葉は『清らかな心』『無邪気』『親切』『幸福』。それに開花時期はもうそろそろよ」

「悪くないわね、これにしましょう。ありがとうね幽香」

「別に構わないわ。花好きに悪い奴はいないもの。荒らされたらただではおかないけれどね」

幽香が言うど怖さが十倍だ。

「今まで荒らされた事つてあつたの？」

「何度もね。そのたびに返り討ちにしてやったわ。未だに私が負けたのはたった二度」

「……………あれから一度負けたのかしら？」

「幻想郷に来た時にね。ここの管理者があつた八雲紫だったから無理矢理再戦をしたのよ。前の時よりは幾分かマシな戦いができたくらいだったわ。本当にあの妖怪は反則じゃないかしらね」

私から見れば幽香も十分に反則級だけれど。

「そうだったのね。でももう二度と紫と戦わないで頂戴ね。幻想郷が壊れてしまうかもしれないから」

「安心して頂戴、流石に三度目は無いわ。どうやっても勝てる気がしないもの。」

さて、今日は用事があるからまた今度ゆっくり話しましょう。次は美鈴にも会えれば嬉しいわね」

「ええ、また今度。さようなら」

丁度良い時間になったのではないだろうか。今から小傘の所に

寄って野菜類の買い物すれば良いだけだ。たまにはこういう一日も悪くないと思う。

紅霧的第三十一話

パチユリー side

今日の夕食時にレミイから重大発表があるらしい。どうせ小傘の鍛えた包丁の切れ味がやばいとかそんなことだろう。

持つて帰ってきた時には滅茶苦茶喜んでいたし、何故か楽しそうですらあった。もうレミイの料理は趣味の領域から外れてしまっていると思わざるを得ない。

気に入るものができるまで納豆を自分で作るなんておかしいと思う。私も手伝ったから人の事は言えないのだが。

家庭菜園と呼ぶには大きすぎる規模の畑も作っているから庭でもあまり遊ばなくなっているし。でもそれはそれで良いこともあった。木陰がたくさんできたことで朝起きになったレミイは日中外に出られるようになった。

庭を見ているとやはり緑は素晴らしいと感じる。紅と違って見ても目が疲れないし心が安らぐ。まあ紅も見慣れてしまったのだけれど。

森林セラピーのような効果のおかげで最近は大乱の精神状態もかなり安定してきている。これは狂気が出にくくなるという点で見れば非常に良いことなのだ。

まあ出てきたところで美鈴かレミイが対処可能なのだけれど。それに上手くいけばその狂気もあと数年で完全に封じ込められるかもしれない。上手くいくかどうかはわからないが。

今はもう夏になる頃だ。目の前の湖に行けば快適に過ごせるだろう。メイドも含めた妖精たちは鬱陶しいかもしれないが。

チルノには人里に行くときにたまに会うし毎回勝負を仕掛けられる。私も別に急いでいるわけでもないのだから毎回相手をしてやっているが、そのあとに大妖精が謝りに来るので何故かこちらまで申し訳なくなる。

大妖精はいい子だ。妖精としての力は湖周辺の妖精の中ではかな

り強いし、頭の出来は別格だ。悪戯は好きなようだが命の危険を感じる悪戯まではしようとしないのが良い例だ。

メイド妖精に至っては言葉が見つからない。館の仕事は全くしなくせにご飯時には戻ってくるという狡猾さ。まあ彼女らがする仕事は残っていないし、レミイも楽しんで料理をするから何も言えないともいえる。

今日も遊んできたメイド妖精たちが帰ってくる時間になった。自然と密接に関わっているおかげで彼女らの時間感覚だけは信用できる。一応時計もあるのだが外に出ないと分からないのだ。

アリスももう帰っているし私もこあを連れてそろそろ食堂に向かわなければならぬ。

「こあ、そろそろ夕食時よ。来なさい」

「あれ、もうそんな時間なんですか？本を読んでいるとあつという間ですね」

本当にね。長く生きてきたからか最近は時間の進みが早い気がしてならない。

ふむ、今日の夕食はピザか。チーズなんてどこから手に入れたのだろうか。少なくとも私は買ってきた記憶がない。牛乳や酢は買ってきたがまさか作ったのだろうか。一応レモンもこの館では育てているし……………」

気になるが店の品かと思うくらいには美味しそうだ。まあレミイが作った時点で高級店クラスの味は保障されているようなものだが。

「今日は家で育てたレモンを使ったチーズをピザに使ってみたわ。それに丁度トマトも収穫時だったしね。美味しいかしら？」

「ええ、とても美味しいですよお嬢様。もはや作れない料理はないのではないですか？中華の腕も抜かれましたし」

「それがそうでもないのよねえ。定番で言うところの寿司なんかはシヤリが硬くなりすぎるのよ、私が握ると。あとは見た目を重視する料理は苦手なのよね」

「餃子は包めるのに不思議な物ね。咲夜は寿司を知らないんじゃないかしら?」

「ええ、寿司というのは知りませんね。どのような料理なのですか?」

「私も知らないわ。一体何が入ってるの?」

「簡単に言うと魚の切り身を米に乗せた物よ。言い方は悪かったけれど見た目はこんな感じね」

言葉で説明するより絵に描いた方が分かりやすいし楽だ。

「私と美鈴でまた今度作ってあげるわ」

「ありがとうございます。そういえばお嬢様、重大発表というのは?」

「ええ今から発表するわ。」

遂に結界が解かれることになったわ!!」

「おおー、ようやくですか。長かったですね!」

「本当にね。これでレミイたちも外に出られるようになるのね。それで、異変の内容はどうするつもりなの?」

「そうねえ、やっぱり人間には急に現れたように見えるんだから派手な方が良いわね。私たちの存在を知らしめるために幻想郷中を巻き込んでしましましょう」

「具体的にはどうするのか決めているの?」

「勿論よ。誰から見てもこの館が主犯だと思わせるためにここを中心

に紅い霧を出すわ。そうすれば太陽が隠れて私たちが外に行きやすくもなるし」

良かった、原作通りに事は進みそうだ。

「なるほどね。あなたは本当に紅が好きねえ。スカーレットだからなのかしら」

「そうかもしれないわね。さて、そうと決まれば話は早い。八雲紫、出てきなさい」

「はいはい、では今から結界を解きますわ。霧を出すタイミングはそちらで自由に決めて頂戴。ただし、三日以内にはよろしく頼みますわ」

「わかっている。もう明日中には出すつもりでいるから大丈夫だ」

「そうですか。では………はい、これで結界は解け、人間からも視認できるようになりましたわ。ではまた会いましょう。スペルカードルールはきちんと守って下さいね」

「悪魔は契約を破ることができない。安心していいわ。ではまた」

遂に原作が始まるのか。開始が自分たちというのもなかなか悪くない。スペルカードは何枚か作ってある。難易度は相手次第かな。

??? side

最近なんだか空が紅く見える。私ももう駄目なんだろうか。まだ十数年しか生きてはいないけど。

空は青くあるべきだとは思うし、太陽も大事だとは思う。でもなかなか動き出す気にはなれない。

「よう霊夢、なんでまだ異変解決に向かっていないんだ？人里では体

調の優れない奴も出ているらしいが」

「そうなの？里には滅多に降りないからねえ。異変の方は今夜にでも動くわ。そろそろ青い空に戻ってほしいし」

昼間は暑くて動く気になれない。今日はもう掃除が終わっているし縁側でお茶を飲んでいた方が良いに決まっている。

しかし人里ねえ。私に縋るのなら少しくらいは参拝しに来てくれないかと思っただけ。そういえばそろそろ夏まつりがあったわけ。上手いことやれば人もたくさん来そうだ。

ああ、眠くなってきた。今夜は寝られないかもしれないから今うち寝ておこう。

「私少し昼寝するわ、夜寝なくてもいいように。お休み、魔理沙」

「お前ってやつは……………。私も帰って今夜の準備をしておこうかな」

「ん？あんたも行くの？危ないわよ？」

「何のためのスペルカードだよ。死ぬ危険はほぼないさ」

「相手を守るかどうかは別だし、それ施行してからまだそんなに経っていないわよ」

スペルカードルールは昔私が考えた決闘法だ。人間と妖怪が対等な立場で戦える。

「大丈夫だって。いざとなりやあこのミニ八卦炉もあるしな。いやあなんて素晴らしいんだ。私が異変解決者になれる日が来るとはな」

大丈夫かしら。確かにミニ八卦炉の威力は高いが、これ程の規模の異変を起こす奴が弱いとは考えられない。スペルカードを使ってくればまあ大丈夫でしょうけど。寝よ。

「まあいいわ、お休み。くれぐれも死なないようにね」

そろそろ出かけるには良い時間になったのではないだろうか。まあ今はご飯を食べているんだけど。また漬物を作っておかなければならない。

洗い物も済んだし、陰陽玉もお祓い棒も持った。スペルカードとお札も持ったからもう忘れ物はない。

夜の境内裏は悪くない。なかなかロマンチックだ。

「あら、こんな時間に人間？夜は妖怪の時間よ」

「私も普段はこの時間出歩いていないわよ。いつもこの時間に出歩いている人間なら取って食べてもいいんだけど」

「あんたは取って食べれる人類？」「残念だけどあんたが私に勝てたらね」

スペルカードの実力は大したことが無かった。簡単に勝てたし。

次は何処に行こうか。紅い霧が出ているのは湖の方みたいだがあそこの霧って紅かったっけ。まあとにかく行ってみない事にはわからない。

「ちよ、ちよっと待ってください。これ以上チルノちゃんをいじめないでください」

「うん？私は何もしてないけど。まあ今からするんだけど」

「人違いですか、ってきやああ」

何だ。魔理沙はもう先に行っていたみたいだ。これは私も急ぐ必要があるかもしれない。

「うーん、侵入者がまた来ましたか。私は弾幕勝負は苦手なのですが」

「私が侵入者ってことはこの異変の犯人はこの館の主人でいいのかしら」

「はい、まあそうですね。一応門を通るのは私を倒してからにしてくださいね。では行きますよ」

華符『セラギネラ9』

あの門番らしき妖怪は綺麗な弾幕ではあった。ただ本当に苦手なのか簡単に勝つことはできた。

館の仲間で紅いとはとんだ悪趣味な奴が住んでいるんだろう。主人の部屋は上と決まっている。とりあえず上を目指して進むことにしよう。

魔理沙 side

どうやら霊夢よりも早くに館に着くことができたみたいだ。そこらにいる妖精どもを蹴散らしていたらいかにもな扉が出てきた。

きっと当主はこの部屋にいるんだろう。霊夢よりも早く異変解決をしてやる。早速中に入らせていただこう。

およ？確かに部屋は広いが本だらけじゃないか。丁度いいから本も何冊か貰っていこう。何、こんだけの本があれば借りたままでもばれることは無いだろう。

「待っていたわよ、泥棒さん。残念ながら私はここの当主ではないけ

れどあなたにはここでお帰り願うわ。来なさい、こあ」

こあと呼ばれて出てきたのはかなりの魔力を持っている悪魔だった。あの女はそれほど魔力を感じないのに何故部下はこんなにも魔力を感じるのだろうか。

普通は逆だと思っただが。

「こあに勝てたら次は私が相手をしてあげましょう。勿論弾幕で戦ってあげるけれど」

「強者故の余裕ってやつなのか？だが残念ながら私はここで負けるわけにはいかないんだ」

「まずは私ですね。ですが残念ながら私はカードを作っていないんですよね。だから私は貴方の弾幕を避けることのみを致します。さあいつでもいらっしやい」

「そうか、ならまずは手始めに私の通常のショットから食らいなっ」
『マジックミサイル』

「まあこれくらいなら簡単に避けられますね」

本当に当たる気配がない。じゃあ次だ。次は一枚目のスペル。

魔符『スターダストレヴァリエ』

「おっとっと、これはなかなか危ないですね。集中しないと厳しそうですね」

まだまだ余裕っぽいな。もう終わっちゃったし次に行くか。『イリユージョンレーザー』

「あれれ、また弾幕が緩くなりましたか？」 油断しているな。

「これで終わりだっ！」

恋符『マスタースパーク』

「げえっ、これは流石に……………」

決まったか。ここまで使わされるとはなあ。まあでも次の奴の方が見た目的にも弱そうだし大丈夫か。

「すみませんパチュリー様。油断してしまいました」

あれ、もう復帰してやがる。驚くべきタフさだな。

「まあ想定内よ。さて、次の私はカードを作っているからあなたが避けて頂戴ね。あなたが避ける弾幕の難易度も選ばせてあげるわ。Normal、Hard、Lunatic、Phantasmどれでも好きなものを選びなさい」

難易度としてはよくわからんがどうせやるなら難しい方が良いに決まっている。

「Phantasm一択だな。一番難しいんだろう?」

これであいつの力量もある程度測れるはずだ。

「一番難しいけれどカードは三枚しかないわ」「構わないぜ、来いよ」
「では手始めに様子見からかしらね」

月符『サイレントセレナ 上級』

何だどっ!?これで様子見だともいうのか?これはボムをぶつ放して突破することも視野に入れなければならない。相手一枚当たりこっちも一枚しか出せない。あとは気合で避けられる所まで避けるのみ。

「ふむ、なかなかできるようね。一枚目で終わるかとも思っていたけれど」

「なめてもらっちゃあ困るぜ。こちとら毎日やっているんだからな」

そうはいっても二枚消費してしまったのは痛い。次はボム無しで突破した方がよさそうだな。

「では次のスペル行くわよ」

日符『ロイヤルフレア上級』

くそう、やっぱりさつき二枚使ったのは失敗だったみたいだ。これもさつきのものと同じくらいには厄介だ。

今回はギリギリ避け切れそうだ。…いや、やっぱり無理っぽい。

「ここまでついてこられるとは面白いわね。次で最後だから頑張って頂戴」

火水木金土符 『賢者の石 上級』

あ、これは避けられそうにないな。さつきまでとは段違いな気がするんだが。

霊夢 side

少し進むと何処からかメイドっぽい奴が出てきた。流石に主人はこいつではないだろう。

「今日は妖精メイドが館にいるから掃除が進まないわ。貴方も掃除の邪魔をしに来たの?」

妖精メイドがいるから掃除が進まないって……………。

「まあそうなるのかしらね。この霧を出しているのはあなたの所の主人でしょう?鬱陶しいからやめてほしいんだけど」

「なるほどなるほど、貴方が今日二人目の侵入者ですか。となると貴方が博麗の巫女というわけですね」

「もう一人はどうしたのよ。もう当主の所に行ってしまったてるんじゃないの?」

「それは億が一にもあり得ない事ですわ。彼女の向かった先はこの館の図書館。その主には彼女では勝てませんもの。たとえ弾幕でもね」

「ふーん、えらく信用しているのね。図書館に引きこもっているような奴を」

「彼女の凄さは会わなければわかりませんわ。さて、おしゃべりはここまで。貴方がお嬢様に危害を加えるというのなら私も黙ってはいられません。五枚でいかがでしょうか？」

「私は別に何枚でも構わないわ」「では」奇術『幻惑ミスディレクション』

こちらのスペルの消費は最小限に抑えておこう。避けられない程の密度ではないみたいだし。

何枚か避けたけど気になることがある。急にナイフが目の前にあったりメイドが瞬間移動じみたことをやったりしている。

急にナイフが現れるところから見て瞬間移動が能力の本質ではないんだろう。となると時間を止めているか、私とあいつの間の空間を縮めているかのどちらかだろう。実はどちらも同じ事ですが、霊夢にその違いは判らないだけです

人間には過ぎた能力のようにも思える。こんな館に住んでいる時点で人間ではないのかもしれないけど。

彼女の能力にも対処ができるようになったから五枚目はむしろ楽に攻略できた気がする。

「まさかこんな紅白に後れを取るなんて。申し訳ありませんお嬢様」

「さて、私が勝ったんだし当主の所までの行き方は教えてもらえるわよねっ。」

「ええ、敗者に選択権はありませんからね。この廊下をまっすぐ行って階段を登ればそこにいらっしやるはずです」

「どうも」さっさと終わればいいんだけど

魔理沙はどうしているんだろうか。あのメイドが言うには凄まじい実力を持つ奴が相手みたいだけど……。まあ弾幕勝負なら死ぬことはほとんどないから大丈夫でしょう。

局地的第三十二話

レミリア side

私が霧を幻想郷中にばらまいてからかなり経つたと思うのに全然来る気配がない。まさか気づいていないのだろうか？

一応今日の私の運命を見ておこう。………ふむ、どうやらようやく来てくれるらしい。紅白の少女と弾幕勝負をしているようだ。

パチエも見ているようだがその横にいる白黒はよくわからない。彼女は明らかに博麗の巫女ではないようだ……。運命を見るのもこの辺りでやめにしておこう。知りすぎてもつまらない。

さつきまでの風景を思い出すと来るのはどうやら夜になってからみたいだ。久しぶりに昼間に寝ておかなければならない。

「今日は昼に寝るから昼食は咲夜にお願いするわ。別に他の者でも構わないけど」

咲夜には料理は一応教え込んでいる。この館の住人以外が訪ねてきた時に主人が料理をするわけにはいかないから。美鈴に頼むと中華確定だし、小悪魔に頼むと肉料理ばかりが並ぶだろう。パチエに頼めば立派な会席料理が並ぶだろうが、パチエは従者という立ち位置にいない。館の仕事はしてくれるけど。

だから消去法で咲夜しかいないのだ。教え始めたのはここでの生活が落ち着いた数年前からだっただけで今では店に出しても恥ずかしくない味になったのではないだろうか。

「そう、今日巫女が来るのね。相変わらずの反則能力ね」これだけでわかるとは流石親友だ。

「まあ普段はあまり使わないようにしているけどね。今日来ることは一応フラン以外の皆にも伝えておいて頂戴。早く寝ないと夜起きられないと困るし」

「おかしな吸血鬼もいたものね。まあ伝えておくわよ。おやすみ」あ

りがとう、おやすみ」

久しぶりに日中寝たけどよく寝れて良かった。

夕食も食べ終わったし、フランはもう寝てしまった。あの子はまだ
咲夜以外の人間を見たことが無い。食料以外の形では。

だからあの子が寝ている間に事を収束させる必要がある。今の私
にできるのはそこまでだ。

さて、どうやら一人目の侵入者が門を突破したみたいだ。美鈴は弾
幕以外だとかかなり強いのに弾幕になると急に弱くなるように思える。
そこまで苦手なのだろうか。

記念すべき一人目の人間は紅白ではなく白黒の方だったようだ。
これは少し意外なことだ。彼女も弾幕勝負の腕に相当な自信がある
のだろうか。

こちらには来なかったことを考えると向かった先は大図書館か。
少し可哀そうかもしれない。

おや、もう一人来たみたいだ。あれが正真正銘博麗の巫女だろう。
私は屋上付近にでもいることにしよう。強い者は一番高いところに
いるものだから。

いやまあ美鈴は地上にいるし、パチエに至っては地下にある図書館
なんだけど。

「あんたがこの異変の主犯？」来たか。

「ええ、そうよ。普段とは違う景色も存外楽しめたでしょう？」

「残念、私は青い空が好きなのよ。あんたはここで退治するわ」

「私にこの世から出て行ってもらいたいのかしら？弾幕勝負はどうす
るつもりなの？」

「勿論弾幕で決着はつけるわ。不幸な死はあるかもしれないけどね」
なかなか面白い、肝の据わった人間だ。興味はあるが彼女はこの世界の調停者である。あの歳で大変なものだとは思うが。

「ふふっ、久々に楽しい夜になりそうだわ」「私は永い夜になりそうだと思うわ、はあ」

「さて、始めましょうか。博麗の巫女よ、我が弾幕の嵐をかいくぐつてみよ」

神罰『幼きデーモンロード』

うんうん、我ながら綺麗な弾幕だわ。：巫女の避け方も華麗だけど。どうしてあそこまで回避が上手くできるのだろうか。まさか彼女にも未来が見えている？

「なかなかやるわね。貴方未来でも見えているの？」

「教えてあげるわ。巫女の勘はよく当たるのよ。何事に於いてもね」

うっわ、何それ。反則じゃないのか？でもそういう子でもなければ咲夜には勝てないし、調停者にもなれないか。幻想郷はいつ命を落とすかわからない場所だから。

「納得いかないけど次、行くわよ」

獄符『千本の針の山』

うーん、これもすいすい避けられるねえ。まったく困ったものだ。あら、パチエと白黒が来たみたいだ。運命で見ていたのはこの辺りだったみたいだ。

「よそ見していると足元掬われるわよ」

霊符『夢想封印』

あれは妖怪特攻の光弾か。直に食らうのはいくら吸血鬼といえど

拙いかもしれない。少しずるい気もするが霧化して回避させてもらおう。

「そんな避け方されるとこっちも納得いかないわね。今ので決まったと思っただのに」

「あまり吸血鬼をなめない事ね。次行くわよ?」

神術『吸血鬼幻想』

もう半分が終わる。あたる気配は微塵もないか。彼女ならもしかするとパチエの鬼畜弾幕も避けられるかもしれない。

パチユリーside

レミイのスペルも最後のものまですべて攻略されてしまった。霊夢が使ったのは不意打ちの一回のみ。恐ろしい回避能力だ。

レミイも普通にHard、Luna級の弾幕を撃っていたはずなのにそれを避けるにあたってはスペカを使用しないとは。

「あらら、全部攻略されちゃったわね。これは私の負けね」

「わかったら早く霧を消しなさい。早く帰りたいんだから」

「わがままねえ。まあいいわ。パチエ!聞いていたでしょう?消しておいて頂戴」

「もう消したわ。外を見てごらんなさい」こうなるのはわかっていたし。

「あの規模をこの一瞬で消したのかよ。お前の実力の底がしれないぜ」

「私にも限界はあるわ。そこまで行ったことはないけれど」
そもそも私は本気で戦わないからねえ。そんな状況にもならない

し。

さてと、私は次の準備をしておくか。そんなに大変なことではないけれど。

異変解決から少し経った。その間に魔理沙が本を勝手に持って帰っていたり、アリスとお茶を飲んだりと忙しい日々だった。魔理沙の方は危ない本は持って行っていないようなので今のところは放置していても大丈夫だろう。彼女も勉強のために持ち帰っているはずなのだし。

流石に彼女では危険そうな本を持ち帰ろうとした場合はこゝに止めるように言っただけだ。返してもらいたい時は魔法で呼び寄せればいだろう。

今日はレミイから頼まれている用事をしなければならぬ。館の周辺に雨を降らすのだ。この日のためにフランドールにスペルカードルールについて教え込んだ。

名目上はフランドールが異変翌日に羨ましがったから彼女もできるように教えた、としているがこれはレミイと私で立てた計画の内なのだ。

今日はレミイに神社に行ってもらっている。そうしないと霊夢や魔理沙が来てくれないだろうからだ。レミイが館に帰れない状況をわざと作り出すことで人間がこの館に来るように仕向けるのだ。

全てはフランドールのため。彼女がこの幻想郷で元気に生活できるようにするにはやはり人間をよく知らなければならぬ。

そこから少しずつ門の外にも出ていけるようになってもらいたいのだ。折角結界も解けたのだから外を知らないのは勿体ない。

蝙蝠が一匹図書館に入ってきた。これはレミイからの合図だ。館の周囲のみに雨を降らせることができるように色々細工をしておいた。あとは魔法陣に魔力を注ぐだけだ。

雨自体は吸血鬼が通れない程度の小雨なのでそこまで濡れはしないが、まあ不快にはなるだろうから入ってすぐの場所には乾燥魔法でも仕掛けておこう。

紅魔館の印象を悪くしないためにもこういう気づかいは大切だろう。

因みに今からが所謂Extraになるわけだが私は勝負はしない。どのみちフランドールのところに通すわけだから勝負をしても時間の無駄になるだけだし。

ようやく来たようだ。結構早く来てくれたみたいだ。意外。

「雨を降らせているのはあんたでしょう？やめて頂戴よ」

「この雨はレミイの妹を今は外に出さないようにするための雨。当主の妹が満足するまで遊んでくれたら止めるわ」

「はあく、面倒ね。その吸血鬼は何処にいるのよ」

「今はそうねえ、確かレミイの部屋の三つ隣の部屋にいると思うわ」

「そう、魔理沙行くわよ」「おう」

地下の部屋ではないから館の修復は必要になるかもしれないがまあいいだろう。レミイもそれを承知でこの計画に乗ってきたのだらうし。

さて、私は遠見の魔法でも使ってみておきましょうか。遠見といっても精々二里が限界だけれど実用的ではある。雨はもう止ませてもいいだろう。

これの欠点は音が聞こえない所だろうか。残念だが何を言っているのかはさっぱりわからない。一応それっぽく口の形から読み取るとえーっと、

『人間って咲夜以外見たことが無いの』『495年間一回も、門より外には出てないのよ』かな。

この世界では普通にレミイが料理出来ちゃうからねえ。まあ人間を捌いているのは咲夜かこあだけれど。

どうやら始まったようだ。フランドールは張り切っていたからか、かなりカードの枚数が多い。集中力を保って最後まで行くのはなかなか大変だ。

今回の目的はフランドールを楽しませることだから別に最後まで行かなくても良いのだけれどね。今見ているとどうやら楽しめているようだし。

これで人間に慣れてくれれば良いのだけれど。いずれは里にも連れて行ってあげたいし、宴会にも参加させてあげたい。

「ただいま、パチエ。フランドールの様子はどう?」

「あらレミイ、早かったのね。今のところはかなり順調よ。これでフランドールは人間に慣れてくれるかしら」

「それは私にもわからないわ。でもそうなるといいわね。そのために宴会の日取りをここまで延ばしたんだし」

「そういえば宴会ももうすぐね。宴会ではレミイは料理出来ないから咲夜、頼んだわよ」

「ええ、問題ありません。味はお嬢様より数段劣りますが精一杯努力させていただきますので」

「本当に咲夜は何でもできる子になったわねえ。まだ来たばかりの頃が懐かしいわ」

「本当にね。あの頃は態度も悪かったしねえ」

「お二人とも私をいじめるのをやめてくださいよ。反省しているのですから」

「ふふっ、そうね。あら、もう終わりそうね。最後のカードももう攻略しそうだわ」

「そうなの？ならもう一度雨を降らせておかないとね。私たちも一度神社に戻ることにするわ」

実際彼女たちを呼んですぐに雨が止んでいたとなると何か言われそうさ。

「ではまたあとでね。ああ、今日は私が夕食を作るからあなたはゆっくりしていいわよ」

「あら、そうなの？一体何が出てくるのかしら。楽しみね」

「今日はフランドールにとっては特別な日でしょうからね。楽しみにしておきなさい」

「私たちは疲れたけどあんたのこの吸血鬼の妹は満足したみたいよ。早く雨を止ませなさい。まったく、吸血鬼が居座っている神社なんて……………」

「私は別に疲れてないがな。いやー、あいつの初めての实战の割には楽しめたぜ」

「どうもありがとう。私ではあの子の元気さにはついていけないから助かったわ。雨は今止ませたわ。レミイにも帰ってくるように言っておいて頂戴」

私の仕事はこれからだ。事前に紫に頼んで入手した幻想郷には無い食材を使った料理を振る舞うには今日が一番だろう。作る料理は寿司。レミイですら恐らく食べたことは無いだろう。

一応何を作るかは教えていないので、咲夜による時間停止空間には入れずに私の方にいれている。菌がいなければ時間が進んでも傷むことは無い。

米は事前に炊いておいたし、海苔やその他食材もかなり揃えた。美鈴にも手伝ってもらったが、彼女が門にいないとレミイに怪しまれてしまうから今回は私一人だ。

握ったらすぐに謎空間に入れていくがこういう時に私の空間の特性は便利なのだ。時間が進んでいることによって空間内の温度は絶対零度にならず、冷蔵庫程度の温度が維持できるのだ。

いちいち魔法で並べていくのは面倒くさいが。

今回作るの是一般的な握り寿司、ちらし、巻きと三種類作ってみた。巻きの内容はサラダ、河童、鉄火、納豆の四種類。

魚と卵、それに一部の野菜以外は勿論庭で採れたものを使っている。

大豆がたくさん採れるせいで遂に醤油まで作り出したのには驚いた。あとは乳牛、卵用の鶏、食用の豚なんかを飼い始めてしまえば全然困らなくなるだろう。目の前は湖だし。

そんなことを考えていると気づけばかなりの量ができていた。用意した食材もほぼ使い切っているし今日はこれくらいでいいだろう。

「おまたせ。料理ができたからテーブルについて。咲夜、あなたもね」

「はい、それで今日の料理は一体何なのでしょうか？」

「それは見てからのお楽しみね。今から出すから少し待って頂戴」

蓋をして中が見えないようにしている。やはり楽しみは重要だ。

「はい、これで全部ね。開けてもいいわよ」

「こんなにたくさん？まあいいわ。それじゃあ開けるわよ」

「おおー、これが寿司なの？言ってたのと違う形もあるけど」

「これが寿司よ。私が言っていたのはこれね。どれでも好きなだけ食べたいわよ」

「流石はパチュリーですね。この短時間でこれだけの量を作るとは。うん、それに美味しいですね。何処か懐かしい味です」

「まあ寿司は久しぶりなものね。それで、どうかしら？咲夜とフランドールは」

「ええ、とても美味しいです。魚を生で食べるのは少々意外でしたがご飯にもあっていますね」

「とつても美味しいよ。でも海の魚って幻想郷にいたっけ？」

「それ、私も気になってたわ。どうして海の魚があるの？」

「紫に頼んで外から持ってきてもらったのよ。寿司を作るのには必須だから」

「なるほどねえ、あの八雲紫にねえ。まあいいわ。それよりこの納豆巻き美味しいわね。やっぱり納豆は自家製に限るわ」

「ああ、それで思い出したのですがお嬢様、里に売り込むとか言ってますでしたっけ？」

「勿論そのつもりよ。この味は皆知るべきだと思うわ」

「凄い熱意ね。醤油や味噌は売らないの？」

「うーん、あれはまだ改善の余地があるからまだ売りはしないつもりよ」

将来的には売るつもりなのだろうか。とにかく今日の寿司が皆に好評で良かった。作るのは久しぶりどころじゃなかったから不安だったのだけれど。

「そうなのね。ところでフランドール、知らない人間と話してどうだったかしら？」

「うーん、やっぱり慣れていないから緊張したけど悪くなかったと思う」

「後日宴会があるのだけれど、あなたも来たいかしら？」

「そうだね、うん。行きたい…かな。門の外には出たことが無かった

し丁度良い機会だと思うから。それに外にも慣れないといけないし」「そう、良かったわねレミイ」「ええ、本当にね」

レミリア side

今日は待ちに待った宴会当日だ。今日の調理場担当は咲夜と霊夢みたいだ。今回は人数も多くないし二人でも十分に回るだろう。

それにしてもフランが来てくれて本当に良かった。姉としてこれ程嬉しいことも無い。フランが外に出る決心をしたあの日の寿司は単純に驚かされた。

私自身知ってはいたものの作れないから食べたことは無かったのだ。初めて食べたはずなのに何故か美鈴と同じ気持ちになった。

今日の宴会の主催は一応私たち紅魔館。この人数の宴会の費用は困ることも無い。最近は買い物で使うお金も減っているし。

肉や牛乳も困らないように家畜でも飼おうかな。飼料は育てているもので何とかなるし。今度パチエに相談しよう。

今はもう既に酔いつぶれた小悪魔の面倒を美鈴が見ている。パチエは魔理沙と何か話しているようだ。フランも何度か見たことのある湖の妖精たちと何やら話をしている。

良いものだ。人、妖怪、妖精が構わずに触れ合っている。

私の生まれる前からパチエや美鈴、八雲紫はこの光景を夢見ていたのだろう。今まさにその場にいるからこそ現実だと実感できる光景。

話を聞くだけでは単なる作り話とでも思っていたかもしれない。千年以上もの時を超えて夢を実現させる、それが如何に難しいことなのかはまだ五百を数えたばかりの私にはさっぱりわからない。

それでも凄いことを成し遂げた、というのはわかる。この世界を作り上げた八雲紫、スペルカードルールの基となったというパチエの命名決闘法など様々な要素が組み合わさってできている。

「ああ、素晴らしい光景だ」「うふふ、そうでしょう」

八雲紫の声が聞こえたような気がしたが気のせいだろう。

やはり結界の中にいるだけではわからなかった。この幻想郷は私に次はどんな景色を見せてくれるのだろうか。その時の運命は今見るべきではない。

冥土的第三十三話

咲夜 side

私は昔から人と関わるのが得意ではなかった。紅魔館に来た当初もお嬢様に対して失礼な態度を取ってしまった。

私を変えてくれたのは当時のお嬢様であり、かつてのパチュリー様である。本人は『居候だから様付けなんてやめてくれ』というけれど、彼女は私に様々なことを教えてくれた恩師でもある。

ハンターをしていたころは単独行動が多かったから問題なかったが、ここで働くとなると行動は常に私の意思で、とはいかなくなる。だからここに来た時には少しばかり居心地の悪さを感じていた。勝てない、とわかっていたから反抗はしなかったし、逃げもしなかったが。

今ではそれでよかったと思っている。もしあの時私が紅魔館に討伐に来ていなければ私は今何をしているのだろうか。

パチュリー様によると外の世界では能力者はどんどんいなくなっているらしい。私もいずれは幻想郷にたどり着くか、そのまま消えてしまうかのどちらかだったのかもしれない。

人間は異物をとことん排除したがる生き物だ。ならばもともと私の居場所など人間の世界には無かったのだろう。私も人間であるはずなのに。

この幻想郷での中心は人間ではなく妖怪などだ。私にとってはありがたいことなのかもしれない。おかしなことだとは思うが。

幸い幻想郷には特殊な人間が私以外にもいた。それが博麗の巫女である霊夢と人間の魔法使いである魔理沙だ。彼女らも特殊なおかげで、私は生まれて初めて人間同士のまともな付き合いができていく。

お嬢様も幻想郷を気に入ったようで、よく神社に遊びに行くようになった。その度に霊夢が面倒くさそうな顔をしているのを知っているのかは知らない。

最近は冬の寒さが残っているせいでめつきり通わなくなってしまうが。去年まではこの時期まで雪が降り続けることなんてなかった。

これも異変なのだろうか。でも季節一つを奪うなんてとんでもない力が必要になるのではないか？たどえ力ある妖怪でも難しそうだ。

今日の朝食はフレンチトーストらしい。簡単に作れて美味しいから朝起きるのが辛い冬場には重宝するらしい。

起きるのが辛いのならお嬢様の代わりに私が朝食を作っても構わないのに。それに冬場どころかも桜が咲いても良い季節になっているけれど。

「あー、咲夜」「はい、なんでしようお嬢様」

「朝私起きやすいように冬を終わらせて来なさい」

ようやく命が下されたか。かなり遅かったような気がするが。

「かしこまりました。必ずや巫女よりも先に解決して見せましょう」

「ええ、お願いね。ここまで遅くなったのはパチエにある物の制作を頼んでいたからなのよ」

ナチュラルに心を読まれた。それにしてもある物とは一体……………。

「これよ、咲夜。これは異変解決の道中や勝負になった時にも役に立ってくれるでしょう。手に持たなくてもあなたの周りを浮遊するようになっているわ。頑張って頂戴ね」

「ありがとうございます、お嬢様、パチユリー様」

これで準備も整った。黒幕の検討もつかないけれど適当に当たってみましょう。

レミイから頼まれて作ったマジカル☆さくやちゃんスターとも呼ばれたりするあの補助道具をもって咲夜は異変解決に向かった。行った。

勿論星の模様は付いている。あってもなくても性能は変わらないのだが、やはり付けておくべきだと思った。

「さて、咲夜は行ったわね。貴方はこれからどうするの？」

「私も少し出かけてくることにするわ。会いたい旧友がいるかもしれないから」

まあいない可能性もないことは無い。でも彼女ならいてくれるだろう。

「そう、もしアリスが来たらそう伝えておくわ」

「今日は恐らくアリスは来ないわよ。ただの勘だけれど」

「あら、そうなの？でも万が一来たら伝えておくわね」「助かるわ。それでは行ってくるわ」

咲夜には悪いが先回りさせてもらおう。

「あれ、パチユリーも出かけるのですか？」

「ええ、ちよつと旧友に会いにね。あなたも来られたら良かったのだけれど」

「そうですね、まあよろしくお伝えください。では行ってらっしゃい」「行ってきます。風邪ひかないように気をつけなさいよ」

まずは上空の結界の綻びを見つけるところからか。これは恐らくそこまで難しくはないだろう。結界は昔から慣れ親しんでいるものなのだし。

勿論マヨヒガに迷い込んだりアリスと遊んだりすることは無い。廃洋館から音がするという事は三姉妹もまだ結界付近にはいない。あとは妖夢か。

まあ何とかなるだろう。早く向かわないと咲夜だけでなく霊夢や魔理沙にも追いつかれる可能性が出てきてしまう。

結界はここか。確か今は上を飛び越えられるはずだ。冥界と顕界の狭間がここまでゆるゆるでいいのだろうか。

懐かしい階段だ。いつも紫のおかげで直接門まで行っていたから気にしていなかったけれど、ここまで長かったのか。飛ぶから関係はあまりないけれど。

「貴方は一体どちら様ですか？ここは冥界、命あるものが来るべきところではないですよ。それに今は忙しいんです。無理矢理にでも帰っていただきましょう」

「私は異変を邪魔しに来たわけではないのよ。でもどうしても、というのなら勝負しましょうか」

東方好きなら一度は言ってみたい名台詞。をちよつとアレンジ。「妖怪が鍛えなおしたこの妖刀に斬れぬものなど、少ししか無い！」

「白玉楼の庭師兼剣術指南役、魂魄妖夢。私の修行の成果、その身でしかと受け止めよ！」

妖夢も私も魂魄流。しかし圧倒的な修行量の違いがあるから勝つことはできないだろう。ならば負けなければいいだけの事。

幸い妖夢も私を殺す気はないようで、スペルカードを構えている。斬られても白楼剣ならあまり問題はないけれど、楼観剣の方は拙いかもしれないし私としてはありがたいことだ。

修羅剣『現世妄執』

何故この世界の住人は皆Hard以上の弾幕しか撃ってこないの

だろうか。動き回るのは辛いからやめてほしいものだ。

ありがたいのは彼女が魂魄流だという事。私も修行の過程で何度も見てきた技が多いから比較的楽に避けられる。

「ほう、なかなか良い身のこなしですね。では次は……………」

「あら？貴方はもしかしてパチュリーかしら？」「！ゆっ、幽々子様?! どうしてここに?!」

「別に私がどこにいても問題ないでしょう？冥界は私の管轄なんだから。それで、貴方パチュリーよね？久しぶりね」

「ええ、本当に久しぶりだわ。五、六百年ぶりかしらね。率直に聞くけれど何故春を奪ったのかしら？」

「そうねえ、家にある書物の中にあの桜、西行妖の事が書いてあるものが一つだけあったのよ。その書によるとあの桜を咲かすには春が必要で、満開になれば何者かが復活するらしいの。」

だから少し興味があったのよ。楽しみでしょう?」

「そ、そうね。でも私としては咲かせるのは反対ね。わざわざかけられている封印を解かない方が身のためではないかしら？」

「そうかもしれないけどね。でも最悪死んでもらえば大丈夫かと思つてね」

なかなか凄い考え方をしているようだ。その者が復活した時点で幽々子は消えるので殺せないし、そもそも生きてもないのだが、そのことを上手く伝えることが私にはできない。

真実を伝えればそれだけで幽々子は消えてしまうだろうし。だからこの件の解決は自機組に頑張ってもらおう事にしよう。

「あなたも大変だと思うけれど頑張って頂戴ね、妖夢」「は、はあ。よくわかりませんが」

「まあいいわ。ところで貴方はどうして冥界に来たの？異変の調査？」

「違うわ。ここに来たのはあなた以外にもう一人再会したい子がいたからなのよ」

「あら、貴方妖夢と面識があったのかしら？」「無いわよ」

「じゃあいったい誰なの？冥界で再会するような霊のお友達がいるの？」

「違うわ。その子の住んでいる場所は上よ」

「ああ、なるほどねえ。まったく貴方の交友関係は広いわねえ。羨ましいわ」

「確かあなたの知っている人もいたはずよ。まあ私の友人はいるかどうかまだわからないのだけれど。」

「今から行ってくるわ。あなたたちも侵入者を迎え撃つ準備はしておいた方がいいわよ」

「大丈夫よ。こちらの準備は万全だもの。しっかりスペルカードも用意しておいたしね」

「それなら大丈夫そうね。まあ精々頑張りなさい。ではまた帰りに会いましょう」

「純粋なスペルカードルールで戦えば幻想郷では霊夢が最強だろう。前のレミィとの戦闘を見てわかった。彼女は覚えていないのだから紫はよくあそこまでの力をつけさせたものだ。」

「今日の私の目的地は冥界とその上空にある島々、天界だ。行こうと思っても今までは幽明の結界が緩んでいなかったからいけないかったのだ。」

「天界には欲を完全に絶った仙人からなった天人や、成仏して至った天人がいる。彼女は果たしているのだろうか。」

「幽々子の父、西行も天界には住んでいないはずだ。話を聞いてみたい」

が恐らく不可能であろう。

一応認識阻害は念入りにしておく。ばれても恐らく問題ない。一部を除けば天人なんかにはやられることは無いから。

これは凄い。想像を絶する美しさだ。一番低い場所でこれなら上の方はもつと美しいのだろうか。それとも景色自体は大して変わらないのだろうか。

天人は思いのほかたくさんいるし、認識阻害も正常に働いているようだ。ばれる気配がない。

彼女を探しつつ観光もゆつくりできる。買い物はできないけれど。天人たちは毎日騒いで踊つてを繰り返しているつまらなさそうな人生だ。

住宅街が閑散としすぎている。皆広場に集まっているからなのだろうか。閑散としていた方が落ち着くので私はこれで良いのだけだ。

さて、表札を一軒一軒見て回ろうか。名前が無かったら今日は帰ろうかな。

幸い家の数はとても多いというわけではなさそうだ。これならすぐに見終わるかもしれない。

「貴方は天人ではありませんね？何故天界にいるのかは知りませんが放っておくわけにもいきません。何、帰りは怖くないようにきちんと気絶はさせておきましょう」

あらら、認識阻害が効かないレベルの天人もいたのか。となると防衛役かな。

「殺しはしないので大人しくやられてください」『稔庶封陣』

なるほど。この弾幕構成は………似ているね。

「随分なご挨拶ね、稔里。無事天人に至れたようで何よりだわ」

「っ!? 貴方はもしかしてぱっちゃん?!ど、どうやってここに来たの?!」
敬語も外れたし

「思い出してくれたのね。まあ話しても長くないだろうから話すわ。私がここに来られたのは幽明の結界が緩んでいたからよ。」

天界は冥界の上空に存在する。これは御存じの通りよ。今までは顕界と冥界が行き来できなかったの。まあそれが当たり前なのだけれど。

でも今は何故か結界が緩んでいるの。だから冥界に行ける、つまり天界にも来られるというわけなのよ」

「なるほど、そんなことが。じゃあいつでもぱっちゃんの所に遊びに行けるというわけか。」

逆もまた然りだけど。でも天界は封鎖的だからねえ。私が地上に行くしかないかもね」

「ええ、そうね。私もこんなに高い所まで来るのは骨が折れるわ」

「私だって大変かもしれないよ?」

「天人はもともと自由に地上に降りられるのではないの? 詳しくないから知らないけれど」

「うーん、多分行けるとは思うよ。そう言えばそうかあ、今までも会いに行こうと思えば行けたかもしれないのね。残念だわ」

「だから今日来てあげたんじゃないの。それより天人になるまで早かったのね。早くても数百年と言われているのにまさか千年以内になっっているとは思わなかったわ」

「その割にはわざわざ天界まで来たのね。ぱっちゃんったら素直じゃないんだから」

「からかっても無駄よ。私は稔里の師匠なのだからね」

「そんなこと言ったら私だってぱっちゃんの師匠よ？ほらほら、敬いなさい」

「はいはい、流石はお師匠様でありますなあ。で、早かった秘訣って何なのよ」

「むう、まあいいわ。私つてもともと巫女じゃない？だから普通の仙人なんかよりはるかに欲が少なかったみたいなのよ。自覚は無かったんだけどね。」

それで修行を続けていたらいつの間にかここにいたわ」

「適当なのね。まあなんにせよ良かったわ。ここまで来たのが無駄足にならずに済んだし。」

ところで稔里は西行って知ってるかしら？天界にいると思うのだけれど」

「ああ、あの死んで天人になった歌人だっけ？どこにいるかは流石に知らないなあ。ただこの島よりももう少し上の島にいると思うわ。」

死後の天人は死神からも狙われないと聞くし気楽でいいわよね。それで、会いたいの？」

「いえ、ただ私の知り合いの父親だから気になっていただけよ」
簡単に会えないのなら無理に会わなくても良いし。」

「西行の子ってことは人間でしょう？今も生きているの？」

「彼女は今までずっと死んできた亡霊よ。冥界の管理人はその子なの」

「へえ、じゃあぱっちゃんの所に行くのに冥界を経由すれば会えるのね。私も会ってみたいわ」

「天人がそんなに簡単に地上に降りても大丈夫なのかしら？特にあなたはこの島の防衛の要でしょう？」

「いいのいいの。もう一人私くらいの力を持つ天人がいるし、もとも

と仕事なんてあつてないようなものだから」

天子かなあ。

「へえ、そんなに強い子がいるのね。その子も仙人上がりなの？」

「いいえ、彼女の一族は仕えていた者たちが天人になった時に同時に天人になった一族なの。」

まあ特例なのかな。総領の娘なのに実力は高いのよ。何故なのかよくわからないけど」

やはり天子か。今会うのは避けたいし今日はもう帰ろうかな。

「そうなのね。では今日はこの辺りで帰らせてもらうわ。あまり遅くまで帰らないと心配されそうだし」

「あら、そうなの？まあ仕方が無いか。じゃあ次は私から会いに行くわ」

「助かるわ。私が今住んでいる場所は幻想郷という場所にある霧の深い湖の傍の紅い館よ。目立っているからすぐにわかるでしょう。ではまた会いましょうね」

「ええ、身体には気を付けてね」「今は大分マシではあるけれどね」

もう暗くなり始めている。冥界内の時刻はよくわからないが早めに帰った方が良いだろう。西行妖の桜も完全に散ってしまっただけの枯れ木にしか見えなくなっている。

異変は無事終了したみたいだ。

「桜の封印は解けなかったのね。残念だったかしら？」

「まあ残念ではあるわね。一度話をしてみたかったし。でも勝負で負けたのなら仕方がないもの、当分は大人しくしておくわ」

「また封印を解こうとするかもしれないの？」

「それは無いわね。あんなに必死に説得する紫を見たのは初めての事だったし。封印されている人は可哀そうだけど」

「そう、ところで妖夢はどうしたの？」

「あの子はねえ………情けないことにまだ気絶しているわ。まあそれも仕方がないとは思うわ。むしろ顕界から来た子たちが元気に帰って行ったのが不思議なくらいね」

「博麗の巫女は強かったかしら？」

「ええ、あの子は別格ね。流石紫が育てただけはあるわね。まあ覚えていないようだったけど」

「やはりそうよね。そうそう、天界にいる私の友人があなたに会いたがっていたわ。また降りてくるかもしれないからその時は話をしてあげて頂戴ね」

「あら、そうなの？楽しみねえ。あら？もう帰るの？」

「ここにはメイドの子も来たでしょう？私が居候している館のメイドなのよ。」

「だから私もあまり遅くなつてはならないのよ」

「そうだったのね。いや、彼女も強かったわよ。将来が楽しみね」

「そうでしょう？美鈴が主に育てていたから強くなって当然よね。それでは帰らせてもらおうわ。」

「次に来るときは人里の菓子でも持ってくるわ。ではね」

「楽しみにしてるわ。またね」

「遅かったですね。それで、一体誰に会ってきたのですか？」

「幽々子と稔里よ。二人とも元気そうでよかったわ」

「私も会いたかったですねえ。それより早く館に戻りましょう。」

今日は咲夜さんの異変解決を祝ってお嬢様が普段の二割増しの豪華さで料理を振る舞ってくださいさるそうですよ」

「それは楽しみね。では戻りましょうか」

春頭の第三十四話

霊夢 side

レミリアたちの起こした異変も終わってもう一面が雪景色になった。そのおかげでレミリアが神社に来なくなったので私としては楽でいい。

巫女になってから初めて解決に乗り出した大規模な異変だったが、あちらもルールを守ってくれたおかげでかなり楽に解決することができた。

あんな大規模な異変はそうそう起きないだろうからしばらくはゆつくりできそうだ。あの異変の後から魔理沙は頻繁に紅魔館に本を借りに行っているらしい。

魔理沙の事だからどうせ死ぬまで返すつもりはないのだろう。つまりは泥棒と変わらない。

あそこの図書館の主はレミリアによると気づいていながら放っておいているらしい。見逃している理由は魔理沙が読んでも安全な本を持ち帰っているし、勉強はしてほしいからだそうだ。

彼女なら魔理沙を追い返すことも容易いはずだ。それをしないとこのならつくづく甘い奴なのだと思わざるを得ない。図書館の本といえれば彼女の財産だろうに。

そんなわけで最近では魔理沙が来る回数も減っている。別に寂しいとは思わない。もともと一人だったし、お茶の消費も半分になるから良いのだ。

しかしこの冬は長すぎるのではないだろうか。暦の上では既に春になっているし、例年はもう神社の桜が咲き誇っている時期だろう。

前回の異変から数か月。間が短すぎる気がするがこれも異変なのだろう。この寒さの中動くのは気乗りしないが異変を解決するの巫女の務め。行くよりほかあるまい。

まずは何処に向かおうか。そういえば魔理沙が紅魔館はパチュリーの暖房魔法が効いていて温かいと言っていたな。一度寄って身

体を温めてから行くことにしよう。

目的地は紅魔館だが、確か周りは霧の湖だったはず。冬場はどのくらい冷えるのか分かったものではない。

にしても気温が低すぎるような……………。

「やい！ここを通りたければあたいと勝負しな！」

妖精か。うーん、この妖精何処かで見たような……………。忘れたけど。

「はあ、面倒ね。この湖の寒さの原因はあんたなの？」

「あー？…：そうかももしれない。あたいはサイキョーだからな」

ああ、思い出した。確か魔理沙によると頭が春の寒い妖精、だっけ。訳が分からない。

「そう、今の私は異変解決中だからこれも悪く思わない事ね」

霊符『夢想封印 散』

「ぐえっ」手ごたえの無い奴ね。倒したけど寒さは変わらない。

「この寒さの原因は冬の妖怪か。とりあえず見つけてとっちめておこうかな」

「あらあら、えらく物騒な巫女がいたものね。怖すぎて辺りを吹雪にしてみたいそうだわ」

「あんたが冬の妖怪ね。早速で悪いけど退治させてもらうわ。あんたを倒せば少しはましになるかもしれない」

こいつを倒したところで異変が収まる気はしないけど。

「まあ怖い。まるで殺人犯だわ」「一人までなら大量殺人犯じゃないから大丈夫よ」

「貴方、本当に人間？最近の人間は物騒ねえ」

「失礼な。私は正真正銘普通の人間よ。いいからさっさとかかってきなさい」

「言われなくてもそのつもりよ」寒符『リングリングゴールド』
この程度では私は被弾しない。

「ぬるい弾幕ねえ。これじゃあいつまでかかっても私は当たらないわよ」

「うーん、困ったわねえ。じゃあ次、二枚目よ」怪符『テーブルターニング』

あまり困ってなさそうな奴ね。本当に妖怪はよくわからない。

「さっきよりはましだったわ。さて、私が勝ったんだし、冬の妖怪ならこの寒さを緩めるくらいはできるでしょう？」

「それは無理よ。私とは異なる方法でこの寒さは作られているんだもの」

となると倒した意味は全くなかったのか。無駄な時間を使ったわ。

「あつそう。じゃあ今日中には春になるから夏眠の準備でもしておくことをお勧めするわ」

やっと紅魔館についた。さっきの戦闘でもあまり身体は温まらなかったから早く入りたいものだ。途中で拾った花びらからは僅かに暖を取れるが気休めにもならない。それにしてもこの花びらは何処

から来たものなんだろうか。幻想郷の中に春の場所がある…？

「おや、貴方は博麗の巫女？珍しいですね。どうしたのです？」

「いや何、少し温まりに来たのよ」

「こんなところで悠長に時間を使っても良いのですか？咲夜さんはもう異変解決に出かけてしまいましたけど」

「なっ！それを早く言いなさいよ。先を越されるのは拙いわ。ではね」

まさか咲夜まで解決に乗り出しているとは思わなかった。こうなればあの寒がりの魔理沙も乗り出していそうだ。先に到着したいものだ。

咲夜も解決しているという事は紅魔館は白。あの魔法使いならできるとも思えないと少し思っていたけど。じゃあ次は魔法の森にも行くのかな。

手持ちの花びらも数が多くなってきたし、魔法使いならば知っている者がいるかもしれない。

「丁度いいところに来たわね。この桜の花びら、何かわかる？」

「あなたは…博麗の巫女ね。で？その花びらだったっけ？それは春度と呼ばれるものよ」

「春度お？何それ」

「本当にわかってて集めていたのではないのね。あなたの頭がどれだけ春なのかの度合いよ」

「冗談は今も言っている場合ではないのよ。本当のところを教えなさい」

い」

「ユーモアの無い巫女ね。まあいいわ。それを集めれば此度の異変の元凶にたどり着けるはずよ」

「ふうん、あんたは関係ないの?」 「あるわけないわ」

それじゃあ他の所に向かうか。この花びらをたどればいいんだっけ。簡単なことね。

ふむ、どうやら雲の上の方に行くみたいだ。確かに雲の上ならそんなに寒くないかもしれない。

「貴方は人間?本日二人目のお客さんね」

「なにになにく?また人間が来たの?今度こそ勝とうね」

「あんたらは何なのよ。生きてはいないみたいだけど、幽霊?」

「騒霊よ、騒霊!あんなへなちよこな幽霊なんかと一緒にしないでよね」

「ふうんそうなの。ま、どうでもいいわね。先に行きたいからそこどきなさい」

「貴方はお花見にお呼ばれしてないでしょ? 私たちを倒せたらお花見に参加できるかもね」

やつぱり、春の所があるんだ。いや、春を奪っていると考えてもいいかもしれない。

まったく何故こんなに立て続けに大規模な異変が起きるんだ。前までは小さな異変すら起きていなかったというのに。

「面倒だから三人まとめてかかってきなさい」

マヨヒガというところに誤って迷い込んでしまったが、先ほど倒した騒霊の三人の発言から察するにどうやら私は一番に目的地にたどり着いたようだ。

しかし先ほどから対峙している白髪の少女は不可解なことを言っていた。

『また侵入者ですか。早く顕界に帰ってほしいのですが』また、とはどういうことだ。私は確かに一番にたどり着いたはず。

「帰るつもりは無いのですね？では強制的にお帰り願いましょう。妖怪が鍛えたこの楼観剣に斬れぬものなど、少ししか無い！」

少しはあるのか。まあ今はそんなことを考えている余裕は無いか。この少女、剣術はかなりの腕前だろう。弾幕勝負なのは幸いか。

「行きますよ。もう先ほどのような無様な姿はさらしません」

獄神剣『業風神閃斬』

「くっ」弾幕勝負と思って油断していた。これは神経を使わなければならない。

無駄な思考は切り捨てないとこの量は避けきれないか……………。

「あく疲れたわ。階段長すぎるわよ。……………あら？やつと追いついたのね」

「っ貴方は?!もしかしてまた人間ですか?もう勘弁してくださいよ……………」

丁度カードの効果も切れたようだ。来たのは霊夢か。

「遅かったわね。悪いけれどこの子の相手は私が頂くわ」

「好きにして頂戴。どうせ魔理沙もあとから来るでしょうからここで待っていることにするわ」

「その必要はないぜ。もう来たからな」「あら、早かったのね。騒霊はどうしたの?」

「騒霊? そんなもんいなかったが。霊夢が倒した直後に来たからか?」

「あー、そうかもね。まあいいわ魔理沙が来たのなら早く倒した方がよい。この異変は長引かせるべきではないと思うわ」

「なんだ? それもお得意の勘か?」

「ええ。そういうわけで三対一で勝負することにしましょう。その方が早く終わるしね」

「それ、ただお前が面倒だけじゃないのか…」

「一対一で勝負できないのは残念だがここは私が折れるしかないだろう。先ほどから昔感じたような濃密な死の気配が強くなってきている気もする。」

「これは冥界だからなのか、それとも別の理由があるのだろうか。とにかく今は目の前の少女を倒すことのみを考えた方がよい。」

「霊夢が来た時点で負けることは無いだろうが、私も美鈴に鍛えられた身だ。負けてはいられない。」

「何人が相手でも変わりはない。すべては斬れば判る。いざっ」

天神剣『三魂七魄』

「これは一人だとかかなり厳しかったかもしれない。霊夢がひよいひよい躲しているところを見ると私もまだまだなのだ実感させら

れる。

帰ったらまた美鈴に鍛えなおしてもらわなければならぬかもしれない。

一人だと難しいが、三等分になればかなりましになっている。倒すなら今だ。

幻符『殺人ドール』 恋符『ノンディレクショナルレーザー』

「うっ?!」 あら、可哀そうに。魔理沙も同時に撃っていたなんて。

「よし、これで先に進めるぜ。さ、さつきと元凶をぶっ飛ばして帰ろうぜ」

「ええ、そうね。楽に倒せばいいんだけど」「霊夢はいつもそればかりだなあ」

「仕方ないじゃない。面倒なことは嫌いなものよ。それよりも早くいかないと本当に拙いことになりかねない。死の気配が濃くなってきているわ」

霊夢も感じていたのか。となるとこれは本格的に拙いかもしれない。

「あら、妖夢も倒しちやっただの。やるわね」

出てきた女性はどこかのお嬢様、という雰囲気だ

「さっきの奴は妖夢というのね。それであんたは？」

「相手の名前を尋ねるにはまず自分から、でしょう？まあ構わないけれど。私は西行寺幽々子、冥界の管理人をやっているわ」

「という事はあんたが元凶で間違いなさそうね。さつきとぶっ飛ばし

て……………!」

「おい、幽々子!あの桜は何なんだ?!」

「あれは西行妖という桜よ。あれを咲かせるのには沢山の春が必要な
の。綺麗でしょう?もうすぐ満開になるわ」

「何暢気なことを言っているのよ!あれは絶対に咲かせていけない
わ。何か封印してあるみたいだし」

「その封印が解けたら何者かが復活するらしいのよ。楽しみでしょう
?貴方たちももう少し待ってみるかしら?」

「そんなことをさせるわけが無いでしょう。あんたも桜も一緒にぶつ
飛ばす!かかってきなさい」

「うふふ、貴方たちに私の弾幕が避けられるかしら?」

忘郷『忘我郷 —自尽—』

幽々子 side

パチュリーが天界に行ってもう数刻。どうやら彼女の言っていた
侵入者のお出ましのようだ。

巫女だけかと思っていたがまさか三人も来るとは予想外。まさか
冥界に生きた人間が三人も存在する日が来ようとは、人生何があるか
わからないものだ。

三人とも無傷で見るところを見るに妖夢ではまだまだ力不足だつ
たみたいだ。あの子も頑張ってはいるのだけど。

それにしても流石は紫が育てただけはある。話している間すらも
隙を見せないし、何より桜に封印が施されていることにも気づいてい
る。

紫が言うにはかなりの修行嫌いらしいが本当なのだろうか。それが本当なのならば持つ才能は恐ろしいものだ。人間という枠組みに収まっていることすら奇跡のように思えるほどに。

私が彼女たちと戦っている主な理由は時間稼ぎだ。私は西行妖を咲かせるためだけにこの異変を起こした。目的の達成はもう目と鼻の先だ。

進行は順調、といたいところだがそうでもない。彼女たちの動きが予想外に良いせいでまだ巫女以外の二人を一度ずつ被弾させただけにとどまっている。残るカードは二枚。

桜符『完全なる墨染の桜——開花——』

自分で言うのは何だが、私の弾幕は非常に美しいと思う。紫が出した草案の中に“美しさと思念に勝る物は無し”という項目がある。私の弾幕は見た者すべてが美しいと感じるように作ってある。

圧倒的な物量を誇る美しき弾幕。あの子たちがあまり被弾しないのは美しさに目を奪われない程の精神力があるからなのだろうか。

さて、次で最後のスペルカードだ。これを躲し切られたら異変も諦めるしかなくなる。

『反魂蝶——八分咲き——』

さあ、いかにこれを躲すだろうか？

……………ああ？身体が思うように動かない。何故？ああ、そうか。遂に何者かが復活するのか。でも何故私の身体が……………？

どうやら私は気絶してしまっていたみたいだ。相変わらず身体はだるい。

「あら、ようやく目が覚めたのね。てっきり死んでしまったのではな
いかと思ったわ」

「亡霊が死ぬなんて冗談にもならないわ。それで、紫は何者かをどうしたのか知ってる？」

「そう、その事よ。私が貴女に言いに来たのは。ちなみに霊夢たちはもう帰ったわ。私もまだ姿を見せるわけにはいかないし丁度良かったわ。」

あのね幽々子、はつきり言うのと貴方は本当に危険な状態になっていたのよ。妖夢や霊夢たちがいなければ西行妖の再封印はできていなかったかもしれない。

あの桜に封印されている者はとても危険な者なのよ。亡霊である貴方も危なくなるほどに。

そんなに危ない封印を貴女は軽い気持ちで解こうとしたというの？ええ、勿論知らなかったから解こうとしたのでしょう。でも封印は簡単に解いてはならないわ。

特にあのような強力な封印は。あの桜の再封印は妖夢が気を失ってしまっただけじゃないものだったの。まあ私も居ればそうはならなかったでしょうけれど。

次からは何か封印を解きたくなったらまずは私に相談して頂戴。友人が傷つくさまを見るのは私でも辛いから」

「ふふっ、紫にもそんな感情があったのねえ。知らなかったわ」

「私は本気で言っているのよ？わかっているの？」

「ええ、勿論わかっているわ。次からはきちんと相談することにするわ」

「ならいいわ。そうそう。異変解決の宴会は博麗神社で催されるわ。費用は勿論白玉楼持ちね」

「あらあら、大変ねえ。紫は来るの？」

「そうね。恐らく少ししたら霊夢たちが結界の事について私に物申しに来るでしょう。その時に姿を現す予定だから、ね」

「貴方も大変ね。でもびっくりしちやったわ。あの巫女の動きは紫でも敵しいんじゃない？」

「そうね、弾幕勝負になれば恐らく彼女に勝てる者は幻想郷にはいないでしょう。本当に才能があるのもったいないわ」

「そう？ 私はむしろあれくらいの方が良いと思うわよ。きちんと修行をすれば人間の枠には収まりきらなくなってしまうでしょうから」

「そうかもしれないわね。それでは私は帰るわね」

あれから少し経った。どうやら春はきちんと顕界に戻っていたようだ。今日は宴会の日である。宴会といえば美味しい料理がたくさん並ぶはず。今から楽しみだ。

「幽々子様、あまりたくさん食べすぎないでくださいね。皆さんの分がなくなりますから」

「安心なさい妖夢。食料がたくさんあれば大丈夫なんだから」「はあ、ため息をつかれてしまった。私は正論を言ったまでなのに。宴会は夕刻からだ。これは恐らくパチュリーの住む館の吸血鬼への配慮だろう。」

始まった宴会会場を見ても美鈴とパチュリーの姿は見当たらない。どこに行ったのだろうか。

「あ、丁度良かったわ紫。美鈴とパチュリーが見当たらないのだけど」

「ああ、彼女たちなら今は台所よ。貴方がたくさん食べても大丈夫なように料理を手伝っているみたい」

「そうなのね。まあ彼女たちの料理は美味しいものね」

「でもあの館の中では二番手扱いみたいよ？」

「あら、となると一番はあの咲夜という子なのかしら？」

「それはどうかしら。まあ二番手扱いでも料理の腕は超一級品。貴方も存分に楽しみなさいな」

「ええ、勿論よ」

料理の担当は妖夢、藍、霊夢、咲夜、美鈴、パチュリーか。霊夢と咲夜の腕前は定かではないが霊夢には藍が教えていたはずだし、咲夜に至っては広い館のメイド長だ。

期待しても裏切られることは無いだろう。

「貴方が西行寺幽々子？ 私は誇り高き吸血鬼にして紅魔館の現当主、レミリア・スカーレット」

「こんばんは、レミリア・スカーレット。どうしてここに？」

「いや何、此度の異変の元凶は貴女だったのだろう？ ならば当主としては話しておくべきかと思ってるね。それに今夜は紅魔館のメンバーの半分が料理担当だからね、まあ暇だったのよ」

「貴方の妹さん、でいいのかしら。その子とパチュリーの使い魔しかないのね」

「まあね。小悪魔は本来ならパチエの代わりに料理をさせたかったの

「ただ彼女が料理をすると味の濃い肉料理が主になってしまつてね」

「いいんじゃない？私は味の濃い肉料理も好きよ。ところでさつき紫に聞いたのだけれど、美鈴とパチュリーとの料理の腕は紅魔館でも二番手なんですつてね。一番はやっぱりあの咲夜なのかしら？」

「一番は私だよ。ふふん、驚いたかい？」「ええ、驚いたわ」

「この吸血鬼、えらそうにしているだけかと思つていたら冗談も言えるのね。なかなか面白い子かもしれない。」

「あら、台所から皆出てきたわね。一段落着いたのかしらね」

「ああ、本当ね。それでは私は戻らせてもうわ」

「パチュリーも美鈴も面白い仲間を見つけたものだ。私は冥界にいる限り生者との新しい出会いはないから。」

「幽々子つたらおかしな顔ね。折角の豪華料理が台無しよ」

「また来たのね、紫。そういえばさつきレミリアが面白い冗談を言つてきたわ。あの館で一番料理が上手いのはレミリアなんだつて。当主が料理なんて面白い冗談よね。」

「……………どうしたの？紫」

「残念ながら幽々子、それは事実なのよ。あの館の朝食から夕食、作つているのはすべてレミリアよ。作る料理も日本料理は勿論、世界中の様々な料理。材料はほとんど紅魔館で作つた物。」

「最近はついに牛や豚、鶏まで飼い始めたわね」

「……………え？レミリアのあれつて本当だったの？だつたら私も是非食べてみたいわねえ。パチュリーや美鈴の料理をも超える味を」

「二線を画すどころか二、三線を画しているような味らしいわよ。パチユリー曰く。でもあの館の者以外は恐らく食べられないわね」

「それはどうして？」

「客が来ているのに当主が料理をするはずが無いでしょう？私も何度か行っているけれど、出てくる料理は毎回咲夜の作ったものだけ」

「残念ねえ。そうだったら妖夢の腕を上げてもらうしかないのかも」

「やめてあげなさい。白玉楼の仕事を一人でこなしている妖夢にこれ以上の負担はかけない方が良くと思うわ」

「私の屋敷には幽霊たちもいるじゃないの。まああまり役に立っていないとは言えないけど。しかしそれではまるで幻の料理ね。紅魔館は料理人の巣窟だった？」

「残念ながら紅魔館の住人の半数は料理以外の家事全般が一級品なものだけだね」

それをまとめているのがレミアか。本当に面白い集団だ。戦闘能力もかなりのものだろう。恐らく幻想郷のパワーバランスの中でも最強クラスで最高クラスだ。

私の知らない間に顕界はこうも変化していたのか。これが妖夢にも良い刺激となってくればいいのだが。

酒宴的第三十五話

パチユリー side

最近まで花見ができていなかったことが嘘のように最近では宴会の連続だ。これはもう萃夢想が始まっていると考えてもいいだろう。彼女も回りくどいことをするものだと思ってしまう。鬼は人間を見限つて地獄に行ったと紫から聞いた。それを提案したのが萃香だという事も。

この異変はわからない者にとっては何も思わない異変だし、知っている者からすればまあ動機もわからなくもない。

それにこの異変が起きたという事は紫の言っていたことが本当で、萃香が生きていたという事の証明に他ならない。私としては嬉しい限りだ。

今日も宴会が開かれるらしい。宴会料理は幽々子が来るせいで私や美鈴も手伝わなければならぬ。それは別に構わないのだが、萃香にも早く再開しておきたいところだ。

宴会風景を見た感じでは気づいているのは私以外には幽々子と美鈴、後はレミイくらいか。霊夢は違和感はあるみたいだがまだそのままで気にしていないようだ。

この妖気の薄さで感じているのはもはや人間かどうか疑いたくなるけれど。

さて、今日もたくさん料理を作らないといけない。酒は日本酒が主流だが、料理は飽きさせないために外国の料理も作っている。

料理の分担としては洋食が私と咲夜、中華が美鈴、和食は妖夢、つまりは霊夢と藍という感じだ。同じ場所では流石に全員は料理出来ないの、調理器具を三組ほど紫からもらって外でも料理ができるようにしてある。

かなり効率よく作業できるおかげで料理の完成も早い。幽々子を満腹にさせることはできないが、参加者のほとんどは満足して帰って

くれているので量はこんなもので十分なのだろう。

私が終わったタイミングで丁度美鈴も終えたようだ。咲夜は早々にレミイの方に行ってしまったが私は彼女と少し話すことにしよう。

中華はそこまで量を作る必要はないが、一人で作ってこの早さなのは流石美鈴といったところか。

「丁度貴方も作り終わったのね。一人だと大変ではないの？」

「そんなことはありませんよ。作り慣れた料理ですし。」

そして今日もですか。パチュリーは気づいていますか？」

「流石、気を使うだけはあるわね。そうね、屋根の上で話をしましょうか。誰かに聞かれると彼女が可哀そうだわ。折角こんなことを催しているのだから」

「確かにそれはそうですね。では屋根に行きましょう」

美鈴 side

最近の頻繁な宴会には見えない参加者がいる。これは初めの宴会の時から気づいていたことだ。

一度戦った相手の気はほとんど覚えている。それに彼女の実力は私よりも格段に上だった。そんな相手を覚えていないはずが無い。

初めの宴会の時にはとても薄くなっていったせいで、誰が引き起こしているのかがわかっていたのは恐らく私だけだっただろう。パチュリーでさえ誰かは特定できなかつたみたいだ。

それが回数を重ねるごとに濃くなってきている。まるで誰かに気づいてもらいたいかのようだ。今ではもう数名が気づいている。

思い切ってパチュリーに尋ねてみると、彼女もどうやら特定は終了していたみたいだ。

屋根まで来れば盗み聞きはされないといっても過言ではない。パチュリーの遮音結界が張られるからだ。中に入られたら普通に聞かれてしまうが、私たちが気づけなままに入ることができるような者

は一人くらいだろう。

「彼女も回りくどいことをしていると思わないかしら？」

「それは徐々に妖気の濃度を高めて周りに気づかせようとしているという事でしようか？」

「まあそれもあるわね。でも私が言いたいのは彼女の目的の方よ」

「萃香さんの目的？」

「そう、恐らく彼女の目的は鬼を地上に呼び戻すこと。彼女は昔人間に失望して地獄に向かったでしょう？そして今になって地上に出てきた。」

これは彼女が再び人間と関わりたいと思ったからに違いないわ。だから彼女は鬼の好きな宴会を開かせて鬼を呼び戻そうとしているのではないかと思うの」

「そんな意図があったのですか？………む、この気配は」

「やあ、久しぶりだね。あの時はどうも、助かったよ」

「本当に久しぶりね。あの日人間たちが持ち帰った物を見てあなたが死んでしまったのではないかと思ったわ。生きていてよかった」

私もあの時は本当に心配した。

「私ら鬼は簡単にはやられないさ。それで美鈴、どうだい？あれからまた強くなったみたいだけど一戦やるかい？」

鬼と戦うなんて絶対に嫌なことだ。それにこの言い方は弾幕勝負でもないだろう。

「遠慮しておきますよ。私は貴方主催の宴会に来たのであって戦闘しに来てはいないのですから」

「なんだ、私が主犯だと気づいていたのかい。いつから気づいていたんだい？」

「初めからに決まっているじゃないですか。私の能力を使えばすぐにわかることですよ」

「ああ、そういうえばそうだったかな。もう千年以上も前の事だからね、忘れてたよ」

「そうそう、萃香。いくらこのような宴会を催したところで鬼は地上には帰ってこないわよ。というか来られないと言った方が良いのかしらね」

「なんだ、私の計画までお見通しだったってわけかい。それで？何故来られないんだい？」

「簡単なことよ。地底と地上には不可侵条約というものがあってね、そのせいで地底の妖怪は地上に出られないし、地上の妖怪は地底には行くことができないの」

「私は来ることができたのにかい？」

「そこが分からないのよね。何故紫があなたを見逃したのか」

「私が紫の友人だからじゃないかい？」

「案外そうかもね。紫って友人が少なそうだものね」「誰が友人が少なそうですって？」

「あら、紫も来たのね。丁度あなたの話をしていたのよ」

パチュリーは平然と流しているが私はかなり驚いている。気配のないところから急に出てこられたら仕方ないと思う。私が如何に能力に頼っているかを痛感するが。

「訂正する気がないというのはつきりと分かったわ。それで萃香、貴方に言っておこうと思うことがあったのよ」

「なに？地底に戻ってののかい？」「違うわよ。この異変、そろそろ終わりにしないかしら？」

「なんだよ紫、これからが面白くなるんじゃないか。まだ私に気づいている奴も少なそうだし」

「あらあら、感づいている者は意外に多いかもしれないわよ。それでは私はこの辺りで帰らせてもらうわ。藍と橙をよろしくね」

「あなたは参加しないの？折角の宴会なのに」

「私は次回参加するわ。次回が楽しみねえ」「何か言いたげだね。一体何が言いたいんだい？」

「いえいえ、何でもないわ。ただ次回は貴女にも私の最高傑作が披露できるのね、と思っただけよ。言い忘れていたけれど、スペルカードルールを守らなければ地底に帰ってもらうから忘れないで頂戴ね。ではまた会いましょう」

本当につかみどころのない人だ。彼女の最高傑作というやはり博麗の巫女なのだろうか。

聞くとところによると弾幕勝負においてはあの紫さんさえ凌駕するほどの実力を持つらしい。人間とは何だったかを考えなおしておかなければならない。

「ちえ、紫のやつ言いたいことだけ言って帰りやがったな。でも異変はまだまだこれからさ。お二人さんも料理頑張りなよ？」

「結構大変なのよ、あれ。それにいつもいつも食材提供しているから私たちの食べるものが少なくなってしまうわ」

「まあ食材に関しては実際はさしたる問題も無いのですがね。少量でも満足できる料理が出てきますし、私たちは本来必要ないですしね」「それもそうなのだけれどね。でもほどほどにしてもらえると助かるわ」

「むー、困ったなあ。まあまた次回考えることにするよ。おや、そろそろ宴会もお開きになりそうだ。あんたたちも早く戻った方が良くないかい？」

「そうね、そうさせてもらおうわ。ではまた会いましょうね」「さようなら」

今夜はようやく萃香さんが姿を見せてくれた。久しぶりだったけどあまり変わっていないかったようで良かった。地獄にいたのに精神に応えている様子が全く無いのはどうなのだろうか。

紫さんの言葉から察するにこの異変は次回を以て終了するみたいだ。私もそろそろ疲れてきたころだったのでありがたい。

パチユリー side

次がこの異変解決後の宴会になることは間違いないだろう。霊夢の異変解決モードに巻き込まれるのは勘弁願いたい。

咲夜とレミイだけで満足して帰ってもらいたいものだ。上手い言い訳を考えておかなければならない。辛いねえ、まったく。

霊夢が紅魔館に来るとすれば次の宴会の前日だったか。その日だけ人里に行くことにしよう。前回行ったのは三月ほど前に燃料になる薪をもつていった時だし。

というか最近買い物には滅多に行かなくなっている。もはや吸血鬼の館と言われてもわからない程に庭は植物でいっぱいだし、家畜の小屋まで建ててしまっている。

美鈴は毎日することが増えて大変だろうと思っていたけれど、彼女は彼女で楽しんでやっているみたいだ。いやまあ西洋にいた頃からいずれはこうなるかもしれないとは思っていたけれど予想外にレミイの行動力が高かったみたいだ。

でも流石に自分たちでは調達できない物もある。いつもはレミイが足りない食材を補う工夫をしているが、たまには他の食材も食べてみたいだろう。

良いことを思いついた。結界が解かれたことでレミイも人里には

行くことができるようになった。いつそのこと彼女と一緒に買い物に行ってみるのも悪くないかもしれない。買う物もレミイが見極めた方が確実だろうし。

そうと決まれば早速誘ってみるか。予定は早いうちに立てておいた方が後々楽になる。流石に美鈴は連れていけないが。

レミリアside

最近の宴会、引き起こしている者が何者なのかはわからないがかなりの実力者のようだ。宴会に参加している者の中で実際に気づいていそうなのは私の他にはパチエ、美鈴、西行寺幽々子、八雲藍くらいだろう。霊夢もわずかではあるが気にしていたようだが。

しかしあの宴会に八雲紫が参加していないのが気にかかる。従者とその式だけが参加しているというのも何かおかしいことのように感じる。

彼女の頭の中は私では到底暴けないが何かしらの思惑はあるのだろう。私も行動してみようか。

おっと、誰かが部屋の外にいるようだ。自慢ではないが種族柄耳は他に比べるとかなり良い。足音からすると咲夜ではないしフランでもないだろう。となると残っている中でこの部屋に来そうなのはもう一人しかいないだろう。

「パチエなの？用があるなら入ってきてもいいわよ」

「そういう事なら遠慮なく入らせてもらうわ。」

まったく便利な耳を持っているものね。羨ましいわ」

「それで、何か用事があるから来たんでしよう？どうしたの？」

「そうね、明後日一緒に里に行かないかしら？あなたはまだ行ったことが無かったですでしょう？」

「唐突ね。しかしなんで急に私と一緒に里に行こうと思ったの？」

「まあ理由はいくつかあるわ。たまには違う食材も食べたくはならないかしら？私が一人で買い物に行っても良いのだけれど、折角レミイも行けるようになったのだし目利きはあなたがした方が確実に良い物が手に入るじゃない」

「絶対他に理由があるでしょう？もう長い付き合いなんだしそれくらいはわかるわよ」

「流石は親友ね。そう、私があえて明日ではなく明後日に行こうとするのは面倒ごとに巻き込まれたくないからよ。あなたは能力を使えばすぐにわかるでしょうけど次回の宴会の直前にこの異変は終わる。これは紫に聞いたこと。」

解決者は勿論霊夢になるでしょう。その霊夢が明後日来る気がするから館から出ておこうと思ったのよ」

「八雲紫が言うのなら間違いないかもしれない。とすると今回の異変の犯人は八雲紫になるの？そんな感じはしなかったけど」

「鋭いわね。今回の異変の犯人は紫ではないわ。彼女とは旧知のとある妖怪よ。現代では人間はおろか若い妖怪ですら覚えてない程の古い種族のね」

「そんな奴が何故異変を起こしているの？というか感じた雰囲気ではかなり強そうだったけど、忘れ去られたという事は実は弱いという事なの？」

「異変を起こしている理由は自分で考えなさい。まあ答えは実際に会わないと分からないでしょうけど。」

それと彼女の強さだったわね。彼女が弱いなんて天地がひっくり返ってもあり得ない事ね。彼女に真剣勝負で勝てる見込みがあるのは紫ともう二人くらいかしらね。私の知る妖怪たちの中では。

それほど強い。種族としては間違いなく最強ね。

それで、結局買い物には行くのかしら？」

「ええ、構わないわよ。私も避けられる面倒は避けたいし、里にも行ってみたかったし。」

でも貴方がそこまで言う妖怪とは一度戦ってみたいかもしれないわね」

「私がそこまで言う妖怪と戦って良いことなんて一つもなかったんじゃないの？紫との戦いでよくわかったと思っていたのだけれど」

「まあね。でも自分の実力がどこまで通じるかは試してみたいじゃない？」

「私にはよくわからない感情ね。とりあえず戦うとしても決闘方式にしておきなさいよ。丁度良いルールもあるのだし」

「勿論よ。わざわざ死ぬ危険を冒すほど愚かな生き方はしてきていないもの」

「なら良いのだけれど。では明後日空けておきなさいよ。朝から行くから」

「わかってるわ」

パチエったら本当に心配症だ。私が約束を破ることなんてできないのに。

しかし最強の種族か。パチエから見ても天狗や吸血鬼より強いという事だ。ここに来てから自分より強い者がたくさんいるせいで感覚が狂っていたが、何故西洋ではあんなに周りが弱かったのだろうか。

いよいよ初めての人里に訪れる日が来た。運命を見てみたが霊夢が今日来るというのは確かなことらしい。美鈴は勿論、館に何かあれば困るので咲夜も置いて行くことにした。

「日傘ももう少し大きい物を買った方が良いかもしれないわね。翼が少し焦げているみたいだけれど大丈夫なの？」

「これくらいどうってことないわ。もう慣れてしまったしね」

初めの方は気になっていただけだいつの間にか気にならなくなった。

不思議なものだ。

「果たしてそれでいいのかしら。まあ今はいいわ。では行くわよ」

「ええ、咲夜も昼食を任せてしまつて悪いわね。それじゃあ行つてくるわ」

「お気になさらず楽しんできてください。くれぐれもお気を付けていつてらっしゃいませ」

人里というからには人間がたくさんいるのだろう。ここ十年ほどで見た生きた人間は咲夜と霊夢と魔理沙の三人だけだ。

それに三人とも能力を持つているせいで普通の人間を見るのは本当に久しぶりの事になる。大勢の人間を見るのも同じくらい久しぶりになる。

少しばかり緊張するし、妖怪に寛容な里ではあるが決して友好的ではない。それなりに視線を気にして買い物をしなければならぬかもしれない。

夜の王と呼ばれていても昼間ならばこんなものだ。とりあえず何かしらの約束事を違反しないようにだけ気を付けておかなければならない。

結果的に楽しい買い物ができるばよいのだが。

菓子的第三十六話

レミリア side

初めて里に来てみたが、パチエの顔の広さには驚かされる。彼女は人間ではないと公言しているらしいが何ら差別的な目で見られていないわけではないようだ。

かく言う私も特に不快な視線を向けられることは無い。私の場合は明らかに妖怪だと分かるのに、だ。この人間たちは変わっていると思わざるを得ない。

パチエ曰く、里の中で妖怪は人間を襲ってはならないので安心して暮らすことができるようだ。妖怪に怯えていないわけではないらしい。

しかしそれにしても危機感がなさすぎるのではないだろうか。妖怪には自分勝手な者も多い。たとえ規則があってもそれを守る妖怪だけではないのではないか。聞くは一時の恥聞かぬは一生の恥、と教えられたならば素直に聞いてみよう。

「ねえ、パチエ。ちよつといいかしら?」

「どうしたのよ。何処か気になる店でもあったの?」

確かに甘味処とか気になる店はあるけど今は違う。

「違うわよ。この里の人間はどうしてこうも安心しきっているのかしら? 規則を守らない妖怪だっているんじゃないの?」

「いるにはいるわね。でもそんなおバカな妖怪はこの里にはそもそも入れもしないでしょう。この里の守護者がしっかりしているから」

「へえ、守護者なんてものもいるの? なかなか面白いわね。統治者はいないの?」

「いないわ。仮に統治者が生まれたらそこの妖怪は黙ってはいないでしょう。まあ人間はそんなことを知らないのだけれど」

「ふーん、私にはよくわからないわ。あ、あの店に行ってみましようよ」

「急ねえ。へえ、甘味処ね。今度はお菓子作りでも始めるつもりなの？」

流石、鋭い。和菓子の美味しきは洋菓子のそれとはまた違うところにある。それに和菓子はなかなか料理本がないのだ。実際に職人の物を食べてみるのが一番だろう。

「よくわかったわね。作りたければまずは知らなければならぬ。というわけで早速行くわよ」

「今日の目的は一応買い物だからそこは忘れないで頂戴よ」

勿論だ。既にいくつかの店の野菜には目を通しておいた。館の庭で育てられそうなものもいくつかあった。

「ここが甘味処なのねえ。雰囲気落ち着いていて素晴らしいところだわ」

「そうね。で？レミイは何を食べるの？」

「うーん、迷うわね。どうしようかしら。パチエは何を頼むの？」

「私は桜餅にしようかしら。今丁度咲いているのだし」

なるほど季節によっても作る菓子が違うのか。洋菓子は基本一年中同じものを食べるのだけど。

「じゃあ私は柏餅にしようかしら」

「別に食べたければいくらでも頼んでいいわよ。食べきれなければ保存もしておいてあげるし、お金なら問題ないくらいあるから」

なんて魅力的な提案なんだ。そんなの乗るしかないだろう。

「ならそうしようかしら。柏餅は一つここで食べて館には全種類持ち帰りましょうか。フランと美鈴と咲夜と小悪魔へのお土産にもなる

し」

「なら決まりね。すみませくん……………」

注文し慣れているように次々言っている。どうやら土産の分の他にも明日の宴会に持っていく分も注文しているみたいだ。

桜餅と花見団子をそれぞれ五十、明日作ってもらうように予約しているようだ。

まあ流石に今から作るのは無理だろうから丁度良かったのではないだろうか。

「どう？和菓子は。作れそうなの？」

「独学でここまでの味を出すのは難しいかもしれないわ。何処かに弟子入りすれば作れるようになると思う」

「紅魔館の主が弟子入りねえ。ま、いいんじゃないかしら？あなたにその気があるのなら」

「予想通りの返事ね。パチエなら絶対に反対しないと思っていたわ。でも弟子入りは駄目だわ」

「へえ、それはどうしてかしら？」

「パチエならわかっていくくせに。職人に弟子入りしてしまつたら認められるまで数年以上はかかるからね。だからできないのよ」

「ふふつ、ばれていたのね。でも和菓子でしょう？それなら作れる子がいると思うわ」

「へえ？そんな都合の良い知り合いがいて羨ましいわね」

「あなたも知っている子よ。最近の宴会料理の和食を作っている子、妖夢よ」

「へえ、料理はかなり美味しかったけど和菓子まで作れるの？」

「恐らくね。彼女の主人が食事好きだから和菓子もかなりの腕だと思

うわ。彼女に頼んでみましようか？」

「いや、私から直接頼み込むわよ。それだと流石に礼儀がなっていないでしょう？」

「そうね、ではまた明日頼んでみなさい。さて、食べ終わったことだし、今日持ち帰る分ができ次第買い物始めるわよ」

「ええ、分かってるわ」

パチユリーside

どうやらレミイは甘味処に行く前に既にあらかたの目利きを済ませていたようだ。寄る店の指定までされたらすぐにわかる。

残念ながら売られてしまっていて狙いが外れた物もあったようだが、残っている物の中にも良い物はあったらしい。

どうやらレミイが和菓子を作りたいと思っている気持ちは本物のようだ。まあ料理において彼女が真剣でないときは無いけれど。

「ねえパチエ？そろそろ豊穰の神を呼ばないといけない季節なんじゃないの？」

紅魔館の庭は作物多いので毎年呼んでいるがレミイは知っていたのだろうか。いつも呼ぶときには私と美鈴とこあくらいしかいないのに。

「知っていたのね。まあそろそろよ。今日の帰りにでも探しに行きましようか」

「どこに探しに行くのよ。神なんて神社にいるんじゃないの？」

「彼女の神社はないわ。妖怪の山のどこかにいるはずよ」

「うへえ、妖怪の山あ？また面倒な所に住んでいるのね」

「大丈夫よ。今まで鴉天狗に襲われたことなんてなかったし」

毎回白狼天狗がじゃれついてくるくらいだ。鴉天狗以上は一人を除いて姿すら見せないし。

「あとは何か買いたいものがあれば寄るけれど」

「今はもうこれくらいでいいかしらね。もう昼下がりだしそろそろ帰りましょうか」

今日はなかなか充実していたのではないだろうか。団子と餅を注文したからまた明日も里に来ることになるけれど。

・
・
・

「着いたわ。ここが山の入り口ね」「入らないの?」

「入らなくても哨戒中の天狗が来てくれるわ」「それって排除対象として、でしよう?」

「まあそうなのだけれど、少ししたら話の通じる天狗が来てくれるわ。それまで相手をしてあげばいいのよ」

「言っておくけど私は日傘から手が離せないからそこそこよろしくね」

「まあ大丈夫よ。それに運が良ければ最初の一人で話が通じることもあるし」

「侵入者かと思ったら貴方でしたか。用があるのは文さんでしょうか?」

「いえ、今日用事があるのはあなたの方よ」

「その天狗は誰なんだ?」

あ、レミイの話し方が変わった。初対面の時や当主として話すときにはレミイは口調が変わる。たまに崩れているときがあるけれど。

「申し遅れましたね。私は白狼天狗の犬走権です。貴方はもしかや吸血

鬼ですか？」

「いかにも。私は湖のほとりに建つ紅魔館の現当主、レミリア・スカ―レットだ」

「自己紹介は十分かしら？では要件を話すわ。秋姉妹が今どこにいるか教えてくれないかしら」

「少し待ってください。この時期ですと恐らくここに……………ああ、いましたね。呼んできましようか？」

「いえ、穰子様の方に伝言だけ頼めるかしら？」「構いませんよ」

「ありがとう。では三日後に紅魔館に来てくれ、と伝えておいて頂戴」

「わかりました。本日はもうお帰りになるのですか？文さんが会いたがっていました」

「なら文も三日後に紅魔館に来ればいいのではないかしら。とにかく今日はもう帰るわ。伝言よろしく頼むわね」

「お任せください。では」

「さて、私たちも帰るわよ。今日は美鈴も咲夜も大変だったでしょう」

「そうね、少し申し訳ないことをしてしまったわ。早く帰ってあげましょう」

案の定今日は霊夢による襲撃があったらしい。レミイが留守だと知って案外すんなり帰ってくれたようだが。

美鈴に三日後の事を伝えるついでに労っておいた。レミイは今日買ってきた食材を使って新作を作ってくれるらしい。

食後のデザートも考えれば楽しみは倍増だ。食べきれるかどうかはわからないが。

そんなこんなでついに宴会当日だ。店主が言うには菓子がすべて出来るのは正午頃とのこと。それまでは特にすることが無いのでアリス用の魔導書でも書いておくことにする。

彼女の成長は流石に遅くなつたがそれでも私から見れば相当なものだ。もともと器用だから教えたことはすぐに応用までもつていけるのだろう。羨ましい限りだ。

私が彼女のために書いた魔導書の数はもう二十を超えているだろう。彼女がだんだん高度な魔法を使えるようになっていくのを見るのは楽しい。弟子の成長を見ている気分になれるから。

そういえば今日はまだ魔理沙が来ていない。彼女も異変解決の手掛かりを見つけたということなのだろうか。彼女に盗られている本はおよそ百二十冊。

そろそろ返してもらいに行かなくてはならない。流石に百二十冊同時に勉強するのは不可能だ。もう読み終わった本や、読む気もない本もきつとあるだろう。

五冊ほど残してあとは今日の里からの帰りにでも返してもらおう。本棚が空くと勝手に外来本が入ってくるから鬱陶しくてかなわない。大体は香霖堂に格安で売り、残りは鈴奈庵に売るか処分するのだ。料理本などは残しているが正直いららないと思う。レミイが本を見て作っているのは初めの一回だけなのだし。

考え事しているとあつという間に時間が経ってしまふ。もう昼食時だから食堂に行かなくてはならない時間だろうか。

「パチュリー様、お嬢様から食堂に来るように、と」

「ありがとう咲夜。では今から行くからあなたは美鈴を呼んできてあげなさい。

「こあく、昼食だから上に行くわよ」

「はい、行きましようパチュリー様。今日の昼食は何でしょうね」

「わからないけれど一つ言えるのは出てくる料理が何であつても絶品

だという事かしらね」

「当たり前のことを。宴会用のお腹は残るでしょうか」

「運動しておけばいいんじゃない？美鈴と一緒に」

「うげえ、あれは身体がついて行けませんよ。私にはできません」

「情けない悪魔ねえ。あれはまだ基礎らしいわよ？私にもできないけれどね」

「パチュリー様も一緒じゃないですか。それとお忘れかもしれませんが私は最下級の悪魔ですから情けなくて当然なのですよ」

「そこでドヤ顔されても………」「はいはい、口喧嘩は終わったかしら？」

「あら、もう食堂まで来ていたのね。今日の昼食は？」

「今日は宴会まで運動しなくても大丈夫なように軽めの料理にしているわ。何なのかは自分の目で確かめなさいな」

「だそうよ。良かったわね、こあ」 「ソウデスネ」

それにしても軽めの料理か。そもそもレミイの作る料理で重いものはあまり出てこない印象だが。

幽々子 side

今日の宴会はなかなか面白いことになりそうだ。まだ始まっていないがそんな気がする。

前回の宴会の後から急に妖気が強くなったところを見ると今回の犯人ももう潮時だと思ったのだろう。そのせいで妖夢が顕界に頻繁に行くようになったのは残念なことでもあるし嬉しいことでもある。

残念なのは退屈な時間が増えることだ。まあこれは紫を呼べば解決することだが。

嬉しいことは人里の菓子を買って来てくれるようになったことだ。

妖夢も作ることはできるし美味しいのだがやはり別の味も食べてみたかったのだ。

今日も退屈だし紫と話でもしよう。

「紫」 「どうしたの？」

「話し相手になって頂戴よ。今日このお酒持って行ってあげるから」

「あら、それはかなり古いお酒みたいね。賞味期限は大丈夫かしら？」

「大丈夫よ。賞味期限まであと千年以上はあるし」

「なら安心ね。酒好きのあの子も喜ぶでしょう。でも話し相手になれるのは少しの間だけよ。やらないといけないことがあるから」

「ふうん、ま、いいわ。少しの間だけでも退屈を凌げられれば。それにしても妖夢も鈍いわね。」

前回の宴会の後から急に妖気が強くなったから気づけはしたのでしようけど、近くの物ほど見えないものなのかしらね」

「そういうものよ。灯台下暗しとはよく言ったものよね。それにこれは異変を終わらせる決断をしてくれた、という事。ありがたいわね」

「私はそこところはよくわからないけどね。それで？」「それで、とは？」

「惚けないですよ。宴会は今日で終わりなんですよ？きちんとして解決できそうなの？霊夢は」

「あの子なら大丈夫でしょう。きっと悪いことにはならないと思うわ」

「信頼してるわね。でも私の妖夢に対する信頼の方が大きいかね」

「どうかしらね。まああの子が妖怪に容赦なく接するようになってくれたのが私としては嬉しいことね」

「幻想郷を上手くまとめるため、か。本当に紫は幻想郷を愛しているのね」

「当然でしょう？そんでもしないと管理人なんてやっつけられないわ。博麗の巫女を妖怪に容赦ないように育てるのも私の役目。」

情で妖怪を退治できない巫女になられたらたまらないもの」

「たとえば母親代わりとして育てても、ね。だから友人が少ないのではないの？」

「失礼な亡霊ねえ。賢者に友人は少なくて良いのよ。いざという時に頼れる数名がいればね」

「例えば私とか？」「まあそうなるわね」

「結局は捨て駒として考えているのではないの？」

「そんなことは無いわ。幻想郷を護るためなら私は命だって懸けてみせる。貴方たちを見殺しにしてのうのうと高みの見物を決め込むつもりはないわ。」

ただ幻想郷にとって最善だと思う事をしているのよ」

「それならいいんだけど。あら、そろそろ顕界では日が沈む時間じゃないの？行かなくても大丈夫なの？」

「あら、うつかりしていたわ。それではあとでまた会いましょう」
なるほど。紫は今回の宴会にのみ参加するつもりなのか。楽しくなりそうだ、私の勘も捨てたものではない。

「幽々子様、食事はほどほどになさってくださいね。私だけでなく皆さんも大変なんですから」

「それは約束しかねるわね。美味しい料理が出てきたら食べるのが礼儀つてものでしょうか？」

異変は無事に解決されたらしい。紫の仕事は霧状になった鬼の姿を霊夢の前に現れさせることだったようだ。

確かにそれはいくらあの子でもできないだろう。本当に紫の能力の応用範囲は広すぎる。底どころか縁も見えているのか定かではない。

結果的に異変も解決され最後の宴会が始まる、というわけだ。紫は何処からか大量のお酒を集めてきたみたいだ。

私も持ってきているがいらなかったかもしれない。

今日はどんな料理が出てくるのか、非常に楽しみだ。

「こんばんは、西行寺幽々子。少しお願いしたいことがあるのだが」

「幽々子でいいわよ。それにもっと話し方も柔らかくすればいいのに」

「そうはいつでもねえ。私にも紅魔館の当主という立場があるのだし……」

「まあいいわ。それでお願いしたいことって何かしら？」

「貴方の屋敷に少しの間通いたいのよ」

「あら、私に何か用でもあるのかしら」

「貴方ではなく妖夢に用があるのよ。少し教えてもらいたいことがあってね」

「へえ？貴方が妖夢から教わることなんてあるのかしら？」

家事はあの館のほとんどが一級品だし、料理に関してはレミリアが一番と聞いている。

「実は私は和菓子が作れるようになりたくてね。彼女に弟子入りしようと思っっているのよ」

驚いた。紅魔館の当主が妖夢に弟子入りを頼み込んでくるなんて。これは面白いことになった。ん？これは交渉を持ち掛ければ私に損は全くないむしろ超お得だ。

確か紫はこんな状況の事をビッグチャンスと言うとか言っていたっけ。

「そうねえ、一つだけ条件があるわ」 「条件？」

「そう難しいものではないわ。通っている間の昼食は貴女が作ること。ね？簡単でしょう？」

「まあそうだな。確かに破格の交渉ともいえる。しかしそれならばこちらからも一つ約束をしてもらいたい」

へえ？約束ねえ。何だろうか。

「私が昼食を作っていることを誰にも言わない事。私の料理は基本的に家族にしか振る舞わない。それ故この約束事はきっちり守っても

らいたい。

何処かから漏れれば厄介なことになること間違いなしだからな」

なるほど。それだけで料理を振る舞ってくれるのなら約束しないわけにはいかない。妖夢にもよく言い聞かせておかなければならない。

「勿論大丈夫よ。こう見えて口は堅いから安心しなさいな」

「それでは交渉成立だな。では妖夢が戻ってきたらまた伝えに来るよ」

将を射んと欲すれば先ず馬を射よ。なるほどなかなか考えているようだ。

それに案外礼儀を重んじる妖怪のようだ。今時人間でもこうではないだろう。好感の持てる妖怪だ。

矜持的第三十七話

レミリア side

前回の宴会で妖夢にも許可は貰えだし早速今日から和菓子作りの修行だ。私としてはとても楽しみだ。これまで洋菓子は散々作ってきたけど和菓子は全くない。心配なのはつぶしてしまわないかという事か。

材料費は勿論こちらの負担だ。教えてもらう側としてそれは当然の事だと思うし、里に提供している食品の売れ行きも上々だからお金の心配は全くない。

咲夜も連れていくことにする。彼女は一応私に仕えている身だから私の身辺警護は彼女の役割なのだ。私としては特に警護など必要ではないが流石に当主が単独で動くのは拙いだろう。それに今回は道がわからないから丁度良いのだが。

しかしまったく窮屈なものだ。フランは自由に遊んでいるというのに。

最初の宴会以降気が合ったのかフランは湖の妖精たちと遊ぶようになった。彼女が明るくなってくれたのはとても喜ばしいことだし、応援してあげたいが相手が妖精となれば手放しでは喜べない。

というのも妖精というのは自然の結晶であるがゆえに自然が破壊されない限りは死という概念がない。それに物覚えも悪い者が多い。フランを教育したのはパチエだから大丈夫ではあると思うが頭が弱くならないか心配ではある。

今日もフランは元気に遊びに行った。日傘をささないといけなのは面倒みたいだが、それはもともと吸血鬼が昼間に活動するようにできていないのだから仕方がない。

ふと外を見ても今は美鈴が作物に水をやっているだけだ。私の部屋とフランの部屋の窓にだけは庇を付けている。もともとは窓がなかったがパチエに言って作ってもらった。その時に気を利かせて庇も取り付けてくれた。

そのおかげで日光を気にせず、外を見られるようになったし、夏も涼しくて快適になった。窓がないと蒸し暑くて仕方がない。お父様もお母様もよくそんな館に住んでいたものだ。

お父様、か。結局あの日以来一度も会っていない。外の世界にまだ彼の居場所はあるのだろうか。もしかしたらとつくに死んでしまっているかもしれない。

そんなことは今考えていても仕方ない。外では既に美鈴が半分以上水を与え終わっている。残念なことは庭が狭いことか。折角パチエが水田を作ってくれたのに育てられる稲の量が少なすぎる。

咲夜は空間を広げられるがあまり効果は無いだろう。こうなれば館に屋上を作って葡萄や桃などの木はそちらで育てた方が良くもしれない。ちよつとパチエに相談してみよう。

「珍しいわね。レミイがここに来るなんて。何か用事でもあるの？ 言っておくけれど和菓子作り方が書かれた本はここにはまだないわよ」

「ただ貴方に聞きたいことがあったから来ただけよ。時間いいかしら？」

「別に時間なら問題ないわ。それよりあなたの方が大丈夫なの？ 時間は」

「今日は昼前に行くって言うてあるから。昼食は当分貴女に任せるわ。」

「それで今回来たのは相談よ、相談」

「何？ また飼いたい家畜でもいるの？ 生憎庭はもういっぱいよ」

「飼いたい動物ができたわけではないけど相談の本質はそこなのよ。私はコメの収穫量を増やしたいのよ。毎年豊作なのは確かなんだけど、植える稲の量を増やしたいの」

「それで？ 流石に庭は広げられないわよ？」

「そう、そこで今日の本題よ。この館に屋上を作ってくれないかしら」
「屋上？あなたわかつているの？この屋敷の屋根は尖っているところばかりなのよ？」

痛いところを突いてくる。

「うんまあね。でも一部は平らになっているでしょう？そこに屋根でもつけてくれたら、と思うんだけど」

「ああ、一応それなら可能ね。しかしそれだと毎回外から屋上に行くつもりなの？それに屋上に稲作なんてできるスペースは無いわよ」

「それくらいは訳ないわ。美鈴はいつも外にいるし。それに屋上で育てるのはコメではなく他の作物よ。主に木ね」

「ふうん、なるほどね。それで庭に大きなスペースを生み出そうというわけね。いつすればいいのかしら」

「やってくれるの？流石はパチエね。もう今年は田植えの季節が終わったからいつでも構わないわ。それじゃあよろしくね」

「はいはい、分かったわよ。ほら、もう行きなさい。咲夜が迎えに来ているわよ」

「本当ね。今日の昼食は頼んだわよ」「わかっているわ、行ってらっしゃい」

さて、冥界に向かおうか。私にとっては初めての冥界となる。死者の住まうところといっても雰囲気は悪くないところだと聞いている。むしろ過ごしやすみたいだし今から楽しみだ。

「行くわよ、咲夜。道案内は頼んだわよ」「はい、お任せくださいお嬢様」

ほう、ここが冥界か。雲の上を飛ぶという苦行さえなければいつでも来なくなるような場所だ。夏は霊で涼しそうだし、冬は雪景色がとても美しそうだ。

屋敷までの階段も飛べば大したことは無い。歩いて昇るとなると私でもかなり疲れそうであるが。

「お待ちしておりましたよ、レミリアさん。咲夜さんが来るのは少々予想外でしたが」

「そう？従者は主人を一人では歩かせないものだろうか？」

「確かにその通りですね。早速客間にでも上がってもらいたいところではありますが、今幽々子様は突然来た客人と話をしているらしいやうなので先に昼食を作ってしまうでしょう」

「こんな場所に突然来る客がいるのね。八雲紫くらいしか思い浮かばないが」

「いつもはそうなんですけど今日は違うんですよ。私も知らない方でしたし、幽々子様も知らない様でしたが何かピンときたようで話を始めてしまったんです」

冥界の管理人も知らない客人か。何故冥界になんて来たのだろうか。

「それで、今日は何を作っていただけのですか？幽々子様の食べる量はかなりのものですが材料は足りそうですか？」

「よく聞きなさい、妖夢。料理人とは客の腹を満たすために料理をする人ではない。客を食事で満足させるために料理をする人の事だよ」

他の料理人がどう思っただ料理をしているのかはわからないが、少な

くとも私はそう思って料理をしている。

「なるほど。そうすれば量は少なくできるかもしれないですね」

「その通り。如何に少量で満足感のある料理を作るか、それが重要だと私は考えているのよ」

「私も料理の腕はかなりのものだと思っていたのですがそうではないようですね」

「いや、そんなことは無いわ。貴方の日本料理の腕はパチュリーをも凌ぐほどでしょう。品数も多いしすべてを食べたわけではないけれど、食べた料理はどれも美味しかったわ」

あー、口調が崩れてきた。まあいいか。妖夢は私の先生になるんだから高圧的な口調はむしろ失礼にあたるし。

「ありがとうございます。レミリアさんがそう言うてくださるのなら自信が持てますよ」

「貴方まだ私の料理を食べたことが無いでしょう？そう考えるのは早計ではないのかしら？」

「ははっ、そうでしたね。では早速作りましょうか。客人もそろそろお帰りになる様ですし」

「そうですね。さて今日は初日だから張り切って作りましょう。調味料は自分で持って来た物を使わせてもらおうわ。その方が慣れているし」

慣れていない調味料を使う時は大体の味を把握しないとひどいことになり得るし、初日でそれは避けたいところだ。特に持ってきている、というかいつも使っている紅魔印の調味料類は特殊なブレンドの物が多いせいで売っている物とは味がかなり異なってしまうている

し。

「ここにある調味料の味を把握出来たら持ってくるのはやめるが。

「さあ今から作るから妖夢も咲夜も台所から出ていってもらえるかしら?」「?どうしてです?」

「お嬢様はいつも料理中は立ち入り禁止にしているのよ。私も昔教え込まれていた時に少し見た程度だわ。そもそも手際が違うから見たらこれから料理する気を失ってしまうかもしれないわよ」

「そ、そんなにですか?!ほえ、凄いですね」

咲夜の意見は少し誇張されているようにも感じるがいつも立ち入り禁止にしているのは本当のこと。

私が目指しているのは世界でたった一つしかない『私』の料理。だから細かな味付けなどは他人に盗まれたくないのだ。それが例えパチエや咲夜でも。

だから咲夜に教えた技術も私の作り出したものではなく、昔読んだ料理本の中で素晴らしいと思ったものなのだ。彼女にもいつか『自分の料理』が作れるようになってほしいと思って教えた。

「ただ自分だけの料理のこだわりを大事にしているだけよ。妖夢にもあるでしょう?自分にしか表現できない味というものが。それを大切にしていれば自ずと腕は上がっていくものよ」

「そうなんですね。わかりました、では私たちは失礼させていただきます」

初対面の時から思っていたけど妖夢はやはり良い子だ。素直すぎるのは欠点だと思うが。

美味しい。レミリアさんが作ったのはドリアというものらしい。私にはなじみのない料理だが抵抗感なく食べられる。

コメとチーズなんて合わないと思っていたが単なる思い込みだったらしい。明らかに洋食のように見える料理だが、レミリアさんによると初めに作られたのは日本らしい。作ったのは日本人ではなかったようだが。

それにしてもここまでの料理は初めて食べた。宴会でもパチュリーさんと咲夜さんが作った洋食を食べたことがあったが、確かにこれは一線画しているといっても過言ではないだろう。

言葉にできない程の調和のとれた味付けだ。これを毎食食べている紅魔館の住人がとても羨ましい。

「味の方はどうかしら？ 実は今回の料理に使った食材と調味料はすべて自家製なのよ。その所の意見も欲しいわね。第三者の意見ってかなり有用だし」

「とても美味しいわ。でも驚いたわね、本当にパチュリーや美鈴の料理より数段上だなんて。一体何年料理をしているの？」

「そうね、確かもうすぐ四百年だと思うわ。始めた当初はレシピを見て作ってもひどかったものよ」

信じられない。しかしそれでもめげずに続けてきたからこそそのこの味なんだろう。そういえばさつき気になることを言っていたような。

「そういえばすべては自家製と言っていました。収穫や加工も紅魔館で行っているのですか？」

「勿論よ。育てて、収穫して加工して売る。すべて紅魔館だけでやっているわ。ほとんどはパチュリーか美鈴がやってくれるけど肉の加工だけはパチュリーの使い魔か咲夜がやっているわ」

「ほとんど紅魔館総出でやっているんですね。って販売までしているんですか?!」

「ええ、基本的には里にしているけどたまに八雲家なんかにも売っているわ。今回使ったチーズは勿論、異なる種類のチーズ、納豆、豆腐、バター、小麦粉、香辛料、砂糖とかかしらね。もう少し改良ができれば味噌や醤油なんてのも売り出すつもりよ。

あと八雲家にだけは油揚げなんかも提供しているわ」

「凄いですね。ですが塩はどうしているんですか？幻想郷に海はありませんが」

「塩というのはね何も海にだけあるものではないのよ。淡水である湖や川にも塩分は含まれている。幸い館は湖のほとりだから塩は結構採れるのよ。

普通の方法で採れる量は微々たるものだけど、紅魔館住人の様々な力を結集すればかなりたくさん採れるわ。方法は勿論企業秘密ね」

力ある妖怪たちが集っている紅魔館だからこそできる芸当なのだろう。いつか行ってみたいものだ。最近顕界に行くことは多くなっているがどうしても買いたい物が重要なので寄り道ができないのだ。

「来たくなったら来てみなさいな。秘密は明かさないけど厄介事であれば歓迎するわよ」

その時の料理は恐らく咲夜さんが作るのだろう。あ、そういえばレミリアさんが来たのは私に和菓子の作り方を教わるためだったわけ。ならばあまりこんなところで時間を使わない方が良さだろう。

「いつかお邪魔させてもらいますよ。では食べた直後で申し訳ないですが早速和菓子作りを始めましょう。洋菓子とは勝手が違うと思いますがレミリアさんなら大丈夫でしょう」

「そうかしら。お菓子作りは感覚ではいけないから誰でもてこずるものよ。だからきちんと基礎から教えて頂戴ね」

「勿論わかっていきますよ。レミリアさんは何か作りたいものなどありますか？」

「そうねえ、今の季節だし柏餅にしましょう。里で食べたものと比べてみたいし」

「柏餅ですね、わかりました。では早速台所へ向かいましょう」

「ええ。咲夜は幽々子の話し相手でもしておいて頂戴。おやつの間までかかるかもしれないから」

「かしこまりました。ですが何か話題などありませんでしょうか」

「話題なんて探すものではないわ。それに幽々子は話し上手でしょうから聞き手に回っていても良いかもしれないわね」

「あらあら、これは責任重大ね。一刻ほども話し続けられるかしら」

まあ幽々子様なら問題ないだろう。どちらかというとき咲夜さんが話について行けるかが心配だ。

恩恵的第三十八話

パチユリー side

レミイは早速今日から白玉楼に行っている。行動力があるのは良いことだと思いがそれに振り回される側としては大変なことこの上ない。

先ほども久々に図書館に来たと思ったら農地拡張の相談だった。確かに今庭の広い範囲を使ってしまっている温室や樹木類を別の場所に移せばコメの生産量もかなり増えるだろう。

だが今でさえ毎年のように豊作になるものだから紅魔館内の住人の分だけなら十分な量が収穫できている。これ以上増やして一体何を新たに作ろうとしているのだろうか。

普通のコメではなくもち米でも育てるつもりなのだろうか。和菓子にももち米はたまに使うし。

まあそんなことは今考えていても仕方がない。プランがあるから相談してきたのだろうし。

作物を育てられるような屋上を作るのはそこまで難しいことではない。温室なども魔法で環境を作っているだけなので移動は簡単だ。問題は本当に外からしかアクセスできないようにするか否かだ。レミイは別に中から行けなくても良いというのが流石に不便ではないだろうか。

期間はまだあるからじっくり考えておかないといけない。

「パチユリー様、お客さんですよ。門までお越してください」

「そういえば今日だったわね。今行くわ」

考え事をしていたらこあに呼ばれた。そういえば今日は穰子様と文が来る日だった。

「お久しぶりですね、穰子様、文」

「丁度一年ぶりくらい？」

「いえ、秋にも会いましたよ。静葉様と一緒に」

「そういえばそうだったかしら。最近は秋に豊穰を祈る人たちに呼ばれることがあるんだけど、そんな時期に呼ばれても私何もできないわよ。どうなっているのかしら」

「まあまあ落ち着きましょう。最近は豊穰の秋という言葉につられる人間が増えているのですよ。仕方のないことでしょう。むしろ忘れられていないだけ良かったではありませんか」

「うーん、納得いかないわ。それって忘れられているのと大して変わらなくない？」

「穰子様もパチュリーもお喋りはそこまでにしましょう。今日は用事があつて呼んだのですから」

「そうね。今年も私の力を見せてあげてあげてよ」

「それは頼もしいことです。文もこつちに来ていなさい」

「あやや、忘れられたのかと思いましたが。そういえばパチュリー様が誰かを様付けすることなんてあったんですね。少々意外です」

「秋姉妹には毎年かなりの恩恵を受けているからよ。恩恵を受けているのに様付けもしないなんて罰当たりなことでしょう？」

「確かにそうですね。しかしそんなにたくさん恩恵を受けているのですか？」

「ええ。穰子様がいなければ紅魔館の食事情は大きく変化してしまうわ。それに静葉様がいるからこそ毎年この当主が満足する景色を生み出せるのだし」

「そうですよ。お二柱がいなければ私たちの生活は急変してしまいま

す。だから毎年この時期にはお呼びしているのです」

「ふむ、そうだったのですね。これはネタになるかもしれませんが。『豊穰の神は秋に呼んではいけない！』これで記事が書けますかね？」

「題名をもう少し何とかしないと完全に誤解されてしまうわよ。あと書くのならきちんと神は敬いなさいよ」

「何？私たちの事を記事にしてくれるの？これで知名度アップ間違いなしね」

「もう終わったのですか？今年は作物の量も増えたのでもう少しかかると思っていましたけど流石ですね」

「当たり前じゃない。なんたって私は神だからね。これくらいできて当然よ」

「何かパチュリー様が敬語で話すと違和感が凄いですね。初めて聞いたからでしょうか」

「そんなことは無いですよ、文さん。私も毎年聞いていますが違和感
は凄いですから」

二人とも好き勝手言っているがそれは私もわかっていることだから反論もできない。

「それじゃあ私はここで。またお姉ちゃんも呼んであげてね」

「ええ、勿論ですよ。静葉様にもよろしくお伝えください。では」

「今年もありがとうございます。毎年助かりますよ。それではさようなら」

「帰りましたね。さてと、それなら私も帰って新しい記事でも書きま

しょうかねえ」

「私はまだ来たばかりですが」「そうですか……………って誰ですか?!」

「どうも久しぶりねぱっちゃん、美鈴。まあぱっちゃんの方はそこまですすけどね」

「ぱ、ぱっちゃん?! 一体パチュリー様とはどういう関係なのでしょう
か?」

「どういう関係、か。まあ古い友人ですかね。それで貴方は天狗のよ
うですがこの館で働いているのですか?」

「違いますよ。私は清く正しい射命丸文と申します。種族はお察しの
通り鴉天狗です。そして貴方は一体何者なのでしょう? どこか妖
怪の苦手な雰囲気をもとっているようですが」

「私は東風谷稔里と言います。種族は天人。妖怪が嫌がるのはそのた
めでしょう。天人の肉は妖怪にとっては毒ですからね。仙人の肉は
御馳走みたいなものらしいですが」

「ほほう、それでどうして天人が地上に? 天人は地上を見下している
ものだと思っていましたが」

「その認識は間違っています。現に多くの天人は地上に降りること
はしたくないようです。私が地上に来るのはぱっちゃんと美鈴に会
う、ただそれだけのためです。」

ぱっちゃんがいなければ私は天人になっていなかったでしょう。
ぱっちゃんは恩人でもあるのです」

「どうしてパチュリー様がいなければ天人にならなかったと言えるの

でしょうか?」

「それは簡単なことですよ。ぱっちゃんがいなければ私は仙術を学ぶことができなかったのです。」

簡単にお話しましょう。昔私はある神社の巫女をしていたのです。二柱の神様が同居する珍しい神社でした。そんな時に噂でしか聞いたことのなかった陰陽師が二人私のいた国に来たのです」

「その二人がパチュリー様と美鈴様なんですか?」

「はい、その通りです。そしてその日からお二人も神社で暮らすようになりました。その時に私は仙術を教わったのです。そして修行の末天人に至ることができたのです。」

私が仕えていたお二柱は力のある神様ですから外の世界で消えるより前にこの地にやってくるでしょう。神の血が途絶えていなければ私の子孫がきつと巫女をしているはずです。

その子には私の事は教えないでただけるとありがたいです。混乱してしまいますからね」

「そんなことがあったのですね。しかし天人にまで友人がいらつしやるとはお二人の交友関係の広さは尋常ではないですね」

「天人の友人がいると言っても一人だけだし、この子が人間の頃から友人だから正確には天人の友人ではないのかもしれないわね。それに稔里は私が唯一師と仰いだ人物でもあるわ」

「ぱ、パチュリー様の師匠なのですか?! 一体どんな力を……………」

「ぱっちゃんだったら大げさね。あれくらいの事で」

「まあいいじゃないの。事実ではあるのだし、あの後も結構役に立ったわ。」

「そうそう冥界の管理人とは会えたのかしら?」

「うん、会えたよ。少し話をしてたら他の客が来たから切り上げて本来の目的だったこっちに來たってわけよ」

他の客、ね。十中八九レミイたちの事だろう。稔里が来る直前に穰子様も帰っていたしタイミングは示し合わせたかのようにばっちりだ。

稔里も奇跡系の能力を持っているのかもしれない。

「なるほどね。亡霊らしくない子だったでしょう?」

「そうね、まるで人間と変わらなかったわ。言動の底知れなさは妖怪みたいだったけど。でも歌人の娘だっというのは少しわかった気がする。所作も品のあるものだったしきつと良い教育を受けて育ったのね」

幽々子の言動は彼女の友人に問題があると思う。私と美鈴は除いて。

「そうね。そういえばさつき神奈子と諏訪子はこの地にやってくると言っていたけれど、何か根拠があるのかしら?」

「根拠というか、まあほとんどは勘かな?あとは約束よ」「約束?」

「うん、最後にお二柱に会った時に約束したの。私が天人になれば会いに行くから何があっても消えないください、ってね」

「そうだったのね。でも神奈子はまだ良いとしても諏訪子は土着神。簡単に諏訪を離れないのではないかしら?」

「その通りよ。そこが一番心配なところ。でもきつと諏訪子様なら血のつながっている者との約束は破らないと思う」

「さつきから気になっていたのだけれどあなた、諏訪子と血のつながりがあることに気づいていたの?」

「仙人の修行の一つに自身の過去を全て思い出す、というものがある。

その修行中にわかったのよ、諏訪子様とのつながりが」

「なるほどねえ、よくわかったわ。恐らく長く続く東風谷の家系でも知っている者は三人もいないのではないかしらね」

「そうかもね。そろそろ帰ることにするよ。あの文っていう天狗も帰ったみたいだし」

「あら、本当ね。美鈴は何か話したいことは無いの？」

「いえ、私は稔里さんに会えただけでも十分ですよ。元気そうでしたよ。良かったです」

「そうですね、美鈴さんこそ元気そうで何よりですよ。じゃあ今日の目的は達成できたからまた会いに来るわ。じゃあね」
「またね」「さようなら、また会いましょう」

レミリア side

今日はとても有意義な時間を過ごすことができた。妖夢によると私の和菓子作りのセンスはかなり良いらしい。今まで様々な料理を経験してきたからだろうか。

しかし褒められて悪い気はしない。今日作った柏餅は『皆さんで食べてみてください』という事だったから持って帰ってきている。

味見は向こうで一応しておいたが、以前食べた物や妖夢が作ったものとは比べ物にならないように感じた。こんなものを皆に食べさせても大丈夫だろうか。そこだけが心配だ。

「おや、お帰りなさい。お嬢様、咲夜さん」

「ええ、ただいま。どうしてそんなに嬉しそうなのかしら？何か良いことでもあったの？」

「はい、とても良いことがありました」

何があつたのかは言わないという事は特に私が突っ込むべきところではないのだろう。彼女の私事を無理に話させるのもおかしなことでだから何も言わなくても良い。

「それは良かったわね。そろそろ夕飯を作るから今日はもう引き上げていいわよ」

「そうですか。ではお言葉に甘えて中に入ることにしましょうか。それでどうでしたか？ 妖夢さんの和菓子作りは」

「彼女の腕は相当のものだったわね。いつか追いつける日が来るのかしらねえ。」

「そうそう、私が今日作った物は持って帰ってきたから夕飯の後も皆で食べましょう。味はいまいちだけどね」

「初めてなんてそんなものですよ。お嬢様が料理を始めた時もそうだったじゃありませんか」

確かにあの時はひどかった。今では当たり前に行なうことができることをあの時はとても苦労してやっていたものだ。そう考えれば和菓子も当たり前に作れる日が来るかもしれない。

「そうね、これから努力すれば良いだけの話だったわね」

「その意気ですよ、お嬢様。では私は図書館にでもいますね」

「ええ、まあすぐにできると思うけどゆっくりしていなさい」

夕飯は何を作ろうか。昼にドリアをしたから夜は………唐揚げでもしようかな。

「咲夜「ここに」：今夜は唐揚げをするわ。貴方はフラン用の物を作つて頂戴」「わかりました」

人間が人間を調理するとはこれ如何に。まあ咲夜の場合は殺すことに何ら思うところが無いからだろう。私も過去の事が無ければそうだったのかもしれない。

咲夜にはフラン用の物を任せたから残る全員分は私が調理しなければならぬ。鶏肉は筋が多くて切りにくいから今まで積極的に調理してこなかったが、包丁を鍛えなおしてもらってからは全然そんなことが無くなった。

一体どうすれば同じ包丁をこうも変化させられるのだろうか。里の技術力もなめたものではない。

そんなこんなで二キロ分ほどの唐揚げができてしまった。パチエはそこまで大食いではないし、私もそうだ。咲夜もそこまで多くは食べないだろう。咲夜の場合は何処か遠慮しているようにも見えるが。となると残るは美鈴と小悪魔だ。小悪魔には期待ができる。美鈴はどうなのだろうか。彼女は何も食べなくても生きていける体質だ。どのくらい食べてくれるかがさっぱりわからない。

「お嬢様の方はもう終わったのですね。私は今から揚げるところですのに」

「まあ人間の加工は難しそうだものね。時間がかかっても仕方のないことだわ」

何故時間を止めずに調理をしていたのかは謎であるが。と思っただら一瞬咲夜がブレた。

「いえ、そんなことはありません。ほら、もう揚がりましたよ」

「そんなことをするくらいなら初めからそうすればよかったのに」

「私の料理の手際をお嬢様と比べてみたかったですよ。私の方が切る量も少なかったはずでしたが全く及びませんでしたね」

なるほど、そういう理由だったか。私ってそこまで手際が良かったのか。

「なるほどね。でも貴方ならいつかは私を越せるかもしれないわね。さて、皆を呼んできて頂戴。私は配膳やらなんやらをしておくから」

「かしこまりました」……………本当に便利な能力を持っていることで。

「今日は唐揚げなのね。それにしても多すぎないかしら？ 私たちだけでは恐らく食べきれないわよ。いくらこあが頑張っても」

「やっぱりパチエもそう思う？ 私も作りながら思っていたんだけどついついね」

「まあとりあえず揚げ物は冷めないうちに食べるべきね。早速頂きますよ」

「そうですね。それじゃあいただきます」「いただきます」「」

「言い忘れていたけど間違ってもフランの所から取っては駄目よ。小悪魔はいいかもしれないけど。あと食後に今日私の作った和菓子もあるから腹八分目まで我慢しておきなさいよ。」

まあそこまで美味しくないから食べなくても良い人は満腹になるまで唐揚げを食べても良いけど」

「初めて作った和菓子なんでしょう？ 味を覚えておかないと将来弄るネタがなくなってしまうわ」

「ひどいわね。でもまあ私が上達するとは思ってきているのね。期待に応えられるように頑張るわ」

「ええ、応援しているわ。それにしてもレミイも成長したのね」

「どこからその話が出てきたのかしら。まったくわからないんだけど」

「いえ、言葉の裏側に隠された発言者の意図をきちんと酌める様になったのだと思っただけよ」

「一体いつの話をしているのよ」

「もう四百年近く前ね。レミイは覚えていなくても仕方がないわ。美鈴も覚えていないでしょうけれど」

「馬鹿にしていますか？パチユリー。私って結構記憶力はあるのですよ。気配から相手が誰かを読むのには記憶が重要ですからね。」

「ここにいる六名は勿論の事………六名？って紫さん?!どうして勝手に入って来ているのですか?」

「いや何最近疲れてしまっただけねえ。丁度唐揚げの匂いがしたから寄ってみたのよ」

「どんな鼻をしているのよ。まあいいわ。とにかく唐揚げはあげないからさっさと帰りなさい。藍とか言う狐が待っているでしょう?」

「確かにそうですね。早く帰ってあげないと心配しているかもしれないわねえ」

「なら早く帰りなさい。折角の団欒を邪魔するのはやめてほしいわ」

「そこまで言うのなら帰りますわ。紅魔館には格安で食材を売ってもらっている恩もありますし」

「はいはい。ではさようなら」「冷たいわねえ。ええ、さようなら」

唐揚げはどうせ余るからくれてやっても良かったが、彼女に私の料理を食わせるのは気が進まない。胡散臭いからだろうか。

何にせよ大人しく帰ってくれて助かった。やはり恩は売っておくものだ。

永夜の第三十九話

パチユリー side

レミイが白玉楼に通うようになってからもう数か月が経った。和菓子の方も順調に腕を上げられているようで、初めに食べた物に比べると店の味に近づいたと思う。まあ初めの物もそこまで悪い味ではなかったのだけれど。

流石とも言うべきかレミイは食のことになる気合が入りまくっている。もし私たちが魔界に行っていないなかったらこうはならなかっただろう。レミイにとってはどちらの方が良かったのだろうか。

ある意味彼女の人生を狂わしてしまった直接の原因である私はできるだけ彼女の願いには応えるようにしてきた。つい最近も屋上に畑を作ったところだ。

結局屋上へは外からしか行けないようになってしまったが、レミイがそれでいいと言うのならそれに甘えさせてもらうことにした。

そんな感じで今までほとんど彼女の願いは聞いてきたが、応えなかった時もある。それが吸血鬼異変の時であり、また今回でもあるだろう。

今夜レミイが図書館に来た時点で色々と察することはできる。まあ一応聞いておくが。

「夜にあなたがここに来るなんて本当に珍しいわね。大体予想はできるけれど何の用事かしら?」

「今夜の月、パチエにはどう見えるかしら?」

「やはりそのことだったのね。今夜の満月は少し歪ね。でも私は異変解決には乗り出さないわよ」

「あら、そうなの。パチエなら力になってくれると思ったのに残念ね」
「まあ咲夜と二人でのんびり行ってきなさい。今夜は当分明けられないわよ」

「どうしてそう思うのかしら？」

「簡単なことよ。今夜は月がおかしくなっているだけでなく夜も止まっているわ。術者は同じではないから恐らく解決者側が夜を止めているみたいね」

恐らくも何もないがここは知らないふりをしておかなくてはならない。

「夜を止めるメリットは何かあるのかしら」

「この月は妖怪を狂わせる。本来妖怪の力が満ちるはずの満月が満月でない、それはとても恐ろしいこと。なんとしてでも今夜中に解決しておきたいのでしょうね」

「ふーん、そういう意図が。しかしもう先を越されているとなると拙いわね。私たちも早く行くわよ、咲夜」「勿論でございます」

「ああ、一つ言っておくけれど味方と遊ぶ事ほど無駄な時間はないわよ」

「？よくわからないけど一応心に留めておくわ」では行ってらっしゃい」

此度の異変、本来なら特に起こす必要も無い異変だ。解決者は恐らく四組とも出ているだろう。私が行くのは場違いにもほどがあるというもの。

永遠亭の歴史は今夜ようやく動き出す。彼女たちも外を知ればもっと楽しめるだろう。

アリス side

今夜はどうやら月の様子がおかしいようだ。しかしどうやら人間には感知できない程の差異らしい。

現に解決するにあたって魔理沙を呼んだが彼女は月の異変ではな

く、何者かが止めた夜の方にしか注目していない。まあ来てくれるのならどちらでも構わないけど。

「しかしアリスよ、どこに向かえばいいのかわかっているのか？」

「わかるはずないわよ。まあとりあえず里にでも行ってみましょう。何か情報が得られるかもしれないわ」

「人里ねえ。異変から一番遠そうだが、まあ動かないと何も進まないからな。行くか」

ようやく里についた。途中で倒れている蛍や夜雀を見かけたがいちいち構っている暇はない。

「ありや？里つてこの辺りじゃなかったか？」

「なんだお前たちは。こんなところに何の用だ」

「あら、慧音じゃない」「ん？お、誰かと思ったたらアリスだったのか」

「なんだ？知り合いか？それなら話は早い。おい慧音とやら、ここにあった人里は何処にやったんだ？」

「今夜は怪しい月が昇っているからな。人間に危害が加わるのはごめんだから歴史を隠したのさ」

「……………私には普通に見えるわよ」

「ああ、実はこれは強い妖怪たちには効果が薄いらしい。さっき来た奴らのおかげで判明したことなんだが」

私が見えるのはパチュリーに鍛え上げられたからだろうか。こん

などところで自分の成長を実感できるとは思ってもみななかったが。

「ちなみにこの月の原因ならあっちの竹林だろう。里に危害を加えるというのなら戦ってやるが」

「お？やるか？」「やめなさい。とにかくこの異変は早く解決しないと危ないわ」

「ちえ、つまんねーの。今夜はまだ寄ってくる妖精どもとしか遊べてないじゃないか」

「それで良いのよ。どうして貴方はただの人間なのにそこまで好戦的なのかしら。もしかして人間ではなかったの？」

「れっきとした人間だぜ。今のところはやめるつもりもない」

「ならむやみに突っ込むのは避けた方が身のためよ。自らを滅ぼすことにもなりかねないわ」

「そんなときやそんな時に考えればいいことだ。今を全力で生きることが大切だって習わなかったか？」

「生憎習っていないわね。そんなことはいいからさっさと竹林に向かうわよ。時間がもったいないわ」

「今夜はまだまだ明けないんだ。少しくらいゆっくりしてもいいんじゃないか？」

「はあ、さっさと行くわよ」 「ちえ、わかったよ」

幻想郷において竹林と言えば迷いの竹林のことだ。その名の通り全貌を完全に熟知していないと必ず迷う。

さらにあの竹林には妖獣が多いと聞く。好んで入りたい場所ではないが、幻想郷の妖怪全体の危機ともなれば立ち入らざるを得ない。しかし慧音は何故竹林に住む者が原因だと分かっていたのだろうか。今のところ竹林に人が住んでいるという話は眉唾物の妖怪退治集団の物しか聞いたことが無い。

だが少し力を持っているだけの人間にこの異変は起こせない。この異変を起こせるような力を持つ者は魔界でもほとんどいないといっても良い。できることなら敵に回したくないような実力者がこんな場所に住んでいたとは……………。

「動く撃つ！間違えた。撃つと動くだ。今すぐ動く」

「何やっているのよ……………」「何？魔理沙？どうしてこんなところにいるのよ」

霊夢を見つけたから絡みに行ったのか。今日はなかなか戦闘にならなかったから鬱憤を晴らすためか。面倒なことになった。

「あらあら、霊夢と魔理沙が遊び始めてしまったわねえ」

「はあ、こうなることもわかっていたんでしように。夜を止めているのは貴女ね」

「ええ、私を退治するだけでも言うのかしら？」

「まさか。夜を止めるのは正しい判断だったと思うわ。」

「はあ、私としては遊んでいないで早く異変の元凶にたどり着きたいところなんだけどね」

「此度の異変の元凶は途轍もない実力を持っているでしょう。魔理沙^{あの子}は大丈夫なのかしら？」

「弾幕勝負なら勝機はあるでしょうね。でもどうしても危ないと思ったら退かせるわ」

「まあそれが良いのでしょうね。霊夢は博麗の究極奥義があるから大丈夫でしょうけど」

博麗の究極奥義ねえ。ただでさえ反則級に強いのに究極奥義なんて出されたら二秒で撃墜される自信がある。

「霊夢は貴女が育てたんだっけ？本当に流石ね」

「うふふ、これも幻想郷のためですもの。それくらい訳ないわ」

妖怪に容赦しないように育てられた記憶まで消す手の込みようだ。幻想郷を心から愛しているであろう彼女には常人以上の母性がありそうなものなのに。

まあそれが彼女を大妖怪たらしめる所以なのだろう。目的のためならば少々の犠牲は切り捨てる、か。言うのは誰にでもできるが実行に移せる者はあまり多くないだろう。

「でも霊夢が魔理沙と仲良くなってしまったのはどうなの？」

「それは誤算だったわね。霊夢の性格上妖怪たちにも気に入られてしまっているようだし。まあ一度以上は退治しているから目を瞑っているけれどね」

「おや？アリスに八雲紫じゃあないか。こそこそ作戦会議でもしているのかい？」

「あら、こんばんはレミリア・スカーレットに十六夜咲夜。別に作戦会議をしているつもりはありませんわ。ただ霊夢たちが遊び始めてしまったから保護者同士で立ち話をしていたところですよ」

「なるほどな。パチエが言っていたのはこういう事だったのね」

「あら、パチユリーが何か言っていたの？」

「ええ、味方と遊ぶ事ほど無駄な時間はないってね。そういうわけで私たちは先に行かせてもらう事にするよ。ではさようなら」

パチユリーにはこうなることがお見通しだったってわけか。彼女も来たら良かったと思うけど何故来ていないのだろうか。

「ようやく終わったみたいね。どちらも何処か納得できない顔をしているけれど」

何故だろうか。まあ特に意味もない勝負だったし勝負の行方は正直どうでも良かったからきかないけど。

「まさか勝負がつく前に横やりを入れられるとは思ってもみなかったぜ。なあ妖夢よ」

「え？え？私が悪いの？私は幽々子様に言われたことをしただけなのに……………」

「あら？あれを真に受けちゃったのね。悪かったわね、二人とも」

「はあく、もういいぜ。諦めているからな」「ひどいことを言うわねえ」
どうやら白玉楼の二人組も解決に乗り出してみたいだ。まあ幽々子は風流だしこの月が気に入らなかったのだろう。

多分これで全員と会ったのかな。まだいたとしてもそれはたぶん私の知らない人だろう。

「もういいかしら？さっさと異変を解決しに行くわよ」

「そうね、大体の目星は付けておいたからそのあたりに行きましょう」

か」

流星は紫。話している間にも周囲の結界を調査していたようだ。こういう時は本当に頼りになるんだけど普段の振る舞いが胡散臭いせいで信頼されていないのだろう。

何とも悲しい大妖怪だ。

パチユリside

夜が止まってから早数刻。まだまだ夜が明ける気配はない。この月はなかなか厄介な代物だ。

私の能力でかなりの影響を抑えているが、一刻ごとくらいにフランドールから狂気が出てくる。それを抑えるために美鈴とこあと私はフランドールの部屋の前にずっといなければならない。

狂気がまだお子様なのが不幸中の幸いだろう。もし狂気もフランドールと同じように成長していたならば私たちにはどうすることもできなくなっていた。

前回の狂気が出たのは半刻ほど前。たまに一刻経たずに出てくることもあるのが非常に厄介な点だ。

「パチユリー様、この異変はいつ終わるのでしょうか」

「わからないけれど恐らくはあと一刻ほどじゃないかしら。眠たくなったのなら仮眠していても構わないわよ」

「いやまあ眠いわけではないのですが。しかし美鈴さんも大変なのではありませんか?」

「いやいや、そんなことはありませんよ。少し気を落ち着けるだけの簡単なお仕事ですし。あ、その本取っていただけますか?」

レミイが館を出てしばらくしてからはずっとこんな状況だ。本を読んだりして次の狂気が出てくるのを待つ。出てきたらこあが引きつけて美鈴が気を落ち着ける。最後に私が強制的に眠らせる、という

サイクルだ。

かれこれ四回ほど回っている。大した疲労はないが面倒なことではある。

今のレミイたちは恐らく永遠亭に着くころだろう。永遠亭の面々は皆曲者ぞろいだ。が弾幕勝負になれば恐らく負けることは無いだろう。

一番楽な終わり方は紫が永琳に大結界の事を話すことだけれど。どうなるだろうか。

過去の一件から月の民の恐ろしさは十分に理解しているはず。それにこの術を行使している時点で実力は計り知れないものとなっているだろう。

月の頭脳を相手に幻想郷の賢者は何処まで着いて行けるのだろうか。

永琳ばかりに注目していたが輝夜も実際かなり強い。昔は全然そんな雰囲気を見せなかったために本当の実力のほどはよくわからないうが、本気を出せば幻想郷でも二、三を争うほどには強いのではないだろうか。

何せ紫たちの止めた夜を力づくで進められるような実力者だ。永琳より弱いと言っても比較対象が既に間違っているとわざわざ得ない。

レミイも紫も油断はしていないだろうがくれぐれも気を付けてほしいものだ。

狂氣的第四十話

???
side

この竹林は慣れない者なら必ず迷う。罨にかけるのも簡単だと思っていたが鈴仙みたいにホイホイかかってくれない。

兎たちから聞いたところによると今夜は今私が後をつけている二人組の他にもう三組来ているらしい。流石のお師匠でも八人を相手に戦えるのだろうか。まあ死ぬことは無いから心配はいらないが。

永い年月を生きてきた私にとって尾行など朝飯前だ。何か特別な能力でも持っていない限りは気づかれることも無い。

「咲夜、貴方ならこの竹林の空間を把握して敵の本拠地を見つけることもできるのではないの?」

「それがですねお嬢様、先ほどからしようとはしているのですが結界のような物が張られているようで把握できないのです。その竹の後ろにいる兎くらいなら容易く見つけられるのですが」

何か特別な能力を持っている人間を尾行していたなんて幸運の兎が聞いてあきれてしまう。

「じゃあその兎に聞いてみるとしでしょうか。こんな場所に住んでいるんだ。どうせ妖怪兎なんでしょう?」

「ええ、その様です。捕らえて来ましようか?」 「ええ、よろしく」

捕らえられるのだけは勘弁だ。幸い私は逃げ足も速いと言われているし簡単には追いつかれまい。特にこの竹林は私の慣れ親しんだ場所だ。初めて来た二人組に遅れなど取らない。

「捕らえましたよ。とりあえず逃げられないように縛っておきました」

と思っていたのにいつの間にか縛られていた。訳が分からない。一体何者なんだ、この二人組は。

「よくやったわ、咲夜。では質問しようかしら、準備はできているかしら？ 兎さん」

どうせできていなくても質問はするんでしょうが。こういう時は下手に嘘を吐かない方が楽だ。もう皮をはがれるのは勘弁願いたい。実際辛かったのはそのあとだったけど。

「くっそー、いつの間に縛ったのよ。全然気づかなかったわ。で？ 質問？ 異変の元凶ならここをまっすぐ進んだ先にあるお屋敷に住んでいるよ。答えたんだからさっさとこの縄をほどいてくれたら助かるんだけど」

この道をまっすぐ進めば確かに永遠亭にはたどり着ける。その道中に嫌と言うほどの罠が仕掛けてあるだけで。

「ほう、そうかそうか。助かったわ。じゃあ解放してあげるわ」

やはりまだまだ若い。私にとってはありがたいことだけだね。

「ここにね」「げえっ！」

丁度落とし穴の真上に降ろされてそのまま落ちてしまった。私の作った罠などすべてお見通しとでも言いたいのだろうか。

「おやおや、まさか丁度落とし穴があったとはね。これは悪いことをしたわね。でも私たちは急いでいるから助けられなくてごめんなさいね」

絶対わざとだが何を言っても無駄そうだ。とりあえず落とし穴は飛べる存在なら簡単に抜け出すことができる。底にさらに仕掛けを施した落とし穴もあるっちゃあるがここの物はそれではない。

はあく、あんな奴らがあと三組もいると思うとぞつとしないねえ。とりあえず私も屋敷の方に戻った方が良さだろう。鈴仙はどうせボ

ロボロになるだろうし。

アリス side

紫の案内で敵の本拠地に六人全員で向かう事になった。魔理沙の方はまだ決着が着いていないことを不満げにしているが、霊夢の方はもう続ける気はないようだ。

まあ魔理沙にはあれくらいのしつこさがあってこそだと思う。彼女のそのしつこさが裏目に出ることもあるが、しつこくなければあそこまでの努力はしていなかっただろうし異変解決何かには手出しもできなかっただろう。

霊夢の方は逆にサバサバしすぎている気がしなくもない。誰にでも分け隔てなく接するが誰にも関心を示さない。博麗の巫女としては満点の性格だがそれが修行嫌いに繋がっている気がする。

今しても仕方のないことだが、面倒を嫌う彼女の性格がこの世界を崩壊させないかが心配だ。

「そこまでよーもうさつきみたいなのはしない！ここから先へは通さないわ」

いつの間にか建物内に入っていたようで主人のペットなのか兎が出てきた。妖怪兎をペットにしている時点で主人はただの人間ではないことがはつきりした。

「あそこの扉が少し開いているわ。手分けしていきましょう」

「じゃあ私と魔理沙でこの兎さんの相手をしてあげる」

「じゃあ私と妖夢はさつきの弓を持った人のところに行こうかしらね」

「では私と霊夢であそこの扉に行きますわ」

三手に別れた方が効率はかなり上がるからこれは良い作戦だと思う。問題はレミリアたちがどこにいるかだ。兎の話によると先ほど一組通してしまってるようだからそれがレミリアたちなのだろう。

向かった先はあの扉の先か、それとも廊下の先か。

「くっ、扉が開いているとは。私としたことが………迂闊だったわ。とにかくあんたたち二人はここでお終いよ。あんたたち二人に月の狂気から逃れることはできるかしら？」

幻波『赤眼催眠』

これはかなり厄介。でもどうやらある一定の時間ごとに弾の当たり判定がなくなっているようだ。この間にどれだけ周囲を観察してそこに動けるかが勝負のカギになるだろう。

「なかなか当たらないのね。じゃあ次はどうかしら？」

狂視『狂視調律』

これも先ほどの物と同じ。だんだん離されている時に如何に冷静でいられるか。魔理沙の方も忍耐力は人一倍だからかなり余裕があるみたいだ。

「うーん、これでも当たらないのね。じゃあ次に行くまでよ！」

散符『真実の月』

一見不可能弾幕に見えるが攻略法は先ほどまでと同じか。ただ密度はかなりの物だから油断はできない。まあ初めから油断なんてしていないけど。でも次で最後だ。

「いい加減当たりなさいよ。はあく、このままじゃお師匠様に叱られるわ」

月眼『月兎遠隔催眠術』

先ほどまでより幻術が強い………？という原理なのだろうか。魔法使いとしては気になるところであるが今回の弾幕は特に油断ならない。横方向からの弾幕は得意ではないのだ。

案の定一度ボムを使う事になってしまったが勝ちも勝ちだ。異変の主犯はこの先か。

「で、さっき言っていたお師匠様とかいうのが今回の異変の主犯なのか？」

「そうよ。異変を起こしたのはお師匠様。でもあなたたちには彼女を倒すことはできないわ。あんたらみたいな馬鹿どもは月面一の頭脳を相手にはできない」

「あー？弾幕に頭脳？馬鹿じゃないのか？弾幕はパワーだよ」

「そういうこと言うから馬鹿扱いされるのよ。弾幕はブレイン。常識よ」

パチュリーは確か頭を使って如何に物量があるように見せるか、とか言っていたような気もするが。

「とりあえずあの扉の奥に向かってみましょうか。近いから」

「そうだな。もしかしたらまだ霊夢たちが遊んでいるかもしれないからな」

・
・
・

部屋にいたのは見知らぬ女性と紫と霊夢とレミリアと咲夜。どうやらもう勝負はついていて話し合っているところのようだ。いつの間にか止まっていた夜も進み始めている。

「あら、アリスたちも来たのね。こいつは蓬莱山輝夜。不老不死のお姫様らしいわ」

「蓬莱人の生き胆を食すと不老不死になれるらしい。咲夜も不老不死になってみない?」

「私は一生死ぬ人間ですよ」

「本当にそうかしら? 貴方は自分の存在がどういうものなのか分かっていないのでしょうか」

「貴方にはわかるというの? 輝夜」

「ええ。咲夜の持つ力は人間には過ぎたものよ。咲夜の能力に対抗できるのは私だけ。恐らくどの世界に行ってもね。この意味が分かるかしら?」

「なるほどなるほど、よくわかったよ。しかしそれは単なる憶測に過ぎないのではないの?」

「お嬢様、私には話がよくわからないのですが」

「今はまだ知らない方が良く。貴方の一生に深くかかわってくるでしょうから」

まさか咲夜が……? にわかには信じがたいことであるが輝夜の自信から見るに恐らく真実なんだろう。

「憶測ではないわ。まあこれも永琳が来たらわかることよ。でもこの話はここでお終いね。そろそろ永琳が来るでしょうけどそこからは私たちとそこの八雲紫との話になるから。もう日が昇ってくるかもしれないから早く帰った方が良くはないの?」

「確かにそうね。咲夜、私たちはもう帰るわよ」「わかりました」

「ああ、そうそう。宴会は三日後、博麗神社で行うわ。費用は永遠亭持ちで」

仕方のないことではあるがやはり咲夜は不満そうだ。

「さて魔理沙、私たちも帰るわよ。これ以上ここにいても特にすることとは無いから」

「そうするか。おい、霊夢も一緒に帰ろうぜ。どうせお前もすぐ帰るんだろ?」

「そうね、夜通し起きていたせいで眠いたらありやしない。早く帰って寝たいわ」

やはり霊夢は変わらない。まあこれくらいの方が付き合いやすくなる。私も寝ていないから眠い気がする。魔法使いとしてはおかしな話だが未だに人間的な習慣は抜け切れていない。別にこのままでも大して困らないからいいんだけど。

今回の異変は妖怪にとつては非常に危ないものだったが、何とか解決できて良かった。

パチュリースイド

フランドールの狂気が収まってから四半刻ほどが経過した。もうそろそろ解決されても良いころ合いだと思うのだが。

「あつ、パチュリー様、魔力の異常が治りましたよ。夜も進み始めたようです」

「本当ね。もうフランドールの部屋の見張りはしなくても良さそうね。お疲れ様こあ、美鈴」

「いや、狂気自体は大したことなかったですけど不定期に来るのが

厄介でしたねえ」

「そろそろ持ってきていた本も終わりそうだったので丁度良かったです。それにしてもお嬢様も咲夜さんも無事ですかね」

「彼女たちなら大丈夫だと思うわよ。さて、折角だから朝ご飯を作って待っていてあげましょうか。レミイも咲夜も寝ていないから疲れているでしょうし」

「それはいいですね！早速作りましょう」

「では私と美鈴で朝食は作るからこあは本を片付けて、もう少ししたらフランドールを起こしてくれるかしら」 「わかりました」

あまり凝ったものを作っても疲れている身体には良くないだろう。納豆となめこの味噌汁でも作るか。キノコ類は日本の気候と相性が良すぎて持て余し気味になっていたから丁度良かった。

美鈴はどうやら焼き魚にしたようだ。あとは副菜におひたしでも作れば良いだろう。私は質素な日本の朝ごはんが実は結構好きなのだ。

「ただいまー。あら、ご飯を作ってくれていたのね。気が利くじゃないの」

「お帰り。当たり前でしょう？疲れているでしょうから今日はゆっくり休んでもらっていいわよ。勿論咲夜もね」

「いえ、私は普通に仕事はするつもりですが」「レミイ」

「ええ。咲夜、今日は貴方の休暇という事にするわ。館内でゆっくりするもよし、里でのんびり過ごすもよし。ただし仕事をすることだけは許さないわよ」

「そ、そんな。………わかりました。今日は休ませていただきます」
「それで良いのよ。さて、もうフランドールも食堂に来ているからあ

なたたちも早く食卓について頂戴」「はいはい、行くわよ咲夜」「はい」

「それで今日の朝ごはんは何なのかしら？」

「今日は久しぶりに質素な朝ごはんよ。あなたも嫌いではなかったでしょう？」

「そうね。私が作るといつも気合が入ってしまうからなかなかできないんだけど」

「良いことだとは思わよ。ねえレミイ、あなたは料理が好きになって良かったと心の底から思っているかしら？」

「パチエにしては珍しい愚問ね。そんなこと聞くまでも無いでしょう？今となつては料理をしない私なんて考えたくもないわ。どうして？」

「いえ、何でもないわ。私の杞憂で良かったってだけよ。さて、食べましょうか」

「ええ、いただきます」「いただきます」

「そうそう、宴会は三日後ね。場所はいつものところ。今回は永遠亭……今回の異変の主犯のいる屋敷からも一人料理人を出すらしいわ」「そう。なら美鈴は宴会を楽しんでいなさい。いつも門番の仕事ばかりで退屈でしょうから」

「全然退屈ではありませんよ。植物に水をやったり、鍛錬をしたり、湖の妖精たちと遊んだりもしていますから。でもパチュリーがそういうのならありがたくお言葉に甘えさせてもらいますよ」

もう宴会をするという事はE xはそもそも無しか。まあこの世界ではする理由もなくなっているから仕方ないね。

「はあ?!三日後に博麗神社で宴会をするう?!どうして私が参加しないといけないのよ」

「貴方も永遠亭とのつながりは深いでしょう?だから誘っているのよ。それに慧音も行くみたいよ?」

「ぐっ、まあ行ってもいいけど私が行っても大丈夫なの?」

「大丈夫よ。私を拒絶しなかったんだから貴方が拒絶される理由もないわ。違って?」

「いやまあその通りか。なら慧音と一緒に行くことにするよ」

私は異変に全く関わっていないのに本当に行っても大丈夫なのだろうか。嫌な目で見られるのは慣れているが気分の良いものではないから出来るだけ人に関わらないように生きてきたというのに。

まあこれだけしつこく誘われれば行かないわけにもいくまい。再開したのはつい四、五百年前だが輝夜が私のことをわからなかったのは傑作だった。

かなり見た目も変わっていたから仕方のないことだったのかもしれないが、あのことは今でもあいつを弄るネタになる。

まああまりやりすぎると教育係永琳が怖いからやるとしてもほどほどにだが。こつちが不死だと分かっているから余計に怖い。

しかし宴会か。普段は慧音と家でしか飲んでいないから雰囲気は想像できない。料理も鈴仙ちゃんがいるから普通に美味しいものが出てくるだろうし楽しみだ。

記憶的第四十一話

パチユリー side

今日は久々の宴会だ。今回も幽々子は来るが料理担当の人数は変更なしだ。人手が多すぎても邪魔になって効率が落ちるだけだからだ。

前回と違うのは美鈴が鈴仙に代わるくらいか。あのわがままっ子の月姫に食事を出しているくらいなのだから料理の腕はかなり高そうだ。どのジャンルの料理が得意なのかは聞かなければわからないが。

美鈴がいないという事で中華を作る者がいない。まあ今回初参加のメンバーは和食中心だろうから、私が少し作っておけば大丈夫だろう。

しかし今回の参加者を見て驚いた。異変に関わった永遠亭組や慧音、リグルにミステイアはわかるが妹紅まで来てくれるとは思っていなかった。

輝夜との仲は未だ良好という事なのだろう。見た目は随分と変わってしまったっているが、知っている者が見れば面影が残っていることがわかる。

およそ千三百年の時が経ってしまったっているが、彼女は私たちの事を覚えてくれているのだろうか。そういえば確か慧音に初めて会った時に『友人から聞いていた』と言われたような気がする。という事は覚えてくれているという事で良いのだろうか。嬉しいことだ。

「パチユリーさん、そろそろ料理を作り始めますよ。あまり待たせるのも悪いですし」

「そうね。あら？そういえば今日は藍はどうしたのかしら？」

「藍さんは今日はお仕事があるとか。だから代わりにミステイアさんが一緒に料理をしてくれるみたいですよ」

「ミスティアが？それは頼もしいわね。分担はどうしましょうか」

「そうですね、私と咲夜さんはいつも通り和食、洋食を作るとして………鈴仙さん、で良かったですか？」

「ええ、私の名前は鈴仙・優曇華院・イナバよ。それで何かしら？」

「どのような料理が得意ですか？和食や洋食などで言えば」

「それなら和食ね。洋食なんてほとんど作ったことも無いわ」

「ミスティアは何でも作れたわよね。なら分担はこうしましょう。私と咲夜で洋食と中華、妖夢と鈴仙で和食、ミスティアと霊夢でつまみね」

「私は何でもいいわ。ちやちやつと作って早くお酒を飲みたいわ」

「あはは…流石は博麗の巫女ね、自由だわ。さて、私もパチュリーに期待されたからには気合を入れて料理するわよ」

本当にミスティアは頼もしい。たまに里からの帰りに屋台に寄っているくらいだがあちらの認識では常連扱いらしく毎度少しだけ値引いてくれる。

ミスティアは決して豪勢な料理を振る舞うわけではないが、確実に相手を満足させる料理を作る。そのあり方はレミイにも通ずるところがある。

彼女たちは意外に気が合うかもしれない。今度レミイを誘ってミスティアの屋台に顔を出してみよう。

「あの、すみません」「どうかしたのかしら？」

「貴方がパチュリーさんなのですか？」鈴仙もおかしなことを聞いてくるものだ。

「ええ、そうよ。自己紹介がまだだったわね。私の名前はパチユリー・ノーレッジ、魔法使いよ」

「やはり貴方が姫様たちのおっしやっていた………?」

「ああ、輝夜と永琳ね。あの二人も見た感じ元気そうで何よりだわ。まあ病気になっても永琳がいるし死んでも死なないから元気なのは当たり前のことなのかもしれないけれどね。」

それで、私に何か用でもあったのかしら?」

「いえ、特にそういうわけではありません。つまらないことを聞いてしまつて申し訳ありませんでした」

「別に気にしてはいないわ。それよりその堅い口調の方が気になるわね」

「まあ改善できるように努力はしますよ」

善処する、と言つた時には実際にはする気がないことの方が多い。鈴仙も当分は話し方を変えてくれないだろう。

「頑張つて頂戴ね。さて、私たちも料理をしましょうか」
再会の挨拶は何が良いだろうか。

妹紅 side

ここまでの人数を見たのは実に千年以上だと思ふ。ここ数百年は竹林の中で生活していたし、その前も人間の目につかない所で生活していたし。

最後に見たのは恐らくお父様が亡くなった時のあのクズのような親族たちだろう。あの時の私の判断は後悔していない。どうせあの家に私の居場所などなかったから。

家出の判断は後悔していないが蓬萊の薬を服用した後は数百年間後悔し続けた。初めて妖怪に殺された時には大きな絶望が心を支配していたが、いつの間にかそれも無くなつてしまつた。

輝夜と再会できたのはほんの偶然だった。たまたま竹林に立ち入った時に追いかけた兎があんな幸運を届けてくれるとは人生何が起るかわからないものである。

今私が永遠というモノに絶望せずに生きていられるのも輝夜や永琳などの同類がいるからだ。彼女たちが月に帰ってしまえば私はどうなってしまうのだろうか。

「どうしたのさ妹紅、神妙な顔なんかしてさ。宴会なんだから楽しんで者勝ちだよ。ほらほら、その料理も頂いちゃうよ」

いけない。考え事ばかりしていても宴会は楽しめないから思考を切り替えなければ。

「いや、何でもないよ。それにその料理はやらん」

普段は筍などしか食べていないから、ただのつまみが豪華な料理に見える。こんなことを言えば慧音に心配されてしまいそうだから言わないけど。

「貴方は妹紅さんですよ？生きていたのですね。お久しぶりです」

この宴会の参加者をぱつと見たところ私の知り合いはいなかったような気がするんだけど。それに“生きていた”だと？私の事を知っているのに私が不死であることを知らないのか？

「えーつと、あなたは一体？」

「ああ、そういえばこの姿では初対面になるのですでしたね。私は紅美鈴、もと陰陽師と言えはわかりますか？」

「ええっ?!美鈴だったの？随分とかわったみたいだけど」

「こちらが妖怪としての本来の姿ですよ。あの時はパチュリーに変装させられていましたからね。でも姿の変わりようは貴方も人に言え

たものではないのですか？

私は自身の能力で判別できましたがパチュリーにはわからないかもしれませんね」

「ああ、樺菜の本名だっけ？確かにわからないかもしれないね。美鈴の言い方だと樺菜も宴会に来ているみたいだけど……誰なのか全然わからないよ」

「ああ、パチュリー……いや、樺菜なら今料理をしているところですよ。今妹紅さんが食べている焼売も樺菜が作った物ですよ」

「へえ、これは焼売と言うのか。食べたことない味だったけど美味しいね。樺菜は料理もできたんだね。ほんと驚かされるよ」

「樺菜の料理の腕はそこらの料理人以上ですからね。少し待てば彼女も来ると思いますよ。私は輝夜さんたちにも挨拶しに行ってきますね」

樺菜がこの地にいるというのは本当の事だったのか。慧音が嘘を吐くとは思わないけどあまりに信じがたいことだったから疑っていた。

しかしまさかこんな再会があるとは思わなかった。あの時宴会に誘ってくれた輝夜には礼を言わなければならない。

樺菜は私を見て藤原妹紅だと信じてくれるだろうか。美鈴がいれば大丈夫だろうか。

しかし樺菜が料理ねえ。なんでも器用にこなす彼女らしいっちゃ彼女らしい。私も簡単な料理くらいなら作れるが具材を適当に採ってくるせいで何回かに一回食中毒で死んだりする。ちなみに食中毒の原因の大半は毒キノコ。

「こんばんは、こんなところに一人でいて宴会は楽しめているのかしら？」

「急に声をかけてきたと思えば失礼な奴だね。私は一人で楽しめるから良いのよ」

「本当はそうでもないでしょう？妹紅。あなたが周りを避けるのは自身が特殊だと思ひ込んでいるからでしょう？安心なさい、参加者に普通の人間なんていやしないわ」

「一体誰なんだ？私の事を知っているかのような口調、さっきの美鈴のような雰囲気がある。という事は

「あなたはまさか……………樺菜？」

「あら、よくわかったわね。あの頃と違って今は変装していないのに。では改めて自己紹介をしましょうか。私は大都庶樺菜改めパチュリー・ノーレッジ、種族は魔法使いよ」

「樺菜こそよく私があったね。あの頃の面影なんて欠片もないと思うんだけど」

「そう思っているのはあなただけよ。髪色や長さは変わっても顔は整形でもしないと変わらない。少し大人びた顔つきになったくらいでは私の眼はごまかせないわね」

「輝夜なんて初め全然わかっていなかったのに流石は樺菜だね。到底敵いそうにない。輝夜たちはあっちにいるよ。美鈴もいるみたいだし樺菜も挨拶しに行ったら？」

「あら、美鈴とはもう会っていたのね。そうね、それでは挨拶しに行きましょうか。あなたも勿論来るわよね？」

一人で飲むのもなあ、と思っていたところだし丁度良い。

「そうだね、私も行くよ。あの連中には何かと世話になっているしね」
輝夜に礼も言わなければならないし。輝夜や永琳にとっても久しい再会なのだろうけど。

もう春の足音が聞こえる季節になってきた。ここからは少し異変の頻度が落ちるようになるだろう。と言うか去年が異常過ぎただけだが。春から秋にかけて三つの異変が起きるとは私以外誰も思っていなかっただろう。

霊夢には本当にお疲れ様と言いたい。まあ言う機会はないのだけれど。

今年の冬は正常に終わるはずであるし次回の騒動も実際は異変ではない。まあそれは日本に百二十年以上住んでいなければわからないかもしれないが。

冬場は外が大分寒いようなので美鈴の仕事はもっぱら館内部の仕事になっていく。今の時期は庭の植物も特にならない。あるのは屋上の温室内のものくらいだから美鈴も楽そうだな。

いちいち一回外に出なければならぬのも鍛錬不足を補えるなんて言っているし。暇な時間は今のよう図書館に来ている。

冬の図書館は訪れる人が少ない。アリスは自分の家で研究をしているようだし、魔理沙は寒がりだからほとんど来ない。知識としてはあったが本当に寒がりだとは。あんなに寒さに強そうな雰囲気なのに。

「そういうえば今年って何季でしたっけ」「今年は何百二十季よ。つまりあの年ね」

「あー、もうそんな年なんですわね。綺麗ではあるんですがねえ、無秩序に咲かれると庭仕事も大変になりそうです」

「確かにそうですね。まあ今年そんなに採れなくても去年までの備蓄分は結構あるから大丈夫ではあるのだけれど」

「去年も春が遅れましたがなんだかんだで豊作でしたからね。流石は神様ですね」

「そうですね、本当に彼女には感謝してもしきれないわね。レミイも上機

嫌だったし」

「紅葉も綺麗でしたもんね。しかしもう春ですか、私の仕事も外に戻してもらって構わない時期ですね」

「何老人めいたことを言っているのよ」

「これでも数千歳なので十分老人なのですよ………：………：おお、辛い辛い」

「輝夜や永琳、てるに比べたらあなたなんて生まれて間もない赤子同然でしょうが」

「確かにそうでしたね。まあ時間の進みが速く感じるといいうのは妖怪なら誰でもですね」

確かに私も人間だった頃の時間感覚など忘れてしまっただけで、久しい。思えばもう前世の七十倍程度の時間をこの世界で過ごしているのだから忘れていて当然だろう。

旅を始めた当初は五十年の時間すら想像もできなかったのだからものすごい変化だ。千五百歳超となると幻想郷でも高齢の部類に入るがさらに上位の存在になると桁が五つほど違ってくる。

彼女らから見れば私などまだまだ若造だ。私たちの行使する魔法だって永琳から見ればただの古代の力のコピーでしかない。

魔法と言う概念を生み出したのも恐らく永琳本人。超常の頭脳を持ちながら永き時を生きてきた彼女は一体何を考えていたのだろうか。億を超える年月を想像することすらできない私に答えなど永久に出せまい。

「それを踏まえても永い時間を過ごすというのは辛そうね。それだけの年月を生きてなお今を楽しめるというのは本当に凄いことだと思うわ」

「だんだん話がずれていましたが本当に一年などあつという間ですからね。ここ二年ほどはいつもより少しだけ長く感じましたが」

「そうね。異変が立て続けに起こったものね。今年の春も知らない者は異変扱いするでしょうから巫女は本当に忙しいわね」

「まあ彼女自身が異変扱いするでしょうからね。度が過ぎると閻魔が出てくるかもしれないが」

「幻想郷の閻魔は誰なのかしらね。案外知っている人かもしれないわね」

「閻魔に知り合いませんよ。でも確か昔閻魔の募集がありましたね。知っているお地蔵様から閻魔になった人がいるかもしれませんよ」

「私たちの知っているお地蔵様と言えば月面戦争の少し後に会った映姫くらいよ」

「むう、流石にそれほどの低確率は引けそうにないですね。彼女は少し説教臭かったので閻魔にはぴったりだったかもしれないが」

まあ実際はその映姫なのだけれど楽しみは最後まで取っておくほうがいいだろう。私たちは特に死神と関わることをせずに生きてきたので小町には会ったことがない。

三途の川に行けばいつでも会えそうな気がするが、好んで行きたい場所ではないため行ったことは無い。

今年は渡しの仕事が大変になるだろうが頑張ってもらいたいものだ。

花咲的第四十二話

靈夢 side

今年は去年とは違って無事に春が訪れたようだ。少し花々が騒がしいが。

去年は異変が三回も起こったせいであまりゆつくりできなかった。異変があまりにも立て続けに起こりすぎているせいで私の生活は大変だ。でも異変を解決すれば参拝客が少しだけ増えるのでそこだけはありがたい。異変解決は面倒くさいことの上ないけど。

今日もいつ参拝客が来ても良いように境内の掃除はしておかなければならない。さつさと済ませてお茶でも飲もう……………「おーい」はあ。

「おーい、無視すんなよな。ていうかお前まだこの状況で動いていなかったんだな」

「この花の事？別に実害もなさそうだし放っておけばいいんじゃないの？」

「お前ってやつは…それでも博麗の巫女なのか？こりゃ異変に違いないぜ。仕方ない、私がお前より先に異変を解決してやるとするか。じゃあな！」

「ここに来た用事ってまさかそれだけ？」

「ああ、お前がもう動き出しているか否かを調べるために来たんだ。でもまだだったみたいだし、今回は私が勝てそうだな。今度こそじゃあな」

「はあ、面倒くさいがこれは宣戦布告というやつだろう。今回の異変、どこか違和感があるがとりあえず動いてみるに越したことは無

い。

手掛かりはさっぱりだがいつも通り適当に飛んでいればいつか元凶にたどり着けるはずだ。いつもそうしてきたんだし。

取り合えずまずは春の異変と言え、な冥界にでも向かってみよう。あいつらは想像もつかないことを平然とやってくるような面倒な奴らだ。

去年の異変の後に結界は直しておくのかと思ってたのに紫は何故そのままにしているのだろうか。まあこっちの方が楽に冥界に行けるから助かりはするけど。

途中で絡んできた妖精や騒霊をささっと倒してすぐに冥界に着いた。今日は珍しく庭に庭師がいないようだ。いつもは庭仕事をしているか剣の修行をしているかなのに。

門前に人がいないのならば仕方ない。勝手に上がらせてもらう事にしよう。

「お邪魔するわよく。誰かいないのかしら？」

「あら珍しい、貴方がここに来るなんて。何か用事でも？」

「ええ、ここは異変の影響が出ていないみたいだけど顕界は花が咲きすぎているの」

「あら、素敵なことじゃない。きっと花見も楽しめるわ」

「あんたが楽しむのは花見ではなく花見で出てくる料理の方でしょうが。まあそんなことはどうでも良いのよ。この異変、あんたたちが関係あるんじゃないかと思っているんだけど」

「うーん、まあ関係してないと言えば嘘になってしまいうわねえ。でもあえて言うならば私たちはこの異変に関係ないわよ」

「関係あるのかないのかはつきりしない奴ね。イライラするわ」

日本語を喋ってもらいたいところだが人外にそんなことを言っても全くの無駄だろう。

「まあそうイライラしなくてもいいんじゃないの？折角だから妖夢の作った茶請けでお茶でもするかしら？」

「はあ?!というかなんでレミリアが白玉楼にいるのよ」

訳が分からない。紅魔館の当主が館を放り出して良いのだろうか。

「紅魔館の当主と冥界の管理人が一緒にいても何も問題ないでしょう？とりあえずもうすぐ妖夢がお茶の用意をしてくれるからそれまではゆっくりしておきなさい。」

腹が減っては戦はできないと昔から言われているでしょう？」

タダでもらえるものなら特に拒む理由もない。ただ解決が遅れてしまう事になるが。しかしレミリアがここにいるとなると咲夜もここに来ているのだろうか。

「咲夜なら今日は着いてきていないわよ。異変解決に向かわせたわ」

「ちよつと！勝手に人の心読まないでくれる？」

「別に読心の心得はないわよ。顔に出るほどわかりやすい貴方が悪いのよ」

やはり妖怪なんかとはいつまでたっても相容れそうにない。起源が違いすぎるからそれも当たり前のことだとは思っけど。

パチユリー side

今日は天気も良いし久しぶりに里に行こうと思う。レミイは妖夢

のところに行ったら、咲夜は異変解決を命じられて何処かに行ってしまった。

異変ではないのに異変解決に向かわれるという理不尽な状況を、私も美鈴もただかわいそうだと見守ることしかできない。

解決はできないだろうがこの行動を通じてさらに咲夜の人間関係が広がってほしいものだ。今の彼女は基本館から出ないせいで人間関係が狭すぎる。私が買い物をしてこなければもう少ししましたたかもれないが、私に未来予知などできるはずもない。

花塚は敵の数が結構多かったはずだ。となれば私が里に出かけても咲夜より早く帰ってこられるかもしれない。善は急げ、さっさと行こう。

「こゝ、私は今から人里に行くのだけれど何か買ってきてほしいものはあるかしら？」と言うかあなたも着いてくる？」

「よろしいのですか？では着いて行きます。まだ里に行ったことはありませんでしたからね」

そうだったか。てつきり行ったことはあると思っていたが私の思い違いだったようだ。

「決まりね。さ、早く準備をしなさい。私はもう出来ているから」

「すぐできますので少々お待ちください………はい、できましたよ。早速行きましょう」

本当にすぐだったな。一体何の準備をしたというのだろうか。

「へえ、ここが人里ですか。思ったよりも広いんですね」

「ええ、まあ幻想郷の人間のほとんどはここに住んでいるからこんなものでしょう。住んでいるのも人間だけではないわよ」

「時代は変わるものなんですねえ」

「いえ、恐らくここが特殊なだけよ。今の外の世界に妖怪を送つても排除されることは間違いないわね。まだ外にいる妖怪もいるけれど」

「あ、そうだったんですね。道理で誰も私たちを見ても不必要に恐れないわけです。ところで今日はどんな用事があつて里に来たんですか?」

「特に用事があつたというわけではないわよ。里を適当に歩いて寺子屋を少し覗こうと思つているくらいよ」

「そうなんですか。パチュリー様の事ですから綿密な計画があるのかと思つていましたが案外適当なんですね」

「私は計画に関しては適当なことの方が多いわよ。綿密な計画を立てても少しの手違いで大幅に狂つてしまうもの。それなら初めから適当にしていれば時間の無駄にもならないでしょう?」

「確かにその通りではありますが…」

まあこれは私の持論。計画をきっちり立てるのも重要だが、崩れた時のダメージが大きそうだからあまりきっちり立てないのだ。こちらの方が予定に含まれていない事への対処がしやすい。

「あ、そこにいらつしやるのはパチュリーさんですか。丁度良かったです」

こんな風に急に声をかけられても問題ない。

「あら、阿求じゃないの。一体どうしたのかしら?」

「実は今代の分の幻想郷縁起をそろそろ完成させたいのですが紅魔館の住人に関する記述はあまり揃っていませんね。勿論パチュリーさんや美鈴さん含めて」

「なるほど。だから私に協力してほしいという事かしら?」

「そうですね。それにパチュリーさんの記述の参考に質問でもさせてもらえないでしょうか」

「特に予定はなかったから別に構わないけれど彼女はどのような？私の使い魔なのだけけれど」

「彼女も是非屋敷にいらしてください。悪魔に関する記述は皆無なので」

どの代でも稗田は大変だと実感させられる。傍から見ればまだ十歳少しい子供にしか見えないのにしていることは大人顔負けだ。能力関係なしに、私でも彼女のしていることと同じようなことをするのは不可能かもしれない。

「それならお邪魔させてもらおうかしら。こあ、行くわよ」「はい、パチュリー様」

稗田の屋敷に行くのは十年ぶりくらいでまだ二度目だ。もてなされるのは初めて。

「ここです。どうぞお入りください」

「へえ、噂には聞いていたけれど見事な桜の木が植えてあるのね」

満開になるとかなり素晴らしい桜だ。

「はい、あの桜には木花咲耶姫の分霊が奉られています。あの満開ぶりは移り変わりの年であることが原因なのですがね。そしてその隣の岩は……………」

「石長姫の分霊というわけね」

「流石パチュリーさん、貴方の知識は衰えしらすですね」

「魔法使いの知識が衰えるなんて笑えない冗談ね。でもあなたにその気があるのなら妖怪の山に一度登ってみるのも良いかもしれないわね」

「それは……………ああ、確かあの山は咲耶姫に破壊される前の八ヶ岳

なのでしたね」

「ええ、でも無理はしては駄目よ。あなたは特にね。さて、そろそろ中に入ろうかしらね」

「そうですね。折角お招きした以上ここで立ち話をしている時間ももったいないですし。しかしこうしてゆっくり話すのもいつ以来でしょうか」

前回はもう随分と昔になってしまっただろう。

「恐らく阿悟の時だったのではないかしらね。もう五百六十年ほど前になるかしら」

「そんなに経っていたのですね。貴方が急にいなくなったと知った阿夢の時はとても驚きましたよ。ほとんど抜け落ちる記憶の中で今でも残っているという事は相当衝撃的だったのですね」

「まあ仕方のないことだったのよ。私にもしたいことはあったし。そんなことにならないように日本を出るよりかなり前に陰陽師業は引退していたのに」

「実際は引退した後も依頼があれば活動していましたからね。それに貴方たちの知名度は高すぎましたし。さて、この部屋ですよ。お茶と茶請けは女中が運んでくれますから少しお待ちくださいね」

「ええ。それにしても仰々しいお屋敷ね」

「そうですね？古臭いだけですよ。さて、早速話を聞かせていただきますよ」

阿求の目が本気だ。これはかなり長くなりそうな予感がする。普段自分の足でなかなか動き回れない以上直接の取材は彼女にとって特別な意味があるのだろう。

「ふう、今日はご協力ありがとうございました。気づかぬ間に随分

と時間が経ってしまったようです。絵を描く時間まで頂いてありがとうございました」

本当だ。昼くらいに来たはずなのに気づけばもう黄昏時だ。久しぶりに阿礼の子とゆつくり話ができて私としても楽しかったから全く問題ない。こあは途中で寝てしまっていたが。

「問題ないわ。私もなかなか楽しかったから大丈夫よ。ああそうそう、縁起に私の絵を入れる時にはこの着物ではなくこっちの洋服で書いてくれると助かるわ」

「そうですか、残念です。いつもその着物を着ていらつしやるというのに」

パチユリー・ノーレッツジとして描かれるのであればやはり洋服の方で描いてほしい。これは私の単なる自己満足だ。

「こあ、起きなさい。帰るわよ」「うーん、んん？はっ、パチユリー様?!…私寝てました?」

「ばつちり寝ていたわ。さて帰るわよ。阿求も今日はありがとう。完成したらまた見に来るわ」

「はい、楽しみにしててくださいね。ではまた」

結局異変の方はどうなったのだろうか。小町が動き出していれば良いのだけれど。気になるし無縁塚の方に寄ってから帰ろう。

「こあ、少しより道をして帰りたいのだけれど良いかしら?」「構いませんよ。一体どこへ?」

「無縁塚よ。少し確かめたいことがあるの」「無縁塚ですか…。良い話は聞きませんが」

まあそれは当然の事。無縁塚で良い思いをしているのは今のところは霖之助くらいだろう。

着いた。この異変のせいで春だというのに彼岸花がそこかしこに

咲いてしまっている再思の道を通り抜けた先、紫の桜が咲く行き止まりの空間だ。

「貴方なら今日きつとここに来ると思っていましたよ、樺菜さん。いえ、今はパチユリーさんでしたか」

「やはりあなたにごまかしは通用しない様ね。前に一度会っただけなのによく私の事を覚えていたわね、映姫」

「私に構う人自体全くだしませんでしたから覚えていて当然なのですよ」

「何かごめんなさいね」「いえ、気にしてないので大丈夫ですよ」

「それは良かったわ。それにしてもまさかあなたが閻魔になるとはねえ、それも幻想郷の。まったく、偶然にしてはできすぎているわね」

「確かにそうですね。さて、貴方はどうして今頃こんな場所に来たのです？来るのなら巫女よりも早いと思っていたのですが」

「九代目稗田の子と話をしていたらかなり遅くなってしまったのよ」

「ふむ、なるほど。彼女もずっと私を手伝ってくれたらもう少し楽になるでしょうけど…」

「あなたも大変なのね。たまには息抜きでもしたらどうなの？」

「うちの死神が仕事をよく放りだしてしまうのでその対応が一番面倒なのです。初めに彼女を見た時はもう少し真面目な奴だと思っていたのですがね。」

「ところで貴方は未だに人間側と妖怪側のどちらにもつかない立ち位置にいるようですね。そう、貴方は少し不安定すぎる」

「あらら、映姫のお説教タイムが始まってしまった。真面目に聞いていないとどんどん説教の時間が増えていくから、こういうのは初めから真面目に聞いておくのが吉だ。」

「いいですか？貴方のその人助けの精神は立派なものでしょう。しかしこの世に不変のものなど存在しないのです。今の貴方のどっちつかずの立場をこれからも続けていくというのならば貴方はいつかきつと後悔することになるでしょう。」

人間と妖怪で比べると圧倒的に妖怪の方が不変性が高いです。しかしそれでも完全なる不変というわけではない。今の貴方はどちらにも傾き得る。下手な不安定さは自身を滅ぼしますよ。それに…

……………なので。わかりましたか？」

「ええ、でも今のところ私の生き方を変えるつもりはあまりないわ。それにあの頃と比べれば今ははるかに妖怪寄りよ」

「確かにその様です。ですが今私の言ったことは是非心に留めておいてくださいね。つい長く話過ぎてしまいましたね。もう暗くなってきましたいますしここは妖怪でも危険ですから早く帰ることをお勧めしますよ。この時間まで話した私が言えたことではないですが」

「そうね。またこっちの世界に来た時には美鈴にも会いに行つてあげて。きつと彼女も喜ぶわ」

「私がいに行つて喜ぶ人など今まで見たことはありませんが。でも覚えておきましょう」

「ええ。さようなら、また会いましょうね」「はい、お元気で」

かなり遅くなつてしまつたがようやく帰つてくることができた。

「パチュリー様、先ほどのの方が閻魔様なんですか？」

「ええ。私と美鈴の古い知り合いでもあるわ。彼女に逆らつては駄目よ、勝てないから」

「逆らいませんよ…。しかし何とか話の長い方でしたね」

「あれは彼女の仕事でもあるのだから仕方のないことなのよ。人が地獄に落ちないように説教をしているみたいだけれど、真面目に聞く人が少ないせいであまり意味をなしていないように思えるわね」

「あはは、確かにあれではすべてを真面目に聞く人は少ないでしょうね」

まあそんなことを映姫に直接言ってもなんの効果も無いだろう。彼女の説教癖は治る気がしない。

オマケ；幻想郷縁起

天の声 side

花の異変の後、パチュリーと小悪魔は帰るのが遅くなったせいで美鈴に心配されていた。夕食も二人が帰ってくるまでは作っていなかったらしい。

レミリアは料理は出来たてが最も美味しいと考えているため、二人がいつ帰ってくるかわからない状況では料理を始めることができなかったらしい。

どうせ彼女の手際なら二人が帰ってきた後に作り始めても大して遅い時間にならない、という意見の一致により全員が二人を待つて夕食を食べることにしたらしい。

さて、そんなことがあってからもう一年以上。ついに幻想郷縁起が完成したとの情報がパチュリーに入った。パチュリーは早速人里に向かったようだ。では内容を見てみよう。

希代の大魔法使い　パチュリー・ノーレツ

ジ

能力　魔法（主に属性）を使う程度の能力

危険度　低

人間友好度　極高

主な活動場所　紅魔館ほか

悪魔の住む館、紅魔館の頭脳と言え、この魔法使いパチュリー・ノーレツジである。

彼女は、生粋の魔法使いであり、千五百年以上生きているという。

現在彼女が暮らしている紅魔館には紅美鈴とともに、レミアア・スカーレットが誕生する前から住んでいるらしい。

能力

彼女の使う魔法は多岐にわたるが、彼女の最も得意とする魔法は属性魔法である。

彼女が主に使う属性魔法は、生命と目覚めの『木』、変化と動きの『火』、基礎と不動の『土』、実りと豊かさの『金』、静寂と浄化の『水』、能動と攻撃の『日』、受動と防御の『月』の七属性である。

これらは単独で使うだけでなく、二種類以上の属性を組み合わせることも可能だという。組み合わせによって弱点を補ったり、威力を高めたりと、バリエーションは非常に豊富だ。

実態

彼女はほとんどの時間を紅魔館内にある大図書館で過ごしているが、たまに人里に来ては寺子屋に行ったり、買い物をしたりしている。

また、彼女の持つ知識は大図書館にある本からの物であるらしい。大図書館も彼女が紅魔館に棲み始めた当初は本が一冊も入っていなかったとか。つまり今大図書館に置いてある本のほとんどは彼女が持ち込んだ物だという事になる。これなら彼女の知識が豊富なのも頷ける。(※1)

目撃報告例

・この間借りていた百二十冊くらいの本が全部取り返されていたんだよな(霧雨魔理沙)

パチュリー・ノーレッジ本人によると持ち帰ってから一年近くも経っていたらしい。借りた物は期日までに返すよう心掛けた方が良い。

・最近なかなか店に来なくなっちゃって寂しいね(肉屋の店主)
噂によると紅魔館で家畜を飼いだめたとか。

・寺子屋に来た時はいつも子供たちと遊んでくれるのでとても助かっている(上白沢慧音)

彼女は魔法使いという種族であるにもかかわらず意外と面倒見が
いい。

対策

彼女に敵対することはお勧めしない。彼女の正確な観察眼により属性が看破されてしまえば、相当に実力のある妖怪でもない限り逃げるのは不可能である。幸い彼女は人間に非常に友好的なので、相応の理由がなければ敵対することは無いだろう。

それでも敵対してしまった場合には、彼女の唯一の弱点である持病の喘息になることを祈るしかない。彼女は魔法使いでありながら体術も人並み以上にこなしてしまうからだ。

※1 彼女によると、知識量で言うなら八意永琳（後述）にははるかに劣るらしい。

ここまでがパチュリーに関する記述である。

鉄壁の門番 紅美鈴

能力 気を使う程度の能力

危険度 低

人間友好度 高

主な活動場所 紅魔館

紅美鈴は紅魔館（※1）に棲む妖怪の一人である。門番をしているため、紅魔館の住人の中ではパチュリー・ノーレッジに次いでよく目撃される。

武術に長け、妖怪じみた怪しげな術を使うことは少ない。

何かに特化して強いわけではなく、武術なら基本的にどんなものでも達人以上の実力を持っている、万能型の妖怪である。素の妖力も高く、人間にも妖怪にも死角が無い。

その力を買われて、門番をさせられていると考えられる。また、門番の仕事以外にも彼女の世話好きの性格を買われてか、庭（※2）の

管理も一人で行っているらしい。

紅美鈴と陰陽師

紅美鈴と言えば昔、都など活躍した大陰陽師の名前と一致する。今代になって初めて明かされた真実であるが、その紅美鈴と今回記した紅美鈴は完全に同一人物であるらしい。およそ五百年前に、この国から忽然としていなくなってしまった陰陽師が実は幻想郷に来ていたのだ。

だが、彼女の性格からもわかる通り、妖怪でありながら陰陽師になった目的はただ単純に人間を助けたかったからである。また、紅美鈴の相手の陰陽師である大都庶樺菜(※3)の消息も今ははつきりとしている。

目撃報告例

・釣りをしていて湖に落ちそうになっていたところを助けられた。妖怪も悪い奴だけではないようだ(匿名)

霧の湖は人間一人で行くべき場所ではない。いつも助けられるとは限らない。

・門番のくせに私が行った時は何も言わず通してくれるんだよなあ(霧雨魔理沙)

彼女と非常に仲の良いパチュリー・ノーレッジからの指示らしい。
・いつも門の前に立っているだけのように見えるのに隙が全く無いので恐ろしいです(最速のパパラッチ)

武術の素人から見ればぼーっとしているように見える。

対策

普段はとても温厚で怒ること自体ほとんどない。普通に接すれば全く恐れる必要のない妖怪である。また、決闘を申し込めば快く応じてくれるらしい。

ただし、もしも彼女と敵対関係になってしまった時にはできることは無いと言っても過言ではない。弱点らしい弱点が存在しないせいで、本気の彼女を相手取ることができるのは幻想郷内で最も力のある妖怪たちくらいだろう。

パチュリー・ノーレッジが近くにいれば、彼女に頼めば止めてくれ

るかもしれない(※4)。

※1 悪魔の棲む家(後述) ※2 紅魔館内で自給自足できる程の作物が植えられているとか ※3 詳しくは二代目から五代目までの幻想郷縁起を見よ ※4 可能性は限りなくゼロに近い

これが美鈴に関する記述だ。最後にレミリアの項を見てみることにする。

幼き紅い悪魔 レミリア・スカーレット

能力 運命を操る程度の能力

危険度 極高

人間友好度 中

主な活動場所 紅魔館近辺

幻想郷で確認が取れている吸血鬼と言えば、紅魔館に棲むスカーレット家である。その主がこのレミリア・スカーレットだ。

幼い姿に似合わず思慮深く、また吸血鬼らしい驚異的な身体能力を誇る。吸血鬼と言うが、飲む人間の血の量はとても少なく、人間の肉は決して口にしないらしい(※1)。

身長は低く、まるで十にも満たない幼児のようだが、背中には自分の身長より大きな羽根を携えているため、シルエットだけならかなり大きく見える。

昔は昼間寝ていたらしいが、今では夜に寝るようになったらしい。西洋出身の妖怪だが日本食を好み、特に納豆(※2)へのこだわりはかなりのものらしい。

現在(※3)、人里でスカーレット家と言えばスカーレット印の食料品(※4)が有名である。紅霧異変後急に始まった食品提供で、当初は信用していない者も多かったが、今となっては大人気のブランドと

なっている。

この妖怪に纏わる逸話

・紅霧異変

紅魔館の存在が幻想郷中に大きく知れ渡った異変である。

幻想郷中が紅い霧に包まれ、日の光も地上に届かず、夏なのに気温が上がらないという異変があった。この霧により体調の優れない者が出たことで、人間たちは数日間に渡って家からも出られないという状況になった。

結局霧の原因はレミリアであり、博麗神社に住む巫女が、彼女を懲らしめて解決したと言われる。またこの異変はスペルカードルールが幻想郷に浸透する原因ともなっている。

目撃報告例

・この前冥界で見た。一体今度は何を企んでいるのかしら（博麗霊夢）

最近足はよく冥界に通っているらしい。また何か異変でも起こすつもりなのだろうか。

・前にパチュリーちゃんと一緒に店に来たけど季節に合わせた物を注文してきたよ。なかなかわかってる妖怪もいるんだな（甘味処の店主）

彼女は和食だけでなく和菓子も大好物らしい。

・宴会であった時に驚いたけれど、誰かに伝言を頼むのではなく自分から頼みに行っていた。

彼女ほど紳士的な妖怪はまたとないと思う（西行寺幽々子）

吸血鬼は意外と紳士的である。高慢な者が多い妖怪の中においては非常に珍しい。

対策

吸血鬼として多くの弱点を持っているが、生半可な事では退治できない。下手に弱点を突こうとしてしまうと逆に怒りを買ってしまう、いとも簡単に消し飛ばされてしまうかもしれない。

身体能力に加えて姿に見合わない思慮深さを持つので、戦闘になったら間違いなく不利である。ありがたいことにそれほど好戦的では

ないので、こちらも紳士的に対応していればまず戦闘になることは無い。

それでも敵対してしまった時には、川に身を投げるか、雨乞いするほかない。

※1 もはや本当に吸血鬼なのかと疑いたくなる ※2 炒り豆は弱点だが、納豆は好きらしい

※3 九代目阿礼、阿求の時代 ※4 原料は全て紅魔館産である

パチユリーside

一応すべての項を見ただけで特に修正してもらいたい箇所も無かった。強いて言うなら実際美鈴の人間友好度は極高だろうしレミイも高の部類には入るのではないだろうか。まあ今代の幻想郷縁起は危険度を水増しして書いてあるからそれに伴って友好度も少し低めに設定されているのだろう。

阿求は今代の仕事はもう終わったと思っているかもしれない。もう既に大きな異変と言えるものが四回も起こっているのだからそう思うのは仕方ないが、これからも次々に起こるからまだまだ大変になるだろう。

過労で死んでしまうのは流石に避けてほしいところだが、そうなくてもおかしくはないだろう。頑張って生きてほしいものだ。

外界的第四十三話

諏訪子 side

最近は考え事をする事が多くなってきた。理由は単純、私と話ができる者がもうほとんどいないからだ。

どうしてこうなってしまったのだろうか。つい千年前まで私たちは神の力は絶大だった。人間たちは神を強く信仰していた。

いつからだろうか、人間が私たちに継ぐことは無くなってしまった。神という存在を人間が排除し始めてしまった。

今この世界にある神社のほとんどはもはや機能していない。祭神であった神が消え、観光地と化してしまった神社に一体何の価値があるのだろうか。

幸い私も神奈子もそこそこ強い力を持つ神なのでまだ消えるまでには至っていない。しかしそれも時間の問題だろう。既に私たちを視認することができるのは風祝かぜはふりの早苗だけ。

私の子孫であるとはいえあの子はかなりの才能を持っている。この神社も早苗の前の代までは巫女になってしまっていた。私たちを視認できないがゆえに風祝はもはや過去の物ともいわれてしまうようになってしまった。

そこにあの子が生まれたのだ。まさに奇跡の申し子ともいえるほど、現代ではまず見られなくなった豊富な霊力を以て私たちを視認した。私たちは当時勿論喜んだが、現実是非情だったのだ。

早苗が私たちを視認できるせいであの子は周りから浮いてしまった。まだ心が純粹だった小学校低学年の内は良かった。しかし成長すれば人間は自分の見える物しか信用しなくなるものだ。

こんなことになるくらいなら見えない方が良かったのではないかと思う。先代までは普通の生活をしていたのを見ていたからだ。私たちは早苗の重荷にしかなくなっていないのだろうか。

「まくたそんなところで一人考え事をして。一体いつも何を考えてい

るのさ」

「ああ、神奈子か。別に、何でもないよ」

「付き合っても長いんだし諏訪子が何かに悩んでいることなんてお見通しよ？ま、無理に話せとは言わないけどね。それよりも良い話があるんだけど」

「良い話？もうすぐ消える私たちに良い話なんてあるのかねえ？」

「それがあるのよ。引越し、しないかしら？」「一体どこにさ」

「この世界とは別に結界で閉鎖された幻想郷なる場所があるらしいわ。そこには現代において幻想とされる妖怪や幽霊、神なんかも住んでいるそうよ」

「……………その話、誰に聞いたの？私たちと会話ができる存在自体もはや幻想に消えていてもおかしくないと思うんだけど」

「誰かはわからないのよ。寝ていたら急に声が聞こえたの。周りを見ても何もいなかったんだけど、その後も会話はできたから幻聴ではないのよね」

「胡散臭いなあ。それで？もし行くとしても場所もわからないのにならうやうって行くつもりなのさ」

「それは恐らく問題ないと思うわ。私たちはもう既に幻と実態の間で揺らいでしまっている。それに現代のこの状況…」

「私たちは幻側に大きく寄ってしまっているという事か。確かに実態があると認識できる瞬間は神奈子か早苗と話しているときくらいだ

もんね。参拝客からは全く信仰を感じ取れないし」

「そう、だから引越しに関しては何ら問題はないわ。早苗も………恐らく私たちがいない方が幸せな人生を送れるでしょう。どうやらあちらに行くところらの世界では完全に忘れられることになるみたいだから早苗の将来にも全く害が出ないはずだし」

「確かにね。でも私はまだ引越しに同意できないよ。考える時間がもう少し欲しい」

これも仕方ないことだ。私たちがその幻想郷とやりに移住するのが最も手っ取り早く事を解決させる方法だろう。しかし今すぐに決めるのは私にはできない。

神奈子は良い。長く諏訪に住んでいるとはいえ、もともとは外部の神だから。だが私は違う。私はこの地で生まれた土着神、この地を離れば使える力はかなり少なくなってしまうだろう。今のこの状況よりは幾分かましだろうが。

しかし主な理由はそれではない。私は生まれた時からこの地の人間からの信仰で国を治めてきた。この地を離れることにはかなりの抵抗がある。

「あんたはそういうだろうと思ってたよ。大丈夫、消えるまでにはまだもう少し猶予があるからじっくり考えなよ。ま、私は消えそうになつたらこの神社ごと幻想郷に行つてやるけどね」

「ははっ、私に選択権は無いのかい？全く困った奴と一緒に生活してきたもんだよ」

「そうでもしないとあんたは着いてこないかもしれないじゃない。ふっ、でも案外元気そうで何よりだわ」

「神奈子様、諏訪子様、ただいま帰りましたよー」

「あら、早苗はもう帰ってきたのね。お帰り」「お帰りー」
早苗に両親はいない。もう既に他界してしまっているのだ。そんな彼女を一人置いて出て行くとなると一体早苗はどういう顔をするのだろうか。

パチユリー side

何故か最近レミイがそわそわしていると思っただらどうやら藍に唆されて月に行きたくなったらしい。ロケットを作るのは勿論私になるのだがまあそこまで難しくはない。

理由は勿論完成形を知っているからだ。三神の力を借りればロケットは月に行くことができる。

しかし私だけでその結論に至ったとなると流石に怪しまれるだろうから咲夜に課題として三つの筒を探してくるよう言っている。あまりに早くロケットが完成してしまっても紫の計画に支障が出してしまうし。

そんなこんなで課題を出してから咲夜は色々な手掛かりを探しているようだ。私の仕事は彼女が課題をクリアした後だからまだまだだろうから今はゆつくり本でも読んでおけばいいだろう。

「はあい、ごきげんよう」「あなたから来るなんてかなり珍しいわね。何か用でもあるの?」

「ええ。貴方、外の世界に出張してくれないかしら?」

「外?何故急にそんな話になったのか説明してもらっても?」

「勿論よ。最近になって外の世界では妖怪だけでなく神も消えていつているわ。ここに来るのではなく消滅という形によって。そこで私は色々手を尽くしているわけなのよ。今目をつけているのは外の世界でもまだ残っている力の強い神々よ」

「で？その力の強い神々というのは何処の神なのかしら？」

「貴方も良く知っているはずの神よ。場所は信州諏訪、守矢神社よ」

「ふうん、なるほど。その二柱を幻想郷に呼び込むために外の世界に行ってもらいたい、と」

「そういうことよ。行ってくれるかしら？」

「あなたは本当に意地が悪い。あなたに返しきれない恩がある私が断れるはずが無いじゃないの。それでいつから行けばいいのかしら？」

「ありがたいわ。行ってもらうのは明日からにしましょう。今日は流石に急すぎるでしょうからね。では明日寅の刻に迎えに来るわ」

「寅の刻って…早すぎないかしら？まあ寝ないからいつでも変わらな
いけれど」

「ではそういう事でよろしくね。レミリアにもしっかり伝えておいて
ね」

「ええ、任せなさい。それと紫、もし私が外にいる間に咲夜が課題を終
えてしまったらどうするつもりなの？」

「ふふ、そんなことはあるわけないわ。いくらあの子が優秀でも誰に
も頼らず調べているうちはその心配は必要ないでしょうね」

「確かにそうね。ではまた明日会いましょう」「ええ、ありがとうね」
昔からそうだがいつもお願いする側は私だった。彼女はいつもお
安い御用と言いながら私の願いを聞いてくれていたが、まさか彼女の
願いを聞く側になるとは。今回だけでは今までの分を帳消しにはで
きないがせめて失敗しない様にはしなければならぬ。

「ええっ?!急に外に行くことになったの？ロケットはどうするつもり
なのよ」

「それに関しては問題ないわ。恐らく帰ってくるのは秋ごろでしょう

からそこから作っても十分に間に合うはずよ」

「そう、ならいいんだけど。でもパチエがいなくなると思うと少し寂しくなるわね」

「昔はもつと長い期間館を空けていた時期もあったじゃないの」

「そうだったわね。あの時は料理で驚かせてあげたから今度は和菓子かしらね？」

二年しか修行をしていないはずなのに、味に関しては店のものにわずかに劣る程度のものになっている。それだけでもう十分すぎるほど驚いているというのにこれ以上どう驚けと言うのだ。

「たったの数か月で今よりもつと味が良くなるものなのかしら？」

「ふふん、私の料理へのこだわりをなめてもらっては困るわね。貴方が帰ってくるまでの数か月で今まで以上に必死に修行すれば不可能ではないわ」

食に関してのレミイはそれが嘘ではないから恐ろしい。本当にどうしてこうなった。

「まあ楽しみにしておくわ。私の留守中は図書館を完全にこあに任せるから館の仕事は与えないであげて頂戴ね」

「そうね。最近は特に泥棒への対応を厳しくしているようだし」

そう、最近の魔理沙はかなり危険な本まで持ち出そうとしているのだ。彼女のレベルの少し上の本なら強くなるためには読んだらいい。しかし背伸びをしすぎると彼女の身に危険が及んでしまう。

もしもの事を考えればこれには目を瞑っていられない。魔理沙にその本を取らせないようにするだけなら私の謎空間にでもしまっておけば十分なのだが、そうするとその本をアリスが読めなくなってしまうのだ。

だから最近では魔理沙に盗られた本は次の日までには取り返すようにしている。勿論ただ取り返すだけではなく彼女に合った魔導書を

数冊置いてきているが。

「流石に数か月も館を空けることになるから危険そうな魔導書は図書館から一時的に撤去するわ。勿論アリスには後で伝えておくけれど。こあの仕事はその空いたスペースに入ってくる外来本を処理することよ」

「うわあ、パチエもなかなかひどいことをするのね。でもその仕事は図書館の本を網羅している小悪魔にしかできないというわけね。別にそんなことをしなくても空きスペースができないように適当なものを詰めておけばいいんじゃないの?」

「……………確かに。それが最も手っ取り早い手段だったわ。あなた天才ね」

「パチエってたまに変な所で抜けてるわよね。」

ま、いいわ。出発は明日の朝なんでしょう?今日のうちにアリスには伝えに行かないといけないんじゃないの?」

「アリスは今図書館に来ているから問題ないわ。明日の朝はかなり早いから見送りは必要ないわよ」

「早いつてどのくらいなの?」「四時くらいよ」

「はい?四時い?いくら何でも早すぎるわねえ。でも見送りはしたいわね。今日は早めに寝ることにするわ」

「別に構わないのに。でもその気持ちはありがたいわね。ではまた夕食の時にね」「ええ」

結局レミイは見送りをしてくれるらしい。うーん、この調子だとフランドール以外は見送りに来る可能性がある。美鈴はまず間違いなく来る。朝の空気はとても澄んでいて良いとか言っているも早起きだから。

レミイが来るなら咲夜もセットで着いてくるだろう。こあは正直わからない。彼女はかなりマイペースな所があるから予想がつかない。

い。まあ私としては誰も見送りに来なくても全然構わなかったのだけれど。

見送りにはまさかの全員が来てくれたみたいだ。まさかフラン
ドールまで起きてきてくれるとは思わなかった。

「別に眠いのなら無理に起きてこなくても良かったのよ？」

「眠くなんてないよ。だって早く起きるために昨日は八時には寝たもん」

なんとまあ健康的な吸血鬼だ。夜行性とは一体何だったのだろうか。

「それにこの時間ならまだ日が出ていないから外に出られるし、パ
チユリーとも数か月会えなくなるって言うしね」

なんて良い子なんだ。ウルつときそうになった。

「まあまあ皆さんお揃いで。愛されているわねえ、パチユリー」

「まあありがたいことよね。こんな早くから皆見送りに来てくれるな
んて」

レミイは朝食まで作ってくれていた。更にお昼のおにぎりまで用意
してくれるという親切さ。よくここまで良い子たちに育ってくれた
ものだ。育て親のような立場の者としては感慨深いものがある。
勿論おにぎりは謎空間に入れて保温もばっちりだ。

「それでは早速行ってもらいましょうか」「ええ、皆元気で過ごして頂
戴ね」

「パチエもね。喘息には十分気をつけなさいよ。美鈴がいないんだか
ら」

外で過ごすのは数か月だが一年分以上の量の薬を持ってきている。
理由は外の世界の空気の問題だ。幻想郷は空気がきれいなので喘息

にはなりにくいのだが、外の空気はかなり汚れてしまっているだろう。山に囲まれた諏訪でも昔のようにはいくまい。

薬は多めに持っていくに越したことは無い。髪色も黒に見えるようにしたし変装もぼつちりだ。服は良いものが無かったので仕方なく普段着用の着物だが、まあ多少目立つくらいだろう。

「ではね、また数か月後には会いましょう」

紫のスキマを通るのはかなり久しぶりだ。相変わらず中の趣味は悪いが懐かしいものだと思えば大して気にならない。

ここを抜けた先はすぐに諏訪なのだろうか。それだとかかなり楽になるのだけれど。

神様の第四十四話

パチユリー side

スキマを抜けた瞬間にここは諏訪ではないと感じた。直感だが恐らく間違っではないだろう。

これはかなり面倒なことになった。今がどこなのかは少し調べればわかるだろうが諏訪からはどれだけ離れているのだろうか。せめて本州ではあつてほしい。

とりあえず今どこにいるかを調査しないといけない。昔と違って現代は情報であふれている。会った人に『ここは何処ですか』なんて聞いてしまえば手厚く保護されてしまいかねない。もしくは馬鹿にされる。

一先ず周りを歩き回ってみれば何かしらはわかるだろう。

少しの間歩き回ったがなかなか景色の良い場所だ。空気も悪くないし海も綺麗だ。海があつた時点で諏訪ではないことが確定したのは残念だったけれど。

そして特徴的だったのが五重の塔と所々にある金山の看板。………私の前世の記憶が正常に働いているのならここは佐渡島になるだろう。まさか本州ですらなかったとはつくづく自分の運の無さには呆れてしまう。

でも悪いことばかりではない。ここが佐渡島なのならば海さえ渡ればすぐに諏訪に着ける。下手に東京何かに送られていけば人目を盗んで空を飛ぶことすらできなかつただろうからその点ありがたい。

「おや、旅のお方ですか？今の時代珍しいですが」

「へえ？私を試そうとしたって無駄よ。狸に構っている暇はないわ」

「なんと、もうばれてしまったか。儂ももうだめかもしれないなあ」

「何を馬鹿なことを。あそこまで妖力を出しておいてばれない方がお

かしいでしように。それにあなたの伝説は昔に何度も聞いたわ。佐渡の狸の頭領、二ツ岩大明神。いえ、マミゾウさん」

「最近の妖怪連中はたるんできておるのでな、儂が妖力を出して近づいても儂を人間と勘違いして襲ってくる奴もいるんじや。むしろお前さんのような者の方が珍しいくらいじや」

「今の妖怪はそこまで力を失ってしまっているのかしら？」

これは急がないといけない。神もかなりの力を奪われてしまっているだろう。消えさせるわけにはいかない。

「その通りじや。儂ら化け狸の中にも人間に化けたまま戻らず人間として生きている奴もいるくらいじや。して、お前さんは何者じや？儂が伝説と語られたのはもう随分と昔の事。最近の妖怪は知らぬ事じやと思うんだが」

「私はこう見えても千六百年以上は生きている生粋の魔法使い、パチュリー・ノーレッジ。またの名を大都庶樺菜。日本にいた頃は陰陽師をしていたわ」

「ほほう、お前さんがかの有名な伝説の陰陽師なのか。何じや、それならそうと早く言ってくれば良かったのに。それで何故こんな島にいるのじや？」

「友人に送られた先がここだったのよ。急いでいるから今夜中には島を出るわ」

「それは残念じやな。おお、そうじや。漁船に見られても大丈夫なように鳥にでも化けさせておいてやろう。どうせ飛んで島を出るんじやろう？」

流石マミゾウ、面倒見がいいと称される所以はこういうところにも表れているのだろう。

「いいの？それは助かるわね。短い間だったけれど楽しかったわよ。また会えるといいわね」

「生きていればまた会う事もあるじやろう。その時は酒でも飲みたいものじゃな」

「そんなことをすれば間違いなく私が死んでしまうわ。冗談でしょうけれど。ではまた」

「そりやそうか。ではまたな。次がいつになるかはわからんが」

急に佐渡に飛ばされて戸惑ったがおかげで貴重な体験ができた。

化けさせられても中身は変わらない。喘息にだけは十分に気を付けないければならない。幸いここは比較的空気の綺麗な北陸だ。昔のような事にはならないはずだ。

明日の朝には諏訪に着けるだろう。いきなり会いに行っても困るだろうから徐々に近づいて行こう。

早苗 side

学校に行っても皆が私の事を異常な奴だと思っってしまったているから正直あまり楽しくない。両親がいないから学費免除のためには良い成績を維持して奨学金制度を受け続けなければならない。

勉強は嫌いではなかったから高校に進学したのにここまで惨めな学園生活を送ることになるとは思っていなかった。小学生の時は皆神様の話を信じてくれていたのに何故信じてくれなくなってしまったのだろうか。

神頼みをしている人たちを見ても全く神に対する信仰心は持っていないようだし、ただ自身の力不足を解決してくれる都合の良い運のような物だとしか考えていないようだ。

存在を否定する癖に都合よく力を頼る、なんと愚かしいことなのだろうか。日本の神はそれぞれ得意とする分野が異なる。自身の目的によって行く神社は考えなければならぬのに現代の人間たちはそのあたりの事をさっぱり理解していない。

たまにうちの神社の絵馬に学業成就の願いが書いてあることがあ

るのが良い証拠だ。学業成績なら天神様に行くべきだというのに。

何故こんなことがあるのかを昔神奈子様に聞いたことがあった。その時は確か『最近の人間たちは神を信じていないだろうか？だから神社ならどこでも同じだと考えてしまうのさ。なんでもできるのは外国の一神教の神だけなんだけど』とおっしゃっていた。

何故私にだけ神が見えるのだろうか。むしろ何故皆には見えないのだろうか。幽霊を見る事ができる者はたまにいるのに神を見る事ができる者にはまだ一度も会ったことが無い。

帰りの神社の階段は考え事をしながら歩くのに丁度いい。何も考えずに登ると長く感じてしまう。

「神奈子様、諏訪子様、ただいま帰りましたよ」

幼いころに両親を亡くした私にとってはこのお二柱が両親の代わりだ。神様が両親代わりなんて贅沢だとは思うがこんな話をしても誰も信じてはくれない。

「お、早かったね早苗。お帰り」「お帰り。着替えたらでいいから今日の絵馬を見てきて頂戴」

「わかりました。少しお待ちくださいね」

神をすっかり信じなくなった今でも形式だけの参拝客がたまに訪れては絵馬を書いていくことがある。この神社の巫女は私だけなので絵馬は無人販売という事になっているが、このご時世に参拝してくれるような客はマナーの良い人が多いので助かっている。

まあお金を払わずに絵馬を書いたり、神社の物を壊したりすると諏訪子様の祟りが身に降りかかることになるんだけど。神を信じない人にも神の祟りは効くそうさ。

そんなこんなでいつもの装束に着替えて今日書かれた絵馬を見る。今日は三枚か、いつもとあまり変わらない。

「今日はこの三枚でした」

「三枚かあ。私たちも随分と力を振るえなくなつたものね。どれ、今日こそは私たちが何とかできそうなお願いがあるのかしら」

「うーん、どうだかなあ。最近の人間は願い事を書きさえすればいいと思つているんだから……お、これなら神奈子でも簡単にできるんじゃない?」

「今の私でも簡単にできることを祈る人間がいるとは思えないけど……あー、うん。確かに簡単ね」

「一体どんなお願い事があつたのですか?」「これよ、これ」

“ 建御名方神の直筆のサインが欲しい。また取りに来るから賽銭箱の上にも置いていてください”

「なんですか、これ。今時珍しいお願いですが何か怪しくありませんか?」

これを書いた人は神が見えるという事なのだろうか。いやいや、そんな人はいるわけがない。

「きつとこの神社の祭神の名前をわざわざ調べて書いてきたんでしょうね。面白いから本当に直筆でサインしておきましょう。いつ取りに来るかは知らないから明日は一日私が賽銭箱の前で立って見張つておこうかしら」

「どうせ神奈子の姿は見えっこないもんね。面白そうだし良いんじゃないの?」

「そうと決まれば早速書いておいてこようか。早苗は夕飯の支度をしてくれるかしら?」

「あつはい。今から作りますね」

しかしわざわざからかうために絵馬を買うなんて失礼な人もいたものだ。幸い明日は休日だから神社に来たところを捕まえて神奈子様たちの代わりに私が色々と聞かなければならない。

あれからは特に何事もなく朝になった。神社では朝から境内の掃除をしておかなければならない。神奈子様のサインはまだ賽銭箱の上に乗っている。神奈子様は風の神でもあるので風で飛んでいくという事はない。

「おはよう、早苗。朝ごはんまだ？」

「おはようございます、諏訪子様。朝ごはんは今から作りますよ。十分ほどお待ちください」

「ふう、ごちそうさま。いやー、やっぱり早苗の作るご飯は美味しいね。昔ながらの味も良いけど現代風の味も悪くないね。あんたもそう思うだろう？神奈子」

「ええ、本当に美味しいわ。どこに嫁に出しても問題ないくらいね。ごちそうさま。」

さて、じゃあ私は賽銭箱の前で陣取っていることにするわ」
では私は洗い物でもして境内の掃除の続きをすることにしよう。
休日はいつもより多くの客が訪れるからいつもより念入りに掃除をしなければならぬ。勿論いつも丁寧に行っているが。

「なっ！どういう事だ?!」「そんなに騒いで近所迷惑だよ。一体どうしたんだい」

急に神奈子様が叫んだが彼女の声は人間には届かないので近所迷惑にはならない。あくまでも聞こえているのは私と諏訪子様だけののだ。

「どうしたもこうしたもない。諏訪子、早苗もこつちに来てこれを見てみなさい」

「何？また新しい絵馬が書かれていたのかい。それはどんな内容だったんだい？」

「読んでみればすぐにわかる。そして私のサインも無くなっている。書いたのは同一人物とみて間違いわね」

「なになに……洩矢神の直筆サインが欲しい？」簡単な事じゃないか。なんであんなに叫んだの？」

「はく、まったく諏訪子は。良いかしら？この神社に神が二人いるという事実を知っている人間は早苗だけなのよ？それなのに諏訪子の名前を出してきた。これは確実に普通の人間ではないわ」

「なるほどねえ。ま、私もサイン書いて置いておこうか。面白いことになりそうだし」

「危機感のかけらもないわね。まあ好きにきなさい。ここは貴方の神社なんだから」

あの日以降は諏訪子様サインがいつの間にかなくなっていたこと以外は特に怪しいことも無くひと月ほどが経過した。最近近所の定食屋にかなり腕のいいバイトが入ったらしい。

何でも定食屋のお手軽な値段で高級料理店以上の味が楽しめるのか。そんなことは嘘に決まっているが一度は食べに行ってみたい。

最近できたT w i t t e rというものでもかなり拡散されているようだ。店のレビュー欄でも好評のようだし。

だが残念なことに一緒に行くような友人はいない。諏訪子様や神奈子様と一緒にいっても（傍から見れば）一人で四人席を占領するのは気が引ける。

「神奈子様、知っていますか？近所の定食屋の話」

「ん？ああ、勿論知っているよ。私も一度食べてみたいんだけどね。そうだ、早苗。店から一キロ圏内なら宅配ができたわよね。今日のお昼はそうしましょう」

「おお、いいね。私も丁度気になってたんだよ。という事で早苗、電話よろしく。私は唐揚げ定食で」

何故定食屋が宅配に対応しているのかは甚だ疑問に思うところであるがしてくれるのならそれに越したことは無い。

「神奈子様はどうなさいます？」「うーん、とんかつ定食で」
私は無難にメンチカツ定食にしよう。

あれから二十分。もう配達が来たようだ。自転車で配るから店から一キロ圏内なのだろうか。神社の階段はしんどいはずなのだが来た人は息切れ一つない。下手すると彼女は毎日階段を登っている私より体力があるかもしれない。

お代は三つで千六百円。まあまあ安いのではないだろうか。

「あの、さっきから一体どこを見ていらっしやるのでしょうか？」
「いえ、何でもありません。お気になさらず。では千六百円確かに受け取りました。冷めないうちにお召し上がりくださいね」

彼女が見ている方を見るが特に変わったところはない。まあいいか、今はこの美味しそうな定食を温かいうちに食べよう。

諏訪子 side

「ありやあ気づかれてたね。明らかにこちら側の存在だ」

「ええ、その様ね。とりあえず早苗に怪しまれないように私たちは部屋に戻っておきましょうか」

さっきの人間、正確には人間に変装していた者は一体何者だろうか。彼女の持っている力はかなり強力だ。妖力ではなかった。灵力でも、神力でもない力。この国で持つ者はほとんどいない、確か魔力だったか。

不用意に早苗に近づけない方が良くもしれない。あの絵馬を書いたのも彼女で間違いない。私の施した小細工がこんなところで役に立つとは思わなかったが。

「なんですか、この味は。定食ってこんなに美味しいものだったんですね」

「いや早苗、これはかなり特殊だと思うから普通の定食にここまでの物を期待してはいけないよ」

しかし本当に美味しい。高級料理店をも凌ぐという噂は本当のようだ。先ほどの人外が新しく入ったバイトというやつなのだろう。何故妖怪が料理をするのかはわからないが金に困っているのだろうか。

約束的第四十五話

早苗 side

初めて噂の定食とやらを食べてみたが噂以上のものだった。私もいつもお二柱に食事を出している身なので料理においては少し自信があったのに簡単に打ち砕かれてしまった。

諏訪子様と神奈子様は昼過ぎから何やらずっと話し合っていて私が入っていける雰囲気ではない。だから私は仕方なく境内や社務所などの掃除をしているわけだ。

今は誰も来ていないので境内はとても静かだ。神社にとつては良くない事だが、私はこの静寂が幼いころから好きだった。涼しい木陰に入って自分だけの世界に浸れるこの瞬間はとても魅力的だ。

「休憩中で申し訳ないのだけれど……」「はっ！なな、なんでしょうかが？」

いけない。つい自分の世界に入り込んでしまっていた。まさか参拝客の接近にすら気づかなかったなんて。いつもは大概気づくのにな。「まあまあ、少し落ち着いてくれると助かるわ」

「そうですね。取り乱してしまって申し訳ありません。では改めて何の御用でしょうか？お守りやおみくじは無人販売にしているんですが」

「用、ねえ。神社自体に用があつてきたわけではないの。それにおみくじは正月に引いたし。末吉だったけれど。」

まあ強いて言うならあなたのご両神に会いたいと思つて来たのよ」「残念ながら私に両親はいません。幼いころに他界してしまいましたので」

急にきて何故両親に会いたいと思つたのだろうか。私の両親の同級生だったのかなのかもしれない。それなら申し訳ないがお帰り願うしかない。

「勘違いしているみたいね。私が会いたいのはあなたの両親ではなく
両神。つまりはあなたの保護者代わりの神たちよ」

ここに二柱の神がおわすのを知っているこの人は一体
.....

パチユリー side

諏訪には着いたがとりあえずお金がないと寝泊まりできない時代
になったのでお金を得るために定食屋でバイトをすることになった。
初めはかなり渋られたが一品作って出したら即雇ってくれた。

今の時代は工夫して料理をしなくてもそこそこのものがいつでも
食べられるようになったため、私の料理でも高級料理店並みだと言わ
れる味らしい。それは流石に盛っていると思う。もし本当なら幻想
郷には一体いくつの高級料理店が建つのだろうか。

この時代は前世の私の生きていた時代より少し前なので勿論皆ス
マホなんかは持っていない。Twitterも最近サービスを開始
したばかりみたいだ。この店の事がつぶやかれたのか最近は客が大
量に来るようになってしまった。

私は少しお金をもらってあとは神社に行くつもりだったのに大幅
に予定が狂ってしまった。でもそんな時のためにやめたくなったら
何時でもやめていいという契約にしてもらっている。

そしてついに今日守矢神社に行くことができた。宅配員としてだ
けれど。ほんの一瞬だったが諏訪子と神奈子がいるのは確認できた。
こうなったら早く計画を進めなければならぬ。

店長には悪いが大人気であったレシピを書き残して辞表を出して
きた。私の事は忘れるようにしてきた。一部だけを忘れさせるよう
な忘却魔法は少々複雑だができないことは無い。

ついでに店に来た客も過度な期待をしなくて済むように入り口に
も忘却用の結界を張っておいた。長く生きてきたが昔習ったことが
いつ生かされるかはまるでわからないものだ。

給料は貰っていたのでもうこの店に来ることは無いだろう。早速

守矢神社に向かおうか。

「……………つまりはあなたの保護者代わりの神たちよ」

少し怪しすぎただろうか、早苗は私をかなり警戒しているようだ。それもまあ仕方がない。何せ神が見えるのは彼女一人だけだと思っ
ているだろうからだ。

「何故……何故貴方がそれを知っている。貴女は一体何者だっ！」

「おっと危ないわね。大幣の用途はこんなことではないでしょうに」
危ない危ない。冷静に見えるようにしているが、いきなり大幣で殴
られたので内心は動揺しまくりだ。早苗は温厚な子だと思っ
ていたのに。

「くっ、軽々と避けておいて白々しいにもほどがありますっ！せいっ」

「その辺でやめときな、早苗。あんたに勝てる相手じゃないよ」

「そんな……神に仕える私がこんな人に負ける道理などありません。

……おっとすみません、ただの独り言ですよ」

「……………はあ、そんな嘘は吐かなくてもいいのに。お久しぶりね、諏
訪子」

早苗は取り繕おうとしているみたいだが私にも普通に見えている
し、声も聞こえているのでその必要はない。

「ああ、本当に久しぶりだね。もう会えないかもしれないと思ってい
たよ。今日の昼に来たのもあんただだったんだろう？私と神奈子にサ
インを求めたのも」

「流石神様何でもお見通しね。…ああ、早苗といったかしら？私は普
通に神が見えるわよ」

「そんな……こんなことが」

まあこんな反応になるだろう。今まで散々異端児として扱われてきたのだろうし。未だに自殺していないのは二柱のおかげなのだろうか。

「ま、そういう事さ。で、ぱっちゃん、折角再会したんだしまたこの神社で働かない？」

「巫女になるのは無理よ。でも家事とかならしてあげるわ。早苗ちゃんも学校もあつて大変だろうし」

「いやー、助かるね。きっと神奈子の奴も喜ぶだろうね。ついてきな、早苗も」

「あの、一つお聞きしてもよろしいですか？お二人はいつから知り合いなんでしょうか。私の記憶には無いのですが」

「いつだったっけ。長く生きてると時間感覚がおかしくなるからねえ」

「確か千年二、三百ほど前だったと思うけど。諏訪にはかなり長いから懐かしい景色も多いわね」

「まあ人や建物なんかはあの頃と随分違っているけど美鈴が毎朝登っていた山なんかは残っているからね」

「せ、千年?! 貴方は本当に何者なんですか?」

「自己紹介がまだだったわね。私の名前はパチュリー・ノーレッジ。種族は人間ではなく魔法使いよ」

「日本人ではないのにそんな昔から日本に来ていたのですか? ヨーロッパから人が来るようになったのも五百年前くらいのはずなのに」
「魔法使いと人間を同じものとして見てはいけないという事ね。実際日本に上陸したのは千三百年ほど前の事なのだし」

「そうそう、ぱっちゃんはかなり昔から日本では有名だったのさ。早苗は陰陽師といえば誰を思い浮かべる？」

「そりゃあ昔から散々習いましたし有名な陰陽師といえば大都庶樺菜に紅美鈴、あとは安倍晴明なんかも有名ですよね」

あれ？この世界では安倍晴明よりも私たちの方が有名になってしまっていたのか。何故か申し訳なく感じる。

「でも大都庶樺菜と紅美鈴はかなり胡散臭くないですか？文献を漁れば数百年に渡って名前が出てくるらしいですし。ただの作り話なんじゃないですか？」

「ところがどっこい、その二人は実在するのさ。見てきた私が言うんだから間違いない」

ところがどっこいと今時言う人はいないのでないだろうか。というか“見てきた”どころか本人目の前にいるからね。

「ええ?!でも数百年も生き続けるなんて人間業ではありませんよ」「そう、人間ではないのさ」

「と、いう事はまさかパチュリーさんが……?」

「流石、鋭いねえ。その通り、ぱっちゃんが大都庶樺菜なのさ。早苗には勝てないと言った意味もわかったかい？」

「まさか、そんな大物だとは思いませんでした。しかし大都庶樺菜は紅美鈴とともに五百年ほど前に突然姿を消したはずでは？」

「そのあたりの事は中でゆっくり話しましょう。もうすぐ夕飯時だし私が作りましょうか？」

「ああ、そうしてくれるとありがたいね。でもいいのかい？家で働いても給料は出せないよ」

「良いのよ。住む場所を借りるだけの居候になるつもりは無いわ。さて、早苗ちゃんもキリの良いところで掃除を引き上げて頂戴ね」

夕食を作るのも久しぶりかもしれない。これから住む場所は確保できたからあとは二柱を説得するだけだ。

早苗 side

夕飯はパチュリーさんが作ってくれた。私を作るよりはるかに美味しかったのは少し悔しい。しかし何処か懐かしい味がしたのはやはり彼女が長く生きてきたからなのだろうか。

彼女は元々ヨーロッパの魔法使いの家に生まれた生粋の魔法使いらしい。十五の時に家を出て旅に出るようになり砂漠を超えた中国の方で死にかけていた際に美鈴さんに助けられて行動を共にするようになったらしい。

ヨーロッパから中国、そして日本に来たことを考えても彼女の言語能力はかなりのものだと思う。その頭を私にも分けてほしいものだ。突然姿を消したのもただヨーロッパに帰りたくなっただけかららしい。

かなりの長い間を日本で過ごしたようだが、その中でも諏訪での滞在期間が最も長かったらしい。自分の事でもないのに少し誇らしい気分になるのはどうしてだろうか。

そういえば守矢神社にも大都庶樺菜と紅美鈴に関して記述された書物があったような気がする。

「パチュリーさんはこの神社で巫女をしたことがあったんですよ。残っている書物には大都庶樺菜が巫女として神に仕えた記録があるのですが」

「懐かしいわね。それは私がまだ来たばかりの頃ね。その時の巫女は今まで生きてきた中で唯一私が師と仰いだ子よ」

「まああの頃から家事は大概できてたわよね。料理の腕はかなり上がったのかしらね。あの頃の味をもう覚えていないから何とも言えないけれど」

「料理の腕は確実に上がったわね。あの子の修行はかなり厳しかったから。そもそも彼女があそこまで厳しくしてきたのは諏訪子、あなたが言ったからよ?」

「さあて、記憶にないね。まあおかげで上達はしたでしょう?」

「はあ」

諏訪子様も神奈子様も随分と楽しそうだ。それはそうか、再会がおよそ千年ぶりともなれば話が弾まないはずが無い。

それに最近ではお二柱が話ができること自体少ないこと。久々に私以外の人と話すのも楽しいのだろう。私の入る場所はないし洗い物でもしておこう。

諏訪子 side

早苗が洗い物に行ったみたいだ。ぱっちゃんが何故今ここに来たのかを聞いておかなければならない。

「ねえ、ぱっちゃん。あんたは何故今更ここに来ようと思ったんだい? あんたは幻想郷とやらに住んでいるんじゃないのかい?」

「幻想郷の事は知っていたのね。その通り、私は幻想郷にすんでいるわ。私がここに来た目的はあなたが消えてしまう前にこちらに引き込むため。諏訪子の事情も分からないことは無いわ。あなたはこの地の土着神だから簡単には離れられないのよね。」

でもどうしてわざわざ早苗ちゃんが何処かへ行ったタイミングでその話を振ってきたのかしら」

「そりゃあ早苗はこつちの世界に残るだろうから変に話を聞かれない方が良くと思ったんだよ」

「あなたはもうわかっているでしょう？あの子の異常にあなたが気づいていないはずが無い」

その通り、勿論気づいてはいた。少し前から早苗に神性が付いている、すなわち現人神になってしまっていることに。神の血を引く子が必ずしも神性を持つとは限らない。

むしろ持たずに一生を平凡に終えてしまう子の方が圧倒的に多い。だから今までも私の姿を見る者は少なかった。早苗には生まれた時から神になるかもしれない運命があった。

それが今現人神となってしまうた。普通の子ならこの世界に一人残しても問題なかっただろう。しかし現人神になってしまった以上、早苗も消滅してしまう未来があるかもしれないのだ。

私はどうすればいいのだろうか。我が子のようにかわいがった一人の風祝を取るか、この地に対する愛着を取って消滅するか。

「ひと月ほど考えさせてくれ。きつと答えは出す」

「……………そう、分かったわ。ではこの話はお終いね。何か楽しい話でもしましょうか」

「はあ、私はどうすればいいんだろうか」

あれからもう三週間。一人で縁側に座って考え事をするが一向に考えがまとまらない。困ったものだ。

「ため息なんて吐いて少しは楽にしたらどうなの？」

「うわっ、なんだばつちゃんか。いつからいたの？」

誰もいないと思っていたのにいつからいたのだろうか。

「今さっきよ。それにしてもあなたはまだ深く考えていたのね。決断なんて簡単じゃないの。あなたは昔稔里とした約束を忘れてしまったのかしら？」

稔里との約束……ああ、そうか。なんと簡単な決断だったのだろうか。今まで考えていたことが馬鹿みたいに思える。

「そうか、決めたよ。私も幻想郷に行くよ。早苗も一緒にね」

「良かったわ。いつ行くのかはあなたたち三人で話し合って決めて頂戴。早苗ちゃんにもしつかり幻想郷の事は話しておくのよ」

~~~~~

『久しぶりだね、稔里。今代の巫女に会うのも二回目になるけどどうして諏訪こたけに来たんだい？』

『お二柱にご挨拶をしようと思ひまして。今まで以上に本気で修行をしたいと思つたんです。だから当分会う事ができなくなつてしまふんです。でも天人になることができたらきつとまた会いに来ます。それまではどうか元気で過すごしててくださいいね。』

いつになるかはわかりませんが必ずまた会いに来ますよ。それまではお別れです』

『そうかい。それはかなり寂しくなるね。でも安心して行つてきな。そして天人として帰つてくるんだよ。じゃあまた会う日まではさよならだね』

~~~~~

約束は人を縛り付ける枷になるときもある。でも今回はそうはならなかった。この町は好きだが私は私を信仰してくれている二人のために行動させてもらおう。

奇跡的第四十六話

パチユリー side

諏訪子が乗り気になってからは一気に準備が進んだ。早苗ちゃんにも話はしっかりとしていたようで安心した。彼女も今の環境で一人生きるより、新たな環境で二柱と暮らしたかったようだ。

転移するにあたっては主に私がするつもりだ。ただ問題は何処に転移されるかわからないということだ。紅魔館のある座標から幻想郷の座標は大体割り出せるのだが、狭くも広い幻想郷のどこに着くだろうか。やはり妖怪の山なのだろうか。

私のうろ覚えの座標で妖怪の山に転移したならそれはもう運命としか言いようがない。まあ妖怪の山に着いた方が二柱の信仰も集まりやすいだろうしその方が良いだろう。

「いやー、知らない土地に行くなんて楽しみですね。引越しなんて縁がないと思っていましたよ」

「私もそう思っていたけどね。神生何があるかわからないものだね。でも燥ぐのもそろそろやめて早く寝な。明日は早いんだから」
「そうよ、早苗ちゃんにも重要な役割があるのだから途中でへばらないように早く寝なさい」

「そうですね。寝付けるかわからないですがおやすみなさい」「おやすみ」

いよいよ引越しは明日に迫っている。明日の朝ごはんはパパと食べられるおにぎりが良いだろう。まさか行きも帰りも早朝になるとは思っていなかったが。

幻想郷で生活する三人にはスペルカードルールの話はしてある。神遊びとしては十分な遊戯だろう。各々自分に合ったスペルを考え てくれたみたいで良かった。早苗ちゃんのカードに一つ気になるも

のがあつたけど。

「今日が終わればもうあなたはここへは戻ってこられないかもしれないわよ。色々見て回らなくても大丈夫なの？」

「ああ、見ておきたかったところは昼間に見て回ったしね。神奈子も一緒に」

「そう。…やはりここを離れるのは寂しいのかしら？」

「勿論だよ。どれほどこの地に住んできたと思っているんだい。生まれたのもここだしね。でもいいんだよ、これは私が決めたことだからね」

「あなたは強いよね。その精神のあり方、やはり妖怪とは対極に存在するのかしらね」

「神だからね。さて、私ももう寝るよ。明日は何時に出発するんだっけ？」

「五時くらいよ。寝過ぎさないように気を付けて頂戴よ」「任せなくて、じゃ、おやすみ」

皆が寝静まった。真夜中の境内には秋を思わせる虫の音が響いていてとても素敵だ。夜中の神社は不気味なものだという印象が強いが、実際そんなことは無い。

神社という神域に入った時点で妖怪の力は減らされてしまう。幽霊に至っては無害なものの方が多いので怖がる理由もない。幽霊移民計画によって顕界に連れてこられた幽霊たちも既にほとんど冥界に戻されて転生しているはずなのでそもそも数が多くないし。

外の世界で過ごして数か月経ったがやはり私には幻想郷が合っていると改めて感じた。薬もかなり多めに持ってきておいて正解だった。こんな生活を続けていけば薬の消費が速すぎて嫌になってしまふ。この薬しか作れないが作るのは面倒なのだ。

帰ったら永琳を頼ろうかな。丁度冬にはレミイたちは館からいな

くなってしまうし。

日の出の時間も随分と遅くなってきたものだ。前までは四時くらいになったら明るくなり始めていたというのに。

「おはようございます、パチユリーさん」

「おはよう、早苗ちゃん。かなりよく眠れたみたいね。良かったわ」

「楽しみで眠れないかと思っただらそうでもなかったですね。神奈子様と諏訪子様は？」

「彼女たちならまだ寝ているわ。そろそろ起こそうと思っただけけれど、早苗ちゃん起こしてきてくれるかしら？」

「ええ、大丈夫ですよ。では朝食の準備をお願いします」

朝食とは言っても私が作るわけではない。今朝はレミイ特製のおにぎりだ。腐ることが無いのの良いことに今まで残しておいたのだ。

「うわあ、何このおにぎり。今まで食べたどの料理よりも美味しいかも。ぱっちゃんが作ったの？」

「いえ、温かくないでしょう？このおにぎりは料理の得意な友人が作ってくれたものよ。滅多に食べられる味じゃないからよく味わって食べなさいね」

レミイが基本的に紅魔館の住人以外に料理を振る舞わないのは体裁もあるのだろうが、無駄に紅魔館を訪れる人を増やしたくないというのもあるのだろう。

妖怪は恐れられなければ力が落ちる。だから紅魔館は悪魔の館であり続けなければならないのだ。レミイの料理を食べに人が大勢来るようになってしまえば紅魔館の妖怪全員が人間になめられることになるかもしれない。

妖怪側も色々大変なのだ。今のところレミイの料理の味を知っているのは白玉楼の二人とアリスくらいだろう。紫は食べたことは無かったはずだ。そもそもレミイと紫の相性はそれほど良くなさそうだし仕方ない。

「味わいたいけどもう出発する時間でしよう？ぱっちゃんと早苗で術式を起動するのよね」

「ええ、そうよ。私の術式だけだとあなたたちにとって重要な目の前の湖は恐らく転移できないからね」

「私にそのような大役が務まるでしょうか。なんか不安になってきました」

「大丈夫よ、早苗。貴女は奇跡の申し子なのだから失敗するはずが無いわ」

「そうだよ、早苗。それにあんたは札に力を籠めるだけ。簡単な事だろう？」

確かに早苗ちゃんのこととはそれだけだが籠める力が弱いと術式が上手く発動しないからかなり重要な役ではある。

「では早速術式を展開するわ。こういうのは形式が大事だから余計な茶々は入れないで頂戴よ」

「しないよ。私たちだって自分の存続がかかっているんだ。よろしく頼むよ、早苗も」

「はいっ！お任せください。えーっと、確かここは…できましたよ、パチユリーさん。しかしもうこの世界ともお別れなんです。特に未練はありませんが」

「そうかい？私はまだやりたかったことがあるけど。住民と話をす

るとか…まあ夢物語さ」

「それくらいの方が新天地に向かうには良いと思うわよ。次の地は今までできなかったことができる地なのだから」

「そうよ、幻想郷では好きなことをやりなさい。それじゃあ術式を起動するから何かにつかまって頂戴。かなりの衝撃が来るでしょうから」

こうなることがわかっていたらこの魔法も改良ができていたかもしれないが、予想だにしていなかった事態なので結局昔使った魔法をそのまま使う事になった。

正確には魔法に早苗の奇跡の力を取り入れたものだけけれど。ここ数か月はこの魔法の研究ばかりをしていたから手違いはないはずだ。

今回早苗に起こしてもらった奇跡はかなり大掛かりな物だったので予め数日間にも渡る詠唱をして特製の札を作ってもらった。そのお札に力を籠めることで術式が完成する仕組みだ。

数日間にも及ぶ長い詠唱は普通の人間ではまずできないだろうし、私にも絶対にできない。この術式が起動できるのは早苗ちゃんのかかりの努力のおかげなのだ。この努力も偏に諏訪子と神奈子のためだと思うと二柱とも相当に愛されているなあ、と感じる。

紅魔館と同じように勢力というよりは家族に近い。まあ早苗ちゃんと諏訪子、レミィとフランドールなんかは血がつながっているけれど。

大きな衝撃。次に目を開けたら景色は様変わりしているだろう。早朝でまだ明るくなりきってはいないが天狗にはすぐに見つかってしまうだろう。

少しばかり変装をしておかなくては面倒に巻き込まれてしまう。私は妖怪の山への干渉はしたくないし、するつもりもない。早く館に帰りたいものだ。

「あつ、見てください、神奈子様！諏訪子様！一面紅葉でとてもきれい

ですよ！」

やはり妖怪の山に着いたか。こうなることは運命によって定められていたことなのだと改めて実感できた。

「おお、懐かしい空気だね。ここが幻想郷であっているのかい？ぱっちゃん」

「ええ、ここは間違いなく幻想郷よ。ここは通称妖怪の山。そろそろ天狗が来るでしょうから部外者の私はもう帰っていいかしら？」

駄目だと言われるとかなり辛いのだが…。

「ええ、構わないわよ。あとは私たちで何とかしておくわ。ここに来られたのもぱっちゃんのおかげよ。ありがとう」

「そんなことは無いわ。早苗ちゃんあの努力があつてこそでしょうか？存分に労つてあげなさいよ。ではまた落ち着いたら会いましょう」
良かった。ささつと館に帰ることにしよう。それにしても幻想郷の空気つてこんなにも綺麗だったのか。当たり前前の事だと思つていたけれど案外ありがたいものだったようだ。

文 s i d e

何か騒がしいと思つて使いの鴉を飛ばして様子を探らしてみると昨晚まではなかったはずの神社と湖が現れていた。こんな大掛かりな引つ越しはパチュリー様や美鈴様が幻想郷にやってきた時以来ではないだろうか。

神社が来たという事は外の世界で信仰を失い、弱り切った神がやってきたというわけだろう。それだけの神なら大天狗や天魔様に良いように弄ばれるだけだと思うがどうなるのだろうか。

鴉によると神社から一人出て行ったらしい。私なら十分に追いつける距離と速さだ。早速取材を申し込んでみるか。

ふむ、外から来たばかりとは思えない程に飛行慣れしているように見える。神力は感じ取れないが巫女というわけでもないような気が

する。神社関係者なのは確かだと思うのに。

「失礼します。私新聞記者をやっております、射命丸文と申します。お時間はありますか？」

「げっ」 げっ、って何?! 初対面のはずなのにいきなりそれはひどすぎる。

「いきなりそれはいくら何でもひどすぎませんか? 初対面ですよね」

「あ、あー、もう面倒だし良いわ。私よ、私。久しぶりね、文」

「ええ?! パチユリー様? どうしてあの新しく来た神社から出てきたのですか?」

「私とあなたの仲だし話しても問題はないのだけれど、記事にはしないと約束してくれるかしら?」

まさかパチユリー様にそこまで信用されていたなんて。感激だ。

「わかりました。それに約束を破れば後が怖いですし」

「そんなに残酷な事するわけじゃないの。精々私と美鈴の二人であなたの家を襲撃するくらいだわ」

だからそれが恐怖以外の何物でもないのだ。パチユリー様なりの冗談のつもりなのだろうか。肝が冷えるからやめてもらいたいものだ。

彼女の話をまとめると彼女はここ数か月間外の世界に行つて今朝来たばかりの神たちと何やら交流をしていたらしい。道理でここ最近見ないと思っていたわけだ。

その神たちは外の世界で信仰を失い消滅の危機にあつたらしい。相対的に力は弱くなっているが、絶対的な力は今でも相当のものらしい。本当に神というのは厄介なものだ。天狗はこれからどう付き合つていくつもりなのだろうか。

大天狗や天魔様の決定に従うだけの私たちにとってはどうでも良

いことだ。気にしている者はいるかもしれないがどうせ上の決定は絶対な物なのだから変に考えるのもバカバカしい。

「さて、私が話せるのはこのくらいかしらね。帰っても良いかしら？」
「ええ、どうぞ。最近何やらレミリアさんたちも面白そうなことをやっているみたいですよ」

「そう、いよいよなのね。ありがとう。文もこれから大変になると思うけれど身体には気をつけなさいよ」

「お気遣いありがとうございます。ですが心配いりませんよ。妖怪の身体は丈夫なので」

「私が心配しているのはむしろ精神面よ。妖怪の精神は脆いからね。ではまた館にいらっしやい」

「はい、また遊びに行きますね。ではまた」

とりあえずあの神社の監視は権にでも任せておけばいいだろう。あの子はふざけてばかりいる白狼天狗たちの中では非常に珍しい真面目な天狗だがどうも堅物すぎる。

油断が無いのは良いことだがもう少し心にゆとりをもって生活してもらいたいものだ。たまに河童や厄神と一緒に彼女が追加した新しいルールで将棋をしているところを見るが娯楽といえるものはそれくらいなのではないだろうか。

休暇をやっても良いが彼女自身が断ってくるだろう。真面目な部下だからこそ逆に困ることになるとは全く思ってもみなかった。

「おい、射命丸！大天狗様が貴様をお呼びだぞ！さっさと出てこい」

「はあ？何故私が呼び出されるんです？悪いことをした覚えはないのですがねえ」

「そんなもん知らん！いいからさつきと出向くんだ」

乗り気はしないし何故呼ばれたのかも皆目見当がつかないが大天狗に呼ばれたのなら行くしかないだろう。折角ゆつくりできると思っていたのに。

大天狗の屋敷なら飛ばせば数秒で着くからそこまで急いで家を出る必要はなかったかもしれない。もう着いてしまった後だけだ。

「失礼します。何か御用でしょうか、大天狗様」

「山の現状は知っているだろう？まったくあの神たちはいったい何がしたいのだ」

愚痴を聞かされるためだけに召喚されたという事はないだろうな。

「あの一、大天狗様？御用は？」

「ああ、すまん。どうやら侵入者が来たようなのだ。犬走が交戦しておるところだから貴様も応援に行つてやれ。上司として当然だろう？」

「ええ、そうですね。では行つてきますよ」

面倒事しかない。精神的に疲れてきたがこれもパチュリー様にはお見通しだったのだろうか。数日たってようやくわかる日が来るとは。あの方は一体どこまで先を見ているのだろうか。

どうやら権はやられたらしい。侵入者は先に進んでしまったようだ。追いつくのは容易いが権を倒すくらいの実力はあるというわけか。

「あやややや。侵入者の報告できてみればまさか貴方とは」

博麗の巫女か。これは権には分が悪かっただろう。

本気でかからないと勝てる相手ではないかもしれないが本気で戦うような事はしない。天狗の誇りと美鈴様達への憧れによって。

「手加減してあげるから本気でかかってきなさい！」

弾幕ごっこという遊びによつて人間は異変を解決しやすくなったし、妖怪も異変を起こしやすくなった。その結果としてほとんど毎年のように異変が起きる幻想郷になった。

私としてはネタになるものが多いのでありがたい。新聞の発行頻度も少し上がった…と思う。

正直これが遊びという事で少しなめていたこともあったし、何より巫女の実力をなめていたこともあって結果は敗北だ。彼女なら強大な力を持つ神相手にも後れを取ることは無いだろう。

今代の巫女はまだまだ青いと思つていたけど数々の異変を経て確実に強くなっているようだ。まあまだ十年少ししか生きていないからこれからも成長はしていくのだろうか。

負けたら私にすることはもうない。あとは異変が解決されるのを待つて取材を敢行するだけだ。

だがその前に権の手当てはしてやらなければならぬ。最近たまたま仕事を頼んでしまつてから少し好感度が下がつてしまつていくかもしれない。上司はたいてい嫌われ役だからそれでもかまわないんだけど。

帰館的第四十七話

パチユリー side

「お帰り。今朝帰ってくると思っていたわよ」

「ただいま。思っていたのではなく能力で見て確信していたのでしょうか？」

帰ったら一番にレミイに迎えられるとは思ってもみなかった。確かに彼女は早起きだが初めに会うのは美鈴だと思っていたからかなり驚いている。

「やっぱりパチエにはすぐにばれるか。まあいいわ、帰ってきて早々で悪いんだけど皆を起こしてきてくれるかしら。私は朝食の準備をしているから」

「構わないわよ。それにしてもこの時間に美鈴が起きていないなんて珍しいこともあったものね」

「ああ、美鈴なら寝ているんじゃないかと図書館にいるはずよ。貴女が出した課題に関して咲夜に手伝わされているみたいね」

「あらあら、それはお気の毒ね。三段の筒を見つけるのにかなり苦労しているようね。あの子は良くも悪くも頑固だから柔軟に考えられないのね」

「なんだ、パチエはもう答えがわかっていて咲夜に課題を出していたの？」

「ええ、でもそろそろ彼女自身が見つけてきてくれると信じているから何も口出しはしないけれど。咲夜が美鈴以外を頼り始めれば解決はすぐでしょうね」

「すべては貴女の手の上ってこと？」

「違うわ。私は単に彼女の成長が見たいだけよ。あの子にも気軽に相談できる人間の友人を作ってほしい、レミイもそう思うでしょう？」

「まあ確かにね。咲夜の交友関係は人間にしては狭すぎる気がするもの。ま、私は無事に月に行ければ何も言う事はないわよ。じゃあ皆を起こしてきてね」

「心配無用よ。久しぶりのあなたの料理楽しみにしているわよ?」「任せとおきなさい」

朝のおにぎりは持って行った数の関係上私は食べていない。惜しいことをしたとは思うが、食事の必要ない私と必要である早苗ちゃんなら優先順位というものがある。

とりあえず皆を起こしに行くか。図書館は最後でいいだろうからまずは上階のフランドールからだ。昔と違って最近では地下に行くという気も無くなっているようだ。良いことである。

あれからは特に何もなく数日が過ぎている。唯一変わったことといえば異変といえるかわからない神社同士の戯れが終わったことくらいか。

結果は勿論霊夢が勝って終わったらしい。文の新聞に守矢神社の事が事細かに書いてあった。あの二柱相手によくこれだけの取材を行えたものである。恐らく私の名前が出たのであろうところは“Oさん”となっていた。

これならば今回の事を詳しく知っている紅魔館組と守矢組、八雲の二人くらいしか特定できないだろう。

何はともあれ守矢の方も天狗とよく話し合いをしているようで、今のところ妖怪の山に物理的な争いごとは起きていないようだ。

ロケットの方はというところや咲夜が館の外を頼り始めたところだ。香霖堂に行つて本を探しているようだが、あそこに置いてある本はほぼ全てが外来本、つまり外の技術の本なのだ。

外の技術は幻想郷ではほとんど活用できない。しかし外の世界では活用できない神の力が幻想郷では活用できるのだ。ヒント無しでこれに気づけたら凄いが流石に無理だろうからヒントはいくつか与えたつもりだ。あとは神を正しく理解している者の下へたどり着く

かどうか。

咲夜なら私の期待通りの働きをしてくれるだろう。レミイたちの月旅行はそこからの本番だ。

レミリア side

パチエが帰ってきて数週間、ようやく咲夜はパチエが出していた課題の答えを得られたらしい。霊夢を頼って博麗神社に行った時にあるヒントから霊夢が思いついたらしい。

咲夜たちを凡人と言いたいわけではないが三人寄れば文殊の知恵とも言うし、やはり誰かを頼るといふ事は大切なのだ。これを機に咲夜には幻想郷の人間たちにも交友関係を広げてほしい。

そんなことより霊夢が思いついた三段の筒というのは三柱の神の事らしい。底筒男命、中筒男命、上筒男命という航海の安全を守ったりする神で、住吉三神と呼ばれるらしい。

上、中、底のまさに三段の筒でさらに航海に関する神なのだ。パチエは初めからこの神の力を頼るつもりで咲夜に課題を出したに違いない。下手をすればそこの巫女よりも詳しいかもしれない彼女のその知識は一体どこから来ているものなのだろうか。

昔神が大きな力を持っていた時代に日本で暮らしていたからなのだろうか。謎は深まるばかりだが考えてもキリがないから割り切るよりほかないのだろう。

そのパチエは今ロケットの制作に着手している。ロケット本体を神社に見立てて作るらしい。この手の事は形式が重要と聞いたことがあるしそれに基づいているのだろう。そのせいで不格好になっていくのだろうか。

「ねえ、パチエ。どうしてこのロケットはこんなに不格好なのかしら？ 貴方ならもう少し格好よく作れたんじゃないの？」

「ああ、この形の事ね。これはうん、まあ私なりのこだわりなのよ。それにあとで下段から切り離していくときにもやりやすいし」

パチエのこだわりポイントがよくわからない。でも普通は二番目の理由が一番に持つてくるものなのに、そうではなかったという事はよほど彼女にとっては強いこだわりなのだろう。

「そう、なら何も言わないけど…」お姉様たち最近何か面白そうなお話をやってるよね」

「あら、フランドールじゃないの。図書館に来るなんて珍しいわね」

「うん。だって最近お姉様とパチュリーたちで何やら面白そうなお話をやっているもの。何をしてるの?」

「レミイたちが月に行きたいそうよ。だから私は行くためのロケットを作っているというわけ」

「月に…?月って行けるところにあるんだ。楽しそう。ねえ、私もついて行ってもいい?お姉様」

「ええ、勿論構わないわよ。むしろ大歓迎ね」

これはパチエも同じことを考えているに違いない。ようやくフランが誰かに聞かれて、ではなく完全に自発的に館から離れて行動する気になってくれた。いつも遊びに行つたとしても湖周辺ばかりのようだから心配していたのだ。

私は姉として、パチエや美鈴らは家族としてこのフランの決意を応援してくれるだろう。それほどまでにとっても嬉しいことだ。

「やったー!ありがとう、お姉様!早速皆に知らせて来ようつと」

「それはちよつと待ちなさい、フランドール。あなたが伝えに行くこと皆も一緒について行きたくなつてしまうかもしれないわ。」

でもそれだけは駄目よ。あなたたちの考えている以上に月の民は強く、そして賢い。力の強くないあなたの友人たちは死んでしまう事になるかもしれないわよ」

「うーん…そうだね。妖精たちは生き返るけど妖怪は生き返らないもんね。自慢するのは館の皆だけにするわ。ありがとうパチュリー」
「私としてもあなたの友人たちが死んでしまうのは本意ではないのよ。悪いわね、フランドール」

「ううん、気にしないで。それでいつ出発する予定なの？」

「出発予定は二月後の三日月ごろかしらね。それまではゆっくり準備しておきなさい」

「はーい、わかったよ。じゃあね！」

図書館の中は走らないように言っているし、いつもは静かに歩いているはずなのに。フランもよほど嬉しかったのだろう。

美鈴は嬉々としてフランの話を聞くに違いない。彼女は聞き上手だから話していて気分が良い。

長く生きていると様々な技術が身につくという。私の場合は料理なのだろう。外の世界は知らないが、幻想郷内では一番であると思いたい。パチエや美鈴は基本的に何でも一人でできてしまうし、他人に気を使って行動することもできる。

私ももう少し生きれば心にそんなゆとりができてくるのだろうか。吸血鬼としてはわがままな方が良いのかもしれないけど。

「それにしてもフランドールが自ら行きたいというとは思わなかったわ。危なくなったらきちんと守ってあげなさいよ」

「ええ、当たり前じゃない。フランの肌には傷一つ付けさせやしないわ」

「過保護ね。でもそれはきつと難しいわよ。言っていないなかったけれど月には恐ろしいほどの実力者がいるわ。数ではなく質の話よ。」

その子がきつとあなたたちを出迎えるでしょう。気をつけなさい、死にはしないでしようがあなたのプライドは傷つくかもしれないわよ」

「こと私の戦闘に関するプライドならはるか前からボロボロよ。主に貴方たちのせいだね。だから安心していいわよ」

「それは安心していい要素なのかしら…。まああなたが言うのなら安心しておくことにするわ」

私としても悲しくなるようなことだが事実なのだから仕方ないのだ。

「ええ。そういえば月に行く前に披露宴でも催そうと思っっているよ。それまでには間に合いそうかしら？」

「全く問題ないわ。でもこのロケットを移動させるのは面倒だからレプリカでもいい？」

「そうね、いいと思うわよ。雰囲気は伝わればいいのだし」

「ま、披露宴を開くのならどうせフランドールの友人たちには計画が伝わってしまう事になるわね。行きたいと言われなことを祈るばかりだわ」

確かにそうだった。まったく考えに入れていなかったがさつき断った意味がなくなってしまった。聞かれたら適当にごまかしておくか。

「そうね。その時にこのロケットの愛称でも付けようと思っているのよ。パチエには何かいい案は無いの？」

「私一人の意見で決めてしまうより皆集まった時に募集した方が良いと思うわよ。そっちの方がきつと良い意見が出てくるわ。あなたに限ってあり得ないと思うけれど、間違えても三神を怒らせるような名前は付けては駄目よ。」

三柱が怒ってしまったえばこの『プロジェクトスミヨン住吉月面侵略計画』は確実に失敗する。わかってるわよね？」

「当たり前じゃないの。それくらいの配慮はするつもりでいるわ。」

しかし不思議なものなのね、日本の神というのは。こんなちやちな

神棚で本当に大丈夫なの？」

まあパチエの事だから全く問題ないんだろうけど。

「勿論よ。それどころかこの神棚さえ必要なく、ただ神の宿る器さえあれば十分なの。日本の神様は少し特殊でね、神霊はいくら分裂しても同じだけの力を持つ。だから神をこのロケットに乗せるよりは巫女を乗せる方が簡単で融通も利くのよ」

改めて聞いてもやはり不思議だ。でも確かパチエの友神は肉体を持つていたはず。

「この間来た神たちはどうなの？彼女たちも分霊させることができるの？」

「肉体を持つ神は自身の神霊を分霊させることができるのよ。まあ神奈子は神霊だから神としての肉体はもともとは持つていなかったと思うのだけれど」

日本の神の事情はかなり複雑らしい。神霊と呼ばれるもので肉体を持つのはかなり有名な者だけらしい。更に神霊は基となる魂が存在する、つまり神になる前の状態があるが八百万の神は純粋な信仰のみによって成り立っているらしい。

見た目も人間がとっつきやすいようにあのような姿をしているだけのようで、分霊として祀られる時には違う姿にもなるらしい。私にはいまいちわからない。

「とりあえず目に見えなくても分霊として宿ってもらうのだから細心の注意は払っておきなさいよ。私は一緒にはいかないんだから」

「ああ、そういえばそんな話からずれていたんだっけ。パチエがいなくても何とかなるでしょう」

「いざとなれば霊夢もいるし安心ね。フランドールの事は全てあなた任せになると思うけれど今の子なら大丈夫でしょう。内部も見た目以上に広く作ってあるから出発の時まで楽しみにしていなさい。咲夜以外の誰にも言っては駄目よ」

咲夜の能力で中身を広くしているというわけか。長旅なら確かに

広い方が快適に過ごせるだろう。

「なるほど、これが女子どもの秘密といわれるやつなの？」

「きつともう少しお上品な言い方だと思うわよ……でもまあそんなところよ。狭そうだと思って入ったら思いのほか広かった、となったらなんだか嬉しく感じるでしょう？」

「私はその感情が湧かないってことよね……。まあいいけどね」

「言わない方が良かったかしら。でもレミイはそのあたりの感情を大きく出してくれないからどちらでも同じではないかしらね」

「それ、本当？自覚はなかったけどそれは悲しいわね。」

「はあ。あ、そうだ。パチエもずっとロケットの事をしていて疲れているでしょう？お茶でも用意してあげるわ」

「あら、相変わらず気が利くのね。当主らしくはないけれどね。でもありがたく頂戴するわ」

「へえ、これは美味しいわね。まさか本当に数か月でここまで味が変わると思っていなかったわ。あなたへの評価をさらに二段階ほど上げないといけないかもしれないわね」

「今までの私への評価どうなっていたの？」

「今までは日本一の料理人だったけれどアジア一の料理人に評価を上げたわ。もしかすると宇宙一なのかもしれないけれどね。少なくとも私は今まであなた以上の料理人は見たことが無いわ」

「嬉しいことを言ってくれるじゃないの。でもこの数か月は本当に頑張ったわよ。昔の言語の勉強の時くらい。おかげで妖夢も幽々子もかなり褒めてくれたわよ」

「どちらも私の不在時じゃないの。そんな例えをされてもわからないわよ」

「まあ大変だったという事よ。さて、披露宴をするのはまだもう少し先だからそれまではゆっくり作って頂戴ね。身体を壊さないように小悪魔にも見張らせておこうかしらね」

「そこまでしなくても大丈夫よ。自分の身体のことくらいわかっていないと今まで生きてこれていないわ」

「パチエの心配をするのは貴女ではなく紅魔館の皆なのよ。そのあたりの事はわかっているの？」

「わかっているわ。私なんかを心配してくれるなんてありがたいことだと思っているわよ」

本当にわかっているのだろうか。まあいざとなれば使う機会の少ない私の当主権限が発動されるだけだけだ。

披露的第四十八話

パチユリー side

ロケットの方はもう既に完成した。今はそれをもとにして今日開かれる披露宴用のレプリカを作っているわけだ。

私は別に不器用ではないがかなり細々した仕事なので、その手の仕事が得意なアリスにも手伝ってもらっている。というよりはアリスの手際が良すぎるせいで八割ほどは彼女が作ってしまったている状況だ。

快く手伝ってくれているアリスには感謝しているが、手伝いを頼んでいるだけだという立場上少し申し訳なくも感じている。

「アリスは本当に手先が器用なのね。本来なら一人で一日かけてするつもりだったのだけれどももうすぐ終わりそうね」

二人で分担しているというのもあるが九時に開始して現在の時刻はまだ十一時前くらい。もともとの完成予定時刻が午後四時くらいだったのを考えるとアリスの働きがよくわかるというものだ。

「私はこういう細々した作業は慣れているからよ。パチユリーも慣れていないとは思えないくらいに手際は良いと思うわよ」

「そうかしら。あなたと並んで作業をしていると全くそうは思えないような気がするのだけれど…。でもあなたのおかげでかなり早く終わりそうで本当に助かったわ。

午後からの予定が特になかったのならパーティーの時間まで紅魔館にいたらどうかしら。昼食の件はレミイにも伝えておいてあげられるけれど」

「良いの？それならお言葉に甘えて午後はここにすることにするわ。今日は一段と寒いしね」

そういえば今日はかなり雪が降っている。夜になれば月明かりが反射してとてもきれいに見えそうだ。雪が止んだら、だけれど。

「わかったわ……こあく、来なさい」「はいはいなんでしようか」

「今日はアリスの分も昼食が必要だとレミイに伝えてきてくれるかしら」「かしこまりました」

こあ程この図書館を熟知している者はいない。役に立たない妖精メイド達は図書館にいられていないため、彼女しかこの本の整理をする者がいないのは確かだ。しかしいつ呼んでもすぐ来てくれるし、本を持ってくるように頼んでも瞬時に取りに向かうほど本の場所まで正確に記憶しているようだ。

魔理沙が盗っていった本が何だったのかすぐにわかるのも彼女のおかげである。もともと力のない悪魔だったせいで彼女も頭腦の方面に努力をしていたのだろう。彼女はきつと「弾幕はブレイン」派であるだろう。

「いつも悪いわね。レミアアの料理も紅魔館住人以外には滅多に出さない」と聞いているのに」

「構わないわよ。この館に訪れている回数は他の人間や妖怪と比べても断トツで一番だし、紅魔館が幻想郷に来た時からの付き合いだからレミイの中では身内扱いにもなっているかもしれないわね。いっそのこと本当に紅魔館に住んでみるかしら？」

「凄く魅力的な提案だけどそれは流石に遠慮しておくわ。レミアアの料理以外食べられなくなるかもしれないじゃない」

「案外そんなことは無いわよ。味にも個性があるから宴会も楽しめるのよ。ま、私の提案自体は冗談だけれど。でも実際レミイはあなたの事を迷惑だなんて露程も思っていないと思うわよ。だから安心してご飯も食べていきなさい。」

夜のパーティー用の料理は流石にレミイは作らずに私、咲夜、美鈴の三人で作るけれど」

「どうせだから私も手伝うわ。かなりの数の料理が必要になるんでしょう？私と私の人形たちで手伝えばあなたたちもかなり楽ができて

るんじやない？」

「何から何まで手伝ってもらって悪いわね。ではそうさせてもらわ」

そんなことを話している途中でもアリスは手を止めていないのでレプリカの方も完成してしまった。どうすればあそこまで器用になれるのだろうか。私には到達できそうもない。

レミリア side

ロケットの完成が近くなってきた最近、パチエにある本を渡された。どうやら日本の神様の事を詳しく書いた本らしい。かなり古い本なのか、パチエが保護魔法をかけた時点では既に劣化していた箇所があるようだ。

何故今この本を渡されたのかはよくわからないがとにかく読んで頭に入れておけ、という事なのだろう。

パチエは私が生まれるよりもはるか昔に月に行ったことがあったらしい。恐らくその時の経験からこの本を私に薦めてきているのだろう。ならば読んで損はないはずだ。そもそもパチエが無駄なものを渡してくるとは思えないし。

この本、読んでみるとなかなか面白い。日本の神々が如何に多く存在するのか、それぞれどのような事ができるのかなどが分かる。もともと私は勉強が好きだ。そうでなければ料理などしていなかっただろう。

しかしいくら神の性質や力などを知ってもそれに対応できるかは別問題である。神というだけあって力の強さは並大抵のものではない。更に吸血鬼にとつての弱点を突かれれば私には対処しにくい。太陽神としての天照や太陽の化身とされる八咫鳥などだ。

日傘以外にも何か持って行った方が良いのかもしれない。そういえば外の世界には日焼け止めなるものがあるんだったか。パチエに頼めば似たような物を作ってくれるかもしれない。

あれから少し経つてもう今日は披露宴当日だ。アリスの分の昼食を作らなければならないのも想定外でも何でもない。パチエがアリスに手伝いを頼んだことを知っていればアリスが一日中館にいるであろうことは大体想像がつく。

最近は何に關する知識を失わないように、本の内容を思い出しながら料理をしている。そのおかげで内容はほぼ完璧に頭に入っている。日焼け止めの件もパチエが作ってくれらしい。流水はパチエでもどうしようもないらしい。薬で対処できるようなものでもないし。

昼食も終わって今日はもう披露宴を楽しむだけだ。ディナーはパチエ達に加えてアリスも手伝ってくれらることになったらしい。ただパチエの手伝いとして呼ばれただけに館の手伝いもしてくれろとはなんとよくできた子ではないだろうか。

パチエに聞いたところロケットのレプリカはアリスがほとんど作つたらしい。パチエの想定していた時刻よりもかなり早く終わってしまったようなのでディナーを作り始める前までは二人で何やら魔法の特訓をしていたみたいだ。

しかし毎度のことながらアリスの器用さには感心させられる。たまにお茶をしに行った時にも人形にすべてをやらせているように見せて実はアリス自身が全て操作しているそうだ。パチエ曰くアリスの常人離れた器用さがあるからこそできる芸当で、いくら魔法が上手く使ってもパチエではアリスのように扱えないらしい。

確かに私ならあの数の人形に別の動きをさせようと思つたら頭がパンクしてしまうだろう。どうやらそれはパチエも同じらしい。

今はもうパチエ達が料理を始めていて私のすることといえば本を読むくらいだ。だから図書館で神についての本を新しく読み始めている。もうパチエに渡された本は読み終わったので小悪魔に頼んで持ってきてもらった。

パチエの予想では霊夢の他に魔理沙も恐らく着いてくるという事なので、ロケットの中ではゆっくり本は読めないだろう。だから今の

うちにできる限り読んでおきたいところだ。

招待状はかなりたくさん出しておいた。来るかどうかは自由だが、宴好きの多い幻想郷だ、大広間はいっぱいになるだろう。客が来始めるまで恐らくあと一刻ほど。そろそろ私も出迎えと私自身の準備を始めなければならぬ。

フラン用のドレスも咲夜に作ってもらっているのだが着てくれるだろうか。お揃い、というわけではないから恥ずかしくはないと思うけど。

永琳 side

地上に降りてきた玉兔を月に送り返してからもうかなりの時間が経った。手紙を持たせているから彼女自身は大丈夫だろうが手紙は誰の手に渡るかわからない。そのための保険として量子印までつけておいた。これで私が彼女たちにできることはもうないだろう。

あれからすっかり季節も移ろい今はもう冬だ。今日も雪がよく降っている。今夜は吸血鬼の館でロケットのお披露目会をするらしく、輝夜も楽しみにしているようだ。

因みに私含め永遠亭の面々はロケットの外観だけは知っている。パチュリーが外の世界に出ていたらしい時期に一度こっそり見に行ったことがあった。

構造自体はほぼ完ぺきだったが私の目的のためにも月にたどり着いてもらわなければならなかったため小細工を施しておいた。きつとパチュリーなら既に気づいているだろう。

月の頭脳といわれる私でもパチュリーの考えはいまいち読めない時がある。最近も永遠亭に来て輝夜と何か話をしていたようだ。

彼女は一度月に行ったことがある。聞いた話によると私の弟子二人はきちんとなすべき仕事をしているようだ。勝手に屋敷で^{地上の者}パチュリーを匿っていたと聞いたときは「またか」と思ったが、話を聞く限り私のいた頃よりは成長していると思う。

月と地上を結ぶ者としてももう少し慎重であってほしいものだがこれら彼女たちの性格なのだろう。変えられないものは仕方がないと割り切るしかない。

「お師匠様？そろそろ出かける時間ですが」

「あら、もうそんな時間だったのね。分かったわ、今から準備（といっても片付けるだけ）するから少し待っていてもらえるかしら」

「はい、大丈夫ですよ。では姫様たちと玄関先で待っていますね」

ウドンゲなんかは大丈夫だろうが輝夜はあまり待ちたくないだろう。急いで準備をしなければならない。

「お、ずいぶんと早かったね」

やはり妹紅と慧音も一緒だったか。何故かてゐ以外の妖怪鬼たちまで勢ぞろいしているのはよくわからないが。

「ええ、あまり待たせるのも悪いでしょう？それに準備といっても特にすることは無かったもの」

「そんじゃ、出発するとしますかね。お師匠様が予定より早く来たせいでまだ門は開いていないかもしれないけどね」 「うふふ、門が開いていなければ永琳のせいね」

「こらこら二人とも、あまり永琳を弄りすぎない方が身のためだぞ」

「相変わらず慧音は真面目だなあ。こんなことで怒る様じゃ永遠亭ではやっていけないと思うよ？まあ鈴仙ちゃんですストレスを発散しているのかもしれないけどね」

「ちよ、ちよっとやめてよ。また思い出しちゃうじゃないの。うっ、頭

が痛くなってきた……」

……
ウドンゲには定期的に頭痛薬を渡しておこう。

「あらあら、鈴仙はいつもそうだね。もう少し強くなりなよ、精神的にさ」

「それとこれとは話が別よ。まああんたたちみたく永いこと生きてれば少しは変わるのかもしれないけど」

そんな話をしながら移動していたらようやく紅魔館が見えてきた。どうやら既に何人かは来ているようで門はすっかり開いていた。

「皆招待状を出しておきなさいよ。彼女のいる門を無断で突破するのは骨が折れるでしょうから」

「へえ、お師匠様がそこまで言うほどの妖怪なの？そうは見えないけどねえ。ま、怒ったら怖そうではあるね」

確かに彼女はいつもニコニコしているから強そうには見えないのはわかる。

「いつも宴会では一緒に料理を作ってくれたりお師匠様たちと話したりしている方ですよ。美鈴さんの戦っている姿は見たことがありますませんが」

「そういえば私も見たことが無いな、昔はよく一緒にいたものだが。慧音は？歴史に詳しいんなら何か知っているんじゃないの？」

「いえ、彼女はかなり古い妖怪ですので私が見てきた歴史では全然足りません」

「ふーん、じゃあ美鈴が戦っているのを見たことがあるのはこの中では私と永琳だけなのね」

「あの時はほとんどパチュリーだけで完結していたじゃない。美鈴は撃ち漏らしにとどめを刺していただけで」

あれはほとんど戦いとは呼べないだろう。だから私も美鈴の本来の実力はわからない。しかしパチュリーやあの八雲紫でさえ認めているほどの実力者である。戦って負ける気はないがこちらも本気にならなければならぬだろう。

幸い彼女の性格上戦闘になることはほとんどないしそもそも戦闘する理由もない。

「おや、永遠亭の皆さんに慧音さんと妹紅も一緒だったのですね。素性の分かっている人への招待状なんてただの飾りですからどうぞお入りください。どうせその兎さんたちの招待状も偽物でしょうし」
結局妹紅は呼び捨てすることにしたのか。まあ妹紅としても子供だった頃の知り合いからいきなりさん付けされるのは気持ち悪かったのだろう。

「なくんだ、ばれてたのか。結構自信作だったのになー」

「二応出した相手と枚数くらいは記憶していますからね。まあどうぞお入りください。広間には既にパチュリーやお嬢様たちもいますから」

大広間が埋まった辺りで披露宴が始まった。レミリアによる月侵略計画の説明やロケットの愛称募集などがあった。私の案を魔理沙に提案させたらそのまま通った。

レミリアの話を真面目に聞いている者は少ないようだ。彼女の妹でさえ食事に夢中で聞いていなさそうだし。パチュリーの話では他

人との付き合いが苦手だったと聞いているが既に克服できたのだろう、レミリアとは少し意匠の異なったドレスを着ているが楽しそうに友人たちと話をしている。

参加者はかなり多い。閻魔まで参加しているとは思わなかった。しかし式神二人は参加しているのに八雲紫は不参加のようだし冥界の二人もかなり早く帰ったようだ。

「やっと見つけたわ。あなたの服は目立つけれど、この中ではそれすら助けにならないわね」

「あら、パチュリーじゃない。また月に行くとは八雲紫は何を考えているのかしらね」

「さあね。でも今回の目的は前回と同じではないと思うわよ。事实は本人しか知り得ないけれど。そうそう、ロケットの名前、あれには何か意味があったのかしら?」

私が考えたとばれていたか。本当にパチュリーの事はよくわからない。

「いいえ、特にはないわよ。ただあのロケットの動力には住吉三神の力を使うのでしょうか?」

「だから三つで一セットな名前にしたというわけ?」 「まあそんなところよ」

「それにあなたが住吉三神の事を知っているのは最近また忍び込んだからかしら?」

「あらあら、それもばれていたのね。まあ悪気はなかったのよ。ただ進捗を見に来ただけ」

「それは別に構わないのだけれど。私に言えばいつでも入れてあげるのに。ああ、そう。あなたの小細工は助かるわ。確実に月にたどり着くことができるようになるから」

「それは良かったわ。それで出発はいつなの?」

「三日月の日よ。月の都に侵入できる日から逆算すればその日が最も良いもの」

この辺りは昔月に行った経験からだろう。

「レミリアたちには何かお土産でも頼んでいるの？」

「ただだけれど………そうね、イルメナイトでも頼もうかしらね。前に輝夜に見せてもらった優曇華も悪くはないけれど私には育てられそうにないからね」

前に輝夜と話していたのはこのことだったのだろうか。

「まあ永琳も楽しんで頂戴ね。まだまだ夜は永いのだから」「ええ、そうね」

かつて月に迷い込んだ人間を保護してしまった姉妹は有無を言わず追い返すことができるようになったのだろうか。かつての私は殺すのが最善だと言ったがああ二人ならそうすることは無いだろう。

冷淡に見えて実は優しい。その優しさが自身を滅ぼさなければいけない。

圧倒的第四十九話

レミリア side

いよいよロケットが発射される段階になった。結局ロケットに搭乗しているのは私と咲夜、フラン、霊夢、魔理沙。あとは役に立つかはわからないが妖精メイドを三人ほど呼び戻して連れてきた。

中は咲夜の能力で広げられていても広い。私と咲夜以外は皆大層驚いているようだ。切り離れた後の最上段でも十分な広さがある。半月ほどの船の中で過ごすことになるが特に困ることは無いだろう。

「おい、あいつら外で何やってるんだ？」

「この船は空飛ぶ神社だから何か祈願でもしているんじゃないの？明らかに作法に則っていない感じはするけど」

発射する場所は図書館。なんと天井部分が開く仕組みになっていたらしい。図書館に元々付いていた機能なのかパチエが付けた機能なのかは知らないが、私が知っているうちでは改造していないようなので元から備わっていたのだと思う。

皆が乗り込んだところでいよいよ発射だ。月とはどのような所なのだろうか。パチエに聞いても『幻想郷には無いものがある』としか教えてくれなかったからきつと楽しみは後に取っておけ、という事なのだろう。

霊夢は神棚の前で何やらブツブツ言い始めたし、咲夜ものんびり紅茶を淹れようとしている。案外船の中でも落ち着いて本が読めるかもしれない。

「ちよつと魔理沙！それ私のクッキーよ！」「へっへん、早く食べない奴が悪いのさ」

……………フランと魔理沙が眠れば落ち着いて本が読めるか

もしれない。仕方が無いから外の景色でも眺めて暇を潰すことしよう。

「しかしこんなに高いところから地上を見ることは無いから新鮮でいいわね」

「ええ、そうですね。それに私は普段は地上を見ながら飛ぶことは滅多にありませんし」

「もう少し心に余裕を持ちなさい。そうすれば四季折々に変化する幻想郷の景色をゆっくり眺めながら飛行できるわよ。外にいた頃と違って自然がとても多いからおすすすめよ」

「そうですね、努力いたします」

心に余裕を持たせるために努力をするのは少しおかしい気もするが何も言わないでおこう。

「フランも魔理沙も騒ぐのはほどほどにしておきなさいよ。霊夢の集みが切れたら一大事なんだから………」 「はい」

「はいはいっと。しっかし半月もここにしていると大丈夫なのか？ 食事とか」

「一応食料は多めに持ってきているつもりよ。お嬢様と妹様は最悪何も食べなくても半月程度なら問題ないでしょうし」

「ほお、妖怪ってのは便利なもんだな」

「まあ食料が足りなくなってきたときに優先的に量を減らすのは貴女からでしょうけどね」

「そりゃ酷いぜ。流石は悪魔のメイドだな、いつも姉妹を最優先か?!」
「当たり前でしょう? 私は紅魔館のメイド。主人を優先しない従者などいませんわ」

こうして見ると咲夜も随分と気を許せる友人ができたようだ。一先ずは安心、といったところだろうか。

因みに船内の食事は咲夜の提供となる。魔理沙や霊夢は私が料理をすることすら知らないから丁度良かった。咲夜の料理でも十分すぎるほど美味しいから何も問題はないけど。

この船旅もいよいよ終盤に差し掛かった。上筒男命に代わってかなりの時間が経った。予定通りならもう着いてもおかしくないはずだ。

「おおーあれが海か?!初めて見るけど大きいもんだな」

このままだと海に墜落しそうな勢いだ。吸血鬼は流水が苦手だというのに。

「フラン、落下後には十分に気を付けておきなさい。咲夜もいざとなったらフランについてあげなさい。私は自分で何とかできると思うから」「しかしお嬢様……」

「大丈夫だと言っているでしょう? 安心なさい、誇り高きスカレット家当主であるこの私がこの程度でくたばるわけが無いでしょう」

「……………お嬢様がご自分でそうおっしゃるのは珍しいですね。わかりました、従者として主人を信じないわけにはいきませんものね」

そう、それで良い。恐らく海に落ちた後すぐ飛んで海から離れれば問題ないだろう。私たち二人以外は海に落ちても溺れることもなさそうな面子だし安心して良いだろう。

今夜は綺麗な満月が昇っている。紫たちは先ほど出発しただろうし、レミイたちももう着いた頃であろう。

「…図書館に入るときは忍び込むのではなくきちんと許可を取ってやらしてもらいたいものね」

侵入するならもう少し気配をどうにかした方が良くと思うし。まあばれる前提で入ってきているだろうから尚更質が悪いのだけだ。

「ま、気づかれるわよね。それで？あの吸血鬼たちの月旅行は順調に行っているの？」

「ええ、勿論よ。少なくとも到着までは全く心配はいらないでしょう？あなたのおかげで。そこから先は私は知らないわ。月の二人がレミイたちをどうするのかなんてのはね」

「どうかしらね。あの二人は迷い込んだ人間をわざわざ生かして地上に送り返すほどのお人好しだから案外何事もなく帰ってくるかもしれないわね」

「筒川大明神、か。私が見に行こうと思って都まで行った時には既に亡くなってしまっていたのよね。一度は会ってみたかったのだけだ」

「別にそこまでするほどの人間ではなかったわよ。地上に返すにあたって色々な物を準備しなければならなかったし、ただ面倒な人間だったわ」

「そうなのかしら…まあいいわ。それで、あなた自身はどう思っているのかしら。本当にあの二人が何もしないと思っているの？」

「それは思っていないわ。でもあの二人ならきつとうまくやってくれ

るでしょう。私にできるのはその助言くらいだけだね」

「そう。……ところで輝夜はあそこで何をしているのかしら」 「さあ」

ふむ、どうやらこゝかに興味を持っているらしい。永遠亭は兎ばかりで退屈なのだろう。妹紅は…何故来たのかさっぱりわからない。相手に暇だったのだろうか。本当に自由なものだ。

あの二人がどのような選択をするかはわからない。しかし月では無駄な殺生を嫌う。紫以外は大したお咎めも無く帰ってくるだろう。

依姫 side

「依姫様！地上から侵入者です。地上人が乗ってきたロケットは豊の海で大破したようですが」

やはり来たか、流石は八意様だ。どうやら今来た地上の者たちは囷であるようだがそんなことは関係ない。次に地上の者が来たらすぐさま送り返すと決めているのだ。私の潔白を証明できる一人を除いては。

「丁度いい機会です。来た者たちを迎え撃つてみなさいと伝えなさい。私も今から向かいますが」

昔と違い今は兎で軍を作っている。昔地上から攻めてきた者のうちの一人、パチュリーさんからの指摘通り月人たちは自分の手を汚すのが嫌だったみたいだ。

兎たちの中には最近入ったばかりのレイセン（二代目）のようななどんくさいのもいるが総じて扱いやすいのがあるがたい。勿論優秀な兎もいることにはいる。四十年以上前までここにいたレイセン（一代目）がいい例だ。性格の方は軍に向いていなかったが。

とりあえず豊の海に向かってみよう。地上から自力で来られるような人間たちだ。きつと力もそこそこあるに違いない。

着いた先には何故か粉々になった銃の残骸と思われるものと震え

ている兎たちがいた。

「あー、一体何があったのか教えてもらっても？レイセン」

「それには及ばない。私から説明してやろう。そこにいる兎たちは皆話ができる精神状態ではないだろうからね」

ほう、地上の妖怪か。随分と若く見えるがこの状況を生み出したのは彼女だというのだろうか。

「この状態にしたのは私ではなく私の妹だよ、一応言っておくがね。ただ兎たちが銃を構えてきたからそれを破壊しただけの話よ。それに臆したのがその兎たちというわけ。簡単な話でしょう？」

ここまで粉々に銃を破壊しようと思っただけで能力に頼るしかないだろう。月の銃は妖怪がただ力を加えるだけで破壊されるほど脆く作られていない。

「ふむ、それが貴女の妹の能力というわけですか。かなり厄介ですね」

「いや、そんなことは無いさ。自身よりはるかに大きな力を持つものは破壊できない。そうね……例えば神器全般は破壊できないでしょうね」

まさか気づかれているのか。どうしてこんな小娘が？

「貴方は一体何者なのです？私はまだ何も言っていないませんが」

「ふふ、貴方はわかりやすいのよ。それとも貴方の剣かしら。その剣は妖怪が鍛えたわけでも人間が鍛えたわけでもない雰囲気をもとっているわ」

「なんです？貴方は私と戦いたいのですか？」

「そんなわけないじゃない。私の親友に聞いているわ。月の民には絶対に勝つことなどできない、とね。そんな無駄な戦闘は避けさせてもらうわ」

「なんだあ?!レミリアはやる気がないんだな。そんなんじゃないか来た意味がないじゃないか」

「うーん、ならこうしましょう。私たちと月の兵士たちでスペルカードで戦う。これなら余計な血も流れないしある程度は平等に戦えるわ。それなら良いかしら?魔理沙」

あの妖怪の親友という人物は月に来たことがあるらしい。そしてかつてを思い出させるこの発言……まさか彼女は……

「私は構わないけどよ、あちらさんは大丈夫なのか?」

「勿論大丈夫なはずよ。私の予想が正しければこいつは一度そのルールに則って戦ったことがある。スペルカードルール：貴方たち風と言うと命名決闘法、知っているのではないの?」

「ええ知っていますよ。一つ尋ねてもよろしいでしょうか。貴女の言う親友とはもしや……」

「おっとそれは私に勝ってから聞きなさい。さて、始めるわよ」

・
・
・

「つはあー。こんなに強いだなんて聞いてないぜ。こりや参った」

「だから言ったでしょう?決闘でなければ戦いにすらならないわ」

結局全員を負かすことができた。レイセンにはお姉様への伝言を頼んでおいた。

ああは言っているが倒すのに苦労した順で言えばあの妖怪が一番だった。その次が巫女だろう。あの妖怪は私の降ろした神の力を知っているかのように立ち回ってきたし、何より身体能力が厄介だった。

「さて、私が勝ちましたから質問させてもらいますよ。そういう約束でしたから」

「ええ、構わないわよ。私にとつての約束は何より強い意味を持つんだ。破ることなんてしないさ。でも少し場所は変えましょう。聞かれないこともあるかもしれないしね」

悪魔にとつての約束は契約と同義、すなわち破れないという事なのだろう。しかし思いのほか警戒心が強いようだ。強い存在は少しの事では負けないと思っているからか辺りの警戒を怠ることも多い。なかなか珍しい妖怪だ。

「確かにその通りですね。では早速一つ目ですが、貴女の言う親友とはパチユリー・ノーレッツジさんの事で間違いないでしょうか？」

「ええ、そうよ。でも貴方本当に強いよね。パチユリーがあれだけ言うのも納得だわ。でも残念なことに軍の中で強いのは貴女くらい。兎たちは圧倒的に実践経験不足のようね」

「やはり貴方もそう思いますか。ですが月で実践経験を積むことは非常に難しい。外部から攻められることなどほとんどありませんからね。しかも私が目を離すとすぐに怠けだしますし…。はあ、どうすれば良いのでしょうかね」

「それを普通妖怪の私に聞くかしら。でも上がすっかりしているつもりでも下が怠けるようになるのは仕方ないこと。今回連れてきているあの妖精たちも普段は館で働いてくれないもの。」

無理に働かされている者なんてのはそんなものなのよ。矯正するのはかなり難しいことだと思っわ。精々頑張りなさいな、私はとうに諦めたけど」

上に立つ者は皆何かしら苦勞しているものだ。それは月でも地上でも変わらないらしい。

後はレイセンが帰ってくるのを待つてあの巫女以外を地上に送り返せば私の任務は完了だ。

「おや、あれはさつき遣いに出していた兎じゃないの?」「よつ依姫様ー!大変です!」

「落ち着きなさい、レイセン。一体何があつたというのです。あちらにはお姉様がいたはずでしょう?」

「そつそれが、あの八雲紫とその式にまんまと一杯食わされてしまつて…その…行方が分からなくなりました」

「はあ?!八雲紫を逃がしてしまつたですつて?!きちんと縛つておかなかつたの?」

「いえ、そういうわけではないのですが…」

何故だ。あの紐から抜け出すのは不可能なはず。神をも封じる物を一介の妖怪ごときが破つたとも言つうのだろうか。

豊姫 side くちよつと前へ

月にこつそり忍び込もうとしてきた愚かな妖怪をトラップにかけ捕らえることに成功した。やはり八意様の智慧は偉大なものだ。

レイセンによると依姫は順調に事を終わらせたらしい。この妖怪の処遇が決まつたら私の力で攻めてきた妖怪たちを地上に送り返さなければならぬ。

「さあ、貴方たちにできることはもうない。その紐はフェムトファイバーの組紐だからね」

「フェムト?」「フェムト。わかりやすく言うと………よ」

この紐で縛られれば神ですら脱出は不可能だ。ましてやただの妖怪に切れる道理はない。

「ふふつ、うふふふ。なるほどなるほど、よくわかりましたわ。つまり私たちはもう何もできないというわけね。面白いわね」

「紫様?! 一体何が面白いというのです? 私たちは身動きもろくに出来なくなっているのですよ?」

あまりのショックで遂に頭が壊れてしまったのだろうか。それも仕方あるまい。昔のリベンジのつもりで入念に罠まで使って侵入しようとしたのに見事に私たちの罠にかかってしまったのだから。

「ああ、滑稽。私も貴方たちも滑稽でしかありませんわ。まさかこんなところであの子のくれた物が役に立つなんてね。まああの姫君の力を借りるのは癪ではあるけれど。これであの子への今までの貸しの分は全てチャラかしらね」

「一体何を………なっ?!」

フェムトファイバーが切れた? 何故だ、どうなっているのかわからない。あの紐は劣化するようなものではないし妖怪の力で切れるようなものでもない。

「さて、大変お騒がせいたしました。此度の侵略も私たちの負けですわ。また当分は月に侵略に来るようなことは無いから安心してくださいな。」

さあ藍、何ぼさっとしてるの? 私たちの用事は済んだからさっさ

と退散するわよ。ではまたの機会にお会いしましょう。次回はもう少し作戦を考えてきますわ」

・
・
・

あまりの事態に数十秒も固まってしまった。トラップにはめていたからといって、今八雲紫が月に行っていないという保証はない。

「レイセン！すぐに月に戻って依姫に伝えて来なさい。私は都の中を見回ってみるわ」

たかが地上の妖怪と侮っていたが今回の事でよくわからなくなっ
てしまった。八雲紫が紐の切断に使ったのは一見するとただの銀製のナイフ。神器の類でもなさそうだったのに何故易々と切られてしまったのだろうか。

強制的第五十話

パチユリー side

というか永琳たちはいつまでここにいる気なのだろうか。もう月は沈む段階に入っているというのに。

「あなたたち今夜は満月よ？例月祭はしなくてもいいの？」

「ええ、例月祭はもう済ませてきたから。しかし丸い物といつても家の倉庫の中の物だけじゃネタ切れになってきているのよね。どうすればいいのかしら」

「変わり種の団子とか作ってみればいいんじゃないの？……鈴仙が。それに数か月前は面白い物が出てきたじゃん」

「ちよ、てゐ?!作るならあんたも手伝いなさいよ。それに面白い物つて…あんた正気?あんた自身が死にかけたのに」

何故そんなに危ない物が倉庫に入っているのか見当もつかない。輝夜が月から持って来た物の中に紛れていたのだろうか。輝夜なら面白がって持ってきていてもおかしくはない気がする。

「大丈夫だって。鈴仙なら何とかなると思ってたから」「はあ」

「随分とお疲れのようね。休みはやっているのかしら?永琳」

「たまにはあげているつもりなのだけけど。でもここまで疲れている様子なのはきつと輝夜かてゐのせいね。あの子たちは加減を知らないから」

間違はなく永琳のせいだろうなあ。鈴仙もまたため息ついているし。

「まあ今日はとりあえず帰ってゆっくり休ませてあげなさい。例月祭でも疲れているでしょうし」

「そうね。そろそろお暇させてもらおうわ。輝夜も妹紅も戻ってきなさい、もう帰るわよ。ほら、二人も早くついてきなさい」

「パチュリーさん、お気遣いありがとうございます。師匠は鈍いところがありますから困ったものですよね。それではさようなら」「ええ、さようなら」

永琳の場合は鈴仙を弄って楽しんでる節もあると思うが鈴仙が気づいていないのならば言わない方が良さだろう。

永琳たちが帰って図書館に静寂が戻ってきた。また本でも読んでおこう。寝る必要のない体質は本当にありがたい。

「ごきげんよう、パチュリー。時間良いかしら？」

昔はもつと見られているような気配があったのに、いつの間にか美鈴ですら気づけない程に気配を殺すことができるようになっていた。そのせいでいつ紫が出てくるかさっぱりわからなくなった。だからいつも内心は驚いている。顔と態度には出さないが。

「ええ、構わないわ。あなたたちがここにいるという事はもう月面旅行も終盤といったところなのかしらね」

「その通りよ。それにしても貴方はどこまで先を見ているのかしらね。こうなることは私でも見抜けなかったのに」

「昔月に滞在していた時期があったでしょう？その時のおかげで知っていたのよ」

本当は原作で知っていたから、なのだけれど馬鹿正直にそれを言うはずもない。こういう時は適当にごまかすに限るのだ。

「……………そう。まさかあの姉妹がそんなに簡単にバラすとは思えないけれど…まあいいわ、助かったのは事実だものね。ありがとう」

やはり紫をだますのは少々無理があったのかもしれない。今回に關してはスルーしてくれるようなので良かったが、次回以降は気を付

けなければならぬ。

「レミイたちはどうしたの？まだ帰ってきていないようだけれど」

「あちら側の勝負は既に終わっていたみたいだから恐らくそろそろ帰ってくる頃だと思わよ。私の捜索の方が優先されそうな雰囲気だったし」

「そう、ならいいわ。月は余計な殺生を嫌うから命の心配はしていなかったけれど」

レミリア side

面倒なことになった。八雲紫の行方が分からなくなったせいでの兵たちが都の中を走り回っているらしい。

でもどうせ八雲紫の事だ、周りを混乱させるだけさせて実際に行動するのは他の者の仕事なのだろう。今頃は地上に戻って私たちの事を笑っているのかもしれない。まったく厄介な奴だ。

「貴方たちのリーダーはレミリアさん、貴方でよろしかったですか？」

「どちらかというと言霊な気もするけど…で、どうしたの？私たちも八雲紫の行方なんて知りようもないんだけど」

「そうではありません。月が混乱している今貴方たちをここにずっと残しておくのも得策ではありません。余計混乱を招くことになってしまいますし、それに乗じて攻め入られれば都に住む月の民にも危険が及びますから」

別にこれに乗じて攻め入ろうなんてこれっぽちも考えていないのに。そもそも私は昔パチエも来たという月に一度来てみたかっただけ。侵略する気すらなかったというのに。

「そこで貴方たちにはもう早く地上に帰っていただくかと思ってい

るのです。勿論そこにいる巫女以外ですが」

「ちよつと、どうして私だけ残らないといけないのよ。面倒くさいんだけど」

「私の潔白を証明してもらうためです。神降ろしとは本来正式な手順を踏んで行うべきこと……」

長くなりそう。でも依姫がこういうのも領ける。霊夢も何も言い返せないだろう。

「…という事です。わかりましたか？月に残るといつて十日程度の短い期間ですし、その間は私たちの屋敷で面倒を見ましょう」

「……………不自由なく過ごせるんでしようね？」

「勿論です。貴女にしてもらいたいのは神を降ろせることの証明だけですから」「ならいいわ」

霊夢……………今度神社にお賽銭でも入れておいてあげよう。

「ではそういう事で決まりですね。お姉様がここに来るまではもう少しありますから暴れないのであれば自由に行動していただいて結構ですよ」

確かパチエには月のイルメナイトを頼まれていたはず。でもイルメナイトってなんだろうか。

「ちよつと聞きたいんだけど良いかしら？」「なんででしょうか」

「イルメナイトって何かしら？お土産に頼まれているんだけど」

「イルメナイトとは鉱物の一種でチタン鉄鉱とも呼ばれるものです。表の月には特にたくさんあるようです。裏の月にも一応ありますよ。」

その地面なんかがそうだと思います」

「へえ？これが。こんな石ころを欲しがると魔法使いはよくわからないものなのね」

とりあえずパチエへのお土産はこれで確保できた。アリスも同じ物でいいだろう。パチエと同じ魔法使いなのだし。美鈴と小悪魔の分はどうしようか。あの二人は特にほしい物がなさそうだから困る。何を持ち帰っても地上では珍しい物だろうから尚更だ。

とりあえず桃でいいか。種を植えれば美鈴も喜んで世話をしてくれるに違いない。時間はかかるができた時の楽しみもある。幽々子も桃で十分だろう。あちらは食べるだけで終わりそうだが。

「おや、全員揃っているみたいね。それでは地上に送り返すわ。二度と来ない事を祈っているわ。ではさようなら」

「お？おお！一瞬で帰ってきたぜ。行きはあんなにかかったのになあ」

移動に関しては八雲紫のスキマをはるかに上回る速さだ。どういう能力かは知らないが、他人の能力の理屈を考えることほど無駄なこととは無い。まあそれは自分の能力でも同じだが。

「ここは……霧の湖ですか。丁度館に近くて助かりましたね。パチユリー様や美鈴も待っているでしょうから早く帰りましょう」

「そうだね！たった半月しか経っていないのに会うのがすごく久しぶりな感じがする」

フランもなんだかんだ言って寂しかったのかもかもしれない。普段一緒に過ごしている人が三人もいないのだから仕方がないか。

「私は一人寂しく帰らせてもらうぜ。霊夢の奴はいつ帰ってくるんだったっけ」

「それくらい覚えておきなさいよ。約十日後よ。それまでは神社に行っても誰もいないわよ」

「いつも以上に寂しい神社になるってわけか。それまでは紅魔館に遊びに来ることにしようかな」

「パチュリー様の本を盗まないでよ。どうせ取り返されるだろうけれど」

「借りてるだけさ、パチュリーが取り返しに来るまでな。しつかしなんであいつは私の読み終わった本だけを持っていくんだろうな。私の読んだ後ってそんなにわかりやすいのか？」

「そんなこと知るはずが無いでしょう？ 気になるならパチエか小悪魔にでも聞いてみなさい。教えてくれるかもしれないわよ」

「やめとくぜ。別に私は困っていないからな。そんなじゃとりあえず今日はゆっくり休んでまた明日にでも顔出すからお茶よろしくな、咲夜」

「なんで本泥棒にお茶を出さないといけないのよ。そんなことごめんよ」

「おっと、断つてもいいのか？ 油の件は…」「ああもう！ 分かったわよ。明日だけ出してあげる」

「いやあく流石は咲夜だぜ。やっぱり瀟洒な従者は違うなあ」

「どういう事？油って」「妹様は知る必要のないことでごいませすよ」
私も気になるが何か嫌な思い出でもあるのだろう。深く聞いたら
咲夜を傷つけてしまう事になるかもしれない。聞かない方が良さだ
ろう。

「まあいいわ。早く帰りましょう。そろそろ日が昇り始めてしま
わ。日焼け止めの効果も切れているみたいだし日光に当たってしま
うのはまずいわ」

「お姉様の言う通りだね。じゃあまた明日来てね、魔理沙！」

「ああ、分かってるぜ。いやあく咲夜のお菓子は美味いから楽しみだ
な！」

「全く貴方って人は。まあ精々楽しみにしていなさい。はあ」

咲夜も大変なようだ。今日一日は仕事を休ませてやりたいがうま
くいくだろうか。

パチユリーside

ようやくレミイたちが館に帰ってきたらしい。美鈴と話している
声大きいのか館が静かすぎるのかはわからないが声はかなり響い
ている。

「お帰り、三人とも。月旅行はどうだったかしら？」

「ただいま。なかなか刺激的で楽しめたわ。ただもう一度行くか、と
聞かれると行かないと答えるだろうけど」

「月の人はとっても強かったよ。私の能力も全然効かなかったし。月
に住んでいる人は皆あんな感じなのかな」

「それは誤解よ、フランドール。あそこまでの力を持っている月の民

はほとんどいないわ」

依姫みたいな強さの者がたくさんいたらむしろ平和から遠ざかりそう。依姫は性格が悪くないから大丈夫なだけで。

「ふーん、そっかあ。まあそうだよ。ふわあ…眠いから寝るね。おやすみ」

「ええ、おやすみ。レミイも咲夜も無理せずに今日は寝ていなさい。館の事は心配いらぬから。ちなみに寝ないと言うならば魔法で強制的に眠らせるけれど」

「選択権は無し、と。まあかなり疲れたし私も寝るわよ。咲夜も今日は休み。当主命令よ」

「わかりました。今日はゆっくりさせていただきます。ありがとうございます、パチュリー様」

「私だけでなく美鈴やこあもね。でも明日からは頑張ってもらおうからそのつもりでね」「はい」

大人しく聞いてくれて良かった。でもこうなるほど疲れていたのだろう。やはり月には手を出すべきではない。行かなくて良かった。

あれから少し経って霊夢もとつくに帰ってきた。彼女にはロケットのエンジンの代わりになってもらったお礼もあるのでお賽銭を入れておいた。勿論霊夢が帰ってくるより前の事だけれど。

今日は久しぶりに人里に来ている。特に何をするでもないが、気分転換には丁度いい。

「あれ？樺菜じゃないの。里に来るのも久しぶりじゃない？」

「あら、妹紅。久しぶり、というわけではないわね。あの日も来ていたし」

「まあまあ。ところで樺菜は暇なの？今から永遠亭に行くところだっ

「ただけど」

「ならご一緒させてもらおうかしらね。特に予定はなかったし」

「そんなじゃ行こうか。それにしても月ねえ。興味はあっても行きたいとは思わないなあ、私は」

「私だって行きたくはなかったわよ。紫が心配だったからついて行っただけで。でも月での生活は悪くなかったわね。不便はないし住んでいる人たちも皆明るかったし」

「へえ、それだけ聞いたなら随分と良いところのように聞こえるけど」

「実際良いところではあるわ。あなたも聞いたことくらいあるでしょう？蓬萊国…竜宮城の事は」

「え？でもあれって海底の都の事なんですよ？月と何の関係があるの？」

「あの話の内容は本当の事。でもあなたは不思議に思ったことは無いかしら？何故海底の都にたくさんのお兔がいるのか、と。餅を搗くお兔はどこにいると思う？」

「つまり竜宮城こそが月の都だったの？なるほどなるほど、月の民は見下せないけど海底に住んでいる竜宮城の民なら地上の方が高いから見下せるね」

「……永琳の怒るような事はやらないで頂戴よ。止められる人がいないから」

輝夜と妹紅の仲が良いのは良いことだけれど互いに弄りすぎて永琳が説教をするまでがセットだからなあ。永琳もそんなに暇ではないでしょうに。

「わかってるって。おっと、そんなことを言ってるうちに永遠亭だ。樺菜もそろそろ迷わずに抜けられるようになったんじゃないの？」

「無理よ。ここの竹、その竹、と記憶できたとしても次に来た時には

変わってしまったているもの。妖精も厄介だしここを迷わずに抜けられるのはここを住処にしている者たちだけだと思おうわ」

「そんなもんなのかなあ。慣れれば簡単だと思っただけだ。まあいや、それよりあれは誰なのかな」

妹紅の知らない人が永遠亭にいるなんて珍しい……ああいや違うな、彼女たちがここに來るのが珍しいのか。

「あれ、貴方はもしかしてパチュリーさんですか？随分と久しいですね。それで、一緒にいる貴方は一体どなたでしょうか？」

「私の名前は藤原妹紅。まあ輝夜の友人みたいなものさ。貴方たちは？」

「私は綿月依姫。そしてあそこで八意様と話をしているのが私の姉の豊姫。そしてあちらで鈴仙と話しているのがレイセンです。姉が八意様に会いたいというので仕方なく私もついてきたのです……何ですかパチュリーさん、その眼は」「いえ、別に何でもないから気にしないでいいわよ」

「鈴仙とレイセンって……面倒な事この上ないね。永琳が名字を与えて輝夜が適当にイナバと付けたのは知ってるけど」

「レイセンの方は今の私たちのペットです。そして鈴仙は昔私たちのペット、レイセンとして月の軍に入っていたのですが地上に逃げてしまったのですよ。八意様と輝夜姫に名前をいただけるなんて少し羨ましいですね」

依姫は相当永琳を慕っているようだ。私たちにさえ本音を漏らしてしまうほど。

「へえ、なるほどね。それで今日は永琳に会いに來ただけなの？月

の民って地上に降りるのを嫌がるものだ」と聞いてたんだけど」

「折角八意様の居場所がわかりましたからね、ただ会いに来ただけですよ。あとはレイセンと鈴仙の稽古もしましたね。やはりレイセンよりは鈴仙の方がかなり筋が良いみたいで……」

「ちよつと待って、最早どっちのレイセンの事を言ってるのかわからなくなってきたんだけど」

「……まあ確かに言っている方もわからなくなりそうですね。では一代目、二代目という事にでもしましょうか」

意外に妹紅と依姫は気があったみたいだ。結局依姫たちが帰るまで話していた。今はもう永遠亭の住人と私、妹紅しかいない。

「そういえば紅魔館で海を作って遊んでいたらしいわね。こんな寒い時期にどうして海なんて作ったのよ」

「月の海は流れていて入れなかつたから流れない水で遊びたかつたらしいわ。まあ実際はただの大きめのプールなのだけけれど」

「いいわねえ。私たちも近くの川から水でも引いてきて遊ぶ？」

「妹紅に頼んで温泉にしてもらえば丁度いいんじゃないの？外は寒いんだし」「なんで私が……」

「いいわねそれ。じゃあ早速頼むわよ、妹紅！水を引いてくるのはイナバ達でよろしく」

「私が掘ったら直接温泉が湧くかもね」「いくらあんだでもそれはないでしょよう」

「ま、精々金銀財宝かな。出ても幻想郷内じゃ使い道なんてほとんどないけどね」

確かに金目の物を持っていても大して意味はない。紫に頼んで外の世界で換金してもらうくらいしか使い道がないし、そんなに多くのお金が必要になることも無い。

「あ、そうそう。月都万象展、今年もやるからパチュリーも館の皆と是非来てね」「えっ」

鈴仙がすごく嫌そうな顔をしている。うん、まあわからないことも無い。大変そうな会場準備も鈴仙が主にすることになるんだろう。可哀そうに。

「え、ええ楽しみにしているわ。鈴仙も頑張つてね」「はい……」

まだ始まったばかりだが今年も忙しい年になりそうだ。主に霊夢と紫が。

激怒的第五十一話

パチユリー side

夏も真つ盛り、という時期のはずなのに館には全くと言っていいほど日光がさしていない。皆おかしいとは思っているみたいだがなかなか行動に移す気はないようだ。

「ねえ、パチエ。最近出かけられないから暇で暇で困ってるんだけど」「それは大変ね。でもあなたたちもうすうす気づいてはいるでしょう？これが異変だという事に」

「そんなことはわかっているわよ。でも突然雨が降ってきたりするから迂闊に出かけられないの。おかげで最近冥界にも行けていないのよ。まったく、首謀者は何を考えているのかしら」

しかし思っていたよりも面倒な異変だ。天気がどのタイミングで変化するのかや、どのようにして天気の優先順位が決まるのかがいまいちつかめていない。確か無意識がなんたらだった気がするが。とりあえずこの館は主に濃霧に包まれていることからレミイが優先さされているのだろう。

「ただ単純に天気が変わっているわけではないわ。この天気は個人の気質の表れ。例えばレミイの場合は濃霧ね。この間魔法の森に行った時の事を考えるとアリスはどうやら電、魔理沙は………霧雨かしら」

もともと知ってはいたが彼女たちに直接会って確認してみたかったからわざわざ出かけたのだ。

「パチエが何処かに出かけていたなんて知らなかったんだけど」

「だって言っていないもの。それに私は晴れていても問題ないし雨は境界で防げるしね」

「ちよつと何それ。そんな物があるなんて聞いてないわ。異変の主犯

をとつちめたいから私の周りにも張って頂戴よ」

「ああ、他人の周りに結界を張るのは私では不可能だからそういうのは結界術の専門家に頼まないといけないわよ。私の知る限りでは霊夢か紫かしらね」

「神社に行きましょう」「紫の方が楽に呼べるわよ?」「神社に行きましよう」

「はあ、分かったわ。あなたは本当に紫に苦手意識を持っているのね。わざわざこの天候の中神社に向かうほどの」

「別に嫌いなわけじゃないのよ?ただ何となく合わない気がするのよ。さて、向かうわよ」

「咲夜は連れて行かなくていいの?あの子なら喜んでついてきそうなものだけど」

「良いのよ。今回の主犯は私が直々に懲らしめてやりたいもの。日傘も用意したから早く館から出るわよ。早く行動するに越したことは無いわ」

とりあえずまずは神社。その後は天界に行くことになりそうだ。日焼け止めは塗ったようだから日傘の主な用途は神社までの雨避けだろう。日傘には撥水加工をしていないというのに。

「うわっ!!なにこれ…。どうして神社がこんなことに…?」

「地震ね。それもこの神社の敷地内だけの局地的な大地震だわ。これは幻想郷にとっての危機ね。霊夢ももう動き始めてしまっているみたいだわ」

霊夢は幻想郷の危機だと思って動いてはいないだろうか。

「仕方ないわね…紫、来て頂戴」

……

「貴方たちの事情は把握しているわ。神社のこの有様……本当にどうしてくれようかしら。それで要件はレミリアに結界を張ることだっ

たわね。……はい、これで流水も多少は大丈夫なはずよ。効果は一日ほど、まあ主犯を退治するまでは大丈夫でしょう。本当は私が出向きたいところなのだけれど」

「もうこれで用事は終わったわね。さてレミイ、ここからはあなたの単独行動ね。早く懲らしめたいのなら先ずは冥界に向かいなさい。そこで何かしらの情報が得られるはずよ。私は少しこの神社の事をしなければならぬからよろしく頼むわ」

「冥界……ええ、分かったわ。必ずこの私が懲らしめてきてあげる。私を怒らせたことを後悔させてやるわ。じゃあね」

「本当は幻想郷のために退治してきてもらいたいところだけれど」

「パチュリーが残ってくれて助かるわ。今幻想郷のあちこちで起きていることは勿論把握しているわよね。今回最も厄介なのは幽霊が冥界の管轄外で勝手に斬られていること。妖夢でないなら犯人は天人に違いない。月の連中よりよっぽど気に喰わないわね」

幽霊はすなわち気質。それが斬られると当然幽霊の数は減ってゆく。その後斬った気質を集めて地震を引き起こすとまた幽霊の数が増える、というわけだ。天子がそこまで考えて行動しているのかは知らないがわかつてはいるのだろうか。

だからこそ余計に厄介だ。彼女の行動理由は恐らく暇だから。暇つぶしであることを間違えてしまった彼女の今後は私にはまだわからない。

「敢えて聞くけれど何がそこまで気に喰わないのかしら。月と天界の考え方に違いなんてほとんどなさそうなのだけれど」

「確かに考え方には大した違いはない。しかし今回この神社を壊したことに大した目的など無いでしょう。そのあたりが月よりも嫌な所

なのよ」

やはりそうか。それにしても紫は本当に天人が嫌いなようだ。天子も悪意があつてやったわけではないだろうに。だからと言って私も同情するわけではない。博麗神社は大結界の要だ。そこが破壊されたとなると流石に黙つてはいられない。

それに悪意がない分余計に厄介なのだ。悪意がないとはすなわち自分が悪いことをした、という自覚がないからだ。紫が『この大地から往ね』というのも仕方のないことだと言える。何せ幻想郷を作り結界を張つたのは他でもない紫なのだから。

「今回の異変に伴うこの局地的な大地震、あなたなら原因もわかつているのではないの？」

「この地震は要石によつて引き起こされたもの。そして要石を扱えるのは天界に住む比那名居の一族のみよ」

「なるほど。紫はもう神社の再建に着手しておいた方が良いのではないかしら。比那名居と言えば神社も持っていたはず。下手すると乗っ取られるわよ」

「勿論わかつているわ。神社の下に要石を埋め込まれたらそれこそ厄介だわ」

そうなれば幻想郷の存続が全て天子の手の上になつてしまう。彼女が要石を抜けば簡単に神社は壊れ、それを起点とした大結界も破れかねない。

それにしても紫は未来でも見えているのではないだろうか。私のように事前知識があるわけでもないのに即座に答えにたどり着く彼女の頭の中が知りたいものだ。

「そうね。紫、悪いけれど私も天界に向かうわ。天人の全てがこのような考えを持っているわけではない。この異変を起こすのが天人なら止めるのもまた天人であつても構わないはずよ」

「……あてがあるのね。ならば此度は主に貴女とレミリアに任せるこ

ととしまししょう。私は萃香に声をかけて神社を再建しておくわ」

まずは天界に行つてレミイを探すところから始めればいいのか。レミイは少しばかり寄り道をするはずだが、経過時間を考えれば直接天界に行く私よりレミイの方が少しだけ早くついているはずだ。

稔里 side

今日は比那名居家のお嬢様である比那名居天子の様子が何かおかしい。何処かそわそわしているようだ。何かを待っているのだろうか。

天界とは欲を捨てた者たちの集まる場所である。だが比那名居天子は至り方が少々特殊だったせいか天人としてはかなり異端である。それに総領の娘なので逆らおうにも逆らい辛い。私が来た時には既にいたから知らないが、彼女がわがままになってしまったのにはこういう背景もあるのだろう。

兎にも角にも毎日の仕事として与えられていることは果たさなくてはならない。天界への侵入者などほとんどいないというのに全く面倒なことだ。しかし今日はどうやら違うらしい。

「ここが天界なのか？」「ええ、そうですが」

「そうかそうか、ならさっさと出すもん出しなさい。どうしても出さないというならば力づくでも出させるけどね」

この妖怪は一体何を言っているのだろうか。「出す物？心当たりがないのですが…」

「しらばつくれるというのね。ならば強引にでもやらせてもらおうよ」
紅符『不夜城レッド』

「さて出す気になったかしら？」

この妖怪は強い。戦い方はまるで昔見た美鈴のようだ。美鈴ほど

のリーチはないが速さがある。

「だから聞いてくださいってば。私には何が何だかさっぱりわからないのですが」

「ほう、この期に及んでまだしらばつくれる気か。なかなか度胸のある天人なようだ。面白い、そちらがその気だというのなら…」そこまでしておきなさい」誰よ…ってパチエ?! どうして来たの? 私はこの天人から真実を聞き出す必要があるんだけど」

口調がガラツと変わった。きつとこちらが本来の彼女なのだろう。「この子は今回の異変には関係ないわ。稔里も災難だったわね、うちの当主の誤解だけけれど」

「うちの…ってことは貴女が紅魔館の主の吸血鬼なのですか?」

「ええ、そうだけど。何? 二人は知り合いだったの?」

「そうよ。私が昔日本にいた頃からのね。名前は東風谷稔里。もう一度言うけれど今回の異変の犯人ではないわ」

「そ、そうだったのね。ごめんなさいね、急にケンカ腰になってしまって。貴方さえよければまたお詫びをするわ。しかし東風谷…? あの神社と何か関係が…?」

「守矢神社の事でしたら関係は大ありますが。それに詫びなんて…まだ会ったばかりなのにそんなのは申し訳ないですよ。私ももう少し何か言う事があったかもしれないし」

この吸血鬼が守矢神社の事を知っているとなるともう神社は幻想郷に来たのだろう。また約束を果たしに行かなければならない。

「まあまあ、ここは素直に詫びを受けなさい。埒が明かないわ。」

話は変わるけれど稔里は近頃地上で起こっていることを何か知っているかしら?」

「いや、知らないわ。近頃は地上にも行っていないし。何かあったの？」

「今地上、いや、冥界でも生きとし生けるものの気質が勝手に斬られるという事が起こっているわ。冥界の庭師が犯人ではない以上犯人は天界の者しかいないの。理由はわかるわよね、緋想の剣を扱えるのは天人だけだからよ」

「なるほど、だから私が疑われたのね。でも現在緋想の剣を所有しているのは総領の娘、比那名居天子よ。彼女が犯人なのではないの？」
「どうか天界で厄介ごとが起こると大概あの娘のせいなのだ。だからきつと今回もそうなのだろう。」

それにしても彼女が今日そわそわしていた理由はこれか。地上から人間や妖怪が戦いを挑みに来る、彼女にとっては最高の暇つぶし程度にしか考えていないのだろう。だが実際挑みに来たのは初めから殺意が最高潮の吸血鬼（かなり強い）とぱっちゃん（滅茶苦茶強い）だったわけだ。比那名居天子はどうなってしまうのだろうか。

「そういえば知つての通り天人の身体はとても硬いわよ。生半可な攻撃は全く通用しないわ」

「ええ。だからとりあえずレミイの怒りが収まるまではレミイに任せてあとはあなたが天子を止めてくれればいいわ。」

因みにあなたがやらないというのなら私が代わりにするわ。彼女が攻撃し、宣戦布告した相手は美鈴以外では私の最も古い友人が途轍もない苦勞をして作った楽園。そこが破壊されかねないのだから私も生半可な気持ちでここに立っているわけではないわ」

ぱっちゃんにやらせると最悪天界がなくなりかねない。流石にそこまではしないだろうが天界に大ダメージを与えられるのは間違いない。こうなったら私がやるしかない。

「私が引き受けるわ。ぱっちゃんに任せたら怖いもの。でもぱっちゃん

んの気持ちもわからなくもないからやるなら全力でやらせてもらおうけどね」

「話はまとまったわね？じゃあその総領の娘という奴のところへ行きましょう。私を外出できないようにした罪は重いわ」

あれ？意外と器が小さいのか？

「ねえ、ぱっちゃん。比那名居天子をあの子一人に任せて大丈夫なの？彼女もかなりの実力者よ」

「大丈夫よ。あなたも気づいたでしょう？レミイを鍛えたのは美鈴。近接戦ならばレミイは圧倒的に私を上回るわ。あなたの出番すら訪れないかもしれないわね」

ぱっちゃんは近接戦を苦手としているらしいが昔一緒に巫女をしていた時の事を考えるとどうもそうは思えない。小回りの利く彼女の応用魔法は相当に厄介なものだった記憶がある。

それを遥かに上回るといふのならあの吸血鬼の実力は相当なのだろう。どんなものか拝見させていたどころ。

：強い。先ほど私と戦った時よりかなり強い。比那名居天子が手も足も出ていない……いや、分かっている。比那名居天子は未だに手加減をしている。彼女が本気になれば戦況は変化するかもしれない「だから言ったでしょう？稔里の出番はないかもしれないって。でももう少し続きそうね。天子が本気を出すならば、だけれど」

「ふん、本気でもない奴を圧倒してもつまらないだけだ。くだらない遊びはもう終わりにしないか？天人よ。私は貴様の暇つぶしに付き合っているほどお人好しでもないんだ」

「言ってくれるじゃない。たかがこれしきの力で私を倒そうとするとは笑止千万。私の本気をとくと味わうがいい。後悔しても遅いわよ

！」気符『無念無想の境地』

なるほど、比那名居天子も負けてはいない。彼女の實力も見誤っていたか。

「ははっ、なかなか面白くなってきたじゃないの。お遊びはここまで、という事ね。じゃあこちらも遠慮なくいくわよ。避けることはかなわないこの攻撃、お前なら耐えられるだろう？」

神槍『スピア・ザ・グングニル』

両者とも激しい攻撃が続いている。果たしてその結末は……

・
・
・

「なかなか良い暇つぶしにはなったわよ、吸血鬼」

「よく言う。少なくとも私に負けた奴が言うセリフではないな。さて、私が勝つたのだから集めた気質は早く戻してくれるんだろうかな？」

「はあく。ええ、分かったわよ。ついでに神社を直すのも手伝いましょうか？」

「ほんと?!それはすごく助かるわね。是非お願いを……」って霊夢?いつからそこにいたのよ」

「あんたらが戦つてるところからよ。まったく、私の仕事を横取りしておいて……」

「まあその話は後にしましょう。神社の再建は手伝ってもらわなくて結構よ。もう既に頼んでいるから」

「なーんだ。つまらないわく。何か刺激的なことが起きれば良いのに」

「そのことだけれど今後しばらくは自身の周囲を警戒して大人しくしておくことを勧めるわ。さもなければ刺激的では済まないことが起きるでしょうから」

脅しだろうか。それとも先ほどぱっちゃんが言っていた古い友人に何か関係があるのだろうか。会ってみたいが聞く限りでは怖そうな人だ。

異変も無事に終わったみたいだし久しぶりに地上に降りるのも悪くない。ついでに諏訪子様たちにも会いに行けそうだし。

姉貴分的第五十二話

パチユリー side

レミイが天子を打ち負かしてから数日経ち、最近は何かに天気も安定するようになり神社の方の修復も終わった。というか神社の修復は結構早くに終わっていた。流石は萃香といったところだろうか。

天子も私の忠告を聞いてか今は大人しくしているようで、紫もこれ以上何かをするつもりは無いようだ。レミイもようやく外出できるようになったという事で早速今日一人で白玉楼に出かけて行った。

私は特に何をするでもないし今日はアリスも魔理沙も来ていない。今日図書館が賑やかになることはなさそうだからゆつくり本が読めるだろう。

「パチユリー様、どうやらパチユリー様にお客様がいらっしやっっているようです。今は門前で美鈴と話をしているようです」

「そう、ありがとう咲夜。それでは少し出かけてくるからこあにも言っておいて頂戴。昼も私の分は用意しなくていいわよ」 「かしこまりました」

わざわざ私を訪ねてくる人物で咲夜の知らない人となると多分稔里だろう。今日は一体何の用事があったて降りてきたのだろうか。というか紫の天人に対する警戒をくぐってここまで来られるとは…幽々子のおかげなのだろうか。

咲夜は確か門で美鈴と話をしていると聞いていたな…：うん、やはり稔里だったか。

「あ、ぱっちゃん！先日ぶりだね。突然訪ねてきてごめんね」

「いえ、良いのよ。それで、今日は一体どんな用事で来たのかしら」

「どうやら二柱に会う約束を果たすために降りてきたようです。来てからもうすぐ一年ですけどまだ会っていなかったという事で」

「なるほど、そういう事。私に案内してもらいに来たのね?」「うん。良いかな?」

「勿論構わないわよ。じゃあ私は出かけてくるわ。美鈴も暑さにやられないように気を付けておきなさいよ」

「大丈夫ですよ。妖怪は丈夫ですし、いざとなれば妖精たちの中にも冷気を出せる子がいますから。咲夜さんには私から伝えておきましようか?」

「大丈夫よ。こうなることを見越してもう既に言っているわ」

「流石ですね。それではお気を付けて行って来てください」「ええ、行くわよ稔里」

「神社は人間の里の近くではないの?」

「ええ、むしろ人間からの信仰は集めにくくなっているわ。神社の場所も普通の人間にとつては少々危険な場所にあるけれどあなたなら問題ないでしょう」

「そうなの?まあいいか。そういえば神社には私の子孫にあたる子がいるんだよね。その子の前では私はその子とは無関係な人物として扱ってね。かなり面倒なことになるかもしれないから」

「分かっているわよ。神社があるのはこの山の上。妖怪の山と呼ばれているくらいだし人間に対してはかなり排他的ね。山に入るとすぐに警戒の天狗が飛んでくるわ」

まあ警戒天狗くらいなら訳なく無力化できるけれど。鴉天狗以上になると少々面倒になる。

「そんな場所に神社があるのなら人間の参拝客は見込めないね。もう少しどうにかならなかったの?」

「ええ。転移する先の座標をしっかりと指定できれば何とかなつたでしょうが。さ、そろそろ天狗たちがやってくるわよ。私が戦いませよ

うか？」

「私も一緒にやるよ。前の吸血鬼との戦闘で私が如何に鈍っていたか確認できたし、もう一度勘を取り戻さないといけないからね」

「一応言っておくけれど命の駆け引きをするわけではないからね。相手を無力化するのを目的に戦って頂戴よ」

稔里は昔の妖怪退治を知っているため放っておくと辺り一面死屍累々になってしまうかもしれない。そうなれば流石に天魔クラスも黙ってはいないだろうし、幻想郷のパワーバランスを崩しかねない。

「大丈夫だって。ぱっちゃんとは心配症なんだから。前のあの子たちみたいに戦えばいいんでしょ？余裕よ余裕」

ここまで言うなら信じておくか。数は圧倒的にあちらが多いから油断しているとやられることもあるかもしれない。文が来てくれればかなり楽に終わるのだけれど今日は恐らく来ないだろう。異変の、というか神社崩壊の記事を書いているだろうし。

「あ、ほら来たわよ。節度は守って対応してね」

「こら、貴様ら！ここがどこだかわかっているのか？妖怪の山に許可も無く入ることは許されない。悪いが排除させてもらおうぞ」

「あら、こんなにもか弱い女子が二人きりで山に入ったただけなのに排除するなんてひどいわ」

稔里……あなたの演技もひどい物なのだけれど…。

「うるさいぞ。そしてやっぱりここがどこだかわかって立ち入っているんじゃないか。これは許されることではない。貴様ら程度、鴉天狗の奴らに頼るまでもない」

鴉天狗は白狼天狗をどんな風に扱っているのだろうか。仲が悪そうなのは大体想像できるが部下に“奴ら”呼ばわりされる上司って一体。

「全くいつ来ても面倒な事ね。いい加減学んだらどうなのかしらね」

火符『アグニレイディアンズ』

作っただけが良いが使ったことのないスペカがいくつもあるから実験台にさせてもらおう。作っただけはもうかなり前の事になるのだが使わないのは勿体ないというものだ。

「ぐえっ」「うわああ」「……………」

スペカ一枚で粗方対処できてしまった。稔里の方も加減をして攻撃をしたようで誰一人殺すことなく無力化させることに成功していた。

「大体片付いたわね。援軍が来る前にさっさと上の方に行くわよ。そうすれば追っ手はいなくなるわ」「分かったわ」

鴉天狗以上は過去の事から基本私に攻撃してこないのの上の方に行けば逆に安全に飛行できるようになる。私が天狗をむやみに襲わないと分かっているから放置しているのだろうが、それでも不思議なものだ。

「やつとあつたわね、守矢神社。久しぶりに見るから忘れていたのかもしれないけど何か神社の雰囲気変わった？」

「わからないわ。そもそも過去の神社をよく覚えていないもの。でも時代の変化と伴に変わっていても不思議ではないかもしれないわね」

「確かにそうかく。さて、そろそろ降りようか。お二柱ともいらっしやるかな」

今の時間なら早苗ちゃんもいると思う。恐らく里に下りていくのはもう少し後の時間帯だろう。

「ごめんくださいーい。誰かいらっしやいますか〜?」

「はいはい、なんででしょうか。おや、初めて見る顔ですね、初めまして。：それとパチュリーさんでしたか。お久しぶりです。本日は一体どのような御用でいらつしやったのですか？」

「特にこの神社に用事があったというわけではないの。諏訪子と神奈子は今いるかしら？」

「諏訪子様も神奈子様も今日ならばいらつしやいますよ。最近はお二柱ともどこかに出かけていたりするのですがパチュリーさんは運が良いですね」

諏訪子と神奈子がこの時期にどこかに出かけている、となれば地底しかないだろう。地底は重要な場所になるだろう。私にとってではなくあの子たちにとってだが。

「らしいわよ、稔里。あの子が二柱に会いたがっていたから会わせても良いかしら」

「はい、構いませんが……一体どうして？」

「彼女にも彼女なりの理由があるのよ。それより私たちは少し外で話でもしておきましょうか。彼女たちの話の邪魔にならないように」

「気づかいありがとう、ぱっちゃん。それではお邪魔しますね」「どうぞごゆっくり」

折角の再開を邪魔するのは流石に悪い。稔里にも二柱にも。

諏訪子 side

最近神奈子が面白い考えを出してきた。地底にあるらしい地獄の跡地を利用してエネルギー革命を起こそうと言うのだ。宿主に丁度良い媒体を探して八咫鳥を宿らせることで、外の世界ではできないような技術が実現できる。

丁度良い媒体と言っても条件はかなり厳しい。神をその身に宿すのは普通の人間や妖怪では不可能だし、相当な高温にも耐えられる者

でなければならぬ。そこで比較的頭が弱そうで、かつ高温にも耐えられる地獄鴉が良いだろうという結論に至っていた。

つい先日丁度探していた条件に合う鴉が見つかった。今は八咫鳥の制御のための道具を早苗に隠れて作っているところだ。秋も近づいてきているが秋が深まるまでには完成させたいところだ。

今日は地底に行く用事もないから神奈子共々神社でゆっくりしている。今はまだ早苗が里に下りていないから何もできないのだ。

「ごめんくださいーい。誰かいらつしやいますか〜?」

「おや、お客さんかな? 早苗、行ってあげな」「はい、分かりました」

「それにしても何処かで聞いたことのある声だったような?」

「神奈子の気のせいじゃない? 幻想郷での知り合いなんてぱっちゃんとか美鈴以外いなかったようなもんだし」

「そうかしらねえ。でも確かに何処かで……」お久しぶりですね、神奈子様、諏訪子様。長い時間がかかりましたが今ようやく約束を果たせました。あの時の約束を覚えておられるかはわかりませんが長らくお待ちしましたね……あら、稔里じゃないの。随分と久しいわね」まさか神奈子の言っていたことが当たっていたなんて。

「久しぶりだね、稔里。約束は勿論覚えていたよ。あの時の約束のおかげで私は今ここにいるようなものだからね。それにしてもよくここが分かったね」

「いえ、ここまではぱっちゃんに案内してもらったんですよ。お願いしたら快く引き受けてくれました」

「なるほど、ぱっちゃんも来ているのね。呼んできましたよ?」

ぱっちゃんはたまに来てくれるが頻繁に来る、というわけでは無いので前回会ったのももう数か月も前になる。

「私を東風谷だとばらさないのであれば大丈夫ですけど……」

「なんだ、そんなことかい。別にばれても大丈夫だと思うよ。何せあの子も現人神だからねえ」

「やはりそうだったのですね。神の血を濃く引き継いだようで。過去にもあまり見ない事例ではないですか？」

稔里自身にも神の血が流れていることには気づいていたのか。やはりこの子は優秀だ。天人になれたというのも納得できる。

「確かにそうね。で？どうするの？うちの巫女とぱっちゃんを呼んできても良いの？」「ええ」

「じゃ、ちよつと呼んでくるわ。おい、早苗もぱっちゃんも入ってきていいわよ」

呼んでくると言ったのに実際は縁側に出て声をかけただけか。それならわざわざ立ち上がらなくても良かったのではないだろうか。

「早かったわね。積もる話も無かったの？」「早苗がいても大丈夫だと判断しただけさ」

「えっ？私？どど、どういう事ですか？」「まあまあ、別に悪い話ではないわよ」

「ぱっちゃんの言う通り悪い話じゃあないよ。ただ突然来て私たちに会いたがったこの子の素性を知りたくはないかい？」

「え……いやまあ不思議には思いますけどいきなり他人の素性と言われとも……」

「あなたたち二人が育てたとは思えない程良い子ね。稔里もそう思うでしょう?」

「そつ、それはどうかなあ。私には判断できないなく「無理しなくても良いのよ」うつ」

「全くぱっちゃんも稔里もひどいねえ。早苗が良い子に育ったのは私の育て方が良かったんだって早く認めなよ。現に稔里も良い子じゃないか」

「まあ確かに」……え?稔里さんも諏訪子様達に育てられたかのような言い方ですが」

「だって事実だもん。ね、稔里」……はい。確かに私はお二柱に育てられました」

「でも稔里さんなんて見たことないような気がするのですが…」

「それは当たり前よ。早苗が生まれるよりはるか昔のことだもの。まだぱっちゃんが神社に来ていなかった頃ね。懐かしいわ」

「ええ〜?!じゃ、じゃあ稔里さんって今いくつなんですか?!」

「こらこら、女性に年齢の話はいけないわよ。二人とも改めて自己紹介から始めてはどうかしら?」

「確かにそうね。えーと、私の名前は東風谷稔里。種族は天人よ。ちなみに歳は大体千歳くらいでしょうか」

「わ、私は東風谷早苗です。一応人間です。それにしても天人ですか。なら先の異変も関わっていたのですか?」

「まあ関わっていたかいなかったか、と聞かれると一応関わっていた

のでしょうか。ぱっちゃんとその友人の吸血鬼が来るまでは知らなかったことですが……」

早苗と稔里はすっかり仲良くなったみたいだ。稔里の話は早苗にとってはかなり新鮮で面白い物だったらしい。

特にここに来てまだ浅い早苗は地上以外の事についてはあまり想像できないらしい。冥界など存在を知っていてもなかなか行けない場所もある。そういう場所の事も面白く、かつ詳しく話してくれるから早苗が稔里に懐くのも納得できる話だ。

もう数時間も話して昼も過ぎているのにさっぱり終わる気配がない。いつも里に下りている時間もとくに過ぎていくのに。ぱっちゃんに目配せすると私の言わんとしていることを理解してくれたみたいだ。

「二人ともそろそろ終わりにしたら？早苗も里に下りなくて大丈夫なのかしら？」

うん、完璧だ。伊達に長い時間一緒に過ごしたわけではないようだ。

「え？もうそんなに時間が経っていたんですか。すみません、稔里姉さん」

それにしても姉さんって。確かに一人っ子の早苗にとっては姉のような存在なんだろうし、確かに血は繋がってるんだけど。髪の色は全然違うから違和感があるがそれ以外はほとんどないと言える。何故だろうか。

「いえ、私も話し過ぎました。用事があつたでしょうに申し訳ないですね。それでは私はそろそろ帰ります。諏訪子様や神奈子様にも会えましたしとても満足です」

「では私は里に行ってきます。お昼は……ああ、パチュリーさんありがとうございました」

「気にしなくていいわよ。これくらいなら訳ないわ。さて、私も稔里と一緒にいることにするわ。稔里も早苗もお昼はまだだったでしょう？里で食べないかしら？私が出してあげるから」

「おっ、いいね。地上の食べものって最近全然食べていなかったし。早苗ちゃんは？」

「良いのですか？なら私もありがたくごちそうになります！」

まったく。ぱっちゃんに頭が上がりなくなってしまう。私たち二人に昼ごはんを作ってくれた上に早苗たちには自腹で御馳走してくれるらしい。

今日はあまり作業ができないと思うが、稔里に再会できたので十分に良い日だったと言える。きっと神奈子も同じように思っているだろう。何せ数百年ぶりの再会だったのだから。

屈辱的第五十三話

パチユリー side

冬になって外はかなり冷えるようになってきた。そうなるこそろそろ異変の時期になるだろう。夏に守矢神社に行った時には既に二柱とも準備をしていたようだし起こるのは確実だ。

地霊殿は一応サポートとしての参加があつたはずだがどうなるだろうか。萃夢想みたいに解決者として参加しなかつた異変もあるにはあるが。

——数日後——

「パチユリー、ちよつと良いかしら?」

「あなたが来るなんて珍しいこともあつたものね、紫。時間なら大丈夫よ」

「というか仕事のない妖怪は大体いつでも時間が空いているようなものだ。忙しいという時はほとんどない。」

「ありがとう。それとそこにいるアリスもちよつと良いかしら」
「ええ、大丈夫だけど」

「今さつきちよつと困つたことが起きたのよ。緊急だから手短に説明させてもらうけれど、地底から怨霊が大量に湧き出てきてしまったの。地底と地上では妖怪同士の移動は基本的に_(一)法度なの。」

「だから今回の異変の解決自体はいつもの二人に任せることにしたわ。地底は危険すぎるから本当は霊夢一人で行ってもらいたかつたのだけれど。そういう事だから貴方たちには魔理沙のサポートをしてもらいたいのよ」

「ちよつと待って。妖怪は地底に行けないんじゃないの? どういう事?」

「ああ、言い方が悪かったわね。サポートは遠隔で行ってもらおうわ。そのための道具は河童に頼んだらすぐに作ってくれたわ。彼女はそれでもう疲れたからサポート役にはなってくれないみたい。これがその道具よ。もう一つは魔理沙が持っているからテストがてら試してもらえるかしら」

「分かったわ。ええ、テストテスト。魔理沙？聞こえているかしら？」

『ん？アリスか？ばつちり聞こえているぜ。それにしても凄いな。こんな離れていても話ができるなんて。にとりも侮れんなあ』
「しつかり聞こえているようで良かったわ。これからあなたのサポートはこの道具を通して行うからよろしく」

それにしてもどうやってあちらの映像を映し出しているのだろうか。まあこれが無ければサポートなんてできないが。

『なんだパチュリーも一緒なのか？それなら心強いな「私じゃ不満みたいな言い方ね」い、いや、他意はないぜ。気のせいだ気のせい』
「言い訳に必死ね。まあそんな話をしている暇があるならさっさと地底に続く穴まで行きなさい。着いたらまた知らせて頂戴。ではね」
こんなことに時間をかけている場合ではないだろう。魔理沙が生きて帰ってこられるようにするのが私たちの仕事。きつちりやらせてもらおう。

「それで、紫は霊夢のサポートをするのかしら？」

「ええ、まあ萃香もしてくれるみたいだから私はすることが無いかもしれないけれど」

萃香にとつては顔見知りばかりだろうから確かに楽になるだろう。「文とかは誘わなかったのかしら。彼女も鬼はよく知っているでしょう？」

「誘ったのだけれど萃香がいると知って辞退されたわ。言わなければ

面白くなつたかもしれないわね」

相変わらず人の悪いことで。でもまあ文が辞退するのも仕方ないし当然と言えば当然か。

「では私はもう行くわね。サポートよろしく頼むわよ」

神出鬼没。いきなり来たと思えばもうどこに行つたか分からない。

『あー、聞こえるか？とりあえず大穴まで来たぜ。降りて行つて大丈夫な物なのか？』

「ええ。途中出てくる妖怪たちには気をつけなさいよ。彼らは地上では忌み嫌われた者たちばかり。人間にとつてはかなり危険よ」

『分かつた。気を付けることにするよ。それにしても深い穴だな。底が全然見えてこないぜ』

「当然よ。浅かつたらすぐに地上に出てくるかもしれないでしょう？』『ふーん、そんなもんか』

こうは言っているが、正直思っていたよりも深くて驚いている。降りているというよりは落ちているに近い速度のはずなのに。

魔理沙 side

それにしても深い穴だ。一向に底が見えてこない。

『上！気を付けて！』

「おつと危ねえな。こいつは何だ？いきなり上から降つてきたが」

『それは……釣瓶落としね。狂暴だから見た目で油断していると首刈られるわよ』

「げっ、それはごめんだな。さつさと倒しちまうか」

妖怪は見た目によらないというのはよくわかっていることではあるが、この妖怪もやはり見た目から連想される性格は全く異なるらしい。

「なんだ、弾幕ごつこの腕は低いようだな。首を刈られずに済んだぜ」
『これからもこんな妖怪ばかり、いえ、これよりさらに厄介な妖怪ばかりになるわ。心してかかりなさい』

「はいはいっと。気を引き締めて行かんとな」

「なんだい？誰と話しているんだい？それとも独り言の気があるのかな」

「失礼な奴だな。独り言の気なんてないぜ。私が誰と話してしようがお前には関係ないだろう？」

「確かにそうだ。で、お前さんは人間のようだけど地底に何の用だい？」

「何、ちよつとばかり妖怪退治をな『嘘は駄目よ』ったくアリスは真面目だな。それでこいつは何なんだ？」

「ん？今どこから声が出たんだい？姿なんて見えなかったけど」

「これだよこれ。それでこいつは？」

『彼女は土蜘蛛ね。病気に關しては彼女の右に出る者はいないわ。人間は病弱なんだから気をつけなさいよ』

「少なくともお前たちよりはマシだと思うけどなあ。まあいいかさっさと倒して先を急ぐぜ」

「ほう、やれるものならやってみな」

「口だけじゃないか。物足りないぜ。次は何処に向かえばいいんだ？」

「いてて……。お前さん強いんだね。それなら恐らく進んでも大丈夫

だろう。ここをまつすぐ行くと橋がある。その橋を越えれば旧地獄さ。とりあえずそこまで行ってみな」

「助かるぜ。じゃあな！」「まったく心配の一つもないのかい」

妖怪に心配なんてするだけ無駄だろう。どうせこいつも元氣なんだし放っておいても問題ない。それにしても霊夢が先に来ていると思うのだがそれらしい痕跡が全くないのはどういう事なのだろうか。

『さあ次は橋に向かってみましょうか。何か手掛かりがあるかもしれないわ』

「言われなくてもわかってるよ。それにしてもこれじゃあ私が独り言ちているようにしか見えないぜ。どうにかならないのか？」

『にとりが急いで作ってくれた物だし映像を見ながら会話できているだけでも十分でしょう？』

「それはお前たちだけじゃないか。私の方はそっちの映像が見れるわけではないんだぜ。まあ言っても仕方ないか。

お？ここがあいつの言ってた橋か？誰か倒れているようだが」

『……橋姫ね。嫉妬を操る厄介な妖怪なのだけれどどうやら霊夢が先に倒していったみたいね』

ここでようやく霊夢の通った痕跡が見つかったわけか。となると先の二人は霊夢と戦わなかった、と考えるのが妥当か。とりあえず気絶している奴に弾幕を撃ちこむほど憎いわけでは無いので放置して進むことにする。無駄な時間は使いたくないし。

『橋を渡ったら旧地獄と言っていたわね。少し気になるわね』

「おいおい、今は異変解決に来ているんだぜ……。気になるのはいいが邪魔はしないでくれよ」

『わかっているわよ。正直サポートはパチュリーで十分間に合っているから暇に近いのよね』

「なんて奴だ。私がこんなに一生懸命頑張っているというのに」

『はいはい、そんなことを言っている間に次が来たようよ』

「人間がここまで来られるなんてね。さっきの巫女くらいかと思っ
ていたよ。戦う前に名前でも聞いておこうか」

「普通の魔法使い、霧雨魔理沙だ。なんだ、お前は霊夢にあつたのか？
さっきの橋姫のように伸びてはいないみたいだが」

「当たり前じゃないか。あれも所詮は遊び。この私があれしきでくだ
ばるわけないだろう？この山の四天王、星熊勇儀がね」

「山の四天王…そうか、お前は鬼か。萃香とは見た目が全然違うから
わからなかったぜ。なら頑丈なものも納得がいく」

「なんだ？萃香と知り合いなのかい。さっきの巫女と言いあんたもな
かなか強そうじゃないか。人間はあの頃で見限ったつもりだったが
いやはや面白いことだね。さて、心の準備はできたかい？」

「おう、いつでもどこからでもかかってきな」

「早速行かせてもらおうよ！」 鬼符『怪力乱神』

「ふふんっ、この程度なら問題ないぜ！これならパチュリーの弾幕の
方が百倍難しいくらいだな」

「そのやる気、気に入ったよ！…ん？パチュリーと言ったか？パチュ
リーってもしかしてパチュリー・ノーレッジの事かい？」

「あ？そうだけどなんでお前が知ってるんだ？もしかして霊夢にでも
聞いたのか？」

「いや、パチュリーは古い友人なのさ。私たちが今ここに住んでいる

のも彼女のおかげだと言ってもいい。地上に戻ったらお礼でも言っておいてくれよ。五体満足で帰れたら、だけどね」

「不吉なことを言うなよ。それはともかくパチュリーなら今話せるぜ。河童の発明したこの道具を使えばな。この私に勝てたら話をさせてやる、と言ったらどうする？」

「それは俄然やる気が出てきたねえ。本気で相手をしてやろう。お前さんはこの盃の中の酒を零すか私の弾幕を全て避け切れれば勝ちだ。どうだい？」

「良いぜ、勝つのは私だしな！さ、仕切り直してもう一戦だぜ」

パチュリー side

勇儀と私に接点があることが割れてしまった。まあ特に困るような事でもないから構わないのだけれど。

「貴方、地底にも知り合いがいたの？初耳なんだけど」

「言っていないかったもの。でも私と萃香は仲が良いでしょう？そこからも推測できたのではないの？」

「そんなこと気にしないでしょ、普通。それに萃香は他の皆とも結構仲がよさそうに見えるし」

「確かにそういわれればそうね。まあ勇儀も萃香も彼女たちが地底に行く前からの私の友人なのよ。鬼は怖いイメージがあるけれど話してみるといい人たちばかりよ」

彼らは嘘を嫌うから自分を偽って会話をする事が無い。話している気分が良いのだ。

「そんな話をしているうちに決着が着きそうかしらね。勝つのはどちらかしらね」

『さあさあ、いよいよこれで最後だ。存分に楽しみな!』” 四天王奥義
『三步必殺』”

『くっ、これは………痛てっ』

あちやあ負けたか。残念だが力試しは勇儀の勝ち。異変解決は霊夢に任せることになってしまった。

『はっはっはっ! 私の勝ちだね。約束通りパチュリーと話をさせてもらおうか』

『ちえ、勝てると思っていただけがなあ。だが約束は約束だ。話しかければ応じてくれるはずだぜ。あくあ、今回の異変はここで終わりかあ。霊夢に追いつくのはまだまだ先だぜ』

『私に三步必殺まで使わせたんだ。自信持ちなよ。さて、話しかけてみようかね』

「別にそちらから話しかけなくてもこちらからでも話しかけられるわよ」

『お? パチュリーかい? 私たちの話は全部聞いていたってことか。しかしました話ができるとは思ってなかったよ。萃香から私たち鬼の事情は聞いているだろう?』

萃香はあんたの忠告が助かったと言っていたし私もそう思う。人間に愛想を尽かせるのは時間の問題だったがまさかあんなに早いとは思っていなかったがね」

「まあなんにせよ元気そうで何よりだね。それよりもあなたが私の名前を憶えていることに驚いているわね、正直」

一度一緒に酒を飲んだだけの相手を覚えているとは驚きだ。私の方はインチキのようなものだし。

『鬼を馬鹿にするとは流石。パチュリーだ。今度地底に来た時には存分に相手してやろう』

「別に馬鹿にしたつもりは無いわ。ただ随分昔に一度しか会っていないはずなのに覚えているなんて驚きだ、というだけよ。それに相手

するのはせめて美鈴にして頂戴。私があなたと戦うと死んでしまうわ」

冗談抜きで。普通の鬼ならともかく四天王クラスは相手にしたくない。私の場合は軽い拳一発でKO間違いなしだ。

『なんだそんなことだったのかい。そりやあ覚えてるさ。あの時代、鬼に打ち勝つ人間どころか妖怪すらほとんどいないようなものだったんだ。あなたたちの衝撃は当時の私たちにとって相当だったからね。』

さて、長々話していてもこの人間の嬢ちゃんが可哀そうだ。地底は人間には住みやすい場所ではないからね。そろそろ帰した方が良さだろうね』

「ええ、そうして頂戴。途中で面倒な鬼に絡まれないように縦穴付近まで送ってくれないかしら」

『私もこの人間が気に入ったからね。それくらいはしてやろう。ほら嬢ちゃん、来な』

『ちえ、負けた上に護衛までされるなんて屈辱だぜ』

まあ仕方ない。昔はそれほどでもなかったが、恐らく今の鬼たちは絡み方が面倒になってきているだろう。それに多分勇儀のようにスペルカードルールでは戦ってくれそうもない。絡まれると面倒なうえに危険だ。

その危険も勇儀がいればほぼなくなると言っている。勇儀の方も快諾してくれたので大助かりだ。

「ほんと、貴方ってどこにでも知り合いがいるのね。魔界に冥界に地底、それに話では天界や月にもいるらしいじゃない」

まだ外の世界にいる妖怪もいるけれど。でも確かにそういわれてみると様々な場所に知り合いがいるものだ。千年以上もかけた旅は無駄ではなかったという事だ。

「あなたよりはるかに長く生きているもの。そのくらいいても不思議ではないでしょう?」

「そういうものかしら。魔法使いつてそんなに歩き回らないと思うのだけど……………」

まあ言われてみれば確かにそうなのだが。魔法使いにとっては旅自体あまりすることではない。私の両親がおかしかったのかもしれない。もうこの世にはいない両親であるが感謝はしている。

「まあそれは良いじゃない。とりあえず大穴まで魔理沙を迎えに行つてあげましようか」

間欠泉が湧いたという事で早速温泉ができているかもしれない。妖怪の建築の速さはこういうところで生かされるべきだろう。

不摂生的第五十四話

レミリア side

間欠泉の異変は結局霊夢が地底の主とそのペット及び妹と守矢の風祝を倒して一先ずは終了したらしい。魔理沙は途中でリタイアしたという事で精神的に参っているのかと思っていたが全然そんなことは無いらしい。

むしろ前よりも一度に持つて帰る本の量が増えたとかで、パチエも文句は言いつつ咎めはしないようだ。『次回以降はリタイアしないよう、魔法の勉強をより多くするようになった結果だと思おう』かららしい。そんなこんなで紅魔館は今日もいつも通り賑やかだ。

そういえば今日はパチエから私に話があるから図書館に来てくれと言われていたのだった。私にしか頼めない用事だと言っていたが何なのだろうか。

「パチエく？どこにいるのよ〜」

図書館が広いせいでパチエがどこにいるかさっぱりわからない。小悪魔でもいれば楽になるけど。

「……………ここよ。もう来てくれたのね、助かるわ。さて、いきなりで悪いのだけれどあなたはフランドールをどうしたいかしら？」

「フランを？一体どういう事？」

別にフランが何か悪いことをしたわけではないと思うのだが…。まさか大結界を故意に破壊しようとしたとか…？

「あー、聞き方が悪かったわね。あなたはフランドールの狂気をどうにかしたいと思ったことは無いかしら」

「それはあるわよ。でもどうして？…まさか解決策が見つかったの？」

フランの狂気はあまり出てこないために体術は赤子同然。だから戦闘力はフランよりはるかに低いが能力だけは別だ。『ありとあらゆる』

るものを破壊する程度の能力』この威力はフランの持つ力に依存する。

使い方が単純であるがゆえに狂気の方もフランと同じだけの力を出すことができるのだ。本能的になる狂気は如何なるものにも能力の行使を厭わない。このままいくと私たち紅魔館の住人が狂気を如何に上手く抑えるか、というのが一番の課題になるかもしれない。

「現実ではないけれど力の弱い今なら何とかできるかもしれない。そのためにレミイには地底におつかいに行ってもらいたいんだよ」

現実ではないにしろどうかできる可能性があるのなら私はただあの子のために行動するのみ。しかし館の主人を使い走りにする居候なんざ見たことも無い。

だが普段は自分で行動するパチエがわざわざ私につかいを頼むというのには何かしらの理由があるのだろう。ならば私に行かない、という選択肢はない。

「地底ねえ。そういえば規制はかなり緩和されたから行きやすくはなったんだっけ。いいわよ、フランの為なら地の底にだって行ってやろうじゃないの」

「レミイならそう言ってくれらると思っていたわ。でもこれはレミイの為でもあるのよ。今はまだわからないでしょうけれど。早速で悪いけれど明日行ってくれるかしら」

「確かにできるだけ早い方が良いものね。それで、私は何をすればいいのかしら？」

「あなたにしてもらいたいことは私がこれから書く手紙を地霊殿の主が届けること。明日訪ねると紫から伝えてくれるから恐らく案内が穴の付近まで来てくれるわ。その子について行って頂戴。地底に降りる穴までは私もついて行くわ」

明日行くことは既に決められていたことだったのか。という事はパチエの私への質問の答えも既に決定されていたようなものだったという事か。運命を操る程度の能力が聞いて呆れそうだ。

というかパチエは八雲紫に伝言を頼んだのか。恐らく地上と地底の往来規制緩和の話し合いの時のついでとしてだろうが、それをあの八雲紫が承諾するとは。

「何も私じゃなくても良かったんじゃないの？美鈴や咲夜でも良さそうだけど」

「言ったでしょう？これは美鈴ではなく咲夜でも勿論私でもない、あなたにしか頼めない事なのよ。さつき私が言った“レミイの為でもある”というのはフランドールの狂気がなくなるかもしれないことに対してのものではない。今はまだ言えないけれどきつと明日になれば判るわ」

　　パチエにしては珍しくはつきりとした答えが返ってこない。判らなくて気になるし己の運命でも覗いてやろうか。

「言っておくけれど運命を見てスッキリしようとするのは無しね。少なくともあなたが地底から帰ってくるまでは」

「そ、そんなずるいことしないわよ。まったくパチエも心配症ねえ」

「目が泳いでいるわよ、レミイ。あなたは昔からわかりやすいわ。でもきつとそんな性格の方が地底の者たちからは好かれるでしょうね。絡まれたら面倒なのだけけれど」

「うー、やっぱりパチエに隠し事はできないわね。それで明日だったわね。言われた通り楽しみで止めておくわ」

「そうして頂戴。さて、話は以上よ。何か他に質問は無い？」

「他に質問、ねえ。特にはなさそうだけど…あつ、そうだ。地底って熱源が近いから相当暑いんじゃないの？」

「一応地霊殿が灼熱地獄に蓋をする形で建っているから旧都辺りはそれほど暑くないはずよ。地霊殿内部は…恐らく大丈夫なように造ってはあると思うけれど行ってみなければわからないわね」

「そうなのね。気を付けておくわ。それじゃあ私はもう部屋に戻つてもいいのかしら？」

「ええ、引き受けてくれてありがとう。また明日よろしくね」

フランの狂気を何とかできれば安心してフランを外に出してやれる。彼女の為にも紅魔館の未来の為にも私は私のすべきことをしよう。

「それじゃあよろしくね。レミイもお燐も」

「地霊殿まで案内するだけなんだからこつそり死体を運ぶよりも簡単なことさ。だから吸血鬼の嬢ちゃんも心配はいらないよ」

「そう、まあ私は貴方を信じることしかできないんだけどね。しつかり案内してもらおうわよ、火焰猫燐」

「気軽に燐と呼んでおくれよ。しかしわざわざさとり様をお願いとは珍しい」「さとり様？」

「地霊殿の主であたいらの飼い主さ。争いごとは好まないみたいだけど強いから歯向かわない方が良いでしょう」

うーむ、どのような姿なのだろうか。好戦的ではない分ありがたいが、ごつい妖怪だったら一緒に話しづらいかもしれない。

「とりあえずレミイに渡した手紙をきちんと届けられるようにはして頂戴ね。私はもう帰るから」

「任せなさい。私だって弱くはないんだから大丈夫よ。それにいぎとなつたらお燐もいるしね」

「おっと、これは責任重大だねえ。ま、安心してついてきなよ。そんなじゃ行くとするかね」

ここから先は地底。聞いたところによると地上では忌み嫌われた

者たちが楽しく過ごしている場所らしい。忌み嫌われるという事はそれほどまでに強いのか、能力が非常に厄介かのどちらかなのだろう。いずれにしても日の光の届かない地底は結構ありなのかもしれない。

「それでお嬢さんはどうして地底なんかには？ いや、別に地底が悪いところだと言いたいわけではないんだけどね」

「レミリアでいいわよ。そうね。私がおここに来たのは愛すべき妹のため、とでも言いましょうか。私の妹が抱えている問題を解決できるかもしれない人が地底にいるらしいわ。それ以上の事は手紙に書かれているみたいで私も内容は知らないわ」

「へえ、その問題って言うのは何なんだい？」 「狂気よ」

「狂気？ 地底にそんなものを操れる妖怪なんていたっけなあ」

「狂気を操るのは効果が無かったわ。これは地上の兎で実証済み。だから恐らく別方向のアプローチなんでしょうね」

「専門外だからあたいには難しいね。でも多分さとり様はとも知識量が多いからきつと何かいい案を考えてくれるよ。「だといいいけど」ほらそんなことを言っている間に地霊殿だよ」

途中でも厄介そうな橋姫や鬼なんかがいたがお隣と一緒にいるせいか大して絡まれずに済んだ。

「結構広いのね。慣れていない場所でここまで広ければ迷ってしまうかもしれないわね」

「大丈夫だって。客間に案内すればいいのかな…。とりあえずついて

きておくれ」

急に不安になるような言い方になったが昔から客は客間と相場が決まっているものだ。少なくとも西洋では。

「それはこの国日本でも同じようなものですよ、西洋とは少々異なりますが」

「うわっ、さとり様?!いきなり出てこないで下さいよ。びっくりするじゃないですか」

これがさとり様なのか?想像していた見た目と違いすぎて脳が混乱する。それにさつき急に心を読まれたような…まるで覚妖怪のようだ。

「おや、覚妖怪を知っているのですか。見た目とは正反対に日本の妖怪にも詳しいみたいですね。申し遅れましたね。私は古明地さとり、貴方の予想通り覚妖怪です」

「私はレミリア・スカーレット、吸血鬼よ」

「なるほど……お燐、あの方を連れてきてくれるかしら。今の時間なら居酒屋にいると思うから」

「は、はあ。そんな気はしていましたが……。わかりましたすぐに連れてきますよ」

一体誰を連れてくると言うのだろうか。居酒屋にいるという事は鬼なのだろうか。あまり絡まれたくない相手ではあるが……。

「誰を呼んだかは今は言えませんが直にわかりますよ。親友のパチュリーさんが貴女を使いに出したのは恐らくこれが理由でしょうね」

さとりのせいで余計にわからなくなった。一体どうしてくれようか。

「そういえばレミリアさんは私の能力について何も思わないのですね。ほとんどの妖怪は忌避するのですが」

「別に心を読まれてまずいことなんて考えないもの」

「自分に正直に生きていれば心を読まれても困ることは無い、ですか。まるで鬼たちと同じような考え方ですね」

だってそうだろう。普通は誰だって隠し事の一つや二つあるものであるが私の場合はそんなものがあってもすぐに館の皆にばれてしまう。そんな隠し事なら作らなければいいのだ。

「ただし館の外への唯一の隠し事は料理が得意な事ですか。私も料理はしますが是非貴方の料理も食べてみたいものですね」

「やっぱりさとりには簡単にはばれてしまうわね。そうなると避けられなくなるじゃない。調理器具さえ貸してくれるなら昼食は作ってあげるわ」

流石にここまで知られてしまったら意地でも作らない、という事はしない。

「ふふっ、優しいんですね。…あら、そういうわけではないのですか」
そう、優しさではなくこれは紅魔館の当主としてのプライドだ。楽しみにさせるような考えを持ったのにその楽しみを奪うような事をするほど私は狭量な妖怪ではない、と思いたい。

「なかなか面白い方ですね。心の中で言い訳をしても私にはすべてが見えているというのに」

全てが見えてしまうせいで辛いこともあるのだろう。見たくないものまで見えてしまう、つまりは人間や妖怪の汚いところを嫌というほど見てきたのだろう。

「何か相談があれば乗ってあげるけど、どうかしら？」

「貴方はお人好しなんですね。地上の賢者から聞いていたイメージからは随分と違いますね」

それは恐らく八雲紫との関係上彼女の前では当主として話すことの方が多からだろう。しかし私がお人好し、か。美鈴やパチエの影響かもしれない。

「パチエ、というのはパチュリーさんの事ですよ。美鈴というのは紅美鈴さんの事でしょうか」

「ええ、そうだけどどうして知っているの？」

「彼女の知り合いも地底にはいますからね。それに私がまだ地上にいた頃に名前を聞いたことがあるんです。彼女の名前は大都庶樺菜とセツトでよく出てきますし古い妖怪で知らない者は少ないと思いますよ」

強いとは思っていたがそこまで大物だったとは。お父様は一体どんな手を使って彼女を雇ったのだろうか。というか大都庶樺菜って誰だろうか。もしかしたら美鈴と一緒に日本にいたことがあるパチエなのかもしれないが帰ったら美鈴に聞いてみるのもいいかもしれない。

「……と、そんな話をしていたらお隣が帰ってきたようですね。入ってもいいですよ」

「全く、人が折角楽しく飲んでいたのにいきなり連れて来させるとは流石さとりだな。一体何の用なんだ……お前はまさか……………レミリアか？」

「お父……様？何故こんな場所にいるのですか？隠居するとは言って
いましたけど」

訳が分からない。それにこうなることが分かっていたという事は
パチエもお父様がここにいることを知っていたことになる。

「やはりレミリアだったか。ここはパチュリーに薦められてきたの
だ。丁度隠居先は決めていなかったしな。八雲の奴に連れてきても
らったがここは私にとっては住みやすい場所だ。何より日光が無い
というのが素晴らしい。少々けんかつ早い連中は多いが」

「そうだったのですね。この五百年間一度も会わなかったので最悪死
も覚悟していましたが元気なようで何よりです。しかし隠居してま
で酒ばかりというのは良くないですよ。きちんとした物は食べてい
るのですか？」

「ぐっ、まさか娘に説教されることになるとは……」

当たり前前だ。流石に酒ばかり飲んでいるというのは娘として看過
できない。

「そうそう、私は本来さとりに手紙を渡しに来たんだったわね。はい、
これよ。私は少し昼食を作ってくるからその間に読んでおいて頂戴。
たまにはお父様にもきちんとした物を食べてもらいたいですしね」

「ほう、レミリアは料理もできるようになったのか。いやはや我が子
の成長を身に染みて感じるなあ」

「話をそらさないで下さいよ。まったくお母様も大層苦勞なされたの
でしょうね」

昔はもつとましかったのだろうが今の状態は見えない。丁
度さつきさとりに約束したところだったし早速昼食を作ることにし
よう。話し合いはその後だ。

「厨房はここを出てすぐの階段を…つと、口で説明するのも面倒ですね。お隣、案内してあげてください」 「了解です、さとり様」
紅魔館でもペットとして何か飼うのもいいかもしれない。咲夜に頼めば何か珍しい動物を捕まえてきてくれるかもしれない。

監禁的第五十五話

さとり side

もう五百年ほど昔に突然西洋の妖怪がやってきた時は驚いた。そもそも地底は閉鎖的で外から誰かが来ることすら珍しかったのだから。地上で妖怪の賢者と名乗る妖怪がいることは鬼にも聞いていたから知っていた。そのおかげで混乱せずに対応できたから助かった。

今は流暢にこちらの言葉を話す彼だが初めはひどかったものだ。彼にこちらの言語を教えたのは主に関わっていた鬼たちだったが、教え方が適當すぎるせいで習得にはかなりの年月が必要だったようだ。確か五十年くらいかかっていたはずだ。

そんな彼も今は地底で楽しくやっているといるみたいだ。彼は悪い妖怪ではない。少なくとも私の事を能力のみによって嫌う者たちよりはいい妖怪だろう。珍しい妖怪ではあるが。これは今日レミアさんが訪ねてきた時にも思ったことだ。やはり親子は似るものなのだろうか。

そういえば彼女にも妹がいるみたいだ。彼女には伝えていないが実は私にも妹がいる。いつもふらふらと何処かへ行ってしまうせいでどこにいいのかはさっぱりわからないが。

だから先ほどレミアさんから何か相談はないかと聞かれた時につい相談しようと考えてしまったが踏みとどまることができた。あの子が第三の眼を閉じてしまったのは私にも責任がある。それを事情の知らないレミアさんに相談するのは少し悪いと感じた。

今は彼女が昼食を作ってくれているみたいなので私は手紙に目を通しておかなければならない。わざわざ地底に頼みに来るほどのお願いとは何なのだろうか。レミアさんの心を覗いても妹に関する事だという以外はわからなかった。百聞は一見に如かず、一先ず手紙を読めばわかるだろう。

~~~~~

地霊殿主人 古明地さとり様



急な訪問を承諾していただき誠にありがたい限りです。この手紙を読んでいるという事は、今回地底にまで頼みごとをしに行つた理由は大体把握できていることでしょう。確認のためここにも記しておきますが、ずばりレミリアの妹であるフランドール・スカレットの事に関してです。彼女は生まれ持った強力な能力故か稀に狂気の人格が出てきてしまうのです。狂気の人格になると破壊本能が理性を完全に超越してしまい、片っ端から物を破壊しようとするようになってしまうのです。今はまだ何とか抑えられる程度ですが妖怪は長生きをするものです。これから数百年、数千年が経つてしまえば彼女の狂気的人格を止められる者はいなくなってしまうでしょう。そうならないためにも是非貴方の妹、古明地こいしさんの力をお借りしたいと思つている次第でございます。

博麗の巫女に話を聞いたところ、こいしさんは無意識を操ることができるとの事です。そして昔私と私の使い魔で確認したところ狂気的人格というのは実はフランドールの無意識の状態であるようです。つまり無意識を操りフランドールの狂気的人格を完全に制御してしまいたい、というのが私の考えなのです。勿論こいしさんの能力に頼るだけでなく、こちらでもその補助のための術式は組みます。そもそもこいしさんの居場所の特定が難しいことは理解しております。そちらの方は私の友人の協力を仰いで何とか出来ましょう。

そちらの都合を考えずこちらの都合のみを考えているようで非常に申し訳ないのですがどうか協力願えないでしょうか。返事は今すぐでなくても構いません。もし協力してもいい、と思われましたらこの手紙に同封してある結晶に貴方自身の妖力を籠めていただければこちらに伝わるようになっていきます。この結晶は初めに手紙の封を切つた者の妖力を記憶しておくように作られています。仮に貴方が古明地さとりではないとすれば私の立てた計画はたちまち破綻することになってしまいますが、レミリアがそんなへまをやらかすわけはないと信じてこのような作りに致しました。もし、協力する気が無いのならば灼熱地獄にでも放り込んでおいてください。魔力の結晶ですので有害な廃棄物とならずに消滅します。

どうか良い返事を期待しております。

紅魔館図書

館長 パチュリー・ノーレッジ

~~~~~

ふむ、特にこれと言って断る理由もないがあとはレミアさんとの話し合い次第だ。彼女がこいしに協力してもらおう事を是とするかどうか。まあ答えは心を読む前からわかっているようなものだが。

「お待ちせ、昼食ができたわよ」「私もいますよ」

「あら、とても早かったですね。それにお空も」

…え、これでも慣れない厨房だから手間取った方？普段は恐ろしい速さで料理ができているようだ。味の方はかなり自信がある様子。

これは麻婆豆腐か。彼女の父親には良くなさそうだが。

「あ、お父様は別に作ってありますよ。勿論そんな刺激物を食べさせるわけにはいきません。お父様の分は……はい、これです」

焼き魚に野菜のスープ、納豆と白米とは。というか米とかいつの間に炊いていたんだ。……どうやらお空の力も借りて米を炊いたからここまで早かったみたいだ。芯は残っていないのだろうか。

「……凄く和食っぽいな。納豆なんて食べたことも無いが。まあ売られている物なら不味いという事もあるまい」

「今回使った材料は全て紅魔館で育てて作った物ですよ、お父様。パチュリーが私にこれを持たせていた意味がようやく分かりましたよ。一体どこまでお見通しなのやら……」

レミアさんがここで料理をすることはパチュリーさんの中では既に確定事項だったのか。それに彼女の父親が不摂生な生活をしていることも。

「紅魔館で……？それは食べても大丈夫な物なんだろうな。折角レミ

リアが作ってくれたのだから食べたい気持ちはあるのだが」

実際に食べたい気持ちと危ないかもしれないという気持ちが拮抗しているようだ。

「勿論ですよ。育てているのは美鈴ですし加工しているのもパチユリーはじめ信頼できる者たちですからね」

「そうか、ならば安心して食べれば良いのだな。私も麻婆豆腐を食べたかったが致し方あるまい」

「普段私が紅魔館の住人以外に料理をすること自体ほとんどないのですからよく味わって食べてくださいよお父様。それにさとりたちもね」

肉は動物由来のものではなく大豆から加工したものらしい。お空への気遣いなのだろうか。実は特に気遣わなくても大丈夫なのだがこれは言わなければならぬ事でもないだろう。

「いやはや、質素なものだと侮っていたが美味しかったぞ。ごちそうさま」

「それは良かったです。料理には少々自信がありますがそういったもらえると嬉しいですね」

「こつちも美味しかったよ。辛さも丁度良かったねえ」

「それは良かったわ。さとりも満足してもらえたかしら?」「ええ、とても美味しかったですよ」

これは料理に自信があるのも頷ける。他人にあまり振る舞わないのは……なるほど。地上の妖怪も様々な事情があるみたいだ。

「じゃあ話し合いを始めましょうか。手紙はもう読んだかしら?」

「はい。一応貴方もご覧になっておいた方が良いでしょう。私が初めに読む選択は間違っていないなかったようですが」「?まあいいわ」

「ん?そういうえばレミリアがわざわざここまで来た用事とは何なんだ?」

「貴方も一緒に手紙をご覧になった方が良いでしょう。私は少し待っておきますから」

「……………なるほどね。貴方にも妹がいたのね。それで、さとりはこれを読んでどう思ったの?」

「どう、と言われましたも。私としては協力するのも悪くはないのですが……………いかんせんこいしがどこに居るのが全く分かりませんし、もしかしたらこいしが嫌がるかもしれない」

「確かにこれは貴女だけの問題ではないものね。でも貴方としては特に問題はないみたいね。それならきっと大丈夫だわ。きっとフランとこいしは気が合うはずだから。それにこの私がこう言っているだもの」

確かに性格もそれほど違わなさそうではあるが。それにしてもレミリアさんが大丈夫だと言う根拠はまた別のところにあるらしい。私でもよくわからないのは不思議な事であるが。

「レミリアがそういう言う根拠が私にはよくわからないのですが」

「私の能力には覚の能力すら干渉することはできない。『運命を操る程度の能力』…他人の運命を操ることは普段はしないけど今回ばかり

は仕方ない。なにセフランのためだからね」

「レミリアも立派に成長したものだな。父親としては嬉しい限りだ」

「娘に説教されるのは恥ずかしい限りですけど。さて、さとりが協力に前向きならその結晶とやらに妖力を籠めてもいいわよ。私はこいの運命を操って定められた時に定められた場所に来てもらいましょう。そのためにも何かこいの妖力の痕跡があれば簡単になるのだけど」

そんなことでこいの行動を制限できるのならいつでもこいしに会えることになってしまう。しかし彼女の意思は本物のようだ。

「それでしたらこれなんかどうでしょうか」「よさそうね」

信じ切ることはできない。これは私の種族の問題でもあるのだが。

「……………よし、二日後に今度は紅魔館の皆でここに訪れるわ。正午くらいには始められるでしょう。パチエの術式が入るからどうぞすぐに終わってしまってください」

「…わかりました。ではまた二日後にお会いしましょう。しかしこいしは無意識状態なので本当にどこにいるかはわからないですよ」

「少しは他人の事を信用してみなさい。貴方には難しいことなのでしょうけど。それじゃあ私は帰るわね、さとり。また会いましょう、お父様」

「……………お燐、帰りも送ってあげてね」「はい。お任せください」

やはり他人を信じることは難しい……いや、そうではない。怖いのだ。他人を信じてしまうと裏切られた時の反動が大きくなってしま

う。人間も妖怪も心変わりは一瞬だ。私たち姉妹はいつもそれで傷ついてきたのだ。妖怪にとつて精神への攻撃は特に有効になる。だから私は他人を信じることをやめ、こいしは眼を閉じてしまった。裏切られる、という事が無いように。

結果として私は地霊殿に引きこもりがちになり、こいしはもはやどこにいいのかさえはつきりとしなくなってしまった。そのこいしが急に今日帰ってくるとは考えられないのも無理はない。

「大丈夫ですか？さとり様。最近ずっと思いつめたような表情をしています。それにもうすぐ紅魔館の皆さんがいらつしやる時間ですよ」

「ごめんなさいね、お憐。心配をかけてしまったかしら。でも大丈夫よ」

「ならいいんですけど。とにかくお客様を迎える準備はしておかないといけませんね」「そうね」

ペットに心配されるほど思いつめた表情だったとは我ながら恥ずかしいこともあるものだ。

「とっている間にもう来たみたいですね。あたいは玄関まで迎えに行ってきますよ」

前回とは異なり今回は大所帯だ。前回も来たレミアアさん、その妹のフランドールさん、手紙を書いたらしいパチュリーさん、その使い魔の悪魔さん、隙の無い佇まいの美鈴さん、最後に見慣れた帽子をかぶったこいし………「………え？こいし？どうしているの？」

「だから言ったでしょう？私の能力に干渉できる者などほとんどいないのよ。世の理からずれてしまっている者を除いてね」

例えば閻魔や博麗の巫女か。しかし本当にこいしが今日ここに帰ってくるなど思ってもみなかった。正直に言うとかかなり予想外

だった。

「やつほーお姉ちゃん。めでたい色の巫女は捕まえられなかったけどこの人たちが面白そうだからついてきちゃった」

「そういうわけよ。こいしも協力してくれるらしいわ。さっさと終わらせてから昼食にしましょうか。今日は前よりも多くの種類の食材を持って来たから楽しみにしていたらしいわよ」

「失敗しなければ、ですけどね」「あら、パチエの術式に失敗は無いわよね?」

「勿論よ。この術式の研究はもう何百年も昔からやってきた事。様々な装丁をしてきたけれど一番楽な術式に収まってくれたわね」

本当に様々な構想があつたらしい。思考の速さが並みの妖怪ではなくあの賢者と同等なのでかなり読みにくく、それくらいの事しかわからないが。

「それでは始めるわ。まずはフランドール、これを手に固定してその魔法陣の中心に立って……いえ、座っていた方が良いわね。今からあなたを眠らせるから」

眠っていた方が無意識を引き出しやすいからか。そして手を握らないようにするのは能力の発生を妨げるため。フランドールが眠った段階で身体全体を固定してこいしの能力で無意識を完全に制御してしまう、という作戦みたいだ。断片的にしか読み取れなかったが。「眠ったわね。さて、ここからはこいし、あなたの仕事になるわ。この魔法陣に妖力を流して起動してもらえるかしら。恐らくそれだけで無意識は外に出てくるはずよ」

「オツケー。それじゃあ行くよ」

「あなたハ誰? デモ知ラナイ人でモ関係ないヨ。ミンナ壊シチャエバ イッしよなんだカラ! キュツとして……アレ? どうして? ナン

でコンナ事にナツテルの？」

なんておぞましいモノなのだろうか。私の能力が効いていない事から正しく無意識であることはわかる。こんなモノの心など読みたくもないから無意識で助かったともいえる。

「お久しぶりね、狂気さん。これからあなたには辛い思いをしてもらうわ。抵抗してくれても構わないわよ」

無意識が眠ると意識が覚醒してしまうかもしれないから、か。まだ精神年齢（無意識にそんなものがあるのかは知らないが）が幼そうな狂気には丁度良い煽りになるだろう。フランドールさんは自身の分身のようなものを出すことができるようだが無意識の方はその方法すら知らないから拘束すれば抜け出されることは無いらしい。

「フランチちゃんが悲しまないようにするためにもうこうするしかないのよ。だから許してね」

フランチちゃん、か。こいしにも仲良くできる子ができて良かった。今考えることではないと思うが。

「ヤツ、ヤメロ！こんナ狭い檻ナンかに閉ジ込メルなんて！ウウウアアアアア！」

こいしの能力、私にもあまり理解できるものではないが今の狂気の言葉から、恐らく無意識の人格を無意志下の堅牢な檻に閉じ込めたのだろう。姉としては悲しめば良いのか喜べば良いのかわからないが、こいしは無意識を操ることに関しては既に一級品になってしまった。

対無意識に関して彼女の力は絶大だ。恐らくこいしが生きている間は半永久的に閉じ込めることが可能になるだろう。何せ無意識が檻を攻略しようとするのができるのはフランドールさんが無意識になっている時のみ。更に手足を拘束され能力まで封じられているとなれば抜け出すことは不可能だ。

「……………随分とあっけなかったわね。今までできなかつたのが嘘みたいだわ」

「ここまで簡単に事を運べたのは全てそのこいしのおかげよ。彼女の能力が借りられなければまた新たな術式を生み出さなければならなかった」

「それはたとえパチエでもまだ相当な時間が必要だったという事？」
「その通りよ。だから今回は本当に助かったわ。ありがとう、こいし。それに貴方が許可を出してくれなければこいしにも頼めなかったでしょう。さとりもありがとう、この結果を生み出せたのはあなたたち姉妹のおかげよ」

「そんなことはありません。私はただ………」
「いいえ。それは違うわ、さとり。確かに貴方は術の完成をただ見守っていただけなのかもしれないわ。でも私たち紅魔館のメンバーからすれば貴方もフランを救う事の一助となったことは疑いようもない事実。礼は受けなさいな」………
「そうですね。こういう時はどういたしまして、とでもいえば良いのでしょうか」

私が心を読まれる立場になるとは思ってもみなかった。しかし今まで罵声を浴びせられることはあっても感謝されることなど無いに等しかったのでこういう時にこういう態度で接すれば良いのかが全くわからない。

「そうそう、それで良いのよ。今日の昼は私が腕に縊りを掛けて最高級の料理を振る舞うわよ。折角フランがいるからお父様にも会わせてあげたかったけど」

彼は二日前に今日の事を聞いていたはずだ。という事はそろそろここに来てもおかしくはないはずだ。

「その心配はないみたいよ。でもまさか正午きっかりに来るなんてね。地底でどうやって時間がわかるのかしら……」

お久しぶりですね、スカーレット卿」

「ああ、久しぶりだな、パチユリー。それに美鈴と……ほう、人間か。そ

れに……そこにいる悪魔はまさかあの時の……？」

「そうですよ。私が館に来てすぐに召喚した低級の悪魔です。私たちは小悪魔と呼んでいますよ」

「いやはや、時の流れというのは侮れないものだな。レミリアだけでなくあの悪魔さえこうなってしまうとは。それで、フランドールは無事に出来たのか？」

「はい。今は眠っているだけです。私の料理が終わるまでには起きてもらわないといけません」

「そうかそうか。今日はちゃんとした昼食が出るように酒はまだ飲んでできていないぞ」

前回自分だけ違う料理を出されたことが相当参っているようだ。結局終始美味しいと言いながら食べていたが。

「それは当然の事ですよ、お父様」

心の中でも相当呆れているようだ。まあそうだろう、特に自身の父親なのだから。

「今日は本当にありがとう、さとりさんもこいしちゃんも。結構楽しかったからまた来たいかも。それにお父様もまた会えて嬉しかったよ」

「私はついでののか……まあいいフランドールにレミリア、お前たちが随分と成長していて私はとても嬉しく思ったよ。ただ私も隠居している身だ。だからそう何度も会いに来るんじゃないぞ」

「酒癖を指摘されたくないだけですよね」「おっ、おい！さとり！」

「へえ、じゃあ定期的に来てお父様に説教しないといけないかもしれ

ませんね? 「ぐっ」……冗談ですよ。立場上そんなに頻繁に地底に来れるわけではないですし、地上は地上で楽しいことも多いですからね」

『助かった』って……。親としての威厳が守れるようにここは黙っておいてあげよう。

「それじゃあ私たちはもう帰りますね、お父様。さとりとこいしもありがとう。今日は貴方たちに助けられたしその後もなかなか楽しめたわよ。また会いましょう」

“また会いましょう”、か。彼女の言葉は全て本心。嘘は混じっていない。

「私の方も楽しかったですよ。こちらこそ機会があればまた会いましょう」

だからこちらも本心でお返ししよう。彼女となら姉同士良好な関係を築けるかもしれない。私から会いに行くことはできそうもないが。

宝探しの第五十六話

パチユリー side

フランドールの事も落ち着いたので私としてはとてもほつとしている。あの日以来フランドールの外出にレミイが制限を掛けなくなったのはフランドールにとっても良かったことだろう。

今はもう随分とましになってきているが冬の間はかなり寒かったのでフランドールはよく地底の方にも遊びに行っていたようだ。レミイは逆に白玉楼に足よく通っていたが寒くはなかったのだろうか。修行で作った和菓子は幽々子のおやつになっていているらしい。そもそも多く作らないうえに幽々子がおやつとして食べているのならこちらに回ってこないのも当然の事だと言える。だから私たちはレミイが如何に上達したのかを知る術は今のところない。前回食べたのがもう一年ほど前の事なので劇的に味が変わっていてもおかしくないだろう。

フランドールは今日も相変わらず遊びに出ているが、今日は珍しくこいしの方から館に来たので湖の辺りで遊んでいるようだ。レミイは今日は当主としての仕事をしているので館にいる。つまり今この館にいるのはフランドール以外の住人とアリスというわけだ。レミイが冥界に行くのは二、三日に一度なので大体いつも通りなのだけれど。

こういうゆつくり本が読める静かな時には大概邪魔が入るものだから「邪魔するぜ!」……。

「あのですね、魔理沙さん。いつも言っているでしょう?ここは図書館なんですからもう少し静かに入ってきてくださいよ。パチユリー様に頼んで出禁にしますよ?」

「お、おう。次から気を付けるぜ。あいつならやりかねんからな」

個人を指定してはじく結界など私には張れない。いくら結界術を

習ったからと言つてもそこまで高度な結界は流石に専門外だ。つまり魔理沙を出禁にすることは現状できない。まあ静かになるのなら誤解させたままでも良いだろう。

「それより今日は本を借りに来たんじゃないんだよ。アリスとパチュリーの奴に用事があつて来たんだ」

「あら、珍しいわね。貴方が私たちを頼るなんて。パチュリー、明日は吹雪かもしれないから紅魔館に泊めてくれない?」

「確かに外に出るのは危ないかもしれないものね。でもレミイが許可するかどうか…」

「お前ら人の話を真面目に聞こうとしろよ。ちなみに明日は晴れだ。天子がそう言っていた気がするぜ。で、本題に入っているか?」

天子が地上に降りてきていたのか。紫がまだ冬眠しているから気づかれずに済んだのか、それとも単に見逃されただけなのか。

「ええ、勿論よ。ねえ、アリス」「そうね。早く言つて頂戴」

「もとはと言えばお前らが……はあ、もういいぜ。何言つても仕方ないだろうしな。今日来た理由はこれだ」

「何これ? UFO? どこか奇妙な術がかけてありそうだけど」「どこで拾ったのかしら?」

飛倉の欠片みたいだ。UFOに見えないのは恐らく私は正体を知っているから。ここは話を合わせて知らないふりをしておいた方が無難だろう。

「家の近くに落ちていたんだよ。お前らなら何かわかるかと思って持って来たってわけさ」

「なるほど。これを調べる前に一度外に出てみましょうか。フィールドワークも時には大切よ」

きつと今まで気づかなかったものが見えているはずだから。

「うーん、まあ確かにこれを詳しく調べるよりはあちこち調べまわった方が手掛かりはつかめるかもしれないな。同じような物をいくつか見かけたし。そうと決まれば外に出るか」

もう既にいくつか見つけていたのか。そうならそうと早く言ってくれれば良かったのに。

「うーん、さつきまでと特に変わったことはなさそうだな。手あたり次第に当たってみるか?」

「いえ、大きな変化があるわ。空を見てみなさい」

「おつ?空を飛ぶ船……あれはまさか宝船か?!こうしちやいられん。さつきと追いかけるぜ!」

「あつ、ちよつと待ちなさいよ!一人で行くと危ないわよ」

「仕方ないわね。あなたは魔理沙と一緒に行ってあげて頂戴。私は霊夢に伝えてくるわ」

「分かったわ。よろしくね、パチュリー」「アリスこそ頼んだわよ」

最悪の状況になってもアリスの交渉術があれば何とか大丈夫だろう。霊夢の方はもう既に聖輦船の存在に気付いているかもしれない。ちなみに船に宝なんて無い。

アリス side

「やっと追いついたわ、まったく。急に行くなんてやめてほしいわ」

「なんだ、やっとこさ追いついてきたのか。もう変なネズミと唐傘お化けは退治してきたぜ。それに別に来てくれなんて頼んだつもりも

ない」

「貴方一人だと危険な目に遭うかもしれないでしょう？ 貴方からすれば余計なお世話なのかもしれないけど」

「……別についてくるのは構わんがどうせアリスの出番なんて無いぜ」

「それならそれでいいのよ。何事もなく終わるのが一番なんだから」
私としても仕事は無いに越したことは無い。魔理沙は何か勘違いしているようだが手柄が欲しくて来ているわけではないのだ。宝にも特に興味はない。魔法の実験に使えるような物なら別だが船にそんな物は置いていないだろう。というかそもそも宝があるのかすら怪しい。

それにしてもまさか紅魔館に本を読みに行った結果空飛ぶ船を追いかけることになるなんて思いもしていなかった。

「それにしてもおかしな形の雲だな。まるで妖怪の仕業のようだぜ」

「違うわよ、魔理沙。雲の形をおかしくしているのが妖怪なのでは無くて、このおかしな形の雲が妖怪なのよ」

「ご名答、その通りよ。貴方たちが何者なのかは知らないけれどこの船に近づくと言うのなら追い払わせてもらうわよ。雲山」

雲山、と目の前の少女が言った途端に雲の妖怪が少女を守るように動いた。となるとあの妖怪は少女の護衛のようなものか。そしてこの雲の妖怪は前にパチュリーに見せてもらった本にも載っていた。

「まさか見越し入道？ 誰かの護衛を引き受けるような妖怪ではなかったような気がするのだけど」

「へえ、貴方なかなか面白いわね。この雲山は私が退治したの。もう入道は廃業しているわ」

妖怪にも廃業という概念があること自体が驚きだ。つまりこの入道はもう人間を襲う事はしなくなったという事なのだろう。

「……え？雲山何て言った？……ふんふん、なるほど……まさかこの黒いのが？……そうなのね」

「なんだ？急に独り言か？そういうのはよそでやってもらいたいんだが」

「あー、貴方たちへの対応を改めることにしたわ。もし私たちに勝てたら船に乗せてあげましょう。しかし私たちが勝てば貴方たちの持っているその飛宝を大人しく渡してもらおうわよ」

「なーんか怪しいが要は勝てばいいんだな。それなら私一人で十分だからアリスはそこで黙って見てな」

あちやあ、魔理沙が簡単に乗せられてしまった。相手にとっては勝っても負けても目的が達成できてしまう条件だ。勝てば問題ないが仮に負ければ追い返されるという、こちらにのみ不利な条件だ。魔理沙なら恐らく勝てるから大丈夫だとは思うが万が一もあり得る。

「いやー、楽勝楽勝。そんなに私に挑もうなんざ百年早いぜ。腕を磨いて出直して来な」

「素晴らしい。貴方ほどの実力があれば姐さんを復活させることもできそうね。私は雲居一輪。貴方たちは？」

「私は普通の魔法使いの霧雨魔理沙だ」「アリス・マーガトロイドよ」

「二人ともよろしく。これから短い船旅になると思うけどまあゆつく

りしていなさいな」

「ここは宝船じゃないのか？宝物は何処にあるんだ？」

「賊みたいなことを言うのね。宝なんて無いわよ、少なくともこの船には。この船は姐さんの弟君が残した法力で飛んでいるだけ」

「なんだ、期待して損したぜ。で、この船は何処に向かっているんだ？」

「この船の目的地は法界です」「法界い？なんだそれ。というか誰だお前」

「申し遅れました。私は村紗、この聖輦船の船長です。一輪が乗船を許可したという事はそれなりの力を持っているようですね。」

そして法界は無限の広さを持つ魔界のほんの一角です。貴方の持つその飛宝があればその封印を解くことができますのです」

魔界、そして封印された者のいる法界。直接会ったことは無いが魔界にいた時に魔界神から話だけなら聞いたことがある。大昔の僧侶にして大魔法使い、聖白蓮だろう。

「魔界……。魔法使いとしては是非行って見たかった処だ。お前もそうだろう？アリス」

「え？ええそうね。魔法使いたるもの魔界には興味があるもの」

そういえば紫と紅魔館の住人以外には私が魔界出身だという事を言っていないかった。だから魔理沙のこの質問もある意味では当然の事だ。不意の質問だったから危うかったけど。

「だよな。そういう事だから早速連れて行ってもらおうか」

「とは言ってももう直に着きますよ。ちなみにこの船は片道運航です。法界から帰ってこられるかは聖の気分次第ですよ」

「ちよ、今更それを言うか?!もう引き返せないじゃないか。まあなるようになるか。最悪その聖とかいう奴を倒して無理矢理帰らせればいいだけだしな」

それは恐らく厳しいだろう。魔法使いとしてはかなり高位の者だと聞いている。パチュリーに教えてもらった私でも勝てるかどうかわからない。

人間の魔法使いとしては魔理沙も強い力を持っているがそれはあくまで人間としてだ。彼女の實力は高位の魔法使いにはまだ遠く及ばないだろう。数十年後にはどうなっているかわからないけど。パチュリーも人間の成長速度は馬鹿にならないと言っていたし。

実際に私も最初の方の伸びはパチュリーから見ても凄かったらしい。数年前から徐々に伸び悩んできたと思っていたがそれは私が魔法使いとしての身体に馴染みかけているかららしい。確かにあの頃の場合はもう思い出せそうもない。

「そう言えばなんか魔法が使いやすくなってきたような…「ここはもう魔界だからね」…ってお前は！あの時のネズミじゃないか。やつぱりお前もこの船に関係があつたんだな」

「いや、まさか君のような人間が飛宝を持っているなんて思わなかったよ。あの時の私のダウンジングの結果も間違っただけじゃなかったというわけか。妖怪に恐れをなす訳でもないようだしなかなか興味深い人間だ」

「こら、ナズーリン。あまり長々と話している暇はないのですよ。…コホン、貴方たちを待っていましたよ。貴方たちの持つ飛宝とこの宝塔を使えばこの封印は解かれるのです。さあ、早速こちらへ渡してください」

確かにこのUFOのおもちゃには強い力が宿っているようだが見た目があまりにも変だ。何か認識阻害に近い術がかけられているのだろうか。

「封印を解くのは協力するつもりだが、ただ渡すのも癪だしわざわざここまで来たんだから土産の一つでも欲しいところだ。どうだ、私がお前に勝ったらこの飛宝とやらを一つくれないか？」

「うむ……………一つだけならいいでしょう。ただし私が勝てば全て渡して頂きますよ。「おう」それでは始めましょう。幻想郷で普及している戦い方は心得ていますので安心してください。では行きますよ」

「いつでも来な！」

宝塔『レイディアンントレジャーガン』

魔法使いとしてあの不思議なおもちゃを調べてみたいというのは確かにある。しかし戦ってまで欲しい物か、と聞かれるとそうでもないような気がする。今回に限っては自分の直感を信じてもいいだろう。

「流石は飛倉の破片を集めてきただけあります。約束通り一つは差し上げましょう。……………一つだけですよ」

「わかってるって。それでこの封印を解いたらどうなるんだ？」

「さあ、それはわかりません。この後の事は全て聖次第でしょう」
「少々早まったかなあ」

折角出てきたのに魔界に取り残されるなんてまっぴらごめんだ。絶対に出してくれるようにしないといけない。封印されるような魔法使いの性格がどうなのかはわからないが。

「では早速始めましょう。ついに聖への恩を返す時が来たのです！」

「なんだ？何も無いじゃないか。声も響かないし気持ち悪いぜまったく。魔法の力はどこからともなく湧いてくるが……」

「ああ、法の世界に光が満ちる。貴方たちがこの世界を開放してくれたの？」「お前は一体何者だ？」

「私の名は白蓮。遠い昔の僧侶であり魔法使いでもあります」

聞いていた通りか。まあ当然と言えば当然だろう。

「なんと同業者か。道理でこんな変な場所に封印されていたわけだ。一体どんな悪いことをしたって言うんだ？」

「という事は貴女も魔法を使うのですね。今はそんなにも大つぴらに魔法を使つて良い時代になったのですね。そしてここに封印された理由ですか……一番の理由は虐げられていた妖怪たちを匿っていることを知られてしまったことでしょう」

「なんだ、つまりお前は妖怪の味方だと言うんだな。それなら私がお前を退治するに足る理由になるな」

「私は妖怪の味方ですが人間の味方でもあるのです。そもそも私が目指す物は人間と妖怪が平等に暮らせる社会。素敵だと思いませんか？」

「人間と妖怪が平等だと？妖怪は人間より強いんだから人間の方こそもっと優遇されるべきだ。その時点ですでに平等なんかじゃない。お前のその理想論の内容はあくまで理想に過ぎないんだよ」

「つまり虐げられた妖怪を匿う私の行動は全面的に間違っていると言いたいのですね？」

「その通りだ。妖怪なんてのは退治するに限る。昔から人間はそうして自分たちを守っていたんだからな」

「期待も無駄になったという事ですね。私が寺にいた頃と人間は変わっていないな。誠に勝手に、全豹一斑であるッ！いぎ、南無三——！」

確かに人間は古くから自衛のために妖怪を退治してきた。しかしそれは集団としての人間が妖怪より強いことの証明に他ならない。いくら力の強い妖怪が相手でも人間は知恵を絞って戦ってきた。妖怪が人間を相手にすることはまさに諸刃の剣なのである。

それを踏まえ、妖怪の優位性のみを語る魔理沙は、確かに聖にとつては勝手で非常に見識の狭い人間として映ったのだろう。

紅魔館などを見ると人間と妖怪の平等が見えるはずだ。魔理沙はあまり長居しないからわかっているだけだろうが、紅魔館での咲夜の立ち位置は美鈴などの他の妖怪たちと比べても低くない。レミリアとフランが他より少し高いくらいであとの住人の立場は横一線だ。

身近な所に聖の言う人妖平等の場があるというのに聖の姿勢を非難する魔理沙には恐らく異変解決者としての意地とプライドもあるのだろう。

成長的第五十七話

白蓮 side

今の人間はなかなか強くなったものだ。いくら遊びであるとはいえ私も全力で相手をしたのに負けてしまうとは。

「私の勝ちだ。とりあえずここから出してくれ。今回の詫びはその後要求するぜ」

「ああ、本当に人間は変わらない。欲深さはあの時以上かもしれないが。しかし私が敗者であることは変わりようもない事実。帰りの安全は保障しましょう。先に船で待っていてください」

「なんだ？何か用事でもあるのか？それとも名残惜しいのか？」

「いえ、少し彼女と二人で話してみたいのです。今ここで」

ここに来てから一度も言葉を発していない彼女。彼女からも魔力が感じられるという事は魔法使いなのだろう。魔法に精通している者にしかわからないだろうが彼女の魔力の量とその練度は今しがた戦った人間をはるかに凌駕している。

彼女は強い。その上さっきの人間とは違い種族としての魔法使いだ。同業者としてこれ程気になることも無いだろう。

「そんなもの船の中でもできるんじゃないのか？この船は自動航行なんだ r……」「!？」

言葉が途切れ急に倒れてしまった。この瘴気にやられたか？いや、今の今まで耐えられているのにそのはずはない。となると何らかの病気か第三者の介入か……「っ！」

星をはじめ寺の妖怪たちも次々に倒れてゆく。これは確実に第三者の介入だ。未だに無事なのは私と魔法使いの彼女のみ。先ほど一

瞬ではあるが驚いた表情をしていたので、彼女が犯人であることもない。

しかしここは魔界の中でも他とは隔てられている法界。そう簡単に侵入することはできないはずなのだ。だとすると一体どういうわけなのだろうか。それに私と彼女だけが何もされていないのはどういった理由からなのだろうか。

「折角二人で話したいと言っていたのにそれに反論するのは駄目よね」

「だからと言って気絶させるのはどうかと思うわよ？」

「いいじゃない。どうせ彼女たちに私たちの姿を見られるのはいけなかったんだから。いずれにしても気絶はしてもらわないと」「はあ」

久々に会う彼女と、とても久しぶりな彼女。封印されていた私にとってはお互いの存在もありがたかった。

「神綺様（魔界神）に師匠（パチュリー）?!どうしてここに？」

どうやら彼女も二人の事を知っている様子。師匠は普段から外の世界にいるから知っているもおかしくはないが神綺様はほとんど魔界から出ていないはず。

「……貴方は魔界出身のですか？神綺様をご存じのようですが」

「……………ええ、そうよ。まだほとんど誰にも言っていないけど。魔理沙たちが気絶してくれていて助かったわ。それで、貴方こそパチュリーを知っているようだけど」

「彼女は私の魔法の師匠に当たります。とはいってもたった数年だけでしたが」

「パチュリーが師匠か。少し羨ましいわね。私も彼女に習う事はある

けど」

「ちよつとちよつと、何二人だけで話しているの？ 私たちも話に混ぜなさいよ」

「ちよつと神綺、あの子たちが二人で話したいと言ったから他を気絶させたんでしよう？ なら私たちが入ってはいけないわ」

「あー、別に構いませんよ。お二人を拒む理由も特に持ち合わせていませんし。貴方もそれで構いませんか？ えーと……」アリスよ。アリス・マーガトロイド。私も別に構わないわ」そういう事ですから入ってきていただいても問題ないですよ」

「そう。改めて久しぶりね、白蓮。かれこれ四百年ぶりくらいかしら。修行は怠らずにしつかり続けていた？」

「勿論です。魔界の神に誓って嘘ではないですよ」「そこは仏に誓いなさいよ」

「最近あまり見に来ていなかったけど元気そうで良かったわ。アリスちゃんも随分成長したみたいね」

「ところで神綺様とアリスさんはどういった関係で？」

「アリスちゃんは私が創った魔界人よ。言ったことなかったかしら。次に創るなら人間にしようかな、って」

「それ、言っていたのはもう四百年前よ。神の時間感覚はいつまでたっても慣れないものね」

恐らく師匠にだけ言っていたのだろう。私には聞き覚えが無い。しかし魔界神の子か。道理で関係は深そうだったわけだ。

「いいじゃないの。大抵の神なんてそんなものよ。まあそういうわけでこの子は魔界の出なのよ。私が創ったのにお母さんとも呼んでく

れないのよね」

「魔界の存在は皆貴方が創った者だけど、貴方の事をお母さんなんて呼ぶ人はいないでしょう？だから私も魔界神と呼ぶのよ」

「確かにそれも一理あるわね。まあアリスと神綺は久しぶりに会ったんだし少しは話でもしなさいな。私も白蓮と少し話がしたいから」

それはありがたい。私も師匠と久しぶりにじっくり話しておきたかったところだ。

「……仕方ないわね。まあ久々の里帰りみたいなものだしね」

パチユリーside

神綺が次に創ると言っていた人間はアリスの事だったらしい。一つの可能性として考えることはできたが流石に四百年も空けるとは思っていなかった。

今回も魔界に来るのは紫に頼んだ。彼女が神綺と知り合っていたおかげでスムーズに神綺のところまで行けたのはかなり助かった。魔界の最奥まで行くのは流石に面倒なのだ。

紫は私を送った後すぐに幻想郷に帰ってしまった。少しは残ってくれても良かったのだが彼女も色々としなければならぬことがあるのだろう。賢者は多忙そうだ。誘われる前に日本を出て良かった。

今は神綺の相手をアリスにしてもらって私は白蓮と話をしているわけだ。心配はしていなかったがあれから欠かさず修行に励み魔道具も増えたらしい。魔人経巻もその一つであるようだ。

「そうです師匠、ここはひとつ手合わせ願えませんか？私もあの頃と比べて強くなったと思っっています。一撃すら入れられなかったあの時とは違う事が証明できるのではないのでしょうか」

彼女の願いは聞いてあげたいが私よりもはるかに適任な者がここ

にいるだろう。

「彼女さえよければ……私ではなく彼女と戦ってみなさい。互いに手の内を知らない相手と手合わせするのは良い経験になるわ」

「確かに彼女と私なら実力も近いですし良い相手と言えますね。アリスさんが良ければ、ですが」

「まあ任せておきなさい。彼女ならきつと了承してくれるわ」

「……………というわけであなたと白蓮で一度戦ってみてくれないかしら」

「どうやら気が進まないようだ。まあアリスは魔理沙を追ってただついてきただけだし特に争いも好まないから仕方のないことではある。」

「白蓮は私の元弟子なのよ。そしてあなたも弟子とあまり変わらないでしょう？ 師は教え子の成長を見たいものなのよ。頼まれてくれないかしら」

「……パチュリーがそこまで言うなら引き受けるわよ。ただし負けても何も言わないで頂戴よ？」

「勝ち負けにはこだわらないから良いのよ。引き受けてくれてありがとう。白蓮にとつてもあなたにとつても良い経験になるといいわね」

結局それっぽいことを言っておアリスにも許可がもらえた。それっぽいことは言っているが言った言葉に嘘はない。アリスは本気を出さないだろうが、それでも成長度合いの見極めにはなる。

「では双方準備はできているわね？……それでは始めて頂戴」

魔法使い同士の戦いは基本的に後出しだ。先に仕掛けてしまうとそれへの対策が即座にされてしまうからだ。しかし白蓮は違う。彼女は身体強化を行って戦う。故に常に先手を取りに行く戦い方だ。

初めての相手と戦う事の意味がここにある。アリスは恐らく相手の出方を注意深く探っているのだろう。しかし身体強化を行った白蓮にそれは悪手だ。相手の予想外の行動に対応は僅かに遅れる。逆に手の内を知っていれば昔の私のように対策がとれる。まああれは結界術を学んでいたからこそだが。

白蓮に不意の一撃をもらうかと思ったがアリスは人形を駆使して防いだようだ。半ば本能的にやったものかもしれないがあの反射神経は素晴らしい。肉体と人形、これで互いに一枚ずつ手札を明かしたことになる。

二人にはまだまだ余裕がありそうだ。やはり手合わせは良い経験になる。今まで自分が積み上げてきたものを出すための場。存分に力を出して戦ってもらいたいものだ。命に危険が無い程度のところだ。

白蓮は一人であるのに対しアリスの方は数十もの人形を展開している。あれだけの数の人形を一度に操作するには一体どれほどの集中力が必要なのだろうか。そもそも簡単な人形劇の人形を操ることで精いっぱいな程度の器用さでしかない私にはたどり着けない疑問なのだろう。

いくら数の有利があっても相手は白蓮。人形たちでは止めるのにも限界がある。現に今優勢なのは白蓮だ。白蓮がかなりの速さで移動している上にアリスは人形たちに集中しているからなかなか追いついていないようだ。

「これ程までに器用な人には会ったことはありませんよ。魔法使いにも色々な人がいるものですね。折角ですので魔人経巻のお披露目といきましょう」

「それは光栄な事ね。ってその巻物はまさか魔界の……?」「ええ、その通り」

魔界の物質は意志を持つものが多い。いくら優れた魔法使いがいても魔人経巻は白蓮以外には扱えない。そのうえ紙媒体ではないた

め容量は実質無限。白蓮もなかなか恐ろしい物を作ったものだ。

ただ白蓮が先ほどもまでのように動き回らなくなった分、対処は多少しやすくなったみたいだ。普通の相手なら魔人経巻の方が厄介なものになるがアリスの場合は他の者と比べて対処する手が圧倒的に多い。流石にこれは白蓮も予想外の事だったようだ。魔人経巻はあまり活躍できずに一旦仕切り直した。

「まさかそのような対処の仕方は想定していませんでしたよ。私もまだまだですね」

「私以外なら効果的だったかもしれないわね。ただ私には全く効かなかったけど。次は私の番よ。とっておきを見せてあげるわ」

アリスが何やらとっておきを見せてくれるらしい。彼女が呪文を詠唱するのは珍しい。何が出てくるのだろうか。

「……魔界人形……魔界人形とは？」その名の通り魔界で作られた人形よ。作ったのは私。貴方もその巻物を作ったのなら知っているでしょう？この人形は私にしか操れない、私が最初に作った愛すべき人形よ。勿論今までの人形たちとは一味違うわよ？」……なかなか面白いですね」

私ですら知らなかった人形となると相当嚴重に保管されていたのだろう。見た目は可愛らしい人形だが感じ取れる雰囲気はそんなものではない。

「神綺は知っていたの？あの人形の事」

「勿論。だって魔界にいた頃は肌身離さず持っていたくらいなもの。あの人形は魔界の物で作られている。ともすれば人形自体に意思が宿ってしまう」

「つまり完全自律人形になってしまいかもしれないと。そんな形で夢が叶うのは少し悲しいことだと思っただけだね」「まああの子次第よ」

きつとアリスが追い求めているのは普通の材料で作った人形の自

律化だろう。もともと意思のある材料で作った人形が自律しても感動が薄い気がする。これは私の勝手な考えだが。

人形から感じる雰囲気はさながら悪魔のようだ。こあのような低級の者ではなく初めから上級である者のような圧倒的な禍々しき、魔法使いにしかわからないような独特の魔力を持っている。流石は魔界産とでも言うべきだろうか。

今までの人形を大幅に減らし、今アリスが操っている人形は先ほど召喚した物も含めて僅かに三体。それほどもまでにあの人形の制御は難しいという事だろう。しかし人形が減ればその分白蓮からの攻撃の対処はし辛くなる。

白蓮も再び魔人経巻を出して構えている。魔界で作られた人形と巻物。あの魔界人形も恐ろしい力は持っているそうだが白蓮を相手にするには不十分だろう。手数で白蓮に対処してきたアリスがその有利を捨てればどうなってしまうのだろうか。

「その人形の力は認めましょう。しかしその程度の手数では私を相手取ることではできません。教えてあげましょう。私の身体強化を」
超人『聖白蓮』

圧倒的な速さ。もはや私たちのような魔法使いの目で追う事は不可能だ。追えるのは天狗などの妖怪だけだろう。目を強化してもキツイ。移動範囲こそ広くないものの攻撃を当てるのは至難の業だろう。

対するアリスは再び呪文の詠唱。彼女が普段ならほとんど使わない大型の魔法陣だ。高速詠唱は昔私が教えたものだろう。魔法陣は全く知らなかったものだがその構成はとても美しく見える。

「フオールオブドール、今こそ集え我が娘たちよ」
『人形の滝』

アリスの一声とともに白蓮に襲い掛かるのは百や二百では足りない程の圧倒的な数の人形たち。白蓮が如何に速く動いても隙間なく襲い掛かる人形たちを躲すことはできない。まさに数の暴力だ。

しかしそうなると先ほどの魔界人形は戦闘用ではなくただの布石だったのだろうか。それにあの魔法陣は一体……？

「いやはや、油断していたつもりは無かったです……今回は私の負けです。非常に残念な事ではありませんが」

経験の差で白蓮が勝つかと思っていたが予想外だった。今回アリスが披露した魔法は私が全く知らない物だったし。

「白蓮もアリスも素晴らしかったわ。もはや私が何か言うのもおかしな事を感じるけれど。それでアリス、あの魔界人形はただの布石だったのかしら？」

「まあそう言えなくもないわね。あの人形には特別な細工がしてあるのよ。私たち魔法使いが苦手とする妖怪、天狗みたいな速い妖怪を相手にする時のためにね。私が高速移動物体を認めるとき、あの人形がその位置を正確に把握し私自身を一時的に操るようになってるの」

自分自身を操る、それはとても難しいことだ。自身の持つ主観的な視点に加えて客観的な視点も同時に持たなければならぬからだ。しようと思っても簡単にできることではない。並みの人妖なら脳が追いつかないだろう。

「恐ろしいことをするのね。それで最後の魔法陣はどうなの？構成に拘っていたみたいだけれど」

「流石パチュリー、分かってくれたのね。あの魔法陣も本当はもう少しシンプルに出来たわ。でも私が拘ったのは貴女の影響よ。昔見た貴方の魔法陣のように私も美しい魔法陣を描いてみたかったのよ。それで今回採用したのは白銀比の中でも大和比と呼ばれるものよ。上手くできていたようで良かったわ」

なるほど。昔アリスと初めて会った時に見せたあの魔法陣を意識していたのか。しかし黄金比に対して白銀比とは相当な拘りが見える。

「本当に見入ってしまったわ。素晴らしい構成だった。」

それで白蓮はどうだったかしら？不完全燃焼気味みたいだけれど」

「やはり見破られていましたか。まさか私が奥義を出す前に決着が着いてしまうとは……情けない限りです。アリスさんのあれは貴女の奥義だったのでしょうか」

「奥義を持つならさらにその奥義を持つこと。あれも奥義の一つではあるわね。ただ私の作った大量の人形たちを召喚するだけの魔法だけれど」

「私としてはその後の大量の人形操作の方がしんどい気がするのだけれど……」

「慣れてしまえばかなり楽になるし、あの時はそれぞれの人形に違う指示を出すのではなく同じ指示を出せばよかったから案外楽よ？」

個人的にはそれでもしんどいと思うが。

「パチュリィー？そろそろあの子たちが起きそうよ。私たちは退散しましょう」

「分かったわ。では二人ともまた幻想郷で会いましょう。またね」

「ええ」「さようなら」

教え子の成長を見るのはいいものだ。私もうかうかしていられないと再確認できたし。

懐古的第五十八話

レミリア side

前の宝船騒ぎからいくらか経って幻想郷を騒がせた妖怪たちも無事に住む場所が決まったらしい。里のすぐ近くに寺を建てたことで霊夢が悔しがっていたのは別の話だ。

今日は久しぶりに白玉楼に行けたのでとても楽しかった。あの頃に比べればかなりましにはなったけど何処か物足りない味になるのはどうすれば良いのだろうか。そういえば今夜は紅魔館の皆でミスティアの屋台に行くことになっていたのであった。

珍しくパチエから話を出してきたから驚いたものだ。なんでもパチエの弟子が騒ぎの主犯のようなものだったらしい。住職である彼女は酒を飲まないらしく、神社の宴会では楽しめないだろうから私たちだけでささやかな宴会をすることにしたらしい。

ミスティアの屋台は何度か行っているがそこまで大きいわけではない。貸し切りになっているらしいが紅魔館の住人と寺の者たちが行くとは当然足りない。どうするつもりなのだろうか。

天の声 side

そんなレミリアの心配もおかまもなく紅魔館住人と命蓮寺に住んでいる者、それにナズーリンを加えた小規模な宴会は開催される。酒を飲むのは紅魔館組のみ。聖以外はそれを羨ましそうに見ているが聖は気づかずパチユリーと話しているようだ。

屋台の席は当然足りないので皆レジヤシートのようなものの上に座っている。神社で行う宴会もそう変わらないからこれで十分なのだろう。調理をするのは屋台の女将であるミスティアと紅魔館から美鈴、命蓮寺から一輪の三人である。ミスティア以外の二人は後で誰かと交代するらしい。

一輪が料理を担当しているのは命蓮寺からの推薦などではなく

ちよつとしたゲームに負けたからだ。渋々やっているとはいえ手際はなかなか悪くないようだ。他の二人と比べて精進料理を作り慣れているのかもしれない。

食材の提供は勿論紅魔館。野菜だけでなく豆腐なども良質な物がいつも屋台に良心的な価格で提供されている。理由は単純。ミステアとレミアの仲が良好だからだ。互いに料理を好む妖怪であることもあって気が合うようだ。レミアの料理を食べたことのある数少ない妖怪のうちの一人でもある。

夜は妖怪の時間。純粹な人間など一人もいないこの小宴会がここから盛り上がっていくことは言うまでもない。不飲酒戒ふおんじゅかいによつて酒を戒められている少女たちも妖怪なので酒は好きである。盛り上がる宴会で酒を飲めないのは彼女たちも辛いのだろう。

「ねえ、ミステアだったっけ？ どうにかして私たちもお酒が飲めるように聖に掛け合ってくれない？」 「……般若湯として提供すればよろしいのでは？」

「うーん、でも聖だしねえ。大丈夫かしら」「それなら一つ試してみましようか」

般若湯を知っているミステアに少し驚いたようだが一輪は気にせず話を続けることにしたようだ。そしてミステアが取り出したのは何の変哲もない一升瓶。

「聖さん、般若湯でもどうです？ 折角の宴会なんですしお弟子さんたちの分もありますか」

聖相手に『酒』という単語を出すことは決してない。相手の事を考えなくてどうして商売人になれるだろうか。そのためには相手の気にしていることを知らなければならぬ。それが自然にできるミステアの観察眼は超一級品ともいえる。

弱者は常に相手の観察を怠らない。今でこそ襲われることの少なくなつた彼女だが、夜雀という種族柄常に危険と隣り合わせで生きて

きた経験が今の彼女を彼女たらしめているのかもしれない。

「しかし私には戒律がありますし……「いいじゃん聖。折角の宴会の場なんだし」……」

パチュリーと話していた村紗も急に話に入ってくる。彼女も寺に入ったのは妖怪になった後で元々は人間である。故に酒は好きなのだ

「実はこの般若湯、聖とも呼ばれていましたね。貴方にはぴったりのではないでしょうか？」

この場において聖以外は知っている。『聖』というのはただの清酒の呼び方の一つであることを。

「そ、そこまで言うのなら一杯だけ頂きましょう。皆さんも羽目は外さないように気を付けてくださいね」

何も知らない聖はこうなってしまう。ミステリアの作戦勝ちである。

「酒の名を聖と負わせし古の大き聖の言の宜しさ。貴方もそう思うでしょ？パチュリー」

「私はそこまで酒を飲むわけではないからねえ。それにあなたの言う意味と旅人の詠んだ意味は大きく異なるでしょうけどね。まあ清酒を聖と呼ぶからこそ今回聖は承諾したのでしょうかし、その点では確かにあなたたちにとってはその歌がすべてを表しているのかもしれないわね」

村紗を初め聖以外の者は喜んでいるようである。寺の者がそれでいいのかと言いたくなるが、妖怪に不飲酒戒は酷だということが分かっているの聖も大目に見ているのだろう。

酒が入れば場はさらに盛り上がる。するとその喧噪を聞きつけた妖怪が必然的に集まってくる。いつの間にか貸し切りであったはず

の屋台はいつもの宴会風景となんら変わりない物に変化してしまっ
た。

作る料理が増えたことでゲームに勝ったはずの村紗の方が辛く
なってしまっている。しかしこの騒ぎを作った原因の一つに彼女の
言葉もある。誰か一人のせいにすることはできない。

「……はあ。どうしてこうなったのかしら」「何辛気臭い顔してるの
よ、パチエ」

この騒ぎのせいでパチユリーの嘆きもすぐ横にいる親友レミリアにしか聞
こえない。

「レミィ、わかってるの？今回の宴会の費用は紅魔館持ちなのよ？こ
んなに増えるとは思ってもみなかったわ」

「わかってるわよ。何、この宴会の費用を出したところで財政難に
はならないから大丈夫よ。そんなこと気にしないで、はい、パチエ
も飲みなさいな」

パチユリーは財政難の心配ではなく予想外の大きな出費を嘆いて
いるのだが、酔ったレミリアには伝わらなかったようである。

「あなた飲み過ぎてないかしら。貰ったものは飲むけれどあなたもほ
どほどにしておきなさいよ？まあ困るのは自分だから構わないけれ
ど」

そしていつも通り夜は更ける。この騒ぎに乗じて聖の目を逃れた
命蓮寺メンバーがその後どうしたかは言わない方が聖のためだろう。

美鈴 side

想定外に妖怪たちが集まってしまったがこれはこれで楽しいもの
だ。本をただせば一輪さんがミスティアさんに酒の話を持ち掛けた
のがこの騒ぎの始まりだったがなかなかどうして悪くない。

パチユリーは何やら頭を抱えているようだがその隣のお嬢様は何
も気にしていないようだ。お嬢様がパチユリーを心配していないの
は親友だからなのだろうか。よくわからない。

「ねえ美鈴、何を考えてるの?」「いえ、ただボーっとしてただけですよ妹様」

「ふーん、そうなんだ。でも折角宴会なんだからもつと騒がなきゃ損だよ。美鈴もお酒飲みなよ」

「ちゃんと飲んでいますよ。でもそういう妹様様はあまり飲んでいないようですが」

「私日本酒ってあまり口に合わないのよ。だから咲夜が作ったブドウジュースを飲んでるの。ほら、そのの」

ああ、あの血が混ざっている奴か。お嬢様もあれなら飲めるらしい。はて、お嬢様の過去に何があったのだろうか。今となってはもう忘れてしまった。こういう事を記憶しておくのはパチュリーの仕事だろう。少し申し訳ないが。

もつと古い記憶もあるにはある。例えばあの子は初めて会った時から不思議な子だった。起きていきなり命乞いをされたのは鮮明に覚えている。面白かったから。その後も仙人や人間の真似事をする彼女を見て魔法使いとは不思議な種族なのだと感じたものだ。結局パチュリーが変だったただけだが。

千年にも及ぶ旅を通して私も色々学ぶことができたからあの時彼女を助けた私にはよくやったと言いたい気分だ。

「日本酒も美味しいですよ?慣れれば、ですけどね」

今は宴会を楽しむことを考えよう。験なき物を思はずは一坏の濁れる酒を飲むべくあるらし。今夜出る酒は清酒だけど。

フランドールside

ひっそりと始まった宴会も随分と妖怪が増えたものだ。数年前ま

での私はあまり騒ぎが好きではなかったが何度か宴会に参加するうちに慣れてしまった。

過去の私では考えられない程今の私は活発に(昼に)行動している。知らない人がたくさんいる恐怖ももうなくなつたし狂気で誰かを傷つけてしまう心配も無くなつたらしい。

ただ宴会で残念な事は出てくる酒が日本酒ばかりだという事だ。日本酒も好んで飲むお姉様とは違い私は日本酒があまり好きではない。何となく舌に合わないのだ。

お姉様は慣れの問題だという。確かにお姉様も初めは飲む度に顔をしかめていたのを思い出す。でもお姉様は諦めを知らない。これは唐突に料理を始めた時に分かつたことだ。初めの数年はひどい出来だつたと言わざるを得ない。結局は毎日美鈴の作るご飯を食べていたくらいだし。でもその後も諦めずに美鈴の料理を研究したり本を読んだりしてここまでの腕になっている。

そんなお姉様を一番近くで見ってきたのは私ではない。でもお姉様を一番尊敬しているのは私だろう。努力をすれば全て成功するわけではない。これはきつとお姉様が生まれ持った強運運命の力も関係しているのだろう。

私も努力をすれば何かが変わるのだろうか。友達を作る努力、慣れない事をする努力……私には何一つ足りていないのかもしれない。

咲夜 side

想定外に参加者が増えてしまった為、美鈴と交代した私は大忙しだ。本当ならゆっくり料理を作りながら夜雀と話ができればいいと思っていたのに。誰かに仕えているわけではない妖怪が料理をすることは珍しい。お嬢様以外にもいたというのは驚きだ。しかも美味しい。

どうして彼女は料理をするのか、それは全く分からない。お嬢様のようにただの趣味なのだろうか。しかしどこに属しているわけでもなく、いつ襲われてもおかしくないのに趣味で料理などしている暇は

あつたのだろうか。

料理を始めるきつかけは様々だ。聞いた話によるとお嬢様のきつかけはパチュリー様の留守にあつたらしい。主人に仕えている藍は勿論紫に出すために始めたのだろう。私は公の場で料理をするように仕込まれた。

私は自分がわからない。生まれた時期もわからず、親も知らない。いつの間にか魔物を討伐する組織に入っていて返り討ちにされたから今紅魔館で働いている。何故幻想を否定するあの場所で幻想の存在である私がいたのだろうか。幻想を否定する場所で新たな幻想は生まれないのでないだろうか。だとすると私が生まれたのはあの町ですらなかつたのかもしれない。

「咲夜さん、この料理あそこに持って行つてくれない?」「ええ、分かつたわ」

いずれにせよ今考えるべきことではなかつたか。過去の事なんて今となつてはどうでもいいのだから。

小悪魔 side

騒ぎが大きくなるにつれて植物由来の食材の料理から一転、肉料理が格段に多くなった。鶏肉は出てこないが。でも今回の宴会は肉料理は食べられないと思つていたので素直に嬉しい。それにしてもこの喧噪も今となつては心地く感じるようになった。

昔まだ魔界にいた頃は喧噪に近づくことさえ拒絶していた。私などよりはるかに強い者たちの集まりだったからだ。そんな場所は当時の私にとって恐怖でしかなかった。相手も悪魔であるという点では同じはずなのに。

召喚されることも私にとっては恐怖だったが術式からは絶対に逃れることはできなかつた。誰かに召喚されることを嫌がる悪魔なんてそんなにいないだろう。そもそも私のように小心な者は相当珍しい。

そんな私でも嫌な顔一つせず私を強くしてくれたパチュリー様と美鈴さんには感謝しても足りないくらいだ。面と向かって言うのは気恥ずかしいのでできないが。

あの頃はまだ生まれていなかったお嬢様も妹様もいつの間にか私の実力を追い越してしまった。パチュリー様が言うには私はもう強くなれないみたいだ。賢者の石の魔力量を考えると今の強さが限界らしい。それでも気にはならない。そもそも何の力もなかった私がここまで強くなれたのだから。

私は恐らくずっとパチュリー様に付いて行くだろう。たとえ彼女が道を踏み外してしまっただとしても。まあそうさせないようにするのも従者の仕事だろう。精々そうならない事を祈るばかりだ。

レミリアaside

そろそろ宴会も終盤だろう。流石にお酒を飲みすぎたかもしれない。普段の私らしくないがお酒が美味しいのが悪い。日本酒も慣れれば美味しいものだ。ワインも悪くないけど。

パチエは何やら頭を抱えている。財政難が問題なのではなかったのだろうか。そうなると悪いことをしてしまった。さつき答えた時はかなり適当に返事をしたような気がするし。挙句の果てにパチエから飲みすぎと言われてしまった。

少し喧嘩から離れて頭を冷やしに行くことにしよう。……流石は幻想郷、少し離れば辺りは真っ暗になる。宴会の音はかなりうるさく聞こえているが問題はない。

今更だがどうしてこんなにも大規模な宴会になってしまったのだろうか。お酒の力には誰も勝てなかったという事なのだろうか。まあフランのように酒を飲まずに楽しんでる妖怪もいるかもしれないが。しかしこうして毎回の宴会にフランも来てくれるようになったのは本当に嬉しいことだ。

引きこもりがちだったあの子を外に連れ出すために考えられたパチエの作戦は本当に素晴らしかった。彼女の頭脳に救われたことが

何度あっただろうか。逆に私がパチエに感謝されるようなことをしたことは何度あっただろうか。

今は料理くらいでしか貢献できていないかもしれない。でもいつか私がパチエより強くなれたなら今までの積もり積もった礼はきっちり返したいものだ。パチエより強くなれるかどうか、今はまだわからないけど。

エピソードの第五十九話

私がこの世に生を享けてから既に1700年近くが経った。初めの頃は途方もない年月に思えて軽く絶望しかけたものだが今となってはいい思い出なのではないかと思う。

この長い期間があったおかげで日本に来ることができたし強くなれた。様々な妖怪や人間とも会うことができた。私のせいでぶっ壊れた原作の設定もあったが全体でみると世界の修正力とでも言う力のおかげで大事に至ることは無かった。

思えば美鈴とは私の人生のほとんど（全てと言ってもいいくらい）を共に過ごしていることになる。彼女には何度も助けられた。喘息の時の対応や私がまだ二桁だった頃の生活などだ。今でもそうだが特に当時は彼女が本当に頼もしく見えたものだ。私の姉だと思ってても違和感はないくらいに。

私が一番世話になったのが美鈴だとするならば、一番頼ったのは紫になるだろう。レミイなんかは紫の良さがわからないみたいだ。それも当然の事で、彼女は基本的に胡散臭いと思われるしまっているのだ。

昔はまだましな方だったと思うが最近賢者としての威厳なのか他の妖怪にとってはとっつきにくい妖怪として知られている。それが彼女の望む姿なのかもしれないと思うと何も言えないのだが。

今回の宴会にも途中から式とその式を連れて現れている。他の妖怪からは遠巻きにされているようにも見える。本人が特に気にしているようでは無いので別に構わないのだろう。しかし白蓮とゆっくり語り合おうと思って主催した宴会なのについての関係のない妖怪ばかりになってしまった。

今までに見たことのある妖怪は勿論、見たことも無い妖怪もちらほらいる。こちらが一方的に知っているだけの妖怪も少数だがいる。私は自分が大騒ぎをするのは好きではないが宴会の雰囲気は嫌いではない。静かな図書館はお気に入りだが騒がしい宴会もまた良いものである。

でももう春なので喧噪の中にずっといると暑くなってくる。レミイもさつき頭を冷やしに行ったようだし私は少し身体を冷やしてこよう。彼女も何か考えているだろうから彼女が行った方向とは反対に行った方が良いだろう。

神子や青娥などには会えなかったから今人生を振り返るのが丁度良い気がする。

しかし思い返すと本当に色々なことがあった。旅に出た当時はあまり必要ないと思っていた仙術もかなり様々な場面で活躍してくれたし、高山でのトレーニングもそうだった。結局今の今まで喘息は無くなっていないが何もしていなかった場合と比べるとかなりマシなのだろう。

日本に着いた後も妹紅と輝夜の関係が思ってもみなかった方に行った事以外は順調だったし。幽香に絡まれた時は本気でやばいと思ったが何とか殺されずに済んで良かった。いや、マジで。諏訪でも良い出会いがあったし快適に過ごせた。月面戦争はあの程度で収まったことに感謝するべきだろう。想像以上に依姫が強すぎた。

ヨーロッパに帰った後も紅魔館で楽しく過ごすことができた。何よりも楽しかったのはこあやレミイ、フランドールが目に見えて強くなつてゆくことだ。稔里から見た私もそんな感じに成長していたのだろうか。

魔界も行ってよかった場所だ。神綺は規格外だったが好戦的じゃなかったのが幸いだ。白蓮と会ったのもあそこだったし。彼女も辛い人生を歩んできたのだろう。もともとの同族に封印されるといのはどういう気持ちなのだろうか。今笑っているのなら彼女も今は幸せなのだろう……寝ている。流石に妖怪たちの酒を断り切れなかったのだろうか。ご愁傷様とでも言っておこうか。

他の寺組はより一層元気にはしゃいでいるというのに。ぬえも私がかつてこないのが良い証拠だ。

幻想郷に来た後も想定外の事は多くあった。一番はやはり外の世

界に行ったことだろう。私が記憶として残しているものよりはいくらか古い、しかし私が生きてきた外の世界の記憶よりは新しい。そんな不思議な体験だった。たまたま会ったマミゾウも来年には幻想郷に来るだろう。彼女はかなり大人な対応をしてくれるので話し相手には良いだろう。気を抜いたらすぐに化かされそうなのはあれだが。それにそろそろ華扇も仙界から出てきてくれる頃になるだろう。仙人となった彼女と話をするのも今からとても楽しみだ。レミイと一緒に私まで神社に通う事になるかもしれない。霊夢は嘆くだろうがもはやあそこは妖怪神社になってしまっている。妖怪から信仰を得ているわけでもないのに妖怪が集まるのも不思議な話だ。それも一度退治された妖怪ばかり。

そういえば口直しに和菓子を貰って来ていたのだった。食べるなら静かな場所で食べたいと思っていたしここは丁度良いだろう。今日は初心に返って柏餅を作ったようだ。妖夢がこっそり持って来たものだが妖夢の作った物とレミイの作った物がある。見た目では判断できないが食べればわかるだろうか。

お、美味しい美味しい。もう一つの方は……うん、美味しい。どちらも美味しいが後に食べた少し味が惜しい方がレミイの方だろう。まだ始めて数年だからいくらレミイでも妖夢の腕には到達できていないようだ。料理の時とは少し感覚が違うらしい。

いい具合に落ち着けたしそろそろ宴会に戻った方が良さそう。一応今回の主催者は私になっているのだし。費用は紅魔館で出すが想定外の出費の方は私の貯金から出しておこう。一応まだまだ余裕はあるし。

そんなこんなで今までは凡そ原作通りに進んできた。それはこれからも変わらないだろう。私が今まで関わってこなかった妖怪や仙

人たちがこの先の異変の主犯になる。つまり完全に原作に沿う事になる。知らない人たちに会う事。それはとても嬉しく楽しみなことだ。

たとえ私が旅をしなくても美鈴は紅魔館に来ていただろう。異変も問題なく解決されたに違いない。しかし私は原作より身体が弱くなっていただろうし、紫をただの胡散臭い妖怪としてしか見ていなかっただろう。ロケットを飛ばした時は永琳にも狙われたに違いない。

私の身体のこと以外は結局人脈の問題だ。そしてそれを解決したのはやはり旅なのだ。袖振り合うも多生の縁。私は前世から彼女たちを知っていた。故に前世からの因縁が存在していたのだ。他の言葉で言いかえれば単に“運命”ともいえるのかもしれない。

私はパチュリー・ノーレッジ。もう『名乗っている』と付ける必要はない。この世界では私が本来のパチュリー・ノーレッジなのだと理解できた。パラレルワールドは存在する。故に私ではないパチュリーも必ずどこかにいるのである。僅かな分岐が大きな変化を与えらる。この世界のパチュリーは少し旅がしたかった、私とそれ以外なんて本来はそれだけの違いしかないのだ。

番外編

半年越しのリベンジ

パチユリー side

まだ夏真つ盛り、という時期ではないのだが外はかなり暑い。

「ねえパチエ、暇だわ。こんなに暑いのに何か涼しくなれる魔法とかは使ってくれないの？」

もうすぐ緋想天があるはずだからすぐに暇ではなくなるはずだが今は確かに暇であろう。私はいつも通り本を読んでいるので大して暇ではないのだが珍しいレミイのわがままに付き合うのも悪くないかもしれない。

「あるけど使わないわねそんな魔法は。そんなことをするくらいなら目の前の湖にでも行けばいいんじゃない？あそこはとても涼しいって美鈴が言っていたわよ」

「駄目ねえ、パチエは。外に出たら日光にやられるでしょう？いくら涼しくてもずっと日傘をさしたままぼーっとしているのは結局暇じゃないの。そんなことをするより室内で手っ取り早く涼しく過ごせる方法を探しているのよ。ついでに暇つぶしにもなるものね」

「そんなに一気に色々な条件を満たす物なんて……あるわね」「ええ、あれなら良さそうね」

「そうと決まれば早速準備をしましょうか。レミイは美鈴と手分けして来れそうな人間、妖怪を呼んできなさい。私は咲夜と一緒に準備しておくから」

前回はいまいちだったから今回こそはリベンジしたいところだ。作る場所も前回は異なり、空き部屋になっている地下室。たまには私の本気を見せてやろうじゃないか。

「パチエも珍しくノリノリね。それにしてもそんなに呼んで大丈夫な

の？この前のあれじゃあ精々三、四人が限界だったと思うけど」

「何のための咲夜だと思ってるのよ。今回は前回の比ではないわ。だからたくさん呼んでも余裕なはずよ。前回来れなかった早苗ちゃんも誘ってあげて頂戴ね。そう言えば今日は魔理沙も来ていたわね。彼女も使えばかなり効率が良くなると思うわよ」

「なるほどね、分かったわ。それじゃあまた戻ってくるわ。咲夜「ここに」私は少し出かけてくるから貴方はパチエの手伝いをしてあげて頂戴」「わかりました」

退屈は妖怪を殺す。何とかして暇を潰す方法を探す彼女を見ているところもやる気が出るというものだ。

レミリア side

暇を潰すために料理をするのも悪くないがたまにはいつもと違う事もしてみたい。パチエに相談していると丁度いい物を思い出した。今の時期なら誰も文句は言わないし、私の求めている条件にぴったりだ。

パチエも同時に思い出したらしい。やはり親友。運命を感じる……というのは何か違うニュアンスな気もするがまあ同じような物なのではないだろうか。幻想郷中を回るのに私一人では時間がかかりすぎる。そう言うわけで魔理沙と美鈴にも手伝ってもらって様々な場所を回っているところだ。

私のルートは人里から迷いの竹林、そして妖怪の山の神社だ。里とは言ってもどうせ慧音は来ないので誘うのはミスティアその他である。他は道中の湖で妖精でも誘えばフランも喜ぶだろう。

実力は一番高くても飛ぶ速度が一番遅い美鈴は冥界だけ。その他は魔理沙が適当に誘って来てくれるらしい。こういう時に人脈の豊富な者がいるのは有難い。

「ふう、誘ってきたわよ。皆が来るかどうかはわからないけど」

「お疲れ様、レミイ。こつちの方ももう完成しているわ。皆が来る前に入っけてもいいわよ。貴方はここの当主なんだから」

「そうね、でも一人で入っているのも寂しい気がするからフランも呼んでくるわ」

想像していたより数十倍以上大きかったし流石にここに一人で入っている勇氣はない。二人でも然して変わらないような気がするが気分は全然違うだろう。

そんなわけで呼んできた。フランもとても驚いているようだ。流石はパチエ。彼女にできない事はあるのだろうかと疑いたくなるほどの仕事をしてくれる。

「うわあー、お姉様、これどうしたの？この前月で見た海みただけど」

「ふふっ、驚いたかしら？フラン。これは幻想郷唯一にして紅魔館の所有物である海、名付けて紅海よ」

「お姉様、紅海は外の世界にある海よ。何か他の名前にしようよ」

外に紅海があるのは勿論知っている。最近まではそこまで遠くない場所に住んでいたわけだし勉強でも出てきたのだから。しかしいい名前があったと思っただのにフランに不人気ならば他の名前を考えなくてはならない。

紅魔海ではひねりが無いし……どうしたものか。あ、そうだ。安直なのは変わらないが

「それなら塩田海でどうかしら」「塩電解？どうして今電解が出てくるの？」

「違うわよ。塩田の海。良いかしら？海なのだから塩が含まれている

のは当然よね。で、ここの海の塩は何処で採れたものだったかしら？」

「そりゃあ霧の湖から摩訶不思議な力で……なるほど分かったわ。つまり天然の塩水ではなく人工的に作った塩水ってことね。良いと思うよ、お姉様」

「そうね、レミイにしてはマシな名前かしら。ああ、悪いとは言っていないわよ。ただあなたが考えるにしては珍しい名前だと思ったけれど」別に悪気があって言ったわけではなかったらしい。しかし私のネーミングセンスはそんなにひどかったのか？全世界ナイトメアとか超絶かっこいいと思うのだが。そんなに言われるなら最近作った技の名前はパチエがあつと驚くようなものにしてやろう。そうだな……ボンバードナイトとかでいいのではないだろうか。下手に日本語を混ぜたりしていいからきつと他の者から見てもかっこいいはずだ。我ながら素晴らしい。

「とりあえず皆が来るまでは私たち二人で楽しんでおきましょう。そう言えばパチエは入らないの？」

「私は遠慮しておくわ。代わりにこあとその辺で屋台でも出しておくから。貴方たちは存分に楽しみなさい」

海の家というやつだろうか。確かにどうやったのかわからないが砂浜まで再現されている。広さは咲夜で何とかなるにしても海の再現は全てパチエがやったのだろう。どうしたらこうなるのか教えてもらいたいくらいだ。

「おーい、皆で来たぜ。ってなんなんだ？これは。少し涼めるだけかと思っていたが半年前のちんけなプールとは大違いじゃないか。これならもう少し誘ってもよかったかもしれないなあ」

魔理沙を先頭にして皆到着したようだ。海を見たことが無い者も多いかもしれないが皆一様に驚いているようだ。それも仕方のないことだ。地下室だというのに吸血鬼には害のない日光が降り注いで

おり浜には屋台ができています。更に海の中には魚や海藻まである。これらは幻影なので触れることはできないが、見て楽しむことは可能だ。流水を作れない以上波が打ち寄せる演出は作らなかつたらしい。私たちへの気遣いもばっちりだ。

「あら、来たのね。あまりにも前回がひどかつたから少し本気を出してみたわ。あの太陽は私の魔力で光らせているだけだから日焼けもしないし髪も紙も傷まないわよ。でもこんなに広くできたのは咲夜のおかげ。礼は咲夜に言っておきなさい」

確かに咲夜がいなければこれだけの人数を集めることもできなかつたがそれでもパチエの功績も相当のものだろう。パチエくらいの力があれば余裕なのかもしれないが自分ではなく他人を持ち上げる彼女のあり方は見習うべきなのだろう。

パチエが用意していたらしい多くの水着の中から各々が気に入つたものを選んで今は皆海を楽しんでいるようだ。灰にならない不思議な日光なのに暑さは外にでもいるようだ。というか今いるのが中なのか外なのかわからなくなる者もいるかもしれない。壁まで景色を映し出しているせいで妖精なんかは度々壁にぶつかっている。

『はいはい、ちゆうもーく』

棒読みでそんなことを言われても違和感しかない。パチエでも慣れないことは難しいようだ。

『えー、ちよつとこあ、代わってくれないかしら。大声を出すのは慣れないわ。「ええ?! まあいいですけど……」少しお待ちください』

拡声魔法を使っているせいで話していることがバレバレである。吸血鬼じゃなくても聞き取れるくらいはつきり聞こえてしまっている。魔法を切ればよかったのに。

『えー、皆さん。ここであるイベントを開催します！一斉にスタートして一番早くあのブイまで泳いだ者が勝ち、というルールです。勝者にはこの本日一点限りの絶品焼きそばを無料でご提供！参加者は受付までお越しくださいね！』

あの焼きそばって私が作らされたやつではないか。急に一食分だけ頼まれたからパチエの昼食にでもするのかと思っていたのに。まあ今考えればパチエは自力でもかなり美味しい料理ができるからわざわざ私に作らせる必要も無いわけだ。そこで気づいておくべきだったか。

「お姉様どうするの？ 私は参加しようかなー、と思っっているけど」

「勿論参加するに決まっているでしょう？ 紅魔館当主として負けるわけにはいかないわ！」

普通に負けた。接戦にすらならず美鈴の圧勝だった。来ているほとんどの者が参加したにも拘わらず圧勝する美鈴って一体……。

その美鈴は美味しそうに焼きそばを頬張っている。まあ美鈴ならいいか。何かと世話になってるし美味しそうに食べてくれているし。他の皆も負けはしたが深くは気にしていないようだ。負けず嫌いな氷精も他の妖精と遊んでいるうちに負けたことすら忘れてしまっているようだ。さっぱりした性格の者が多いのは良いことである。

空がだんだん暗くなってきた。恐らく屋外の時間帯に合わせて太陽の位置も変化するように見せているのだろう。

『皆さーん、もうそろそろ黄昏時なので泳ぐのもおやめください。今日は存分に楽しめていただけただけようなら良かったです。また何かイベントがあればお誘いしますのでぜひまたご来館くださいね！』
小悪魔が勝手にまたイベントをするとか言っている。まあたまにならいいだろう。頻繁にされるとこちらも困ってしまうが。

「パチエ、今日はありがとうね。私のわがままに付き合ってくれて。

私もフランもとても楽しめたわ」

「あなたのわがままは珍しいからね。それに私も半年前の汚名は返上しておきたかったもの。だからお互い様よ。まああなたたちが楽しんでくれたのなら私としては大満足ね」

私がまだ幼かった頃からいつでもこの魔法使いは最高の親友だ。もう少しくらい困らせても良いのかもしれない。そんなことをすれば私もパチエから困らせられそうだから自重するが。この親友は恩を返されることを全く望んでいない。もしかしたら最大の恩返しは私たちが楽しく過ごしていることなのかもしれない。

夏祭りと言えばかき氷と花火

レミリア side

今日は博麗神社で夏祭りが開催される日だ。祭り自体は昼からやっているし、妖怪や人間たちは昼から行っている者が多いが私たちは夜からの参加である。理由は勿論私とフランにある。無理をすれば昼から行けないことも無いのだが、そこまでする必要はないとの意見で一致している。

博麗神社の境内では妖怪が人間を襲う事は禁止されているので人間も安心して祭りに参加できる。規則を破って人間を襲った妖怪はすぐさま霊夢に消されるだろうから襲おうとする妖怪も滅多にいない。

ごくまれに考える脳の無い馬鹿な妖怪が暴れだすことはあるらしいがそういう時には里から警備に来ている慧音や、慧音と仲のいいパチエ、妹紅などによつてすぐ対処されるらしい。今日もパチエだけは先に神社に行つて警備をしている。私たちが行く頃には他の者に交代できるらしい。

今年が神社が倒壊したせいで祭りは流れるかと思っていたが無事に開催できたようで良かった。異変を知らなかった人里の人間たちからすれば開催して当たり前前の事なんだろうけど。

「お姉様、もうすぐ出発するの?」

フランも外に出ることを嫌がらなくなつてくれて本当に嬉しい。今日はきつとフランの友人たちも来ているだろう。

「まだ早いんじゃないかしら。でもそうね、咲夜が買い物から帰つてきたら行きましようか」

咲夜が買い物に行くことは滅多にないが、買い物に行くときは能力を使わないように言っている。幻想郷は綺麗な土地だ。景色を見ずに買い物だけさっさと済ませるなんて勿体ない。それにあまり能力

に頼りきりになるのも良くない。完全に瀟洒な従者を目指すのであれば心には常にゆとりを持ち、能力に頼らずとも手早く仕事をこなすようにならない。

彼女は確かに優秀だがまだまだ完璧には届かない。彼女の人生はまだまだ長い。もしかすれば私やパチエよりも。その長い人生を活かして色々なことが完璧にできるような従者になってもraitたい。

今はまだ料理の手際は並より早い。戦闘面でもスペルカードルールならば霊夢と渡り合えるくらい。頭はそこそこ切れるくらいだ。それでも悪くはないのだが、いつか料理の腕で私を追い抜き、戦闘で美鈴を退け、頭脳でパチエの上に行く。そんな子になってくれたら私としては大満足である。完璧を求めすぎるのは主人として良くない事だが、彼女ならできそうだから大丈夫だろう。

「お嬢様、ただ今帰りました」

そんな従者もたつた今帰って来たらしい。フランにも伝えてこれから夏祭りに繰り出そうか。

「ご苦労様。さて、出かける準備をしてフランと小悪魔を呼びに行つてくれないかしら？私には門の前で待っているから」「仰せのままに」

パチエはもう警備担当が終わっているだろうか。それともまだ早かっただろうか。

パチユリー side

本日の警備もう終了する時刻だ。今日は神社内で暴れる妖怪はいなかった。と言っても夏祭りに限らず神社での行事で暴れる妖怪は滅多にいない。だから警備と言っても大体はただ歩きまわっているだけだ。ついでに日ごろの感謝の意も込めて賽銭を入れておいた。

夏祭り以外でも行事をする際の警備には毎回駆り出されているがどうして私なのだろうか。確かに里の人間を守るならばよく里に

行っている者を雇うのはわからないでもない。だが私である必要があるのかどうかかわからない。

私だけでなくアリスや魔理沙だって里には頻繁に通っているはずだ。鈴仙は正体を隠して里に行っているから仕方ないとしても私が良くて魔理沙がダメな理由は何なのだろうか。魔理沙も早くから神社に来ているわけだし役目は十分に果たしてくれそうなものなのだが。慧音は何故毎回私を採用しているのだろうか。

「ああ、それは慧音が樺菜を一番信用しているからだと思うよ。私から見ても樺菜が一番頼りになると思うわ」

「そうかしら。あなたたちは知らないかもしれないけれど、私より強い妖怪なんて今までたくさん見てきたわよ。そんな妖怪の方が頼りになるのではないの？人間の味方をする私より強い妖怪と言えば美鈴もいるわけだし」

美鈴の方がよほど頼りになると思う。身体も丈夫で戦闘も強く、何より優しい。私とは違って門番をしているから昼間からは来れないが。

「わかってないのね、樺菜は。昔慧音が寺子屋を作るときにも樺菜は手伝ったんでしょ？それに時々里に様子を見に来てくれるのは樺菜くらいなのよ。だから私も慧音も一番貴方を信用しているの。わかった？」 「ええ、分かったわ」

でも真正面からそんなことを言われると少し恥ずかしい。私らしくもないが少し照れてしまう。

「あれ？もしかして樺菜照れてるの？クールだと思っていたけどかわいーい一面もあるものなのね」

「さ、さあ早く警備を交代してもらおうわよ。少し早いけれど恐らくもう少ししたらレミイたちが来るでしょうから」

まだ日は沈み切っていないが今日は少し早めに来そうな予感がする。何故そう思うのかは全然わからないが。

「まだかなり明るいけどあの吸血鬼は大丈夫なの？それとも樺菜の勘？」

「私の勘よ。根拠はないけどそんな気がするわ」「あつ、いたわよ、お姉様。パチユリー！」

「おお、まさか本当に樺菜の勘が当たるなんてね。やっぱり長いこと一緒に過ごしていればわかるものなのかな」

そんなものなのかもしれない。それとも長く生きてきたせいかもしれない。とりあえずここから先の警備は妹紅に任せて私はあの子たちと一緒に祭りを回ろう。今日は年に一回の夏祭り。多少のわがままは聞いてやれる日だ。

「それではあとは頼んだわね、妹紅。私は今から祭りを楽しんで来るわ」

「まあ任せてよ。と言つてもほとんどすることは無いから結局祭りを楽しんじゃうかもしれないけどね」

規則を破る妖怪が出れば仕事ができるだけだ。だから私は無賃金で働いている。何もせずただ歩き回っているだけでお金を貰おうなどとは思わないし、そこまで困っているわけでもない。

「今終わったみたいね、パチエ。さあ行きましょうか。と言つてもこんな大人数が同時に行動していると人間を怖がらせてしまうかもしれないわね。ここは一つ二人ずつのグループに分けましょうか。私、フラン、パチエで三通りの組を作るから咲夜たち三人でも組み分けして頂戴。そうね、わかりやすく1、2、3で分けましょうか」

普段ならレミィと咲夜、私とこあ、フランと美鈴というセットになるところをあえてシャッフルするらしい。まあ咲夜、美鈴、こあのうち誰と一緒になくても祭りは楽しめるだろう。

「はい、じゃあ決めるわよ。パチエとフランはどれが良いの？」「私は

余りものでいいわ。あなたたち二人で決めなさい」

「じゃあ私が1にする」「なら私は3にするからパチエは2になるわね」

「ごっちは決まったわよ。そっちはどうかしら?」「ごちらも決まりました」

あちらはどうやら1がこあ。2が咲夜で3が美鈴になったらしい。思いのほか綺麗にシャツフルされているみたいだ。私のペアは咲夜。二人で何かするのはここに来る前の勉強以来だろうか。

咲夜 side

お嬢様の提案で二人ずつ三つのグループに分かれて祭りを回ることになった。確かにこの人数が一齐に歩くと威圧感が凄いだろうから私も大賛成である。いつも通り私はお嬢様について行くのかと思っていたがどうやらシャツフルにするらしい。

その結果として私はパチュリー様と回ることになった。今の私がいるのもこの方のおかげであり、とてもではないが頭が上がらない。「では私たちも行きましょうか、咲夜。先ずは何を見たいかしら?」

私はお嬢様の従者でパチュリー様はお嬢様の親友という立場の違いがあるのにどうしてこの方は私に優しく接してくれるのだろうか。彼女は自身の立場を居候としているから私の方が館内での立場は高いらしい。でもいつまでたっても私の中での彼女の立場は私より上なのだ。

「あなたがやりたい事、食べたい物何でも遠慮なく言ってみなさい。たまには自分のしたいことをするのも重要よ」

いつもはお嬢様について行くので私がしたい事など考えたことが無かった。

「そうですね……では焼きそばを食べてみたいです」「そこにあるわね」

恐らくお嬢様の作った物の方が何倍も美味しいのだろうが前の絶

品焼きそばを食べ損ねてから何となく食べたかったのだ。ただ私からお嬢様に食べたいものを言うなどおこがましいにもほどがあるので食べられなかったのだ。

「どうかしら？美味い？」

「お嬢様の料理の方がやはり美味しいですね。でもたまにはこういう味も悪くないかもしれません」

「レミイの料理と比べるのは流石に可哀そうね。それに味だけならあなたでもこれ以上の物を出せるでしょう？でも今はこの味を楽しみなさいな。これが祭りの屋台の味というものよ。まあ屋台でもあの八目鰻みたいにかなり美味しいものはあるけれど」

八目鰻、か。確か祭りに来るとお嬢様は必ず食べていたはずだ。パチューリ様も絶賛しているしそんなに美味しいものなのだろうか。

「八目鰻とはそんなに美味しい物なのですか？お嬢様は毎回必ず寄っているようですが」

「八目鰻が、ではなく彼女の料理の腕が良いのよ。それにあの夜雀の子はレミイの料理の友人でもあるし。食べてみたいかしら？」

いくら友人だからと言っても味が悪ければお嬢様も行かないだろう。つまり味は保障されている事になる。

「そうですね、行ってみたいです。彼女が料理を始めたきっかけなども聞けるかもしれませんし」

「あ、それは無理よ。レミイでも聞き出せないらしいし彼女の店は人気だからゆっくりもできないわ。残念だけれど」

それは残念だ。少し興味があつたのに。

「美味しいでしょう？ミステリアの料理はどれも一級品。レミイの料理友達になれるのも納得ね」

本当に美味しい。私よりも料理の腕は上かもしれない。私もまだまだだと実感させられる。

「ふふ、良い食べっぷりね。あ、ちょっと待ってくれるかしら。寄りた
い店があつたわ」

そう言つてパチュリー様が寄つた店はかき氷屋。商売をしている
のは湖の妖精で妹様の友人であるチルノ。売っている味はたった一
つ『みずあじ』のみだ。

「おお！お前が最初の客だぞ。それにしてもどうして皆買つてくれな
いのかなく」

「それは光栄ね。そんなあなたにいい物をあげるわ。はい、これをか
ければもつと売れると思うわよ。頑張りなさいよ」

「お前は良い奴だな！えーと確かパチュリーだっけ？フランがよく話
してるぞ」

「あらあら、それは嬉しいわね。これからも仲良くしてあげて頂戴ね」
「当たり前だろー！」

元気なのは良いことだが少し頭は足りていないようだ。売れてい
なかつたのは十中八九『みずあじ』しか売っていないせいである。パ
チュリー様はあえてそれを購入し、さらにシロップをあげたようだ。
勿論紅魔館産である。これを店頭に置いておくことで紅魔館ブラン
ドの宣伝にもなる。パチュリー様もなかなか考えているようだ。

「咲夜、行くわよ。もうそろそろ花火が上がる時刻だわ。レミイたち
とも合流しましょう」

「どこにいらつしやるかわかるのですか？」

この人ごみの中だ。適当に歩いていても見つかりはしないだろう。
「二応探知魔法があるわ。まあこの人数程度なら絞り込めるでしよ
う。一回に付き一組になつてしまふけれど」

相変わず魔法に関して右に出る者はいないのではないかと思
うほどだ。この人ごみでも正確に探知できるらしい。これはこの方
の情報処理能力も合わさつての芸当なのかもしれない。

もうすぐ花火が上がるらしいという事でパチエが迎えに来た。探知魔法でここまで来たらしい。フランと小悪魔も今から探すつもりだったらしいが美鈴の方が気によって速く探知ができるので今は美鈴について行っているところだ。いくら知っている気を探すだけだと言ってもこの人数である。ごちゃごちゃになったりはしないのだろうか。

「あ、お姉様!どうしたの?皆揃って」

「今から花火があるらしいわ。一緒に見ましょう」

神社の屋根の上で見れば人も少ないし良いだろう。

『今から花火を打ち上げて行きますが今回はある方の協力を得て特別な仕掛けが施してあります。是非最後までお楽しみください』

いよいよか。一発目は紅い花火のようだ。そこから一気に同じような色が数発打ち上げられる。初めの一発は開いて紅い館に変わり、後の数発で霧のように館周りに拡がる。つまり私たちの起こした紅霧異変の再現である。

その後は白い花火から一気に桜色が拡がる春雪異変、時計が子の刻で停止する(人間たちには月の異常を感じ取れなかったからだと思われる)永夜異変、花が一斉に咲き乱れる六十年周期の花の異変、山に神社が突然現れる山の異変と続いた。

流星に一部の妖怪たちしか知らない宴会続きの異変や神社が倒壊した異変は取り扱っていないようだ。しかしどれもなかなかクオリティが高い。特に時計が止まる演出などを花火で再現するのは流星に人間にはできないだろう。

「ねえ、パチエ。あの花火の制作を手伝ったのは貴方なんでしょう？」
「……さあね。何のことかわからないわ」

パチエは人間が作ったものだとしてこの花火を見てもらいたいらしい。それならば私もこれ以上追及する気はない。素晴らしい花火を演出してくれたのが誰なのか、知らなかつたことにしておこう。

この親友は本当に手柄を立てたがらない。妖怪として異端であることは間違いないが私としてはそこが彼女の魅力だと思っているし、そんな彼女が私は好きなのだ。

神への畏れ

パチユリースイデ

ここで暮らし始めてからもう二年目も終わるころになった。まだ年も明けていないというのに信州の山奥ともなれば寒さは厳しい。ここからまだ寒くなるのかと思うと少し憂鬱になりそうである。

「はく寒い。はい、朝食ができたから並べてきて頂戴」

「分かったよ。それにしても来年の干支って何だっけ？」

料理を運びながら稔里が私に聞いてくる。干支くらい覚えておけばいいのに。今年は確か丑だったはずだ。

「来年は確か寅ね。それがどうかしたのかしら？」

去年はそんなことは聞かれなかったような気がするのだが記憶違いだろうか。

「来年はいい物が見れるはずだよ。ぱっちゃんも楽しみにしてなさい」

何故か得意そうにしている稔里。そんなことを言われると今から楽しみである。去年は一年の途中からだったからわからなかったとしても今年は年始からいた。数年に一回の出来事が起こるのだろうか。神は意図的に災害を起こすことも可能だし。

「そういえばそろそろ神事の方も忙しくなってくるわね。諏訪子と神奈子は気楽で良さそうだけれど」

何故かこの神社は神主など他の神職がないので神事を行うのは全て巫女（風祝）の仕事になる。諏訪子と神奈子は奉げられたりする側なので基本的には何もしない。精々今年一年がどのような年になるのかを稔里に告げるくらいである。

天の声 side

諏訪での一年の初めの神事と言えば蛙狩神事だ。これは元旦に蛙を捕ってきて矢で串刺しにしてお供えするという神事である。始まった経緯は不明だが恐らく諏訪大戦において神奈子が諏訪子を打ち負かしたことを示すための神事なのではないだろうか。

負けた蛙と勝った蛇。敗者を生贄として勝者に奉げるのは何ら不自然な事ではない。蛙は蛇には勝てないという自然の理の他にも偉大な神への畏怖も含まれているのではないだろうか。

蛙狩神事は一年の五穀豊穰などを願う神事でもある。つまりこれをしてしなければ神奈子のご利益の一つである五穀豊穰が得られないので不作になってしまうのは確実である。その点ではこの神事の重要性はとても大きいと言える。

始めた当初は諏訪子も不満が大きかったようだが、今となってはそうでもないようである。生贄として蛙が串刺しにされるのは気分の良い物ではないらしいが、自分が負けたせいだとも考えているようだ。それに神事で贄にされる蛙は二匹である。それ以上はむやみに殺さないで仕方のない事だと割り切っている。

今年も大勢の国民が見守る中、見事に蛙を捕らえて奉げることができたようだ。去年と今年に関しては、新たな巫女見習いという形で付き添っているパチュリーが探知魔法で探しているので効率はい前までとは比べ物にならない。捕まえるのは慣れている稔里だ。いずれはパチュリーもできるようにならないのだろうか。

串刺しにして奉げた後は稔里による神奈子への祝詞の奏上が行われる。

「例のまにまに蛙狩の神事仕えまつりて大贄に仕えまつり……………かしこみ_{かしこ}みも白_{まを}す」

これが終われば国を挙げての大宴会である。二柱にとつてはむしろこちらが本番ともいえる。それでいいのかと突っ込みたくなるが本人たちがそれで満足しているからそれでいいのだろう。

「いやあく今年もつつがなく神事が終わって良かったわね、諏訪子」

「それ、私の前で言うかい？ 私は可愛い蛙たちを贄にされた身だというのにねえ。ま、私が神奈子に負けちゃったのが悪いんだけど。それより今年は色々あるからかなり大変な年になるんじゃない？」

「さてね。それは次の神事の時にわかるでしょうね。それにしても今年はあれもやるのつもりなの？ ぱっちゃんももう三年目だから良い頃じゃない？」

「そうだね。今年はやろうか。神奈子も準備しておきなよ？」

「ええ。そう言えば……………」

二柱の宴会は夜が更けても終わらない。神の酒量には流石の美鈴もついて行けないようだ。人間たちと一緒にとつくに寝てしまっている。まだ起きているのは神奈子と諏訪子、それに酒をほとんど飲んでいないうえに睡眠のいらぬパチュリーだけだ。神たちの夜はまだまだ長そうである。

パチュリーside

蛙狩神事も何事もなく無事に終わった。その後の宴会で結局皆酔いつぶれてしまったのはどうかしてほしい。美鈴が酔いつぶれるまで飲むのは珍しいが久しぶりの酒でテンションが上がったのかもしれない。二柱は流石に大丈夫かと思っていたが意外とそうでもなかった。

どうやら筒粥神事はこの時代まだないようだ。そう言えば凶相と言われる三行半みくだりはんと言うのは江戸の頃の物だったか。どうにもそのあたりが曖昧だ。過去の事は本を読めばいくらでも出てくるが、江戸はまだまだ先の未来の話である。前世の記憶しか頼れるものは無いのが辛いところだ。

そんなことがあってもまだまだ寒い日が続いている。早く暖かい

季節になってくれないだろうか。

「やおおはよう、ぱっちゃん。今日はいいものを見せてやるから湖に来なよ。稔里と美鈴も一緒にさ」

「ええおはよう、諏訪子。それにしてもいいもの？何かしら」

前に稔里が言っていたやつだろうか。「それって稔里は何か知っているの？」

「いやいや、知らないはずだよ。何度か見たことはあるはずだけどね」
どうやら前に言っていたものではないらしい。朝食の後片付けが終わったら稔里、美鈴と一緒に湖に会い、という事だ。そう言えば神奈子の姿も見当たらない。どこに行ったのだろうか。

「稔里ー、行くわよ。それにしても何かあるのかしらね」

美鈴を山から連れ戻して稔里を呼ぶ。彼女も先ほど仕事を片付けていたはずだ。

「さあ？でもこの時期だし………あつ、分かったわ。でも教えない方が良さそうね」

思わせぶりな態度だ。余計に気になってしまっているのではないか。……と話していたら湖に到着した。いるのは何故か神奈子だけ。諏訪子は何処に行ったのだろうか。

「おつ、来たね。では行くわよ。神の通る道は神によって作られる。湖上には人の通る道も橋も必要はない。はあっ！」

湖面の氷の一部が一気に盛り上がる。出来上がった道の先にいるのは……諏訪子だ。

「これは………御神渡り」「なあんだ。ぱっちゃんも知っていたのね」

思わず声に出してしまったようだ。しかし御神渡りを生で見られるのは感動ものである。前世の時代では自然現象として片付けら

れていたとは思えない程はつきりと、神によって道は作られた。

「聞いたことがあっただけよ。実際に見たのは初めてだからとても感動しているわ。本当に美しい」

御神渡りは建御名方が八坂刀売に会いに行く時の道だとも言われている。一応神奈子のモデルは八坂刀売なので、仕方なく諏訪子が神奈子の方に歩いてくる形になる。諏訪子も道を作れるらしいが、土で作られそうなので神奈子がつっているらしい。

御神渡りをするのは諏訪子と神奈子の気が向いた年だけらしい。だから去年は見られなかったのだろう。それにしてもこちらに歩いてくる諏訪子はとても神々しい。普段が神々しくないというわけではないが、諏訪湖の上を歩いている諏訪子は普段の五割増しである。神が歩かれた御神渡り。まさにその名に相応しい素晴らしい光景である。

天の声 s i d e

御神渡りのあつた湖の氷もほとんど融け、過ごしやすい気候になって来たという頃に七年に一度行う諏訪一の神事、それが式年造営御柱大祭：通称御柱祭である。樹齢二百年程度の縦の木を四本曳建てる。参加者は諏訪の国民たちと稔里、パチュリー、神奈子だ。諏訪子を知らない民はいないが、基本的に諏訪子が表に出てくることは無い。ちなみに美鈴は見学だけが可能だ。

「御柱と言えば神奈子が持っているような物なの？」

「いやいや、そんな大層な物ではないわよ。もっと普通の木さ。ぱつちちゃんの仕事は主に死者を出さない事かしらね。曳くのと建てるのは稔里でもできるけど」

御柱祭は死者も出る。落下などによる死者をなくすためにはパチュリーの魔法が一番手っ取り早い。間違っても諏訪子が姿を現すことはできないし、美鈴が参加することもできない。

「簡単な仕事ね。まあ任せておきなさい。民の命は私が守ってあげる

わ

「そう言ってもらえると心強いわね。本番は私も参加する側だから私を助けてくれても構わないのよ?」

「あなたへの助けが一番不要だわ。私や稔里よりもね。それで、あなたはこういった風に参加するのかしら。そもそも神なのに参加して大丈夫なの?」

神事はあくまでも人間が神に対して行う事である。それを神自身がするというのだからよくわからなくなるのも当然だ。

「私がするのは御柱の一本だけさね。他の三本は人間たちにやらせるから大丈夫よ。それにこの神は一応私なんだから、私が良いと言えば良いのよ」

「そんなものなのね。それにしても神は自由ね。仕える者と民はそれに振り回されて大変だというのに」

「祭りは神遊びとも言うんだからそれくらいいいでしょう? 神と遊べる機会なんて滅多にないわよ?」「……………はあ」

なおパチュリーたちはかなり遊びに付き合わされている。この反応になるのも当たり前である。

パチュリーside

神奈子や諏訪子に振り回されるのも今回が初めての事ではない。以前にも何度もあったことだからすっかり慣れてしまった。抵抗したところで私ごときがどちらか片方にでも勝てるはずが無い。私と二柱の力の強さは天と地ほど違う。妖怪と神を同列に考えること自体が烏滸がましい。聖の神妖平等は少しニュアンスが違うので置いておくとして。

だから今私が一番危惧しているのが幻想月面戦争騒動、つまりは第一次月面戦争である。いくら大勢で攻め立てたとしても、相手は八百

万の神霊をその身に降ろすチート娘だ。私は参加したくないがいくら止めても紫は決行するだろう。その時に私がついて行くかどうか、それは今はまだわからない。友人の命は大事だが私の命だって大事なのだ。

でもそれは今考えることではないだろう。もう御柱祭も始まる頃だし私の役目もきちんと果たさなければならぬ。御神渡りに続き、御柱祭まで体験できるのはとても嬉しい。それにこれらは全て目の前で神が行ってくれる。前世とは価値の異なるものだ。

神奈子が“他の三本は人間たち”と言っていた理由がようやく分かった。なんと一本は神奈子が一人で山出ししてきたのだ。ちなみに重さは何トンあるのかわからないような木である。流石は軍神といったところなのだろうか。かなり長い道のりのはずだが曳いてくるのは一人のくせに一番早かった。

山出しを終えたら一月ほど空けて今度は里曳きだ。山出しの時点ですでに私の仕事があった。思いがけないところで事故が起きそうになるからヒヤツとする。だが彼らもこの祭りに参加する以上は多少なりとも命を懸けてきているはずだ。助けられなくても文句は言われまいだろうが私の気分が悪くなりそうなのでしっかり助ける。

この祭りもあと一息だ。私も気を抜かず最後までしっかりと見守らなくてはならない。冠落しから建御柱が最も危ないように感じるのでそこは要注意だ。

「皆さんお疲れ様でした。今回もこの祭事が無事に終了しました事を祝い……」

結局あの後には予想とは異なり特に危ないことも無かった。まあ本来私の仕事など無いに越したことは無い。誰一人けが人を出さない、と言うのは流石に不可能だったが、重態に陥っている民はいないので成功したと言えるのではないだろうか。

そして相変わらず祭りの後は宴会である。今回は美鈴に釘を刺しておかなければならない。悪酔いはしないがあまり飲みすぎると修

行にも差し支えるだろう。飲むな、と言っているわけではない。一杯は人酒を飲む、二杯は酒酒を飲む、三杯は酒人を飲む。酒を飲むなら適量に限る。

まだ諏訪に来たばかりだがこれからも二百年以上はここにいるのだから様々な事に慣れていかなければならないのだろう。これから恐らく四十回ほど経験するであろう御柱祭も人が人はなるべく少なくしたいものだ。その前に私たちが神奈子たちから嫌われなければ、
だが。

運命の見える吸血鬼に見えなかった運命

レミリア side

実戦は大した成果もなく終わってしまったが美鈴との特訓は着実に成果が出ている。どうやら私の作ったグングニルと美鈴の知っている三国時代の槍は形状から何から全く同じではないらしい。

だがそこで『では他の武器にしましょうか』と言わないのが美鈴の良いところだ。彼女はわざわざパチエの図書館に行つて睡眠時間を削つてまで私の槍や、フランの剣についての扱い方を調べてくれたらしい。

図書館に行つても今はパチエも小悪魔もいないから目的の本を探すだけでも相当しんどいはずだ。そこまでしてくれる美鈴には何かお礼をした方が良くはないだろうか。今美鈴がしている館の仕事は料理、洗濯、掃除をはじめ家事全てだ。美鈴も疲れているらしい。美鈴の仕事量を少しでも減らすためにまずは妖精メイドを雇つてみようかな。メイドは多くいても困らないだろうから。

これは完全に失敗した。妖精故に忘れっぽく悪戯が好きなせいで美鈴の仕事に妖精メイドが遊んだあとの片づけ、という仕事が増えてしまった。これにはフランも呆れ顔である。この状況をどう打破すべきだろうか。

「お姉様、これは流石に美鈴が可哀そうじゃない？お姉様も何かしてあげたら？」

私にできそうな事、か。館が広いから掃除は無理。日光に当たれないから洗濯も無理。となるとやはり料理か。パチエや美鈴の作っているのを見てもそこまで大変そうでもなかったし私でもできそうだ。

「今日からは私がご飯を作ってあげるわ。それで良いかしら？美鈴も」

突然の宣告に驚いているようだがまあ良いだろう。私が美鈴のためを思って料理をすることにした、なんて口が裂けても言えない。

「お気遣いは有難いですが料理は難しいですよ？失敗すれば食べられたものではなくりますし」

「安心なさい美鈴。本を見ながらやれば失敗なんてするはずが無いわ。それに私はパチエがいない間も和食を食べたいだけよ」

昔パチエに見せられたが図書館には料理本も何冊か入っていたはずだ。それを見ながらやれば間違いないだろう。

「私はちよつと怖いんだけど……。まあ頑張つてね、お姉様」

二人から許可も得られたし早速料理本を探してみようかな。

膨大な量の本の中から目当ての本を探すのは難しいかと思っていたが、隅の方に固めて置いてある棚があったおかげで早くに見つけられた。今夜作るのは……。パンにしようかな。ここに書いてある材料はあったはずだし。

それにしても本はいくつかあるが読めない本が多い。パチエが書いたと思われる和食の本もあるが、当然私には読めない文字で書かれている。寝る間も惜しんで勉強、と言うのをしてみてもいいかもしれない。幸い私たち妖怪は少ない睡眠時間でも大丈夫だ。

とりあえず今日はパンを作る。美鈴の朝食としても悪くないだろう。昼は作れないとして、夕方は早起しななければならない。明日はフランが鍛錬をする番のはずなので勉強に時間を使える。とりあえず今後の生活は夕方早くに起きて夕食作り、二日に一回は美鈴と鍛錬。無い日は図書館で言語の勉強。そして夕食は私とフランの二人

分。それが終わったらまた勉強して寝るのはすっかり日が昇ってからになりそうだ。

私の身体が音を上げない程度までなら酷使しても構わないだろう。そうでもしなければ料理を作れない。先ず勉強するのは勿論日本語。パチエの書いた（であろう）本の料理が作れば二、三日に一回同じでも最悪大丈夫だ。

パンの作り方もきちんと見ておかなければならない。昔パチエも作っていたしきつと大丈夫大丈夫。

『こねる』って何？ 訳が分からないが適当に作れば何とかなるのではないだろうか。そもそもパチエたちが料理本を見て料理しているのは見たことが無いし。己の勘に従って作ればそれなりの物ができるはず。

美鈴 side

何とお嬢様が料理をしてくれることになったらしい。どうやらパチユリーがいなくても和食を食べたかつたらしい。確かに私は和食を作れないのでパチユリーがいなければ基本的には食べられないのだが、それなら私が和食を作れるようになればいいだけの事ではないだろうか。

それにお嬢様は私やパチユリーが料理をしてるのを見ていることはあっても実際に作ったことは無かつたはずだ。妹様と同じく私も少し怖い。でも主人を信用するのも従者の務め。きつとお嬢様なら大丈夫だろう。そうに違いない。

お嬢様の初めての料理は何なんだろうか。皿に蓋がしてあるので中は見えないが香りは……何とも言えない。少なくとも私が食べたことがある料理ではないと思う。いざ蓋を開けて……………

「お姉様、これは何？真っ黒なんだけど食べれるの？」

「ふっふん、これはパンよ。きちんと本を見て作ったから間違いはないはずだわ」

恐らく間違いだらけである。そもそも見た目から焼く時間を間違えたのは確実だ。

「あの、お嬢様。少しお聞きしても？このパンはどの本に書いてあったものでしょうか」

もしかしたら私が知らないだけでこのような料理は正式に存在するのかもしれない。このままお嬢様の失敗だと決めつけるのはまだ早い。

「それはこの本よ。でもおかしいのよね。きちんと手順通りに作ったはずなのに焦げてるし……………味も最悪ね。どうしたらいいのかしら」

「まずは料理で使う言葉を覚えましょう。こねる、とか寝かせる、などは普段生きているだけではあまり使わない表現でしょうし」

まずは基本から始めなければ到底上達はしない。それは武術に關しても同じことが言える。今日からは槍術と料理のどちらも指導していけば良いだろう。パチュリーがいつ帰ってくるかわからない状況の中で人では多いに越したことは無い。それがたとえ我が主人であらうとも。

「今日からは私が料理もお教えしましょう。そうと決まればまずは朝食ですね」

まずは一日の活力から。妹様は朝食後すぐにお休みになるだろうがお嬢様はそうもいかない。幼いお嬢様には少々辛いかもしれないが頑張ってもらえないだろう。

「良いですか？お嬢様。先ずよく本に書いてある寝かせる、と言うのは簡単に言うとは適温で放置することです。こうすることで何故か生地が美味しくなったりするのです。……………」

いつもならもう寝ている時間だろうにお嬢様は全く眠そうな態度を見せない。むしろやる気に満ち溢れているようだ。これは私の方も気合を入れて指導しなければお嬢様に釣り合わない。だがあまり長く続けすぎると夜の鍛錬に支障がでてしまうかもしれないからそこだけは注意しなければならぬ。

早いものでパチュリーが紅魔館からいなくなつて四年が経過した。生き物は長く生きるほど時間の感覚がおかしくなると言うが私にとつても四年と言うのはそこまで長く感じない。お嬢様たちが生まれてもう百年以上経っているというのも驚きである。

そんな私にとつては一瞬の事であつた四年でもお嬢様たちにとつてはそうではなかつたらしい。吸収の速い二人は教えたことを本当にすぐに応用できる。そのおかげか私も前より楽しく鍛錬ができていく。力を試しに来るお嬢様たちを見ていくと癒されるものだ。

特にお嬢様は戦闘の鍛錬に加えてたまに来る襲撃者たちでの実践、料理の勉強まで毎日している。とことんまで自分の限界を追求しようとするその姿勢は妖怪として心から尊敬できる。そのおかげか初めはあんなにひどかつた味も最近はとても美味しくなつている。たまに私が教えてもない事を実践してくるのには驚くが、お嬢様も料理の楽しさに気づいたという事なのかもしれない。

最近は和食だけでなくフレンチやイタリアンなど種類も豊富になつてきている。本は外国語で書かれているはずだが書いてあることを予想して料理をしているのだろうか。素晴らしい事である。

料理を始めてから五年。完璧とは言い難いが本に書いてある料理はどれもフランが満足できるくらいの腕前になった。言語も同時に学んでいたおかげでどの本も読むのに多少苦労する程度だった。毎日かなり忙しいが今の生活は気に入っている。料理の腕はもつと磨きたいのでパチエは帰って来たがこれからも私が作り続けることに変わりはない。

趣味として続ける料理でいつかパチエや美鈴の料理を超えるのが目標だ。そのためには毎日欠かさず作るのが最適だし、感想を貰うのも重要だ。だから改善点を的確に述べてくれるフランの存在は重要である。美鈴のアメとフランのムチで私の料理は進化し続けるはずだ。

「そういえばレミイは自分の能力の名前は考えたの？」

考えてはいるけどなんか締まりがないように感じる。運命を見る能力、運命を操る能力…その他にもいくつか候補はあるが何処か語呂も悪い。

「パチエの能力の名前は何だっけ。何か参考になるかもしれないわ」

「私？私は魔法を使う程度の能力か火＋水＋木＋金＋土＋日＋月を操る程度の能力のどちらかね」

なるほど…程度の能力か。

「それだわ！私の能力は運命を操る程度の能力にしましょう」

響きも悪くないし何よりかっこいい。運命を操る吸血鬼、レミリア・スカーレット…なんていう自己紹介をすれば相手が怯むこと間違いないね。我ながら完璧だ。

「気に入った名前ができて良かったわね。先ずはその能力の制御をしつかりできるようにならなければならぬのだけれど」

まあそれは今からゆつくり時間をかけてやっていけば良いだろう。幸い私たち妖怪は相当な時間を持っている。急ぐ必要は今のところない。料理も鍛錬も言語学習も能力制御も時間をかけてやれば必ず上達するはずだ。

「でも日日是好日。毎日を楽しく生きていけばそのうち結果はついてくるのでしょね」

つまり今の生活をずっと続ければ良いだけだ。これ程簡単で難しいことも無いだろう。

月まで届け、富士の煙

咲夜 side

私の起源は何だろう。この前夜雀の屋台で宴会をした時から気になって仕方がない。思い出そうとしても記憶に霧がかかるようにぼんやりしている。私の父親や母親となる人物は果たしてどこにいるのだろうか。私の記憶のどこにもそれらしき人物はいない。パチュー様なら何か分かるだろうか。

今までも何度も彼女の頭脳には助けられてきた。それは私だけでなく紅魔館の全員もだろう。この紅魔館が成り立っているのは彼女のおかげともいえる。

「失礼します。パチュー様、少しお聞きしたいことがあるのですがよろしいですか？」

「あら、咲夜じゃない。あなたがこの時間に来るなんて珍しいわね。それで聞きたいことがあるのだったかしら？いいわよ。今は特に何をするでもなく本を読んでいただけだしね」

いつもの図書館はいつも通りの風景。ただし今日は魔理沙の姿もアリスの姿も無い。私の個人的な話をするには都合が良い。

「ありがとうございます。では単刀直入にお聞きしますが、私の起源は何なのでしょう。親がいた記憶が無いのは私がストリートチルドレンだったからでしょうか」

ああ、そのこと。とパチュー様は何故か嬉しそうにしている。やはりパチュー様は何か知っていたようだ。これは僥倖：ではないか。だが私にとっては嬉しい事実だ。

「ふふ。いつその質問が来るのか、あなたがこの館に来た時から考えていたわ。ええ、私はあなたの起源を知っているわ。でも教える前に少しお出かけしましょうか。私も丁度用事があったのよ」

何故初めに教えてくれないのだろうか。時間がかかりすぎるとか

なのかもしれない。

パチユリーside

待ちわびていた質問がようやく咲夜から来た。咲夜がこの館に来た当時からこの質問はいつか来ると思っていたがこのタイミングで来たのは有難い。永夜抄の前にこの質問が来ていたら答えるのには少々苦労しただろうから。彼女の秘密を知るには当事者の話が一番なのだ。

「それで…一体どこへ出かけるおつもりですか？」「永遠亭よ」

丁度私の喘息用の薬も切れてきたところだったしそろそろ行かなければならなかったのだ。私なんかを作るより永琳が作った方がかなり効き目がある。やはりずぶの素人が薬師に敵うわけなどないのだ。ただし使う薬草は慣れ親しんだ物の方が良いので庭で美鈴が育てた物を持つて行っている。永琳もその方が良いと言っていたし。

散々身体を強くするために頑張つて来たのに多少マシになったかな、程度だ。持病の無い生活がとても羨ましい。強くなる事の代償だと考えても良いが、私より圧倒的に強い妖怪たちは持病なんて持っていない。世の中は不平等だ。まあこの世界に来られただけでも十分幸せなのだけれど。

「館を出る旨をレミイに伝えてくるわ。今日の帰りは遅くなるかもしれないし」

「……………というわけでこれから咲夜と永遠亭に行ってくるわ。だから夕餉は用意しなくても構わないわよ」

「ついでだし作っておくわよ。ま、できるだけ早く帰って来れるようには努力しなさいな」

こういうところは本当に優しいし従者思いでもある。きっとこれが理想の上司というやつなのだろう。見た目からは想像もできないが。

「ありがとう。頑張るわ。アリスは今日来ないはずだけれど一応こあは置いておくわ。それじゃあよろしく頼むわね」 「ええ。行つてらっしゃい」

「いるかしら、妹紅。今日も永遠亭までの道案内を頼みたいのだけだ」

頑張れば自力で行けないことも無いが妹紅に頼った方がかなり早く着ける。妹紅の小屋の場所さえきちんと覚えておけば大丈夫だ。

「おや、樺菜じゃないの。それで貴方は…確か咲夜とか言つたっけ？料理、美味しかったよ」

前回妹紅が来た宴会といえば地霊殿の後だったか。あの時も料理担当には私、咲夜、美鈴が入っていた。何故紅魔館からこんなに人が出ているのだろうか。

「あら、ありがとう。そう言ってもらえると嬉しいわね」

「咲夜、私にもそのくらいフランクに話してくれて良いのよ？むしろその方が私も楽し」

「それはできませんわ。私が敬語を使う相手はこの世でたった三人ですがパチュリー様はその中に入ってしまったていますゆえ」

相手を尊敬しているから敬語で話しているわけではないはずだ。現に美鈴には敬語を使っていないし。何故館で最底辺に存在する私に敬語を使うのをやめてくれないのだろうか。

「仲が良いね、お二人さん。さて、それじゃあ早速向かうか。今回は何をしに行くんだい？」

「今日は私用の薬の補充と咲夜の話聞きに行くのよ。一応咲夜の個

人的な話だから妹紅は聞かない方が良いかもしれないわね。あなたにとつては衝撃的かもしれないし」

妹紅が自分の話をしたがるानीのはここでも変わらないらしい。原作よりは多少マシな気もするけど。こちらから話をすれば面白そうに聞いてくれるので、こちらから話し続ければ気まずくなることも無い。

「それなら私はてると一緒に鈴仙ちゃんでも弄って遊ぶかな」

鈴仙…ご愁傷様。てみだけでも鈴仙にとつては凶悪なのにそこに妹紅まで加わるとは。彼女は今日の夜まで生きていられるだろうか。「うわっ」

あら、妹紅が串刺しになっている。炎によつて死体が消えて行く様はまるで不死鳥の焼き鳥だ。縁起は…良くないかな。

「いってて。まったくあの悪戯兎は…ただの人間が引つかかったらどうするつもりなんだろうね。私からすればスリルがあるくらいなんだけど」

流石は蓬莱人。生き返るのは妖精よりずいぶん早い。そして流石は咲夜だ。今の光景を見ても何も思わないのは人間を調理するからだろう。死ぬ危険をただのスリルと言ってしまうのも蓬莱人ならではだ。私には理解できない世界の話である。

「そんなことを言っている間に到着したよ。今日は鈴仙ちゃんと一緒にてゐるを追い回す遊びに変えようかしら。たまにはあの悪戯兎も運動したいだろうしね」

まさかの標的変更。良かったな、鈴仙。まだ助かったわけではなさそうだけど。

しかしいくら慣れていているからといってもよくこれ程までにひよいひよいと竹林を抜けられるものだ。道に迷うは妖精の作業なのだが妹紅は妖精の悪戯が効かないのだろうか。鈴仙とてゐはわかる。鈴仙は光の三妖精の能力が全て効かないくらい波長を操れるし、てゐは

私が生まれるより前からこの竹林にいたかもしれない。熟知して当然だ。

妹紅は………数百年いるから慣れるのには十分か。妖精がこの竹林で人を惑わすようになる前から住んでいるのかもしれない。それなら納得できる。

「おーい！悪戯兎はいるかー？」

着いていきなり大声でそれは無いだろう。いても絶対に出てこないだろうし。

「あら、妹紅じゃない。それにパチュリーと咲夜まで。お茶でも飲む？イナバに用意させるけど」

「それじゃあ貰おうかしら。今日はあなたと永琳にも話があるからついでに呼んで来てもらえると良いのだけれど」

そうすると鈴仙の負担が増えすぎるだろうか。申し訳ない事をしたかもしれない。

「それなら私が永琳を呼んでくるわ。お茶を出すのは面倒だからイナバにやらせるけど」

もうそこまで行けばお茶を出すのも大して変わらないと思うのだがそのところはどうかだろうか。それとも永遠亭のお茶出しは相当に面倒なのだろうか。

「あつ、姫様。お客さんですか？お茶持ってきますね」

ありや完全に職業病だね。お茶を用意しに行くまでの速さが条件反射ばりだ。まあそんなことを言ったら咲夜も大して変わらないように思うけれど。

咲夜 side

パチュリー様に連れられてきた永遠亭。どうやらここに私の出生

の秘密があるらしい。秘密の鍵を握るのは八意永琳。月の頭脳とも称されパチユリー様からも絶賛されている元月人だ。

「では心の準備はできたかしら？ 覚悟の無い者には話すことはできないわよ」「大丈夫よ」

パチユリー様に言わせれば衝撃的な事実らしい。でもそれを聞く覚悟もないのに今ここに座っていることはできない。自分を知ることにより世界は広がるだろう。すべては私を私たらしめるために必要な情報となるのだ。

「分かったわ。ではお話ししましょうか。十六夜咲夜と名付けられた貴方の出自と私の後悔を。」

先ずは結論から言わせてもらおうと貴方の生まれは月なのよ。それに腹を痛めて貴方を生んだ親は存在しないの。パチユリーや貴方の主人の吸血鬼は薄々感じていたようだけどそれが事実よ。月が生んだ唯一の傑作、それが貴方なの。

月ではあまりにも科学が発達しすぎたせいで調子に乗り出す人も出てきたわ。そこでそのような人たちが考えたのが人造人間計画よ。つまりは自分たちの手で人間を作ってしまったおうという計画ね。残念な事に月にはそれができるだけの科学が存在してしまっていた。もう数千年、数万年以上を生きてきた月人たちには倫理観という物が無くなってしまうていたの。

私は本来ならしたくなかったことよ。でも決定は多数決によって行われたのよ。未だに決め方だけは多数決なんていう原始的な方法で行っているのには納得できないわね。そう言うわけだから私は計画に協力するしかなかった。あの頃の私はまだ輝夜の教育係をしていたから立場を失うのは避けなければならぬ事だった。

さらに私にとって都合が悪かったのはその輝夜も計画に携わらなければならなかったこと。月人とは穢れを失くすことで永遠を生きる種族の事。でも人造人間には初めから穢れが存在してしまう。それを輝夜の能力を使って少しずつ減らしていく、と言うのが計画の全

てだったわけ。

計画は成功し人造人間は赤子の状態で作られた。でもそこから問題だったの。その人間は想定をはるかに上回る穢れをまもつていた上に輝夜の能力に似た能力を持って生まれてしまった。こうなつては月に置いておくことなど到底できなかつた。月人は穢れが拡がることを恐れた。自分たちで生み出しておいて勝手なものだと思わないかしら？

結果輝夜の作り出した永遠の空間に閉じ込められることになった。千五百年が過ぎたら地上のランダムな場所で空間が開き赤子は地上に存在するようになる手筈でね。私は貴方を生み出してしまった事と貴方のその後の事を考えると計画を続ける気にはならなかつた。

幸いな事にその後輝夜が地上に流刑になったから計画は無くなつたわ。そして私も一緒に地上に残り輝夜たちとつい最近まで隠れて暮らしていたの。輝夜はウドンゲと会うまで月にいたことすら忘れていたようだけど私は忘れた事など無かつた。私にもう少し権力があれば、私にもう少し勇気があればこんなことにはならなかつたのだと思うと悔んでも悔やみきれなかつたわ。

勿論私は蓬萊人だから死んでも死にきれない。だから死で償う事は出来なかつたし、そうしたところで貴方も喜ばないでしょう。

私たちが起こした異変で貴方を見た時に一目で分かつたわ。貴方たちが私ではなく輝夜を追って行ったのは誤算だつたけれど。貴方には本当に申し訳ない事をしたわ。本来ならもっと早くに話しておくべきだつたでしょう。何か私に対して言いたいことがあるばいくらでも受け入れましょう。そのくらいの権利が貴女にはあるはずよ」なるほど。これが私の真実。この告白を聞いて『お前が悪いんだ』と怒り出す者がどこにいるだろうか。或いはただの言い訳にも聞こえるかもしれない。しかし少なくとも私にはそのようには聞こえなかつた。彼女は心の底から後悔しているように感じた。

「貴方に対して特に言いたい事は無いわ。むしろ感謝しているくらいよ。生み出されなければ私はお嬢様や妹様、パチュリー様に美鈴、小

悪魔にも会う事は出来なかったのだから。仮に私が恨む者がいたとしてもそれは貴方ではなく生まれた赤子を不良品とした月の重役でしょうね」

私が存在しているからこそ紅魔館の方々に会う事ができたのだ。月で育たなかったからこそ今地上で暮らせているのだ。だから永琳にはああ言ったが結局私がそれに関して誰かを恨むことは無いだろう。

「私は貴方にひどいことをしたのにそう言ってくれるのね。ありがとう、心が軽くなったわ。それにしても十六夜咲夜、か。良い名を貰ったわね。咲耶姫を思い出すわ」

咲耶姫といえは富士の山の神だったか。その昔かぐや姫の消えた後に残された人間たちはその山の頂上で蓬萊の薬を燃やそうとしたらしい。だから不死山富士山というそうだ。

「ええ、お嬢様に付けていただいた自慢の名前よ」

そしてこの名が表すところは満月。吸血鬼の最大の味方である。あの頃の私にとってはただ言いにくいだけの名前ではしかなかったが、今ではとても気に入っている。

「大事にしなさいね。…あら、もうこんな時間ね。話し過ぎてしまったかしら」

「そうね。もう帰らせてもらおうわ。最後に一つだけいいかしら？「ええ」私の寿命はどうなるの？」

「……………残念ながら貴方の寿命は一般の人間より少し長い程度のものしかないわ。良くてあと二百年生きられるかどうか、ね。纏っている穢れが多すぎるからよ。残念だけどそこはどうしようも無かったわ。申し訳ないわね」

何が残念な事か。私にとっては喜びでしかない。

「いいえ、それでいいのよ。私は一生涯死ぬ人間であることをお嬢様に誓った身。ならば確実にお嬢様がお亡くなりになる前に私は死ななくてはならないわ。主に先立たれるなど従者としてあるまじき失態となってしまうでしょうからね。だからそんなに長くはない寿命があつた方が良かったのよ」

あの時は輝夜の言葉を理解できなかったが今は答え合わせでもしているような気分だ。死の無い人間はもはや人間ではない。そして私は人間であることをお嬢様に誓ったのだ。悪魔への誓いは破ることすら許されない。どうやら私にはきちんと死の概念がある様で安心だ。

「ではこの辺りにしましょうか。そろそろ妹紅も待ちくたびれているでしょうね。咲夜もそれでいいかしら？」

「はい、パチュリー様。今日はありがとう、永琳。また何かあれば頼ることもあるかもしれないわ。その時はよろしくね」

当分は彼女が親である、という認識でも問題ないだろう。確かに話は衝撃的だったが聞いて良かったと思った。これで安心して人間としての生を過ごすことができるというものだ。

「今日はどんな話をしてきたのかしら」

「咲夜の話よ。レミィも気になるのなら咲夜から直接聞きなさい。ただし強制しては駄目よ」

強制されなくてもお嬢様には話しておくつもりだったし丁度良い。

「お話しますよ。私にとっては驚きに満ちていましたがお嬢様にとつてはそれほどでもないでしょう」

あの時だって私を置いてけぼりにして輝夜と話ができていたし。

「へえー。ま、予想通りではあったわね。少し予想外な所もあったけど。さて十六夜咲夜、今改めてお前に問おう。不老不死になる気は本当に無いんだな？」

「勿論でございます、お嬢様。私は今も昔もこれからも一生死ぬ人間であることを変えるつもりはありません。ですが私が生きているうちには………必ずやお嬢様とともにおります。いつでもどこでも、そしてお嬢様がお望みであるならば」

即答とはこういう場面で使うべき言葉である。一瞬の間も置かず即座に回答する。それはお嬢様の望む答えではないのかもしれない。だが私は式コンピュータ神などではない。多少は主に逆らう自分の意見も言わなければならぬ。いくら私が吸血鬼に寄りそう満月であったとしても。

強くなる事の弊害

小悪魔 side

パチユリー様と魔界に来てから数日が経った。今パチユリー様は魔界神様と何やらお話しているようなので自由にしていと言われている。昔はできなかった魔界の店巡りでもしてみようか。いや、裏路地でも見に行こう。

魔界と言うと私の故郷であり、嫌な思いでしかない場所である。かつての私は今よりはるかに弱かったが、それにしてもここでの生活はひどいものだった。そう思えるだけ私は恵まれているのだろう。外にはこここの環境よりさらにひどい場所もあつたりするらしい。彼女も可哀そうなものだ。

百年少し前

「おいそこのお前たち、このごみでも捨ててこい。おっと、お前から自身がごみだったか？ギヤハハハハ」

下品な笑い方をする嫌な悪魔だが悪魔としての格は私とはけた違いに高い。故に命令に背く事などできない。ましてや反抗するなどなおさらだ。だから大人しくごみを捨てに行かなければならない。私はこんなことをするために生きているわけではないはずなのに。

「反抗しては駄目よ。殺されちゃうわ」「うん。わかってるよ、ちーちゃん」

私たちのような低級の悪魔には名前がない。だから互いを区別するためには渾名で呼び合うしかないのだ。今話しかけてきた子はちーちゃん。単純に力が小さいからだ。同じ要領で実力の低さから私の渾名はひーちゃんである。わざわざ凝った渾名を付けられるほど精神的余裕はない。

力の弱い悪魔を小悪魔と呼ぶのだが、ちーちゃんは私と最も仲のい

い小悪魔だ。実は昔一度だけ召喚されていたこともある。僅か数年で契約が切れたとかで帰って来ていたが。

「そう言えばちーちゃんは昔誰かに召喚されたんでしょ？どうだったの？その時は。私は永遠に召喚されなさそうだから話だけでも聞かせてよ」

私の知らない世界をちーちゃんは知っている。そのことについて知りたいし、たとえ召喚されることが無いにしても雰囲気だけは味わってみたいものだ。

「あくあの時ね。うん、今だから言えるけどあれは最悪だったね。そもそも私を召喚した魔法使いの性格が最低だったもん。契約内容なんてひどいもんよ？確か『五年間、家を魔物の侵入から護れ』みたいな感じだったかな。

普通に考えて無理だよ。中級の悪魔以上の魔物が外にはわんさかいるし、何よりその魔法使ったら魔物を呼び寄せるような魔法薬を調合してたんだよ？正直初日から帰リたかったわね。ここの生活より酷いものがあるとは思ってなかったけどまさかねえ……………おっ、着いた着いた。しかしごみ捨て場も生活圏から地味に遠くて面倒よね。どうにかならないのかしら」

よほど溜まっていたのか愚痴のオンパレードだ。今の生活も相当ひどいものだがそれを超えるひどさが外の世界にもあるのは驚きだ。

「よつと。確かにね。それで、結局五年間外にいたじゃない。その間は どうしていたの？」

「その間？ああ、最初より酷かったのは当たり前前よね。毎日寄ってくる魔物は勿論私では処理できないから魔法使いは上級の悪魔とさらに契約したの。それだけの対価が払えるほど力の強い男だったのよ。あの魔法使いは」

上級の悪魔と契約するにはかなり強い力が必要になる。私では想

像もつかないけど。

「その後は……まあお察しね。その魔法使いと悪魔からも厳しくされたわ。どう思う？毎日自分より強い魔物が押しかけてくる、それを撃退できないから主人とその使い魔に叱られる。雑用は勿論自分一人で食事も三人分用意しなければならぬ。それに力の差が圧倒的だからか対価すらくれやしないのよ。」

結局ね、強い魔法使いって言うのは都合の良い手下が欲しいだけなのよ。言う事に逆らわない……いや、逆らえないほど弱く、鬱憤を晴らすにも丁度良く、対価も必要ない。そんな悪魔がね。だから私たちは弱いけど意外に召喚されやすい類の悪魔なのかもしれないわ。

だからひーちゃんも気を付けて。力の強い魔法使いに召喚されたらできるだけ早く帰れるように努力するのが大事なの。対価を求めてはいけない。私たちはきつと彼ら彼女らの都合の良い駒としか見られていないんだから。そんな人たちには巧言令色で接すると良いよ。どうせ内面なんて見ない人たちなんだからね」

聞けば聞くほど召喚されたくなくなるのは当然の成り行きだろう。悪魔にとって召喚されるということは名誉なことのはずなのに。

「力の強い存在に召喚されて良いことはないわ。だって彼らはいつでも私たちを消せるという事なんだから。召喚術式から抜け出せないってのも厄介よね」

「まあそれは悪魔の宿命のようなものでしょ？私にはまだよくわからないけどさ」

私の中には召喚されたくない、という気持ちと召喚されて見聞を広めたい、という気持ちの両方がある。まあ私が召喚されることなんてないだろうが。

現在

まさかあれから数年後に召喚されることになるとは思わなかった

が。しかし急な召喚だったからちーちゃんには何も言えてなかった。だから昔よくいた裏路地に来ているのだ。私たちがよく一緒にいた場所まではもう少し。彼女はまだそこにいるのだろうか。

………いた。あの時よりさらにさらに痣がひどくなっているようだ。私が一番仲良くしていたのは彼女だが、彼女にとっても一番仲良かったのは私だったのだろう。その私はもう百年も魔界を空けていた。そしてその間彼女は以前までよりさらにひどい扱いを受けていたのだろう。

「……ちーちゃん？大丈夫？」「!?やつ、やめて！来ないで！」

あらあ。これは相当精神に来ているようだ。話しかけたのが私と気づいていない。

「ちーちゃん、私だって。ひーちゃんだよ？」「嘘よ！ひーちゃんはそんなに強くなかったわ」

そう言えばそうだった。私はパチュリー様や美鈴さんのおかげで強くなってしまったのだった。気づいてもらえないのも無理はない。あの時の私はもういないも同然なのだ。

もう私にはちーちゃんと話す資格はないのだ。残念だが私はもうここにはいられない。最後に彼女のこれからに幸がありますように。彼女も私のように良い主人に巡り合ってほしい。そうすればきっと幸せになれるだろう。この地獄から解放されるだろう。

私は祈ることしかできない。強くなったと言っても所詮はその程度のものだ。彼女を護ることすら許されない。だからせめて彼女には私からの精一杯の祈りをささげておこう。

「あら、こあ早かったのね。もう良いの？魔界巡りは」「ええ」

「……分かったわ。私はもう少し話があるから部屋の外で待っていて頂戴」

何かじつと見られたがやましいことは無いので平気だ。決して無い。無いっただけ無いのだ。

こあを自由行動にして神綺と話していたが、帰って来たこあを見ると何も言えなくなってしまう。彼女自身は気づいていないのだろうがとても悲しそうな目をしていた。昔の魔界を知っていたこあは現状の何かに絶望したのだろう。

こあの過去は彼女自身から聞いている。力が同じくらいのも（つまり弱い）親しい友人がいたそう。きつとこあはさつきその子に会いに行ったのだろう。方向的には街の方。よく過ごしていたのは路地裏だったか。

「決めたわ、神綺。私の本の売り上げは私がいなければ魔界に寄付するわ。それを使って路地裏まで整備しなさい。驕った奴らが弱者をいじめるのは見ていられないわ」

「ふーん。なるほどね。別にいいわよ。それでいつ本を書くの？」

まだ魔界を出る気は無いからねえ。

「いつになるかはわからないけれど魔界を出る少し前でしょうね。一週間後か、はたまた十年後かは私にもわからないわ」

本を書くと言うのは確定事項だが。本来なら魔界の問題に部外者の私が関わるべきではないのだろうが今回は別だ。努力してきたこあが報われないのは私の本意ではないのだ。

パンドラの箱（過去）

美鈴 side

「どうかしたの？美鈴。何か考え込んでいたようだけれど」

「いえいえ、何でもないですよ、パチュリー。少し昔の事を考えていただけですから。それにしても次の仕事は何処でしたっけ？」

話をそらすために話題を振るが、如何せんわざとらしい。勿論次の仕事は何処かなど覚えているに決まっているからだ。

「次は備前ね。そこまで遠くないし三日もあれば徒歩でも着くでしょう。それにしてもあなたの過去ね。どうせ聞いても教えてはくれないんでしょう？」

当然だ。たとえ数百年連れ添ったパチュリーにでも私の過去を語ることはしない。否、できないと言っても良い。私の醜い過去になど蓋をしてしまいたいのだ。

「勿論です。誰にも語る気はないですよ」

私が誰かに語るとすればそれは秦代以降だろう。その前までは到底誰かに語る気にはなれない。特に私が生まれてすぐの頃なんかは。

そう、あれはまだ中国最古と言われる王朝「夏」が建って間もない頃だと思う。

↳回顧↳

私が生まれたのは暑い、というよりは熱い場所だった。生まれた直後から私は自分を認識し、自分の足で立ち上がることができていた。当然だ。妖怪は人間の恐怖の具現。故に生まれた瞬間から自立しているのだ。

それを知ったのは生まれてから少し経った後の事だったが、不思議には思わなかった。それよりも不思議だったのは周りがとても熱かったことだ。

生まれたばかりの私の周りでは人間たちが走り回り、騒ぎまわって

いた。当然だが私は状況が理解できずにただ呆然と立ち尽くしていただけだった。私にとっては不幸な事に人間たちは私と同じような姿形をしていた。

故に私は彼らと自分を同じ物として見ていたのだ。しかしその時の私は彼らと自分の大きな相違点を見つけていなかったのだ。すなわち今で言う服である。私を見た集落の人間たちは一目散に逃げてしまった。私の無駄に丈夫な体は炎を受けても物ともしなかった。ただ熱さを感じながら突っ立っていただけだ。

後で聞いた話だが、あの集落はあの日龍によつて燃やされていたらしい。龍と言うのは崇高な動物であり、神とも同一視される存在である。かの集落が燃やされたのはその龍の怒りを買った為であるらしい。

何でも貢物は一向に差し出さず、その代わりの贄も差し出さなかったとか。普段なら龍は恵みの雨を降らすが、この地域に限つては雨を降らさずに乾燥させた上で火をつけたのだ。作物は収穫できず、挙句の果てに火までつけられた人々は龍を畏れることすら忘れていたのだ。

そしてそんな時に私が生まれたのだ。人々の火への恐怖、そして神という名の龍への恐怖。それが私を生んだのだ。そして焼失した集落の跡地にいた私はそこを燃やした張本人である龍に引き取られ、しばらくともに過ごすことになったのだ。

神と崇められるだけはある、私に人間では知り得ないような知識や武術を教えてくれた。今となつては倭国でも常識として定着しつつある知識だが、それも元をただせば中国から渡つてきた知識になる。つまり私以外に龍の教えを受けた人間が何処かにいたのだろう。

正直に言うと私はすぐにも龍の下から離れたかった。私を生む原因になつたのはこの龍なのだろうが、実際に生んだのは人間の恐怖である。親面をされてもどうしようも無かつたのだ。だが彼女に唯一感謝していることがある。それは今の私に繋がる（私にとっては）重要な言葉をかけてくれたことだ。

『お前には才能が無い』

彼女からすればただ単純に私を貶めただけだったのだろう。しかし私にとっては励ましにしか思えなかった。

『お前には才能が無い』だから努力してでも他者に食らいつけ、と。だから私は努力した。彼女に認められるためではない。私自身が生き延びるためだ。私は炎への恐怖から生まれた存在。だが才能が無いために火を扱う事は到底できない。私は龍への恐怖から生まれた存在。しかし私には崇高さなどと言う物は初めから無い。

だから私は人間の武術を習い、それを極めることで自分よりも才能のある人間や妖怪に打ち勝とうとしたのだ。まるで力の無い人間のように武を極めることでのし上がるうとしたのだ。

相對する妖怪たちは私を笑った。力ある妖怪たちは人間から武を学ぶ私を嘲った。私の育て親は負けて帰ってくる私を叱った。

私はいつも反抗していた。叱る言葉の中に私への期待が含まれていることに気づいていながら反抗し続けた。そうすることでしか鬱憤を晴らせなかったから。そうしなければ自分を保てなかったから。私はひどく弱かったのだ。

私に武を教えてくれる人間は少なかった。当然だ。私は人間ではなく妖怪なのだから。

妖怪を弟子に取ってくれるような人間は既に世を捨てた老人に多かった。私には仙人との区別もつかなかったものだ。もしかしたら本当に仙人だったのかもしれない。

そんなこんなで千年以上師を変えたりしながら人間の武術を学び続け、ようやく妖力を使わずとも中級くらいの妖怪となら素手で戦えるようになった。

この段階で私を育てた彼女は私を自立させた。彼女から最後に貰ったのは龍の文字が入った被り物。色は服と同じだ。

被ることあの頃を思い出しそうになるので最近是被っていない。最後に被ったのはパチュリーと山に籠った時だろうか。

時代は周を終え、人間同士の戦争が目立つようになっていた。どうせなら人間の使う武器も扱えるようになっておきたかった。使う機会は無いだろうができることが多いに越したことは無い。

残念ながらその頃の時代背景もあってなかなか教えてくれる人間は見つからなかった。ようやく見つけた人間はまたしても戦を捨てた老人だった。いくら老人とはいえかつては戦場を駆け回った男。腕は疑いようもない。

私は毎日彼に私淑した。彼の教えは丁寧だったが、少しでも手を抜けば怒鳴られた。まさに模範的な師匠だった。努力を続ける私を彼が褒める。時に叱る、という生活を続けていた。

それはまさに突然の出来事だった。毎朝身体を動かしていた彼の姿はどこにもなかった。家は騎兵の乗る馬によって踏みつぶされていた。一体何頭の馬がこの上を通ったのだろうか。誰にも気にされず、私はまた一人師匠を失った。

長く生きると言うのは悲しみに耐えながら生きることである。過ぎた時間は二度と戻って来ず、死んだ人間は二度と生き返らない。

私には共に長く生きる相棒が必要だった。だがしかし人間では寿命が短すぎる。妖怪は協調性が無さすぎる。妖怪としてあまりにも歪んだ私が相棒を見つけるのは不可能だと思っていた。

そんな時に彼女は現れた。時代は晋。場所は私の住処の近くの砂漠だった。

今にも死にそうな彼女を私の気で応急処置し、部屋で寝かせた。

彼女は私の努力する姿を見ても嘲笑しなかった。それどころか彼女自身も努力家だったのだ。彼女は元ある才能に加え努力によって他の力も使えるようになった。それが今でもよく使っている仙術である。

それ以外にも生まれつき弱い身体を強くするために山の上で修行をしたりした。そして海を渡り、今倭国に住んでるのだ。

〈回顧終了〉

パチユリーside

いつまで経っても美鈴が昔の話をしてくれることはない。彼女の過去は私が思っているほど甘いものではないのだろう。だから無理

には聞きださない。彼女が話す気になったその時に耳を傾けられるように。

彼女は強い。私ではとても太刀打ちできない程にその実力差はある。

彼女は弱い。その心のあり方がどうしようもなく。

彼女はその長い生の中で多くの死を見てきたはずだ。にもかかわらず今でも彼女は見知らぬ誰かの死を直視できない。妖怪として異端である。歪み過ぎているのだ。

私も他人の事を言えない程度には歪んでいるのかもしれない。それでも美鈴のそれは私をはるかに超えている。

美鈴の心の傷。残念ながら私にはどうしようもない。何かいい方法を探そうとしても美鈴自身がそれを阻む。

ああ。彼女はきつと今のままで満足してしまっているのだ。到底振り返れない過去を持ち、それでも後ろ暗さを見せないように生きているのだろう。

明るく見せている裏に如何程の闇を背負っているのか。私には理解できない。積み上げてきた年月が違うのだ。

彼女と過ごして五百年も経った。だがその年月さえ彼女はまだ五百年、と言い切った。彼女がいつから生きているのか、何の妖怪なのか、生まれはどこなのか。はつきりしたところはまだ私にはわからない。

彼女も教えてくれる気はないようだ。今はそれでも構わない。彼女の過去を知ってしまえばもう後戻りはできない。もとより後戻りなどする気は無いのだが。

美鈴は優しい妖怪だ。困っているなら人間であろうと妖怪であろうと手を差し伸べる。それは救われた私が一番理解している。

ある者は妖怪に優しさは不要だという。残酷ささえあれば人間の恐怖を得られる、生きることが可能である、と。しかしそうではない。いくら肉体の丈夫な妖怪といえど耐えられない苦痛は存在する。その時、妖怪に優しさがあれば…と嘆いても仕方ないのだ。

優しさとは時として盾にもなる。道端で倒れていた人間を救えば

当然退治されにくくなる。人間からの認識が良い方に傾くからだ。

美鈴の優しさは天性のものなのか、身に付けたものなのか。それが彼女を護る盾の役割を担っているのは一目瞭然である。また彼女の心の壁となっていることも同様に一目瞭然なのだ。

『誰かを傷つけないために』という優しさの陰で彼女は自身心を護ろうとしているのだ。私はそれを否定しない。それは美鈴の正しいあり方だと思うから。それを否定するのは五百年連れ添った私にはできないのだ。

きれいごとを並べているように思うかもしれない。しかしこれは事実なのだ。転生してきて会うまでわからない事だらけなのだ。知っているつもり、はこの世界では通用しない。直に会ってようやくわかる事ばかりだ。

私という存在がいる時点でこの世界はバグに侵されているのだ。いつ、どこでこの弊害が出てくるかはわからない。出てこないのが一番ではあるがそう簡単にはいくまい。相手を知り、その上で付き合いう方を考えなければならぬ世界なのだ。

私にとってここはゲームではなく現実。簡単な操作だけで世界は回らないのだ。答えの選択肢など用意されていない。登場人物もそれ以外の人妖も全てこの世界で生きているのだから。

バタフライエフェクトがどこまで影響を及ぼすかわからない。不用意な発言が、行動が、全て己の死に繋がるかもしれない。他者の禁忌に触れることになりかねないのだ。

美鈴 side

「残念ね。もう五百年近くも一緒にいるのに」

パチュリーが本当に残念そうに言う。五百年。龍の彼女を除けば私と一番多くの時間を共にしているのはパチュリーだ。このまま旅を続ければきつとパチュリーは私の一番の理解者になる。まさに相棒。阿吽の呼吸で以心伝心。そのどれもが当てはまる。同じ意味であると言っではいけない

「まだ五百年ですよ。そうですね……いつかパチュリーが私の年齢に追いついたら教えてあげますよ」

だがそうなたたとしても私から口を割ることは絶対に無い。私の過去は彼岸渡るときであつても話すことは無い。私の過去を暴けるのは私を裁く閻魔ただ一人。そして真に私の過去を知るのは後にも先にも私の育て親ただ一匹だけなのだ。

過去を語らないことで謎の多い女性を演じようとしているのではない。これはいわば私の禁忌なのだ。人間も妖怪も誰であつても触れることすら叶わない。そんな物。

「それって話すつもりは全くないんじゃないの。はあ、仕方ないわね。ところで美鈴。最近はある被り物を付けていないようだけどどうして？」

本当の理由を言うわけにはいかない。そうしてしまうとパチュリーの事だ。彼女の優秀な頭なら結論にたどり着いてしまうかもしれない。

「そうですね……この島であんな被り物をしていたら目立って仕方ないでしょう？だからですよ」

だから私は嘘を吐く。パチュリーが納得できるように。そして彼女を思い出さないために。結局私は何処まで行つても弱いままなのだ。誰にも傷つけられないように自分の殻に閉じこもっているだけの貝と同じ。

いつか………数千年も経てば誰かがその殻を破ってくれるかもしれない。それはきつとパチュリーなのだろう。一番信頼しているし、信用もしている。

本当ならば私が自分で殻を破らなければならぬのだろう。でもそれは今の私にはできない。未来の私でもきつと。

だからパチュリー、いつか本当の私を出せるように頑張つて頂戴。貴方ならきつと可能に違いないから。

ハッピー？ ハロウィン

パチユリ side

神無月の晦日。早苗ちゃんと共に幻想入りしてきた外のイベントと言えそう、ハロウィンである。私や紫なんかは入ってくる前から知っていたが、そうでない大半の者にとっては新鮮な物である。かく言う私も幻想郷でするのは初めてなので柄にもなく少しテンションが上がっている。

だって仕方がないじゃないか。こう見えても前世は普通の人間の女子だったのだ。こういうイベントも友人たちと楽しんでいた……はず。

因みに晦日は明日だがパーティーは今夜やるらしい。早苗ちゃんがレミイにいらぬことを吹き込んだようでレミイもそれを真に受けてしまったらしい。

何でも『ハロウィンと言うのは元々悪魔を崇めるための祭りですからパーティーはこの館でするしかありません。ハロウィン自体は31日なのですがほら、クリスマス・イヴとかあるじゃないですか。ハロウィンにもハロウィン・イヴなるものがありますよ、30日の夜にみんなで集まってパーティーをするものなんですよ』という事らしい。

前半は間違っていない。前半は。だけど後半はどうしてそうなったと言いたい。ありや嘘のオンパレードだよ。今日この館でパーティーを楽しんで、明日はお菓子を貰う事を楽しむという早苗ちゃんにとっては得しかない話である。うんまあレミイもパーティーは好きだしお菓子も好きだから良かったのかな？ レミイは作る側だけだ。

見た目相応に貰いに行っても誰も文句は言わないと思うけどねえ。特にこの世界の住人たちは。ま、霊夢に貰いに行ったらところでもらえるとは思えないけど。

パーティーの準備は着々と進んでいる。早苗ちゃんが張り切って

声をかけまくったせいで参加者数が去年のロケットの時より多い予定だ。でもそのおかげで手伝いも多い。パーティーや宴会となるとレミイが調理担当から自動的に外れるので手伝いは大助かりだ。

今回は八雲家から藍『好きにこき使ってあげてね』 b y 紫

冥界から妖夢『早く一人前になってほしいから遠慮なく使ってあげてね』 b y 幽々子

永遠亭から鈴仙『早く馴染んでもらいたいから連れって良いわよ』
b y 輝夜

博麗神社から霊夢『手伝ったら豪華なお昼ご飯が食べられるって紫が言ってた』

守矢神社から早苗ちゃん『悪気はなかったと思うんだけどこうも多くなつたのは早苗のせいだからねえ』 b y 諏訪子

天界から稔里『ぱっちゃん和美鈴のためなら手伝ってあげるわ』

魔法の森からアリス『足手まといになるかもしれないけれどできることがあるば手伝うわ』

後は私と美鈴と咲夜の計十人体制だ。心強い事限りなし。なんだからだ。皆料理の腕は一級品である。今日はいつもの宴会と異なり洋食メインに作るつもりだから妖夢や霊夢、稔里には相性が悪いかもしれない。手伝いに来てくれたからにはしっかりと使わせてもらおうけれど。

料理以外の飾りつけはレミイとこあとフランドールに頼んである。ジャック・オー・ランタンは昨日私と美鈴で量産しておいた。と言っても私が庭のカボチャを魔法でくりぬいて美鈴が目や口を彫りぬいただけである。実質仕事をしたのは美鈴だけな気もする。

飾りつけのセンスに関してもあの三人なら恐らく問題ない。特にレミイに関しては館の威厳もかかっているから手を抜くような事はしないだろう。

「ところで早苗ちゃん、いったいどのくらいの人や妖怪に声をかけたの？」

「えっと、そうですね…正確な数はわかりませんが大体で良いのなら。」

……まずは勿論諏訪子様と神奈子様。そしてなんだかテンションの高かった妖怪みたいな神様たちと厄が移りそうな厄神様。あとはそこにいた河童。飛んでいる天狗には誰彼構わず声をかけましたね。山はそれくらいでしょうか」

天狗はごく一部を除いて来ないだろう。静葉様達がテンション高かったのは仕方がない。秋だから。雛にとりもきつと来る。去年も来てたし。山だけで七人以上は確定か。

「あとは竹林で偶然出会った妹紅さんと永遠亭の皆さんに、里の慧音さんと阿求さんでしょ。無縁塚では小町さんと映姫さんに会いましたし……あ、そうです、ミステイアさんとリグルさんにも何処かで会いましたね」

永遠亭は鈴仙を寄越したことを考えて確実に来る。妹紅と慧音もそれについてくるだろう。阿求もほぼ確実に来る。多くの妖怪が一堂に会するから。映姫は仕事次第かな。小町は仕事関係なく来そうだけれど。ミステイアとリグルも暇だから来るだろう。あとルーミアも。

「そういえば里で幽香さんにも会いましたね。紅魔館でやると言ったらメデイスンさんと来ると言っていましたよ。あとは行ってはいませんが冥界と天界ですね。声だけはかけておきました」

早苗ちゃんが声をかけた者たちだけでも二十以上は確定か。あとは声をかけなくても来るだろう。妖精たちや萃香なんかも合わせればなんだかんだ五、六十もしくはそれ以上来そうである。多いな。それだけの量の料理が作れるかが心配である。レミイがいれば幽々子を抑えることができるが残念ながら頼ることはできない。

「随分多いのね。館には入りきるでしょうけれど料理が足りるかは心配ね……あ、その包丁は使ってはダメよ。絶対に」

使ったら怒られる。誰にとは言わないが普段怒らない分怒った時の剣幕は想像できない。

「そうなんですか？ すみません。張り切ったのは…去年は来たばかりでできなかったものでつい、ですかね」

まあそれは仕方ないよね。女子高生だった早苗ちゃんにとっては昔から慣れ親しんでいたイベントだろうし。むしろ去年はよく我慢できたと思うよ。いくらこちらに慣れていないのだと言っても早苗ちゃんならやりかねなかったから。

それにしても早苗ちゃんもたった一年で知り合いが随分増えたものだ。早苗ちゃんをこちら側に導いてきた身としては何とも感慨深い。神奈子たちがいたことを忘れてあのままあちらで過ごすことと今まで住んできた世界を捨ててこちらに来ること。どちらの方が良かったかなんて死んでもわからない事だ。それでも今、早苗ちゃんが楽しんでいるようなら良かったのかなと思う。

「はあい、料理の方は順調に進んでいるかしら？」

「あつ、レミリア。ったく何が『はあい』よ。良い御身分ね。こっちは大変だつてのに。少しは手伝ったらどうかしら？」

霊夢は相変わらず毒舌だね。レミィが来たという事はもうすぐ昼食だろうか。

「まあそうかつかしなさんな。私だつて手伝えるなら手伝うわ」

「そうでしょうね。ほんつと良い御身分ね。毎日何もしなくても咲夜の美味しい料理が出てくるなんて贅沢の極みよね」

レミィの言葉の本当の意味を理解できたのは紅魔館私たちとアリス、妖夢だけだろう。藍はわからないが他の者たちは霊夢と同じことを思ったに違いない。レミィを、レミリア・スカーレットを知らない者からすればあの反応は至極当然のものである。

「ふふつ、間違いないわ。……こちらから咲夜、そのナイフを仕舞いなさい。私は昼食が来たから呼びに来ただけよ」

今日の昼食は確か紫からの差し入れで外の弁当だったはず。私が一時期働いていた定食屋が弁当業にも手を出したとか。私の残したレシピも無駄にはならなかったようで一安心である。とても短い時間ではあったがあの店長には働かせてもらった恩がある。私の事は忘れさせたけれど。

レミイが咲夜を止めたのは当然の事だ。咲夜があのまま霊夢に手を出していたらキッチンが無事ではないだろうし咲夜も無事では済まないだろう。霊夢の言葉が頭に來たのは理解できるがここでボロが出て困る。今は落ち着いてもらわなければならぬ。

咲夜 side

お嬢様に止められていなければナイフを投げたところだった。私の行動がお嬢様に迷惑をかけることになるというのは頭では勿論わかっていた。しかし思わず行動に移してしまいそうになった。まだまだ未熟である証拠だ。恥ずかしい。

しかし何故……何故お嬢様はご自身の批判を柳に風と受け流すことができるのでしょうか。先ほどの言葉は確かにお嬢様にとつても頭にくる内容だったはず。それをどうして顔色一つ変えずにやり過ごすのでしょうか。

「咲夜、何をぼさっとしてるのよ。もう皆食堂に行ってしまったわよ」

本当だ。いつの間にか周囲にはお嬢様しかいなくなっている。考え込んで周りが見えなくなるなんて。

「お嬢様、私はまだまだ未熟です」

「あら、今更気づいたの？貴方はまだまだ未熟。私だってまだまだ未熟よ。でも未熟であることは伸びしろがあるという事なの。昔パチエにそう教わったわ。貴方はまだまだ強くなれる。もっと完璧に

なれる素質も資格も持っているの。いつになっても未熟なままでいなさい」

ずっと未熟でいろ、か。常に貪欲に上を見続ける。私の目指す完璧のさらにその先にまだ道があるというのか。

「この館は未熟者の集まりよ。パチエも美鈴も私もフランも、毎日自分を強くするために努力しているの。小悪魔だって弾幕が使い物になるように特訓しているくらいなのよ。だから咲夜、貴方も毎日研鑽を積みなさい。そして誰よりも強くなりなさい」

お嬢様よりも、パチユリー様よりも、美鈴よりも、八雲紫よりも、そしてあの綿月依姫よりも強い力を得た私。今はまだ想像することさえできない程の架空の世界。まさに夢物語。しかしお嬢様がそこを目指せというのなら私は目指しましょう。たとえ何十年かかっても。

「そんなことより昼食よ、昼食。八雲紫の話によればパチエが外に行っていた時に働いていた店の弁当らしいわ」

「あら、それは楽しみですね。パチユリー様が働くような店です。きつと美味しいに違いありませんよ」

美鈴 side

パチユリーがレシピを提供したとあって思ったよりも美味しい弁当だった。パチユリーは普通に温めて食べていたが一応冷めても美味しいをモットーに作っている弁当らしい。

「じゃじゃーん。お手伝いをしてくれたみんなには紅魔館からお礼があるよ！ 私が作ったんだ」

妹様が出してきたのはかぼちゃプリン。昨日くりぬいた中身を使った物のようだ。これで昼からの皆のモチベーションも爆上がり

である。紅魔館からと言いつつもちやつかり自分たちの分まですべて用意しているところが妹様らしい。いやどちらかというとお嬢様らしい、かな。お嬢様が苦笑いしているところを見るとそんな感じがする。

「へえ、とても美味しいわ。レミリア、あんたも妹を見習ったらどう？」

「お姉様はダメダメだからね。もつと私を見習った方が良いよ？」

あ、ここはしつかり根回しが済んでいたのか。さっきの咲夜さん以上に怖かったけど杞憂だったようで何よりだ。

「でも本当に美味しいわね、このプリン。作り方教えてくれないかしら。姫様が喜ぶかもしれないわ」

確かに輝夜さんなら喜ぶかもしれない。庶民であるがそれがまた良いのだろう。地上に降りてきてからはかなり庶民的な暮らしをしていると聞いたしその生活も結構気に入っているらしい。

「それはダメ。でも教えたとしても作れないと思うよ？」 「それは残念」

お嬢様を作る味を再現することは私たちには不可能だ。それこそ料理の道のみを究めているような者でもない限りは、たとえレシピ通りに作ったとしても全く別の物ができてしまうだろう。このプリンを妹様が作ったというのは恐らく嘘ではない。しかし真実でもないだろう。

きつと妹様が作ったという言葉が嘘にならないように、基本的な工程をお嬢様がやって多少の手伝いを妹様がやったのだろう。知っている者からすれば至極簡単な推理。知らない者からすれば決してたどり着けない答え。それで良いのだ。お嬢様は外からお嬢様として見られている方が良い。

料理はできない。家事は全て従者に任せる。わがままで子供っぽ

く、面倒は力で解決したがる。

外からの認識などそれでいい。むしろそうであればあるほど館にとつてもお嬢様にとつても都合が良い。真実などごく一部を除いて誰も知らなくていい。紅魔館への恐れ、それを最大限得るためには虚像がどうしても重要になるのだ。

「さあ、午後からも頑張って頂戴ね。私たちは装飾の続きをしておくから」

「ありがとうございますお嬢様。料理はお任せください」

ふむ、今のお礼には先ほどのプリン分も含まれているな。確実に。それにしても洋食というのは本当に難しい。中華なら簡単に作る事ができるのに洋食はなかなかうまくいかない。妖夢たちも苦労しているから劣等感を感じないけど足を引っ張っている気がしてならない。この十人の中で洋食と言えばやはり咲夜さんが一番だ。そしてアリスさん、パチュリーなんかが続く。中華なら私が一番だと思うんだけど。

まあそんなことを嘆いていても仕方がない。主に幽々子さんに対抗するために午後からも頑張らなければならない。

フランドール side

「ねえお姉様、どうしていつもみんなの前では嘘を吐くの？」

パチュリーたちがまたダイナーを作りに行った後、今ここにいるのは私とお姉様と小悪魔の三人だけだ。だから聞いてみた。お姉様が作ったと言えばきつとみんなお姉様を尊敬するのに。

「嘘？　嘘なんて吐いていないじゃない。あのプリンは正真正銘フランも作ったでしょう？」

「ずるいよお姉様。あんな言い方をしたら全部私が作ったように思わ

れちゃう。私は少し味付けを手伝っただけなのに。お姉様はいつもそう。自分の手柄をいつも誤魔化す。きつとみんな私が料理をできると思ったに違いないよ」

私はほとんど何もしていないのに食べた人は私を褒めるような目で見てきた。味なんて全部お姉様が付けた物だ。私を褒めるなんて見当違いも甚だしい。

「ならば妹様も料理ができるようになればいいのではないですか？折角最高の師がここにいます。お嬢様と同じ血を持つ妹様ならきつと上手くなりますよ」

「それいいわね。思えば私フランと二人で何かすることが少なかった気がするのよね。丁度良かったわ。フランにその気があるのなら明日の朝食後にキッチンへ来なさい」

私が料理？ 片付けられるための物を作る？ 私が？ できるはずが無い。少なくとも今の私には。もし私の中のこの違和感が消えればあるいは料理がしたくなるのかもしれないけど。

「ごめん、お姉様。私はまだ料理に興味を持ってないわ。また興味が湧いたらその時に教えてよ」

お姉様の好意を無下にするのは心苦しいが自分の意志を殺すのもまたリスクだ。もしかしたらお姉様が大事にしている里で作った特注の包丁を壊してしまうかもしれない。いつかこれが完璧に制御できるようになればまたその時考えればいい。

「そう、残念ね。でもフランがきつぱり断るならこれ以上は言わないわ。さ、続きをやってしましましょう」

「と言ってももうほとんど残ってないけどね」

もう大方飾りつけは終わっている。あと残すところは玄関の装飾くらいである。邪魔も特に入らなかつたし咲夜の指示が良かったの

で予定よりかなり早く終わりそうだ。

小悪魔 side

もう始まるという時間になればどんどん館に人がやってくる。今回のパーティーは特に招待状なんかも作っていないので美鈴さんも門ではなく会場内にいる。来る者拒まず去る者追わず。入りたければ誰であろうと入って来ればいいし出て行きたければ途中で帰っても構わない。

如何に悪意のある妖怪が来てもここに集まる人間、妖怪、神からすれば大抵木っ端である。今夜の会場を乗っ取ることができるような妖怪はいまい。圧倒的な力でねじ伏せられてお終いだ。

「皆の者よく来てくれた」

あ、お嬢様のスピーチが始まった。と言っても紅魔館の住人以外誰も聞いていないんだけど。幻想郷に棲んでいる者たちは人間も妖怪も人の話を聞かない者たちばかりだ。こういう宴になれば主催者の話を聞く前に料理に手を出すのが幻想郷流。

今回はそれを防ぐためにまだ料理は並べられていない。料理が無い事を不思議がっている者ばかりで結局お嬢様の話を誰も聞いていないという悲しい結果になっているのだが。

「今回のパーティーの発案者は知っての通り早苗なのだが……となる。さて、乾杯の準備はできたかい？」

今回はそこそ短かったかな？ 多分去年よりは短かったはずだ。

「乾杯の準備なんて言っただって酒どころか料理も無いぜ……っていつの間?!」

これは確かパチュリー様の魔法だったはず。机に急に料理が現れるという発想が何処から来たのかは知らないが意表を突き驚かせることには成功したらしい。

「ではハッピーハロウィン!!」

見た目はただのかぼちゃジュースだが中身はかぼちゃ焼酎である。

勿論紅魔館産かぼちゃで作った本格焼酎である。何故パチュリー様に焼酎の製法がわかるのかは謎である。そんなことはともかく急に出てきたかぼちゃジュースが実は酒であったという二重ドツキリのつもりらしい。

これ程色を丁寧にかけて香りまで消されていたら誰でも間違える。私だって知らなければ絶対にジュースだと思つて飲んでいただろう。周りではむせかえっている人たちばかりである。ご愁傷様だ。実際これはただのドツキリ用の酒らしい。きちんと透明で香りも付いているかぼちゃ焼酎は料理と一緒に数瓶だけ置いてある。今日を逃せば次飲めるのは一年後だろう。期間限定である。

「皆気持ちのいいくらい引つかかるわね。特に紫のあの顔は永久保存の価値があつたわね」

「あらパチュリー様。どこに行つていたのです?」

さつきまでは会場のどこにもいなかったような気がしたのだが何処かにいたのだろうか。というか紫さんの驚いた顔なら私も見たかった。超激レアな瞬間だろう。

「ごめんなさいね、こあ。少し前まではキッチンにいたの。何せこの料理の出し方はキッチンからじゃないと上手くいかないようだし」

何故だかわからないがキッチン以外の場所から行くと失敗してしまふらしい。

「パチュリー様でも難しい魔法なんですか?」

確かに高度な魔法であるようには思うがパチュリー様にとつても難しいとなると再現できる者はほとんどないかもしれない。

「いえ、そういうわけではないわ。ただ私がいまいちこれの本になった魔法の原理を理解できていないだけ。この魔法はね、貴方に会うよりもはるか昔に読んだ本から着想を得たものなの。でも理解できなかったから私なりに工夫して再現してみたというわけ。そのせいで恐ろしく非効率になつてしまったのよ」

これの本となる魔法はもつと効率的に料理を登場させられるらしい。私に会うよりもはるか昔とあえて言ったという事は六百年やそ

こちらではないだろう。もしかすると千年以上も前かもしれない。その時代からこれ程までに高度な魔法を開発した魔法使いがいたという事だ。

「その魔法使いは今どこにいるんですか？　もしかして幻想郷に？」
「今どこにいるのかはわからないわ。そもそも名前もわからないの。かすれて読めなかったから。でも幻想郷にいないのは確かよ。もしかしたら魔界にいるかもしれないわね。あそこは私なんかよりもっと強い魔法使いたちが集まっている場所だから」

パチュリー様以上の魔法使いともなればかなり限られてくると思うのに尻尾もつかませてはくれないか。どこにいるのかわからない以上どこにいてもおかしくはない。だが幻想郷には絶対にいないとパチュリー様は断言した。

明らかな矛盾。パチュリー様はきつとその魔法使いを知っているのだ。その上で白を切る。何か秘密でもあるのだろうか。それとも何か約束でもしたのだろうか。どちらにせよ私に口を出す権利など無いだろうし、聞いても答えてはくれないだろう。

レミリアside

「本当に多いですね、お嬢様」

乾杯の音頭も取り終わって一息ついていたところで話しかけてきたのは我らがメイド長であり自慢の従者。

「ええ、数年前まではこんな風になるなんて思いもしていなかったわ。特にフランね。あの子今日私の提案をきっぱり断ってきたのよ。精神的にも成長している証だわ。正直かなり嬉しかったわね。そんなことよりはいい、これ」　「これは？」

今日手伝ってくれた者たちにだけ手渡しする予定のお菓子である。こちらは正真正銘私が全て作ったものだ。

「蕪のカップケーキよ。ハロウィンとは本来蕪を飾るものらしいわ。だからかぼちゃだけでなく蕪のお菓子も作ってみたの。今日手伝ってくれた労いね。今から他の人たちにも配りに行くのよ」

いくら館の住人だと言っても準備を手伝ってくれたことは変わらない。だから勿論パチエや美鈴、小悪魔にフランの分も用意してある。実は色々あつてパチエにはもう渡してあるのだが。

「ありがとうございます、お嬢様。では私もついて行きますよ」

この菓子の意味とは従者たちを労うと同時に主人たちを反省させるというものだ。実はこの菓子の包装は個人の魔力が鍵となって開く仕組みになっている。結界の応用で包装の内部では能力が遮断される。スキマからは取れない。無理に開けると中身が崩れる。つまり主人たちはどうやつても食べられないのだ。

従者をひどく脅せば食べられるのだがたかが菓子一つのためにそんなことをする愚かな主人はいない。八雲紫は別かも。あいつは私が作った物だと看破するだろうから。

「念のために言っておくけれどこの菓子は咲夜が作った。分かったわね？」

「……かしこまりましたお嬢様。もう昼間のような失態は犯しません」

咲夜は不満そうだが仕方がない。こうでもしないと人間からの畏れは無くなる。私たちの力が弱まって困るのは私たちだけでなく八雲紫も同じだろう。パワーバランスの一角が崩壊することになればとんでもない下克上が起きかねない。それは幻想郷の崩壊をも意味するかもしれないのだ。

今日のパーティーの目的は大規模な行事を行うことで紅魔館の価値を高める事。これを見て紅魔館に逆らおうとする者はいないだろう。資金と人材、そして実力。紅魔館の強さを、その全てを見せつけることで人間からの恐怖を煽ることが目的だったのだ。早苗からの

提案はその一助となるきつかけに過ぎない。

悪魔の館が軽視されるなどあつてはならない事なのだ。……まあ純粹にパーティーを楽しみたいという気持ちもあつたから早苗の言い訳じみた提案も受け入れたのだ。喧噪を楽しむことは悪い事ではない。むしろそれこそが幻想郷。長い物には巻かれておかないと、孤立してしまつてはこの館に住む者たち全てが生活しにくくなつてしまう。家族を護るためならば当主として如何なることでもしてみせよう。

相互依存

妹紅 side

生きていて良かった。そう感じる事がここ最近で特に多くなったように感じる。

「ありがとうございます。おかげで無事に帰れました」

「里まではもう少しある。くれぐれも気をつけなよ。それと竹林は危険な場所だ。むやみに立ち入って良いところじゃない。私が見つけれなかったら死あるのみだからね」

こんな白い髪の私でも受け入れてくれる桃源郷があることに感謝の念を抱かざるを得ない。同じ人間から化け物と呼ばれ、物の怪と呼ばれ、いつの間にか一人を好んで山奥に迷い込んだ。

そこがこの場所、幻想郷だったというわけだ。

お父様を死から遠ざけることもできず、自分可愛さに岩笠を見殺しにしてしまったこともあった。私の人生は常に死と共にあったのに、なのにどうして私自身が一番死から遠いのだろうか。そう考えてふさぎ込んでしまったこともあった。

そんな時に手を差し伸べてくれたのが輝夜であり、ここ数十年の慧音なのだ。

迷い込んだ山奥のさらに奥地に存在した竹林でてるに出会えたのは本当に幸運だった。あの時彼女に会っていなくてもこの狭い竹林に住んでいればいつかは輝夜たちに会えただろう。

でもタイミングがもう少し遅ければ、私はもう立ち直れない程精神を病んでしまっていたかもしれない。だからこそ幸運だったのだ。

「また人を里まで送ってくれたのですね。いつも助かっていますよ」

「ん？ ああ慧音か。良いんだよ。私にできるのはこのくらいだし

ね。それよりも人里の人間には安易に竹林に入らないように言っ
てほしいところだけど」

慧音のように人間を護りたいと思う妖怪がいるからこの私でも人
里で受け入れてもらえているのだろう。ま、妖怪じみた人間が幻想郷
に多いのも理由の一つかもしれないがね。

「それが何度言っても聞いてくれないのです。筍の匂なんてとうに過
ぎているのに……」

「ははっ、まあそうだろうね。私が言うのもなんだがもう少し命を大
事にしてほしいもんだ」

筍自体はこの竹林を支配する不可思議な魔力の影響で年がら年中
生えているけど。それが急激に成長したりするから迷って危険なの
だ。あとは妖精の悪戯。幸いなのは妖怪も迷うおかげで凶悪な奴は
少ないという点か。

どうせ迷えば死ぬから気休めにしかならないけど。私の仕事が増
えるから出来ることならあまり来ないでほしいものだ。

「それよりもさ、慧音は今夜暇だろう？ 輝夜に誘われてるんだけど
永遠亭に行かない？ 人数は多い方が良いんだよ」

「永遠亭ですか。私で良ければ行きましょう。何をするのかは知りま
せんが」

「慧音ならそう言ってくれると思ったよ。じゃあ行こうか」

「ふう、食べた食べた。今日も美味しかったわ。それで、妹紅が持って
来た物って何？」

「夕食後の開口一番がそれかい？ 月の姫が聞いて呆れるよ。ま、今日持って来たのはこれさ」

樺菜曰くトランプ。外の世界でもかなり昔から普及している玩具らしい。それでも俗世との繋がりを絶っていた私たちにとっては新鮮なものだ。

「なにそれ。かるたか何か？」 「似たようなものだけどあれはトランプでしょうね」

何故永琳がそれを知っているのかがよくわからない。外来本を読んだりしたのだろうか。それか樺菜に直接聞いたか。永琳は知識の出どころが読めないのが本当に不気味だ。味方であればこれ以上ないほどに心強いけど。

「その通り、トランプさ。この前樺菜からもらったんだよ。これなら大勢で楽しめるだろうってね。だから慧音も呼んだんだ」

「へえ。じゃあ早速やりましょう。片付けお願いね、イナバ」

そう言って食器を片付けさせる輝夜。

相変わらず兎遣いの荒い姫様だことで。てゐが上手く逃げる分、いつも苦勞させられている鈴仙ちゃんが可哀そうだ。そうは言っても助けてはやれないけどね。私なんか手伝っても足手まといになるだけだろうから。

「鈴仙ちゃんが落ち着くまでは適当に遊んでおくか。大本命は大富豪って遊びだけどそれは人数が多い方が良いだろう。待っていればそのうちてゐも帰ってくるだろうしね」

「あら、大富豪なんて私にぴったりの名前じゃない。名付けた人も分かってるわね」

「馬鹿言え。今の輝夜はいいとこ平民だろうさ……おつとつと。室内

で暴れるのはやめてくれよ。じゃじゃ馬姫さんよ」

慧音 s i d e

室内で暴れるのは悪いと指摘され、輝夜は妹紅を連れて庭に出て行ってしまった。「放っておいても良いんですか？」なんて鈴仙は聞いてくるが、別にあれを止める理由はない。

「良いのよ。大方夕食後の腹ごなしといったところでしょう。貴方が気にするほどの事でもないわ。どうせある程度運動すれば戻ってくるでしょうね」

永琳もそのあたりの事はきちんと理解しているのだろう。鈴仙はまだまだあの二人との付き合いが短いが、私と永琳はそれに比べればそこそこ長く、特に永琳はもう三百年近くもあの二人と付き合い合ってきたらしい。

私は流石にそこまでではないが、特に妹紅との付き合いの深さだけで言えば相当なものだと自負している。

その上で分かっているのだ。妹紅も輝夜も、双方が互いに依存しあっている関係であることを。

妹紅と輝夜が知り合ったのは樺菜様と同時期、つまり千三百年ほど前までさかのぼる。既に不死であった輝夜とまだ寿命があった妹紅。そんな昔からの知り合いならば互いに好き合っているとまでは言わなくても嫌っているはずはない。

現に妹紅は輝夜に誘われることで最近の宴会に顔を出したし（本人はとても満足していた）、今夜も夕食に誘われれば嬉々として来ている。

確かに今回のようにちよつとしたことでの喧嘩は少なくないが、それは互いに全力を出せる相手が少ないからこそだろう。ストレスは溜め込めば命にかかわる。

死んでも死なない蓬莱人であれば死んだ後もストレスが残る。適

度に発散させるためには運動も必要、というわけだ。鈴仙の場合はその激しさに圧倒されて裏事情まで考察する余裕が無いのだろう。妹紅については『偶に夕食を食べにくる姫様の喧嘩相手』程度の認識だろうか。

あながち間違つてはいない。訂正する箇所があるとすれば輝夜自身もまた妹紅の喧嘩相手を務めているというところだろうか。一方向ではなく双方向の関係。永遠を苦しめないためにどちらにとつても互いが大事な関係。

今回のように妹紅が安い挑発をして輝夜がそれに乗る。逆もまた然り。

「輝夜と違つて私は貴族だったからね。今すぐ頭を地面にこすりつけても良いんだよ……つと。こらこら頭が高いぞ。控えろ控えろー」

「はんっ、妹紅だつてお父様の権力に縋っていただけじゃないのよ。私は自分の容姿だけで帝さえ惑わせたのよ？ 私は実質皇后なんだから頭を下げなさい？ ほーらほら」

今だつて派手に戦っているように見えるが、実際には弾幕を使った可愛い勝負だ。能力さえ使わないただのお遊び。言葉遣いからだつてそれが読み取れる。

「ふふふ。隙だらけよ。も・こ・たん」 「げえ……くっそ。今日は調子が悪いようだな」

「あらあら負け犬の遠吠えつてやつ？ まあ良いわ。そろそろイナバも居間に戻つてくる頃でしょうから戻りましょうか。脇腹が痛いけれど」

「ちえ。ま、いい腹ごなしにはなつたか。脇腹痛いけど」

そりや食事後すぐに激しい運動をすれば脇腹が痛くなつても文句は言えまい。蓬萊人と言つても体のつくりは普通の人間と変わらな

いらしいし。

当然その後てゐや鈴仙を加え六人で行った大富豪はかなり盛り上がった。

「やったわ。永琳を下して大富豪よ」

「そうら、都落ちだ。悪いな輝夜、この都五人用なんだ」「永琳が勝つただけじゃない」

「ほれ、革命だ」「あら、下人が何かしているわ」

「あーらあら、また大富豪ね」「もう今のうちに荷物まとめておきなよ」
仲いいね君ら。私たちが会話に入る隙も無いくらいに二人でしゃべり続けている。だがやはり一番強いのは永琳か。

強いカードでひたすら攻める妹紅は多分勝つ気が無い。鈴仙はルールを飲み込みきれていない。輝夜は妹紅を陥れるのに必死。私も頭は柔らかくない。となれば勝負はてると永琳の頭脳戦と予想したが……結果を見れば輝夜と永琳で取り合っている。

「ふっふっふ。今日は力でも頭でも私の圧勝ね。ほらイナバ、大富豪になった回数を読み上げてみなさい」

「はい。えーつと、まず私が0、てゐが1、慧音さんが1、妹紅が1、姫様が5……」

「やっぱり私の圧勝ね。うさぎ跳びでもして帰ると良いわ。ちなみに永琳は？」

「……………23です」

思ったよりも多かった。それにしてもそんなにしていたのか。道理で月も西に傾いているわけだ。もう相当遅い時間に違いない。

そろそろ帰ろうかと言いだそうとしたところで永琳が悪い顔に

なっているのを見てしまった。これはこれは……もう大体言いたい
ことが予想できてしまうな。

「あら、私の圧勝ね。さて、輝夜も庭を一周うさぎ跳びしてもらいま
しょうか」

終端

パチユリー side

師走ももう今日で終わりである。紅魔館では何もすることが無いので年末から年始にかけては楽でいいもののだが寺や神社は今頃とても忙しくしているんじゃないだろうか。寺は一つしかないから競争にもなりはしないが神社は残念ながら二つある。

総合的に見て今のところ優勢なのは守矢神社の方だろう。どちらも里からは遠いし人間にとっては行きづらいのは変わらないのだが、如何せん信仰を得ることへの積極性が段違いなのだ。

守矢神社は祀つてある神やご利益が分かっているという事もあり、信仰が得られなければ神奈子たちの存続の危機になる。一方で博麗神社の祭神はわからずご利益も恐らくは妖怪退治だろう、という事くらいしかわからない。神棚はあるがご神体は行方不明だ。

存続がかかっている守矢と生きるだけのお賽銭が入ればいい博麗、どちらの方がより積極的に行動するかなど火を見るより明らかである。結果として守矢側が優勢になっているわけだが元々博麗神社に行つていた人間が守矢神社に流れたというわけでもない。

妖怪退治をご利益としているであろう神社の巫女が最も妖怪に好かれてしまっているという現状も博麗神社の参拝客を減らしている要因に違いない。霊夢も何とか参拝客を獲得するために手を尽くしているのだが現実はなかなかに厳しい。

祭りを開けば店を出すのは妖怪ばかり。境内で人間を襲つてはならないという規則があったとしても妖怪が集う場所に好んで行く人間は多くない。最近では華扇も色々手伝っているようだが効果は芳しくないと言えるだろう。そもそも霊夢が飽き性であるというのも問題の一つだ。

真面目にコツコツやれば参拝客は徐々に増えていくだろうに、効果が表れる前に努力を止めてしまう。華扇の苦労もわかる気がする。褒めれば調子付くのではなくそこで満足してしまい、説教をしても右

から左へと流されてしまう。厳しい修行もそれが終わってしばらくすれば元通りという有様だ。霊夢は意志が弱そうに見えて実はかなり強い。本当にやる気になれば案外多くの人間が神社に訪れるようになりそうである。

でも現状がああなっているという事は霊夢も本気で客寄せをしたわけではないのかもしれない。これは完全に私の意見だけだというわけでもなく、レミィが神社に遊びに行った時も追い返す格好だけして結局は神社に残ることを容認しているらしい。

彼女自身自分が人外に好かれる体質であることを分かっているのだろう。妖怪退治を生業としてきた巫女として里の人間に顔向けできないから否定する素振りを見せているだけで、集ってくる妖怪たちを明確に拒絶するような雰囲気はない。だから余計に妖怪は寄ってくるし人間は神社離れしてしまうのだ。

だが幻想郷の調停者として異変時以外の時に無差別に妖怪を退治するわけにもいかない。あまりにも凶々しい時はあの子の堪忍袋の緒が切れて迷惑な妖怪退治をするようになるのだが、それもそうそう起きることではない。

そんな背景もあって博麗神社は里の人間に妖怪神社と認識されている。そして霊夢も妖怪巫女だと認知されているのだ。実際妖怪も恐れ怯む少女であることは間違いない。だが真面目に妖怪退治をしていることも多いのにそう思われてしまっているのはかなり可哀そうである。易者もそれを指摘しなければもう少しマシな死に様になっただろうに。

まあこの世界ではまだ易者は復活していないのだけれど。事前に阻止することも可能だがこれは小鈴にとっても重要な学びにつながる。私が介入すべきことではないのだ。だから易者には大人しく頭を割られてもらうとしよう。仕方ないね。

逆に早苗ちゃんと言えば人里の人間からは評判がいい。よく里に下りてきては人々の話を聞きながら守矢に信仰が向くように解決案を提示するのだ。商売敵である霊夢からはずるい奴だと言われているが普通に考えれば宗教家として当たり前の事をしているだけであ

る。

事実白蓮からの同じ宗教家としての評価は霊夢より早苗ちゃんの方が高い。戦闘面での評価は霊夢が圧倒的に高評価を得ているのだがその大半が人外からである。妖怪と戦う力を持たない普通の人間にはあまり理解できない部分であることも確かだろう。

神社までの道も守矢神社は整備する気があるようだし。まだできていないロープウェイ架空索道の完成もそう遠くないだろう。遅くとも数年後にはできていそうである。そうなればもはや守矢神社は行きづらい場所ではなくなる。妖怪の山を通る分危険は伴うがあの高い山を登らなくてもよくなるのは随分とありがたい事だろう。

そうなることよって余計に博麗神社は人間が訪れなくなる。結果として霊夢が困る。うーん、宗教戦争のきっかけってこんなのだつたっけ。なんだか違う気がするけれど思い出せない。またその時が来ればわかるだろうから今は気にしないでおこう。

それにお賽銭が今よりも減ったところで霊夢が餓死するはずはない。紫がちよくちよくお賽銭箱に生活費を奉納しているというのを教えてくれるからだ。そして博麗神社の大きな特徴は外の世界にも存在することである。それゆえ守矢神社と違って外の博麗神社でお供えされた御神酒や食べ物がちちらにすることも珍しくはない。

これも妖精に盗られたりせずに上手く確保できれば霊夢の生活は大して困らないだろう。それでも餓死しそうになったら紫が直接何かを食べさせに行くんだろうけど。博麗の巫女が餓死したなど宴会で話すネタにもなりはしない。

「なんだパチエ、ここにいたのね。いつも通り図書館にいると思っていただけけれど」

「たまには開放的な場所で本を読むのも良いでしょう？ それにここは考え事をするのにも丁度良いもの」

まあバルコニーだと今のように昼間にレミイが来た時には場所を移さなければならなくなるのだが。それでも自分の生み出した光の下ではなく日光の下で本を読んだ方が気分がスッキリするのだ。本

が日に焼けないように防護魔法もかけてあるし。

今でこそ防火、防水、防塵などの防護魔法を使えるようになったが昔はそうではなかった。だから昔から持っているような本は謎空間に入れていた物を除いてかなり日に焼けてしまっているし、かなり埃つぼくもなっている。喘息持ちの私にこれは辛いのでそのような本は半分封印状態だ。

初期の本なんて古書の中の古書。希少価値など測れない物も多いので泥棒魔理沙対策も兼ねて私の空間にしまっているわけだ。紫ならいつでも取り出せるのだが彼女に限ってそんなことはしないだろう。紫がそんな奴だと知ったのなら今ここでショック死してしまうかもしれない。

「確かにパチエにとってはそうかもしれないけど私には少し眩しすぎるわ。咲夜……少し前に使ったビーチパラソルがあったでしょう。あれで良いからここに立てて頂戴。そしてお茶の準備をそうね……四人分、お願いできるかしら？」

「かしこまりました」

四人か。私たち二人の他に誰か来るみたいだ。美鈴は門番に立っているのが今見えているから除外。咲夜とこあも当然除外、となるとフランドールか？ それでも三人だが。

「あと二人、誰が来るのかしら？」

「さあて。でもパチエにも今にわかるさ。招かれざるお客様方がもうじき来るだろうから。それも別々に、ね」

ますますわからん。招かれざる客という事でフランドールの線は消えただろう。となるとあとこの館に来そうなのは霊夢と魔理沙かね。たまりに内輪だけのパーティー会場に紛れ込んでいることがあるし。あれこそまさに招かれざる客だろう。

「はあい、パチュリーにレミリア嬢。年末もお元気そうで何よりですわ」

「やめろやめろ、その気持ちの悪い呼び方は。そもそもお前は冬眠中のはずではないのか？ どうしてこのタイミングでここに来るかね……ああ、そしてもう一人もご到着のようだ」

紫だったか。まあ紫も冬眠するけど全く起きていないというわけでもないからねえ。間欠泉が湧いたときも月に行った時も冬だったのに紫は元気に活動していたし。

紫に関しては自分の物差しで測らない方が良い。すぐに想定外の動きをするし、紫が絡むとこちらの思う通りに物事は進まなくなる。そういうところを気にしないのが一番だろうね。

「何やらそこそそと怪しい動きをしていたので捕まえてみたのですが……お邪魔でしたら摘まみ出しますがいかがなさいますか？」

「おいおい、人をいきなり捕まえておいてそれか？ まったく悪魔のような人間だぜ、お前は。私はただ図書館に本を借りに来ていただけじゃないか。それを怪しい動きと言うか？ 普通。私と同じ人間とは思えないよな」

もう一人は魔理沙か。いつもの咲夜なら気づいてもスルーしているはずなのに今日は捕まえてきたという事はレミイが何かしたに違いない。いかにも悪魔っぽい悪い顔をしているし。まあこれが普通の吸血鬼の姿なんだろうけどね。スカーレット卿も当主時代はこんな感じだった気がするし。この前地底で会った時は随分丸くなっていたようだけれど。

「摘まみ出すには及ばないよ。茶会への参加者は魔理沙も含めて四人なのだから。さ、席に着きなさい。早くしないと咲夜が作ってくれた菓子の味が落ちてしまう。……なんだ八雲紫、折角の咲夜の菓子だよ。お前が普段食べるような外の駄菓子とは違って繊細な味を楽しめる」
やけに咲夜の菓子であることを強調するのは紫への嫌がらせだろうな。レミイって確か紫の事を好いていなかったはずだし。

別に咲夜が作った物でも気を落とす要素にはならないと思うけどねえ。私や美鈴が作るよりははるかに美味しいのだし里で、いや外でも最高級品として扱われるだけの味は保障されている。ただ単純に現在はレミイの作った物の方が美味しいというだけだ。これから先咲夜が長く生きるのならば確実にレミイを越えられるだけのポテンシャルはある。

きつと今のレミイの言葉が普通の誉め言葉として聞こえるようになる日が来るだろう。いつなるかはわからないけど。だからまあ紫も気を落とすことは無い。今の咲夜のお菓子の味を知れるということ、それはそれで良いことだと思う。成長もわかるしね。

「おお、なんだかわからんが貰える物は貰っておくぜ。それにしても咲夜のお菓子は絶品だなあ。霊夢の奴に自慢してやれば動揺して今度こそ本当に明星が勝つかもしれんな。にっしっし」

悪い顔をしてらっしやる。でもきつとそんなことをしても霊夢は失敗しないだろう。魔理沙が三妖精を使って遊んでいたことはあつたけれど、集中の切れまくっていたあの時でさえも成功させている。そんなことがあったから妖怪の年になる気がしないのだ。

霊夢が失敗する未来が見えない。レミイたちは妖怪の年になってほしいらしいが正直私はどちらでもいい。人間との関りも結構多いし、妖怪の年になれば中級妖怪クラスも調子に乗り出す可能性があるしで面倒も増えそうなのだ。

「そんなもので霊夢は失敗しませんわ。残念ながら、ね。パチュリーたちは初詣なんかに行くのかしら？　神がお嫌いなようですが」

「馬鹿言え。私が嫌いな神は唯一絶対神だけよ。八百万は然して嫌う理由があるわけでもないさ。初詣は……まあ博麗神社の方に行こうかね。あっちの方が居心地がいいからね」

守矢神社の方は神域を隔て、神を封じるための注連縄による結界が強いからだろうか。博麗神社と比べて異常に太い注連縄。恐らくは

日本でも有数の太さを誇るであろうその効果はかなりのものだ。実際に神もいるし守矢神社が妖怪にとつて居心地悪いのはうなずける。

むしろ神社であるのに妖怪に居心地がいいと言わしめる博麗神社が異常でしかない。これを霊夢に聞かれたら夢想封印が飛んできそうな案件である。幸い霊夢はいないがチクリそうな魔理沙はいる。魔理沙は悪い子ではないんだけど信頼できる子でもないからちよつとばかし心配だ。

「それは言ってるな。霊夢^{あいつ}は嫌がるだろうが妖怪に好かれちまつてるもんなあ。ならいつそ今夜は神社で何かするか？ 賽銭さえ入れればあいつも文句は言わんだろ」

「それは妙案。最近の霊夢は少し疲れているようだから丁度良さそうですね」

おうおう、紫の腹黒いところが出てるなあ。年末の大事な時期に妖怪が境内を占領したら追い払う分余計に疲れるだろうに。まあでもこれは霊夢の気を紛らわせるにはいいかもしれない。今年は白蓮の復活や非想天則是……あれは楽しんでいたな。主に早苗ちゃんが。

総合的にイベントが多かったわけではないが疲れる年ではあっただろう。守矢に続いて強力な敵対宗教組織^{ライバル}が出てきたのは精神的疲労を招く。さらに一年と少し経てば今度は道教の一派が追加されるがそれについては知らぬが仏だろう。

「でも流石に今から屋台を出すのは不可能でしょうから前のは別案を考えなければならぬわね。レミイは何かあるかしら？」

「パチエも分かっているくせに。神社ですることと言えば一つしかないでしょう？ ほらせーの」

「「宴会」」

ついでこう答えてしまったが普通に考えて不謹慎極まりない。だって神社ですることと言えば参拝やお祭りなどが一般的な回答だろう。

しかしこの四人で出てきた答えは全員一致で妖怪だらけの宴会だ。神社ですることとしては異常でしかも妖怪退治をする巫女のいる神社である。

霊夢のキレイな顔が容易に想像できるがそういう時は妖怪の賢者様に何とかしてもらおう。仮にも彼女を育てた幻想郷最強の妖怪だ。まともにやれば霊夢をなだめることなど赤子の手をひねるが如く容易くこなしてくれるだろう。

「じゃあ私は連中に声をかけに行くか。神奈子のところもどうせ来るだろう。あんな危険な山の上にある神社、霊夢のところに人は来ないぜ。パチュリーたちは宴会の準備をしておいてくれ。勿論霊夢には気づかれないようにな」

その辺りは紫がいるから何とかなるだろう。料理も今から作れば十分間に合う。今年最後で新年最初の大宴会。今日はいつもとより気合を入れて料理してみようか。結局宴会風景はいつもと何も変わらないんだろうけど。

まあそれも幻想郷の醍醐味だろう。非日常すら日常に置き換えられる愉快的妖怪たちがここにはたくさん棲んでいるのだから。